

---

# 砂塵の道 ～ソル皇国の興亡～

くらいさおら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

砂塵の道 ～ソル皇国の興亡～

### 【Nコード】

N60270

### 【作者名】

くらいさおら

### 【あらすじ】

魔法と科学が平行して発展した世界は、砂漠に覆い尽くされていた。その世界の片隅に、小さな軍事大国ソル皇国は存在する。新興国家でもあるソルは、列強の狭間で必死にもがいていた。そして時代は、戦乱の時代を迎えようとしている。ソルに生きる若者たちは、望むと望まざるとに拘わらず、時代の波に飲み込まれていった。あるのかどうかすら分からない、明日を信じるために今日を懸命に生きる二組の若い男と女、そしてソル皇国の物語。

## 第1話 破局

安息日の朝、大東砂海と呼ばれる広大な砂漠に囲まれた、大規模なオアシスにあるハトーの町は、いつもよりゆったりとした空気に包まれていた。

駐屯する軍の兵舎では、休暇を楽しみにしていた兵士が町に繰り出すため、私服に着替えて営門が開かれるときを待っている。不運な当番兵は浮ついた空気を纏う同僚に、羨望の視線を送りながら開門の時間を告げる鐘を待っていた。

狭い飛行場には、定期哨戒に飛び立つ偵察機以外の機影はない。

野球のバットのような金属製の機体には、先端にプロペラがあり、やや前方寄りの両側に主翼が伸び、機体の最後尾に小振りな尾翼と垂直尾翼がある。金属と魔鉱石と呼ばれる魔力を持った石で作られたがエンジンが、機首に据え付けられている。そのエンジンを動かす動力源は、搭乗者の持つ魔力だ。しかし、飛行に必要な魔力を振り絞ると、あつと言う間に搭乗員は脱水症状を起こしてしまうため、空戦の最中でも常に水を飲み続けなければならない。

そのため、事実上の燃料ともいえる水を満たしたタンクと、ストローのような細いチューブが機体内に存在していた。

飛行場の外に広がる砂海には、巨大な砲を敷き並べ、中央に丈高い鐘楼のような構造物を持ち、砂漠に艦体の下半分ほどを沈めた全長二〇〇メートルを超える八艘の戦艦が舳先を並べていた。

これら艦艇のエンジンも魔鉱石で作られており、その動力源は乗

組員の魔力だ。その魔力で船体を砂中に浮揚させ、砂海を縦横に切り裂き、走り回る砂上の戦艦だ。艦上に敷き並べられた巨大な砲は、炎の魔法を封じ込めた弾丸を、これも炎の魔法を封じ込めた装薬で撃ち出し、地平線にある敵戦艦を撃滅する。

船体は自らの砲弾を決戦距離から撃ち込まれても貫かれることのないように、分厚い装甲板に覆われていた。

そこから少し離れた位置には、やや小ぶりでスマートな船体を持つ重巡洋艦、さらに小ぶりの軽巡洋艦、カミソリのような鋭いシルエットを持つ駆逐艦といった戦闘艦艇が、戦隊ごとにまとまって停泊している。世界に散らばる大国は、国の威信を賭けて戦艦を始めとした砂上艦隊の建造に血道を上げ、軍拡競争は留まることを知らなかった。

しかし、その費用に国家財政は圧迫され、民の生活に暗い影を落としていた。

航空機の整備班に配属された新兵は、安息日に当番という自身の不運を嘆きつつも、飛行機の整備に取り掛かるうとしていた。

日差しを割けるための屋根がある分、戦闘艦艇整備の担当よりは遙かにマシだが、それでも砂漠を干し上げる日光は強烈だ。油断しているのは、あつと言う間に熱射病になりかねない。水分と塩分の補給は義務化され、定期的な休憩が定められている。新兵が早くも最初の休憩を待ち望みながら、始業前の水を口に含んだ瞬間、耳を聳らす爆発音とともに、彼の身体は弾き飛ばされた。

何が起きたかを理解する前に、灼熱の炎と強烈な痛みが襲いかかり、彼の意識は瞬時に暗転した。

その数分前、砂漠の彼方の地平線上に、芥子粒のような機影を飛ばした見張り兵がいた。

彼は、鐘楼下部にいる上官に、伝声管でこの日の飛行計画を問い合わせた。任務に就く前の説明では、この時間にハトーに到着する飛行群はなかったからだった。

彼の問い掛けに当直を代わったばかりの将校は、改めてその日の飛行計画書をめくり始めた。三〇分や一時間の予定のずれなど、日常茶飯事であり珍しくもないことだ。長距離魔道通話に必要な魔鉱石の加工は非常に費用が掛かる上、まだ量産技術も確立できていないことから、航空機には搭載されていない。

基地間での通話ができるが、それ以後に発生する飛行時間の変動を事前に把握する方法はなかった。

「ああ、あるぞ、二時間後に到着する予定飛行群が。

たぶん、その先遣隊じゃないか。

ここで給水して、ミルドウイに飛ぶ予定だ。

さつさと準備をさせておこう」

間延びした将校の声が、伝声管から聞こえてくる。

「それは早過ぎませんか？

三〇分や一時間ならいつものことですが、二時間というのは異常です。

それに、飛行群の隊列が我が軍の

「やかましい！

言われたとおり、受け入れ用意の報せを打てばいいんだ。

その飛行群の隊長から、上に不備を上げられたら、困るのはお前だぞ」

一日を二四に分け、さらにそれを六〇に分ける時間の単位を口に

した兵の言葉を遮り、将校の怒鳴り声が伝声管を満たす。

直後、兵の返答は聞く必要なしとばかりに、片方の口が閉じられる音が響いた。

不承不承といった様子で兵が上空を見上げたとき、破局が襲いかかった。

既にハトー上空に差し掛かっていた飛行機の群れから、黒い楕円形に見える物体が投げ落とされた。

その物体は地表や戦艇、航空機の格納庫に激突した瞬間に炸裂する。一回り大きな物体は、格納庫や建物の天井、戦艦の上部装甲板を貫通してから爆発した。連続して起きる大量の爆発は、周囲に爆風と炎、そして土砂や破壊された戦艦の上部構造物と建物の破片、人体だった肉の破片を周囲にまき散らし、それがさらに新たな破壊と死を巻き起こした。

基地内を逃げまどう将兵を俊敏な動きの機体が追い、機首と赤い丸が描かれた主翼に装備された機銃が薙ぎ倒す。

呆然と空を見上げる見張り兵に、上空から真円の物体が迫ってくる。

彼は痺れたような頭で、新兵教育の際に聞いた話を思い出していた。楕円に見える爆弾は自分のいるこ位置には落ちてこないが、真円に見える爆弾は真っ直ぐ自分に向かっている、ということ。現実味が全く感じられない劫火の中で、逃げなければいけないんじゃないかと彼が考えたとき、見張り台に爆弾が命中した。

僅か一時間にも満たない短い時間で、ハトーの軍事施設は壊滅し、砂漠に停泊していた艦隊は、碌に反撃すらせずに世界から消滅した。

## 第2話 少年たち

砂漠に陽が昇り、オアシスを囲むように点在する村を朝日が包んでいく。

日の出とともに鐘楼の鐘が鳴らされた。

それまで静まりかえっていた町が突然活気を帯び、家々から人々が路上に出てくる。

さらに鐘が鳴らされたとき、人々は一定の方角に揃って向かい、一斉に頭を垂れた。町の活気が一瞬でかき消され、鳥のさえずり、町に飼われている動物の鳴き声、そして風の音だけが流れていく。やがて、もう一度鐘が鳴らされ、姿勢を元に戻した人々が動き出す。ある者は一日の労働に出かけ、ある者は家に戻って家事に勤しみ、子供たちは今日一日何をして遊ぼうか目を輝かせていた。

「ガル、お前はどつするんだ？」

日が暮れて暫くした酒場の片隅で、二人の若者が額を寄せて話している。

「お前こそ、本気なのか、レグル？」

考え直すなら、まだ間に合うと思うんだけど」

ガルと呼ばれた若者は、困り顔で逆に問い返す。

困ったような顔には、いくつか火傷や切り傷の痕がある。ソル人には普通にみられる直毛の黒髪と、細く僅かに垂れ気味な一重瞼の目には、これも一般的な黒い瞳を持っていた。僅かに低めの鼻梁と薄い口元が際どいバランスで精悍さを醸し出している。

身長一七〇センチほどのがっちりした上半身を持ち、特に腕の筋

肉が発達している。テーブルに隠れているが、その上半身に比べ少し細目の下半身が繋がっていた。ソル人としては極めて標準的な、やや胴長短足のバランスだった。

それに対してレグルと呼ばれた若者は、顔に傷などはほとんどないが、よく陽に焼けている。

ガル同様漆黒の髪色だが、僅かにウエーブが掛かった癖っ毛だ。二重瞼の切れ長の目には、黒曜石のような瞳が輝きを放っている。ソル人離れた高い鼻梁と引き締まった口元は、意志の強さを主張するかのようだった。

ガルより僅かに身長が高く、さらに筋肉質の身体を持っており、下半身にもバランスよく筋肉がついている。両者の違いは子供の頃から手伝ってきた家業に由来しているものと思われた。

ただし、上半身と下半身の比率は、ガル同様ソル人の平均的なそれだった。

さほど賑わいを見せていない村の小さな酒場で、二人の若者に注がれる周囲の目は、何とも言えない生温かさに満ちている。

それは、二人の外見に由来する生温かさだった。どう見ても、少年から青年への過渡期にある二人の姿は、大人たちの中では明らかに異質な存在だ。

それでも二人の少年が酒場をつまみ出されずにいるのは、この世界で一般的に大人として扱われる一六歳という年齢を超えていたからだだった。もちろん、肉体も精神も完成したからというわけではなく、働き手としての数に入れる以上は扱いも、という理由からによる。

ガルとレグルが生まれ育ったソル皇国でも、それは一般的なことだった。

「俺は、もう決めてるんだ。 年が明けたら王都へ出て、士官学校



に入る。

いつか、将軍が提督になってやるんだ。

こんなシケた村で夢ばかり見てるなんざ、もう御免だね」

村で生計を立てている大人たちに、取りようによっては喧嘩を売っているかのようにレグルは言い放った。

しかし、その言葉にいきり立つような者はいない。

夢を語るのは、若者の特権だ。そこにいる誰もが一度は夢を語り、その実現のために若い命を燃やしてきた。そしてある者は村を後にし、ある者は自らの意志で村に残り、ある者は夢破れて村へ戻っていた。誰もが通ってきた道を、咎め立てするような野暮な者は、酒場などには近寄らない。

そして、この時代における立身出世の頂点が、大臣または将軍、そして提督だった。それを夢見ることを、笑う者などいるはずもない。

ソル皇国の国家元首は皇王だが、政治は議会が選出する総理大臣が統括し、各大臣が実務を掌握、国務に関して皇王を輔弼する。

そして、騎兵軍と砂海軍で将官に登り詰めた者を、それぞれ将軍、提督と称していた。

騎兵軍大臣と参謀総長、教育総監が騎兵軍の三頭職であり、砂海軍大臣、軍令部総長、連合艦隊司令長官が砂海軍三頭職であった。騎兵砂海の両大臣は国務に付いて皇王を輔弼するが、参謀総長、教育総監、軍令部総長、連合艦隊指令長官が、統帥上の輔弼を行っていた。

輔弼とは、皇王が為すべきこと、または為さぬべきことについて助言を行い、その全責任を負うことだ。

ソル皇国の主権は皇王にあり、国務行為やその延長にある戦争は、実際には内閣や軍部が行うが、すべて皇王の責任において行われる。

失政や敗戦の責任を、無謬の存在たる皇王に負わせてはその権威に傷が付き、統治に不都合が生じてしまう。そのため皇王に代わって責任を取る者が必要であり、その任を輔弼と呼んでいた。

各年度二〇〇人の士官学校卒業生の中から、将官まで登り詰める者はおよそ一〇人。

かなりの狭き門といえる。それ以前に士官学校自体が倍率数十倍の難関だ。スタートラインに着くことすら、困難といえた。

だが、レグルにはその資格があると、村の誰もが認めている。

この村始まって以来の神童と言われ、中等学校の教育課程では物足りず、高等学校から大学校レベルの問題まで解きこなす頭脳を持っていた。

そのレグルが士官学校を目指すことは、当然の流れではあった。

「どうせ二〇歳になれば、強制的に兵役があるんだろ。

それからでもいいじゃないか。

チエルが寂しがるぞ」

ガルがさらに言い募り、とどめとなり得る人物の名を挙げた。

「二〇からの強制兵役からじゃ、兵卒で終わりだ。

せいぜい特務尉官、良くて定年退官間際で特務佐官、よっぽど運が良くて営門大佐だけ。

それに、いつオリザニア共和国とも開戦するかも知れないんだ。

一兵卒じゃ、戦功なんか立てられるわけないだろ？

皇族でもない俺が将官になるなんて、士官学校を出てなきや夢のまた夢じゃないか。

もう、一年も無駄にしちまったんだ。

これ以上、ここにいたらダメになっちまう。

それに、メデイエータ共和国との戦争だって、長引けば強制兵役の年齢が繰り上げられちまうかも知れないんだぞ。

士官学校に入っていれば、そうなくても士官見習いにはなれるはずだ。

一兵卒に叩き落とすようなことは、いくらなんでもしないだろ。チエルに良い暮らしさせるためにも、俺は行くんだ」  
レグルは瞳を輝かせ、その恋人の名を口にした。

六年前にフェクタム帝国に駐留しているソル騎兵軍が、メディーエータ共和国国境警備隊と小競り合いを起こしていた。

それをきっかけに、ソル皇国騎兵軍とメディーエータ共和国軍騎兵軍との間で大規模な戦闘が発生した。両国の外務省同士が事態を収拾しようとしたが、ソル皇国騎兵軍のフェクタム派遣軍司令部の独断専行により、戦火は広がる一方だった。

ソル皇国政府は、派遣軍の独断に激怒し、現地司令官の解任を騎兵軍大臣に迫った。

だが、司令官クラスもまた輔弼職であり、統帥権の独立を理由に騎兵大臣はこれを峻拒していた。開戦当時は連戦連勝であり、新聞や魔道放送といったメディアもこれを大きく取り上げ、国民は熱狂した。国民の支持を背景に、騎兵軍はさらにメディーエータ国内に侵攻し、開戦の責任論は吹き飛ばされ、派遣軍司令官は一躍時の人となっていた。

しかし、いくら連戦連勝とはいえ損害がゼロというわけではない。夫や父、息子や兄弟を失った者はいた。

その家族が嘆かないはずはないが、『お国のために命を捧げた英雄』の家族の談話は、『お国のお役に立てて本望』という形でのみ報道され、戦意昂揚のために利用されている。本音をおおっぴらに言えば非国民扱いされるのではないかという恐怖が、残された家族たちの口を塞いでいたのだった。

軍部が当てにならないと判断したソル皇国政府は、独自に外交ルートから事態の打開を図った。

だが、ほぼ同時に始まったメデイエータ共和国の内戦により、その機能のほとんどが正常に働かないメデイエータ外務省が事態を収拾できるはずもなかった。宣戦布告のない戦争は、ソル皇国騎兵軍とメデイエータ共和国正規軍、新生メデイエータ軍の三者が入り乱れ、泥沼の様相を呈していた。

そこへオリザニア共和国が横槍を入れてきた。

メデイエータ共和国は広大な国土を有し、五億から六億の人々が暮らしている。

国としての発展が長く停滞していたため、多くの民は文化的とは言い難い暮らしをしていた。オリザニア共和国にしてみれば、それは巨大な市場となりうるフロンティアだった。世界恐慌に苦しむ自国経済を、一気に立て直す救世主となる可能性を秘めた市場だった。もちろん、ソル皇国も同様の思惑を抱いており、フェクタム帝国に軍を駐留させているのもいずれメデイエータ共和国を市場化しようという野望のためだ。

そもそもフェクタム帝国自体、ソル皇国の傀儡国家であることは、公然の秘密だった。

オリザニア共和国は、自らが標榜する自由と公正の国の名に恥じることのないように、巧妙に策をめぐらせている。

ソル皇国が裏で糸を引いたフェクタム帝国のメデイエータ共和国からの分離独立を責め、建国の取り消しと両国からの撤兵を求めた。もちろん、その後には武力を伴わずにメデイエータ共和国に入り込むためだ。一度入り込んでしまえば、自国民保護のために軍を展開させるなど、いくらでもできる。だが、ソル皇国軍の侵攻中に、自国軍を他国内に展開させる正当な理由はつかなかった。

まだ国際社会の中では未熟なソル皇国は、正面からこれを拒絶し

てしまった。

オリザニア共和国はこれ幸いとばかりに態度を硬化させ、ソル皇国に対するあらゆる資源の輸出を停止した。

国内で産出する資源がほとんどないソル皇国は、鉄鉱石やこの世界で唯一のエネルギー資源である魔鉱石、その他さまざまな資源の新たな供給源を探さなければならなくなり、より一層フェクタム帝国内の権益やメデイエータ共和国に深入りしていく羽目になる。そして、さらに南方の列強植民地に目を付けた。

国際平和条約会議という国家間の利害調整を行う機関の総会で、ソル皇国代表は国の振る舞いを槍玉に挙げられ、半ば吊るし上げに近い非難を浴びた。

ソル皇国の政府は冷静に対処する気ではいたが、メディアが煽り立てた結果世論は沸騰し、暴動騒ぎまで起きている。軍部に近い政党から内閣不信任案が提出され、示し合わせたように騎兵軍大臣が辞任し、後任を推薦しないという事態が発生した。それでも当時の首相は事態の打開に努めたが、平和条約とは別に締結された列強各国の艦艇の保有比率条約に不満を抱く、砂海軍青年将校による暗殺事件を招いてしまう。

首相を失ったことで自動的に内閣は総辞職に追い込まれ、国際平和条約から脱退とオリザニア共和国に対して強硬姿勢を取る政府が誕生してしまった。

当代の皇王アツキカーズは戦争の拡大を望まなかったが、君臨すれども統治せずの大原則から異を唱えることはできなかった。

オリザニア共和国との資源輸出に関する交渉は、内閣の足並みが揃わず難航していた。それどころか、オリザニア側が提示する交渉の条件は、ソル皇国のメデイエータからの撤兵ありきであり、まともな交渉は行われていなかった。高圧的な態度と条件に軍部は態度

を硬化させ、いつ戦争が始まってもおかしくない雰囲気醸成されている。

レグルの言ったことは、そのようなことを背景としていた。

ガルは、心のどこかをチクリと刺されたような感覚に襲われた。しかし、それは、出征している兵士やその家族のことを思っていることではない。

だが、ガルの心を刺した小さな棘は、それではなかった。心のどこかにレグルが村を出ることを期待している自分がいることを、レグルに気付かれたような気がして嫌気が差している。レグルがいなくなれば、チエルを自分のものにできるのではという期待は、ひと月前から抱いていた。チエルには病気がちな母がいるため、村を出ることは考えられない。だが、二人で村に残ったとしても、チエルが振り向くはずもないと、ガルには判っている。レグルを引き留めているのは、チエルのためでもなく、自分の寂しさのためでもなく、チエルを諦めるためなのかも知れなかった。それでも心のどこかに、チエルと寄り添う自分を想像し、また自己嫌悪に陥るのだった。

「だから、俺やチエルのことは大丈夫だから、おまえはどうするんだよ？」

俺と一緒に、帝都へ出ようぜ。

おい、聞いているのか、ガル？」

考え込んでいるように見えたガルに、心配そうにレグルが問い掛けた。

「あ？」

ああ、俺は親父の後を継ぐよ。

あんな鍛冶屋でも、なくなっちゃったら不便だろ？

お前は、本当に行くのか？

親父さん、よく許したな」

社交的な反面仕事には厳しい父と、人付き合いは苦手だが良い作物を作るレグルの父の顔を、ガルは思い浮かべていた。

本心では、華やかな帝都へ出てみたいという気持ちの方が強いのだが、家業を継がなければならぬという義務感もある。もちろん、チエルが村に残るということも、帝都へ出る決心をさせていない理由のひとつだ。逆にチエルを忘れるために、帝都へ出てしまいたいという気持ちもある。

自身の迷いが、言い訳がましい言葉となって現れてしまい、ガルはレグルに質問をすることで誤魔化そうとした。

「ああ、親父は大賛成さ。

親父も、本当は軍に行きたかったんだ。

あれさえなきゃな」

ガルの気持ちなど知らぬ気に、レグルは嬉しそうだが少しだけ眉根を寄せていった。

レグルの言った『あれ』とは、一五年前にソル皇国帝都を襲った大地震を指す。

たまたま運悪くこのとき帝都を訪れていたレグルの父は被災し、一生引きずる大怪我を負ってしまっていた。幸いにも後遺症は日常生活であれば不自由が多少ある程度だったが、軍務には耐えられないと判断され、強制兵役すら免除となっていた。

もっとも、レグルの父が受験可能な年齢になった頃には、士官学校は国内最難関校になっていた。片田舎で多少頭が良いと言われるくらいの者では、到底合格など適わない遠い存在だった。特権階級とされている貴族ですら、軍に無能者はいらぬという理由から受験に際して優遇措置など皆無であり、完全な実力主義を貫いていた。

受験資格に制限はなかったため、レグルの父も試験には臨んだが、  
敢えなく不合格となっており、己が夢を息子に託していたのだった。

「そうか。」

あの店も、親父さんの代で終わりか。

寂しくなるな」

気の抜けたエールを喉に流し込み、ガルは恨みがましそうにレグルに言った。

農協に相当する機関はこの村にはなく、農民のそれぞれが畑の近くに店を構えていた。

レグルの父が引退し、後を継ぐレグルが帝都へ出てしまえば、まだ幼い妹と母の二人だけでは畑と店を維持することは不可能だ。畑と店はいくらでも借り手は付くだろうから荒れ果ててしまふ心配はないにしろ、レグルの父が作る作物を超える物はそうそうない。

近隣の村からも客が来る名物店がなくなることは、ガルは村の損失だと思っていた。

それからは他愛のない話に終始し、翌日の仕事に影響が出る前に二人は酒場を出た。

この世界で使われている共通の暦である太陽暦で、二六三七年一月二十八日のことだった。



### 第3話 少女たち

「ねえ、チエル、レグルは帝都に行くらしいわね」  
忙しく立ち回る少女を、同世代の少女が呼び止めた。

呼び止めた少女の方が大人っぽい雰囲気を漂わせてはいるが、まだ少女の域は出ていない。

ポニーテールに束ねた少しだけ碧掛かった黒髪は、下ろせば肩までありそうだ。吊り気味の二重瞼の下には、黒檀のような黒い瞳が収まっている。少しだけ上を向いたように感じさせる鼻梁は、きわどいところでアンバランスな魅力になっていた。それは、控えめな口元が、すべてをきれいにまとめ上げていることとなりたっている。

一六〇センチ弱の身長に、すらりとした手足と少々控えめな胸元は、少女が活動的な性格であることを物語っているかのようだった。絶世の美女ではないが、誰もが気になってしまうような可憐さも、その少女は持っていた。

宿屋の小さな食堂の片隅で、チエルと呼ばれた少女は憤然として立ち止まった。

片手には台布巾を持ち、宿の制服であるメイド服の上に白いエプロンを掛けている。最近帝都で流行りのサピエント王国風の格好だった。

「エルミ、今忙しいんだから。

あたしのことはどうでもいいの。

あなたこそ、どうするのよ？」

チエルは半ば本気で腹を立てていた。

一言言い捨てると、客が置いていった食器を片づけ始める。

ボブカットに切り揃えた髪は漆黒の輝きを放ち、食器を取るためや汚れたテーブルを拭く動きに合わせてリズムカルに揺れている。

吊り上がった一重瞼の目は、決してエルミに対する怒りからばかりではなく、多少は元からの造りだった。ソル人にしては薄目の黒い瞳は、遠い祖先に違う人種の血が入ったことを物語っている。すつきりとした鼻梁は少々高めで、意志の強そうな口元から受ける刺々しさを見事に和らげていた。

一五〇センチほどの身長に釣り合わない胸元は、屈む度に男の視線を集めずにはいられなかった。

エルミと呼ばれた少女は、肩を竦めて何かを考えているのか、そのまま黙り込んでいる。

「だって、レグルはガルを連れて行きたいんでしょ？」

私はそれを止める権利もないし。

そりゃあ、二人ともいなくなっちゃうなんて寂しいよ。

でも、しょうがないよね？」

暫く考えた後、エルミはチエルに答えを預けた。

「エルミ、あなたからちゃんと言わないと、いつまで経っても今のままよ。」

いい機会だと思っただけだな。

あなたが自分の気持ちに素直になればいいと思うの。」

食器を満載したトレイをテーブルに置き、チエルはエルミの目を見つめて言う。

チエルは、エルミがガルに対して好意を持っていることを知っていた。

自分にレグルというひとつ年上の恋人がいる余裕も手伝ってか、

ふたつ年上の幼馴染みの恋を応援したいという気持ちがある。しかし、ガルが自分に対して恋心を抱いているなど、異性の感情には少々鈍いチエルにとって想像の埒外だった。仲の良い大切な幼馴染みではあるが、それ以上でもそれ以下でもない、チエルはガルを認識していた。

「うん。」

実は、私もね、帝都へ出ようかと思ってるの。

しがらみばかりの村にいるより、帝都でガルと暮らしていけたら良いな、とは思ってるから。

もう、帝都にいる伯父さんに話は付いてるんだよね。

まだ悩んでるんだけどさ」

年が明けたらレグルは確実に帝都に出る。

多分、ガルもついて行くはずだと考えたエルミは、先手を打って帝都での伝を探し当てていたのだった。行動力に溢れてはいるが、思いこみもその分激しいエルミらしい行いだ。

「なんか、さつきと言ってることが違ってきてるけど？

ま、いいわ。

やっと素直になったみたいだしね。

あたしの分まで頑張ってきてよ。

三人とも、出て行っちゃうのか

それより、エルミ、あなたいつガルに告白するのよ？

まさか、帝都で待ち伏せでもするつもり？」

言葉の裏にある羨ましさを感じさせないように、チエルはあらゆる限りの努力を払っていた。

それを気付かれないように、冗談に紛れて誤魔化そうとする。

「チエル、あなた『読心』の呪文なんて持ってたっけ？」

驚いたという表情でエルミは聞き返した。

「持ってないでしょ、そんなもん。  
確かに欲しいと思うときはあるけど、いらないわよ、あんな怖いもの。」

「って、あなた本気だったの？」

額に指を当て、俯きながらチエルは呆れたように言った。

呆れつつもチエルは、エルミの行動力が羨ましかった。そして、ふたつ年上とは思えないエルミの子供っぽさを、チエルは嫌いではなかった。

「本気も本気。」

でも、ガルには言わないでおいてね。

一足先に行くけど、そうねえ、女学校にでも行くってことにしておいて」

エルミはそう言って瞳を輝かせる。

農家を営むエルミの家は、長兄が継ぐことに決まっていた。次兄は、士官学校は最初から諦めていたが、軍人として国に尽くしたいという気持ちは強く、既に帝都で騎兵軍に下士官として従軍している。つまり、エルミに関しては、村に繋ぎとめておくがらみはなにいに等しい。

伯父の厄介になれる上、騎兵軍下士官という身分の保証人がいるのであれば、エルミが帝都で女学校に通うということは無理のある話ではなかった。

「あんまり驚かせて、却って嫌われなきゃいいけどね。」

ガルはちよつと気弱なところがあるから、ほどほどにしておきなさいよ、驚かすのは」

それが一番大事とばかりに、チエルは語気を僅かに強める。

「あなたは？」

レグルを独りで行かせちゃうの？」

エルミは自分の暴走を咎められたと思ったか、最初の質問に戻った。

「ついで行ってどうしろって言うの、エルミ？」

お父さん独りじゃ、宿の切り盛りは無理よ。

少なくとも、アレイが一六になるまでは、あたしはここにいないやいけないの。

こんな宿でも、なくなっちゃったらみんな困るでしょ。」

チエルたちが住む村の他には、このオアシス周辺に宿のある村はなかった。

ここからさらに北へ向かう旅人や商人にとつて、チエルの家が営む宿屋がなくなることは、北への足掛かりを失うに等しい。

砂漠が大陸のほとんどを占めているこの世界で、オアシスは重要な旅の中継点だ。

帯のようにこの星を取り巻く大陸は、そのほとんどが砂漠で占められている。

両極には広大な海洋が広がっているが、季節ごとの気候変動が激しく、とてもその周囲に人が居住したり、利用できるものではなかった。冬には凍結し、夏には嵐が吹き荒れる海洋は、人の居住こそ拒んでいたが、嵐が大気の循環に乗って世界に水を運ぶ役割を果たし、砂漠に住む人々に飲み水を供給している。

もちろん、降雨はすぐ砂漠に吸い込まれ、地下水という形で伏流となり、オアシスとして特定の場所に湧き出していた。

造山活動により隆起した岩盤上に降った雨は河となり、周囲に緑

をもたらししている。

砂漠へと流れた河はそのまま蒸発してしまうか伏流水となるが、岩盤の低い部分に流れた河は巨大な湖を形成し、その周囲に文明が勃興した。メデイエータ共和国はそのような大岩盤上に発生した最古の国家のひとつで、その大岩盤はベロクロン大岩盤と呼ばれている。世界を取り巻く大陸上には、同様に巨大な湖を持つ大岩盤がいくつが存在し、それぞれに固有の文明を発達させてきた。

ソル皇国は、ベロクロン大岩盤の東に湧き出た弓状に連なるオアシス群に成立した国家だった。

オアシス群国家は岩盤上にある国家に比べ、国土における砂漠が占める割合が多い。

深い砂上にレールは敷けないため、鉄道などの交通機関が発達しにくいという弱点がある。一部に造山活動の結果できた山岳地帯があるものの、ほとんどは砂漠とオアシスだけの国土だ。大規模なオアシスの周辺にはそれなりの都市が発展していたが、全国に十ヶ所程度でしかない。

列強に比べ魔鉱石や鉄鉱石などの資源に乏しいソル皇国では、公共交通機関がそれほど発達していない。

帝都と軍事的に重要なオアシス間には、魔鉱石を利用した浮遊列車の路線が敷かれているが、それから外れてしまえば民間の小規模な路線しかない。軍需産業に魔鉱石がほとんど独占され、民間への割り当てが少ない状況では、せいぜい二、三のオアシスを繋ぐ程度の路線が精一杯だった。

チエルやエルミが生まれ育った村は、ちょうどオアシス同士を結ぶ民間路線の中継点になっていた。

「それに、レグルは士官学校に行くのよ。」

全寮制で、外出なんか半年に一度、夏の慰霊祭と新年祭の時期

に七日ずつ。

たった、それだけよ。

その後軍に入っても、最初の二年、中尉になるまでも基地内官舎暮らし。

ここにいたって同じよ。

あたしは、ごみごみした帝都で独り暮らしなんて、絶対御免だわ」  
そう言っつてチエルはトレイを抱え、厨房へと戻ろうとした。

「あ、そうだ、あなたも士官学校を受けてみたら？

なんでも、飛行機の搭乗員を増やすのに、女性にも門戸を開くそうじゃないの」

厨房に入る前にチエルは振り向き、エルミに言う。

この世界における飛行機は魔鉱石を動力としていたが、搭乗員の魔力も運動性能に大きく関ってくる。

基本的には訓練さえ受ければ誰でも飛ばすことはできるのだが、魔力の高い者ほど魔鉱石の性能を引き出すことができ、カタログデーターから一割程度の性能の上昇が見込めるのだった。もちろん、機体の強度や物理法則を曲げてまでの性能上昇は無理だが、空戦技術と魔力は密接な関係にあると見られていた。

チエルがエルミに士官学校受験を進めたのは、エルミの魔力が村では突出していたため、悪化する一方の世界情勢の影響からより優秀な人材を必要とし始めた軍が、男性より魔力の高い女性に対し門戸を開くと決定したことを受けてのことだった。

ソル皇国は砂漠自体が天険の要衝であり、ベロクロン大岩盤で繰り広げられた国家の興亡とは無縁に過ごしてきた。

ソルが数多のオアシス群を統合して国家として成立して暫くは、

当時の先進国である旧メデイエータ帝国を宗主国としていたが、貴族に代わって騎士が政治の実権を握って以来、両国は対立し始めた。幾度かの侵略が偶然起こった砂嵐によって頓挫して以来、ソルは神の守る国であるとされ、砂嵐は神風と誇称された。権力の象徴とされた皇王は神の子孫と位置付けられ、政治の実権を握った騎士は、皇王を廃することなく利用し続けた。

幾度となく騎士同士の政権争いの中でオアシス群は戦乱の世を迎えたが、四〇〇年ほど前に出現した一人の騎士が世を統一し、皇王の権威の下に世を治め始めた。

他国の干渉を避けるため鎖国政策を採り、ソルは独自の文化を育みつつ、四〇〇年に亘る太平の世を謳歌してきた。

だが、太平の世を手に入れた代わりに、世界の技術進歩から大きく取り残された代償は大きかった。七〇年ほど前にオリザニアをはじめとした列強が、ソル周辺に眠る地下資源採掘のために浮遊船で大東砂海を渡ってきた。

彼らは地下資源採掘時に必要な水を補給するために、ソルに開国を求めてきた。

当時の騎士政権は鎖国を守るため外国船を討ち払おうとしたが、圧倒的な技術力の差に抵抗はあえなく頓挫した。

それでも当時の最先端をいく列強の技術力を以てしても、ソル皇国を征服できるほどの兵力を運ぶことは不可能だったことが、ソル皇国には幸いした。皇王から民までを混ぜこぜにしたようなすったもんだの末、ついにソル皇国は独立国家として開国したのだった。

それからの七〇年は、開国当初の不平等条約を糺すべく、列強に追いつき追い越せと、富国強兵を国是としてきた。だが、二度の戦争を必死に勝ち抜き、どこをどう間違ったのかその後西方世界で起きた大戦の勝ち馬に乗ってしまったために、軍事色の強い、歪な国家として育ってしまった。



ソル皇国とメデイエータ共和国との紛争に口出ししてきたオリザニア共和国は、もともと人がほとんど住まない荒涼としたバキシム大岩盤に成立した新興国家だ。

彼らの祖先は、二〇〇年ほど前にさらに東にあるドラゴリー大岩盤や、その西側にあるサピエント王国から大西砂海を渡ってきた。移民が集まってできた多民族国家であり、原住民との間で激しい戦闘の結果国土を勝ち取った軍事色の強い国家だ。様々な民族が寄り集まった国家であるせいか、国としてひとつに纏めるためには常に新たな目標と敵を求める必要に迫られているという宿命がある。その結果、バキシム大岩盤の東から西に向けて開拓を進め、大東砂海に辿り着いていた。

その飽くなき西進の欲求の先には、広大な大東砂海を挟んで、ソル皇国、そしてベロクロン大岩盤が広がっている。

ベロクロン大岩盤の南部、メデイエータ共和国の南西には、ドラゴリー大岩盤に群雄割拠するサピエント王国をはじめとする列強国家の植民地がひしめき合っている。

既に分割可能な地域は、残されていないように見られていた。しかし、旧メデイエータ帝国の末裔であるテルシー帝国がソル皇国との戦争に破れ、そのまま発生した内乱で滅んだ後の混乱期に、ソル皇国がフェクタム帝国を傀儡国家として事実上植民地化した。これによりテルシー帝国と国境を接していたロス帝国と衝突もしたが、ソル皇国は辛くもこの戦争に勝ち抜き、フェクタム帝国は独立国家としての体裁は守っていた。これをドラゴリー大岩盤の列強国家群が非難したが、ソル皇国は列強の植民地政策と同じことをしたに過ぎないと跳ねつけている。

オリザニア共和国は遅れてきた新興国家であり、ベロクロン大岩盤上に権益を持っていなかったが、ソル皇国のやり方に目を付けて

きたのだった。

権益を求めた新興国家同士が、ベロクロン大岩盤上で衝突するこ  
とは、必然と見られていた。

資源も予算もないソル皇国は、人材と個々の兵器性能に活路を見  
いだすことにした。

魔力に秀でた者を発掘し、訓練に次ぐ訓練で超一流の戦技を身に  
付けさせ、他国を圧倒する性能の兵器を開発する。列強の中で、こ  
の先生きのこる道はそれしかない。

女性の搭乗員を養成するという発想は、そういった中から生まれ  
てきた。

それまで大きな目標も夢もなく、漫然と暮らしてきただけの少女  
に、初めてひとつの夢が宿った。

## 第4話 親と子

金属の打ち合う音が溢れる仕事場で、ガルは父に話しかけた。

「父さん……」

意を決して話しかけたつもりだったが、父の眼差しに言葉が詰まる。

「余計な口をきくな。」

話なら飯のときだと、いつも言ってるだろうが

鎚を振るいながらぶっきらぼうに答える父に、ガルは気圧されてしまう。

鍛冶としての腕は一流とは言い難いが、それを知っているが故に仕事に対して誠実な父は、ガルに対してもそうあることを求めている。

指示という名目の命令や技術論であれば作業の最中であっても口を開くが、それ以外の話題は一切相手にしない。普段のガルであればそんな当たり前の無駄な行為をすることはないが、今は勢いがあるうちに言わなければ、二度と言い出せなくなりそうな気がしていた。

「俺、帝都へ行く。」

レグルと一緒に、砂海軍士官学校を受ける

そう言っただけでガルは父の反応を待った。

仕事場を沈黙が支配した。

父は目を見開き、これまで言われるままでしかなかった息子の初

めての自己主張を、嬉しそうな表情で聞いていた。

父は目を閉じ、深く息を吸い込み、そのまま時が流れる。

父の表情から許されると見て取ったガルも、嬉しそうに感謝の言葉を頭に浮かべ、喉元に用意した。

やがて、大きく息を吐いた父が口を開く。

「許さん」

一言だけ言うと、父は反論など聞く気もないとばかりに鎚を振るう。

「……!？」

なんで？

なんでだよ、父さん!？

お国のためにつ!

俺はお国のお役に立とうってっ!

ガルはまさかの一言に暫く呆然として、一気に言い募る。

「莫迦か、お前は。」

全員で最前線に出てどうする。

飯が湧いてくるとでも思ってるのか？

砲弾が独りでにできあがってくるか？

お前が士官になったら、この村の農業は誰が支えるんだ？

誰かが前に出れば、誰かが後ろを支えなきゃならん。

お前は、後ろにいるべき人間だ」

父はそれ以上は言う必要もないと言いたげに口を閉ざすが、嬉しそうな表情のままだった。

「そんなの、誰かがやりゃいいじゃないかっ!

俺はっ!」

ガルはそれでも言い募る。

父の言うことはよく分かるが、その通りになりたくなかった。若さ故の万能感が、自身の未来図を否定された気になって剥きになり始めていた。

「いいか、ガル。」

お前は俺の息子とは思えないほど、出来が良い。できることなら、帝都へ出してやりたいと思う」

切りの良いところまで鎚を振るった父は、手にした鎚を横に置いた。

「じゃあ、いいじゃないか、父さん。なんで？」

父の相反する言葉が理解できないガルは、縋るような視線で父に言った。

「お前が軍に入ったとしよう。この村の鍛冶はどうなる？」

たいして腕の良くない俺に、仕事が来ているこの村はどうなる？ お国のお役に立つということは、何も敵兵を討つだけじゃないんだ、ガル。

昔から言うだろ、腹が減っては戦はできぬ、と。

食い物を作るのは、レグルの親父さんみたいな農夫だけじゃない。底辺で、それを支える俺たちみたいな者がいなくちゃならないんだ。

解ったか？

解ったら、仕事だ」

それだけ言うとガルの父は、再度鎚を手に取った。

ガルは言い返せない自分に唇を噛み、補助の鎚を手に取る。余りに強く噛んだからか、口の中にしょっぱい鉄の味が広がっていた。

「ガル、精神を集中しろ。

火力が落ちてる。

魔鉱石に意識を集中するんだ。

こんなんじゃあ、酷いできになっちまうぞ」

ガルの心の乱れを感じ取り、父の叱咤が飛んだ。

ガルは、帝都のことを一時頭から追い出し、魔鉱石に魔力を集中する。いつもは簡単に上げられる火力が、このときばかりは思うに任せなかった。

「親父、年が明けて新年祭が終わったら、行ってくる」

夕食の後、茶を喫している父に向かってレグルが言った。

「随分と早いんじゃないか？」

試験は、確か、一月の末だっただろう？」

教科書から目を離さないレグルに、父が言葉を投げ掛ける。

農閑期に当たるこの時期は、たいして農作業は忙しくない。

雪こそ降ることは稀なこの世界でも、一二月から一月にかけては適した農作物がなかった。さらに高緯度地域に行けばそれなりの品種はあったが、その作付けをしまつと田畑の回転が却って悪くなってしまう。

それもあつて士官学校をはじめとした高等学校、大学校、専門技術学校などの各高等教育の学校は、受験をこの時期に設定していた。

「いや、少しでも早く帝都に慣れときたいんだ。

いきなり行つて人混みに気圧されちまったら、試験でどんなへマするか判らないから。」

「なんたって、俺は初帝都だし」

集中力が分散したのか、一旦教科書を置いたレグルが父に向き直った。

「そういった戦術であることはもちろんだが、早く帝都へ出たいという欲求が抑えられない。」

「良い心掛けだかな、レグル。」

「そんなに早く行かれても困るぞ。」

「店はいいんだが、宿代が馬鹿にならん。」

「さすがに帝都で長逗留するほどの余裕は、家にはないぞ、レグル」  
「親心としては行かせてやりたい。」

「だが、そのせいで自分たち夫婦はともかく、まだ幼い妹であるリンに今以上にひもじい思いはさせたくなかった。」

「大丈夫だよ。」

「エルミの兄さんが、騎兵軍にいる。」

「逗留させてもらえないか、エルミに聞いてもらおうよ。」

「それがダメなら仕方ないさ。」

「ただ、一度は試験前に帝都に行かせてくれよな。」

「日帰りで構わないからさ」

「レグルは用意しておいた答えを返した。」

「エルミの次兄は、歳は離れているが幼馴染みと言っても良い。」

「互いに陽が暮れるまで砂だらけになって遊び、ときには殴り殴られた間柄だ。真摯に頼み込めば、無碍に断られることはないだろうとレグルは踏んでいた。」

「それは、不躰と言うもんじゃないか？」

「いくらなんでも、あの方はご家庭持ちだし、今日の明日というわけにも行くまい」

「父は少々困った顔になった。」

皇国騎兵軍下士官ともなれば、レグルたちが住む村では名士とい  
って良い存在だ。

間もなく帰省してくるが、その際には村長をはじめとした村の主  
だった者と一席設けられるのが通例だった。強制兵役の兵卒と、そ  
の後経験を積み厳しい選抜試験を潜り抜けた下士官とでは、扱いは  
雲泥の差だった。

近所の洩垂れ小僧ではあったが、父の言葉遣いが変わっているこ  
とがそれを物語っている。

「もうすぐ帰ってくるんだよな？」

その席に俺も連れて行ってくれよ。

礼儀は弁えているつもりです、お父さん」

突然言葉遣いを改めたレグルの真剣な表情に、父は目を見張った。

家の中や、外でも友達と話すときはともかく、レグルに対する躰  
には自信はある。

いつか士官学校に入ったとき、苦労しないようにとの親心だ。そ  
の他にも初等学校で修身という授業があり、家庭教育以上に皇国に  
おける礼儀や身の処し方は叩き込まれている。それがいくら幼馴染  
みとはいえ、所帯を持つ者にひと月近く居候させてくれと頼むなど、  
礼を失していると言われかねない。ましてや相手は軍の背骨とも言  
われる下士官だ。

機嫌を損ねるようなことがあれば、後々どのような不利益がある  
か判ったものではない。

「大丈夫です、あの方なら」

やんちゃ盛りだった当時の面影は残しているが、すっかり大人の  
風格を蓄えたその人物を思い浮かべ、レグルは言った。



「いや、それだけじゃなくなあ。  
奥方様がなんと仰るかも、なあ」  
父は、レグルの同席に中々首を縦に振らなかった。

「お母さん、私帝都へ行く。

騎兵軍か砂海軍の飛行士官の試験、受けてみる」

エルミが母に決意を打ち明けたのは、チエルと話した日の夜も更けてからだった。

農閑期は全く仕事がないわけではないが、夜になれば多少時間の余裕がある。そうはいつでも家事が減るわけではなく、母は針仕事に精を出していた。

「エルミ、自分が何言ってるか解ってるの!？」

突然の言葉に、母は針仕事を投げ捨てるように置き、叫ぶように言った。

帝都へ出たいということは前々から聞かされていたので、そのことについては今さら驚きはしない。反対している父を、どう説得してやるか頭を悩ませていたくらいだ。しかし、軍に入るとなれば、話は大きく違ってくる。

「どうしたの、お母さん、そんな血相を変えて？」

女の方が魔力が高いから、搭乗員に向いてるって話だよ。

これからは女も男と同じように、お国のお役に立たなきゃ。

うまく行けば兄さんよ」

「冗談をおいでないよっ！

何を言い出すかと思えば。

あたしらは、あんたを人殺しにするために育てたんじゃないっ！」  
母にしてみれば、次兄が軍に残ったことすら耐えられないことだ

った。

お国のための一言で、数多の命が紙屑のように消し飛んでいる。次兄がいつ白木の箱で家の戸をくぐるか、母はそればかりを心配していた。毎朝、誰よりも早く郵便受けを覗くのも、次兄の戦死通知がないことを確認するためだ。我が子の死も心配だが、我が子が戦う相手にも親兄弟がいる。戦争だから仕方がないと言ってしまえばそれまでだが、戦後ひとを殺めたという事実と、我が子を向き合わせたくなかった。

もっと単純に言えば、死んで欲しくないし、人殺しなどになつて欲しくなかった。

偽らざる母の心情だった。

「そんなつ！」

これはお国のためよっ！

人殺しなんかと一緒にするなんてっ！

ひとに聞かれたら大変なことになつちゃうわっ！

兄さんがやってること、否定するの、お母さんは！？

命がけでお国の楯になつてる兵隊さんに、なんてこと言つものっ！

エルミが叫ぶように言い返す。

自身の夢を否定されたことにも納得できないが、次兄の行いを否定されたことがエルミの怒りに火をつけた。

仲の良い親子と近所では評判だったが、エルミが帝都行きを言い出してから、家庭内の雲行きが怪しくなっていた。

それが飛行士官を受けると言われ、一気に嵐を巻き起こしたかのようだった。おおつぴらに戦争否定を口にすれば非国民扱いされかねない世相の中、エルミの母は真っ正面から戦争を否定してしまつた。

「お父さん、ちょっと来て下さいっ！」

エルミがとんでもないこと言い出して

土間で藁を打っている父を母が呼び、それとほぼ同時に父が居間に入ってきた。

「母さん、滅多なことを言うもんじゃない。

ご近所に聞かれでもしたらどうする。

息子の忠国の情を、そんなふうと言うもんじゃないだろう。

いいじゃないか、エルミが初めてお国のお役に立とうとしてるんだ。

行かせてやるうじゃないか」

土間まで響き渡る二人の言い合いを聞いていた父は、母を宥めながらそれまでとは正反対の物言いをした。

「どういうことです？」

お父さんはあれほどエルミの帝都行きに、反対してたじゃありませんか？

それが何で今になって!？」

父の豹変に、母は戸惑うばかりだった。

「なんの目標もない物見遊山であれば、帝都などたまに遊びに行く程度でいい。

花嫁修業なんぞ、どこでもできる。

だが、明確な目的があり、それがお国のお役に立つというなら、これを止める謂われはないぞ、母さん」

父は表情を和らげ、母を説得に掛かった。

「だからって、何も軍に入るなんてことはないじゃないですかっ!」  
母は折れるつもりなどさらさらしない。

本来であれば、頑なに帝都行きに反対する父を説得し、エルミを送り出すつもりだった母が反対に回り、父が母を説得し始めている

当事者であるエルミそつちのので、夫婦の論争は終わる気配を見せなかった。

「お父さん、このお皿、捨てちゃっていいかしら？」

厨房の洗い場からチエルの声が響く。

縁が欠けた皿に気付き、家庭用に回すか処分するかを父に尋ねた。

「ああ、捨てちまっていいぞ、チエル。」

なんなら、裏に回って叩き割ってこい」

翌朝の仕込みを続けながら、手元から目を離さず父が答えた。

いずれにせよ、新しい皿を買わなければならない。経費が掛かることにも拘わらず、父の声は笑いを含んでいた。

「いいの、そんなこと言つて？」

お母さんに、後で怒られたって知らないから」

そう答えるチエルの声にも、充分すぎるほど笑いが含まれていた。

「構うもんか。」

たまには、なんだ、ストレスとかいうのか、それを発散するのもいいだろう」

父は最近見知ったサピエント語を口にした。

「そうねえ、たまにはいいか。」

じゃ、ちよつとだけ、いい？」

チエルは父の返答を待たず、縁の欠けた皿を持って裏に回った。

あたしだって、帝都に行きたいっ！

渾身の力を込めて、皿を地面に叩き付ける。

粉々になるかと思っただ皿は、大きな破片と細かい屑に離断され、小さな破片がチエルの脚に当たった。

思ったように砕け散らなかつた破片を拾い集め、掌に乗せているチエルの目から涙がこぼれ落ちる。

なんで、あたしは……

レグルも、エルミも、きつとガルも……

友達が三人しかないというわけではない。

だが、特に仲の良い、いつでも一緒にいると思っていた三人が、揃いも揃って帝都へ出て行ってしまふとなると、チエルはいたたまれない思いに捕らわれてしまった。

レグルが迎えに来てくれることは、信じている。

将校の妻として村を出るのは、誰しもが祝福してくれるだろう。

現状でエルミの家の次兄が下士官というだけで、帰ってくれば村を挙げての歓迎だ。それが士官、将校ともなれば、どれほどの尊敬を集めるかは、想像に難くない。ただ、チエルは人々の尊敬が欲しいというわけではない。

毎日は会えなくとも、レグルが近くにいることに安心していた。

しかし、レグルが士官学校に入り、軍に進むとなれば、何年か後には一緒に暮らせるようになるとはいえ、当分は年に二回しか会えなくなる。

それが心の支えとなるか、心が折れてしまふか、チエルは言いようのない不安に襲われていた。

「すまん、チエル。」

余計なことを言つて、やらんでもいい仕事を増やしちまつて」  
皿の破片を拾い集めているチエルに、父が背後から声を掛けた。

「何言つてんの、お父さん。」

結構、すつきりしたわよ」

涙を気取られたかとチエルは父に背を向け、そつと頬を拭つた。

帝都行きを言い出したところで、父が反対するのは目に見えてい  
る。諦めとともに、チエルは父に振り向いた。

人を雇おうにも、宿の経営に余裕はない。

家族経営であり、チエルの給金が小遣い程度であるからこそ、経  
営は成り立っていた。一人が暮らせる給金を出してしまえば、そ  
れだけで赤字だ。住み込みにでもしてしまえばある程度は抑えられ  
るが、こんな辺鄙な田舎町の宿屋に住み込みで働きに来る物好きが  
いるとは思えない。近隣の村人であっても、住みなれた村を出るく  
らいなら帝都行きを選ぶだろう。それが解り切っているからこそ、  
チエルは自身の夢を強引に押さえ込んでいるのだった。

今は、数年後にレグルが迎えに戻ってくることを、心の支えにす  
るしかないと、チエルは割り切っていた。

父が帝都行きを反対するであろう理由を、チエルはもうひとつ思  
い当たることがあった。

エルミにも言ったことだが、仕官に奉職すれば最低二年は基地内  
営舎暮らしだ。その前には三年の士官学校寮生活がある。外出もま  
まならぬ状態に置かれ、チエルと会えることもほとんどない。そん  
な環境では、チエルは一人暮らしを強いられることになる。

世間知らずな若い娘が、帝都で身寄りもなく一人暮らしをするな  
ど、悪い男に騙してくれというようなものだ。

人一倍娘を溺愛している父が、帝都での一人暮らしを許す確率は  
限りなくゼロに近い。

宿の経営状態と父の心配、そしてレグルという保証がある中で、無理に帝都行きを言いだす理由をチエルは失っていた。

チエルは、ただ友達が羨ましいだけと気付き、理不尽に帝都行きを反対されるのではないと納得し、数年後の旅立ちを夢見て、厨房の後片付けに戻っていった。

## 第5話 それぞれの胎動

太陽暦二六三七年の最後の日。

翌朝の新年祭を控え、村は何ともいえない慌しさと、のんびりした雰囲気が同居している。

この夜ばかりは多少の夜更かしも認められ、新年を告げる時の鐘を誰もが聞こうとしていた。鐘が鳴れば新年となり、村々にある神社には一年の安全を願う人々が押し寄せる。ソル皇国の年の変わり目に見られる、いつもの光景がもうすぐ展開されようとしていた。

「士官学校の受験は許さん」

仕事場の柱時計が午前零時を告げる数分前、父はそれだけ言っただけで、ガルの顔を正面から見つめた。

「なんだよ、今さら」

親に対する態度ではないことは充分承知の上で、ガルはふてくされてみせる。

仕事場で厳しい分、家庭ではそれほど煩くは言わないように、父は配慮していた。ガルの態度はその範疇を越えていたが、それでも父は怒る素振りを見せなかった。

「士官学校の、と言っているだろう。  
高等学校なら許す。」

その代わり、そのあとは大学校なり、技術専門学校なりに行け。鍛冶屋も経験だけではダメだ。

新しい技術と知識を学んでこい」  
そう言っただけで父はガルの反応を待った。



ソル皇国では、六歳から一二歳までの子供が通う六年制の初等学校と四年制で一六歳までの中等学校が義務教育だった。

その後は三年制の士官学校か二年生の高等学校を経て四年制の大学校や技術専門学校に分かれている。士官学校を卒業後、軍の命令で大学校や技術専門学校に通う者もいた。任官猶予の許可を取り、それらの学校に通うことも可能ではあった。もちろん、猶予を取った者が出世レースにおいて不利になることは当たり前のことだったため、誰もそのようなことはしないが制度としては存在する。

父は、高等学校の受験を認め、然る後に帝都へ出る、と言っていた。

「もうひとつ、条件がある」

困惑のまま固まるガルに、父は続けて言う。

「高等学校は、通える範囲で選べ。」

さすがにお前を大学にやれるほど、稼ぎが良いわけじゃないんだ。学校の後は、今までどおり鍛冶屋を手伝えるようにしてくれ。

二年のうちに、稼げるだけ稼ぐんだ」

そこまで言っつて、父は手元の銚子を傾け、煙管を一服して煙を吐き出す。

その顔は、してやったりという思いに溢れていた。

いずれにせよ、自分の腕を越えてもらわなければ、息子の代で鍛冶屋がやって行けなくなる。

帝都を遠く離れた田舎にいても、技術が進歩していることくらい父は知っていた。今までは経験と勘がモノを言う時代だったが、これからは学問の裏付けがなければやっていけない。父はそう考え、ガルを高等学校から大学校、または技術専門学校へ進ませることは決めていたのだった。

学生であれば強制兵役の免除がある、ということを経験しての親心でもあった。

「父さん、本当にいいの？」

信じられないという表情で、ガルは問い返す。

今すぐ確認しなければ、夢が覚めてしまつても思っているような顔になっている。

「ああ。」

これからは、学がないといかん。

帝都へは遊びに行かすんじゃないからな。

そこはよく弁えろ。

あと、明日からは仕事を手伝うな。

死ぬ気で勉強しろ。

試験まで、二〇日もないからな」

父はまた煙を吐き出し、煙管を煙草盆に叩き付け、新たに刻み煙草を煙管に詰めながら言った。

ガルが中等学校卒業後も勉強を続けていたことを、父は当然知っている。

仕事の合間に本を読んでいたたり、土間の砂の上に父には理解できない数字と記号を書き並べていた。夕食の後も、今の片隅で本を広げては何かを書き取り、考え込んでいる姿も見ている。この時代のソル皇国で一般的な家の造りでは、家族間のプライバシーなどあつてないようなものだった。

知られたくないことは家ではやらない、口にしない、ということでした。家族間で秘密を維持することは不可能だった。

「ありがとうっ！ 父さんっ！」

嬉しそうな表情を浮かべ、ガルは叫ぶように言った。  
もつと礼を言いたかったのだが、言葉が浮かんでこない。無理に  
言葉にしようとすれば、音声の代わりに涙が出てきそうだった。  
そのとき、柱時計が午前零時を告げ、ほぼ同時に鐘楼の鐘が鳴ら  
される。

「お参りに行こうじゃないか。  
今年一年の安全と、お前の合格祈願に。  
母さん、外套を出してくれ。

みんなも支度しろ」  
ざるに残っている蕎麦を啜り、銚子に残った酒を猪口に注ぎ、一  
気に飲み干した父が立ち上がる。  
続いて立ち上がったガルは、まだ涙を必死に堪えていた。

ガルたちが神社に向かっている頃、エルミの家から多くの人々が  
吐き出されていた。

次兄が一昨日戻り、村の主だった者を集めた宴席が設けられてい  
たのだった。次兄は帝都を守る第一師団から、宮城を守る第二近衛  
師団への栄転を内示されており、それを祝う宴席でもあった。新年  
祭も慰霊祭も関係ない職業ではあったが、所属する中隊長の好意に  
より新年祭に合わせたの帰省が認められていたのだった。

新年を告げる鐘とともに宴席も散会し、出席していた人々はその  
まま神社へと向かっていた。

「レグル、ごめんね、そんなこと考えてたとも知らずに」  
神社へ向かう人々とは距離を取りながら歩いているエルミが、レ  
グルに向かって手を合わせる。

「いいよ、気にするな、エルミ。  
そういうことならしょうがない。

身内が優先されるのは当たり前だ。

俺の方こそ、不躰なお願いを快く引き受けてくれたことを感謝しているんだ。

それに、奥方だつて見知らぬ俺より、エルミのほうが気楽だろうしな」

ほろ酔い気分も手伝つて、レグルは機嫌よく言った。

宴席で下宿の直談判に及んだレグルに、エルミの次兄は済まなそうな表情を浮かべていた。

この時点でエルミの帝都行きは棚上げという形になっていたが、次兄が帰省してすぐ、エルミは散歩と称して次兄を連れ出し、ここで相談に乗ってもらっていた。次兄はエルミが帝都へ出たいとい知っている。そして、父同様、物見遊山的な帝都暮らしには反対だった。

しかし、エルミが飛行士官に挑戦すると聞いて、次兄はやはり父同様に諸手を挙げて賛成し、それなら自宅に来说っていただけだ。エルミに甘い伯父より、実際に軍務に服している自分が監督した方が、エルミのためになると考えてのことだ。

そこへレグルの直談判だった。

さすがにふたりを受け入れる余地はない。暫く考えた挙句、次兄はエルミのことは伏せてレグルの下宿を断り、伯父を下宿先として紹介することを約束した。顔見知りでは甘えが出るかも知れず、それであれば却って伯父の家のほうが気も引き締まると考えたからだ。神社への道すがら、エルミがレグルに突然謝ってきたのは、そういうわけだった。

「ちょっと、大きな声で言わないで。」

まだ、お母さんには秘密なんだから。

新年早々、家の中の空気を悪くさせないでよ。」

エルミは慌てて辺りを見回し、レグルの口元を押えようとした。

「すまん、ちょっと浮かれてた。」

だけどさ、今からで間に合うのか？

士官学校といえば、国内で最難関なんだぜ。

お前、勉強嫌いじゃなかったっけか？」

声の調子を落としたレグルが聞く。

「うん、その辺はね。」

士官学校は到底無理だけどさ。

飛行士官は魔力優先でしょ？」

そう言っただけでエルミは指先に小さな炎を燈した。

その指には、三つの指輪が鈍い光沢を放っていた。

魔鉱石以外にエネルギー資源のないこの世界では、その力の利用法が遙か昔から研究され、ある程度確立されてきていた。

人間が誰でも持っている魔力に感応し、石が持つ特性に合わせた超常的な力を発現させることは、有史以前から知られている。これを加工することで日常的な煮炊きから製鉄、冷蔵保存や動力源まで、さまざまな用途に応用できる。指輪に加工することで炎や風、雷や氷を発現させる攻撃魔法や、簡単な怪我の治癒や運動能力の上昇など体力強化の魔法として利用できるようになっていた。

「おい、やめろっ！」

万が一にも人に見られたらどうすんだよ!？」

もし、魔探知に引っ掛かりでもしたら」

レグルは慌ててエルミを止めた。

攻撃魔法はそのまま犯罪にも使えるため、治安維持に従事する者か、予め届出のあった事業所、そして戦場以外での使用は固く禁じられている。

違反すれば、その使用規模によつてそれなりの厳罰が待っていた。ソル人は、世界の中でも攻撃魔法に優れていると、一般的には評価されている。それだけに一度魔力が解放されると、とんでもない被害を巻き起こすこともあった。少年刑法という若年層に対しての刑法には攻撃魔法の使用時の罰則がなく、大人と同等の刑事罰を適応されることになっているのもそのためだ。それでも攻撃魔法の犯罪への流用は後を絶たず、捜査のために魔法の発現時に生じる魔力を探知する機械も開発されていた。

レグルはその魔探知にエルミが引つ掛かつてはと考えたのだった。

「大丈夫よ。」

この村に魔探知なんかまだ配備されてないもん。

帝都以外であるとすれば、基地周辺だけでしようよ。

それに、この程度だったら、よほど近くじゃなきゃ探知できないって。

でもさあ、レグルがあんな礼儀正しいなんて、思いもしなかったわよ」

レグルの心配を他所にエルミは気楽に言い返すが、大人しく炎は消していた。

そして、咎められた気まずさを隠すために、レグルをからかう。

「茶化すなよ。」

こつちだつて必死なんだ。

それに、あの程度の礼儀は、当たり前じゃないか」

エルミが炎を消したことにレグルは胸を撫で下ろしつつ、からか

われたことに対しては口を尖らせて反論した。

「だって、いつもとは全然違うもの。」

「兄さんも、目を白黒させてたわね」

エルミが思い出したように笑う。

「もういいだろ、それくらいにしてくれよ。」

俺だって、思い出すたびにこそばゆくなっちまう。

チエルの家は、まだまだ大変そうだな」

今度はレグルが話題を変えた。

畑の向こうにチエルの家が嘗む宿屋が見えていた。

さすがにこの日ばかりは客室の明かりは全て消えていたが、厨房からはまだ灯が漏れている。

新年祭の料理作りに勤しんでいるであろう恋人を思いながらも、レグルは帝都での暮らしに思いを馳せていた。

「お父さん、伊達巻きの味見てっ！

あと、煮豆と膾もっ！

アレイ、お煮しめの盛り付けよろしくっ！」

それほど広くない厨房は、戦場のようだった。

チエルと父は、まだ幼いアレイまで動員して、翌朝に控えた新年祭の祝い膳の用意に忙殺されていた。

ソル皇国伝統の新年祭に用意される膳には、料理全てに国家や家庭、個人の繁栄や無病息災、五穀豊穡等の祈りが込められている。神前に奉納する膳は当然神職が作るが、個人宅ではチエルの宿に注

文する家も少なくない。その他、年頭の寄り合いに出される分もある。

近隣の村からも注文が毎年舞い込み、夏の慰霊祭のときなど比べものにならない一年で一番の稼ぎ時だった。

配達までが料金のうちに含まれており、オアシスを取り巻く村々を回る浮遊車の循環路線が、この日はかりは宿の前に待機している。チエル一家ではすべての配達を賄いきれないことから、翌朝に一旦増発した上に、積み込みのために夜のうちから待機してくれていた。個人宅の分は、一二月三一日の朝に配達し終わっていたが、狭い厨房ではすべてを一度に作りきることは不可能だった。そのため、年頭の寄り合いに出される分は、配達の後作り始めていた。

「姉ちゃん、これでいい？」

お父さん、あとどれくらいあるの？」

余った金団をつまみ食いしながら、今年初めて駆り出されたアレイが、盛り付けの出来をチエルに聞く。

「何やってんのよっ、アレイっ！」

あとでいくらでも食べさせてあげるから、今は口じゃなく手を動かしてっ！

お煮しめは、これでいいわ。

あとは、お父さんに味見してもらって、それでよければ煮豆と膾っ！

まだ一〇歳のアレイの頭をはたきながら、チエルは盛り付けに合格点を与え、次の作業を指示する。

普段であれば本気でやり返してくるアレイも、状況を理解しているのか言い返すこともなく金団の箱に蓋をした。



「ちよつと待て、チエル。」

これがひと段落着いたらすぐ見るから。

アレイ、それくらいにしておけよ。

伊達巻きと煮豆と膾の味見してる間、こつちを見ていてくれ」

強めに塩をした魚の焼き加減を見ながら、父はアレイに田作りを煮詰めている鍋の面倒を言いつける。

三日間続く新年祭の間は女たちが台所に立たなくても良いように日持ちを重視して多少味を濃いめに付けていく。

干した小魚を乾煎りし、そこに砂糖、みりん、酒、醤油の順に絡めていくが、あまり煮詰めてしまうとくつついてひとかたまりになってしまう。ちよつと塩梅の良いところで火から下ろして冷ますのだが、あと少しの工程まで来ていた。

アレイは、田作りが焦げ付かないように、まだ幼さが残る身体で必死に杓文字を動かし始めた。

昼過ぎから始まった祝い膳の準備は、レグルたちが神社から帰る頃、盛り付けと梱包の佳境を迎えていた。

「アレイ、ひと眠りしてこい。」

「ご来光を拝んだら配達だ。」

チエルも、これが終わったらもういいぞ」

折り詰め<sup>に</sup>魚の塩焼きを詰めた側から蓋をして風呂敷で包み、御品書きを差し込んで祝い膳の体裁を整えながら父が言った。

「ふあい。」

姉ちゃん、お父さん、おやすみなさい」

二度鳴った柱時計の音を聞きながら、ふらふらになったアレイが厨房を出た。

「ちゃんと起きてよ、今年こそ。」

配達から帰ってきたら、神社行くんだから。

二度寝なんかしてたらダメなんだからね」

階段を上がっていくアレイの背に、チエルが言った。

「まあ、無理だろうな。」

配達から帰ってくるまでは、寝かせておいてやれ」

祝い膳を積み上げ、数を確認しながら父が笑う。

「笑いごとじゃないわよ、お父さん。」

宿の跡取りは一〇歳にもなっご来光に來ないなんて言われて、恥を掻くのはアレイだけじゃなく、お父さんとお母さんでように「呆れ顔でチエルは言い返す。

自分はできたのだから、それくらい当たり前だと言いたいかのようだった。

「お父さんなんか、初めて祖父さんに手伝わされたときは、神社すら行ってないぞ。」

さすがに、誰よりも早く初夢を見たって言ったら、祖父さんに張り倒されたけどな」

チエルの気持ちを知ってか知らずか、父は大きく笑った。

「もう、知らないっ」

頬を膨らませながら、チエルは祝い膳を風呂敷に包み続ける。

やがて、柱時計の音が三回鳴った後、すべての作業が完了した。父は何度も祝い膳を数え直し、万が一にも不足がないかを確認した。寄り合い所から請けた数ごとに印を入れ、外に待機した浮遊車に運び始めた。

「チエル、お前も仮眠を取っておけ。

お父さんも、積み込みが済んだらすぐ寝るからな」

さすがに疲れた顔で、父は厨房と浮遊車を往復している。

チエルも、足下が震えるような感覚に襲われていた。下手に手伝って祝い膳を落としてもしたら、大変なことになる。軽い罪悪感を抱きつつも、チエルは先に休むことにした。

「うん、ごめんなさい、お父さん。

先に休むわ。

おやすみなさい、お父さん」

アレイと同様にふらつきながら、チエルは寝室がある二階へと階段を上がる。

寝間着に着替えて布団に入ると、チエルはすぐ眠りに落ちた。

ガルやレグル、エルミからは大きく遅れて、チエルの一年はようやく終わりを告げた。

## 第6話 少年と少女

新年祭といつても、特段大きな行事があるわけではない。

去年一年の疲れを癒し、今年を乗り切る英気を養うために、三日間の休みがあるという認識の方が、人々の間では一般的だった。恒例行事といえば、せいぜい一月二日は本家に集まり、一族郎党の顔合わせがあるくらいだ。村を挙げてのお祭り騒ぎがある秋の収穫祭や、故人を偲んで夜空に火の魔法を封じた紙風船を飛ばす夏の慰霊祭とは、大きく違う性格を有していた。

ご来光と神社詣が終わってしまえば、一月一日のと三日は外を出歩く人も疎らだ。毎朝繰り返される宮城遙拝以外は家に閉じこもり、家族とのんびり過ごすことが一般的だった。

ガルが年末に掛けて仕事が忙しく、レグルも受験勉強に精を出していたため、昨年の一二月八日以来ふたりはまともに話もしていない。

それほど金に余裕があるわけでもないふたりは、酒場ともご無沙汰になっていた。もちろん、勉強主体の毎日を送るレグルが酒を飲むとは思わなかったこともある。レグルが息抜きにチエルと遊びに行ったり、ガルが昼食を取りにチエルの宿屋の食堂に顔を出した際にエルミと行き合ったりは何度もあった。だが、互いに避けていたわけでもないのに、ガルとレグルは立ち話程度しかすることはなく、ゆっくりと会うことができずにいた。

そんなふたりが連れ立って酒場の扉を潜ったのは、太陽暦二六三八年二度目の安息日前夜、一月八日のことだった。

「あら、こんなところで行き会うなんて珍しいんじゃない？」

ふたりが酒場に入った途端、奥から聞き慣れた声がした。

「本当だ。」

エルミとチエルが揃って酒場に来るなんて、どんな風の吹き回しだよ」

こんなところとは酷い言いようだなと、苦笑いしつつ睨みつけた店主に頭を下げるエルミに、笑いながらレグルが答えた。

「ささやかなんだけど、エルミの壮行会よ。」

たった二人だけだね。

ちようどよかつたんじゃない、エルミ？」

チエルがレグルを見てからガルを見て、ふたりに言った。

「何だ、それなら誘ってくれよ。」

良かったじゃない、エルミ。」

お袋さん、許してくれたんだ」

レグルが自分のことのように、嬉しそうに言う。

「え、あ、まだ黙ってようと思ったの。」

何かさ、みんなに知られちゃうと決心が鈍りそう。

出立の前の日に言うつもりだったのよ」

帝都でガルを待ち伏せして驚かすつもりでいたエルミは、苦しい言い訳をして、先に言ってしまったチエルを睨んだ。

「なんだ、それ。」

言ってること、滅茶苦茶だぜ。

そうか、エルミも行くのか。

寂しくなるな、この村も」

ガルはエルミの思惑など、まったく知らずに言う。

「何、そんなところで黄昏てんの。  
突っ立ってないで、座りなさいよ。  
せつかくだから四人で飲もう、ね」  
チエルがエルミの視線から逃れるように、二人に着席を促した。

「何だ、まだ決定じゃないんじゃないか。  
じゃあ、エルミは飛行士官を目指すんだ。  
レグルもだけど、騎兵軍と砂海軍、どっちを受けるんだ？」  
ガルは運ばれてきたエールを口にしてから、ふたりに聞いた。

チエルがレグルを先に見たことで自分の立ち位置を思い知らされ、  
ちよっとだけ沈みがちな気持ちをなんとか奮い立たせる。

解ってはいることだが、悪意のない、さり気ないチエルとレグル  
の振る舞いに、時々心が抉られる気がしていた。

「そうなのよ。」

落ちたらそれまでなんだけどね。

あたしは、砂海軍を受けるわ。

やっぱり、一昨年みたいなことがあると、ね」

最後は声を潜めてエルミは言った。

「俺も同意見だ。」

あのとときのナルミ少将の行動に、俺は憧れたね。

騎兵軍に入って立て直してやろうかとも思ったけど、あんな提督  
の下で働いてみたいぜ」

瞳を輝かせてレグルも続けた。

エルミが言ったあんなことは、二六三六年二月二六日に帝都を  
震撼させた、クーデター未遂事件を指していた。

ソル皇国騎兵軍内の皇王親政を望む派閥に影響を受けた一部青年将校は、財界と結びついた文民統制に不満を抱いていた。

彼らは、武力を以て元老重臣を殺害すれば皇王親政が実現し、政治腐敗と農村の困窮が収束すると信じていた。この考えの下、二六三六年二月二六日未明に決起し、彼らが所属している近衛歩兵第三連隊や歩兵第一連隊、重砲兵第七連隊等の一部を独断で動かしたのだった。

彼らは、内閣総理大臣、皇王侍従長、内大臣、大蔵大臣、騎兵軍教育總監の殺害を図り、内大臣、蔵相、及び教育總監を殺害した。また総理も一時殺害と発表されたが、周囲の機転で辛くも虎口を脱していた。

その上で、彼らは派閥首脳から騎兵相を経由してアッキカーズ皇王に親政革命を訴えた。

皇王は激怒したが、騎兵軍と政府は狼狽した。

青年将校に同情的だった騎兵軍の一部首脳が、騎兵相を通じて皇王に彼らの意を酌むよう上奏した。だが、これが却って皇王の怒りに油を注ぐ結果となる。

『騎兵軍が動かぬなら、朕自ら近衛師団を指揮し、叛乱軍を討つ』と皇王は宣言し、騎兵相に断固たる処置を求めた。

皇王自らの出陣を言われては、騎兵軍も腹を決めざるを得ない。

ついに彼らを叛乱軍として武力鎮圧を決意し、包囲して投降を呼びかけた。下士官や兵は、ただ上官の命令に従っただけであり、彼らの多くは友軍に包囲され動揺する。青年将校たちは徹底抗戦を叫び、皇軍相討つ惨劇を避ける方法はないと、騎兵軍首脳は絶望した。だが、皇王の討伐勅旨が宣せられ、今度は皇王から叛乱軍と断定さ

れた将校たちが絶望し、下士官、兵を原隊に復帰させ、一部は自決する。

しかし、大半の将校は法廷闘争を目論んで投降し、帝都を震撼させたクーデター未遂事件は表面上は幕を閉じたのだった。

襲撃を受けた総理、侍従長、内大臣がいずれも砂海軍大将であったことから、砂海軍省は激怒した。

砂海軍首脳は事件発生直後の二六日午前より、反乱部隊に対して徹底抗戦体制を発令する。それにより、砂海軍省の警備体制が、即臨戦態勢に移行した。二六日午後には、帝都砂海軍基地所属の砂海軍陸戦隊を、砂海軍省防衛のため急派する。さらに、第一艦隊を帝都に急行させ、二七日午後には戦艦『アーストロン』以下各艦の砲を帝都各所に布陣する反乱軍に向けさせたのだった。

この砂海軍省の行動は、帝都砂海軍基地参謀長ナルミ少将の意見具申によるものだった。

ナルミ少将は、四年前に砂海軍青年将校が起こした暗殺事件で、先を越されたと考えた騎兵軍がいつか暴発する恐れがあると睨んでいた。

いつか遠くない未来に予想される騎兵軍の暴走に備えるため、特別陸戦隊一個大隊を編成し、それを二回召集し顔合わせと訓練を行っていた。さらに軍人の教育機関である砲術学校から、兵員二〇人をいつでも砂海軍帝都基地に呼集できるように準備もする。この兵は、万一の時には砂海軍省に派遣し、大臣官房の走り使いや連絡に当たらせ、小銃を持たせて海軍省の警備に当たらせるものとしていた。

そして、仮に反乱軍が宮城に乱入した場合に、皇王を御召艦『アロン』まで避難させることを考えていた。そのために、軽巡洋艦『



スダール』艦長に、昼夜風雪の如何に関わらず帝都に急航できるよう研究すべし、と極秘に命令した。

ナルミ少将は情報収集のために、新聞記者とも懇意にしていた。新聞記者も誠実な少将の人柄を慕って、情報を流したりもしている。事件の六日前頃に、帝都の治安維持を担当する警視庁の前で、騎兵軍少壮将校とその部下たちが夜間演習を行ったとの情報が記者から入った。騎兵軍の暴発が近いと予測した少将は、軽巡『スダール』艦長に連絡を入れ、特別陸戦隊の即応状態での待機を命じた。

そして二月二六日の朝六時頃に新聞記者より副官経由で事件の速報が入るや否や、帝都基地全幕僚の即時出勤を命じ、自身も基地に急行した。

この時に対しての準備は完了していたため、すべては滞ることなく行われ、混乱はなかった。だが、軽巡『スダール』の派遣は、皇王の不安を煽りかねないと、軍令部は出勤許可に慎重な姿勢を取ってしまう。しかし、即応体制で待機していた特別陸戦隊は、二六日午後には海軍省に到着していた。騎兵軍が決起部隊をどう判断するか、煮え切らない態度を取っていた頃、迷うことなく反乱軍と断定した基地司令長官コーセイ中將も、ナルミ少将が作成した訓示に一言の訂正も加えずに許可している。

このときの判断についてナルミ少将は、皇王が叛乱軍と断定すると信じ、一片の迷いもなく果断に行動したのだった。

レグルは、新聞や魔導放送等のメディアや、人伝に少将の行動を聞き、憧憬を抱いていた。

「ふたりとも、砂海軍士官様か。」

エルミ候補生、レグル候補生の監視を、よろしくお願いいたしますっ」

楽しそうに話すふたりを茶化すように、チエルが言った。

「私だけで？」

目が届かないわよ、校舎も寮も違うんだから。

ガルにも頼んどきなさいよ」

エルミが笑いながらチエルに言い返した。

「そうね、ガルもお願いでき」

「俺は村に残るよ」

「えっ!?!」

「……」

「う、そ?」

チエルが言いかけた言葉を遮ったガルの一言に、チエルが聞き返し、レグルは黙り込み、エルミは呆然と言葉を漏らした。

「いや、だから、俺は村に残るって。

おい、レグル、以前から言ってるだろ?

なんだよ、俺を叩き出したかったのか、チエル?

エルミ、決め付けるなよな」

一気にしらけた座を盛り上げ直そうと、ガルがおどけて見せる。

やっぱり、という表情で、驚いていないレグルはともかく、チエ

ルとエルミが口を開けたままで固まっていた。

「なんだ、ガルは残るのか」

体中の力が抜けたように、エルミが呟く。

表情がすっかり曇り、さっき出会ったときの快活さが消えていた。

もっとも、飛行士官学校も士官学校同等の外出しかできないため、

一緒に帝都に行けたところで毎日会えるわけではないことは理解していた。

それでも近くに想い人がいるというだけで、どんな苦しい訓練にも耐えられると、心の支えになるとは思っていた。

「残念そうだな、俺に気でもあるのか、エルミ？」

ちよつとだけほつとした表情で、ガルが茶化すようにエルミに言った。

ガルはエルミが自分に好意を持っているなど、夢にも思っていないなど。それ故に軽い気持ちで、エルミにとっては残酷な一言を、なんの躊躇いもなく口にできたのだった。

「そんなわけないでしょう。」

あんまり、自惚れるんじゃないわよ」

エルミは笑いながら言い返すが、どこことなく顔が引き攣っているようにガルには見えた。

まだガルに自分の気持ちは知られていないとエルミも思っていたが、まさかの一言につい気のない振りをしてしまった。

「叩き出したいなんて思ってないからね。」

ごめんなさい、てつきりレグルが引き摺っていくもんだと思って「エルミの心情を思って、チエルがガルの意識を引き付ける。」

レグルの帝都行きは決定事項だったが、きっとガルも一緒だろうという憶測が誤信に変わり、少女はふたりともその前提でものを考えていた。

中等学校に通っていた頃と違い、それぞれが仕事を抱えている現在では、毎日話し込むということはなくなっていた。それが事実確認を困難にし、決め付けから当人に聞くまでもないとの思い込みに

繋がった。エルミは帝都でガルを待ち伏せするつもりでいたので、たまに会った際にも帝都のことなど億尾にも出さなかったことが、さらに事態を悪化させていたのだった。

「まあ、いいさ。」

俺も、今は行かないってだけで、大学校には行く。

親父がさ、どついう風の吹き回しか、大学に行けって言い出してな。

これからは鍛冶屋も学がなきゃいかんって。

だから、高等学校の受験だよ、これからな」

漸く座がほぐれてきたと感じ、ガルは少し饒舌に戻ってきた。

「なんだ、結局ガルも出て行っちゃうの。」

寂しくなるなあ。

あたしだけか、村に残るのは」

ほっとしたような、寂しそうな、どちらともつかない顔でチエルが言った。

「早くて二年後かあ、ガルが帝都に出てくるのは。」

そのときは、私が帝都を案内してあげるからね」

嬉しそうな表情でエルミが言う。

チエルの目には、これ以上の幸せそうな顔はないように見えた。

「安心しろ、チエル。」

大学を卒業したら、俺は帰ってくる。

チエルだけに寂しい思いはさせないさ。

レグルに頼むよ。

エルミだと、どこに連れて行かれてなにを買わされるか解らん」

ガルは、レグルの前だけに真剣な表情では言えず、わざと声の調子を変え、芝居がかった口調でチエルに言った。

その後、一際おどけて、声を哀れっぽく震わせてエルミに言う。

「酷い、酷いわ、ガル。」

「こんな、いたいけな女の子を捕まえて、詐欺師扱いなんてわざとらしくエルミがテーブルに顔を伏せ、四人に初めて心の底からの笑いが出た。」

「じゃ、俺はチエルを送っていくから。」

エルミのことは頼むぜ、ガル」

勘定を済ませ、酒場から出たところでレグルがガルに言う。

「いやいや、いつもならそれで良いが。」

今日はダメだ。」

チエルを送るのに俺たちも付き合うから、そのあとエルミを送るのに付き合ってもらおう」

僅かに笑みを浮かべるレグルとチエルに、これから殺し合いにでも望むかのような真剣な表情でガルが言う。

「しょうがない。」

ガルも顔が赤いしな。」

今回だけだぞ、邪魔なんだからな」

内心で俺たちがな、とレグルは続けた。

チエルも同じことを考えたか、レグルの言葉に大きく頷く。

エルミは、ガルの背中中で幸せそうに、意識を失っていた。

エルミは、ガルも帝都に遅れてくることに安心したのか盛大に飲んだくれ、まさに泥酔というまでいつてしまっていた。金がないこともあり、食べるより飲む方に偏ったことも大きな原因だ。

仕方なくガルが背負っていくことになったのだが、夜道で何かあ

つてはとレグルにも同行を頼んだのだった。エルミの控え目な胸であつても背中にも密着していれば、その存在をしつかり主張している。その感触にどきまぎしてしまい、ガルはすっかり冷静さを失っている。

顔が赤いのは、決して酔いのせいだけではなかった。

チエルを家に送り届け、ガルとレグルはエルミの家につながる道を歩いている。

その道すがら、ふたりはこれからの夢を語り合った。もちろん、ガルはエルミを背負つたままで、エルミは完全に酔い潰れて意識を取り戻す気配もない。力の抜けた人体は思った以上に重く感じ、ガルは腰を折り曲げて歩く羽目になっている。ただ重いだけではなく、そうしていないとエルミが掴まれない状態では、身体を支えられないという切実な理由が大半だった。

それでも身体を酷使する仕事を幼少の頃から手伝っていたおかげで、辛くはあるが、責め苦になるほどではなかった。

エルミの胸の感触がすべてを帳消しにしているなどは、口が裂けても言えないガルだった。

「こいつは飛行士官を目指すみたいだけどさ、レグルはどんな士官になりたいんだ？」

ガルが疲れた口調で聞いた。

普段以上に体力を使っているだけでなく、そのせいで酔いの回りもいつも以上だ。

「そうだなあ。」

ナルミ少将とか、ゴトム中将、コーセイ中将かなあ」

ガルが挙げた三人は、軍縮派であり、対オリザニア戦に対しては

反対の立場を取っている提督たちだ。

「いや、そういうことじゃなくさ。

砲術とか砂雷とか、潜砂とか航空とかだよ。

「ただ、その三人が拳がってくるなんて、お前宗旨替えしたのか？」

ガルは理想像を聞いたのではなく、専攻を聞きかかった。

戦功を立てて出世してやると言っていたレグルから、その三人の名前が出るとは思っても見なかった。出るとすれば見敵必殺の武将与謳われるオーキキ少将やガクハル少将、爆撃や雷撃の神様とも呼ばれるコウモ、ジュージの両少佐の名が拳がると思っていた。

「ああ、そっちの話か。

そうだなあ、やっぱり砲術だろ、常識的に考えて。

あと、俺はそんな好戦的じゃないからな。

いろいろ考えたさ、俺なりに。

メデイエータでの騎兵軍の振る舞いを見るにつけ、やっぱり軍は皇民を守るためにあるってな。

戦いを広げるためにあるんじゃないやねえって思ったわけだよ」

身軽なせいとか、程良く酔いが回っているせいとか、レグルの口は滑らかだった。

一朝事あれば銃を取ることに異存はないが、軍とは平時を維持するための抑止力であるべきだ、というのが対オリザニア避戦派の考え方で、レグルは自分なりにその考え方に辿り着いていた。

「そうだよな。

いくら俺が鍛冶の技や知識を身に付けても、鉄がなきゃ話にならないからな。

鉄が出ないこの国は、鉄が出る国を占領するんじゃない、仲良くして安く売ってもらわなきゃな。

いくら占領したって、運ぶには金が掛かる。

占領軍を維持するより、買ったほうが安そつだもんな」

レグルの変わりように驚きながらも、苦しそうな息の下でガルは言った。

だが、苦しそうな息は、ガルだけではなかった。

エルミの息遣いが荒くなり、ガルの背中の上で何度か大きくえづいた。

次の瞬間、エルミは盛大に胃の中身を吐き戻し、同時にガルの悲痛な悲鳴が夜気を引き裂いた。



## 第7話 遠く離れる者

「ガルちゃん、本当に済まなかったね。

後でうちの莫迦娘には良く言つて聞かせとくから、勘弁しておくれよ」

エルミが大失態を演じた翌朝、ソル皇国民の義務である宮城遙拝の後、ガルはエルミの家で朝食をご馳走になっていた。

もちろん、重度の二日酔いとなつたエルミも叩き起こされ、遙拝に引きずり出されていた。

だが、目の焦点すら合わないエルミはなんとか遙拝を済ませたが、朝食を取ることなど無理だった。遙拝の後、布団に這いずっていくことすらできず、三人で運んでいったのだった。

ガルはそこで家に戻ろうとしたが、朝食くらい食つて行けと言うエルミの父に引き留められていた。

「いえ、おばさん、大丈夫ですから。

俺の方こそ、風呂に入れてもらつわ、泊めてもらつわ、服はおじさんのを貸してもらつわ、その上朝御飯まで」

ガルは、さすがに湯上がりで深夜寒風吹き荒ぶ中帰すわけにはいかない、エルミの両親に昨夜から引き留められている。

昨夜の悲劇は、幸か不幸かつまみを頼む金がそれほどなかったため、エルミの胃の内容物はほとんど液体、それも胃液だったおかげで、ガルの服は外套だけ洗濯すればよかった。

すっかり眠り込んだエルミを母が始末し、その間に父が風呂を焚き直していた。いくら何でも娘が服を汚したまま帰せないと、ガルは半ば強引に外套を引き剥がされ、そのまま湯殿に押し込められて

しまった。そこまですてもらっては無碍に断るわけにもいかず、被害を受けなかったレグルに伝言を託して、その夜はエルミの家で厄介になっていたのだった。

自宅とは違う味わいの味噌汁をすすりながら、ガルは昨夜のことを思い返していた。

当然、思い返す内容はエルミの胸の感触であり、どうしても顔が赤くなってしまう。風邪でも引かせたかと心配するエルミの両親に、途轍もない申し訳なさを感じ、ガルは何とも言えない居心地の悪さに苛まれていた。

「ご馳走様でした。

俺、そろそろ帰ります。

エルミによろしく伝えて下さい」

食うだけ食って帰るのは不躰とは思いつつ、エルミが起きてくる前にガルは逃げることにした。エルミに合わせる顔がない。ガルはそう感じていた。

「そうかい、エルミに謝らせたかったんだけどね。

済まないね、ガルちゃん。

レグルちゃんにも、そう言っといておくれでないかい」

前掛けで手を拭きながら、台所から出てきたエルミの母が言った。

「試験前に、怪我でもされなくて良かったよ。

ああいう娘だ。

済まないが、少し気を付けてやってくれ」

困り顔でエルミの父が言った。

「はい、すいませんでした。

俺たちがもつと気を付けていれば、あんなことにはならなかったと思います」

確かにエルミを止められなかった、ガルたちの落ち度でもある。

エルミの父は自分たちに文句を言いたいのだろうと、ガルはそう考えていた。

いくら幼馴染みであるとはいえ、嫁入り前の娘を前後不覚になるまで飲ませてしまったのだ。たまたま無事連れ帰れたからいいようなものの、傷ものにもしていたら一生掛けても償いきれない。

ガルは、後ろめたさも手伝って、素直に頭を下げた。

「そんな済まなそうな顔しなくても大丈夫だ、ガル。

何かあつたら、お前さんが嫁にもらってくれたらいいんだからな。

お前さんなら、エルミに嫌はないだろう」

あまりに深刻そうな顔に見えたのか、エルミの父はそう言って大笑いした。

確信はないが、エルミの恋心に多少気付いていることもあって、ガルをからかってみたのだった。

「おじさん、からかわないで下さいよ。

俺なんかじゃ、釣り合いませんって

鍛冶屋と土官様じゃ」

ガルは軽くかわして、食器を片付けようと立ち上がる。

「そのままにしといておくれ、気を使わなくて大丈夫だよ。

今度ガルちゃんからも、言ってくれないかね。

魔法ばかりじゃなく、少し一般教養の方も勉強しろって」

エルミの母がガルを制止して、手早く食器を片付けながら言った。

エルミの帝都行きは、家族総出で母を説得し切っていた。

母は、エルミが初めて見せる真剣な表情に、ついに首を縦に振った。戦争に面と向かって反対できない、この時代の空気に飲まれてしまった部分もある。次兄の前で、その人生を否定するようなことは、さすがに言えなかったのだった。

「ご来光を拝みながら、母はエルミに帝都行きを許すと伝えていた。

駐在から、エルミの魔法使用許可を取り付けたのは、母だった。

人が居住する地域での魔法の使用は、書面での申請が必要だ。使用目的、行使する魔法の種類や魔力が発現する空間と時間を書式に従って文書を作り、周囲の居住者や土地所有者の同意書と併せて提出し、許可を得なければならぬ。

「ご来光の場に居合わせた駐在に、細かく話を聞き、新年際が終わるや否やすべての手続きを済ませていた。

エルミは喜び勇んで難易度の高い魔法の習得に励んでいたが、一般教養の勉強は苦手だった。

母はそれが心配でならず、ガルからも発破をかけて欲しいと言ったのだった。恋心を抱く相手の言うことであれば、年頃の少女には親が言うより聞くだろうと思つてのことだ。

母は、娘の気持ちには、とつくの昔に気付いていた。

「はい、今度会うときには、よく言つておきます。

それじゃ、ありがとございました」

ガルは、そう言つてエルミの家を逃げるように辞去した。

帰る道すがら、ガルが思い返すのはエルミの胸の感触のことばかりだ。

それどころか、背負つたときに感じたエルミの匂いまで、鮮明に

思い出している。酒臭い中に仄かに匂った若い女の香りに、ガルはまだ鼓動が速まるのを感じていた。

「ガル。」

ガルってば「

すっかり葉の落ちた銀杏の巨木の陰から、エルミが声を掛けてきた。

「エルミ？」

どうしてここに？

寝てたんじゃないのか？」

どうしてエルミが自分を先回りできたのか、ガルには理解できなかった。

「抜け出してきたの」

エルミが小さな声で答えた。

「なんで？」

また余計に怒られるような真似を「

ガルは、今あまりエルミと顔を合わせていたくなかった。

わざとそっぽを向いて、素っ気なく答える。怒っているわけではなく、どうしようもないほど気恥ずかしかった。

「怒ってない？」

エルミは、ガルの振る舞いが怒りに因るものと思ったのか、いつもの快活さが影を潜め、なんとかガルの目を覗こうとする。

だが、やはり気不味いのか、銀杏の巨木に隠れるようにしたままだった。

「いや、怒ってない。

怒ってないよ、エルミ。

な、だから、泣くな、エルミらしくない」

覗き込んできたエルミから目を逸らそうとした瞬間、エルミが泣き出したのを見てガルは慌てた。

自分の中の邪な考えを見透かされたように感じて、ガルは必要以上慌ててしまった。必死になってエルミを宥めるが、怒っていないと否定する語気が強くなり、悪循環に陥っていた。

「ごめん、エルミ。

俺、昨夜、エルミをおぶってるとき、尻触りすぎた。

勘弁してくれ」

ガルは、盛大に誤解していた。

嫁入り前の娘がやらかすには盛大すぎる失態は、まる一日お説教の上に、間違いなく当分の間の外出禁止が言い渡される。

それが解っていて家を抜け出してくるのは、怒り以外にないとガルは途中から勘違いした。エルミの涙はガルが怒っているというより、自身の怒りに因るものとガルは思い込んでいた。

「へ？

そうなの？

全然解らなかつたわよ。

そのことはあとで、じっくりと伺いましょうか、ガル」

余りに意外な展開にエルミは呆気に取られ、思わず素っ頓狂な声が出た。

「え？」

しまった、という顔になったガルが何かをいう前に、エルミは改

めてガルの顔を覗き込んだ。

「嬉しかったの、ガルも帝都に来るって。

やっぱり、寂しいもの。

私、知らない人ばかりの中で、ずっとやってくのは不安なの。

チエルには悪いけど、ガルが会えなくても、帝都にいてくれるだけで心強いよ。

二年すればガルが来てくれるって思えば、頑張れるって思ったの。それで、夕べは飲み過ぎちゃって。

ごめんね、いっぱい迷惑掛けちゃって。

私のお尻をいっぱい触ってたんだから、それでおあいこにして「エルミは嬉しそうな笑顔で、一気に言った。

それだけ言うその後ろを向いたエルミは、もう一度ごめんねと言って駆けだしていった。

安息日一日を使って、レグルは身の回りの整理をしていた。

いよいよ明日は、帝都へ旅立つ。エルミの伯父から、快く迎えてもらえることになっていた。先般のクーデター未遂事件は、理想に満ちた少壮将校が皇国を思うあまりの暴走と解釈され、皇民の間では好意的に受け止める者も少なくなかった。特に身内に騎兵軍がいる者は、無意識の保身も手伝ってか否定的な者はほとんどいない。

そのおかげもあってか、レグルが士官学校を受験するための帝都行きならと、エルミの伯父は全面的に協力してくれると言ってきたのだ。

昼食の時間を過ぎた頃、幼い妹のリーンがレグルに声を掛けてきた。

「兄ちゃん、お腹空いた。」

「ご飯どうするの?」

この日は安息日にも拘わらず、両親は働きに出ている。

食材を扱う店は、近隣の取り決めて安息日の営業当番がある。

この日はたまたまレグルの家が、その当番に当たっていた。そのため、両親はいくらかの昼食費を、ふたりのために置いていつている。

「お姉ちゃんのところに行くぞ」

レグルは他の選択肢を与えず言った。

元々両親同士が同世代で仲が良かったこともあり、当番に当たった日にはチェルの宿で食事するのが当たり前になっている。

観光客など来るはずもない辺鄙な村で、安息日に客が来るなど年に数回もない。食堂も、当然開けていても開店休業だ。だが、レグルをはじめとした近隣の子供たちの面倒を見る者がいないため、チェルの宿は昼食の時間に食堂を開放している。そのせいあってか、レグルとチェルは物心ついた頃から、食堂の角で一緒に遊んでいた。そのまま兄妹のように育ち、思春期を迎えて男女を意識する頃には、当たり前のように付き合い始めていた。

家で昼食を取っていたガルとは、小学校からの腐れ縁だが、レグルとチェルの縁は腐れ方の年季が違っていた。

リーンにとっても、チェルは違う家に住んでいる姉という認識だった。

「うん、早く行こうよ」

リーンもそれに嫌はない。

どこへ行くのかという問いではなく、いつ行くかという問いだった。



「挨拶、がてら、な」

私物を詰めた行李を積み上げてから、レグルはリーンの手を曳き、チエルの宿へと向かった。

「いよいよ、明日だね」

定食のプレートをふたりの前に置きながら、チエルは笑顔で言った。

「ああ、暫く寂しい思いをさせちまうが、勘弁してくれ。早くて五年。」

中尉になつたら迎えに来る」

こちらも笑顔で、レグルは答える。

昼時は過ぎているとはいえ、チエルの宿はそれなりに混雑している。

普段であれば、昼食時の混雑が終わるや否や、すぐに客を迎える用意が始めなければならぬ。

全館を掃除しなおし、それぞれの備品に不具合はないか確かめ、風呂を沸かし、夕食の仕込みが始まる。その合間に賄いをつ込み、足りない物を買出しに行く。とてもゆっくりレグルの相手をしている暇はない。しかし、安息日から宿泊するような客はほとんどなく、この日の夜は商用の一組だけでそれほど忙しいわけではない。それを分かっているが故に、レグルは最も混雑する昼時を避け、そろそろ一段落する頃を待っていたのだった。

「そんな慌てなくてもいいじゃない。

リーンなんか、まだ半分も食べてないし」

苦笑いしつつ、チエルがレグルの前に熱い茶を置きながら言った。

「リーン、ゆっくり食べてろよ。」

リーンに合わせて喰ってたら、お前と話す時間がないじゃないか。あとは、俺たちだけだろ、片付けるのは？」

半分笑ったような、怒ったような口調でレグルが返す。

「うん。」

もうレグルたちだけよ。

リーン、今日は暇だから、慌てなくていいからね」

チエルは、慌てたように食べ物や口を詰り込み始めたリーンに優しく言って、リーンの横、つまりレグルの真正面に座った。

「なあ、チエル。」

ガルなんだけどさ」

そこまで言ってレグルは言葉を飲み込んだ。

気を付けてくれよ、と言いたかったのだが、どことなくぽーっとしたチエルに意味が解るか不安だった。

チエルは人の心の機微に鈍いところがあり、ガルの恋心に気付いていない。もちろん、人並みの気遣いはできるし、レグルから見れば他人を思いやる心は却って強いとも思える。他人のことなど考えられず、大切にしている花畑を無神経に踏み荒らすようなことは、絶対にない。

ガルの人となり不安があるわけではないが、こと恋愛となれば話は別だ。ガルはレグルにばれてないと思っっているのだろうが、チエルの名前が出るたびに目が泳ぎ、四人で合うときにはどことなく苦しげな表情でチエルを見ている。傍から見ているバレバレの行動だ。かと言って、ガルがチエルに近づくことを禁じる方法もない。余計なことを言っただけでチエルに嫌な思いもさせたくない。ふたりの間

に、気不味い雰囲気を残したくはなかった。  
つい口を出してしまった言葉に、レグルはどう続けようか悩んでしまった。

「ガルがどうかした？」

レグルの予想通り、チエルの顔にはなんのことやら、と書いてある。

「あ、いや。」

俺たちふたりが出て行ってしまつて、焦るといけないな、と思つてな。

ちよつと気を付けていてやってくれ」

解るわけないよな、と思いつつレグルは何とか言葉を紡いだ。

それから他愛のない話に終始し、リーンが食事を終えたところでレグルは席を立つ。

「じゃ、ご馳走様。」

おじさん、ご馳走様でした。

ちよつとエルミのところへ寄って行くから、今はこれで。

あとで、また来るよ」

レグルはリーンの手を曳いて、チエルの宿を出ようとした。

「うん、よろしく言つといて。」

あの様子じゃ、まだ寝てるかもね」

死体のように担がれて去っていった昨夜の様子を思い出し、チエルは笑いを堪えながら言つた。

「親父さんに蹴り起こされてんだろ、いくら何でもさ」

レグルも笑つて答え、エルミの家へと向かつていった。

「こんにちは。」

エルミはいますか？」

戸口の前でレグルは家の中に声を掛けた。

家の中からは、エルミを怒鳴りつけ、叱り飛ばす声が響いている。やがて戸が引き開けられ、怒りのためか顔を真っ赤にしたエルミの父が出てきた。

「おお、レグルか。」

ちよつと待つてる。

リーンも一緒か。

母さん、お茶と、エールか、レグル？」

エルミの父が、家の中に声を掛ける。

エルミの父は、娘ともに帝都へ出る少年を頼りにしていた。チエールとの間柄を知っている故に、娘の結婚相手にとまでは望んでいないが、年の割りにはしっかりした少年は娘にとってどれほど心強い存在になり得るか、父は期待している。

「まだ、片付けが済んでないんです。」

今からエールは、さすがに。

飲みたいんですけどね」

エルミの母が運んできた茶を受け取り、レグルは答えた。

「エルミに用かい？」

昨夜は悪かったね、うちの莫迦娘が迷惑掛けて。

帝都へ行っても、見捨てないでおくれよ」

上がり框に茶を置いて、エルミの母が申し訳なさそうに言った。

前後不覚なるまで娘が泥酔するようなことがあれば、その連れに文句のひとつも言うところだ。

だが、父に似て悪のりしやすい我が娘のやることだ。周囲の制止を振り切って飲み過ぎたことは、想像に難くない。母は、その部分に関しては、諦めきっていた。

「少しは気を付けてやってくれ。」

帝都はここより物騒だからな、レグル。

もつとも、士官学校ではそんなこととしてられないか」

朝ガルに言ったことと同様に、エルミの父は少しだけ文句を言い、雰囲気が悪くならないように言葉を続けた。

「はい、申し訳ありませんでした。」

帝都でも充分気を付けます。

エルミは、まだ起きられませんか？」

暴走を止められなかった後ろめたさも手伝って、レグルは素直に頭を下げた。

「まだ、頭が痛い気がする」

軽く頭を振りつつエルミが言った。

「そりゃあんだだけ怒られて、怒鳴りつけられればな」

呆れたような、笑いを噛み殺しているような表情でレグルが答えた。

「とにかく感謝するわ。」

ようやく解放されたのよ。

ガルに謝りに行って帰った後、ずっとだったんだから。

お昼も抜きよ」

うんざりと言った表情で、エルミがつぶやく。

「当たり前だ。

年頃の娘が意識不明になるまで泥酔して、男に背負われて帰ってきたんだぞ。

本来なら、俺もガルも親父さんに殴り倒されても、文句は言えない状況だぜ。

その上、今度は朝から行方不明ときたもんだ。

飛行士官の受験を取り消されなかつただけ、ありがたいと思え」さつきとは一転して、心配そうな真剣なレグルの顔があった。

「で、私に用があつたんでしょ？

いいの？

チエルを放つておいて。

レグルは、もう明日は帝都に行っちゃうんでしょ？」

風向きが怪しくなったところで、エルミは話題を強引に変えた。

レグルの来訪は、昼食抜きでお説教責めに遭っていたエルミを、図らずも救い出してきた。

だが、その救い主までが説教を始めそうな気配を感じ、エルミは慌てて話を逸らした。もつとも、エルミの不用意な物言いが、レグルにまでひとこと言わずにはいられないという気持ちを煽っていただけだった。

「ああ、それなんだが。

お前、ガルに黙って行くつもりか？」

レグルの物言いは、単刀直入だった。

ひとつ年上の幼馴染みの恋を、応援したい気持ちはもちろんだ。しかし、ガルに恋人ができれば、チエルのことも安心だという打算があることを、レグルは否定しない。幼馴染みの恋心を利用する心苦しさはあるが、結果として丸く治まるなら悪いことだとは思わなかった。

この先も、四人がわだかまりなく付き合っていけるかどうか、エルミ次第だとレグルは考えている。

「な、なんで、レグルがそれをつ！？」

チエルから聞いたの？」

顔を真っ赤にしてエルミが聞いた。

ガルに対する恋心は、今のところチエルにしか打ち明けていない。情報の漏洩元は、そこしかないはずだ。

「いや、誰でも知ってる。

気付いてないのは、ガルだけだ」

何を今さらという顔で、レグルは言った。

「う、そ……

誰でも？」

信じられないという顔のエルミが、やっとのことでレグルに問い返す。

「ああ、誰でも。

お前、普段の言動には、もうちょっと注意を払えよ。

今は好いた惚れたで良いけどさ、いずれ士官になって機密に触れるようなことがあれば、敵に宣伝しかねないぜ」

レグルはばつさり言い捨て、一応注意を促す。

「決心は、したつもりだったのよ。」

帝都行き理由はそれだし。

まさか、今はガルが残るとは思ってもいなくて。

そしたら、決心が鈍ってね。

だって、振られたら帰ってき難いし、帝都にガルが出てきても会えないんだよ？

やだよ、そんなの」

今にも泣き出しそうな顔で、エルミは言った。

「言ってみなきゃ判らないだろ、そんなこと。」

なんで振られることが前提なんだよ？」

自分には恋人がいる余裕からか、レグルは少々残酷なことを言うてしまった。

「判るわよ。」

ガルの気持ちくらい。

ガルが、チエルのこと、好きだって、ことくらい」

自分の気持ちに整理をつけるように、エルミはひとつとずつ、確認するように言った。

「気付いてたのか？」

今度はレグルが言葉を失う。

ここまでの発言では、エルミを利用しようということだと思われなくても仕方ないことだ。

「チエル以外、誰でも、ね」

してやったりという顔で、エルミが言う。

「すまん、エルミ。」

俺、お前の心を踏みにじるようなこと言ってた。



お前の気持ちを利用しようとしてた」  
思わずレグルは、その場に膝を突いた。  
どう言い繕おうと、百万の言葉を弄しようと、すべては言い訳で  
しかない。

「いいのよ、レグル。」

私の気持ちがガルに通じれば、丸く治まることだもの、ガルの本  
心以外はね。

あなたは悪くないと思うの。

私の背中を押してくれるのが、たとえあなたのためにでも、私に  
は嬉しいことだもの。

だから、顔を上げて、レグル」

がっくりとうなだれるレグルの前に膝を突き、エルミは言葉を紡  
いだ。

「ありがとう、エルミ。」

やっとそれだけ言うと、レグルは顔を上げた。

「私、決めた。」

やっぱり怖くてガルには告白できない。

ごめんなさい、せっかく背中を押してもらったのに。

でも、ガルが帝都に出てきたときに、振り向いちゃうような良い  
女になってみせる。

ガルが惚れちゃうような、飛行士官になってみせるわ。

ありがとう、レグル」

瞋を決して、エルミは宣言した。

そこには、いつも見せる子供っぽさや、無分別な危うさは一切な  
かった。

「俺を、許してくれるのか？」

レグルは、エルミに対する申し訳なさに、打ちひしがれていた。

「許すも何も、怒ってもいないよ、私は。」

あなたがチエルを信じてあげなきゃ、ね。

心配ないよ、チエルはレグル一筋なんだから。

ガルにはかわいいそうだけど、ね」

そう言っただけ、エルミの瞳が潤んでいる。

「そうだな。」

俺がチエルを信じなきゃ、誰が信じるんだってことだよな。

ありがとう、エルミ。」

これで、心おきなく帝都へ行けるよ。

チエルも、ガルも信じてな」

いつもの顔に戻ったレグルが言った。

「そうそう。」

それでこそ、レグルよ。

私は、次の安息日に行くから、そしたら帝都で会いましょう。

そのときは、どこか美味しいものでも食べに連れて行って。

それくらいは、チエルも許してくれるでしょ？」

悪戯っぽく笑って、エルミは返した。

「分かった。」

伯父さんに聞いておくよ。

安いところだけだな」

そう言っただけ、レグルも、ようやく笑った。

「ダメ。」

レグルが探しておいて。

そうすれば、帝都でチエルの宿の味に近いものが食べられるでし

よ。

この村のこと、思い出せるように、ね。

さあて、お説教の続き、聞いてくるわ。

レグルも、早く帰ってリーンとお話してあげて。

私、兄さんが帝都に行く前、もっと話しておけばよかったって、  
今でも後悔してるんだから。

じゃあ、次の安息日の夜、帝都でね」

エルミは、レグルの返事を待たずに背を向ける。

背中越しに手を振り遠ざかる姿に、レグルは深々と頭を下げた。

## 第8話 ここに残る者

太陽暦二六三八年一月一〇日。

ガルたちが住む村にある浮遊車駅に、一団の人だけがあった。

「じゃあ、行ってらっしゃい。」

試験が終わったら、一度は帰ってくるんでしょ？」  
浮遊車の中でチエルがレグルに言った。

「ああ、すぐまた帝都に戻るけどな。」

一度帰ってくる」

レグルは、自分が試験の落ちるなどとは、欠片ほども考えていない。  
い。

「しっかりと勉強して、恩賜の短剣いただいて来い」

父が、最後の発破をかけた。

士官学校の卒業時、成績優秀者の上位一割程度に皇王からの恩賜の品が与えられる。

現在は短剣が下賜されているが、かつては銀時計や双眼鏡であったりもした。どんな物であれ、恩賜の品は将来を約束する証でもあった。

砂海軍三頭職を目指すのであれば、恩賜の品はなくてはならない物と言える。

簡素なプラットホームには、村長をはじめとした村の主だった者たちが、ソル皇国国旗を手にそのときを待っていた。

ローカルな路線であり、運転手もチエルの宿に泊まる常連だった

ためか、乗車券無しで見送りの人々が車内に入ることを見送っている。もちろん狭い車内にすべての人々が入れるはずはないので、両親と妹のリーン、恋人であり事実上の許嫁であるチエル、幼馴染みのガルとエルミだけだ。

その五人が浮遊車から降り、定刻になって浮遊車がゆっくりと浮き上がる。

期せずして拳がる万歳の声に、レグルへの期待が込められていた。誰もレグルが士官学校の受験に落ちるとは、露ほども考えていない。一位とまでは思っていないにせよ、中堅どころは死守するだろうと見ていた。レグルの出世は村の誇りとなり、周囲の村々に対して優位に立てるといふ大人の思惑も当然入り込んでいる。

車外の喧騒に、レグルは窓を開けて手を振った。

大人の思惑など、どうでもいい。自分の立場が揉め事の解決に役立つなら、自身の常識に照らして動けば良いだけだ。レグルは利用だけはされまいと、固く心に誓っていた。

浮遊車は殊更ゆっくり走り出す。

レグルが座る窓を追いかけるチエルたちが、走らなくて済むように速度を抑えている。今さら掛ける言葉のないガルたちは、帝都を案内しろだの、いつ帰省するだの、他愛のない言葉の遣り取りをしていた。

短いプラットホームは、浮遊車が通常の機動をすれば、あっという間に端まで行ってしまふ。

運転手は、たっぷりと時間を掛け助走をしていた。予め他の客にはこうすることの同意を得ていたため、文句を言う者などひとりもない。誰もが少年と少女たちの可愛らしい遣り取りを、自身の甘酸っぱい記憶や、枕に顔を埋めてのたうち回りたい記憶に重ねてみ

ている。

やがて、プラットホームが尽き、ガルたちは取り残された。

浮遊車を見送る三人は、短い別れであるにも拘らず万感の思いを胸に浮遊車を見送った。

ガルは、一〇日後に迫った高等学校の試験に思いを馳せ、エルミも同様に二週間後の飛行士官試験のことを考えている。チエルは恋人の無事と仲間の成功を願い、胸の前で掌を組み合わせていた。

三人が浮遊車を見送る視線の先は、広大な砂漠が広がっている。

もちろん、大東砂海ほどではないが、それでも徒歩で踏破するには命の危険が付きまとう広さだ。頻繁に吹き荒れる砂嵐は砂漠の砂を舞い上げ、吹き降ろし、常にその表面を流動的にしていた。一歩でも踏み出せば、蟻地獄に落ちたかのように脚が沈み込み、もがけばもがくほど抜け出すことは困難になる。僅かに歩行可能な部分であつても、快晴であれば太陽が容赦なく人々を日乾しにし、砂嵐が吹けばあつという間に埋め尽くす。村の周囲は魔鉱石が作り出す見えない障壁で守られているが、それがなければ激しい砂嵐がオアシスに吹き込み、人々の生活は成り立たなくなってしまう。

先人の英知が、現代の人々に文化的な暮らしをもたらしていた。

砂漠が人々を拒むもう一つの理由がある。

俗に砂漠の民と呼ばれる生物が、広大な砂海のおちこちになわばりを持つていた。

二足歩行である点は、ガルたちや他国に住む人種と同じではあつたが、言語を持たず、知性も低いと見られていた。好戦的で、万が一行き会えば集団で襲い掛かってくる。戦闘というよりは、砂漠の民の行動は狩りといった方が適切だった。

事実、砂海で遭難した浮遊車や浮遊船の乗組員や乗客の多くが、

砂漠の民に狩られ食われていた。

偶然なのか、人類とは違う知性や魔力を有しているのか、魔鉱石で砂上を浮遊しているのか、違う力なのか、砂漠の民は砂に沈むことがない。

太陽と砂嵐から身を守る衣服は着用しているが、遭難者から奪ったばらばかりだ。武器の類も携えてはいるが、戦技を身に付けているわけではなく、剣にせよ銃器にせよ力任せに叩き付けてくるだけだった。

武器というより、道具といったレベルだ。

彼らがなぜオアシスに侵攻しないのかは謎だが、魔力か魔鉱石の効力が反発し合って近寄れないのではないかと推測されている。

遭難者や冒険者のみを襲い、浮遊車や浮遊船には一切手出しをしてこないことから、そう考えられていた。

皇国や他の国家でも、国土の中に遍在する砂漠の民には手を焼いているが、オアシス間に横たわる砂漠に踏み込まない限り人的被害がないのであれば、積極的に討伐する理由を見出せずにいた。

鉄鉱石や魔鉱石といった資源採掘のために砂海に出る際には、当然魔鉱石による防護障壁を用意する。そうなれば砂漠の民は、手出しはできない。警告を無視して砂漠に出た者は、自業自得だ。困った存在ではあるが、事実上国家にとって障害でなければ討伐の理由はない。彼らも食うために遭難者を襲っているだけであり、侵略を意図していたり、人類に限って危害を加えているわけではなかった。それより、資源や国土を狙う他の国家の方が、よほど脅威だった。

オアシス間は浮遊車路線でつながれており、帝都まではいくつも

の路線を乗り継いで約半日の行程だった。

レグルは時折襲う砂嵐による浮遊車の揺れに身を委ね、将来に思いを馳せている。砂海軍に入り、艦隊勤務を命じられたなら、この砂嵐の中に身を晒すこともあるかも知れない。障壁や浮遊車の窓越しにしか見ることのない砂嵐がどんなものか、身を以て体験してみなかった。もちろん、今窓を開けるなどしたら、周囲の乗客から袋叩きにされた上に、次の駅で放り出されるだけだ。

レグルはそうなったときの自分の姿を想像し、小さく笑みを浮かべていた。

浮遊車は一時間ほどの行程で次のオアシスに到着した。

ここで別の路線に乗り換え、帝都への大きなターミナルがあるオアシスへ向かう。レグルの持っている切符は、村長が好意で買いつけた全線の座席指定券だ。それ故に乗り遅れなどしてしまえば、そこで身動きが取れなくなってしまう。分刻みのスケジュールを頭に叩き込み、プラットホームを間違えないようにしなければならぬ。レグルは、ふと来週帝都に出るといふ、脳天気な幼馴染みが心配になっていた。

レグルを見送った後、駅舎から吐き出される人の波に、ガルとエルミは流されていた。

チエルは昼時の仕込みがあるため、一足早く宿へと戻っている。浮遊車が見えなくなるまで見送った後、将来に不安と期待を抱いているふたりにちらりと羨望の視線を送ったが、それに気付いた者は誰もいなかった。

レグルは五年と期限を切ってチエルを迎えに来ると言っている。その頃にはアレイが宿の戦力として、十分な働きができるはずだ。



そうならばチエルがレグルに嫁ぎ、帝都へ出ることに障害はなくなっている。

だが、それは取りも直さず、アレイをこの田舎町に縛り付けることに他ならない。アレイは、まだ無邪気に宿を継ぐと言っているが、使命感や義務感から言っているわけではない。この世界で長男が家業を継ぐことは、常識ではある。だが、中等学校で広い世界の知識を学んだとき、彼が何に夢を抱くかまだ未知数だ。現に、田畑を他人に売り払い、帝都へ出る長男は多数いる。

しかし、チエルが家を出ることが確定した今、アレイは夢を見ることすら禁じられてしまったも同然だった。現状でチエルの宿が廃業することは、ここ以北への足がなくなることを意味していた。朝は早く、客の都合次第で休みも碌に取れない仕事に、それも帝都から遠く離れた辺鄙な田舎町で、わざわざ就こうという者がいるとは思えない。

宿に戻り、昼の仕込みを手伝いつつ、チエルはそのことばかりが気になっていた。

そして、チエルはもうひとつ、気付いたことがある。

自身に明確な未来図がないことだ。

レグルを好きな気持ちは変わらない。レグルの傍にいたい。レグルを支えたい。そういった気持ちは強いことは、確かだった。だが、自身が何かを為したい、何かになりたいといった夢がないことに気付いてしまった。

レグルが艦隊勤務になれば、一年のほとんどは砂海上で過ごすことになる。

訓練の間は、艦艇に寝泊まりすることが当たり前だ。整備のため帰港していても、部署によっては艦艇から離れられない。休養の期

間も当然当直任務はあり、艦艇に寝泊まりしなければならぬ。

いったい、一年のうち何日を共に過ごせるのか、その間何を心の支えにすればいいのか、その間何をすればいいのか、チエルはレグが帝都へ出て行ったときから不安に襲われていた。

漠然とした不安が集中力を奪い、コンロの火力を上げられないだけでなく、細かい包丁傷をあちこちに作ってしまった。

魔鉱石による火の発現があるおかげで、薪を用いずとも調理が可能だった。

オアシスの数少ない樹木を燃料にするわけにはいかないため、火の魔法に呼応する魔鉱石は生活にはなくてはならないものだ。

使用者の魔力に呼応して火を燃え上がらせる魔鉱石が、この日に限ってはくすぶったようにしか熱量を発しない。魔力の使用量に依りて行使者は水分を必要とするが、チエルは喉の渴きを感じていなかった。それは魔力が正しく行使されていないことを意味し、チエルの傍らに置かれた水桶がいつまで経っても補給を必要としないことが証明している。

「チエル、今日は休みなさい。

いや、休め。

そんなことでは、人様にお出しできるものは作れない。

気にするな。

そんな日も、ある」

大きな鍋に油を熱し、その中に素材を通しながら父が言った。

「お父さん、大丈夫よ。

できるわ」

だが、父の言葉に心を乱されたチエルのコンロは、完全に火が消えてしまった。

いくら精神を集中したつもりになっても、魔鉱石は反応せず、火が熾ることもない。魔力の行使に伴う水分の消費もまったくなく、身体が水を欲することもなかった。

「姉ちゃん、大丈夫？

あとは俺が手伝うよ」

下校してきたアレイが調理場に入ってくる。

「大丈夫よ、アレイ

まだ遊んでできていいわよ」

チエルは必死になって魔鉱石に精神を集中しようとしながらアレイに言うが、火は少しも反応してくれない。

「どうしたの、姉ちゃん？

いつもなら、すぐ手伝って言うのに」

アレイは驚いたような顔で厨房に入り、チエルを押し退けるようにしてコンロの前に陣取った。

余程チエルの心は乱れていたのか、アレイの才が開花しようとしているのか、交代しただけで魔鉱石が反応し、赤熱を始めている。

それを見たチエルは、肩を落としてアレイに場所を譲った。

「気に病むな。

さっきも言ったが、そんな日もあるんだ。

特に今日みたいな日は、な。

そろそろ食堂の方を開けるぞ。

チエル、今日はそっちをやってもらおうか」

父はチエルをからかうように言った。

今の状態は火を熾せない分、まだ救いがある。

これで火の暴走でも招いたら、厨房が焼けるくらいでは済まないかもしれない。チエル自身まだ気付いていないが、父はチエルの魔力の大きさを把握している。数ある魔法の属性の中でも、特に火の魔鉱石と相性がいい。まだ子供といって良い年齢故に充分に制御し切れていないが、いずれ魔鉱石を完璧に制御できるようになれば自分を遥かに超える料理人になれると、父は見ていた。

レグルが帝都に出ることは、チエルが帝都で店を持つチャンスが巡ってきたと父は考えている。

父が制御できる火力では、一般的な家庭料理の延長しか作れない。母の魔力はそれを遥かに上回り、メデイエータの料理法に匹敵する火力を作り出すことができた。だが、生来の体の弱さがその魔力に耐え切れず、現在ではほとんど寝たきりの状態だ。チエルとアレイには、父の頑強さと母の魔力が都合よく受け継がれていた。特にチエルは、魔力に特化した才能を持っている。アレイの才能も楽しみだが、チエルには帝都で料理人として勝負できるだけの才能があると、父は信じていた。

もし、アレイも出て行きたいというのなら、宿と食堂は人を雇えば良い。

絶対に家業を継がなければならぬなどという決まりは、父は作っていない。いずれ村の誰かが引き継ぎたいというのであれば、チエルやアレイが後を継がないのならそれもいいと考えていた。ここ十数年の技術の発達には、目を見張る物がある。観光名所でもなく各地への乗り換えでもないこの村が、長距離路線の通過駅にされるであろうことは、ほぼ確定のことだろう。

需要がなくなる宿をたたんで、駅舎に食堂を出すことを、父は考えている。

「不安は分かる。

どうだ、ひとつ料理を本気で勉強してみないか？

ま、今すぐというわけにはいかんがな。

アレイがもう少し体力が付いて、そうだな、中等学校に上がったらだな」

その夜、宿の夕食の後片付けが終わったあと、翌朝の仕込みをしながら父はチエルに声を掛けた。

そう言っつて父は仕込みの手を休め、宿の裏庭にチエルを誘った。

冴え冴えとした冬の星が今にも降り出しそうな空を見上げ、父は懐から出した安タバコに火を点ける。

チエルは父の仕草を見ながら、父の真意を探ろうとしていた。

「昨年の開戦で、帝都の隣にあるオアシスから、多くのメディーエータ人が国へ帰った。

あのオアシスには、メディーエータ料理の名店がたくさんあったんだ。

父さんの料理は、比べるのも恥ずかしいが、メディーエータ料理を手本にしているのは知っているな？

この宿である料理を作っていたのは、母さんの魔力あつてのものだからな。

いつか、お前をどこかの店に修行に出したい、そう、母さんと話しているんだ。

残念ながら、父さんの魔力では、あの火力を出すことは無理だ。

母さんの体力で、あの火力に立ち向かうのも無理だった」

父は、大きくタバコの煙を吸い込み、溜め息のように吐き出した。チエルは言葉を挟むことなく、父の話聞いている。

「お前は、その両方をうまく受け継いだ。

溢れる魔力と、かさばる体力だ」

チエルの深刻そうな顔を見て、父はわざとくだらない物言いをするが、見事に滑った。

「メデイエータと開戦したが、それでも残ってる店もあれば、ソル人が後を受け継いだ店もある。

人同士が憎しみ合おうと、旨いものは美味いんだ。

チエル、メデイエータ料理を本気で勉強してみないか？

もし、お前が望むなら、洋食でも同じことだ。

ここにいっても、野菜以外に碌な物は手に入らん。

父さんより才のある『お前たち』には、もつと腕を磨いて欲しい」

チエルは父の言わんとしていることを、理解できていない。

あまりの急展開に、意識がついていけなくなっていた。

「帝都にいる仲間に、話を付けておく。

そんな長くは出してやれないが、ひと月くらいならいいだろう。

レグルと一緒に、行ってこい。

来月は、毎年暇な時期だからな。

父さんひとりでも、なんとでもなるさ」

父がタバコをもみ消したとき、チエルの噁り泣きが聞こえてきた。

「ガル、自信はどうだ？」

夕食の後、父がぼそりと訊ねた。

「大丈夫だよ、父さん。

でも、特待生までは期待しないでくれよな」

教科書から目を離さず、ガルは答えた。

この世界において、高等学校への進学率は一桁を切っている。

高等学校、大学校、技術専門学校は、エリートの養成機関と位置付けられている。そのため、誰でも入れる明るい学校であっては、権威が伴わない。入学試験に難問奇問の類は出ないが、並みの頭脳では制限時間内に全回答することが困難なほどの問題数が出される。高得点での争いになるため、一問でもケアレスミスがあれば、即不合格に繋がるような状況だった。

そしてもうひとつ、庶民階層にとって高等学校への進学を躊躇わせる理由があった。

学費が高額。

エリートは良家の子女であるべきという理由と、良質な教師を企業に引き抜かれないようにと高額な報酬を保障するためだ。

もちろん、授業に使われる教材も安いものではなく、その都度徴収される。外国へ出た際に恥を搔かぬよう、給食には世界各国の料理が饗され、テーブルマナーを学ぶことも重要視されていた。結果として、年間の学費が庶民階層の年収を遙かに超え、経済的な理由で進学を諦めざるを得ない者が多数を占めていた。

当然、野に埋もれた人材を発掘するため、特待生や奨学金といった制度も用意されている。

だが、特待生は適用基準が入試の結果という数字でしかないため、事実上試験結果の上位者への報奨制度になり果てていた。つまり、家庭教師を雇えるか、最近台頭してきた受験予備校へ通わせることのできる裕福層への経費還元システムへと成り下がり、庶民階層から優れた人材を発掘するための制度としては形骸化されている。

試験で上位の成績を取ればいいのだが、受験のためのテクニクを教わった者の壁は厚かった。

授業料が存在しない騎兵軍や砂海軍の士官学校に、庶民階級の子

女が殺到することは必然といえる。結果として、士官学校は三〇倍近い倍率になり、合格率は数パーセントの超難関校になっていた。

ガルが父に言ったことは、そうだったことが背景にある。

もちろん、ガル自身は特待生とまではいかないが、奨学金は狙っていた。奨学金には、返済無用から短期返済まで、様々な形態がある。運営母体のほとんどが、裸一貫から財を築いた庶民階層出身の財閥や、開国前から財を蓄えていた貴族階層だ。自らの苦勞を省みて慈善事業として行っている財閥から、税金対策としている財閥や貴族など、理由は様々だが、将来優れた人材を配下に確保するためという動機は共通していた。

ガルが狙っているのは、審査が比較的緩く、高等学校なり大学校、専門学校を卒業後、運営母体の企業で数年間給料から天引きで返済する形態のものだった。

ほぼ終身雇用が当たり前の世の中であり、その財閥の系列企業に就職すれば、定年までに払い終えればよいため、月々の返済額はそれほど大きくない。もちろん、繰り上げての返済も可能だ。

財閥としては優秀な人材を確保できるメリットがあり、苦学生にとっては給料が一割程度安くなるだけで高等教育を受けられるメリットがあった。

財閥の系列企業に就職せずとも、返済額は変わらない。

先んじる列強各国に追いつき追い越せという、開国以来の気概はまだ健在だった。さすがにライバル関係の系列に就職すれば良い顔はされないが、それでも皇国の技術力や経済力の底上げに繋がるならと敢えて禁止にはしていない。

逆に起業は奨励され、財閥の系列に加えたり、取引先として優遇したりの恩恵があった。



ガルの場合、鍛冶職人や鉄鋼の研究職として就職するより、家業を発展させ財閥の取引先となることにメリットがあると考えられた。

ガルたちの村では手に入り難い材料を買うことができ、製品は確実に買い上げてもらえる。

この村に新たな産業を、呼ぶことができるかもしれない。そうなれば人口も増え、商店は潤い、浮遊車路線の主要駅に格上げされ、チエルの宿も客で賑わうことになる。もちろん人口が増えれば治安は当然悪化するだろうし、居住地を増やすため周囲の自然を切り開かなければならない。重工業の工場が進出してくれば、オアシスの水源が不足したり汚染される可能性も捨てきれない。良いことづくめというわけにはいかないが、それでも天秤にかければ寂れた村にとっては利益の方が大きい。

そのためには腕を磨かなければならないし、経験や勘だけでは『製品』は作れない。新しい技術はもちろんのこと、製品管理や規格など勉強すべきことは山ほどあった。

レグルが帝都へ行ってから五日が過ぎた安息日の前日、一月一日の昼過ぎに、ガルはチエルの宿へ昼食を取りに行った。

いつもは母が食事の用意をしているのだが、この日は気分転換でもと言われていた。最も忙しい時間を外したのは宿に対する気遣いもあるが、チエルと話がしやすいという目論見が当然ある。あわよくば、昼時の片付けの後、お茶と一緒に飲む時間くらい取れるのではないかという期待もあった。

レグルのいない隙に、などという大それた期待を抱くほどガルは自信家でもなければ自惚れ屋でもない。だが、普段よりはチエルと過ごせる時間は、増えるだろうという期待は持っていた。

昼時の喧騒が引いた食堂に、チエルとエルミが向き合って座っている。

チエルの前には湯飲みが置かれ、エルミの前には定食のトレイが置かれていた。ふたりはテーブルを挟み、ああでもない、こうでもない皿をつつきながら話し込んでいた。よく見るとエルミの前に置かれたトレイは、他の客に出され定食とは構成が異なっている。ソル皇国で主食とされる米を炊いたものか盛られた丼と、味噌汁の椀が並んでいることには変わりはない。しかし、違う吸い物が入った椀や小皿や小鉢がいくつも並び、メインとなるはずの皿がない。

ガルが食堂に入ったことにふたりは気付かなかったが、チエルの父が発した客への歓待の言葉に入り口を振り向いた。

エルミの姿を認めたガルは、ふたりきりになれないことに僅かに落胆の表情を見せた。

もちろん、エルミを嫌っているわけでは決していないのだが、滅多にない機会を潰しやがってという自分勝手な感情が自然と溢れている。

「あ、いらつしゃい、ガル。」

どうしたの、何か難しい顔しちゃって？」

ガルの気持ちなど欠片も知らず、脳天気チエルが聞いた。

「あ、いや、その定食が気になつてさ」

エルミに不快な思いをさせてしまったのでは、という軽い後悔を抱きつつ、ガルは表情を無理矢理変えた。

「チエルが新しい料理作つたんだよ。」

私 came から。

いいでしょ」

ガルの表情の変化を読みとり、エルミは精一杯の強がりを見せた。

「へえ、今度食堂に出すヤツ？」

宿の晩ご飯？」

ガルはエルミの感情などお構いなしに、ふたりの横の席に腰を下ろし、エルミの前に置かれた皿から料理を一切れ摘んで口に放り込む。

「あ、今作るから。」

もう冷めちゃってるから、しょっぱいよ」

チエルは慌ててガルを止め、厨房へと入って行ってしまった。

「美味しいじゃん。」

弁当に良いんじゃない？」

エルミに問うようにしながら、チエルに声を掛ける。

「そうなんだよねえ。」

できたてだと、ちよつと物足りなかつただけど。

塩じゃなくて、牡蛎油とか辛味を足した方がいいかなって私は言ったのよ」

エルミがガルと同じ皿から一切れ野菜を摘み、口に入れた。

チエルが新しく料理を作っている間、ガルとエルミは残った皿の料理を摘んでいる。

豚肉とキャベツ、長ネギを軽く油通しして、ショウガをよく炒めた後にすべての材料を順次炒め合わせ、メデイエータの酒、牡蛎油、味噌に砂糖を加えて醗酵させた甘み調味料、そして空豆と唐辛子を醗酵させた辛味調味料と味噌で味を調える。僅かに感じる程度の甘みが、辛さを引き立たせ炊いた米とよく合う一品だ。

となりの皿には、魚を主体にした料理が載っている。

この村の近くにある塩湖で採れる白身魚に片栗粉をはたいて揚げ、片栗粉でとろみを付けた鶏がらから取ったしょうゆ味のスープを絡め、そこに炒めた青菜を混ぜ合わせたものだ。こちらは牡蛎油を使っているが、辛味は押さえ気味で胡椒で軽くつけてある程度だった。これは本来白米に欠けて食べる丼物で、忙しいときなど手早く食べられ重宝しそだった。

次の皿には、一口では食べられない肉の塊が鎮座している。

豚の三枚肉を下茹でし、醤油、酒、砂糖とメデイエータの香料、シヨウガやネギといった香味野菜とともに脂身がとろとろになるまでじっくり煮込こみ、辛子をたっぷりと添えたものだ。

もう一つの皿には、魚が丸のまま横たわっている。

大鍋に湯を沸かし、その上に蒸籠を置いて作った蒸し物だが、シヨウガとネギの香りが効いている。仕上げに熱したごま油がかけられていて、それが冷めてしまった今でも食欲をそそる香りを残していた。

味噌汁の横にふたつ並んだ汁椀には、それぞれ違った色のスープが入っていた。

鶏がらのスープはほぼ透明で、酒と塩で味が調えられ、青菜と溶き卵が散らされている。卵がきれいに散るようにスープにはとろみが付けられていて、これはまだ暖かさを保っていた。

もう一つの椀には、白濁した汁が張られている。

豚骨から取った濃厚なスープに、酒と塩、僅かに醤油で味を調え、こちらの具は戻した乾燥キクラゲと炒った白ゴマ、刻みネギだけだった。スープ自体には豚骨と一緒に煮込んだ玉ネギ、ニンジン、キヤベツの芯などの野菜の甘みが溶け込んでいて、あれこれと具を入れる必要がないほど複雑な味になっている。

どれもチエルの父が持っているメデイエータ料理の本に載っている。

るものだ。

この日は厨房にある材料で作れそうなレシピを試作しただけだったが、チエルは本格的にメデイエータ料理に挑戦するつもりになっていた。

やがて……

「あっ！」

厨房からチエルの悲鳴が聞こえてきた。

「どうした!？」

「何、何かあったの!？」

ガルとエルミが同時に叫ぶ。

「あの、ごめんなさい。

辛味調味料の入れ物を、鍋に落しちゃって。

もうちょっと待っててね、作り直すから」

厨房からチエルが申し訳なさそうな顔を覗かせた。

後ろではチエルの父が苦笑いしている。

「驚かささないでくれよ。

勿体無いから、それ持ってきて」

ガルはそう言うが、ちょっと格好のいいところを見せてやるという下心が覗き見える。

「でも、食べられる分量じゃないのよ、落しちゃったの」  
チエルが厨房から言い返す。

「いいじゃない、ガルがそう言うんだから」  
半分呆れたような、怒ったような口調でエルミがけしかける。

「じゃあ、ちよっとだけ。」

無理なら言つてよ」

チエルもエルミの言いように触発されたのか、鍋の中身を皿に移して運んでくる。

「なんか、匂いだけで汗が出てくるよう、これ」

エルミが顔をしかめて、セリフを棒読みするようにチエルに言う。

「どれどれ。」

大丈夫だよ、これくらい」

平然とした表情を努めて保ちながら、ガルが豚肉とキャベツ、長ネギの味噌炒めを口に入れる。

数瞬後、ガルは咀嚼する余裕すらなく、盛大に口の中身を嘔き出した。

「なにすんのよおっ！

汚いなあ、ガルはっ！

だから言つたでしようよっ！」

小さくなつてエルミの罵声を聞いているガルは、炎天下の砂漠で数時間過ごした者のように大量の汗を流し、口すら利けなくなっていた。

結局、作り直したチエルの料理を堪能した後、ガルはお茶を飲みながらふたりと雑談に興じていた。

ようやく形になってきたそれぞれの将来や夢、それに向かつての

努力、不安、話し始めれば終わりはない。個人個人の将来もそうだが、ソル皇国自体の将来にも不安を抱えている。メイイータとの終わりの見えない戦争や、それに横槍を入れてくるオリザニアとの関係、このままでは世界から孤立してしまうのではないかと不安が募る皇国の政治家たちや軍部の振る舞いと、辺境の少年少女にはどうしようもないことまで三人は話していた。

チエルは、将来に直結する試験を間近に控えた二人の言葉を、以前は羨ましいという感情とともに聞いていた。

だが、今ははつきりとした将来の夢が見えている。それをいつ言おうか、ふたりの言葉が途切れるタイミングを測っていた。

「俺が大学校か専門技術学校を出たらさ、この村に仕事を引っ張れるように頑張るよ。」

そうすれば、チエルの宿にも出張の客が今以上に増えるぜ。

期待してくれよ、チエル」

瞳を輝かせてガルは言った。

「うん、そうなるといいね。」

あたしは帝都で料理店を開くから、お父さんとアレイに頑張ってもらわなきゃ。

でも、本当にそうなってくれたら、お父さんも宿をたたまなくていいから、ガル、頑張ってね。

あれ、ガル、どうしたの？」

心底嬉しそうにチエルが言った。

だが、ガルはチエルまで帝都に行ってしまうことに、すべてが崩れ去るような衝撃を受け言葉を失っていた。

## 第9話 唇をかみしめて

高等学校入試を四日後に控えた安息日の一月一六日、ガルは魂の抜け殻のようになっていた。

まさか、チエルが帝都にさっさと出て行くとは、これっぽっちも考えていなかった。レグルに嫁ぐことは揺るぎない事実であり、いずれにせよチエルの横に自分が立てるわけがないことは理解していた。だが、嫁ぐのはレグルが中尉に昇進の後のことであり、それまではこの村にいるものとはばかり思っていた。

ガルが高等学校に通う二年は、今と同様に会える。

そして、大学生や専門技術学生は夏冬春と長期の休みがあるが、レグルが行く士官学校は特別な機関であり長期の休みなどない。この間は誰憚ることなくチエルと二人で過ごせるはずだった。もちろん、営舎暮らしから抜け出せばすぐに結婚するのだろうが、中尉への昇進は早くても二五歳だ。ガルが順調に進学すれば大学校もしくは専門技術学校を卒業するのは二三歳。

帝都から村に戻っても、二年はチエルと過ごす時間が残っているはずだった。

それがいきなり消え失せた。

我ながら情けないことを計算しているものだとは思つが、好いてしまったものはどうしようもない。

想い人の幸せを望めば、横に立つべきはレグルだと理解できる。自分は学校を卒業すれば村に戻り、一生を鍛冶屋として過ごしていく運命だ。それに対してレグルには、提督への道が開けている。華々しい活躍があれば、人々の賞賛を得ることもあるだろう。何も武功だけではなく、軍政の道でも榮譽を得ることは充分可能だ。砂海軍大臣ともなれば、軍人の出世としては最高位といって良い。



平々凡々としていても人々の役に立つ一生も、充分すぎるほど人様に誇ることができる人生だが、周囲からの尊敬や賞賛を鍛冶屋が将官ほど得られるとは、ガルは考えていなかった。

田舎の村に一生埋もれるか、転勤は多いだろうが将官の妻として榮譽を分かち合うか、どちらを選ぶと聞かれれば迷う者などいるはずもなかった。

レグルの進学に合わせて、チエルも帝都に出る。

チエルの父が帝都に近いオアシスにあるメディーエータ料理店に、チエルの修行を依頼していると聞いていた。つまり、ガルが高等学校に通う二年間、チエルと会うことはできない。帝都の学校に進学しても、住み込みのチエルにはそうおいそれと会いに行けるわけではない。外食産業は安息日とその前日が稼ぎ時だ。気が狂うほどの忙しい日に、会いに行こうものならチエルの立場が悪くなるだけだ。会いたいと言えば会えるだろうが、想い人の立場を悪くしたいとは思わない。許婚という立場にでもあれば、店側もそれなりの配慮はしてくれるだろうが、幼馴染みというだけでは良い顔をするはずもない。

ガルとチエルの間には、深くて広い溝が横たわっていた。

ならば告白してしまえと思うが、レグルからこちらへチエルが振り向くとは思えない。

当って砕けると人は言うだろうが、砕け散るのは解りきっている。その後、互いに気まづくなり、付き合いが途切れてしまうことをガルは何よりも恐れていた。

それでもチエルに会える時間が少ないという焦りから、この日も昼過ぎにエルミと連れ立って宿の食堂に顔を出している。なんとか平静を保ち、他愛のない話に終始していたが、エルミの言葉には上の空になることがあった。その都度自身の恋心が周囲にはれるんじゃないかと慌ててしまい、却って言動が怪しくなっている。

ふたりと話せば話すほど、自身の心が削られていくのをガルは感じていた。

何もかもすべて投げ出したいほど、ガルは自棄になりそうだった。だが、父からの期待と、それに応えたいという想い、そして村から鍛冶屋をなくしてはならないという義務感が、ガルをあと一步で自暴自棄な行動を取らせることを食い止めていた。

「ガル、いよいよだな。」

悔いを残さなければ、それでいい。

十全に力を出せるように、試験の前の夜は早く寝るよ。」

父が教科書を前に考え込んでいるように見えるガルに声をかけた。呆然としていただけなのだが、難問に挑んでいるように見えたのだろう、父はガルの体調を気遣っている。

母も同じようにガルを気遣い、夕食にはガルの好物と消化のよい物が並べられている。景気付けで食べ過ぎなどして、試験の日までに腹具合が悪くなったら元も子もないという配慮だ。

「うん。」

任せておいてくれよ。

この村のためだもんな」

意識を現実を引き戻し、ガルは教科書を脇に置き、最後の言葉は口の中だけで呟いてから食卓に向き直った。

とにかく、ここで高等学校に落ちでもしたら、それこそ目も当てられない。

どう考えても自分の責任なのだが、無意識にレグルやチエルにそれを押し付けてしまいそうだ。どう考えても言い掛かりにすらなら

ないことだが、心の安定を求める本能がそうしてしまいそうだった。だが、そんなつまらない理由で友を失いたくないと、ガルは目前に迫った試験に集中することにした。

この時代、国公立の高等学校はエリート養成学校でもあるため、入学試験が難関であることはもちろん、学費も高額だった。

却って私学は学費の安さを売りにしているような時代だ。ガルは通える範囲に学費の安い私学がないことを、恨めしく思っている。

決して放課後に遊ぶ時間が欲しいのではなく、これから大学が出るまでに掛かる学費や親にかける苦勞を思うと、いくら奨学金を取ったとしても抱え込む『借金』は少ないに越したことはない。奨学金を運営する企業に勤めれば給料からの天引きで定年までに大きな負担を抱えずに返しきれるが、それはこの村に鍛冶屋がなくなってしまうことを意味していた。新しい製品を作り出すだけではなく、修理まで引き受けている鍛冶屋の消滅は、この村の農業生産力を奪うことも意味している。

父が帝都へ出ず、この村にしがみついている理由のひとつはそれだった。

もちろん、ガルの一家が帝都へ出てしまえば、どこから鍛冶屋が流れてくるだろう。

その人物の保証があれば良いが、とんでもない破落戸崩れなどでは村の安寧が脅かされてしまう。閉鎖的と言われようと、古くからの付き合いのある人間が最も信頼できることも確かだ。しがらみに縛られて村を出られないなど、理不尽といわれるかもしれないが、この時代では当たり前すぎるほど当たり前のことだった。

ガルの一家が村を出ない理由はもう一つある。

帝都へ出たからといって、確実に職があるわけではない。『大学を出たけれど』という言葉が、流行語として認識されるような世の

中だった。二六一〇年代には八割近かった大学校卒業者の就職率は、二〇年代中盤に六割程度まで落ち、三〇年代には三割程度まで下落していた。

二六二九年一〇月二四日に、オリザニア共和国の証券取引所における株の大暴落に端を発した世界恐慌は、ソル皇国の経済をも蝕み、企業は新卒採用を極端に控えるどころか労働者の首切りも躊躇っていられる場合ではなかった。

職にあぶれた者から見れば、継ぐ家業があるだけマシという状況だった。

「レグルとエルミは大丈夫かな。

俺より、厳しいんだよな。

こんなことで、落ちてたら笑われちゃうな」

ガルは誰にといいことなく呟いた。

学費が掛からない士官学校が人気であることは、そのあたりの事情も絡んでいる。

家業は長男が継ぐものという考え方が常識であり、次男三男といった者たちは雪崩を打って士官学校を受験している。すべての者を受け入れてしまえば士官の質が下がるだけなので、当然選抜試験は厳しくなる一方だった。しかし、合格率が一桁しかないといっても、元から受かるはずもない者までが大挙して受けているが故、実質の倍率はもっと低いとみられていた。

そうはいつても、全国から優秀な少年や少女が集まっているのだ。楽な戦いではないことは、想像に難くない。

不安と一緒に夕食をかき込み、ガルはまた教科書を広げた。

ほどなく、雑念は消えていき、ガルは問題を解くことに集中していった。少年にとって恋愛は現時点における人生の一大事だが、受

験は一生の一大事だ。もちろん、結婚に直結するかもしれない恋愛であれば、それは人生の一大事なのだが、ガルにはまだ遠い未来の話にしか思えない。たとえチエルと付き合うようなことがあっても、ガルにはまだ結婚などという具体的な話を思い浮かべることができなかつた。実際に長く付き合い、人生の設計プランをはつきりと形にし始めたレグルとチエルには、結婚はごく具体的な近未来の話だ。だが、年齢イコール恋人がいない歴のガルは、異性と付き合うことすらどんなことかわかっていない。

受験勉強に逃げることで、チエルが遠ざかっていくという現実を紛らわせることができたのも、己が子供ゆえの怪我の功名だったのかもかもしれない。

「エルミ、忘れ物はないか？」

帝都へ飛行士官学校受験に旅立つ愛娘に、父が問いかけた。

「大丈夫よ、お父さん。」

何も、明日引越すつてわけじゃないでしょう。

お義姉さんがああいってくれてるんだし。

受験票さえあれば、大丈夫よ。」

下着の替えと、次兄より送られた士官学校の過去問を鞆に詰めながら、エルミはそっけなく答えた。

当初の予定では、試験直前の安息日、一月二三日に帝都へ出るつもりでいた。

だが、あまりに急な環境変化は試験への集中力、特に魔法の実力発揮を妨げる危険性ありと次兄の妻から忠告があった。そのため、予定を繰り上げてガルの高等学校受験の日よりも早く、エルミは帝都に出ることにしたのだった。

試験当日は平日であり、通勤の人並みにもまれなければならない。安息日とは、帝都を走る浮遊車路線の込み具合が雲泥の差だ。前日の安息日のつもりで試験に向かい、浮遊車に乗りそこねでもしたら一大事と、次兄の妻は危惧していた。

抱えていく荷物が増えるのではと、エルミの母は消極的に反対した。しかし、それは次兄の妻への心遣いであり、いくら妹とはいえ二人きりの家庭への闖入者が長逗留することを遠慮してのことだった。だが、次兄の妻は、丈が合えば自分の着替えを着ていれば良い、試験の日に着て行く服だけ持ってくれば良いといって、エルミに早めの帝都行きを促したのだった。

「あんまり無遠慮に振る舞うんじゃありませんよ、エルミ。  
もう違う家だってことを、ちゃんと弁えて」

次兄の妻に押し切られた格好の母は、それでも遠慮を隠せずと言った。

話に聞く姑小姑の苦勞を、次兄の妻には掛けたくないということだった。

もつとも、自身が嫁いできたときには既に姑は鬼籍に入っていたため、それがどういふことなのかエルミの母には想像も付かないのだが。それでも次兄に甘えるあまりエルミが傍若無人に振る舞わないか、次兄の妻が余計な氣遣いで疲れてしまわないか、母は心配でたまらない。帝都と田舎という程よい距離が、これまで嫁姑の問題を顕在化することはなかったが、気持ちよく付き合っていた義理の娘との間に余計な波風は立てたくない。

当然のことだが、エルミも同じ思っているのだが、帝都行きにはしゃいでいるようにしか母には見えなかった。

「解ってます。」

最後の追い込みで、我儂言うところじゃないわよ、お母さん。

それに、下手なこと言ったら、お兄ちゃんに叩き出されちゃうわ  
自身が思っていることが母には上手く伝わっていないことに、エ  
ルミは少し苛立ちを感じつつ言い返した。

実際、魔法以外はまだ不安が残っている。

試験の配当において、士官学校は魔法の比率が低い、飛行士官  
学校は魔法の比率が高いことが救いだが、一般教科が零点では話に  
ならない。おそらく、次兄によるしごきが待っているし、妻も家事  
手伝いなどさせる気は欠片もないと言われている。上げ膳据え膳で  
良いと次兄は言っているが、それは寸暇を惜しんで勉強しろという  
ことだった。食器を台所に運ぶ暇があるくらいなら、サピエント語  
の単語をひとつでも覚える。次兄も妻もそう言っていた。

母は、それが余計な気遣いにならなければいいのだが、と不安だ  
った。

「せめて、炊事洗濯と、布団の上げ下ろしくらいやりなさいよ。

恥掻くのはあんたなんだからね、エミル」

余計なこととは解っていても、つい母は口にしてしまう。

「大丈夫だって。

制限時間まであとちょっとあるから、魔法の修練してくるわ」

エルミはそう言っ母の小言から逃れ、家の裏にある空き地へと  
出て行こうとした。

「エルミ、ちょっとお待ちなさい。

まだ言わなきゃいけないことが。

お父さんも、笑ってないでなんか言ってください」

急に思い出したように出て行こうとするエルミを止めようと、母  
は父に助けを求めた。

初めて独りで帝都へ出すこと、家族とはいえ『他人』も住む家に

厄介になることへの心配は、尽きることはなかった。

「母さん、心配は解るがな。」

エルミだってもう子供じゃないんだから、ひとつ任せてみたらどうだ」

そう言いながらも、湯呑に茶を注ぐ父の手は細かく震えている。それどころか、自分の湯呑にはなくエルミの湯呑に茶を注ぎ、危うく溢れさせるところだった。

やはり、末っ子の上、たったひとりの娘ということ、父は父なりの心配が尽きない。

泰然としていようと思っても、動揺は隠せなかった。

「父さんも母さんも、いいじゃないか。」

悔いを残すも残さないも、エルミの責任だと思っよ。

あいつがついているんだから、そうそう命の危機なんてありはしないだろう。

仮にも治安は良いって言われる帝都なんだし。

それに、あれが足りない、これがない、なんて、帝都だったらいくらでも買えるんだ。

あとで請求書でも回してもらえば良いよ」

ここまで静観の姿勢を保っていた長兄が、母の気をほぐすように言った。

いつまで経っても母にとって、子供は子供。

たとえ、子が別に家庭を持ち、自身が祖母という立場に立とうとも、母にとってはいつまで経っても手の掛かる子どもだった。いつまでも心配でしようがないのだ。つまらないものでも、あれがない、これがないと、子供が不便であることが我慢ならない。少々の手間であれば、使い慣れた物や今手に入れられる物は手に入れて置けば



よい。子供に行く先々で無駄遣いをさせたくない。その分、美味しい物や良い物を買わせてやりたい。

結果として、日数が増えることで荷物が増えると反対していたわりには、僅か十日ほどの帝都行き荷物引越しのそれに匹敵しようとしていた。

「あんたは、心配じゃないの？」

エルミが不便な思いしたり、困るようなことがあったらどうするって言うのよ？

お父さんも、少しは心配にならないの？」

承服しがたいという表情で、母は長兄に言った。

「心配さ。

だから、あいつの家に預けるんだろ。

一度や二度失敗したからって、死にやしないって。

むしろ、軽い失敗ならいくらでもしたほうが良いんだ。

いざって時に、その失敗が役に立つもんだよ。

上手くいってばかりじゃ、なんで上手くいったか考えないんだよな。

失敗してこそ、考えるようになるんだから。

父さん、本当は心配で心配でしょうがないんだろ？」

父が茶を注ぐ湯呑を間違えていることに、長兄は気付いていた。

照れ臭そうにそっぽを向いた父をそのままに、長兄は母を宥めている。

いずれひとり立ちしなければならぬことは、母も充分すぎるほど理解しているのだが、それはエルミが結婚してこの家を出て行くときだと思っていた。誰かが傍に寄り添い、決して独りで世間の荒波の中に放り出されるわけではないと、母は安心していただ部分があった。それ故に戦の中に身を投じることになるかもしれない飛行士

官学校へ行くということが、いまひとつ安心して送り出すことができないうちに繋がっていた。あれこれと世話を焼いてしまつのも、末っ子であるということも関係している。

夜空の下で魔法の修練に励むエルミを想い、母は眠れぬ夜が続きそうだと思っていた。

「じゃあ、ガル、チエル、行ってくるわね。

レグルが羽目外してたら張り倒しておくから」

浮遊車の窓からエルミが言った。

一月一七日の早朝、ガルたちの村を発つ始発にエルミは乗っていた。

プラットホームには、村の主だった人々が見送りにきていた。レグルほどではないにせよ、士官が誕生するかもしれないという期待が込められている。エルミの家族とガル、そしてチエルが車内に入ることを許可され、最後の見送りに託けて雑談に興じている。

「あなたの方が羽目外しそうじゃないの」

「レグルの足は引つ張るなよ、エルミ」

「レグルちゃんにしっかりと見てもらいなさいよ」

「レグルが頼りだな」

「お前の方が余程心配だ、エルミ」

チエル、ガル、母、長兄、父と、異語同義にエルミを嗜めた。

「ひつどいわね、みんな。

そんなに私が信じられないの？」

頬を膨らませ、口を尖らせて文句を言うエルミに、同時に全員の肯定の言葉が叩き付けられ、笑いが弾ける。

もちろん、エルミがそこまで頼りないとは誰も思っていない。

ただ、帝都へ出た際についてはしゃぎすぎ、そのまま試験日を迎えるようなことになっては大変だと、誰もが過剰に注意を促したかったのだった。

やがて発車の時刻になり、ガルたちも車掌に促されプラットフォームに降りたった。

ベルが鳴り響き、浮遊車が殊更ゆっくりと走り出す。ホームの端まで窓越しに会話を交わした少年と少女を置き去りに、エルミを乗せた浮遊車は村を出て行った。

七日前にレグルが通った道を、今はエルミが辿っている。

試験の後は一度帰るとはいえ、故郷を後にするという感慨が胸を占めていた。もちろん不合格なら、村に戻ってそのままなのだが。今から落ちることを考えていては、戦う前から負けが決まってしまうと、エルミは強引なまでに前向きに考えている。

飛行士官学校を卒業すれば、どここの基地に配属になるか、まったく予想がつかない。

基本的に徴集兵は地元の騎兵軍師団や砂海軍基地、艦艇に配属になるが、下士官の一部と士官は全国どこへでも飛ばされる。場合によっては大東砂海の真っ只中にある、信託統治領の基地に配属になるかもしれない。

もし、村に近い航空艦隊に配属になっても、数年ごとに転勤が待っている。

特定の地に長く留まることで、地元業者との馴れ合いや不正の温床となることを防ぐためだ。地元有力者の血縁者との縁談を、未然に防ぐためという意味合いもある。砂海軍も騎兵軍も、軍関係の

中で見合いが行われ、多くの者たちが親戚縁者となっていた。

縁故による談合を防ぐためだが、軍の結束を強める目的もある。

反面、自然と派閥が形成され、出世や配属にも反映されるようになり、中世の貴族に見られたような政略結婚まがいのケースも多々見られていた。

軍の設立時にできあがった派閥を破壊する役には立っていたが、また新たな弊害も澱のように溜まり始めている。

強引に未来を思い描いているうちに、エルミは村に戻れないことと、ガルと結ばれる確率を自ら遠ざけていることに気付いてしまった。

自然と涙が湧き上がり、人知れずそつと涙を拭う。だが、涙は止まることなく溢れかえり、エルミは自分がどうしてしまったのか分からなくなっていた。あくびに見せかけ、そのまま眠ってしまったおうと目を閉じるが、却って負の思考が強まっていく。

このままでは嗚咽まで漏らしてしまいそうな恐怖に、エルミは唇をかみしめて窓の外に広がる砂海を眺めていた。

ガルはチエルと並んで帰る道すがら、目前に迫った試験のことを頭の中から叩き出していた。

今はたとえ僅かな間であろうと、チエルと言葉を交わせるこの瞬間のほうが重要だった。言うまでもなく理性では少しでも早く帰り受験勉強に集中するべきだと理解しているが、感情は歩く速度をチエルに合わせて緩めるばかりだった。レグルにベクトルが向けられた何気ない言葉のひとつひとつに、ガルは笑顔で頷いたり難しそうな表情を作ったりと、真の感情を露にしない努力を重ねている。既に喉元まで『チエルのことが好きなんだ』という科白がせり上がった。

てきているが、ガルはその言葉がどのような事態を引き起こすか誰よりも理解している。

それ故、ガルは何度も言葉を飲み込んだまま、必死になってチエルの話に合わせていた。

「なあ、チエルは帝都へ出て、それでいつかは店を持ちたいんだろ？ レグルはソル中を飛び回らなきゃならないんだぜ。」

店なんて持つちゃったら、別々に暮らすことになっちゃうんじゃないのか？」

ガルが大変なことに気付いたとばかりに聞いた。

「そうね、きつと若いうちは数年の単位でソル中、いいえ、信託統治領も含めて行ったり来たりよね。」

でもね、あたしも料理の修業は一店だけじゆないと思うの。

いろんな所へ行ったりきたり。

レグルの行く先に付いていけることもあるかもしれないわ。

それに、店を持つって言ったって、すぐになんか無理じゃない。

お金も溜めなきゃいけないしね。

レグルが退役してからでも良いと思うの」

不安げな表情でチエルは答えた。

当然士官の妻ともなれば、夫の転勤に伴ってソル中を渡り歩くことになる。

父は当然そのことも視野に入れ、最初にチエルを託す店に話は通してあった。

どこまでその店の力が及ぶかは解らないが、レグルの転勤に伴って行く先々の店に紹介してくれるように頼んではある。砂海軍基地があるような町はそれなりの規模であり、それなりの店がある。チエルはメディエータの料理を中心に修行する気であるが、それだけではなく修業しないのでは料理の幅が広がらない。遙か西にあるドラゴ

リー大岩盤の国々で発達してきた料理や、ソルの料理も修業しなければと考えていた。ソルだけでも地域に根ざした様々な料理があり、その修行だけでも膨大な年月を必要とする。当然といえば当然だが、ひとつの道を究めようとするれば一朝一夕にことなるはずがない。

夫の転勤は、自分にとつてもいいほうに作用するんだと、チエルは不安ではあるが前向きに捉えていた。

「チエルは、レグルにどんな軍人になって欲しいんだい？」

特に深い意味はなく、ガルは聞いた。

とにかくチエルと言葉を交わし続けたい。それが先に立っていた。

「うん、やっぱり砂海軍大臣を目指して欲しいかな。

あたしとしてはね。

エルミにもだけどさ。

レグルがどう考えるかまでは強制できないけど」

チエルは用意していた答えを返す。

「へえ、てつきり俺は連合艦隊司令長官とか、軍令部総長って言うかと思つたよ」

意外そうな顔でガルは答えた。

「だってさ、連合艦隊司令長官なんて、一番死んじやいそうじゃないの。」

軍令部総長も同じよ。

若いうちはどっちも均等にやんなきゃいけないでしょうし、最初は艦隊勤務だろうけどさ。

戦場に出てばかりより、赤レンガにいた方が安全じゃない」

辺りを見回し、人がいないことを確認してから、チエルは小さな声で言った。

連合艦隊司令長官は、砂海軍の中でも最も人々の賞賛を受ける役職だ。

砂海軍艦艇のほとんどを指揮下に納め、皇国の楯となり艦隊に号令する立場だ。現実には砂海軍大臣により任命され、軍令部総長の指揮下にある三頭職の中では最下位に位置するが、表舞台に出ることの少ない大臣や総長より耳目を集める立場でもある。

だが、通称赤レンガと称される砂海軍省の建物や、それに併設された軍令部の建物から出ることのない大臣や総長に比べ、圧倒的に戦死する確率が高い。

指揮官先頭はどの国の砂海軍でも伝統的なものであり、艦隊決戦においては座乗する艦を単縦陣の先頭に配すると暗黙のうちに決まっていた。最強の戦闘力を持つ艦が連合艦隊司令長官の旗艦になるという伝統も、どの国においても同様であり、単縦陣の先頭に最強の艦を配することも、軍事的なセオリーだ。そして、集団戦において、は最も危険な敵を最初に叩くということも当然のことであり、司令長官が座乗する艦に敵弾が殺到することもまた必然だった。

つまり、連合艦隊司令長官の名声や名誉、人々からの尊敬や賞賛は、砂海軍三頭職の中で最も死に近い立場であることへの代償と言えた。

そのような立場にはなつて欲しくないというのが、恋人を想うチエルの偽らざる正直な気持ちだった。

やがてチエルの宿が視界に入り、ガルにとって至福であり地獄の責め苦でもあるひと時は終わりを告げる。

宿の裏に浮遊車が止まり、野菜や肉類の梱包を降ろし始めているのを見たチエルは、一足先にそれらを運び込んでる父の姿を見つ

るなりガルに別れを告げ走っていく。途中、一度振り向いてガルに手を振るチエルの姿に、ガルは永遠の別れを告げられたような錯覚を覚えてしまい、その場で立ち尽くし唇をかみしめていた。



## 第10話 明日へ

エルミが受けようとしている飛行士官学校は、設立されるまでの経緯に多少の紆余曲折がある。

今から九年前の二六二九年、将来空戦の中核を担う飛行士を育てるために、海軍飛行予科練習生、略して予科練の制度が設立されていた。これは一六歳から二〇歳までの志願兵であり、三年間の教育期間で搭乗兵を育てることを目的としたものだった。だが、士官学校とは別組織であるため士官に進級することはごく稀であり、もし昇進できたとしてもそれは特務士官でしかなく、指揮権が与えられることはない。空戦の指揮は、たとえ戦技に劣っていようと士官が執る。

そこに歪みが出ていた。

徹底的に空戦技術を叩き込まれた兵や下士官を、たかだか飛ぶのがやっとという士官が指揮統率できるはずもない。

謙虚な性格の士官中には空戦技術を兵や下士官から学び、良好な関係を気付く者もいた。だが、階級の権威に縋って部下を従わせている士官の方が、遙かに多いのが現状だった。オリザニア共和国との戦いで、より危険度の高い敵を見極める目を持たない士官の指揮を無視して、最も危険な敵を排除した兵や下士官が、空戦後にリンチに合う例すらあった。命を助けられたという目に見えない現実より、指揮に従わなかった事実の方が、多くの士官にとっては重要なことだった。

両者の間には埋め難い溝が刻まれ、士官の階級を持つ搭乗員は後ろにも目が必要とまで言われるようになっていった。

もちろん、三次元の機動を必要とする空戦は、敵機が後ろに回り込むことが稀ではない。

後ろにも目が必要なことは言われるまでもないことだが、士官搭乗員の場合は意味することが違っている。敵機を撃墜した直後の気の緩みを衝かれ、別の敵機に落とされることは少なくないが、普段から恨みを買っている部下の機にも気をつけなければ生きては戻れないことを意味していた。砂海軍省もこの状況は認識しており、貴重な搭乗員を無為に失うことは認め難いことだった。

だが、公然と兵や下士官を罰しては、陰湿な虐めが発覚してしまう。

窮余の一策が、二年前の飛行士官学校の設立だった。

表向きは空戦指揮官の養成だけでなく、幅広い戦略眼を養うことで将来の参謀や航空艦隊指揮官を育てることを目的に謳っている。だが、実際には空戦の訓練は予科練と合同で行うため、まったくの素人に統率されるという予科練出身兵のガスの抜きのためだった。当初、予科練同様一六歳から二〇歳までを受験資格にする予定だったが、予科練出身の反発を抑え、同時に優秀な下士官を引き上げるために年齢制限を三〇歳までとしていた。

既に空戦技術を身に付けた者は甲種、付けていない者を乙種に区分し、教育課程も一部に異なる部分がある。当然空戦技術を身に付けた者にいまさらその教育を施す必要はなく、乙種の者に対する教官を勤めさせることで、教官の育成も同時に行うことにしていた。

エルミが受験するのは、当然のことながら乙種飛行士官だ。

飛行士官学校における教育は、数学や理化学、国語、この時代世界の公用語となっていたサピエント語といくつかの外国語の一般課目と、多岐に亘る兵学、基礎体力向上のための体育と、魔法、空戦技術だった。

午前中はみっちり座学が行われ、午後からは体育と魔法、空戦の訓練となっている。壮健な男子ですら音を上げる猛訓練は、砂海軍

士官学校、騎兵軍士官学校と並んで名物と称されていたが、もちろん戦場で命を落さないために必要なことだ。それ故に受験は男子のみとされていたが、女性の持つ魔力に目を付けた砂海軍省は、飛行士官に限って女性に門戸を開いたのだった。前年に砂海軍省から『敵攻撃機の阻止撃攘』と『敵観測機の掃討』を目的として計画要求書が提示された三七試艦上戦闘機も、『速力及び上昇力優秀にして敵高速機の撃攘に適』する事が第一であり、それを意識して魔力への反応性を大前提に開発が進められている。

エルミが首尾よく合格を勝ち取れば、砂海軍の女性士官第一期生となり、その新型戦闘機を駆ることになるはずだった。

飛行士官学校も、受験科目は士官学校同様だ。

学術試験は五日間連続で行われ、初日に数学、二日目にサピエント語のソル語への翻訳と皇国の歴史、三日目が物理、四日目は化学と国語、最終日にサピエント語の作文及び文法と地理の順に行われる。士官学校の場合はそれぞれの学術試験の採点結果は当日に発表され、所定の合格点数に達した者のみが次の学術試験を受験できるふるい落とし選考であった。その後、面接試験を経て最終合格者が決定される。

だが、飛行士官学校の場合は学術試験の結果が発表されることなく、六日目に魔法の試験が行われ、その結果を以って面接へ進む者が決定された。

頭でっかちが優先され、優秀な魔法使いがふるい落とされることを防ぐためだった。

エルミは自身の魔法に絶対的な自信を持っている。

だが、全国から集まってくる受験者も、当然そういった魔法に自信を持つ者ばかりだ。どこまで通用するか、やってみなければ分からないが、門前払いにはならないだろうとエルミは思っている。一

週間の間に、どこまで一般課目の点数を上げられるか、それが勝負になるだろうとも考えていた。そのために、次兄とその妻が手薬煉引いて待っている。今からそのことを考えると学校の授業が苦手だったエルミは心が萎えそうだが、一生を左右する七日間に不平不満など言っではいられない。

村を出たときに折れそうになった心を奮い立たせ、エルミは帝都への道を辿っていた。

エルミの伯父の家に世話になっているレグルは、規則正しい生活を心がけていた。

他人様の家に厄介になつていてという意識があることは当然だが、いずれ嫌でも過ぎさなければならぬ土官学校生としての生活に慣れておこうと思つてのことだった。もつとも、体力増強のために走り込みをしようにも、日中の帝都でそんなことをすれば人迷惑なだけであり、日没後人通りが減つてからにはなつていた。

「今日、エルミが来るんだが、レグル君はどうするかね？」

エルミの伯父が机に向かつているレグルに声を掛けた。

「あれ、エルミが来るのは次の安息日じゃなかつたんですか？」

村にいたときは別人のような口調でレグルが答える。

「ああ、その予定だつたんだがね。」

なんでも、帝都の人並みに慣れておきたいつてことで、急に来ることになつたんだよ。」

魔鉱石を利用した魔道通話装置は、この時代まだ各家庭に普及するほど発達していない。

通常、遠距離間の連絡は、どの国でも同じだが手紙が主流だ。急ぎの場合には郵便局に出向き、そこにある魔道通話装置を利用した短いメッセージを先方の郵便局に送り、それを戸別配達員が各家庭に取り急ぎ送り届けていた。今回のエルミの帝都行きは、この魔道通報によって伯父と次兄に知らされていた。

「せっかくだから、迎えに行きましようか。」

帝都駅で良いんですね？

それともお兄さんの家の近くの駅ですか？」

少しだけ考えてレグルは答える。

独りで帝都に滞在しているのであれば、エルミが飲みに行くのを止める自信がない。

レグル自身も久し振りに友達に会えるとなれば、つつい飲み過ぎてしまいそうだった。

やはりいくら緊張しているとはいえ、まだまだ子供な部分も当然ある。目の前の息抜き以上の誘惑に勝てるとは、レグル自身考えられなかった。エルミの伯父や次兄がついていけば、適切なところで切り上げるよう場を運んでくれるはずだ。他人様に家に厄介になっ  
ているという緊張感をレグルは常に持つてはいるが、それでもどこか大人に対して甘えている部分があった。

もちろん、それを責めるような大人はひとりもいなく、レグルもまた責められる程の甘えを見せることはなかった。

「帝都駅だ。」

夕方、一八時頃だな。

その後、皆で何か上手いものでも食べに行こうじゃないか」

人は緊張が続きすぎては壊れてしまう。

伯父はそのことを考えてエルミの歓迎会を行うことにし、そこにレグルを連れて行くことを決めていた。

「こんばんは、伯父さん、伯母さん、お義姉さん、お兄ちゃん。レグル、いいの、ここに来てて？」

半分蒼ざめた顔で帝都駅に降り立ったエルミは、雑踏の中に見知った顔を見つけて安堵の溜息をついた。

生まれて初めて、ひとりで乗り込んだ花の都。

父や母に連れられて来たことがあるとはいえ、故郷の村では考えられない人ごみをひとりで歩くのは初めてだった。

基本的に浮遊車だけでの移動だが、乗り換えは何度かあった。その度に人々の巨大な群れに飲み込まれ、行き先を見失いかけていたのだった。父や母と一緒にときには、どちらかが雑踏から守ってくれていたことに、エルミは今更ながら気付かされていた。

伯父と次兄夫婦と落ち合うことができ、エルミはようやく人心地ついていた。

「いいのはないだろう、いいのは。

今夜はお前の歓迎会なんだってさ。

いつかの夜みたいなのがないように、俺が見張りに来てやったんじゃないか」

口を尖らせレグルは言った。

受験のためとはいえ、親元故郷を離れている。

そこへ恋人ではないにしろ、幼馴染みがやってきた。志を共にする戦友でもある。幸い受験先が違ったため、いずれ机を並べる機会があるのだが、ライバルではなかった。僅か七日ではあるが、久し振りに会えた幼馴染みを前に心が安らぎ、はしゃいでしまうのは仕方のないことだ。

「ちょっと、まさか、あのことをみんなに言ったんじゃないでしょうね!？」

「やめてよ、恥ずかしい」

レグルが言ったことを正確に理解し、ガルの背中で演じた大失態を皆にはらされているのではと、エルミは慌てた。

「そうよ、エルミちゃん」

そのためにレグル君に来てもらったんだからね」

次兄の妻、エルミにとっては義姉がからかうように言っ。

「レグルっ！」

「い、つ、の、ま、にいつ！」

顔を真っ赤にしてエルミがレグルに詰め寄った。

「俺は、なんにも言っていないっ！」

「潔白だっ！」

エルミの必死の形相に噴き出しそうになりながら、レグルは雑踏の中に逃げ込んだ。

もちろん、周囲の人々の迷惑にならない程度の速度でだが、人の群れに慣れていないエルミは簡単にレグルを見失った。

「お兄ちゃん、どこまであいつはばらしちゃったのよ?」

怒りの矛先を次兄に向け、顔の赤みが引かないままエルミは小さく聞いた。

「レグルは何も言っていないぞ。」

「親父とお袋から、全部聞いた」

「笑いを噛み殺しながら次兄は答えた。」

「ひつどおいつ！」

お父さんもお母さんもっ！

娘の名誉をつー！」

エルミが思わず叫んでしまいが、周囲の人々は振り向きもせず通り過ぎていく。

「な、言っただろ、俺は潔白だって」

いつの間にか傍に戻ってきたレグルが囁し立てる。

「まあまあ、人様の間で騒ぐもんじゃないやありませんよ、二人とも。

ところで、今日はどこへ行きましょうか。

エルミちゃんの歓迎会ですからね。

あと、レグルさんの息抜きも兼ねてですから、二人の行きたいところに行きましょうか」

頃合いを見計らって、エルミの伯母が場を取り繕った。

「どこって言われても、お店なんか知らないし」

困り顔でエルミが返す。

「何食べたいかな、エルミちゃんは？」

ソル料理でも、メデイエータ料理でも。

あとはドラゴリー風でもいいわよ。

レグル君は？」

義姉が助け舟を出した。

「メデイエータがいい」

「メデイエータでお願いします」

エルミとレグルが同時に即答した。

言うまでもなく、チエルが帝都に出てきた際に、食べ歩くべき店



を見つけておこうという心遣いだ。

エルミは、チエルからメディーエータ料理の修業をすることを、直接聞かされていた。チエルがその決心をした時点でレグルは既に帝都に出ていたが、チエルは思いの丈を熱く綴った手紙をレグルに書いていたのだった。

「じゃあ、伯父さん、僕に任せていただけですか、どこへ行くか」  
そう言って、次兄は先頭に発って乗り換えのホームへと歩き始めた。

「エルミは無事に着いたって。

どこかで迷子になったんじゃないかって、心配してたんだけど」  
エルミが帝都に出てから二日後、チエルは忙しく食器を下げながらガルに言った。

「いくらなんでも大丈夫だろ。

乗り換えだけなんだし、帝都駅までは。  
どこか駅から出て、違うところまで歩いていくわけじゃないし。  
駅の中には案内板くらいあるんだから」

どことなく不安げに、年上の割には頼りない幼馴染みを思っ  
てガルは答えた。

「そうよねえ、いくらエルミでも、ね。

矢印と行き先くらいは読めるでしょうしね」

聞きようによっては酷い侮辱と取られそうな言い方で、チエルは無理矢理納得していた。

やはりガル同様、ふたつも年上でありながら、自分より子供っぽく見えてしまう幼馴染みを心配している。

「エルミ姉ちゃんって、そんな頼りないんだ？」  
皿を抱えたアレイがガルに聞いた。

「ああ、頼りなくてな、心配だよ、エルミ姉ちゃんは  
アレイみたいにしつかりしていれば、お前の姉ちゃんもこんなに  
心配してないよ」

お手伝い偉いな、と言いながらガルはアレイの頭を撫でる。

「もう、ガル兄ちゃん、俺はもうそんな子供じゃないって」  
口を尖らせてアレイは答え、皿を厨房へと運んでいった。

高等学校の入試は明日。

あまりにも緊張感が張り詰めすぎていたガルに、両親は少し息抜きしてこいと家を追い出していたのだった。ガルはこの日夕食をチエルの宿で摂り、他愛のないお喋りで緊張を紛らわせていた。もちろん、一日中弛緩しっぱなしなわけではなく、日中はしっかりと勉強し、この後もまだ机に向かうつもりでいる。

「じゃあ、あとちょっと俺も頑張るから。

チエルもこれから勉強だろ？」

そろそろ帰るよ。

また明日、試験が終わったら寄らせてもらおうから」

そう言っただけで食事代を置いてガルは席を立った。

「ありがとう、ガル。  
頑張ってるね。」

あたしもこれから勉強するからね」

テーブルの上のコインを取り、チエルはガルの背に声を掛けた。

チエルの勉強は、もちろんメデイエータ料理についてのことだが、それ以前に様々な料理の約束事を復習していた。

父に付いて見よう見まねで覚えた包丁使いや調味料の使い方は、実践的では合ったが我流でもあり、早いうちに矯正できることはしておくべきと考えていたのだった。

当然父はメデイエータ料理の修行は積んでおり、普段から使う包丁はメデイエータ独特の巨大な角型の物だ。

しかし、これまでチエルに関しては宿の料理ができれば充分と考えていたため、無理に力の必要なメデイエータの包丁を使わせることなく、普段遣いの日用品を使用させていた。だが、本格的に修行するなら、その包丁を使わずに済ませられるはずはない。今は母の包丁を使って練習しているが、近いうちにガルの父にチエル専用の包丁を鍛えてもらうつもりでいた。

明日の仕込が終わった後、チエルは慣れない包丁の重さに四苦八苦ししながら、屑野菜や切り落とした肉の破片で包丁遣いの練習に励んでいた。

「チエル、根を詰めるのも程々にね。」

寝不足で、明日怪我なんかしたらつまらないわよ。

それに、その包丁だと、指を飛ばしかねないからね。

休むのも大事なことなのよ。」

厠に行った母が、寝室に戻る途中で厨房に顔を出す。

「うん、分かってるわ、お母さん。」

今日は顔色も良さそうね。

もうちょっと練習したら寝るから、安心して」

チエルはそう言って母を安心させようとするが、手は止まらなかった。

「誰に似たんだか、チエルは頑固なんだから。母さんみたいに体壊してからじゃ遅いのよ。ちよつと、貸してみなさい」

母は嬉しげな顔で小さく笑い、チエルから包丁を受け取る。

鮮やかな手さばきで大根や人参をかつら剥きにし、他の野菜を微塵に切っていく。しばらく厨房を離れているとはいえ、身体に染み込んだ熟練の技は、チエルとは大違いだった。

「お母さん、やっぱりすごいね。」

あたしとは大違い。

できるようになるのかなあ、あたし」

憧れの対象をみる目つきでチエルは言い、その後は不安げな表情になる。

「年期が違うのよ、年期が。」

昨日今日始めたあなたが母さんより上手だったら、母さん立ち直れないわ。

今まで違う包丁に慣れちゃってたんだもの。

しばらくは、勘を掴むまでは大変よ。

闇雲にやるんじゃない、かつら剥きとみじん切りの練習を、徹底的にやりなさい。

それこそ、寝る間も惜しんでね」

チエルに包丁を渡し、料理人の顔になった母が言った。

「お母さん、さっきと言ってることが違う」

久し振りに見た精気に溢れた母の顔に、チエルが笑った。

「あら、血が騒いじやったわ。」

また寝込んでいそう」

母は釣られて自虐的に笑い、また顔を厳しくする。

「チエル、どこへ行ってもね、教えて下さる方の言うことを、まずは鵜呑みにしなさい。」

考えるのは、言われたことをどうすればできるかだけでいいの。

改良なんて、おこがましいことはしちゃダメ。

まずは、言われたことを完璧に覚えなさい」

鬼気迫る顔で母はチエルに言い渡す。

「はい」

理由を説明して欲しかったが、それを聞き返せば今言われたことに反すると、目の師匠でもある母にチエルは答えた。

「そう。」

それでいいのよ、チエル。

寝なさいって言っても聞きはしないんだろっから、もう少し頑張りなさい」

そう言っ母は寝室へ戻っていった。

チエルは、母の手つきを思い返しながら、大根をひたすら剥き続けた。

あと少しやったら寝よう、そう思いながらもいつしか無心に包丁を動かしている。

厨房の明かりは、日付が変わるまで消えることはなかった。

「じゃ、行ってきます」

日の出とともに行われる宮城遙拝を済ませたまま、ガルは家族に向かって言った。

既に肩には鞆がかけられ、その中には筆記用具と受験票が大切に仕舞われている。始発の浮遊車に乗り、砂漠をひとつ越えたオアシスにある高等学校へ、入学試験を受けに行く朝だった。ガルの村からは他に受験するものはいないが、他所の村や規模の大きな町からはそれなりの人数が応募してきている。定員自体がそれほど多くないため、倍率は自然と高くなり、少しのミスでも命取りになる。それだけではなく、入学後授業についていけそうもない者を落とすための試験でもある。定員割れになろうと所定の点数が取れなければ、すべて不合格になるのだった。

自然と表情は引き締まり、ガルの顔は中世には当たり前であった決闘に臨む騎士のようでもあり、三三年前に未曾有の国難を救った艦隊決戦に向かう司令長官のようでもあった。

浮遊車はいくつものオアシスを回り、始発であるにも拘わらず多くの人々が乗り込んでくる。

明らかに同じ目的で乗ってきたと思しき少年や少女も散見された。顔見知り同士なのか、試験前の緊張を解すように話す者たちもいる。だが、ほとんどの少年や少女たちは、互いに視線を合わそうともしない。ガルは話す相手自体がないこともあり、黙って浮遊車の席に身体を沈めていた。

やがて、いつの間にか満員になっていた浮遊車は、定刻通りに高等学校のあるオアシスに到着した。

ガルの村からここまでは一時間。学校までは駅から歩いて三〇分程度と聞いている。日の出が遅い冬であっても、宮城遙拝を済ませてから家を出れば、始業時間には余裕で間に合う。この通学時間であれば、学校の後に家業を手伝うことは、充分可能だ。

浮遊車から吐き出される人の波に飲み込まれそうになりながら、ガルはそんなことを考えていた。

三度目となる高等学校への道を、ガルはひとりで歩いている。

願書を取りに来たときと提出に来たときに歩いてきたため、迷う心配はない。その分周囲を歩くライバルたちを、観察する余裕があった。

当然のことだが、貴族階級や騎士階級の子女がほとんどを占めている。身なりが洗練され、育ちの良さを思わせる者たちばかりだ。ガルのような庶民階級の者はごく少数であり、その少数の者たちも豪農や豪商の子女であり、身なりの良さでは他に引けは取っていない。

ガルの村には貴族や騎士は居住しておらず、今同じ道を歩いている少年や少女たちは別世界の人間のように感じられた。

あまり村から出た経験のないガルは、半ば気圧されたようになっていた。

どの顔も自分より聡明そうに見え、誰もが自信たっぷりに見えていた。この中に入っについて行けるのか、ガルには全く自信がない。それ以前に合格できるかどうか、朝まで抱いていた自信まで揺らいでいた。

「どうしたんだい、随分と心細そうな顔をして。

そんなことじゃ、試験の問題なんか解けないぞ。

ほら、しっかり歩いて」

前を歩いていた少年が、急に振り返ってガルに声をかけた。

互いに言葉を交わすことなく、相手を意識せずにたまたま並んで歩いてきたが、思考の砂漠に沈んだガルは少しづつ遅れていた。

振り向いた少年は一定のペースで歩いており、ガルを追い抜くという意識がなかったため、急に視界から消えたガルが気になったのだった。

突然声をかけられ、呆気に取られて立ち止まってしまったガルに、少年は屈託のない笑顔を向けている。

少年は整った顔立ちに、均整の取れた身体を品の良い仕立ての服に包んでいた。住む世界が違う少年に、どう言葉を返していいかガルは咄嗟に判断できなかった。

「ごめん、驚かせちゃった？」

でも、さつきより明るい顔になったよ。

今度会うときは一緒に通学だと良いな」

少年は立ち尽くすガルのところまで戻り、肩をひとつ軽く叩くと振り向いて、足早に去っていく。

さつきまで暗い想念に囚われていたガルは、すっかり毒気を抜かれたような顔になっていた。

心がすっかり軽くなったことに気付いたガルは、遠ざかっていく少年の背に心の中で手を合わせていた。

「ただいま」

鎚を振るう父に一言挨拶し、ガルは疲れ果てた足取りで家に入った。

既に日は沈み、いつもであればとっくに仕事を片付けている父が、この日はまだ仕事場にいた。

「お帰り。」

その顔だと、聞くまでもないな」

鎚を置いた父がガルに言う。



「うん。」

発表されるまで分かんないけど、やれるだけのことはやってきた。

自信はあるよ」

母が淹れてくれた茶を飲みながらガルは答える。

「まあ、悔いがなけりゃいい」

それだけ言って父は仕事場に戻っていった。

「母さん、ちよつとチエルの宿に行くてくる。

飯はとつといてくれ」

ガルは、疲れている割りに軽い足取りで、チエルの宿へと歩いていった。

一月三一日の夕方、駅の改札でガルは一通の封書を手に、チエルと並んで浮遊車の到着を待っていた。

レグルとエルミが士官学校と飛行士官学校の合格発表を見て、間もなく帰ってくる時刻だ。この日の朝に発表があるため、まだふたりの合否は村に知らされていない。だが、ガルとチエルはふたりの合格を信じ、疑うことはなかった。

やがて浮遊車が到着し、人々が改札に向かって吐き出されてくる。

ガルもチエルも伸び上がって、人の波の中からレグルとエルミを見つけようとしている。

改札へ向かう人の流れの一番最後から、ガルとチエルに向かって手を振る影がふたつ見えた。力強く振られる二本の腕は、それだけでもう結果を知らせているかのような。負けじとガルも、腕に力を込めて振り返す。

改札を抜けたレグルとエルミが、晴れやかな表情でガルとチエルに対峙した。

どちらからともなく合格通知を見せ合い、四人の笑顔は真冬だといふのに花が咲いたかのようだった。

間違いなく、このとき四人は明日への希望を抱いていた。

「危なかったのよ、一般科目壊滅だったんだもん」

ほっとしたような、だが誇らしげな顔でエルミが言った。

もちろん、本当に壊滅であったなら、どんなに魔法の成績がよからうと落第だ。

確かにエルミの一般科目は褒められた成績ではないが、魔法の試験では断トツだった。

特に火の魔法は、この年の受験者の中では一位二位を争う成績だ。氷の魔法の成績が芳しくはなかったが、磨けば光る逸材という評価を得ることができ、一般科目は入学後に徹底的に扱えば良いと判断されたのだった。

「良かったじゃん、飛行士官が魔法優先で」

ざわめく酒場の片隅で、エルミのグラスに酒を注ぎながらガルが言う。

「チエルの慧眼だぜ、エルミ。

もし、士官学校の方だったら、初日におさらばだったな」

酒ビンを手に、エルミがグラスを空けるのを待ちながら、レグルも言う。

「感謝してよね、エルミ。」

今夜は空き部屋があるからね」

満面の笑みを湛え、だが手には酒ビンを構えてチエルが続く。

「もちろん感謝してるわよ、チエル。」

「つて、何よ、空き部屋があるつて？」

「続けざまにグラスを干し、チエルの言葉に不安を覚えたエルミが聞いた。」

「注がれる酒の勢いに、いつかの惨劇というか大失態を思い出していた。」

「だから、今夜は安心してね、ガル」

「笑いをかみ殺しながらチエルが言った。」

「おう、だから飲めよ、エルミ。」

「親父さんにはさ、後で言うておくから。」

「ガル、エルミが死なないように、今夜は寝ずの番してやれよ」

「レグルは笑いを堪え切れていない。」

「結局、俺かよ。」

「まあ、いいや、エルミ、死んでも恨むな」

「目を笑わせたまま怒った表情を無理矢理作り、半分空いたエルミのグラスに酒を注ぎながらガルが答える。」

「冗談じゃないわ、ガル。」

「私は空母航空隊に入って世界中を見て回るんだから。」

「こんなところで死ぬわけにはいかないの」

「注がれた酒を躊躇うことなく飲み干したエルミが口を尖らせる。」

「あれ、エルミは空母勤務希望だったけ？」

てつきりソルから出ずに済む基地航空隊だとばかり思ってたよ。そうか、じゃあ、同じ艦隊になったら楽しそうだな。

俺は砲術だから空母には行かないと思うけど。

メデイエータとの戦争が終われば、砂海軍は親善航海でいろいろと行くだろうしな。

っていつか、酔い潰れるまで飲まなきゃ良いだけだろ、エルミ」レグルが意外そうな顔で聞き直し、次いで呆れたような口調になる。

「みんな、泊まっていっちゃえば、今夜は」

チエルが三人に言う。

「いいのか？」

確かに空き部屋はあるんだろうけど、まさか俺たち全員で一部屋ってわけには行かないだろうよ」

多少、期待に胸を膨らませてガルが問い返す。

もちろん、レグルがいる以上、邪な気持ちを抱けるはずもなく、夜を徹して話せるという期待でしかなかったが。

「ありがたいことはありがたいんだが。

あまりにも不躰じゃないか。

親父さんとお袋さんに話してないんだろ、まだ」

実際のところ、何を今更の感もあるレグルが聞いた。

「大丈夫。

お父さんがそうしるって言ってたし。

後でみんなのうちには知らせてくれるって。

ちゃんと二部屋あるわよ」

厨房の父と目で合図を交わし、ガルの淡い期待を打ちのめす。

いくら幼馴染みとはいえ、許婚でもない男女が同じ部屋で夜を過

「ごすなど、皇国の常識では考えられないことだった。

「じゃあ、飲み直し、ね」

景気よくグラスを開けたエルミが、酒が注がれるのを待ちきれずに手酌で飲み始めた。

「よし、じゃあ、改めて乾杯だ」

ガルが酒ビンをエルミから取り上げ、レグルとチェルのグラスに注ぎ、最後に自分のグラスを満たす。

「何に、乾杯？」

酒が満たされたグラスを目の高さに揚げ、チェルが三人に微笑む。

「そうだな、俺たちの希望に満ちた明日に。

俺たちの手で切り開いていく明日へ。

皇国の悠久の繁栄と、俺たちの明日へ。

そして、皇王陛下、万歳、ってところでどうだ？」

レグルがグラスを掲げる。

「皇国の悠久の繁栄と」

「俺たちの」

「あたしたちの明日へ」

「皇王陛下」

ガルの声にレグルとエルミの声が続き、チェルがそこに続けて一言葉を切る。

四人がそれぞれを見詰めあい、軽く頷いてか一斉に唱和した。

「万歳！」

「乾杯っ！」

その瞬間、酒場にいた者全てが唱和し、そして荒々しく乾杯の嵐

が巻き起こった。

盗み聞きなどするまでもなく、四人がどういった理由で飲んでいくか、知らぬ者などこの村にはいない。ささやかながら四人の少年と少女の未来に祝福を、と酒場全体がひとつになっていた。

良い機会よ、エルミ。ガルを落としちゃいなさい。

喧騒の中、チエルがエルミに目で語りかける。

いくら男女が同じ部屋で夜を過ごすことが常識外れとはいえ、見づからなければそれまでともいえた。

だが、既に酔いが回り、心なしか目が据わっているエルミにチエルの気遣いは届かなかった。

やがて、予想通りエルミがガルに背負われ、チエルの宿へと引き上げたところで祝宴は終わりを告げた。用意されていた部屋に担ぎ込まれ、気持ちよさそうに眠り込んだエルミの隣で布団に入ったチエルは、穏やかに流れている平和なひと時に感謝していた。

「次にこうして底抜けに飲めるのは、いつになるんだろうな」  
並べて敷かれた布団に入って、ガルはレグルに話しかけた。

「そつだなあ、俺もエルミも当分営舎暮らしだからな。

士官学校にいる間は夏の慰霊祭、新年祭に休みはあるけど、村に戻ってこられても一日くらいだし。

中尉任官まではずっと営舎暮らしだ。

ガルが大学校か専門技術学校に入って、帝都に出てくれば休みの前の夜に外出許可が取れたらだな。

その後は、俺とチエルが新居を構えたら、いつでもいいぜ。  
もっとも、帝都にいるかどうかは分かんが」

ほぼ真闇の中で、ガルの気配に向かってレグルは答える。

「そうか。」

そうだな。

エルミとレグルが同じ日に休めるとも限らないんだよな。

それに少尉任官の後は、どこに配属になるかも分からないし。

俺、できるだけ帝都に遊びに行くよ。

魔道通報で連絡取ればいいだろ。

チエルもお前と一緒に、帝都に行くんだろっし」

僅かに口の中に苦いものを感じながら、ガルは溜息混じりに答えた。

「まあ、そうは言っても、俺たちが帝都に行くまで、まだ結構時間はある。

毎回チエルの宿に世話になるわけには行かないけど、何度か飲むことはできるだろうよ」

士官学校の正式な入校は、四月一日だ。

制服は官給品。授業は当然制服姿で受けなければならない。

季節ごとの私服数枚と、常時必要な下着の類に洗面道具。少々の書物に勉強に必要な物。持って行けるのはその程度ものものだ。プライベートスペースなど個人のベッドと小さなロッカーしかない士官学校に持ち込める私物は、ほとんどないと考えてよい。たいていのものは、酒保と呼ばれる購買部で買い揃えることができる。つまり、引越しの準備など、する必要はなかった。エルミについても同様だった。

四月一日までは、これからするであろう勉強の予習と体力増強、そして魔法の鍛錬だけと言ってよい。

ガルの高等学校入学も四月一日付けだが、こちらの入学式は四月

七日だ。

当然ガルは引越す必要もなく、せいぜいできる範囲での予習くらいしか入学の準備はない。もちろん家業の手伝いはあるが、休みは安息日ごとにある。

今のところ、チエルだけが帝都へ行く日が確定していない。

先方から連絡があり次第なのだが、適当な下宿先が見つからないらしい。チエルが行く先は多数の弟子を抱えているのだが、男女を一つ屋根の下に寝かせるわけにもいかず、いくつかの下宿先と契約している。ところが下宿先もいくつかの店と契約していたため、女子寮になっている下宿先に空き部屋がないのだった。年度末を控え修行先を替える者もいるはずなので、四月一日には帝都に入ることできるはずだが、明確な期日がまだ決まらない状態だった。

だが、空き次第入寮しなければ、どこかの店の者に横入りれてしまふ可能性もあるため、連絡があれば明日にでもという状況でもあった。

「多分、チエルが先に行くことになるんだろうな。

そのときには、また底抜けに飲もうぜ」

そう言ってレグルは目を閉じる。

「そうだな。

まだ、時間はある、よな」

ガルはそう答えて目を閉じた。

程なく、横からはレグルの寝息が聞こえてきた。

真闇の中で、ガルは慌しくもゆったりとしている平和なひと時を、この上なく大切なものに感じていた。



## 第11話 秋嵐

「勘弁で、済むかあつ！」

武官室に野太い声が響いた。

裂帛の気合いとは、正にこのことだろう。

声の主は、ソル皇国砂海軍連合艦隊司令長官ゴトム大将。

そして、その声を叩き付けられた相手は、砂海軍大臣キューセン大将だった。

二人は士官学校ではゴトムが一期下である上、公式の場においてはゴトムはキューセンの指揮下にあり、横柄な口を利いていい立場ではなかった。そのことはゴトム自身も充分弁えていたが、この日の会議の後キューセンから言われた言葉に、ゴトムの自制心は霧と消えた。

アレマニア共和国とワイトルス王国との三国同盟の締結が、この日の閣議で決定された。

ゴトムは、ナルミ中将、コーセイ大将とともに、この三国同盟には反対していた。この同盟が締結されてしまえば、ドラゴリー大岩盤における国際情勢から、オリザニア共和国と完全に対立してしまうことは火を見るより明らかだった。そもそも三国同盟自体が、アレマニア共和国とワイトルス王国の政府にとってはサピエント王国との対立やロス共和国への牽制であり、ソル皇国にしてみれば完全なオリザニア対策だった。

世界で第一位と第二位の砂海軍国であるオリザニアとサピエント、第三位から第五位に位置するソル、アレマニア、ワイトルスの対立は、再度世界を戦火の海に叩き込みかねない軍事対立だった。

既にアレマニアがドラゴリー大岩盤上で、他国への侵略意図を隠そうとしていない。

二六―四年から四年間続いた全世界を巻き込んだ戦争で、一敗地に塗れたアレマニアとウイトルスは戦後の賠償に追い詰められていた。社会に対する不満から社会主義政党が合法的な選挙で政権を握った後は、一気に全体主義、軍国主義への道をひた走り、一步早く同じベクトルに傾いていたウイトルスと軍事的な結びつきを強めていた。

ドラゴリー大岩盤の南北に、この大岩盤を支配しようという意図を持つ政権が同時に成立していた。

戦勝国であるサピエント王国や他の国家は、世界大戦の後遺症から立ち直れてはいなかった。

結局のところ、ない袖は触れないため戦後の賠償金は思ったように筆り取することはできず、ただアレマニア国民の不満を掻き立てただけに終わっている。アレマニアとウイトルスの両国に危険な思想を持った政権が成立しようとしたときも、戦争へのアレルギーからこれを制止することなく育つままにしてしまった。当時さらに東に成立していた共産国家であるロスからの共産革命輸出の防波堤にしようという意図があったことも否定できない。

メデイエータとの戦争で世界から孤立しかけていたソルにとって、この両国がドラゴリー大岩盤を征服することは、直接的な利益はない。だが、メデイエータとの関係に否定的なサピエントや他の国々が消滅することは、喜ばしいことだった。もちろん、アレマニアとウイトルスが他国を廃止して、大岩盤に巨大な版図を占める大帝国を並立させるとは思えない。形の上で様々な国々は残るだろうが、事実上両国の傀儡政権がそれらを治めることになり、ソルに口出しす

る国はなくなると考えられていた。

同時にオリザニアにとつては大西砂海を挟んで強大な国家が成立するとあれば、ソルやベロクロン大岩盤上での権益どころではなくなる。

ソル皇国内では、オリザニアの横槍は内政干渉と認識されており、日に日にオリザニアを討てという世論が盛り上がっていた。そこへ持ってきての三国同盟だ。国民のほとんどが熱狂的に賛意を示していた。

近代騎兵軍の勃興期に、アレマニアを範としていた皇国騎兵軍には同国のシンパが当然多い。範をサピエントに求めていた砂海軍の中にも、士官としての成長過程でアレマニアに留学した経験を有するものは少なくなく、その者たちの多くもアレマニアの砂海軍力には敬意を持ってこの同盟に賛成するものが多かった。

軍縮条約締結の会議において鑑定の保有比率を巡ってサピエントとオリザニア対ソル、アレマニアとウイトルスに分かれて激論を戦わせたことも、この二国に対する親しみを国民の間に醸成する結果になっている。

強国として認識されている三国が同盟すれば、他の国々はもちろんのこと、オリザニアもサピエントもその発言力を無視できないという観測が、騎兵軍の公式見解であり、砂海軍の多くもそれに同調していた。

二六三九年までの砂海軍大臣コーセイ大将、海軍次官ゴトム大将、砂海軍軍令部軍務局長ナルミ中將の三人は、この同盟がオリザニアとの決定的な対立に発展することを見抜いていた。

同盟の締結には当然書類仕事が発生する。同盟や条約は砂海軍省の専決事項であり、軍務局第二課が担当している。ナルミが軍務局長を努めている限り、ここを書類が通るはずがない。軍務局長を頭越しにして次官へ書類を持っていっても、ゴトム大将が一喝

するだけだ。当然、同盟反対派のコーセイ大臣がどんな経緯で書類が上がってこようと、承認の印を押すはずがない。

業を煮やした騎兵軍が、強引に騎兵大臣に辞任させ、後任を推薦しないという奥の手を使い内閣を瓦解させた。

次の砂海大臣には穩健派と目されたヨシゴ―大将が就いたが、この人物も穩健派ゆえに同盟に対しても大反対だった。だが、この大臣は良識は充分すぎるほど持っていたが、非情に徹することのできない故人遣いがあまり上手くなかった。

同盟に反対するゴトムとナルミの暗殺を恐れ、ゴトムを連合艦隊司令長官に、ナルミをメデイエータ方面艦隊参謀長転出させてしまった。

ヨシゴ―はゴトムの軍政家としての手腕を高く買っており、いずれは砂海軍大臣としてその辣腕を振るわせたかった。

そのため、ここでむざむざ暗殺されるくらいなら、一度潮風に当てるおくのも良いと判断してのことだったが、一部では反対派のゴトムやナルミの梯子を外したと噂されていた。ヨシゴ―はそれでも同盟に反対していたが、閣内にあつては同盟の発案者である外相が積極的な推進者であり、前内閣のような閣内一致は難しかった。陰に日向に行われる騎兵軍から有形無形の嫌がらせや砂海軍開戦派、同盟はからの突き上げに、ヨシゴ―は短期間に心と身体を蝕まれていった。

二六四〇年一月に、ヨシゴ―は病気を理由に砂海軍大臣を辞するが、陰では自殺未遂の噂も流れていた。

騎兵軍は政治的空白など自らの権勢のためには齒牙にもかけず、意に染まぬ内閣を騎兵相の辞任や後任を送らないなどの強硬手段で潰してきたが、政治的空白を望まない砂海軍はヨシゴ―の後任をす

ぐに内閣に送り込んだ。

それが現在ゴトムに怒鳴りつけられているキューセン大将だった。キューセンは学究肌の穏やかな人物で、学者が間違えて軍人になつてしまったと陰口を叩かれるような大人しい人物だ。一期下のゴトムの気合に押し捲られている。百戦錬磨の政治家や、若手少壮将校の突き上げに耐えられるはずもなかった。

「だが、ゴトム君。

オリザニアとて両大砂海で戦争を行うとは思えん。

ソルかアレマニアのどちらかだけに宣戦布告するわけにも行くまい。

それを防ぐための同盟だと、外相たちは言っているではないか」「キューセンはゴトムに言うが、どう聞いても夢物語であり、ゴトムたちがやってきたことをぶち壊しにした言い訳でしかない。

「大臣、失礼ながら大臣はオリザニアの力を見縊っておられる。

あれほどの国力を持った国は他にはありません。

両大砂海を挟んで、我が国とドラゴリー大岩盤に軍を送ることくらい、いとも容易いこと。

この同盟は、我が国に対する宣戦布告の口実を与えたに過ぎません」

士官学校の後輩であり部下である連合艦隊司令長官が、先輩であり上司である大臣を怒鳴りつけるといふ前代未聞の光景は、ゴトムの自制心が戻ると同時に終わりを告げた。

ゴトムは落ち着いて自らの見通しを語ったが、キューセンはどこ吹く風だ。

「彼の国は孤立主義を取つておる。

アレマニアとウィトルスがドラゴリー大岩盤を席卷すれば、サピエントは我が国どころではなくなる。

南方資源地帯への進出が不可欠な我が国にとって、これは必要不可欠べからざる同盟だ。

それに、贅沢に慣れたオリザニアの国民が、我々と戦争などできるはずもない」

ようやく落ち着きを取り戻したキューセンは、楽観的な見通しを語りゴトムとの会見を打ち切ろうとした。

「ですが、大臣」

「ゴトム君、止むを得んのだよ。」

これ以上砂海軍が反対しては、国を割りかねない。

先の革命紛いのように、陛下にご不安を抱かせてはならん。

あれを思い、これを考え、止むを得ず、真に止むを得ず、賛成した。

貴官を始めナルミ君やコーセイさんが、必死に反対していたこともよく分かる。

勘弁してくれ」

キューセンはそう言つと頭を下げた。

板挟みになったこの状況を、ただひたすら過ぎ去れと身を縮込めているだけだ。

そこには砂海軍大臣としての威厳も、士官学校の先輩としての貫禄も欠片もない。ゴトムは眼前で頭を下げる上司である先輩を、凍り付くような冷たい目で見下ろしている。さっきは激情のあまり怒鳴りつけたが、今は再度怒鳴りつける気も失せていた。

やがて、ゴトムは静かに立ち上がり、キューセンに目もくれず部屋を出ていった。二六四〇年九月一九日の夕暮れのことだった。

「小母さん、今夜は遅くなりますので、夕食は結構です」  
二六四〇年九月二八日の朝、下宿の食堂に置いてあった新聞を見ながらガルが言った。

この四月にガルは冶金技術専門学校に合格し、帝都に下宿するようになった。

高等学校では品行方正に努めていたおかげもあり、授業料全額免除の特待生こそ逃したものの、半額免除を勝ち取っていた。試験の成績がよかったことはもちろんだが、高等学校からの内申書がモノを言った。二年間担任を勤めた教師から、これ以上はないというよい内申を書いてもらっていたのだが、当然ガルがそれを知ることはない。ただ、試験の結果と授業料半額免除が釣り合わないことくらいは理解できており、ガルは担任の教師に対し深い感謝の念を抱いている。

もちろん、一家で引越せるはずもなく、帝都にいるエルミの次兄の紹介で、賄い付きの下宿に起居するようになっていた。

「そうだったわね、今日は懐かしいお友達と会ってくるんだっけ？」  
下宿屋の女将が顔をほころばせて頷いた。

士官学校と飛行士官学校に進学したレグルとエルミはともかく、レグルと一緒に帝都へ料理修行に出たチエルとはなかなか会うことはできなかった。

レグルとエルミは国から俸給が出ているとはいえ学生であり、安息日にはほぼ確実に休みが与えられている。しかし、外出許可は交代制であり安息日毎に外出できるわけではなく、ふたり揃っての外出はこの二年間の間に数えるほどしかなかった。それでもガルは帝都に出てきて以来、どちらかとは都合のつく限り会うことはできたのだが、安息日こそかきいれ時となるチエルはそうもいかない。チエルとレグルが会えない状況にも拘らず、学生の気安さもあってガ

ルは時折隣のオアシスまで足を伸ばしていた。もちろん、チエルがレグルを捨てて自分に振り向くなど、微塵も考えてはいない。チエルにしても同じことで、レグルには会えず、友達も一日中顔を合わせ続ける修行仲間しかいない中、時折訪ねて来るガルは、故郷と自分を繋ぎ止める絆にも似た存在だった。

店が引けた後のチエルと浮遊車の最終便までの短い間、駅近くの深夜カフェでお茶をするひと時がガルとチエルにとってはささやかな楽しみになっていた。

「あんまり突っ込んだ話はできそうもないですけどね。」

珍しく隣のオアシスで料理修行してる子が、安息日に休みをもらえたんですよ。

士官学校に行ってる許婚と、飛行士官学校に行ってる幼馴染みが同時に外出許可取れたのも珍しいんですけど。

「こんな情勢じゃ、あんまり軍の話は聞けないだろうなあ」  
ガルの目の前に広げられた新聞の一面は、ソル皇国、アレマニア共和国、ワイトルス王国の三国軍事同盟の締結を報じる記事で埋め尽くされている。

学生が社会に目を向けられるようにと、下宿屋の配慮で主要三紙を購読しているが、どの新聞も同盟締結を喜ばしいことと報じていた。

この同盟によりソルがベロクロン大岩盤に築いた権益は、オリザニアに侵すことはできなくなったと書いている新聞はまだ大人しいほうだ。この時代にオピニオンリーダーを自認する最も発行部数が多い新聞は、アレマニアのドラゴリー大岩盤征服は規定事実であり、それに呼応してソルはベロクロン大岩盤を支配し、両者がその勢いを駆ってバキシム大岩盤を制すれば、三国による世界統治が実現すると大衆を煽っている。冷静に世界情勢に目を向ける者であれば、そのような新聞の主張は愚者の戯言と切って捨てることも可能だ。



だが、新聞社によってバイアスがかけられた情報しか与えられない状況では、世界に目を向けられるものは政治家と軍人くらいしかない。

「今は聞けなくても、もう少しすればいろいろと教えてくれるんじゃないかって？」

今回の同盟、ソルにとっては良いことばかりでしょ。

まさか、前の大戦のときみたいに、ドラゴリー大岩盤まで派兵することはないでしょうし。

オリザニアが引つ込んでしまえば、西部大東砂海共栄圏を邪魔するような悪辣な国はないでしょうしね」

女将の言い分が、この時代に生きる市井の人々が持つ意見の趨勢だった。

「だと良いんですけどね。

僕はなんとなく、危ない気がしますけど。

まあ、僕が何言ったところで変わるわけもないし」

新聞を畳んでガルは食器を片付ける。

「いつてらっしゃい。

どうする、ガルちゃん、遅くなるようなら、合鍵渡しとこうか？」

マスターキーの束から、下宿の入り口の鍵を探しながら女将が聞いた。

「そうですね、一応お借りします。

泊まってくるようなことは、ないと思うんですけど。

飛行士官学校の奴がどれくらい飲む気なのか分からないから」

そう言ってガルは、今まで一度も使用することのなかった鍵を受け取る。

「ゆつくり行つてらっしゃい。

でも、みんなが寝静まつてるからって、女の子連れ込んだじゃダメ  
よ」

悪戯つぽく女将は笑い、ガルを送り出した。

「そんなこと、したことないじゃないですか。

じゃあ、行つてきます」

口を尖らせてガルは言い返し、下宿を後にした。

「どうだい、学校の方は。

もう、いい加減慣れただらう？」

士官学校の制服をきつちりと着込んだレグルがガルに訊ねた。

「いいなあ、ガルの学校は。

制服なんてないんでしょ？」

私には、この制服っていうのは窮屈だわ。

まさか外出時も着なきやいけないとは思わなかったわよ」

何度も繰り返される愚痴が、エルミの口から零れ落ちた。

「まあ、そろそろな。

もう半年になるんだし。

しかし、エルミはもう一号生徒だろ、お前こそいい加減に慣れた  
らどうなんだ？」

七つボタンに詰襟という飛行士官学校の制服の胸元に目をやりな  
がら、ガルがからかう。

三年制の士官学校と飛行士官学校では、一年次を三号生徒、二年  
次を二号生徒、三年次を一号生徒と呼んでいる。

三号生徒は右も左も分からない状態で、いきなり規則や慣例で雁字搦めの学校と寮に放り込まれる。

入学入寮一日目は、二号生徒が懇切丁寧に様々なことを教えてくれるが、翌日からは突然鬼に変貌する。廊下ですれ違った祭の挨拶の聲が小さいというだけで殴り飛ばされ、敬礼の指の角度を見咎められては張り倒され、食事の際に上級生より先に箸を取ったといつては蹴り飛ばされていた。最初は何故殴られたのかすら分らず食って掛かる三号生徒もいたが、そのような態度を取ればそれこそ袋叩きだ。だが、決して怪我をするような殴り方をするのではなく、基本的には殴った後に三号生徒が納得するまで懇切丁寧に理由を説明する。

もちろん、三号生徒には入学時に『上級生の言葉は皇王の言葉と同義であり、一切の反抗は許さない』と言い渡されていた。

理不尽でしかないのだが、戦場において上官の命令を聞かない部下に存在価値はない。

たとえ承服し難い命令であっても、その都度上官と衝突しては、瞬間の間に勝敗が決する戦場では生き残れない。何があっても命令には服従する兵や下士官、下級将校を作り上げなければ、軍という組織は維持できないのだった。

三号生徒は理屈ではなく殴られたくない一心で、上級生の言うことを聞き、命令に従う。そうすることによって、いついかなるときでも命令に服する士官ができあがるのだった。

もちろん、上級生の威光を笠に着て、下級生の人としての尊厳まで踏みにじるようなことがあれば、その上が黙ってはいない。

「首がね。

どうしても慣れないのよ。

だいたい、中等学校るときはセーラー服だったんだから。

あんたたち、よくこんなの着てられたわね」

本当なら詰襟のホックを外したくてしょうがないエルミが、首元に指を突っ込みながら答える。

慣れないのは平手打ちもなんだけど、とこれは口に出さずに呟いていた。

エルミにしてみれば、たとえ教育のためとはいえ下級生の頬を張ることに抵抗がある。

男同士であれば少々怪我をしてもたいした問題ではないのだが、飛行士官学校には少なくない女子生徒がいる。暗黙の了解で、男子上級生が女子下級生に対して手を上げることはない。当然、女子下級生に対する教育はエルミたちに回ってくる。三号生徒の頃は覚えることが多すぎて、引っ叩かれた後に怒り覚える余裕もなかったが、いざ下級生を張り倒す立場になってみると恨みを買うのではないかという恐怖もあった。

代々そう思うが続いているということに気付いた頃、一号生徒から同じ思いだったことを告げられて、エルミはようやく三号生徒の頬を張れるようになっていった。

「チエルは、何時頃になるんだ、レグル？」

せっかくお前たちが同時に外出許可と、チエルが安息日に休みが取れたのに」

ガルが時計を気にしながら聞いた。

今腰を落ち着けている酒場の閉店時間まで、あと二時間ほどしかない。

それぞれの授業が終わってから、交通の利便を考えてチエルのオアシスに近い位置にある酒場に集まっていた。さすがに帝都だけあって、村にいた頃とは浮遊車の便数も路線数も桁違いだ。帝都とチエルが始業しているオアシスも、深夜まで浮遊車が運行していた。それでもそれぞれが帰る時間を考慮すると、そんなに遅くまで飲み

歩いているわけにはいかない。

それなのに、チエルが来る気配はまったくなかった。

「最近、少しは料理をさせてもらえるようになったらいいからな。

そうそう持ち場を離れるってわけには行かないんだらう。

どうする、隣のオアシスマで行ってみるか？

たまには奢ってやるよ。

俺たちは俸給があるからな」

レグルがエルミを見て頷く。

「そうね、ちよつとくらいならいいわよ、ガル。

この前、教官に連れて行ってもらった料亭って、泊まってくることもできるみたいだしね。

私、ちよつとチエルに連絡とってみるわ」

そう言ってエルミは酒場のカウンターに行き、魔道通信の機器を貸してもらえないか交渉を始めた。

一般家庭にはまだ通信機器は僅かしか普及していないが、商売をする店においては不可欠になりつつある。

官公庁や公共施設のほとんどには設置は完了しており、一般の人々の連絡にも使われ始めている。同時に商店や大きな飲食店にも取り引きだけでなく商品や席の予約のため、魔道通信機器を備えるところが増えてきている。個人的な連絡も、公費や経費ではあるが、多少であれば目を瞑っているところが多い。

エルミは店主に事情を話し、店主も快く魔道通信機器の貸してくれた。こんなところでも飛行士官学校生徒の制服が役に立っている。

「まだお店にいたわ、チエルは。

でも、もう着替えて出てくるところだったみたい。

ギリギリつてところね。

チエルのお店から近くにある料亭を予約してもらえらつて。

同業のよしみで格安だつてよ」

しばらくしてエルミがうきうきした表情とともに戻つてきた。

もちろん、この時代の料亭には芸者が出入りし、宴会の後は同衾することも可能な場所だつた。

当然、エルミがそのような目的で行くはずもなく、教官に社会勉強の一環として連れて行かれたただけだ。レグルは同級生や上級生、教官からその知識を得ていたが、料亭までは行くことはあつても芸者と寝るようなことは決してしていない。チエルもそのような業界に身を置いている以上、本来酒席が済んだ後にどのようなことが行われているかは承知している。当初は性を売り物にする芸者や、そういった場所を提供する料亭に抵抗を感じていたが、今ではそれが当たり前の社会の仕組みなんだと自身を納得させていた。

ガルにしても、金さえあればそういったところで芸者と寝ようが誰からも責められる筋合いはないのだが、チエルに対して操を立てているため、そういった施設とは縁がなかった。

「じゃあ、そこで落ち合うか。

ここは、割り勘でいいか、ガル？

仕送りだけだろ、料亭は奢つてやるから、安心しろ。

お前の懐具合は分かつてるさ」

レグルが勘定を手早く済ませ、三で割つた金額をそれぞれに言った。

ほろ酔い加減の三人は近くの駅から浮遊車に乗り、チエルがいるオアシスへと移動する。

さつきまでいた酒場で三人は、半年振りの馬鹿話に興じていた。

もちろん、レグルもエルミも漏れ伝わってくる軍の機密に関りそう

な話をするとは一切ないし、ガルもその辺りは空気を読んでいる。今朝見た新聞発表について二人の意見を聞いてみたくもあつたが、さすがに大人数の耳に入りやすい状況では憚られるものがあつた。学生ではあつても事実上軍人と看做されている者が政治的な発言をすることは、どのような噂となつて世間を駆け巡るか分らない。料亭であれば個室は仕切られており、少々声を潜めれば他の部屋の者に話を聞かれることはない。万が一、店の者に聞かれたとしても、それを外に漏らさないことが店の信用というものだった。ガルにはもうひとつ聞いてみたいこともあつた。

#### オリザニア共和国からの対ソルくず鉄禁輸。

この時代、ソル皇国は製鋼技術こそそれなりの水準に発達していたが、国内に鉄鉱石の鉱脈がほとんどなかったことから、他国から銑鉄やくず鉄を輸入して工業製品を製造している。国産鉄鉱石やそのものを輸入して製鉄するより、外国、特にオリザニア共和国からの安い銑鉄やくず鉄を使った方が圧倒的に経済的であつたため、製鉄技術が発達する余裕がなかった。このくず鉄を三国同盟締結の前日、九月二六日に禁輸するとオリザニア共和国政府は通告してきていた。三国同盟に対する牽制なのか、近い将来の開戦を睨んでの動きなのかは判然としないが、同盟締結の前日に通告してきたところからその両方と見ていいと考えられていた。

くず鉄が入らなければ、工業製品はもちろんのこと、軍備の生産が滞る。

艦艇も航空機も、銃や鉄兜、砲弾、銃弾、あらゆる物が鉄から作られている。ガルにとっては、実家が廃業に追い込まれかねない由々しき事態だ。前年までには段階的に魔鉱石も禁輸されていた。これは明らかにソルの経済を締め付けるばかりでなく、軍の動きを封じようとするものだった。ベロクロン大岩盤への進出に対する制裁措置とみて間違いない。

これに対抗してソル皇国は、南方資源地帯といわれている列強の植民地に、新たな資源の供給地を求めようとしていた。もちろん、オリザニアと歩調をあわせたドラゴリー大岩盤の列強が簡単に資源を供給するわけもなく、資源が欲しければベロクロン大岩盤からの撤兵をソルに対して求めている。真綿で首を絞められるような経済封鎖の解決に、ソル皇国政府および軍部はさらなる軍事的手段で抗しようとしていた。

どんよりと曇った街を歩く人々の表情に、今のところそれほど陰は見られない。

まだ国内に備蓄された資源に余裕があるため、今日明日に経済が行き詰るといふことはない。しかし、これが一年二年先となれば、魔鉱石の不足は確実に経済を破綻させる。鉄資源が枯渇して新しい製品を作れなくとも、修理や補修の需要がなくなることはないため、当面ガルの実家が廃業することはない。だが、魔鉱石がなければ修理補修といったことすらできなくなり、間違いなくガルの実家は廃業に追い込まれてしまうだろう。ガルの実家だけではなく、ありとあらゆる事業そのものが停止する。化石燃料がほとんどないこの世界では、魔鉱石にすべてのエネルギーを依存しているのだった。

動けない艦艇や航空機など、飾り物の役にも立たない。

ソル皇国は魔鉱石や鉄鉱石だけに留まらず、ゴムやボーキサイト、スズやレアメタルといった資源をほとんど国内に持っている。

それを打開するためのベロクロン大岩盤への進出だったが、それが却って経済の首を絞めることになっていった。その辺りをどう考えられているか、ガルは二人の意見も聞いてみたかったのだった。



やがて、浮遊車は駅に到着し、多くの人々を吐き出した。

ほとんどの人々は家路を辿る途中であり、ここから乗り換えて行く者も多い。帝都に次ぐ規模を持ったオアシスの主要駅は、夜が更けても多くの人々でごった返していた。

ガルたちもローカルな支線に乗り換え、三つ目の駅で下車してからは歩いて料亭を目指した。駅から近いほど料亭の格や規模が上であり、立派な門構えが続いている。当然、ガルたちがそのような料亭に自力で行けるはずもなく、裏通りにある少々格の落ちる店が今回の目的地だ。それでも先程まで飲んでいた店とは、天と地ほどの差があった。

「おい、大丈夫なのか、こんな店に入っちゃまって？」

ガルが門の前で気圧されたように言った。

「大丈夫だ、安心しろ。」

チエルが俺たちの懐具合を知らんとも思うか？

それなりのところを選んでいささ

レグルは全く気後れしたところを見せず、ずかずかと門を潜ってしまった。

「何よ、ガル。」

随分と気が小さいんじゃない？

今度俸給が入ったら、表通りの店にも連れて行ってあげようか？」

エルミも堂々とした足取りで門を潜ろうとした。

「いや、それは分かってるんだが。」

俺は、こういう店入るの初めてなんだよ」

田舎者と馬鹿にされはしないか、ガルは余計な心配をしている。

「お店にとっては、お金だけが重要なのだ。」

田舎者だろうと、都会者だろうと、お金を払っていけば扱いが変わることなんてないの。」

そう言っているとエルミはガルの腕を取り、まるで恋人同士がするように腕を組んで門を潜った。

「おい、ちょっと、エルミ！」

放せ、こっ恥ずかしいっ！」

ガルが必死に抵抗する。

店に入ることより、エルミと腕を組んでいることに抵抗を感じていた。

恋人として認識していないエルミに腕を取られていることへのささやかな抵抗感と、自分の肘がエルミ胸に当たってしまう恥ずかしさがない交ぜになり、ガルの抵抗は封じられた。

「いいの。」

たまには、こういうのもいいでしょ？」

少しだけ得意気な表情で、エルミはガルを引っ張っていく。

いいじゃない、少しくらい恋人気分になったって……

「何騒いでるのよ。」

そっちのほうで恥ずかしいよ、ガル。

早く入って」

チエルが玄関で腕を組んで睨んでいる。

もちろん、怒ってなどいるわけもなく、少々からかってやるつもりだけだ。

「ああっ、チエル!？」

なんとかかしてくれえ！」

情けない声を上げ、ガルは助けを求めた。

「あんまり恥ずかしい真似はするなよ、ガル。

とにかく、四人が揃うなんて久し振りだ。

まずは、乾杯といこうぜ」

レグルが猪口を手に取ると、それぞれの横に就いた芸者たちが酒を注ぐ。

チエルの発声で猪口を干すと、間髪を入れずに酒が注がれた。

芸者たちから微かに香る白粉の匂いや、その洗練された所作にガルは圧倒されて酒の味など判らなくなっていた。

「ありがとうございます、お姐さんたち。

後は、こっちでやりますから」

幾度かの酌と返杯が繰り返された後、チエルが芸者たちに頭を下げた。

どう頑張ってもガルたちの懐具合で、芸者を呼ぶなど不可能だ。

たまたまこの日はチエルと顔見知りの芸者たちがこの料亭に上がっていたため、ちよっとくらいならとそれぞれのお座敷を抜けてきてくれたのだった。もちろん、その席に呼んだ者たちの了解は得てのことだ。士官学生や飛行士官学生にとって芸者など珍しくもないのだが、地方から帝都に勉強のために来た若者に学問以外の勉強をそれぞれが客が快く、ちよっとした悪戯心を含めて芸者たちを送り出していた。客の意を受けた芸者たちはガルに身体を押し付けたり、返杯された猪口に口紅を残し、そこから飲むように言ったりと、一頻りガルをからかって座敷を出て行ったのだった。

後には完全に固まったガルと、それを見て大笑いするレグルたち

三人が残されていた。

「魔鉱石の節約は、もう始まっているよ。やっぱりウチは火力が勝負でしょ。」

他に比べたら消耗が早いから、もう大変よ」

少し眉根を曇らせてチエルが言った。

三国同盟とオリザニアによる魔鉱石、くず鉄禁輸の関係や影響をガルが聞いて、チエルがまず答えていた。

「ここだけの話、実弾演習はほとんどやってないんだ。」

まあ、これは禁輸以前からなんだけどな。

でも、この一年は一、二回くらいだぜ。」

標的艦の艦長殿が暇だつて愚痴ってるって話だ」

猪口を口元に持つていき、そこで止めてからレグルが言う。

「そうねえ。」

私たちは模擬弾だし、フェクタム帝国産の魔鉱石がまだあるからね。」

でも、国内での訓練は減ってるみたいよ」

座椅子に背を預け、少々だらしない格好でエルミが答えた。

既に制服の上着は脱いでおり、首元が楽になったせいかわかりだらけている。

「どうなんだ、やはり、同盟締結は皇国に良いことはないのか？開戦はあるのか？」

単刀直入にガルが聞いた。

ガルとしては戦争を肯定も否定もしていない。

ただ、幼馴染が死の危険と隣り合わせになつてはほしくない。

「俺は、あると見ている。」

いつになるかは、はっきりと見えないけど、来年、再来年には確  
実だ。

日乾しになる前に、かならず皇国は動く。

南方に手を伸ばすだろうな。

同盟は南方に植民地を持つ列強への牽制だ。

本国が戦争状態になれば、植民地に構ってなんぞいられないから  
な」

やるせない表情でレグルが猪口を呷る。

「つまり、南方資源地帯への進出のためよ、同盟は。」

それで平和的に進駐なんてできないから、結局は戦争だよな。

でも、そんな理由で人殺しはしたくないあ。

軍は民を守るためにあるって、私は思うの。

他の国から資源を奪ったり、そのために攻め込んだりするためじ  
やないって。

今、皇国のやってること、やろうとしてることは誉められたこと  
じゃないよね」

いつになく大人びた顔でエルミが言う。

普段の脳天気さは、すっかり影を潜めていた。

「列強植民地を解放して、西部大東砂海共栄圏を作るんだって言う  
けどさ。」

それって、列強の代わりに皇国が大東砂海西部を支配するって言  
ってるようなものだよな」

酔いが回ってきたのか赤い顔でチエルが言った。

「どういうことだ、チエル？」

西部大東砂海共栄圏は、列強植民地から解放した独立国家と対等  
の関係を結ぶって謳い上げてるじゃないか？」

ガルが不思議そうな顔でチエルに聞いた。

「ガル、新聞くらいは読んでみたいけど。

字面を見てるだけじゃダメなのよ。

あたしもお店でお客さんの言ってること聞いて解ったから、偉そうなこと言えないけどさ。

だいたい、解放してくれた国と解放された国が、対等に付き合えると思う？

無理でしょ？

自力で植民地のくびきから逃れられない国がさ、もし解放できたとしてよ、皇国に逆らったらどうなると思う？

圧倒的な軍事力を背景に、形だけの独立国家を恣にするだけですよ。

政府には、多分表に出ないように皇国の人間が睨みを効かせる。

何か変わるっていうのかしら」

チエルの言葉に、ガルは学業に専念するあまり、自分の視野が狭いことを恥じていた。

「おい、チエル、誰かに聞かれたらどうするんだ？

さすがに拙いぞ、それは」

一瞬で顔を蒼ざめさせたレグルが止めようとした。

メディアエータ料理の修行をしているからというわけではないが、

チエルは大東砂海西部の国々に対して好意的な考えを持つようになっている。

だが、その中でも特にメディアエータは、泥沼の戦いを継続中の敵国だ。肩入れするような発言が第三者にでも聞かれたら、非国民扱いならまだマシなほうで、下手をすれば特別高等警察や憲兵に引張られかねない。

特別高等警察は主に共産主義者を取り締まりの対象にしているが、

反戦活動や似非宗教などの反政府的な団体や個人も監視するようになっていいる。

数年前には共産主義作家を過酷な拷問で死に追いやっているが、捜査はスパイを用いるなど陰湿なものだった。書物の検閲も行っており、思想統制の尖兵となっている。目を付けた人物を共産主義者や反戦活動家に仕立て上げ、闇に葬るような真似しもしていた。その陰湿な行動から、たとえ戦争を推進する立場の者からも、特高という組織は蛇蝎の如くに嫌われている。

一方憲兵は騎兵軍大臣の指揮下にある軍事警察だが、行政警察、司法警察の分野にも場合によっては所轄大臣の指揮によって入り込んでいる。

本来、軍隊内の犯罪を取り締まる組織であったはずだが、いつの間にか軍に対して反抗的な者も取り締まるようになっていた。職務の性格上、他に対して高圧的な態度であることが多く、憲兵に対するイメージは良いものではない。かつて、帝都を襲った大震災の際に無政府主義者とその内縁の妻、幼い甥を殺害したこともあり、特高と並んで国民から嫌われる存在になっている。

「大丈夫よ、レゲル。」

何でこの店にしたのか、それくらい解るでしょ」  
からからと笑ってチエルははぐらかす。

主人同士の仲が良いこともあるが、座敷で起きたことをどんな些細なことであれ外部に漏らさないというのが、店の信用というものだった。

表通りの店には特高や憲兵の息の掛かったものが潜り込んでいることもあるが、この店に関しては今のところそういった心配はない。天下国家を論じる割には、庶民的とはいいい難い生活を送ろうとする共産主義者や無政府主義者たちが、格が落ちる店に来ることはほとんどなかった。仲間内に対する見栄が先走り、会合や密談には借金

を重ねても高い店を選んでいるのだった。

高価な酒や料理を貪りながら芸者を侍らせ、天下国家を夢だけで論じる彼らは、ほとんどの人々からは害虫同然に見下されていた。

「ならいいが。」

あんまり外では言わないでくれよ。

アカに間違えられたら……」

「出世に響く？」

レグルの言葉を遮り、チエルが混ぜっ返した。

「莫迦」

顔を真っ赤にしながらレグルが答える。

ふたりの息の合った遣り取りに鼻白みながらも、ガルは思わず笑ってしまった。

「あんたたち、冗談でもそういうことは止めてよね。」

さつきから冷や汗が止まらないわ。

察に帰ったら憲兵が待つてたなんてごめんだからね」

本気で血の気を引かせたエルミが二人を嗜めた。

「そういうエルミも、さつきは随分なこと言っただじゃないか。」

いいのか、戦争反対みたいなこと言っちまって」

ガルが心配そうに聞く。

皇国の方針を否定するようなことを、エルミは言っていた。

「大丈夫よ、ああいう意見は飛行士官学校の中だけじゃなく、提督たちの間にも普通にあるもの。」

それに、いざ命令を受けたら、それには従うわよ、私たちは。

従わなきゃいけないもの」

軍人として骨の髄まで叩き込まれた命令には服従するという精神



は、既にエルミヤレグルの中に息衝いている。

「そうか。」

とにかく、俺はお前たちに死んで欲しくないだけだ。

なんか俺が変なこと聞いちゃまって、湿っぽくなっちゃったな、久し振りに四人揃ったのに。

すまん。

まあ、折角だから盛り上がりうぜ、奢ってもらう身分ですまないが」

ガルが座敷の空気を変えようとして、銚子を直接呷った。

「ああ、勘定は気にするな。」

腰が抜けるまで飲んでやろうぜ。

次はいつになるか判らんからな」

レグルも負けじと銚子を呷る。

「お願いだから、後々座敷を汚すような真似はやめてよね。」

チエルの立場が悪くなっちゃうでしょ」

そう言いつつ、エルミもかなり飲んでいた。

「あなたが一番心配なの」

短く言い捨てたチエルが、何か覚悟を決めたように銚子を傾ける。

やがて軒を叩く雨の音が聞こえてきた。

「降り始めちまったか。」

珍しいな、こんなに本格的に降るなんて。

泊まりにしておいて正解だな」

レグルの開き直ったような呟きが天に聞こえたのか、雨脚は激しくなる一方だ。

両極の海から送られてくる湿った風が、ベロクロン大岩盤上で雨を降らせ、その残りがソルに恵みの水をもたらしてくる。

毎年九月下旬かせー〇月上旬頃には纏まった雨が降るが、時に大荒れとなることが多々あった。

皇国の未来を思わせるような、嵐の季節がやってきた。

## 第12話 熱狂

窓を打つ雨音に、ガルは目を覚ました。

さすがに土砂降りとあつては、宮城遙拝も免除とされていた。年に数回しかないことであり、ほとんどの人々はこの日がいつ来るか心待ちにしている。だが、それが安息日と重なった場合、朝ゆつくりと寝ていられる代わりに、この一日は家に籠もっていることを強制される子供たちは、複雑な思いを抱えていた。

二日酔いで痛む頭を振りながら、ガルは隣の布団を見た。

何度も目を擦り、そこを確かめる。

だが、目に映る光景が、変わることはない。深呼吸。瞑想。もう一度深呼吸。

なんで、エルミが寝てるんだ？

もちろん、ガルはエルミを引つ張り込んだ記憶はない。

昨夜真つ先にできあがったエルミを、間違いなく女子部屋に放り込んだはずだ。チエルがエルミを引きずっていった光景を、ガルははつきりと覚えていた。

そして自分はレグルと話しながら寢床に付いたはずだ。天地神明に賭けて、女子部屋に乱入などしていない。第一、自分の衣服はきちんと枕元に畳んで置かれていないか。ガルは布団の上に胡坐を掻き、必死になって昨夜の行動を思い出そうとしていた。だが、痛む頭は冷静な思考を中断させ、考えれば考えるほど今の状況にガルは混乱していった。

突然、襖の向こうから聞き覚えのある笑い声が響いてきた。

大きく襖が開け放たれ、涙を流さんばかりに大笑いしたレグルと

チエルが入ってくる。

「やおらエルミが布団から起き上がり、憤懣やるかたないといった表情でそこに座りなおした。」

「何？」

突然のことに、ガルは一言言うのがやっとだった。

「もう、なんで入ってこないのよ。」

「こんな美女が隣に寝てるなんて、千載一遇の機会でしょうよっ！」  
「もちろん、この時代に婚前交渉などもつてのほかであり、万が一人ガルの理性が吹っ飛んでいたらすぐさまレグルが止めに入るつもりではいた。」

もし、ガルが二日酔いでもなく冷静であれば、常識が行動を縛り、エルミの布団に潜り込むなどあるはずもない。

誰もがガルがこの状況に狼狽することを、笑い飛ばすつもりでいた。

学生であるガルが安息日に二度寝もしくは寝坊することは当たり前だが、士官学生であるレグルとエルミは、この二年五ヶ月の間に日の出前に起床する習慣が血肉と化している。

チエルにしてみても料理の仕込み等朝早くからやることは山ほどあり、朝食時の開店に間に合わせるためには日の出前には仕事をはじめている必要があった。昨晚したたかに飲み、手荒く酔ったとはいえ、身体に染み付いた習慣、それも鉄拳とともに染み込まされた習慣は、半ば恐怖心としても発揮されていた。

気持ちよさそうに眠りこけるガルを見て、レグルが悪戯を考え付いたのだった。

「酷えなあ、お前ら。」

「人を弄んで楽しいか？」

腹立たしくも自虐的な楽しさを感じていたガルは、朝食を掻き込みながらとりあえず笑った。

「ごめんね、ガル。」

本気で笑わせてもらったわ。

あんたたちも、もうちよっと入ってくるのは自重しなさいよ。

すっごく面白かったんだから」

内心ガルの常識と二日酔いを恨みながら、エルミがレグルとチエルに文句を言った。

「だって、あれ以上は我慢できなかったのよ。」

ガルの顔つたらなかったわ」

とりあえず口の中の物を飲み込んでからチエルが言う。

万が一にも、何か飲み食いしながら思い出しでもしたら大惨事は  
確実だった。

「すまん、エルミ。」

二人置いて帰るつもりだったんだが。

まさか、お前一人に勘定を押し付けるわけにもいかないと思って  
な」

いち早く食事を済ませたレグルが、ゆったりと茶を飲みながら言  
った。

「もういいけどさ。」

でも、チエル、昨夜は慌しくて聞けなかったけど。

よく安息日に休ませてくれたな」

漸く落ち着きを見せたガルが、何の気なしにチエルに聞いた。

「そうね、やっぱり、物資が滞ってるのよ。」

魔鉱石もそうだけど、いろんなものがね。

今年の七月に贅沢禁止令って出たでしょ。

お客様自体減ってるのよ。

その上、ウチなんかはそれほど影響ないんだけど、お客様にお出  
しできる料理の値段の上限が決められちゃったの。

だから、高級店っていわゆるお店にお客が流れちゃってねえ。

ここぞとばかりに、ね。

勝手なもんだわ、贅沢禁止って言って外食減らす割には、安くな  
った高級店にみんなで行くなんて。

材料抑えるしかないから、味はそんなに変わらなくなってるのに  
チエルは負け惜しみで言っているわけではなかった。

自身の味覚を鍛えるため、時間があれば他の店で食べることは欠  
かさない。

値段を抑制されてしまった高級店にも、幾度となく足を運んでい  
る。

自身の舌で確かめた結果、調理の技術や手間隙は落としていない  
が、材料の質が明らかに低下している。

もちろん値段に釣り合わない料理を出すわけにはいかないためだ  
が、当然物資の流通が滞っていることも原因にある。贅沢品と見ら  
れる食材の販売禁止もあるが、軍関係が優先され流通に係る魔鉱石  
が足りなくなっているのだった。

「だから、俺たちの俸給でもお前に奢れるっていうわけだ。

ありがたいような、ありがたくないような理由だけだな。

軍にも、いろいろ歪が出てきているがな」

溜息をつくようにレグルが続けた。

もちろん、この場だけの話であり、これ以上続ければ軍機に関る  
内容だ。

当然士官学生であるレグルが軍機に触れる機会などあるはずもな

いが、時折漏れ伝わってくる内容のどこに極秘の事項が含まれているかは分からない。このときレグルが念頭に浮かべていたのは、西の軍都と呼ばれる砂海軍工廠がある町に赴任していた先輩から聞いた噂だった。

軍縮条約の失効を見越した新型戦艦は、『あ 一四〇』計画の四隻の建造が予定されていた。現在は西工廠と南工廠、そして帝都工廠の三ヶ所で起工され、それぞれが必死に建造が進めている。

一〇八号艦と呼称された西工廠で建造された艦は、ふた月半ほど前の八月八日に進砂を完了し、現在日に夜を継ぐ突貫工事で儀装が進められている。同型艦の一〇九号艦は南工廠で船体のほとんどは完成されており、まもなく進砂の予定だった。一一〇号艦は、六年に亘る帝都工廠ドックの拡大工事の完了を待つて、この六月に起工されている。そして、一一一号艦は一〇八号艦の完成を待つて西工廠で起工される予定だ。一番艦である一〇八号艦の不具合を二番艦の一〇九号艦で修正し、その結果を以つて一一〇号艦、一一一号艦は改一〇八号艦型として建造する予定であるため、起工の時期にずれが出ていた。

もつとも、戦艦を建造できるドックが三ヶ所しかないため、どうしても一一一号艦の就役は数年後にずれ込むことはどう足掻いても変えられない現実だった。

理想で言えば同時起工同時就役なのだろうが、就役後に不具合を抱えたままの艦を四隻も同時に運用することは効率が悪すぎる。

改装を施そうにもこれほどの艦を収容できるドックが現在使用中の三ヶ所しかないため、現実的には無理な話でしかない。今からドックを建設しようにも、もともとあるドックの改修だけで六年を要したことから、これも現実的な話ではない。本来であればインフラの整備も同時進行してしかるべきであり、そのように計画を立てるべきなのだが、ソル皇国の気質として攻めを重視し後方を軽視する

風潮があり、攻撃兵器の製造整備が優先される一方で防衛が軽視され、インフラ整備を含む兵站は後回しになりがちだった。このような風潮や気質に加え、魔鉱石やくず鉄の禁輸が徐々に影響し始め、どの艦の建造も予定通り進んでいない。

そのような噂が、西工廠から僅かずつではあるが広がっていた。

「砂海軍が賛成したのも、あれとあれの進砂と運用開始が理由のひとつなんでしょ、レグル？」

辺りを見回すようにしてからエルミが言った。

「ああ、多分、それで間違いない」

困ったヤツという顔を顰め、目でエルミを叱り付けるようにしてレグルは頷いた。

「何よ、あれとあれって」

興味津々といった顔でチエルが聞いた。

きな臭い雰囲気を感じたガルは、聞こえない振りをして味噌汁を啜っている。

「あれっていつたらあれだ。」

悪いな、チエル、こればかりはお前にもいえないんだ。

解るだろ、それで」

心底申し訳なさそうにレグルが言い、エルミに厳しい目を向ける。

「だって、新聞発表もあったんだから、言っちゃいけないことじゃないでしょうよ」

口を尖らせてエルミが文句を言った。

あれとは一〇八号艦の進砂であり、戦力化の目処がついたことを指している。



そして、もうひとつのあれとは、零型艦上戦闘機と呼ばれる新型戦闘機の実戦配備だった。新聞発表では一〇八号艦は新型戦艦、零型艦上戦闘機は新型戦闘機としか記載されていなかったが、メデイータとの長引く戦争に一筋の光明を見出すかのような、希望に溢れる記事だった。もちろん、艦や戦闘機の詳細など発表になるはずもなく、ただ進砂と配備の事実だけが小さく書かれていただけだったが。

だが、一部ではそのふたつの事実が三国同盟に反対していた砂海軍が態度を変えた理由だと、半ば真実を言い当てた噂も流れていたのだった。

「ああ、あれとあれね。

エルミはあれに乗るの？

レグルもかな？」

チエルは無邪気に聞いた。

店を訪れる客からの伝聞も合わせ、ある程度のことには知っている。

「私は、七艦攻を希望してるの。

やっぱりさあ、守りより攻めよ。

この手で敵戦艦を沈めてやるんだから」

胸を反らせてエルミは答えた。

この時代、軍の航空機は幾つに用途を細分化されていた。

零型艦上戦闘機を始めとする戦闘機は、敵の爆撃機や攻撃機、それを守る戦闘機や偵察機、輸送機といった航空機を叩き落とすための機体だ。

これに対してエルミが希望している攻撃機は、砂雷と呼ばれる砂中を突き進み敵艦の土手つ腹に炸薬を叩き込む兵器や、大型爆弾の水平爆撃を行う機体で、爆撃機は急降下型と緩降下型に分類されているが、比較的小型の爆弾をピンポイントに投下し、敵艦や敵兵器

を効率よく破壊するための機体だった。

呼称に艦上とつけば、航空母艦からの運用も可能であることを意味し、陸上とつけば航空母艦からの運用はできないが、その分大型でありより長大な航続力と大きな攻撃力を有していることを意味している。この他に敵の情勢を探る偵察機や兵員や物資を運ぶ輸送機、主翼下にぶら下げた巨大なフロートで砂上を滑走し、舗装整地された滑走路を必要としない砂上機等、様々な機体があった。

現在のソル砂海軍は、六型艦上戦闘機の旧式化に伴い三年前から開発を進めていた三七式試戦の実用化が成功し、零型艦上戦闘機の実戦配備がようやく始められている。攻撃機は三年前に実戦配備された七型艦上攻撃機、爆撃機は前年に実戦配備が完了した九艦上爆撃機が主戦航空兵力だ。

「俺は、まだ希望は出していないんだが、一応砲術に進むつもりだ。やはり、最新鋭の戦艦には憧れるが、最初はいろいろな艦から経験豊富で優秀な兵や下士官、士官を引き抜くんだろうしな。

うまくいけば帝都停泊地を母港にする戦艦に配属になるかもしれないな。

そろそろ、出ようぜ。

たまには、繁華街でぶらつくのもいいんじゃないか？」

機密には触れないように気遣いながらレグルは言葉を選び、話題を変えるように促した。

「そつだな。

帝都に戻ろう。

今夜も、ぎりぎりまでは飲めるんだろ？」

きな臭さが増した気がして、ガルはわざと陽気に遊びに行くことに同意する。

「いいわね、ガル。」

なんか良いモノあったら買って頂戴よ。

それくらいはいいでしょ？」

そこはかたなく自分の発言を危ないと感じ始めていたエルミも大きく頷く。

「じゃあ、ここは任してね。」

親方が、心配しなくていいからって言うてくれるの」

満面の笑みでチエルが言った。

修行期間はたいした給料が出ない。

その僅かに給料も、味覚を鍛えるための食べ歩きに消えるのが常だ。そんなこともあり、どのひとかどの料理人も、時々弟子に大盤振る舞いをするところがある。今回は久し振りに幼馴染みと許婚に会う弟子に、夜の食事代を丸々持つてやると親方は言っていたのだった。さすがに最初に言ってしまったのは遠慮もあるだろうし、楽しめない判断したチエルは、いざ勘定の場になってそれを言い出したのだ。

「それは、いくらなんでも拙いだろう、チエル。」

「ここは、俺たちが払うよ。」

「なあ、エルミ？」

レグルが慌てて財布を取り出した。

同時にエルミも財布を出しているが、店の女将が笑ってそれを制止した。

「いいのよ、もうお支払いいただいているの。」

領収書も出しちゃったし」

ここで無理強いしても、親方に恥じ掻かせるだけよ、と諭され、レグルとエルミは財布を収めた。

またのお越しをお待ちしております、という声を背に、ガルたちは料亭を後にした。

駅までゆつくりと歩き、浮遊車を乗り継いで帝都一番の繁華街へと、ガルたちは昼前に到着する。通学途中や夜の街では目立たなかった贅沢を戒める看板が、あちこちに立てられているのが目に付く。既に言い掛かりとしていえないような品々が贅沢品と槍玉に挙げられ、メロンやイチゴといった果物まで販売の自粛を強制されていた。不足しがちな軍事物資の生産に、少しでも労働力を振り向けるための政府と軍が一体となった施策だ。

メデイエータとの戦争など半年で片が付くと騎兵軍は豪語したが、その言葉とは裏腹にメデイエータを攻めあぐねたまま三年の月日が過ぎていた。

一定価格以上の装飾品や、オーダーメイドの服も同様に販売禁止となっている。

贅沢禁止令以前に所有していた服や装飾品の使用までは禁じていなかったが、それらを着飾った者を非難し、使用をやめさせるために贅沢品全廃運動委員会なるものまで設立されていた。教育を司る文部省は、学生の映画や演劇観覧を安息日に限ることを、各学校長に対しての通達を出している。

ソル国内は、確実に息苦しくなっていた。

ドラゴリー大岩盤ではアレマニア共和国がゴール共和国を始めとした周辺諸国に対し電撃侵攻を敢行し、一気にその版図を広げている。

サピエント王国に対する宣戦布告もなされ、先の大戦の再来を思わせる戦乱が渦巻いていた。往くとして可ならざるアレマニアの快

進撃は止まることを知らず、半年以内にドラゴリー大岩盤をその手中に収めてしまうのではと見る騎兵軍の將軍もいた。これを受けてソル皇国政府は、大本営政府連絡会議は、武力行使を含む南進政策を決議する。本国を踏み荒らされたドラゴリー大岩盤列強が、遠くベロクロン大岩盤東南地域に有する植民地を省みる余裕などあるはずもなく、ソルの南方進出を阻む壁は唯一サピエント王国の植民地マーレイヤに配されたベロクロン艦隊だけと見られていた。

オリザニアによる魔鉱石禁輸は、この動きに呼応したものだ。これら一連の流れが、三国同盟締結への背中を押したことは間違いない。

オリザニア共和国が三国同盟締結を受けて態度を完全に硬化させていたが、外務省では禁輸の解消に向けて必死の対オリザニア交渉は続けられていた。

だが、貴族の地位にある総理大臣や、その下で外交を一手に取り仕切ろうとする外務大臣自体が対オリザニア強硬派であり、三国同盟の積極的な推進者である以上、オリザニアが求める三国同盟からの脱退やメデイエータ共和国から撤兵といった最優先に揚げられた条件を飲むはずもない。結果としてところどころなら交渉は引き延ばされ、まったく交渉の打開策を見つけられないソル政府も、オリザニア共和国も痺れを切らし始めている。

無責任に対オリザニアの戦争までぶち上げる新聞が、全国主要紙の他地方紙でもちらほらと見られ始めていた。

安息日の繁華街は多くの人々で賑わっているが、戦争の影響ははつきりと見え始めている。

ソル皇国で最大の繁華街が、どう見ても地味な街になっていた。街角では辻説法に立つ代議士たちがそれぞれの主張を声高に叫び、

不当にソルの経済を封じ込めようとしているオリザニアを非難している。人々がその声に同調し、やがて街角は熱狂的なシュプレヒコールが繰り返されていた。

人々の熱狂とは裏腹に、その身なりは誰もが同じような格好だ。

警沢禁止令は華美な服装を禁じただけでなく、同時に強制とは書かれていないが没個性な国民服が奨励されていた。

警沢品全廃運動委員が道行く人々を無理矢理呼び止めては、少しでも気に入らない格好のものを見つけては人前に引きずり出し、吊るし上げていた。それに合わせて非国民と罵る人々と、眉を顰めつつ通り過ぎる者に目を光らせる者がいる。吊るし上げの対象者に眉を顰めた者はそのまま見過ごされたが、警沢品全廃運動委員や罵声を放つ人々に眉を顰めた者を、鋭い目つきの男たちがそつと尾行を始めている。

密かな動きを諜報の教育を受けていないレグルたちが気付くはずもないが、それでも世情がどうなっているかくらいは理解している。人々は、当たり障りなく周囲に合わせていなければ危険だと、突然消えた知人友人の動向からいつのまにか悟っていた。

連合艦隊旗艦『アーストロン』の長官公室で、ゴトム大將は苦りきっていた。

彼の前には、先程に届けられた軍令部が策定した戦争計画書が置かれている。彼の脳裏には、それに則り作戦を進めた結果、オリザニア共和国の圧倒的な物量に飲み込まれていく連合艦隊の姿がありありと浮かんでいる。前任参謀が薄ら笑いとともに入れてきたが、一読しただけでどの作戦も画餅であることが見て取れる。

三国同盟を背景にオリザニア共和国が出てこないことが前提であるものや、敵の戦力を過小評価もしくは自軍戦力の過大評価で埋め

尽くされていた。

「前任、いつから軍令部は莫迦の巣窟になったんだ？」

溜息とともに、彼は目の前で人を小莫迦にしたような表情を浮かべている前任参謀に声を掛けた。

「皇室が軍令部総長から降りない限り、無理でしょうなあ。

彼の宮様のご機嫌取りがこの結果です」

不敬罪に問われても文句を言えない発言が、前任参謀の口から飛び出した。

「南に行けば長くなる。

短期決戦で、オリザニアの継戦意欲を挫き、有利な条件で講和に持ち込むしか、我が軍の活路はないということが、なぜ奴等に理解できんのだ。

こんなことをしては、必ずオリザニアの大東砂海艦隊が押し付けてくる。

サピエントの大東砂海艦隊と連合されては、どう足掻いても我々に勝ち目など万に一つもない」

声は低いが、辛うじて激昂を抑えた結果であることは、ゴトムの表情を見れば明らかだった。

「そのための連合艦隊であり、漸減作戦だと、彼らは言っておりま  
す」

前任参謀が口にした漸減作戦とは、ソル皇国砂海軍が長年研究してきた対オリザニア艦隊作戦のことだ。

広大な大東砂海を押し渡って来るであろうオリザニア艦隊を、潜砂艦による雷撃と航空機による攻撃で補助艦艇を討ち滅らし、主力である戦艦に傷を負わせた上で艦隊決戦を挑みこれを撃滅するとい

うものだ。

この時代、航空機は未だ発達途上の兵器であり、ある程度完成され尽くした技術の集大成である戦艦を、砂海上で沈めることは不可能と認識されていた。

「そんなカビの生えたような作戦が、こちらの思い通りにだけ行くと、奴等はまだ信じているのか。」

これからは航空機の時代だ。

あんな戦艦を何隻も作るくらいなら、その分空母と飛行機を作れば良いものを。

あの四隻に使った資材があれば、オリザニアの戦艦などすべて砂海に沈められるというのに」

対ロス戦争終結後に立案され、細部の修正を繰り返してきた漸減作戦は、ゴトムの中には古臭いものにはしか見えていない。

憤懣やるかたないという表情のゴトムに、相も変わらず人を小莫迦にしたような表情の先任参謀が言葉を選び始めた。

「ですが、今のところ航空機に沈められた戦艦で作戦行動中のものはなく、すべて停泊中か降伏し投降する途上のものばかりです。」

それが彼らの言い分ですな」

先任参謀の言葉は、戦艦の優位性を示す大鑑巨砲主義者の論拠だった。

「莫迦な。」

いつまで過去の因習に囚われているつもりだ。

先任参謀、連合艦隊独自の案を作っておく必要がある。

貴官に叩き台を作ってもらいたい。

実現可能かどうかは後で良い。

誰もが思いつかんような案を、貴官なら捻り出せるだろう」

停泊していようが作戦行動中だろうが、戦艦が航空機によって沈



められたという事実は事実だ。

ゴトムもももとは大鑑巨砲主義者ではあったが、ドラゴリー大岩盤で繰り広げられた全大戦の戦訓から、航空機が次世代の主戦兵器になると確信していた。

ソル皇国連合艦隊は、現在二個艦隊で形成されている。

砂海軍すべての艦艇が所属しているわけではなく、連合艦隊以外にも軍令部が直接指揮する艦隊や、主要停泊基地司令長官所轄の掃砂海艇や砂海防艦といった小型艦艇を中心にした近海警備艦隊、輸送航路警備艦隊も多数あった。すべての艦艇を連合艦隊司令長官が指揮することは効率が悪いだけでなく、艦隊決戦に臨んで近海警備や航路警備などにかまけている余裕などあるはずがない。

砂海軍は、ソル皇国を守る楯であり、来寇する敵を撃滅するための矛であると認識されていた。

第一艦隊は一〇隻の戦艦が基幹戦力で、本土防衛を主任務としている。

連合艦隊司令長官直率の第一戦隊は、砂海軍最強の攻撃力を持つ戦艦で構成され、艦隊決戦の先頭に立つ最重要戦力だ。

第二艦隊は一二隻の重巡洋艦が基幹戦力で、南方方面作戦全般の援護を主任務としている。

いざ艦隊決戦となれば、潜砂艦や航空機による漸減作戦で討ち漏らした補助艦艇や、敵主力戦艦に夜間肉薄し、必殺の雷撃を見舞う露払いの役割を担っている。

この二個艦隊がソル皇国砂海軍の主戦力であり、砂海軍に奉職した者はどちらかへの配属を望んでいた。

それ以外に軍令部が直接指揮する各方面艦隊と、各地に分散配備

された基地航空部隊が存在した。

ゴトムは、万が一オリザニア共和国と開戦するならば、これらの方面艦隊や基地航空部隊も連合艦隊司令部が統一指揮すべきと考えている。また、各艦隊に分散配備されている空母を一括運用し、強力な航空打撃部隊を編成すべきとも考えていた。

三国同盟成立後、首相から対オリザニア開戦後の見通しを問われた彼は、『それは是非やれと言われれば初め半年や一年の間は随分暴れてご覧に入れる。然しながら、二年三年となれば全く確信は持てぬ。三国同盟が締結されたのは致方ないが、かくなりし上は日米戦争を回避する様極力御努力願いたい』と答えている。これはほとんどすべての艦艇を隷下に収めることが条件であった。もちろん、対オリザニア戦争に勝てるとは思っておらず、こういった意見を述べることで首相が避戦に傾くことを望んでの発言だった。

しかし、できぬといって職務を放棄するわけにも行かず、万が一開戦となった場合に備えて作戦計画に沿った訓練や演習はやっておかなければならない。だが、戦争指導を担当する軍令部から出てくる作戦案は、ゴトムの考えとは正反対の長期持久戦を前提としたものばかりだった。

そこで彼は、前任参謀には、既存の艦隊編成には拘らず、また必要な艦艇が連合艦隊に所属しているかどうかにかかわらず、どのような作戦が考えうるか検討するように命じたのだった。

前任参謀は相変わらずひとを小莫迦にしたような表情は崩さず、だが見事な姿勢でゴトムに敬礼すると、答礼を待たずに長官公室を後にした。

天下の大秀才を自認する前任参謀は、他の参謀たちに声をかけることなく自室に籠もり、対オリザニア作戦の作成に没頭し始める。従兵には用があるときはこちらから呼び出す故、決して許可なく入

室するなと命じ、扉に鍵をかけてしまった。

それからというものの、決められた時間の食事や、順番を決められた入浴にも出てくることなく、思い付いたように食事を運ばせ、風呂を空けさせた。そのたびに従兵は、烹炊所や風呂の割り当てを奪われた他の参謀からの嫌味に、耐えなければならなかった。だが、それ以外の仕事といえば、切れたタバコの補充のため酒保に走るか、気が付いたように命じられる着替えを運ぶくらいしかなかった。

先任参謀の振る舞いに眉を顰める司令部要員は多かったが、ゴトム長官のお墨付きとあつては面と向かつて文句を言える者はいない。

もつとも、周囲から煙たがられたり嫌われたりしているなど先任参謀自身が歯牙にもかけておらず、奇矯な振る舞いへの反応を却つて楽しんでるふうもあつた。

身なりに敵しい砂海軍にあつて、それについてまるで無頓着であり、食事も他人と同席しない先任参謀を、周囲は『仙人参謀』『変人参謀』と呼ぶようになっていた。もちろん悪口でしかないが、当人はそれが耳に入ってもどこ吹く風で、行いを改めることもなくその呼称を喜んでいるようでもあつた。誰も思いつかないような作戦を考えることが彼の持ち味であり、最も好むところだ。

自室に籠り作戦構想を練る彼の頭の中は、敵を打ち倒す熱狂の嵐が吹き荒れていた。

二六四〇年が残すところ後一〇日となつた一二月二二日の安息日、ガルはレグルたちに先立ち村へ向かう浮遊車に乗り込んだ。

一般の学生であるガルの冬休みは、この日から翌二六四一年一月一二日までの三週間だ。レグルとエルミは一二月三〇日までが二期であり、チエルはいつ休みになるかまだ決まっていない。独りで

村へ戻ることはあまり気が進まなかったが、家業を手伝えるときは手伝うべきと割り切り、ガルは浮遊車に乗り込んでいた。たまたま外出許可が下りたエルミに見送られ、ガルは村での再会を約束していた。

もちろん、エルミが必死の根回しでこの日の外出許可を勝ち取ったことを、ガルは知る由もなかった。

通例であれば、士官学生は新年祭の三日間しか休みがないのだが、今年は急にそれが変更になった。減ることはあっても増えることなどないと思われていた新年祭の休みが、二日も長くなったのだ。即ち、新年祭の三日間を移動に費やすことなく、故郷で羽を伸ばせるように前後一日ずつが追加されていた。砂海軍大臣による突然の指令だったが、それをただの好意と受け取った者はひとりもいなかった。

オリザニアとの開戦が近い。士官学生、飛行士官学生の誰もが、そう理解していた。

もうすぐお前たちは死ぬだろう。

その前に親孝行をしてこい。

そういうことだった。

ガルの帰郷に遅れること二日の、一月二十四日。

レグルにもエルミにも見送られることなく、チエルは不安な気持ちを抱えたまま、村へ向かう浮遊車に揺られていた。

去年は、とうとう新年祭前日まで、休みはもらえなかった。かろうじて御来光を村で拝むことはできたが、ゆっくりと羽を伸ばす暇もなく、新年祭の三日目に村を後にしていた。それが今年はまだ八日も残っているうちに、帰郷が許されていた。

いや、帰郷させられたのだった。

もちろん、チエルがクビになったわけではない。

親方の親心もあつたが、仕事が激減していた。

七月に施行された贅沢禁止令は、その後ますます締め付けが厳しくなり、外食産業は営業時間を午前零時までと制限されている。チエルが修行している料理店はもともと店じまいが早かつたため、営業時間制限の影響はない。だが、贅沢品全廃運動委員会による無言の締め付けが露骨になり、外食自体が白眼視される風潮になっていた。どの料理店も軒並み開店休業状態に追い込まれ、住み込みの弟子たちを食わせておく余裕を失っていたのだつた。食材の多くが配給制になり、気安く練習に使うこともできなくなっている。

ならば生産地に故郷を持つ者は戻つた方が、腕を錆び付かせずに済むと親方は考えたのだつた。

急な帰郷になつてしまつたため、実家には浮遊車に乗る前に魔導通報で報せただけだ。

それもごく短文しか送ることができないため、『今ヨリ帰ル』のひとつで済ませている。もう少しくらいなら文字数を足すことも可能だが、下手に『仕事が無イ為』などと付け加えても、余計な心配をかけるだけだ。浮遊車の出発時刻ギリギリまで考えあぐねたチエルは、結局ひと言でいいと投げ出した。

帰ってから説明しようと、チエルは決めていた。

実家には報せたものの、レグルには何も言っていない。

ガルが一足先に帰ることは家の都合であり、それは以前から承知している。レグルとエルミが同時に帰郷することは諒解していたし、あとはチエルの休みがいつからかになるだけのことだつた。帝都圏に残つた三人は、都合が合えば一緒に帰郷するつもりでいた。

だが、昨夜いきなり寮に置いておけないと言われては、予定も何もあつたものではなかつた。

士官学校も飛行士官学校も、通常は一般人の立ち入りを禁じている。

僅かに出入りの業者や大学教授といった者たちが、教材や寮の食料、雑多な資材の納品、修繕等や授業のために出入りするだけだ。授業で学生と接する機会のある教授はともかく、業者たちと学生が接する機会は基本的に設けられていない。ましてや、学業の妨げになりかねない友人知人の類は、家族を含め一切面会を認めていなかった。

許嫁であつても、恋人の来訪など以ての外だった。

面会に限らず、手紙に想いを託そうにもすべて教官による検閲が入るため、下手なことを書けば後で何を言われるか判つたものではない。

もちろん、個人の付き合いまで統制するためではなく、機密情報の漏洩を防ぎ、情報の重要性を身を以て解らせるための教育の一環だ。しかし、いつしか個人のプライバシーを暴き、からかいのネタにするか、言いがかりを付ける理由に使われるようになっていた。そんなところに、恋人から今後の都合を聞くような手紙を送ることなど、チェルにはできるはずもない。

それはレグルにしても同じことで、恋人に帰郷の都合を聞く手紙など出そうものなら、間違いなく厳しい教官に目を付けられる。

同級生には周知の事実であり、帰郷までの間からかわれるだけだが、最終学期に待ちかまえる練習航海の際に教官からどんな無理難題を押しつけられるか解つたものではない。将来士官として役立つ苦労なら買ってでもしてやろうという気概がレグルにはあるが、余計なトラブルを抱え込む気はない。何より士官候補生としてあらゆる知識を身に付け、戦場で死なない技術を身に付けるため学んでいるこのときに、恋人に帰郷の都合を聞く手紙など書いていられるは

ずもなかった。

士官学生の帰郷日は決まっている。恋人や許婚と同じ時間を過ごすのは、帰郷の後で充分だった。

チエルとエルミは同性であることから、それほど周囲に気を使うことなく連絡を取り合っていた。

もちろん、手紙の中にレグルのことを含ませては、飛行士官学校の教官からどのように問い詰められるか分からないし、教官同士の連絡網からレグルが吊るし上げでもされてはかなわない。もっとも、レグルとエルミのふたりが、毎日顔を合わせているわけではなかった。共通の授業や教練以外、校舎も寮も別だった。たとえば、レグルが飛行士官学生だったとしても、プライベートの時間に異性が寮で顔を合わせるなど、許されるはずもない。当然、男子寮と女子寮は別の建物であり、別の敷地内にある。士官学校と飛行士官学校も別の敷地であり、寮も別だ。

伝言を頼もうにも、伝わるのがいつになるか、まるで当てにならなかった。

チエルは、当面エルミにだけ、手紙で帰郷が早まったことを伝えてある。

そう書いておけば、あとはエルミがレグルに顔を合わせた際に伝えてくれるはずだ。その程度のことなら、言われなくてもやってくれるとチエルは信じていたし、エルミもそのつもりだ。もっとも、エルミにしてみれば、ガルが他所の女に惹かれないでいるのはチエルがいるからであり、チエルは恋敵であると同時に、ガルを自分たちの仲間内に引き止めていく頼もしい味方でもあり、複雑な気分ではあるのだが。もう出立してしまっただけで、あとはエルミに期待するしかない。ここでいくら考えたところで、レグルに自分の行動を伝えられるわけではないのだ。駅で買った新聞に目を落とし、チエルは思考を振り払うことにした。

社説には、対メデイエータ戦争の完全勝利を望む声と、対オリザニア交渉の弱腰を責める声に埋め尽くされている。冷静であるべき新聞が戦争への熱狂を煽っていることに、チエルは言いようのない不安を感じていた。

「レグル、今大丈夫？」

教練場の片隅で、汗を拭いながらエルミが声をかけた。

第二学期の掉尾を飾る士官学校と飛行士官学校の長距離走対抗戦が、ついさつき終わったところだ。

予定より幾分早く片付いたため、僅かな時間ではあるが生徒たちには休憩が与えられている。

「なんだ、エルミ？」

今日の課業はこれで終わりだから、それほど慌てて帰ることはないだろう。

集合の号令までは大丈夫だ」

周囲の目を気にするエルミに対し、あっけらかんとしてレグルが答えた。

同郷ということもあり、どちらの学校の生徒たちからも仲の良いふたりと認識されている。今さら周囲の目を気にする必要など、まったくないとレグルは考えていた。

エルミは寮に帰った後、同じ班の女子生徒にからかわれるのが面倒で人目を避けたかったのだが、それが余計にからかいの種になることに、残念ながら気付いていない。

日常の会話の端端から、エルミが同郷の専門技術学生に思いを寄せていることは知られている。さらに、レグルに許嫁がいることは、両学生としては衆知の事実だ。ふたりが堂々と会話をしているように、そこからふしだらな発想をする者は皆無だった。

もちろん、あまり堂々としては、教官たちから良い顔はされ



ないが。

「あんたって割と無神経ね。

もし、変な噂流されたらどうすんの？

チエルが悲しむわよ。

って言うか、私がチエルに殺されちゃう」

エルミが少し怒ったような顔で文句を言ったが、レグルはどこ吹く風といった様子だ。

「そう言うなら、早く用件を話せ、エルミ候補生。

迅速、正確、簡潔が砂海軍士官のモットーだろ？」

エルミの表情につられて、レグルの口調と顔つきが変わった。だが、目は笑いを含んだままだ。

「なによ、急に。

……

チエルは、二四日に村へ戻ったよ。

以上、報告を終わります。

エルミ候補生、戻ります」

もちろん、エルミの目も笑いを含んでいる。

それだけ言うとエルミは見事な姿勢でレグルに対して敬礼すると、きれいな動作で踵を返す。そして、集合の号令を待たず、飛行士官生徒の群に消えていった。

帝都から四人の村まで、一日の内に移動できる浮遊車の乗り継ぎは、ひとつしかない。

四人に限らず村の者たちは、それを『帝都一番の便』と呼んでいた。朝一番に出るその便に乗らなければ、どこか中途半端なところで足止めになってしまう。帰る日が決まっていれば、帝都駅に何時何分までに行くかは、改めて決めるまでもないことだった。レグル

とエルミの帰郷日は、一二月三一日しか選択肢がない。

チエルがそれに合わせる予定でいたが、先に帰ったというのであればエルミとふたりで帰るだけのことだった。

なぜ、チエルが一足先に帰郷することになったのか、その理由を今ここで聞く程に時間の余裕はない。

まさか、クビになったとは思わないが、伝え聞く世間の様子は経済が息詰まっているように感じられている。素行に問題が無くとも、修行先が廃業なりしてしまっただならどうしようもない。戦時統制下では、チエルの修行先も経営すること自体が、非難の対象になりかねない状況だった。

エルミがどこまで事情を知っているか解らないが、村に着くまでにある程度の情報が欲しかった。

レグルは、言いようのない、漠然とした不安に、全身が押し潰されるような錯覚に襲われていた。

### 第13話 焦燥

一二月三〇日の深夜、チエルは久し振りにゆっくりと羽を伸ばせる実家の湯船に浸かりながら、この数ヶ月のことを思い返していた。

明日はチエルの宿恒例行事となっている新年祭お節作りが待っている。警沢禁止令の中で、いかに楽しい新年祭を演出することができるか、チエル一家の腕に掛かっている。帰郷したからといって腕を鈍らせるほどのんびりする気はチエルにはない。実家に帰ったその日から、父と弟と共に厨房には行っていた。それでも修行先とは違い、仕事が終われば一家の団欒があり、気兼ねなくゆっくり浸かることのできる風呂があった。

しかし、独りでゆったりしていると、頭の中には修行先や帝都で見聞きしてきたことが浮かんでしまうのだった。

最後に四人が飲んだ日以来、間違いなくソル皇国は国際社会で孤立し始めていた。

三国同盟が締結された後、態度を完全に硬化させたオリザニア共和国による魔鉱石や屑鉄の禁輸は、ソル皇国経済の体力を確実に削っている。

チエルは、魔鉱石の禁輸がどのような事態を招くかは想像できたが、屑鉄などが入らなくなったところで何の影響があるのかと思っていた。だが、鑄鉄技術が未熟なソルにとっては、鉄鉱石がいくらあったところで良質な鉄を作り出すことができない。技術後進国であった五〇年前のソルにとって、一度鑄鉄された原料を輸入するか、国内で製鉄することができなかった。原材料の加工からではコストがかかりすぎることも、鑄鉄技術を発展させる余裕与えなかったのだった。

製鉄技術だけが発達してしまったソルにとって、屑鉄の禁輸は鉄

製品の製造が止まることを意味していた。

そんな中で、比較的ソルに対して好意的な態度を取るメヒクトリ共和国が、対ソル禁輸を解除した。

オリザニア共和国と国境を接し、領土を巡る対立から一度は戦火を交えたメヒクトリ共和国が、ソルに対して好意的な理由は敵の敵は味方という感情からだった。多くのソル人が移民として彼の国に入植し、良好な関係を築いてきた歴史も物を言ったメヒクトリは魔鉱石鉱脈を国内に豊富に持ち、ここからの魔鉱石輸入の目処が立ったことはソルにとっては僥倖と言えた。

新聞の報道でこのことを知ったチエルは、料理店などへの魔鉱石割り当てが増えることを期待した。だが、軍需産業にすべて割り振られ、チエルの期待は大きく裏切られてしまったのだった。

一〇月一日に第五回国勢調査が行われたが当然のことながら動員力を把握するための調査であり、いざ対オリザニア開戦となった際の戦力を正確に掴むための調査だ。

一〇月一二日には、大政翼賛会発会式が挙行され、大々的に新聞紙上で報道されていた。

これは政党政治を廃し、挙国一致態勢を作り上げるためだった。これにより様々な意見をぶつけ合い、国家の暴走を止めるための議会は機能不全に陥ってしまった。

それからひと月ほどが過ぎた一一月二三日には、大日本産業報国会の結成が大々的に報道された。

全国労働組合同盟と、ソル労働組合同盟が解散させられ、全国の労働組合を内務省と厚生省の指導の下、労働者を戦時体制に統合するためだ。大政翼賛会の結成と合わせ、政治と労働者が完全に戦時体制に組み込まれていった。

ソル国内の締め付けも厳しくなり、一〇月三十一日に戦時体制への移行のため、帝都のダンスホールが閉鎖された。

さらには、タバコの銘柄でサピエント語を使っているバットが金鷄に、チェリーが桜に改名させられた。敵性言語を使うな、ということだが、チエルには莫迦莫迦しい茶番劇か国家が狂気に染まったようにしか見えない。翌一月一日には、帝都小劇場が国民新劇場と改称させられている。

報道される世界情勢とは裏腹に、ソル国民の暮らしは間違いなく不自由になっていった。

「考えても仕方ない、か」

明日に控えた新年際の準備に、チエルは意識を集中することにした。

レグルと久し振りに会えることが、チエルの心を少しだけ明るくしていた。

「ねえ、レグル。」

いきなり騎兵軍の参謀総長が代わったじゃない？

この非常時に、わざわざ混乱するような真似するなんて、騎兵軍省は何考えてるんだろ」

一二月三十一日の早朝、帝都を出発した浮遊車の中で、眠たげな目を擦りつつエルミが聞いた。

一〇月三日に皇室軍人の騎兵軍参謀総長の辞任が新聞発表されたが、オリザニアとの関係が悪化する中で、実働部隊の最高責任者が交代するなど、混乱を招くだけのことだ。

寮の中では、軍の方針を批判するような発言は厳禁だ。もともとあまり仲が良いとはいえない騎兵軍に関することであっても、士官

学生が何か物申すなど許されることではない。

「決まってるだろ、逃がしたんだよ。」

勝ち戦の栄誉は誰が持つていっても構わんが、負け戦の責任を皇族に取らせるわけにはいかないだろ」

辺りを軽く見回してから、レグルが早口言葉のような勢いで吐き捨てた。

総力戦となる対オリザニア戦争で、何かあった際に皇族が責任を取る羽目になる前に、勇退という形で避難させるためだった。

「でも、今までメディエータとの戦争で上手くいかなかったも、特に何にもなかったじゃない。」

それに、ドラゴリー大岩盤では友邦は優勢よ。

何も、今の時期に」

大政翼賛会の発足が発表された一〇月一二日、ドラゴリー大岩盤ではアレマニア共和国軍が、また新たな方面作戦を開始していた。

これによりドラゴリー大岩盤の情勢はさらに混迷の度を深め、アレマニア共和国と三国同盟を結ぶソルに対する風当たりが強められていくことになる。

一〇月二八日には、ワイトルス王国がアレマニア共和国に後れを取るまいと、隣国に対して侵攻を始めた。

同日に行われたアレマニア共和国総統と、ワイトルス王国総帥の会見は、両国の協力体制を全世界にアピールするための一大イベントとして捉えられている。もちろん、ソルの主要五紙もこのイベントの報道に大きく紙面を割いていたが、戦意高揚を意識した記事であることは明白だった。

「ほんとうに優勢だと思ってるのか？」

お前も飛行士官学生の端くれなら、サピエントとアレマニアの航

空機の性能くらいは知っているだろう？

アレマニアの航空機でサピエントを落せるとは、俺は思えないんだがな」

もちろん、全てが報道されるわけではないことくらい、エルミも充分承知している。

レグルもこの時点では知る由もなかったが、一〇月三一日にアレマニア空軍によるサピエント王国に対する空爆が、サピエント空軍の頑強な抵抗に遭い一時的に頓挫していた。

当然軍部はこの情報を得ていたが、ソル国内では全く報道されていない。アレマニア総統は自軍の有利を盛んに喧伝していたが、航続距離の短い航空機での空襲が思うような効果を挙げられず、被害が無視できないことを隠すために必死になっている。ソル騎兵軍にはアレマニア信奉者が多く、サピエント空爆の頓挫を一時的な戦略的後退だと主張する者がほとんどだった。

冷静に情報を分析できるはずの外務省も、外相がアレマニアの熱狂的な信奉者であったため、自身が不利になるような情報を統制してしまっていた。

「確かにね。

でもサピエントを航空攻撃だけで落そうとは思ってないでしょ、アレマニアも。」

サピエントに物資を運ぶサピエントの船を沈めちゃえば、それでいいんじゃないかな？

オリザニアだって、戦争は嫌なんですよ」

僅かの際に両国航空機の性能と、国際情勢の知識を頭の中に描き、エルミが答える。

一一月五日、オリザニア大統領選挙で、ローザファシスカが三選

を果たしていた。

ローザファスシカ政権は、ドラゴリー大岩盤での戦争に対して、当初サピエント王国寄りではあったものの、武器援助以外には基本的には介入しない政策を取っていた。これは、先の世界大戦に参戦した経験から、ドラゴリー大岩盤での戦争に関わるのは極力避けたいと考えていた、オリザニア国民の世論を意識してのことだ。

「万が一、オリザニアの船を沈めようものなら、あの国が本気になる。」

そうなったらアレマニアといえども、苦しいだろうな。

アレマニアにとってはそのための三国同盟なんだろうが、そうなったら皇国は自動的に対オリザニア開戦だ。

経済封鎖は確かに有効だが、オリザニアの協力がある以上完全にサピエントを封じ込めることは無理だろう。

いよいよになったら、すべてオリザニアの船だけにすれば良いんだぜ」

レゲルは嗜めるように言った。

ローザファスシカ政府は、ドラゴリー戦線においてアレマニア軍にサピエント本土上陸寸前まで追いつめられていたサピエント王国首相から、再三再四対アレマニアウィトルス戦争への参戦を求められている。

さらに、ソル・メデイエータ戦争下にあつたメデイエータ共和国總統のオリザニア留学経験もある夫人が、数度にわたり対ソル戦争におけるオリザニアの支援、参戦をローザファスシカに訴えかけている。

当時のオリザニア政府は、サピエント王国やメデイエータ共和国に対し既に多大な支援を行っていた。

特に多額の戦債をつぎ込んだサピエント王国が負けることは認



め難いことだった。だが、ローザファシスカ大統領としても選挙では戦争に介入をしないと宣言をして当選していた手前、ドラゴリー戦線へ介入したくてもできない状況にある。

ローザファシスカ大統領は、有権者と他国との見事な板ばさみになっっていた。

孤立主義に閉ざされていたオリザニア国民に対し、オリザニアは戦争に関わるべきではないかと魔道放送で問いかけた。

『ドラゴリー、バキシム両岩盤の戦争はオリザニアに関係ないという人たちがいる。しかし戦争を引き起こしている者にオリザニアにつながる大砂海の支配権を渡すわけにはいかない』と問いかけたローザファシスカの言葉は、オリザニア国民の心に突き刺さっていた。だが、それでも戦争という代償を払うかどうかについて、国民の決断は『否』だった。

「レグルは、あの話のこと、どう考える？」

話題を変えるようにエルミが聞いた。

一月一日、サピエント砂海軍が空母艦載機を、ワイトルス王国のターレス軍港に突入させた。

停泊中のワイトルス砂海軍の三隻の戦艦は回避運動をすることもできず、数発の砂雷を喰らい大きな被害を受けてしまったが、サピエント側の被害は僅かに雷撃機二機に留まっている。航空機による戦艦への優位論がまたぞろ頭をもたげてきたが、ワイトルス軍の戦艦が作戦行動中ではないことや、完全に魔鉱石発動機を止めていた状態で対空砲火も打ち上げることができない状況であったことなどから、大艦巨砲主義者はこの論調を認めていない。それでも先見の明のある者たちには、大きなヒントになったことは間違いない。

主要五紙が友邦の被害を報道することはなく、立場上情報に接した者たちには厳重な緘口令を敷いていた。厭戦気分や、友邦、ひい

ては軍部指導部に対する不信感が台頭することを、未然に防ごうという軍部の意思が裏で働いていたことは明白だった。

だが、航空主兵主義の牙城である飛行士官学校では、早速にその戦術の研究が行われ始めている。

それに対して、大艦巨砲主義の牙城ともいえる士官学校では、この事実を全くの偶然による研究する価値のない戦訓と捉える者、背筋に薄ら寒いものを感じ対空戦闘の研究を決心する者、ワイトルスの戦闘実力を小莫迦にして鼻で笑う者と様々だった。両校では生徒に対し、教官はそれぞれの見解からこのターレス空襲について講義の一部を割いて意見を述べている。

飛行士官学校では前向きな授業であったのに対し、士官学校では様々な見解が示され、生徒たちの間には混乱が広がっていった。

「それは、後にしようぜ。」

俺たちの話が誰かに聞かれたら拙いだろ？

そうだな、今夜飲むときにでもどうだい？」

にやりと笑ってレグルが答えた。

レグルとしては、この論争に関する飛行士官学生の意見を聞いたところだった。

もちろん、骨の髄まで染み込みつつある大艦巨砲主義者としては、航空優位を認めるわけにはいかない。ひとつエルミを論破してやろうと、手薬煉引いて待っていたのだった。帝都から村までの浮遊車の行程は、この論争に集中するにはうつつつけの状況ではあったが、緘口令が敷かれていることを公共の場で話すなど許される行為ではない。ここはひとつ自重し、夜に気心知れた者たちだけになるのを待つべきだった。

その際にはエルミの次兄の意見も聞いてみたい。論争の勝ち負けとは別に、この事例を冷静に見ることのできる第三者の意見にも、

レグルは興味があった。

士官学校と飛行士官学校がその話題で持ち切りになったその日の紙面には、その代わりとでもいうように、御前会議でソル・メデイエータ基本条約と、メデイエータ事変処理要項を決定したことが伝えられていた。

内戦を続けているメデイエータを二分する政府のうち、ソルよりの共和国政府との間に結ばれた条約だ。ソルと完全に対立する共産主義政府に対する共同行動とソル皇国軍のメデイエータ国内駐留権を認めることと引き換えに、共和国政府を合法政権と認めることを柱としていた。しかし、これはソル皇国軍によるメデイエータ支配を、確立することが目的であることは誰の目にも明らかだった。これがメデイエータ国民の怒りを買い、ソル・オリザニア関係悪化に追い討ちをかけると考える者の声は、新聞に載ることもなく、あったとしても圧殺されていった。

そして、一月三〇日にはソル・メデイエータ基本条約調印が、大々的に報道されている。

「俺は、それよりソ・メ基本条約のことが気になるんだ。

確かに、ベロクロン権益を守るためということは理解できるし、皇国のためには必要だ。

内戦に明け暮れているメデイエータを一本化して、いずれは対等の関係でやっていくためにもな。

だが、もうちょっと、良いやり方があったんじゃないかとも思っ  
ちまうんだよな」

小難しい顔をしてレグルが声を潜める。

「ちょっと、私の言うことは止めておいて、自分はそういうこと言  
っちゃうの？」

それは危ないと思うよ。

だって、私はあれの設立が怖いの」

辺りを見回してからエルミが怒ったような表情で、レグル以上に声を潜めて言った。

一月六日に内閣情報局設立され、それまでの内閣情報部が廃止された。

戦争に向けた世論形成、プロパガンダと思想取締の強化を目的にした上級局への格上げだ。だが、単に内閣情報部の規模や権限を大きくした、というだけではない。それまで外務省情報部、陸軍省情報部、海軍省軍事普及部、内務省警保局図書課、逓信省電務局電務課の各省各部課に分属されていた情報事務を統合し、日本の内閣直属の機関に纏め上げていた。

表向きはすべての情報収集、統制、発信が内閣に一元化されていたが、当然軍や内務省がその権限を手放すわけもなく、四つの情報機関が並立して活動している。

「何を心配してるんだ？」

俺は、何も批判されるようなことは言ってないぞ」

もちろん、レグルは新聞発表以上のことはいっていないし、当たり障りのない批評を念頭に置いてのことだ。

心に抱くオリザニアの反応や、ベロクロン大岩盤に展開する友軍に降りかかる負担の増大については、敢えて飲み込んだままだったが。

ベロクロン大岩盤に展開する皇国軍は、当然騎兵軍が中心だが、砂海軍も少くない兵力を送り込んでいる。

二六七年以来、小規模な遣メデイエータ艦隊を派遣していたが、メデイエータとの緊張が増大するに従いその規模が逐次増強されていった。だが、連合艦隊の規模から見れば、遣メデイエータ艦隊は

『戦隊』といつて良い小規模なものだった。しかし、メデイエータ南部事変に伴い、特別陸戦隊が編制され、これが常設化することで陸上戦力も統率下に置かれ、その規模はさらに増大されていくようになっていった。二六三七年の対メデイエータ戦争勃発までに、遣メデイエータ艦隊は二個艦隊に増強された上で、それぞれの艦隊を一旦廃止した上で戦隊化し、第三艦隊と改称していた。

そして、砂海軍は対メデイエータ開戦とともに、駐留部隊の大増強を実施した。

そのため、一〇月までに駐留部隊は三個戦隊、三個砂雷戦隊、五个航空戦隊を擁するまでに膨れあがり、第三艦隊司令部の統率能力を大幅に上回ってしまうことになる。そこで、従来の第三艦隊に加え、増援部隊で第四艦隊を新設した上で艦隊司令部を増強し、その両艦隊を統率するために『メデイエータ方面艦隊』を新設することにした。第三艦隊司令長官としが初代メデイエータ方面艦隊司令長官の兼任を命じられ、連合艦隊に匹敵する大艦隊が誕生していた。レグルは指揮系統こそ異なるが砂海軍の負担増大が、いずれ避け得ないであろうオリザニアとの戦争にどれほどの影響を与えるか、漠然とした不安を感じていたのだった。

「でもね、私たちはある意味公人でしょ？」

私たちの発言は、あれの統制化にあるって考えたほうが良いと思うよ。

士官学生が言ってた、なんて、変な噂が広がったら大変よ」

エルミの顔色が幾分蒼ざめているような気がする。

教官からは、情報局設立の際に、外部での発言については充分気を配るようにと、厳しく言い渡されている。

一般人との会話はもちろんのこと、外出時に学友同士で交わす何気ない会話を、第三者に聞かれた際の影響は無視できないものがある。

る。

憶測だけで話す一般人同士の会話と違い、機密に触れる機会の多い軍関係者が発言したことはそれだけで信憑性があると思われる。学生同士が憶測だけで話そうと、その元になる知識や情報の量は一般人とは桁違いだ。新聞記者に聞きつけられ、妙なバイアスがかけられて報道でもされようものなら、国家の運営にどのような悪影響を与えるか分かったものではない。

そうなった際、次の日に憲兵や特高が寮の私室の扉を叩く、実家や友人宅の扉を叩くなどということがあってもいれなかった。

「自分から話を振っておいて。

でも、そう言われればそうだよな。

この話は、後にしようぜ」

レグルはそう言ってソル・メディエータ基本条約についての話題を打ち切り、他愛のない話に終始することにした。

途中駅で食事を摂り、乗り継ぎの浮遊車を待つ間、レグルはゆったりとした平和な気分浸っていた。

だが、その気分の中に、もうすぐこの平和を掻き乱されるであろう予感を嗅ぎ取り、得体の知れない焦燥に身を焦がしてもいた。

一二月三一日の夕食後、ガルは時間潰しに父と共に鎚を振るっていた。

エルミの家での宴席まで、あと一時間ほどだ。エルミもレグルも今頃駅に着いているはずだが、家族との団欒なしに宴席突入も忍びないと、ガルは出迎えには行かないことにしていた。

「学業ばかりで鈍ったかと思っていたが、どうということだ、ガル？」

夏の慰霊祭に合わせて帰省したときとほとんど変わらないガルの体つきに、父が訊ねた。

「うん、夏以降なんだけどさ。」

軍事教練の時間が増えたんだよ」

勉強を怠けているとでも思われたのかと思い、言葉少なにガルは答える。

だが、父の言葉に棘は含まれていない。

小学校以来、軍事教練は当たり前のようにあったが、その割合が夏以降急に増えていた。

そのせいでもともと筋肉質だったガルの身体は、座学が多い学校に通っているにも関わらず、村を出たときとほぼ同じ状態を保っていた。

「身体を鍛えておくことは良いことだが。」

学問のために帝都に行かせたんだがなあ」

ぶつきらぼうに呟くと、父は鎚を振るい続ける。

「そうなんだよなあ。」

軍事教練に嫌はないんだけどさ。」

皇国民としてね。」

ただ、その時間が勿体無く感じちゃうんだ。」

読む本全てが面白いんだよ。」

親父のやっていたことがさ、ほとんど科学的に解明されているんだ。」

まだ解明できてないことも多いんだけど、その研究もしてみたい、俺は」

家にいた頃と意識して父の呼び方を変えたガルは、目を輝かせて言った。

七月の警沢禁止令以来、たいして帝都で遊ぶことはできなくなっていた。

時折息抜きのようにレグルやエルミ、チエルたちと会うことはあっても、最後に飲んだときののように羽目を外すことはそうそうない。軍事教練で減った勉強時間は、図書館から借りた本を下宿で読み込み、授業の後に教授たちに質問しに行くことで補っている。三学期の専門技術学校では学期ごとに試験が行われ、ガルはその試験でそれなりの成績を修めていた。

もちろん、特待生でいるための努力でもあるが、ガルの知識欲がその成績に証明されていた。

「まあ、さつき見せてもらった成績表なら、心配はないだろうが。」

お国も、学生の使い方を間違えないでくれれば良いんだが」

父は、あからさまに口にすることはないが、学生を兵士として徴発するような事態にならなければ良いと考えていた。

「大丈夫だよ。」

いくら教練を積んだからっていったって、毎日訓練を積んでいる兵隊さんたちみたいに働けるはずないじゃないか。

銃後の意識を引き締めるためだと、俺は思うよ。」  
模範的な回答を意識して、ガルは答える。

「それなら良いんだが、な」

そう言って父は時計を見る。

エルミの家で開かれる宴席まで、あと三〇分ほどだ。

「そろそろ、いいかな？」

ガルは父の顔色を窺うように聞いた。



エルミの家までは近いとは言え、仕事で汚れたまま行くわけには  
いかない。

四人が顔を合わせるだけならそれでもいいのだろうが、エルミの  
次兄を始めとした村の有力者や、それ以上の立場となるエルミとレ  
グルの前に、汚れきつたままで立つような失礼が許されるはずもな  
い。ガル自身も、卒業後は学士様としてそれなりの尊敬を集める立  
場になるのだが、今はまだ学生の身分だ。既に軍人としての立場を  
得ているレグルやエルミとは、わけが違う。

それ以前に、それなりに身なりは整えていかなければ、いくら友  
人の家とはいえ失礼な振る舞いだった。

「ああ、構わん。」

これで今年の仕事は仕舞いだ」  
父は鎚を置き、笑顔になった。

二六四一年の新年際も最終日の一月三日早朝、村の駅からは浮遊  
車を見送った人々が吐き出されていた。

帝都に向かうレグルとエルミを、一足遅れて帝都へ行くガルと、  
帝都に戻るあてが今のところはつきりしていないチエルは村の駅で  
見送った。ガルの新学期は一月七日からとはつきりしているが、チ  
エルは修行先から連絡が来るまで村にいることになっている。食堂  
自体の営業は禁じられていないが、客足はめつきりと減り、チエル  
たちを食わせておく余裕がないのだった。レグルたちと一緒に帝都  
に戻るつもりだったチエルの元に、親方からたった一言『来都二及  
バズ』の魔道通報が届いたのは、昨夜遅くになってからだった。

一瞬クビかと目の前が真っ暗になったチエルだったが、一時間後  
にもう一通届いた『解雇ニアラズ』の魔道通報に、大きく胸を撫で  
下ろしていたのだった。

同日、帝都港に停泊する連合艦隊旗艦を務める戦艦『アーストロン』の長官公室を訪ねる影があった。

扉を叩く音にゴトム大將は気さくに答え、入室を促す。入室した人物の敬礼に見事な姿勢の答礼を返し、従兵に紅茶を持ってくるように命じた。そして、来客にソファ歩を勧めつつ、自らもその対面に腰を下ろした。

「どうしたんだね、新年早々。

ついでで良かったんだが」

穏やかな表情でゴトムが口を開く。

「いやいや、来いというお手紙を頂戴しましたからな。

わざわざお手紙ということは、いよいよ長官のお心の内をお聞かせいただけるのかと思ひまして」

来客は、ついでで良いはずはあるまいという表情で従兵から紅茶を受け取ると、口をつける前に言った。

相手が紅茶に口をつけた後、ゴトムは自分の紅茶をゆっくりと啜り、自分の表情から意を汲み取れと目で語りかけた。

「飛行機で、やれんかね？」

長い沈黙の後、ゴトムはソファから立ち上がり、相手に背を向け舷窓から外を眺めるような素振りを見せながら、やっと口を開いた。

「ハトーを、やれんかね？」

相手の沈黙が破られることはないと思信したゴトムは、もう一度口を開いた。

「飛行機で……」

ハト―を……」

第一一航空艦隊参謀長口ウ少将は、思いもしなかったゴトムの言葉に呟くと、また長い沈黙に沈んでいった。

大東砂海に浮かぶオリザニア領ハト―のオアシスに、オリザニア砂海軍は一大根拠地を設置したのは二六〇八年のことだった。

それ以来、ハト―の存在はソル砂海軍にとって、最大の脅威と看做されている。ハト―の砂海軍基地はハト―要塞とも呼ばれ、中には戦艦と撃ち合える四〇センチ砲も設置されていた。砂上艦艇による侵攻可能な死角も存在しなかったため、艦砲射撃や上陸作戦には成功の見込みはないと見られている。

それでもソル皇国軍は工事労働者に変装したスパイを多数送り込み、要塞の詳細を把握することに努めていた。

ソル砂海軍は対オリザニア戦争の基本戦略として、漸減邀撃作戦を長年にわたって研究してきた。

これはハト―からソルへ向けて侵攻してくるオリザニア艦隊の戦力を、潜砂艦と航空機を用いて漸減させ、ソル近砂海において艦隊決戦を行うというものであった。だが、連合艦隊司令長官ゴトムは、異なる構想を持っていた。

かつてオリザニアに駐在武官として滞在し、同国の大学に留学した経験を持つゴトムは、オリザニアとソルの国力の差を痛感していた。

軍縮条約で保有艦の対オリザニア比率を六割五分に抑えられたソルにとって、オリザニアの大東砂海艦隊と全力の条件で艦隊決戦を行うなど自殺行為でしかない。せめてハト―を出撃した大東砂海艦隊を漸減邀撃作戦で討ち減らし、艦隊決戦時までに極力対等の条件に近づけておかなければ、数の力に飲み込まれてしまうのは自明の

理だった。だが、多少の数の差は個艦性能で補うとしても、対オリザニアの艦艇比率が六割を切っている、いくら漸減邀撃作戦を頑張っても艦隊決戦を対等の条件に持ち込むことは困難であった。

もちろん、軍縮条約の制約下で、という条件の下での話だ。

メデイエータとの紛争がまだ戦争にまで発展していないうちに、将来を危ぶんだソル皇国は軍縮条約破棄を表明し、さっさと巨艦の建造を始めていた。

もちろん、失効した条約にオリザニアを始めとした他の条約締結国が律儀に従うはずもなく、それ以降は無秩序な建艦競争が再開している。ソルの千倍ともいわれる工業力を始めとした国力にモノを言わせ、オリザニア各地の造船所は猛烈な勢いで艦艇を建造し始めている。このまま手を拱いていれば両国の艦艇保有比率は、あつとつと間に五割を切ってしまう。特に建造と慣熟航海に時間のかかる戦艦と違い、漸減邀撃作戦で沈めておくべき補助艦艇を大量生産されては、作戦そのものが成り立たない。

先手必勝。そして、短期決戦。矢継ぎ早に戦果を挙げ、オリザニアの継戦意欲を挫くしかない。ソルが生き残る道はこれしかない、ゴトムは確信していた。

この方法を軍令部とは別に模索していたゴトムの元に飛び込んできたのが、ターレス軍港空襲のニュースだった。

子飼いの先任参謀に、航空機によるハトー基地攻撃の全体作戦立案を、ゴトムは密かに命じていた。同時に航空作戦の草案を作るように、この日非公式にロウ少将に命じるために、この場に来るように呼び出していたのだった。

前年末の一月二十九日、オリザニア大統領ローザファシスが『オリザニア共和国は民主主義国の兵器廠となる』と発言している。

これは、明らかにメデイエータとサピエントに対して、武器供与を始めとした援助を強化するという意思表示だ。つまり、両国の工場を破壊しても、継戦能力を完全に奪うことはできないということだった。その上、オリザニアはメデイエータともサピエントとも、参戦義務を伴う同盟条約は結んでいない。両国に武器を輸送するオリザニア船籍の輸送船は、完全に第三者の立場であり、ソルやアレマニア、ワイトルスの攻撃対象にはならない存在だった。

万が一にも現場指揮官の独断専行などでオリザニアの輸送船を攻撃してしまえば、自動的にオリザニアと戦端が開かれることを意味している。

せいぜい三国同盟国にできることは、メデイエータやサピエントに入港しようとするオリザニア輸送船を臨検し、武器供与を自国に対する敵対行為として、実効支配下の砂海域から追い返す程度のことしかできることはない。

それにしても、ソルやアレマニア、ワイトルスの実効支配をオリザニアが認めなければ、その海域から出て行く義務はないのだった。自国の正当な行動中に公砂海や友邦国の領砂海内で、友邦国に敵対する国家の臨検を受けるなど、常識的に考えても許されることではない。臨検を行った国に対してどのような国民感情を持つかなど、考えるまでもないことだった。いつ、輸送船団の護衛艦隊と、臨検する警備艦の間に砲火の応酬が起きてもおかしくない状況だ。

火の魔鉱石粉末をぶちまいた路上を、啞えタバコで歩き回るような状況が、両大砂海に広がっていた。

そのような状況下で、軍令部が主張する南方資源地帯への進出は、オリザニアとの開戦を決定付けるものとゴトムは認識している。

それよりもオリザニア大東砂海艦隊をハトー根拠地に集結しているうちに一気に殲滅し、オリザニアの継戦意欲を挫いた上で早期和平を結び、その上で平和裏に南方資源地帯への進出を『協議』すべ

きだと考えていた。

そして、ゴトムは対オリザニア交渉が、平和的に解決されることを本心では願っている。

だが、その願いとは裏腹に、彼の任務はオリザニア艦隊の撃滅だ。平和を願いつつも、巨大な死を振り撒く作戦を練り上げる義務があった。そして、現在の状況は、彼が活躍の場を与えられてしまう方向へと傾いている。彼は対オリザニア交渉の平和的な解決を望みつつ、己の意に反してオリザニア艦隊撃滅の必勝作戦を練ることしかできなかった。それでも彼は、多くの若者の命を散らすことがないように、早期和平のための短期決戦を主軸とした作戦案を練っていた。

ハトー攻撃は、そのための最も重要な作戦だと、ゴトムの中では既に決定済みのことだった。

## 第14話 齟齬

第一航空戦隊の旗艦を務める空母『コツヴ』は、その巨体を帝都工廠の艦装岸壁に係留されていた。

その艦尾近くにある長官公室から十数m程離れた航空甲参謀私室に、ふたつの人影が額を寄せ合っていた。片方はこの部屋の主であるジッター中佐。もう一つの人影は、第一航空艦隊参謀長であるロウ少将だった。

「ご苦労だった。

一週間で上げてくるとは、貴様の頭の作りはいつたいたいどうなっているんだ

それとも、もともと考えていたのかね。

どうかね、やれそうか、ジッター？」

ロウはそれだけ言うとしッターの答えを待つ。公式の場ではないため言葉遣いは砕けていた。

「いえ、漠然と考えたことはありませんが、一から考えたものです。

ロウさんから言われて、頭を捻りましたよ。

ですが、呈示いただいた砂雷の使用は、非常に厳しいものがあると考えます」

ジッターの顔には謙遜した言葉とは裏腹に、嘘だと書いてある。

だが、同時にこれからどうやってロウを説得するか、困り切った表情も覗かせていた。

数少ない航空通のひとりであるロウは、ひと月かけてある程度骨子を作っていた。

二月に入り、おそらくはこの作戦を実施する立場になるであろう

ジツツーに、初めてゴトムの意向を伝えたのだった。もちろん、ロウがジツツーに作戦案を作らせた理由は、それだけではない。ジツツーは戦闘機搭乗員出身の参謀で、航空機について知悉した人物だった。現役搭乗員時代には、三機編隊による巴宙返りを含む特殊編隊飛行を編み出し、『ジツツー曲芸飛行団』とまで呼ばれたほど、操縦の腕も超一流だった。

そのような生粋の飛行機乗りならば、困難な作戦案もなんとか形にできるだろうと、ロウは判断したのだった。

ジツツーは僅か一週間で全機爆撃案と、雷爆撃併用案のふたつの案を作りロウに示してきた。

ハトー泊地への航空攻撃が成功するか否かは、雷撃が可能かどうかであった。なぜなら、ハトー泊地の平均砂深は一メートルしかなく、現在ソルが保有している航空砂雷は攻撃機が投下し着砂した後、平均数十メートル以上砂に沈んでから航走しつつ調停深度まで浮上してくるものだったからだ。これでは投下した魚雷はハトー泊地の砂底岩盤に突っ込み、その場で爆発するか、信管が起動しないまま破壊されてしまう。

泊地内での砂雷攻撃は不可能と、ジツツーは結論づけていた。

「つまり、全機爆撃案でいく、ということか？」

それでオリザニアの戦艦を撃沈することは可能なかね？」

落胆の表情を隠すことなく、ロウはジツツーに問うた。

「理屈の上では可能です。」

『アーストロン』型戦艦の主砲弾を改造した八〇〇キロ爆弾であれば、オリザニア戦艦の上部装甲板を貫くことはできます。

しかし、水平爆撃は極端に命中率が落ちますから、二次、三次と攻撃を繰り返さなければ、全艦撃沈は望めません」

どう言い繕おうと現実は変えられないという意志を視線に込め、



ジツツーはロウに答えた。

「そうになると、四ハイでは足りんな」

そう言うと、ロウは腕を組み、唸った。

当初、ロウはソル砂海軍が現時点で保有している、制式空母四隻を基幹戦力とする艦隊を考えていた。

だが、空母四隻で全機爆装では、対艦攻撃力が圧倒的に不足だ。

対艦攻撃が八〇〇キロ爆弾を装備できる七型艦攻だけだからといって、全艦載機をそれだけで固めるわけにはいかない。

迎撃機を排除するための戦闘機や、対空砲火を潰すための急降下爆撃機は絶対に必要だ。三種類の艦載機の比率は三分の一ずつから、そう大きく変えることはできない。

制式空母四隻では、攻撃機はどうか多く積み込んでも百機に届かない。せいぜい二度、全艦載機をすり潰す覚悟で三度の航空攻撃が限界だった。

参加兵力を増やそうにも、他の制式空母は航続距離が短く、ハト一までの往復が不可能とみられていた。

「やはり、無理か？」

「できないことを、できるとは申せません。

砂雷投下の技量を磨くことはできませんが、砂雷に沈むなと命じることは無理でしょう。

物理法則を、訓練や精神力で変えることは、不可能です」

苦い表情を浮かべたまま、だが遠慮などまったくせず、ジツツーは答えた。

結局、ロウとジツツーは、制空任務の戦闘機を増やすため、制式空母四隻に軽空母一隻を追加することにした。そして、雷撃は諦め

て攻撃隊は全て爆装とした上で、水平爆撃と急降下爆撃を行うという案をゴトムに提出すると決した。

「では、取り急ぎ案を見直してくれ」

「ロウさん、それは構わないのですが、ウチの長官には？」

私室の扉を開け、廊下に出たジツツーはロウの言葉に答えながら、廊下の奥にある長官公室の扉をみた。

「分かっけていて聞くな。

貴様が何の障害もなく作戦を練り上げられたのは、誰のおかげだと思ってるんだ？」

ロウは、安心しろという表情で長官公室の扉を見ながら言っけて、『コッヴ』を後にした。

「どういう、ことかね、ロウ君」

連合艦隊旗艦『アーストロン』の長官公室で、怒りの、いや、憤怒に近い表情で、ゴトムは声を押し出した。

「長官、ジツツー君とも子細に検討致しましたが、雷撃は不可能との結論に」

「そんなことは、読めば分かる！

私が聞いているのは、なぜ諦めたのかということだ！

こんな案を出させるために、君に話をしたのでない。

飛行士官学生に聞いたような案など、私は求めていない！

雷撃ができないのならハトー攻撃は諦める！」

ゴトムのあまりの剣幕に、ロウは壁まで吹き飛ばされそうな圧力を感じていた。

「ですが、長官……」

砂雷の性能上、彼の地での使用は」

「ハトー攻撃が成らないなら、この戦は負けだ。

今の砂雷がダメなら新しく作れ。

間に合わないなら改良でも構わん。

オリザニア大東砂海艦隊を一撃で葬り去らねば、皇国は滅びると心得よ」

ロウに皆まで言わせず、ゴトムは一気にまくし立てると、イスに掛けたまま背を向けてしまった。

「レゲル、聞いた？

私たちの練習航海って、オリザニアには行かないんだって？」

エルミが言った。

二六四一年二月二三日から二六日までの予定で行われている、士官学校と飛行士官学校合同の近海航海実習で、レゲルとエルミは軽空母『キーラ』に乗り合わせていた。

第三学期が始まると座学の割合は減り、実戦色の強い実習が両校で行われている。

飛行士官学生の航海実習は空母に限られていたが、士官学生は居住区に余裕のない潜砂艦を除く、すべての艦種に亘って実習を行わなければならない。このため年明けに帝都に戻って以来、ふたりが顔を会わせる機会はなかった。

それが今回の航海実習で、たまたま同じ艦に乗り合わせたため、ほぼひと月半振りに邂逅を果たしたのだった。

「ああ、二月の終わりから三月の初めにかけて、一四、五日くらいでソル内砂海と内南砂海だけ回るらしいな。

オリザニアとは緊張状態にあるから、仕方ないだろう。

「間諜扱いされても、お互い嫌な思いするだけだからな」

飛行甲板上を吹き抜ける埃っぽい風に顔をしかめつつ、レグルは早口で答えた。

無風状態であっても艦の航進は風を巻き起こし、艦首が巻き上げた砂の微粒子は、否応なしに目や鼻、口の中に侵入してくる。目はゴーグルで保護できるが、鼻と口は剥き出しのままだ。顔全体を覆う防毒マスクはあるが、普段の勤務には使用が禁じられていた。

「酷いわよね、せっかく遠洋航海に行けると思ってたのに。」

期間まで短くなっちゃうし。

親善航海の意味もあるんだから、今こそオリザニアに行くべきなのに。

せっかく空母以外に乗れるんだから、もっと遠くへ行きたいよね」  
エルミは、分かっているけどね、という顔で答えた。

「そうだよなあ、オリザニア本土とは言わないけど、ハトーくらいまで行ってみたかったな。」

あのオアシスにはソルから移住した人も多いから、さほどソルに對して悪い感情はないはずだし。

もっとも、オリザニア大東砂海艦隊の基地があるから、無理って言えば無理か」

そう言いながらも、レグルは残念そうな表情を浮かべている。

昨年度は早い時期に遠洋航海実習が行われ、ハトーから南洋信託統治領を回ってきている。

それが今年度は夏の時期に航海実習は行われず、行き先の調整に手間取っているうちに卒業間近になってしまっていた。

「それと、聞いた？」

私たちから少尉候補生の時期が短縮されるって。

今までは一年だったでしょ、候補生期間って。

それが噂だと半年になるらしいわ」

エルミが何かを考えるような顔になって言った。

これまでは士官学生としての遠洋航海実習の後、卒業後にも遠洋航海が行われ、一年の候補生期間を経て正式に少尉として任官していた。それが、レグルやエルミたちの代からは候補生期間が短縮されると、まことしやかな噂が流れていた。

「俺もその噂は聞いている。

期待半分、不安半分といったところだな。

本来なら一年かけて指揮だの実務を学ばなければいけないから、その期間が設定されてるんだろ？

それを短くしちまって、大丈夫なんだろうか。

確かに少尉の立場は、早くなりたいもんだけどさ」

少し考えたレグルは、優等生な発言に終始することにした。

宙ぶらりんな立場より正式な立場が欲しいと思う者たちからは、期間の短縮を歓迎する向きも多々見られた。

だが、ただでさえ養成に時間のかかる士官を、軽々しく作り出して良いものかと危惧を抱く者も少なくない。他には、いよいよオリザニアとの開戦が、近いためだと言う者もいた。噂の域でしかない『半年』と言う時間が一人歩きし、任官直後の少尉にいきなり指揮をさせるはずはないと、そこからさらに数カ月後が開戦だとしてたり顔で話す者までいる。

ただし、開戦避戦、開戦するならその時期などに関しては、国家機密でも最高の部類の事案だ。軽々しく口にして良いものではない。あまりこの話題について話し込んでいては、いつ教官の拳や平手が飛んでくるか分からない。

レグルは、休憩時間の終了を告げる号令に、救われたような気分になっていた。

「あまり、この話はするなよ、エルミ。  
ガンルームで調子に乗ってて、張り倒されても知らないからな」  
作業帽を被り直し、レグルはエルミに釘を刺して対空射撃訓練へと戻るために立ち上がった。

「分かってるわよ。」

レグルこそ気をつけなさいよ」

魔力体力を異常に消費する飛行訓練の休息は、他兵科とは異なっている。

まだ身体を休めるべき立場のエルミは、レグルの背中に悪態をつきながら、飛行甲板直下の搭乗員待機所に降りて行った。

ゴトムから厳しく叱責され、再度ハトー攻撃案の練り直しを命じられて以来、ロウは南工廠近郊の第一航空艦隊司令部の参謀長公室で呻吟していた。

ゴトムの剣幕に押し切られたロウは、雷撃に関しては攻撃前までに攻撃法を研究開発することにして、雷爆撃併用に案を改めることでもうやくゴトムの怒りを解くことができている。その後、軍令部に顔を出し、士官学校同期の軍令部第一部長リユーモ少将に作戦準備を密かに依頼している。もちろん、軍令部の了承などまだ取っておらず、公式な依頼ではない。

帝都泊地を母港とする『コツヴ』に乗艦するジツツと、直接会って作戦案を練り上げるため、ロウは帝都への出張回数が増えている。だが、第一航空艦隊参謀長としての業務を滞らせるわけにも行かず、ロウの日常は多忙を極めていた。ロウ直属の上司である第一航空艦隊司令長官エーキ中将はロウの状態を正確に把握しており、極力第一航空艦隊内の実務を他の参謀たちに振り分けるようにしている。エーキはエーキなりにゴトムの意図を悟っており、密

かにそれを支援する態勢を司令部内に整えていた。

ロウからの報告がないことも、機密保持の観点から織り込み済みのことだった。

ロウ少将とジツツ一中佐作成によるハトー攻撃の航空作戦草案は、それぞれの上司や部下同僚たちの有形無形の支援を受け、二月二六日にやっとの思いで完成された。

最初に突っ返されてからほぼひと月後に、ようやく連合艦隊司令部へ提出されたのだった。

それを元に、先任参謀は旗艦『アーストロン』の私室にこもり全体成案を練り始めた。

ロウ・ジツツ一案は、ハトー攻撃に参加させる空母を、航続距離の長い第一航空戦隊の『コッヴ』、『ブリッツ・ブロッツ』と、第五航空戦隊の『アパター』、『アルギュロス』の制式空母四隻にしていた。だが、先任参謀は攻撃力不足と判断し、第二航空戦隊の『デットン』、『テレスドン』の二隻を加えた六空母による攻撃計画を立案した。もちろん、先任参謀自身も航続距離の短い『デットン』と『テレスドン』に対する砂海上補給が、最大の問題点であると認識している。

砂嵐が吹き荒れる砂海上での魔鉱石補給を、いかに上手くできるかどうかには作戦の成否がかかっていた。先任参謀の頭の中は、これを解決する方策を考えることで占められていった。

近海実習最終日の二月二六日、軽空母『キーラ』は母港である帝都泊地へと砂海上を航行していた。

『下船準備』の号令まで、僅かの間ではあるが、両校学生には自由な艦内見学の時間が与えられている。級友たちと一通り砲術関連の施設を見て回ったレグルは、ふと思いついて級友たちと別れて、

搭乗員待機所へと足を運んだ。

エルミとレグルが幼馴染みであり、レグルの許嫁も同様であることを知っている級友たちは、そのままレグルを残してガンルームへと向かっていた。

「どうした、エルミ。」

疲れ果てた顔してるじゃないか」

搭乗員待機所には、エルミがひとりでぽつんと座っているだけだった。

余程疲れているのか、上体をテーブルに伏せただらしない格好をしている。万が一、指導教官に見つかりでもしたら、平手打ちの一発も喰らわされかねない。

「なによ、レグル。」

貴重な休息を邪魔しないで」  
顔を上げずにエルミが答える。

「休憩時間じゃないんだけど、今。」

他の生徒はどうしてるんだ？」

呆れつつもレグルはイスを曳き、エルミの正面に腰掛けた。

「あなたたちと私たちは課業の時間割が違うの。」

みんな仮眠中。

さっきまで発着艦訓練やってたんだから。」

私も寝たいんだけど、だるくてここから動きたくないの」  
そう言いながらも、エルミはまだ顔を上げようとしなない。

「確かに着艦は神経も魔力もすり減らすって言ってたな。」

それにしても、だらしなさ過ぎなんじゃないか？」

多少認識を改め、レグルは返した。



「前に乗った『ブリッツ・プロッツ』とか、『デットン』みたいな制式空母なら、こんな疲れないの。」

『テレスドン』は艦橋が左舷にあって着艦はやりにくいけど、ここまで神経は使わないわよ。」

でも、この『キーラ』は別格なの。」

揺れは大きいし、飛行甲板が短いから着艦が怖いのよ。」

ようやく顔を上げたエルミだが、疲れのせいかな顔色が良くない。

『キーラ』は、軍縮条約下で無理矢理建造されたという経緯があり、他の空母に比べいろいろと歪な形状をしていた。

トップヘビーな上部構造物を持ち、少しでも飛行甲板を広く使うため、実験空母で良好な運用成績を収めたフラットデッキを有している。だが、艦橋を飛行甲板の最前縁直下に設置することは、対空戦闘に際して上空視界を確保するため艦橋より前に飛行甲板を伸展できないことを意味する。

その結果、『キーラ』は飛行甲板長一五六・五メートル、幅二三メートルと、空母の中では飛行甲板が最も小さい艦となってしまうた。

「確かに『ブリッツ・プロッツ』は二四八・六メートルあるし、『デットン』だって二一六・九メートルだもんな。」

『テレスドン』が着艦し難いのは聞いていたけど、それとはまた違うのか？」

レグルは座学で聞いた知識から、エルミに質問した。

「そうねえ『テレスドン』は艦橋が左舷にあるでしょ。」

『コッヴ』もだけど。」

そうになると、着艦空域にちよつとの気流の乱れがでるの。」

その上さ、これは艦橋が左右にあるとか関係ないんだけど、他の

艦に比べて後に建ってるのよ。

「この配置だと、着艦する時に艦橋に突っ込みそうになる感じがあるの。」

でも、『キーラ』は着艦時にちょっとでも甲板の中心からずれるとね、眼の下にすっ飛んでいく砂海が見えちゃって、別格の怖さなのよ」

疲れを顔に滲ませたまま、溜め息をつくようにエルミが言った。

「そうか、知らんこととはいえ、済まなかったな。」

「ただ今からそんなんで、大丈夫なのか？」

「どうしていいか解らないまま、レグルは聞いた。」

下手に同情しては、エルミの飛行士官学生としての誇りを傷つけかねない。

実習中の艦内で、いくら幼馴染みとはいえ、肩を抱くような真似が許されるはずもない。チエルの宿で飲んだくれて潰れたときのようないことができるわけではなかった。

「いいの、こつちこそ悪かったわ。」

『キーラ』で完璧な発着艦ができれば、あとはどの艦に配属されても大丈夫って考えればいいんだもん。

「ただ、ちょっとね、遠洋航海に行きたかったなあって、ね」

眠たそうな目でエルミが言った。

「エルミ、俺は内南砂海の航海には、意義があると思っている。」

最近、よく喧伝されている西部大東砂海共栄圏ってのがどんなものか、この目で確かめておく必要があるんじゃないか？

もう寝ちまえよ。

帰港するまで、やることはないんだろ？」

エルミの言葉にレグルは、厳しい目つきでそれだけ言うが、最後の一言は優しげに言葉を投げかける。

「うん。」

西部大東砂海共栄圏ね。

寝る。

レグルも、身体休めときなよ」

そう言ってエルミは欠伸をしながら身体を伸ばし、搭乗員待機所を出て行った。

西部大東砂海共栄圏とは、現在の外相が初めて公にした言葉だった。

ドラゴリー大岩盤やバキシム大岩盤の列強諸国の植民地支配から、東ベロクロン、東南ベロクロンを解放し、この地域にソルを盟主とする共存共栄の新たな国際秩序を建設しようという壮大な構想だ。

ソル皇国、フェクタム帝国、メディーエータ共和国を一つの経済共同体とし、東南ベロクロンを資源の供給地域に、南部大東砂海を国防圏として位置付けるものとした、『西部大東砂海がソルの生存圏』であると宣伝されていた。

外相の外交基本方針は、西部大東砂海共栄圏の完成を目指すこと。その一点に尽きた。

外相は、北方から大東砂海共栄圏を脅かす共産主義国家のロス共和国とは、何らかの協定を結び、味方に引き入れることができなくとも中立化を図りたいと考えていた。そうなれば、ソル ロス共和国 アレマニア共和国 ウィトルス王国とベロクロン大岩盤からドラゴリー大岩盤を横断する枢軸国の勢力集団が完成する。このベロクロン・ドラゴリー枢軸構想とも、四国連合構想とも呼ばれるそれは、オリザニアとサピエントを中心とした『持てる国』との勢力の均衡をもたらし、ソルの安全保障ひいては世界平和と安定に寄与す

る、と考えていた。

だが、建国の思想からして異なり、ソル国内においては共産主義者を迫害している現状で、ロス共和国との中立化は何にも増して困難と周囲からは見られていた。

しかし、外相はロス共和国と不可侵条約を結んでいるアレマニア共和国の仲介があれば、十分な可能なことだと判断していた。外相は周囲の雑音に耳を貸すことなく、三国軍事同盟およびソル・ロス中立条約の成立に邁進した。

そのなりふり構わぬ外交の成果は、まず前年九月の三国軍事同盟成立として表れていた。

二六四一年三月一三日、外相は三国同盟成立慶祝を名目としてアレマニアとワイトルスを経訪し、それぞれの総統と総帥の両首脳と首脳会談を行い、熱狂的ともいえる大歓迎を受けていた。

アレマニアとワイトルスからの帰路は、直接ソルへ戻る船便ではなく、ロス共和国の首都からフェクタム帝国を経由し、メディーエータを突っ切って帰国するドラゴリー横断浮遊路線での旅が計画されていた。当然、ロス共和国の首都では、同国の首相との会談が予定されている。このとき外相は、この会談でロス共和国との間に、なにかしらの条約なり取り決めまで持ち込む腹積もりだった。

「まだ修行先に戻るあてはつかないのか？」

チエルの宿の食堂で、手持ち無沙汰にしているガルが聞いた。

「うん。」

廃業するようなことはないんだけど、あたしたちまで抱えとく余

裕がないみたい。

「親方は新しい修行先を探してくれてるんだけど、メデイエータ料理自体がね」

「努めて明るく振る舞っているが、焦燥の色が滲み出ているチエルが答えた。」

「やっぱり、あれか？」

「敵国だからか？」

「躊躇うようにガルは言った。」

「ソル・メデイエータ基本条約の締結に伴い、両国は表面上友好国となっている。」

「だが、共和国政府と共産主義政府との内戦は継続しており、ソルはメデイエータ共産主義政府との戦争は継続している。多くのソル人にとってメデイエータがふたつの国に分裂しているなど関係のないことであり、大きな括りの中では敵国人でしかなかった。事実、共産主義政府の手の者や、積極的に政治活動に関わってはいないものの大岩盤を侵されている現状を快く思わない在ソルメデイエータ人が、ソルの国内情報を共産主義政府に流すなど、それなりの敵対行為も摘発されていた。他愛のない世間話から情報を引き出された一般のソル人が、利敵行為を働いたとして官憲に引つ張られることも少なくなかった。」

「このような現状が、未だ戦端を開いていないオリザニアやサピエントに比べ、在ソルメデイエータ人や、メデイエータ発祥の文化への風当たりを強くしていた。」

「そうなのよ。」

「やっぱり、ね。」

「条約があっても、実際戦争は続いているものね。」

でもさあ、サピエントとかドラゴリー風はいいんだよね。  
オリザニアだってドラゴリーの分身みたいなものなのに。

ソル以外の料理は、アレマニア風とウィトルス風以外は認めない  
っていうなら、まだ納得はできるよ。

でも、メデイエータだけダメって、どういうことなんだろうね」  
憤懣やるかたないという表情で、チエルはテーブルを叩いた。

二年次への進級が決まっているガルは、三月二〇日に春休みにな  
ってすぐ村に戻っていた。

チエルのいない帝都など、ガルにとっては何の魅力もない。そこ  
まで言つては言い過ぎかも知れないが、学友たちが帰省し、レグル  
とエルミは遠洋航海から戻っていたが、卒業を目前に控え追い込み  
で多忙を極め外出など夢のまた夢となれば、帝都にいる理由はない。  
そのふたりも四月になれば、少尉候補生となつて一時帰省してくる。  
実家の仕事を手伝わなければならないことも、ガルが帰省してい  
る大きな理由だ。

チエルは年明けから二〇日ほどは、滅多にない機会だとばかりに  
のんびりと村で過ごしていた。

親方からの魔通を待っていたが、『モウ暫ク待タレタシ』という  
魔通が三回送られてきただけだった。チエルは先の見えない待機生  
活に痺れを切らせて、一度修行先まで行ってみた。だが、家族だけ  
で店を切り盛りする親方の姿を見て、チエルは店に入ることも、親  
方に面会を求めることもせず、帰ってきてしまったのだった。確か  
に店は繁盛してはいるが、弟子を食わせておけるほどではなかった。  
それ以上にチエルの足を止めさせたのは、近くの街角やカフェに  
張り込む特高と思しき目つきの鋭い者たちの姿だった。

対メデイエータ戦争を戦っている皇国にとって、それが例えソル  
風にアレンジされた料理であってもメデイエータを賞賛するような

行為は利敵行為と取れてしまう。メデイエータの料理を出しているだけで、戦争に反対し、メデイエータに肩入れし、国家に対して良からぬことを企む輩が集まっているように疑われているのかもしれない。

国家が総ぐるみで、疑心暗鬼に陥っているといっても良かった。

「こう言っちゃなんだけどさ、それはしょうがないよ。

サピエントもオリザニアも、ちよつと前まで手本にしてただろ。

それに比べてあれば、料理以外……」

吐き捨てるようにガルは言った。

そして、料理以外に良いところを探そうとして口ごもる。

まだソルが文化を持つ遙か以前、既にメデイエータでは高度な文化が発達していた。

ソルはメデイエータから様々な知識や技術、文化を吸収し、急速に発達してきた歴史がある。長い間、メデイエータはソルの先生だったといっても過言ではない。

だが、二百年ほど前からメデイエータの国情は廃類し、とても文化的とはいえない国家に成り下がっていた。プライドだけが肥大化し、新たな技術開発もせず、太平の世に眠り込んでいった。

人口や国土は世界有数の国であり、潜在能力は計り知れないものがあるが、メデイエータが眠りを覚ますことはなく、『眠れる獅子』と呼ばれていた。もちろん、その潜在能力に恐れを抱いての呼称ではなく、『何をしても目を覚ますことのない図体だけでかい無能者』という意を込めた蔑称だった。

「ガル、そういうことを言うもんじゃないよ。

ひとりひとは良い人なんだよ、あの国の人は。

確かに集団になると……」

チエルは言い返したが、思い当たるふしが多すぎて、ガル同様に

口ごもってしまった。

個々人の付き合いにおいて、メデイエータの人々から不利益を受けた記憶を、チエルはほとんど持っていない。

修行先の店にいたメデイエータ人たちの大半は、戦況の泥沼化に伴って帰国してしまっていたが、僅かに残ったメデイエータ人がソル人に対して悪意を以て向き合うことはなかった。ベロクロン大岩盤に帰るところを持たない弱みもあるのだろうか、地域に溶け込み、経済活動を継続するための努力は積極的に行っている。

だが、コミュニテイ同士に争いが起きた場合は、暴力に訴えることこそなかったが、頑迷な対応に終始することが多かった。

コミュニテイ同士が問題解決のために話し合いに席を設けたとして、その席までは和気藹々と肩を並べて歩いてくるソル人とメデイエータ人が、いざ議論を始めると殺伐とした雰囲気をついに掴みかからんばかりになる。そのメデイエータ人の豹変した剣幕に、ソル人がたじろじになる場面がほとんどだった。

場が紛糾し、暫く頭を冷やそうとなつて休憩を取り、議会の席から一步出たメデイエータ人がそれまでの剣幕を一切消し去り、日常の話題を笑顔で振ってくるに及んで多くのソル人は混乱するばかりだった。メデイエータ人に見れば、集団の利益を自身の一言でふいにしたと、後々仲間内から攻められまいという処世術だったのだが、その豹変ぶりはソル人の理解を遙かに超えていた。中にはメデイエータ人から苦しい胸のうちを打ち明けられ、その立場に同情するソル人もいるにはいる。しかし、多くのソル人には表裏のある、ソル人の倫理では最も嫌われる態度と受け取られていた。

決して悪人ではないのだが、問題が起きる度に両者の間には溝が深まっていった。

気まずい沈黙の中、唐突にチエルが口を開いた。



「ねえ、あたしの料理食べてみてくれないかな。  
メデイエータの料理って味が強いから、ソルの人にはちょっときついのね。」

ソル人向けにならないか、少し調整してみたんだ。

当分、ここでやっていかなきゃいけないみたいだし、帝都みたいに本格メデイエータ料理が売りになるとは思えないのよ」

そう言うとチエルは、一般的にメデイエータ鍋と呼ばれる大きな両手鍋をコンロに乗せた。

魔鉱石が配給制になり、必要以外はコンロに火を入れることはない。

だが、メデイエータとの戦争が長引き、新たな戦乱の予感がある今、どこの宿も客足は落ちる一方で魔鉱石には却って余裕が出るという皮肉な状況になっていた。チエルの宿も例外ではなく、軍関係の出張の中継地として利用される以外、観光はもちろん商用の客足も途絶えがちになっている。

多少魔鉱石を仕事以外に消費しても、それほど影響があるとは思えなかった。

「そういえば、チエルの料理を食うのは久しぶりだな。

楽しみにしてるよ。」

でも、いいの？」

夜の仕込みとかあるんだろ？」

腹の中では、それを独占できるレグルに対しての嫉妬が渦巻いているが、ガルはその状態を自虐的に楽しむことで開き直っている。

とにかく、今はチエルの料理を独占できる千載一遇の機会だ。それも新作とあつては、まだレグルも知らない料理のはずだ。

チエルの仕事を気遣いながらも、あとで自慢してやろうと、ガルは年に似合わない幼い優越感に浸っていた。

「大丈夫だよ。」

今夜のお客さんは一組だけだから」

そう言うとチエルは保冷库から材料を探し出し、まな板に載せて切り始めた。

「なあ、レグルが帝都以外に赴任することになったら、いや、勤務地が帝都でも、乗艦勤務になったらどうするんだ？」

料理の完成を待ちながら、ガルはチエルに訊ねた。

「悩んでる」

手を休めることなく、チエルは正直に答えた。

「ついて行くことは間違いないよ、夫婦になるんだもん。」

でもなあ、ただ待つだけは嫌。

料理の修行は続けたいし、レグルの俸給だけを宛てにするのも、なんか、ね。

基地勤務なら、その近くの料理屋で修行するのもいいなあって思うよ、あればだけどね。

それか基地の士官食堂で雇ってくれないかなあ。

そうすれば、側にいられるもんね。

でも、乗艦勤務になったら……」

具材を刻み、下味をつけながらチエルは続けた。

ガルは黙ってチエルの手元を見ながら聞いている。

「乗艦勤務になったら、この村で待ってるのも手だけどさ。」

いつそ、あたしも軍属に応募して、レグルが乗る艦に配属してもらおうかしら」

チエルの言葉に、ガルが盛大に噴き出した。だめだ、俺の入る隙間なんかこれっぽっちもねえや。

解っていたことだったが、チエルが村に残ることに僅かとはいえ望みを抱いていた自分が滑稽すぎた。

たとえば、チエル独りが村に残ったとして、レグルの妻に言い寄るなど質の悪い間男でしかない。ガルは、今まで自分が考えていたことがそういうことだと気付き、己が倫理観に照らし合わせて愕然としながら嘔き出してしまった。

「何よ、ガル、失礼ね。」

「そんなに笑うようなこと？」

鉄製のお玉を振り回し、チエルが口を尖らせた。

「ごめん、太平楽に考えてる自分が莫迦みたいでさ。」

将来のこと、俺以外はみんな真面目に考えてるんだなって」

家業を継ぐことが決定しているガルは、学問を修めることが村の発展のためという、漠然とした考えを持ってはいた。

だが、己が一生を賭け、何かを追い求めようという夢を持っていないことに、このときはつきりと気付かされていた。

チエルの側にいたい。この一心だけで帝都への進学を決め、チエルが村に戻ることを期待して家業を継ぐ決心をしていた。

「どうしちゃったの？」

ガルらしくないよ。

ガルだって、鍛冶屋の仕事をより良くするために学校に行ってるんでしょ。

自信持ってよ。

はい、味見てね」

チエルは自分自身が主たる原因であることにまるで気付くことなく、ガルの前に料理を出した。

ガルの前に置かれた皿には炒めた挽き肉と豆腐を軽く煮込み、と

るみつけたものが湯気を立てていた。

「これ、前に修行先の店で出してもらったやつに似てるけど？」  
箸をつける前にガルが聞いた。

確かに見覚えはあるが、具材や仕上がりの色と香りが別物だった。

「まあ、いいから食べなさいって。

麻婆豆腐を改良したんだよ。

蒜苗なんて手に入らないからね。

修行先では農家に特別に頼んで作ってもらってたから。

レグルがエルミの家で作ってもらうにしても、需要があたしの宿  
だけじゃ、ねえ。

何か代わりのものって考えて試してたら、これが一番良かったの  
得意げにチエルは鼻を動かした。

「これは……醤油が主役の味付けか。

これもご飯に合うな。

うん、俺は、この方が好きだな。

親方の料理も美味かったけど、毎日食うにはきついんだよな。

これなら毎日でもいけるよ。

ソル人にはこの方がいいんじゃないか」

汗を拭いながらガルが言った。

辛みはかなり控えめにしてあるが、普段から辛いものを食べ慣れ  
ていないソル人のガルにとっては結構な辛さだった。

「花椒が手に入らないからね、代わりに山椒を使ってみたんだよ。  
美味しいでしょ。

親方の作る本格メデイータ料理もいいんだけどさ、あれって口  
に合わない人も多いからね。

ソル風に作り替えてもいいんじゃないかって思うの。

親方の前でやったら張り倒されそうだけど。  
ウチの売りにできるかな」  
そう言つてチエルは笑つた。

「うん、でも、気を付けてやってくれよ。

メデイエータに肩入れしてゐるって思われると、痛くもない腹を探られることになつちやうぜ。

レグルの立場を考えると、あまり勧められることじゃないな」  
ガルは、率直な意見を言つた。

帝都でもメデイエータ料理店が、共産主義者の集まりの場に使われることがあつた。

すべてではないが、そういった店のオーナーや店主がメデイエータ共産主義政府に連なる者であつたり、そのシンパであつたりで、集まりの場を提供していたのだった。もちろん、客が共産主義者と知らずにいた店主も多いが、心情的に隠れ蓑になつてゐることを黙認する者も多かつた。中にははつきりと断るチエルの修行先のような店もあつたが、メデイエータ料理を出す店は、官憲から目を付けられてゐるとしても過言ではない状況だった。

その状況下で宿の売りに改良しているとはいへ、メデイエータ料理を持つてくるなど、ガルには危険に思えた。

「大丈夫だよ、ガル。

憲兵も特高も、こんな田舎まで来るほど暇じゃないでしょ。  
でも、ありがとう。

レグルのこと考えると、あまりやらない方がいいよね」  
そう言つとチエルは、少し寂しそうな顔をした。

「うん、まあ、客を選べばいいんじゃないかな。

この辺りの人なら大丈夫だろうし、帝都からの客には出さないよ

うにすれば」

しゅんとなつたチエルを見て、ガルは慌てたように取り繕う。チエルが憲兵や特高に目を付けられたらと思つての物言いだつたとはいえ、チエルに全否定と受け取られたようにガルは感じてしまつたのだつた。

「うん、気を付けるよ。

ありがとう、ガル。

あたし、ちよつと焦つてるのかもね」

気を取り直したように小さく笑い、チエルは食器を片づけ始めた。確かにガルの言うとおりで、レグルの立場を考えればメイドエーダ料理の修行は暫く諦めるべきだつた。

「うん、別にチエルを否定するわけじゃないんだ。

最近よく魔導放送で聞く西部大東砂海共栄圏が上手くいったらさ、大手を振つてやれるんだからさ。

今はちよつと我慢しておくだけだよ。

改良料理の味見なら、村にいる限り引き受けさせてもらつぜ」

言外に自分以外、せいぜい家族とレグル、そしてエルミだけにしておけとの意味を含め、ガルはことさら明るく言った。

「そうだね、もうすぐレグルも帰ってくるし。

それで封印しようかな」

暗い目になりつつ、チエルが呟いた。

「大尉、ここが今夜の宿であります」

背中に鉄棒でも入れているのではと思えるほど、きっちり背筋を伸ばした男が真っ直ぐ前を向いたまま言った。

「少尉、軍人然とした態度はここまでにしてくれ。

せつかくの休暇が、堅苦しくなっては敵わん。

それに、一般の宿だぞ。

宿の方に余計な気を使わせるようなことはするなよ」

仕立ての良いスーツを肩にかけ、柔和な笑みを浮かべたもつひとりの男が嗜めるように言う。

「はっ、失礼致しました。

では、ここから改めさせていただきます」

それでも上官に対する最低限の礼を失しないように男は答え、スーツを片腕に抱えなおして歩き始めた。

## 第15話 混迷

「お帰りなさい。」

「ご卒業、おめでとつございます。」

ふたりとも、見違えちゃったよ」

嬉しさを辺りに振りまきながら、チエルはプラットホームで涙ぐんでいた。

「お帰り、レグル候補生。」

誰かと思ったぜ、エルミ。」

とにかく、おめでとつ」

眩しそつにふたりを見るガルが、満面の笑みで言う。

「ただいま戻りました。」

ただいま、チエル」

これ以上はないほど見事な姿勢でレグルは敬礼し、プラットホームに溢れる村人に挨拶したあと、優しくチエルに向き直った。

「ただいま戻りました。」

ひつどおい、ガル」

背筋をきちんと伸ばして敬礼したあと、頬を膨らませたエルミに笑いが弾ける。

「いいじゃないか、誉めてるんだぜ、エルミ。」

三年前に泥酔して気絶したなんて、今の姿からは誰も想像できないって」

ガルの混ぜっ返しに、プラットホームに爆笑が沸いた。



「ただいま、お父さん。」

「恩賜の短剣、いただいて参りました」

仏間で向き合った父子の間で、袱紗に包まれた短剣が受け渡される。

丁寧に包みを開けた父は、鞘を払って室内灯の光に刀身をかざした。

暫く身動きもせず刀身を見つめて鞘に戻し、おしいたいでから仏壇に供えた。

「よくぞ……」

それだけ言ったあと父は絶句し、目頭を押さえる。

自身が抱き、そして破れた夢を、今息子が見事に果たした。帝都を襲った大震災が奪い去った自身の夢が、今息子が結実させ目の前にある。万感の思いを込め、父はレグルに向き直った。

「よくやった、などと俺には言えん。」

「ありがとう、レグル」

父の目に光るものがある。

「いえ、すべてはここまで育ててくださった、お父さん、お母さんのおかげです。」

私は、恩賜の短剣を受けた者として、皇国に身を捧げる覚悟です。お役に立てる身に育てていただき、ありがとうございます」

畳に手を突き、見事な所作でレグルは一礼した。

かつてのやんちゃな面影は、すっかり影を潜めていた。

「そうだな、もうお前の身体は皇国の物だ。」

立派にお役に立ってくれ、レグル。

何にしてもめでたいことだ。

この村から同時にふたりも士官が生まれるなんて。

士官の輩出すら初めてだというのに、エルミちゃんとお前のふたりも士官になるなんてなあ」

落ち着きを取り戻した父は、眩しい物を見るように息子を眺めた。やがて、母が酒の支度が整ったと声をかけ、家族だけのささやかな宴席が始められた。

「お前から直れ」

エルミに向かって騎兵軍式の拳手敬礼をした次兄が、小さく言った。

「でも、兄さん」

砂海軍式の拳手敬礼を続けるエルミが、困った顔で小さく答える。この日のために休暇を取った次兄は、駅ではなく家の前で待っていたのだった。

「候補生とはいえ、お前の方が上なんだ。

お前が降ろさなきゃ、俺はいつまで経ってもこのままだぞ。

お前が飛行士官学校を受けると聞いてから、妹に向かって敬礼する日を、俺はどれほど待っていたことが。

ほら、降ろせ」

確かに所属する軍の違いはあるが、下士官が士官より先に拳手を降ろすなどあり得ない。

「はい」

満面の笑みを湛える次兄に促され、エルミは拳手を降ろし、両手

を指先まできっちり伸ばすと直立不動の体勢を取った。

「それでいい」

エルミが拳手を降ろすのを見届けると、士官学生の見本にしたいと思うほどのきれいな所作で次兄は拳手を降ろす。

「恩賜の短剣は残念だったな。

それでも半分よりは上か。

お前にしちや、上出来すぎだよ」

家族で囲む食卓に長兄の声が響いた。

「酷いわね、お兄ちゃん。

これでも落ち込んでるんだから。

また、レグルと差を付けられちゃうわ」

この日何度目か分からない膨れっ面を、エルミは作った。

魔法や飛行術は常に上位五人に入っていたが、生来の勉強嫌いが響き、総合成績ではギリギリ恩賜組には入ることができなかった。

それでも軍政より軍令、それも現場を望むエルミにしてみれば、下手に上位の成績を取って砂海軍大学校など受験する羽目になるくらいなら、恩賜の短剣など重圧にしかならないと開き直っていたのだった。

「ちゃんと卒業できたんだから、エルミにしたら上出来ですよ。

お母さんは、いつあなたが逃げ帰ってくるか、そればかり心配してたんだから」

母の言葉にエルミがまた膨れ上がり、小さな家の中は笑いで満たされていった。

「明日はチエルちゃんが腕を振るってくれるんだろ？」

涙目になりそうなエルミを見て、次兄がさり気なく助け船を出す。

「うん、楽しみなんだ。」

今日はみんな気を利かせてくれてるけど、そんなに長く村にいられるわけじゃないからね。

みなでわいわいやるのも楽しみにしてたのよ」

次兄に感謝しつつも、エルミは胸の奥に小さな痛みを感じていた。

新年祭以来、帝都でチエルに会うことはなかった。

料理修行が中断しているということは、幾度か交わした手紙で知っている。だが、チエルが心配かけまいとして詳しく書かなかったため、どう行つた経緯なのかエルミもレグルも承知していない。まさかチエルが解雇されたとは思わないが、昨今の風潮が原因だろうとはふたりとも感じ取っていた。しかし、根ほり葉ほり聞くわけにもいかず、言いようのない不安を抱えたままだ。

駅で再会した際のチエルの明るさが、ふたりの不安をいつそうかき立てていた。

「いらつしゃい、待ってたよ。」

こんなご時世だからたいした物はないけど、精一杯やるから楽しんでいってね」

レグルとエルミがそれぞれの家族とともにチエルの宿のドアをくぐると、チエルが待ちかまえていた。

「候補生殿、今夜は宿を取ってありますので、どうぞご安心を」

楽しそうにガルが後ろから顔を出した。

それぞれか夢に向かって動き出したとき、前祝いと称して飲んだ

くれ、そのままチエルの宿に泊まったことを再現しようということだった。

村の主立った者たちが集まったところで、レグルとエルミの卒業を祝う宴席が始められた。

村始まって以来の快挙に、暗く沈みがちだった雰囲気は一掃され、誰もが心地よく酔っている。昨年の贅沢禁止令のせいで豪華絢爛とはいかないが、それでも普段とはひと味違う料理が並べられていた。もちろん、本来であれば取り締まる立場の駐在も、この日はかりは野暮なことは言い出すことはない。

レグルとエルミの姿は、これから大人の仲間入りする少年や少女に、これ以上ないほど眩しく輝いて見えていた。

数人の少年少女がふたりを囲み、士官学校の入試問題や、飛行士官学校の授業について質問責めにする。

まだ酒を飲むことを許されない子供たちに比べ、合間に杯を干しているふたりは、徐々に言葉が怪しくなっていく。やがて、時計が九時の鐘を鳴らし、子供たちが親に連れられ帰って行った。

笑顔で子供たちを見送ったあと、ふたりからは大きな溜め息が漏れ、それを見た大人たちが大笑いした。

「しかし、よく帰ってこられたな。」

四月一日から勤務じゃなかったのか？」

人氣が引いたチエルの宿の一室に、四人の男女が車座になっていた。

レグルとガル、チエルとエルミが向き合っている。レグルとチエルが隣り合うように自然に腰を下ろした結果、ガルに寄り添うよう

にエルミが座っていた。

「ああ、俺たちも驚いたんだ。

本来なら、三月二七日に寮を引き払って、任地へ荷物を送って、二八日から三〇日が休暇、それで三一日が移動日のはずだったんだ。それがいきなり三日ずれこんで、その上休暇が一週間だぜ」  
難しそうな顔でレグルが答えた。

三月三〇日に寮を引き払い、本来新任地で四月一日に行われるべき候補生任官式を、三一日に一日前倒しで済ませていた。

そして四月一日から七日までの一週間が特別休暇になり、八日が移動日で九日から勤務が始まる。何から何まで異例尽くめだった。

「噂は本当だったもんね。

本来なら私たちの少尉任官は来年の四月一日なんだけど、今年の一〇月一日に繰り上げなのよ。

そのせいなのかな」

エルミも思案顔で言う。

チエルのこと聞きたいのだが、どう切り出していいか解らずに自分たちのことを話題にしていた。

「今休ませてやるから、あとは休むなっただことだろ。

もう慰霊祭の休みもないんじゃないか？」

レグルが半ば諦め顔で言う。

主力艦の保有比率を対オリザニア六割台に抑えられて以来、砂海軍の訓練は激烈を極めていた。艦艇保有量に制限はあっても、訓練の量に制限はないという理屈だ。

基本的に週一日は休むことになってはいたが、訓練の状況や長期演習に際しては休みなど簡単に消し飛んでいた。

それが公然と安息日にも訓練を入れると、上層部から通達が出さ

れていた。

毎週ではないにしろ、休みは確実に減ってしまう。

オリザニアとの開戦が近付けば、それこそ休んでなどいられないだろう。この異例ともいえる長期休暇は、まだ正式に任官していない候補生たちに対する最後の温情なのかも知れなかった。

「なあ、これはあんまりしたくない想像なんだが、年内にオリザニアとやるのか、皇国は？」

お前たちなら、何か聞いているんじゃないか？」  
不安そうな表情でガルが聞いた。

「何故、そう思う？」

目つきを鋭くしたレグルが、質問に質問を返す。

生徒の言動に規律違反を見つけ、それを咎めようとする教師の顔のようだ。

「いや、俺は軍とか政治のことはよく分からないけど。

普通は一年かけて育てる士官を急造する。

いきなり戦場に放り込むはずはないから、数ヶ月は実地教育をする。」

メデイエータとの戦争の主役は騎兵軍。

お前たちをメデイエータに送り込むには、少し焦りすぎだ。

内大岩盤は、砂海軍では制圧できないからな。

つまり、メデイエータ方面艦隊は士官教育にはもってこいだ。

となれば、答えは……」

そこまで言っつて、ガルは答えをレグルに預けた。

「チエル、修行は暫く休みなのか？」

レグルは唐突にチエルに聞いた。

「え？」

あ、あの、うん……。

親方から、当分自宅待機だって言われてね」

急に話を振られ、どう答えていいか解らないチエルは、答えに窮した。

今はガルがレグルに答えを求めているのだ。しかし、レグルの目はチエルに、答えを求めている。あまりの迫力に、チエルは正直に答えることにした。

もつとも、不祥事で解雇されたわけではないので、特に隠す必要もないのだが。普段会えない状態で余計な心配をかけたくないばかりに、今まで詳しく話す機会がなかっただけだった。

「おい、レグル、なんだよ、急　？」

……解ったよ、この話は無しなんだな？」

突然はぐらかされ、文句を言おうとしたガルをエルミが目で止めていた。

どんな形で話が漏れるか解らない。

ガルに悪意がなくても、両親に話せばそこからまた話は広がりかねない。繰り上げての少尉任官は公式発表されるから、そこから様々な噂は広がるだろうが、軍関係者自ら余計なことを言うわけにはいかなかった。

「レグルは第八戦隊に配属になったんだっけ？」

私は第二航空戦隊。

『デットン』艦攻隊よ。

南工廠所屬だから暫く帝都からは離れちゃうけど、しょうがない



わね」

固い雰囲気をはぐすように、エルミが得意げにいった。

『デットン』は『コツヴ』や『ブリッツ・プロッツ』の運用経験で確証を得られた手法を選んで無難に設計され、ソル空母のモデル形になっていた。

基準排砂量一万五九〇〇トン、全長二二七・五メートルの艦体に二二六・九メートルの飛行甲板を載せ、全幅 二一・三メートルのスマートな艦型を有している。一五万二〇〇〇馬力の機関は、この巨体を最大速力三四・五ノットで砂海上を走らせることができる。公試運転では、搭載する魔鉱石や弾薬などの物資が半量の状態とはいえ、三四・九ノットを記録し、ソル空母最速の称号を得ていた。

航空兵装は、新鋭戦闘機の零型艦戦、九型艦爆、七型艦攻をそれぞれ三個飛行小隊一八機ずつの五四機を常用とし、この他偵察小隊として七型艦攻三機、補用機として零型艦戦四機、九型艦爆と七型艦攻を六機ずつ、分解した状態で搭載している。

航続距離が十八ノットで七六八〇浬と他の制式空母に比べて短いことを除けば、中型空母としては申し分ない性能であり、世界の砂海軍関係者からは理想的な空母との評価を得ている。

準同型艦である僚艦『テレストン』とともに第二航空戦隊を形成し、闘将オーキキ少将の将旗を交代で掲げている。

『デットン』の九型艦爆隊は、『コツヴ』艦攻隊指揮官の雷撃の天才ジュージ少佐とともに砂海軍の至宝と並び称される、急降下爆撃の神様コウモ少佐が率い、全空母艦爆隊中最高の爆撃命中率を誇っていた。

「そうなんだよ。」

第八戦隊『ドラコ』の砲術科だ。

エルミともども第二艦隊なんだよな。

ま、同じ第二艦隊とは言っても『ドラコ』母港の母港は西工廠だから普段は離ればなれだし、演習で砂海に出てる時には会えないのが残念だけど。

できれば戦艦がよかつたんだが、まずは腕を磨いてからだな。

当分の間、みんなバラバラになっちまうんだな」

レグルは不完全とはいえ希望が叶った喜びと、友と離れなければならぬ寂しさをない交ぜにした顔で言った。

同型艦である僚艦『ケロニア』とともに第八戦隊を形成する重巡洋艦『ドラコ』は、二〇・三センチ主砲連装四基八門をすべて前甲板に集中配置し、後甲板は飛行甲板とした特異な艦型を有している。どちらかといえば攻撃力重視重武装のソル重巡にあつて、水上偵察機を六機搭載する偵察能力に特化した艦であつた。

基準排砂量一万二〇〇トン、全長二〇一・六メートル、全幅十九・四メートルの刀剣を思わせる鋭い艦体に搭載された十五万二〇〇〇馬力の機関は、砂海上を最大速三五・五ノットで疾走する能力を有している。航続距離は一八ノットで九二四〇浬と申し分なく、艦隊の目としての役割を果たすに充分だ。

一二・七センチ連装高角砲四基八門、二五センチ連装機銃六基一二挺、一三センチ連装機銃二基四挺の強力な対空火器と、六一センチ三連装魚雷発射管四基一二門という強力な砂雷兵装を兼ね備え、空母や戦艦といった主力艦の護衛からソル砂海軍のお家芸ともいえる夜間の砂雷戦まで幅広くこなせる万能重巡洋艦と評されている。

「そうか、みんなバラバラか。

寂しいけど、しょうがないか。

じゃあ、俺は大学院に進んで、お前らの役に立つ鉄鋼の研究をしようかな」

寂しげな表情を浮かべてガルが言う。  
ふたりの希望が叶ったことは素直に祝いたいが、遠く離れてしま  
うことはやはり寂しかった。

自分が学問のために帝都へ出たあと、チエルは暫くこの村に残る。  
専門技術学校に学友はいるが、やはり幼馴染みとして長い間とも  
に過ごしてきた三人と離れることはつらかった。

「新年祭にはいくら何でも帰してくれるでしょ。」

全員がいつぺんに帰省するのは無理としてもね。

ガルの休みは長いんだから、その辺は都合つけてよ。

あと、たまには遊びに来て欲しい、な」

エルミが殊更寂しそうな顔を作りながら言った。

「寂しいが、仕方がないな。」

ガル、俺の方は構わないから、たまにはエルミの方に行ってやれ

「よ

レグルが悪戯っぽい顔で言う。

「そうだな、男に会いに行っても色気がない。」

迷わず、エルミの方に行くよ。」

そっちにはチエルが行くんだろっし」

笑いながら、さばさばとした顔でガルは答えた。

「まだゆっくりしていけるんでしょう？」

久し振りなんだから、今夜は飲んじゃおうよ。」

今夜は宿の奢りだよ。」

何か作ってくるね。」

レグル、手伝って」

エルミ、今夜こそ、と視線に意志を込めてエルミを見てから、チ

エルは立ち上がった。

「いいだろう。」

「食事当番で鍛えた腕を見せてやる」

同様にエルミを見てからレグルも立つ。

「もう尻に敷かれてるのか？」

「今からそれじゃあ、先が思いやられるぜ、レグル」

何となく身の危険を感じたガルが、レグルを引き留めようとして茶々を入れた。

「今から、だと？」

「莫迦にするなよ、ガル。」

「とつくに、だ」

ガルの意図を知ってか知らず、レグルはこの時代のソル男児にあるまじき一言を言い放ち、チエルについて部屋から出ていった。

ソル皇国の風潮としては、全般に男尊女卑の傾向が強い。

だが、家に入ってしまったえば実権を握っているのは、多くの場合女性だった。もちろん、実権を握っている方が虐げるということはなく、互いに尊重しながら慈しみ合っている。ただ、社会に出て働く立場に男性が多く、女性がそれについてとやかく言わないため、そのように見えているだけだった。

社会的に高い立場の者が、家に戻れば良き夫良き父として、家事を分担することは珍しくなかった。

「本当に、先が思いやられるぜ。」

「なあ、エルミ？」

笑いを噛み殺しながら、ガルはエルミに同意を求める。

「わ、わ、わ、わ、私は、し、し、尻に敷いちゃったり、し、し、し、にやいかりやつ！」

思いつきり噛みながらエルミが真っ赤になっていた。そして、手元にあつた強い酒のビンを一気におおる。

「何、真っ赤になつて……」

おい、よせ、エルミ！

そんなことしちゃダメだつて！

レゲル！ チエル！ 戻ってきてくれえ！

エルミを止めてくれえ！」

ガルが慌ててエルミから酒ビンを奪おうとするが、恥ずかしさのあまりエルミは酒をあおり続けた。この朴念仁！

部屋を汚したり、女を押さえつけたりするわけにはいかないという常識が、酔い潰れたらまた大変な目に遭わされるという恐怖と、幼馴染みを二日酔いで苦しませたくないという良識を上回り、ついガルの力を緩めさせた。

切迫したガルの叫びに慌てたふたりは戻ってきたが、エルミの暴走と妄想は留まることを知らなかった。

僅かに残る理性がガルへの告白を引き留めていたが、照れ隠しもあつてレゲルとチエルをからかい続ける。もうひとつ、酔ってしまったえば多少ガルにしなだれかかっても、いつもの戯れだと思つてもらえるという悪だくみもあつた。

楽しそうにふたりに絡み、ガルに寄りかかり、酒をおおるエルミを、三人はなす術もなく見守るしかなかった。

やがて、糸が切れた操り人形のように眠り込んだエルミを、三人がかりで隣の部屋の布団に放り込む。幸せそうな笑みを浮かべたエルミの寝顔に、三人は思わず顔を見合わせて、爆笑してしまった。

四月六日の早朝、村の駅には人混みがごった返していた。

その人いきれに、まだ寒い早春の空気はすっかり影を潜めている。休暇自体はあと一日残しているが、新任地までレグルは二日、エルミは三日の行程だったため、一日早い出立となったのだった。

チエルの宿でエルミが酔い潰れた翌日から二日間は、それぞれが家族と水入らずの時を過ごしていた。その次の日に挨拶周りをと墓参りを済ませ、昨日一日は四人でオアシスの湖に船を出していた。さすがに出立前夜に酒盛りをするわけにはいかず、最後の夜はそれぞれがまた家族とのひと時を過ごしたのだった。

「達者でな。」

ふたりとも、武運を祈る。

休みには遊びに行つてやるけど、この前みたいなことは勘弁しろよ、エルミ」

ガルの言葉にエルミが真っ赤になり、何か言い返そうとしたときに、村長が万歳の音頭をとった。

その喧噪の中で、チエルはレグルと静かに別れを惜しんでいる。その目には、うっすらと涙が滲んでいた。

まだチエルの修行再会の目処は立たず、当分は村に留まることになる。

いつその機会に祝言をという声もあったのだが、自身にけじめを付けてからというチエルの意向で見送られていた。あとひと月待ってみて、親方から再開の知らせか新たな修行先の斡旋がなければ、そのときはレグルの任地へ行くつもりだ。

しかし、少尉の間は兵舎暮らしという規則もあり、祝言を挙げて

も一緒に暮らせるわけではない。ましてや艦隊勤務ともなれば、艦から離れることはできない。

母の体調が芳しくないことも相まって、中尉に昇進するまで村に留まるか、チエルは迷っていた。

「何でガルを押し倒さなかったんだよ、意気地無し」

早朝の風を切って砂海上を走る浮遊車の中で、この車両にふたりしかないことを確認したレグルがエルミに言った。

「だって……」

恥ずかしかつたんだもん。

それに、いくらなんでも私からなんて無理でしょ。

普通、気付いてくれるもんじゃないの？

私じゃなくて、ガルが意気地無しなんだってば」

自らの醜態を思い出し、顔を真っ赤にしたエルミが答える。

「いつ死ぬか解らないんだぜ？

もう、会えないかも知れないんだ。

戦争に行かなくても、俺たちは娑婆の人たちに比べて殉職する可能性だって高いだろ？

後悔だけはしないでくれよ」

窓から村の方角を眺めながら、レグルは言った。

「じゃあさ、何でレグルはチエルと祝言を挙げてこなかったのさ？  
ふたりとも後悔しないの？」

自分をけしかけておいて、チエルには指一本触れていなかったレグルの言動は、エルミからしてみれば矛盾している。

「俺は……」

チエルをきれいなままにしておきたいんだ。

いつ死ぬか解らないだろ？

俺が死んだら、すぐ忘れられるように、さ」

血を吐くような表情になって、レグルは言葉を紡ぐ。

もちろん、レグルに死ぬ気などかけらもない。

しかし、軍人という仕事の性質上、一般人より死は身近な存在だ。エルミの次兄のように、軍人であっても温かい家庭を築いている者も多いが、それは平時であつてのことだとレグルは思っていた。オリザニアとの関係が悪化している現在、いつ死が自らに訪れるか解らない。

戦争を回避できるか、運悪く開戦してしまったら生きて終戦を迎えるまで、祝言はお預けだと自身に言い聞かせていたのだった。

「なによ、自分だけ格好つけちゃって。

私のことはけしかけておいて、そんなこと言っちゃってさ。

そんなんじゃ、私だつてガルに何も言えないじゃない」

レグルを睨むようにエルミが言った。

「いや、これは俺がそう考えてるだけであつて、エルミが真似することはないぜ。」

こう言つちやなんだが、想いを残したままじゃ死にきれないだろ？

だから、思い切つておいた方がいいと思うぞ」

弁解がましいと思いつつ、レグルは答えた。

「同じよ、言つちやつたら。」

でも、振られちゃつた方が、いつそいいかもね。

心おきなく、皇国のために働けそう」

口元は笑つて見せたが、エルミの両目には光るものが浮き上がった。



ていた。

「すまん、エルミ。」

余計なこと言っちゃまって。

だけどな、振られるって決まったわけじゃないだろ？

何にしても、オリザニアとの戦争は避けて欲しいよな。

死ぬのが怖いとかじゃなく、戦争なんか無い方が良く決めてる」

心底申し訳なさそうな表情でレグルは言った。

「だって、レグルだって知ってるでしょ？

ガルはチエルが好きだって。

もしチエルのこと諦めてたって、学校には女の子だっているし、帝都にいれば……

私のことなんか、眼中にないんだよ」

最後の言葉が引き金になったか、エルミの目からは涙が止めどなく溢れてきた。

「エルミ……」

レグルは掛ける言葉が思い付かず、ただ見守ることしかできなかった。

今この状態で、何を言ってもそれはエルミを傷つけることにしかならないと、レグルには思えてならなかった。帝都行きの浮遊車に乗り換えたあともエルミは涙を止めることができず、ふたりの間は気まずい沈黙が支配していた。

やがて泣き疲れたのかエルミは眠ってしまい、レグルは独り暗い目で窓に流れる砂海を見つめていた。

帝都の駅にある食堂で、泣き腫らした目をしたエルミと固い表情のレグルを前に、エルミの次兄夫婦が複雑な面持ちで箸を動かしていた。

一足先に帝都に戻っていたエルミの次兄は、浮遊車の乗り継ぎ時間を利用して、ふたりを食事に誘っていたのだった。一八時過ぎに帝都駅に到着したあと、西工廠や南工廠方面に向かう夜行浮遊列車が発車する二三時まで、何もできないふたりは喜んでこの招待を受けていた。そして、図らずもエルミを泣かしてしまうことになっていたレグルにとって、第三者が介在してくれる時間と空間は何よりもありがたい。

それがエルミの全面的な味方であれば、自分がいくら責められることになろうと、エルミのためには何よりだと思っていた。

食事が済んでも、まだ時間はたっぷりとある。

ちょうど夕食時でもあり、いつまでも食堂の席を占拠しているのもマナー違反だ。結局、義姉の計らいにより、男と女に分かれ酒場に行くことにする。集合時間の確認後、雑踏に消えるエルミとその義姉を見送ったレグルは、男女の話になるのであれば、兄より義姉の方が話しやすかろうと思っていた。

男同士の話は、まさか軍人同士が一般人の耳目の中で戦争の話をするわけにもいかず、他愛のない世間話に終始した。

「レグルちゃん、エルミちゃんのこと、よろしくね。

つい飲み過ぎちゃって。

私も調子に乗りすぎちゃったわ」

エルミの義姉が済まなそうに言う。

「楽しかったわよ、レグル。

心配かけちゃってえ、ごめんなさいねえ。

お兄ちゃん、今日はありがとぉ〜」  
すっかりできあがったエルミが陽気に喋っている。

「しょうがないな、ふたりとも。」

レグル君、済まないが妹をよろしく頼む」

次兄は渋い表情を作るが、妹の顔がすっきりしていることにはっとしている。

公式の場ではないため、村におけるガキ大将とその取り巻きに戻ったかのような物言いだ。

「お義姉さん、ありがとございます。

私では力不足でしたので。

エルミが少しでも気が晴れたなら、それが何よりです。

お兄さん、母港こそ違いますが、同じ第二艦隊の構成員として、ともに助け合いながら未曾有の国難に立ち向かう所存です」

一般人と変わらぬ所作で、レグルは一礼する。

レグルも公式の場ではないと自覚しているため、幼長の序を弁えた物言いになっている。

やがて、発車のベルが鳴り響き、ふたりを乗せた浮遊列車は次兄夫婦に見送られ帝都を離れた。

既に時間は深夜といって良く、乗客たちは荷物を整理するなり寝台に潜り込み始める。完全に酔いが回ってきたエルミは、着替えもそこそこに深い眠りに落ちていた。

浮遊車の底から伝わる砂海の砂の細かい起伏に揺られながら、レグルは何度目かの寝返りを打っていた。

エルミには『チエルをきれいなままにしておきたい』とは言ったが、本心は嘘だ。健康な男であり、正常に性欲は持っている。チエルを抱くことなく死ぬるか。それが本心であり、今すぐ村に取って返し、チエルを抱きたい。だが、それを口にしてしまえば、軍人と

して生きていく矜持が崩れてしまいそうなのだった。  
いつしか移動の疲れとほどよい酔いが、レグルを眠りの世界へと誘っていた。

四月七日の午後、西工廠への乗換駅でレグルとエルミは分かれた。レグルはこの日の陽が沈む頃に西工廠近くの駅に到着し、予め取ってあった宿に入り、そこに届いていた荷物を受け取った。

エルミは深夜になって南工廠近くの駅に到着した。長時間の移動にふらふらになりながら、その日は近くに取った宿に入り、荷物を受け取る。そして、ふたりとも四月八日一日を休養に充て、翌九日に指定どおり西工廠と南工廠に出頭した。

そして、そこでふたりを待っていたものは、第二艦隊だけでなく、連合艦隊全体を巻き込んだ大幅な艦隊編制の変更だった。

四月十日に第一航空艦隊を新設するため、第一艦隊と第二艦隊に所属する航空戦隊が転出した。

エルミが乗艦する『デットン』は、僚艦『テレスドン』とともに第二航空戦隊のまま、第一航空艦隊に転出することになった。

これにより、第一航空艦隊は『コツヴ』、『ブリッツ・ブロッツ』、『デットン』、『テレスドン』の制式空母四隻を集中運用する世界初の機動部隊となった。もちろん、ゴトム大将の意向が強く働いていることは軍上層部では公然の秘密であり、ハトー攻撃が念頭に置かれていることは明らかだ。そのため、近く竣工する第五航空戦隊の新鋭制式空母『アパター』と『アルギュロス』も、攻撃力不足を補うため編入される予定だった。

六隻の制式空母が揃えば、航空兵力は合計で常用三九六機、補用九九機という巨大なものになる。

第二艦隊と第一航空艦隊は基本的に別組織になり、作戦上の要請

がない限り行動を共にすることはない。

外地遠征や演習航海で寄港した際に、エルミとレグルは会うことができなくなってしまったのだった。

この発表を、エルミは航空機の時代が到来したという興奮と、幼馴染みと寄港地で会えないという寂しさと共に聞いた。レグルは第一航空艦隊の編制表を目にして、護衛艦艇の少なさが気がかりになっていた。編制表だけを見れば、各航空戦隊に付属する少数の旧式駆逐艦を除けば空母だけの編制であり、どう見ても対潜哨戒、対空哨戒の能力が不足している。おそらく、実戦に際してはもう一度大掛かりな編成替えがあるはずで、そのときに第八戦隊が第一航空艦隊に編入されることを、レグルは望んでいた。

もうひとつ、司令部に対する不安を期せずしてレグルもエルミも抱いていた。

新設された第一航空艦隊の司令部は、参謀長に航空関連の中枢を歩んできたカリユウ少将、航空甲参謀にジツツ少佐という航空関連のエキスパートがいるとはいえ、司令長官は砂雷畑出身で第一航空戦隊司令官に就任するまで一度も航空関連の指揮官を経験したことのないナンクウ中將が親輔されていた。作戦の立案や実施に当たるとの不安はそれほどないが、最終的な決断を下す人物が航空機の素人では決定的な場面で判断を誤るのではないかという危惧が捨てきれない。この時期、第二航空戦隊司令官だったオーキキ少将や、かつての第一航空戦隊司令官で現第三戦隊司令官のハルミ中將、ハト一攻撃の立案を任されているロウ少将といった航空通の提督の方が適任ではないかと、レグルもエルミも考えていた。

ナンクウ中將自身も同様の危惧を抱いており、当初は固辞したと伝えられている。だが、彼が親輔された理由は優れた艦隊運用の腕を見込まれたのことで、年功序列が半々といったところだった。最終的には、軍事参議官たちの「すべてを参謀たちに任せて責任だけ

取ってくれば良い』という、実にいい加減な口説き文句にようやく首を縦に振ったという逸話が伝えられていた。同時に、ナンクウ自身が私的な場で『俺に全部嫌なことだけ押し付ける気か』とぼやいていたという話も、まことしやかに伝えられていた。

上層部は紙上の決済で事が終わっていたが、現場は艦隊司令部と各戦隊司令部との顔合わせや、訓練や補給の計画立案、実施と、大混乱に陥っていた。

連合艦隊が混乱の極に叩き込まれていた頃、三国同盟締結の立役者である外相は、アレマニアとワイトルス歴訪の帰途、ロス共和国の首都に立ち寄っていた。

そして、四月十三日には誰もが予期せず、また期待もしていなかったソル・ロス中立条約の電撃的な調印にこぎつけてしまった。いずれば必要な条約であり、今回のロスへの立ち寄りはその地均し程度と考えていた外務省は、驚愕と歓喜に包まれた。騎兵軍省も、長年の敵国を気にすることなく、フェクタム帝国の運営と対メデイエータ戦争の遂行に邁進できる状況を歓迎した。

外相がドラゴリー大岩盤横断鉄道で帰国の途につく際には、異例なことにロス共和国首相自らが駅頭で見送り、抱擁しあうという場面が写真に取られ、大々的に報道されている。

一方、外相の外遊中、ソル・オリザニア交渉に、突如として進展があった。

四月十八日に、駐オリザニア大使とオリザニア國務長官デルの会谈で提案された『ソル・オリザニア諒解案』が、ソルに伝達されている。

この案には、『ソル軍のベロクロン大岩盤からの段階的な撤兵』

と、『三国同盟の事実上の形骸化』のふたつと引き換えに、いくつかの妥協案が示されていた。オリザニアが提示した案は、ソルにとって喉から手が出るほど欲しかったものだった。

特に『オリザニアによるフェクタム帝国の事実上の承認』、『ソルの南方における平和的資源確保にオリザニアが協力すること』というふたつの文章がソル側に伝わったとき、ソル政府に歓喜が爆発した。

だが、この諒解案そのものはソル・オリザニア交渉を開始のするため叩き台に過ぎなかった。しかし、これをオリザニア側の提案と早合点したソルでは、最強硬派の騎兵軍すらも驚喜して賛成の状況になってしまったのだった。

四月二十二日に、意気揚々と帰国した外相はこの案を聞かされ、まさに仰天した。

自らが心血を注いで成立させた三国同盟を、有名無実化させることなど到底認められるはずもない。そして外交交渉が自分の不在の間に頭越して進められていたことでプライドを大きく傷つけられていた。外相激怒し、この案に猛然とかみつぎ、反対した。

もちろん、プライドを傷つけられたくらいですべてをぶち壊しにするほど、外相は子供ではない。

大東砂海共栄圏の理想に燃える外相にとって、西部大東砂海の平和は何よりも重要視するところだった。

オリザニアと戦端を開かずに済むなら、それに越したことはない。それくらいのは、外相を務める身であるならば、当然理解して当たり前だ。だが、外相はオリザニアの西方膨張の欲求が果てしないことも、また熟知していた。もし、『ソルの南方における平和的資源確保にオリザニアが協力』などしてしまったら、脆弱なソルの国力など、オリザニアの巨大な資本力に飲み込まれてしまう。

結果として、南方資源地帯はオリザニアの手に落ち、ソルは這いつくばってそのおこぼれに与るしかなくなってしまうだろう。それでは西部大東砂海共栄圏など、夢のまた夢だ。

外相にとって、それは許されることではなかったのだった。

しかし、やっとの思いで『ソル・オリザニア諒解案』を潰せたかと思つた六月二十二日、突如アレマニアがロスに宣戦布告した。

あまりにも一方的で、突然の不可侵条約の破棄だった。僅か五ヶ月前に締結したばかりのアレマニア・ロス不可侵条約は、アレマニアの対ロス開戦準備のための隠れ蓑でしかなかった。

この開戦によつて、外相のベロクロン・ドラゴリー枢軸構想自体が、その基盤から完全に吹っ飛んでしまった。

この開戦については、アレマニア訪問時に同国外相からアレマニア・ロス関係は今後どうなるか分からず、両国の衝突などありえないなどとソル政府には伝えないようにと、釘を差されていた。さらに、アレマニア総統も両国の国境に百五十個師団を展開したことを明かすなど、アレマニア側が開戦についてそれとなく匂わせる発言をしていたのだった。だが、それにも関わらず、外相はこれらのアレマニア中枢部の発言を帰朝後の閣議で報告しなかったばかりか、両国の開戦について否定する発言を繰り返していた。これにより、アレマニアに対する不信感が政府内には広がり、それまで親アレマニア一色だった騎兵軍の中にも懐疑的な態度を公然と取る者も見られ始めた。

もともと反アレマニアの立場を取っていた砂海軍は、より一層アレマニアに対する警戒心を強め、結果として外相の立場は悪くなる一方だった。

六月三十日にはアレマニアからは、ソルも歩調を合わせてロス戦



争に参戦するように要請が来た。

もちろん外相は、締結したばかりのソル・ロス中立条約を破棄して対ロス宣戦することを閣内で主張した。しかし、自ら締結させた条約を反故にしようなど、正気の沙汰とはとても思えない。外相に対する不信感が、内閣にも浸透してしまっていた。

その上、外相は対オリザニア交渉では強硬な『ソル案』提案している。だが、南部資源地帯の一部にある、アレマニアが征服したドラゴリー大岩盤列強だった国の植民地への進駐には、閣内で一人だけ強行に反対した。二律背反する外相の主張に、オリザニアも交渉相手として認めないという態度を取り始めていた。

このような外交施策で閣内に混乱を招いたことで、時の首相は外相に外相辞任を迫るが、自らの政策を押し通したい外相は当然拒否する。

仕方なく首相は七月十六日に内閣総辞職し、別の人物を外相に据えた上で第三次となる同首相による内閣を発足させようとした。

当然、外相は次期内閣でも続投する気であったが、そもそも外相を外すための内閣総辞職だ。さらには皇王が徹底して外相を嫌ってしまっていたことで、外相の次期内閣に入る可能性があるはずもなかった。仮に外相の名が記された内閣名簿を上奏したとしても、裁可が降りる可能性など零でしかない。

無類の忠誠心を持つ外相にとつて、皇王が漏らした『外相は釣り針のように曲がった心の持ち主だから』という言葉は、外相の闘争心を根底から吹き消してしまったのだった。

外相を外したことで、対オリザニア交渉が進展すると政府内には期待が膨らんだ。

何かにつけアレマニア鼻頂で、オリザニアに対しては一歩も引か

ない態度の外相は、オリザニア政府から既に交渉相手としては認められていなかった。確かに国際舞台で譲歩は次から次へと退くことに繋がるが、妥協は決して悪いことではない。そのさじ加減のできない外相では、百戦錬磨のオリザニア相手の交渉が上手くいくはずもなかった。

だが、後を継いだ次期外相は、前の内閣では商工大臣の職にあつたため交渉には全く不慣れであり、対オリザニア交渉は全くといって良いほど進展しなかった。

このとき騎兵軍は、激烈な派閥争いを勝ち抜いた対メデイエータ強硬派が主導権を握っていた。

対オリザニア交渉の眼目でもあるメデイエータからの撤退はもちろん、メデイエータ派遣軍の縮小すらポストの減少や発言力維持のため、到底認められるものではなかった。このため、陰に日向に對オリザニア交渉で妥協の姿勢を見せる者に対する圧力が強められていく。閣議は紛糾し、騎兵軍大臣が辞任を盾にオリザニアに対する方針に口出しする。引き続き三度目の任に着いた首相は、徐々にその気力体力を削られていった。

まったく明日が見えない状況に、ソル皇国は混迷の度を深めるばかりだった。

## 第16話 激流

第一航空艦隊が新設されて三ヶ月が過ぎた七月末、第二航空戦隊は訓練のためソル東方の近海を遊弋していた。

旗艦『デットン』は艦攻隊収容のため、艦首を風上に向けて鷺進している。その小振りな艦橋では、第二航空戦隊司令官オーキキ少将が厳しい目つきで艦攻隊の着艦を見守っていた。

「飛行長、まるでなつとらん。

暫時休息の後、もう一度だ」

苦い表情を崩さず、オーキキは飛行長に命じた。

「お言葉ですが、司令官。

艦攻にあれ以上高度を下げさせるのは、自殺行為でしかありません。

敵艦の対空砲火を避けるために、砂海の起伏に突っ込んでしまつては本末転倒です」

飛行長は搭乗員の苦勞が分かるだけに、オーキキの仮借のない言葉に反発を覚えていた。

理屈の上では、あと十メートル以上高度を下げることは可能だった。

雷撃に際しては、極力低空から、かつ一定の速度以下で投雷しなければ、精密機械でもある砂雷は着砂の衝撃で破壊されてしまう。

そして、重い砂雷を腹に抱えた艦攻の運動性は悪く、対空砲火に捕らえられやすいため、それを避けるには対空砲の俯角以下の空域に潜り込む必要がある。低空飛行は艦攻乗りにとって、生き残るためには必須の技術だった。

どれほど大量の弾幕を張ろうが、その下を飛んでいる限り打ち落

とされることはない。

だが、砂海上は平坦ではない。風や艦の航跡が作り出した起伏がそこらじゅうに散在し、いつ突風によってそれが移動や増加するか分かったものではない。咄嗟に高度を上げてそれを避けても、操縦を少しでも誤れば、機体は簡単に数十メートル上昇してしまう。そうなれば濃密な対空砲火の中に自ら飛び込んでいくことになり、墜してくれと言っているようなものだ。

ある程度、砂面からは余裕を持って飛ばなければならなかった。

「搭乗員たちが手を抜いているとはかけらも思わんが、これではあたら若者を砂海の塵にするだけだ。

あと五メートル、高度を下げさせるんだ。

それから投雷後、不用意に高度を上げる機体が多すぎる。死にたくなければ、敵艦の土手っ腹に突っ込むつもりで飛べと、搭乗員に伝えてくれ」

第二航空戦隊司令官就任以来、何度目になるか分からない同じ命令を、オーキキは飛行長に下した。

「冗談じゃないわ、これ以上高度を下げろって、砂海に突っ込んで自爆しろってこと!？」

いい加減にして欲しいわね、あの人殺し重ね丸餅は!

その上、投雷後は敵艦に突っ込みですって!？」

私たちは砂雷や爆弾じゃないっての!」

オーキキからの命令を伝えた飛行長が出て行った後の搭乗員待機所に、エルミの怒声が響いた。

「落ち着きなさいよ、エルミ。

司令官は死ねとは言っていないでしょう?」

私たちのことを思つてのご命令だと思つよ」

同じく艦攻隊で、パイロットを務める飛行士官学校同期のルックウがたしなめるように言った。

ルックウは魔法の腕こそエルミに一步譲るものの、抜群の飛行センスを持つ女性パイロットだ。周囲のベテランたちからもその腕前には太鼓判が押され、今すぐにも予科練の教官が務まるのではとまで言われている。

総合的な実力では、エルミの一步先に行く女性だった。

「そつだぞ、エルミ候補生。」

司令官は、我々を殺したいわけじゃない。

死なせないために技量を上げさせようと、司令官なりに必死なんだ。言い得て妙だが、あまりでかい声で言うな」

笑いを噛み殺しながら、エルミがパイロットを務める機の機長であるエンザが言った。

司令官の丸々とした堅太りの体型と、満月のような相貌を見事に表現したエルミの悪態に、今にも噴き出しそうになっている。

エンザ中尉は、人当たりの良さそうな雰囲気纏ったベテランの男性偵察員であり、優れた統率力を持つ『デットン』艦攻隊第三小隊の隊長でもある。

パイロットの経験も豊富に有しているため、部下のパイロットに過酷ではあつても無理を言うことはない。それだけにエンザの言葉には説得力があり、逆らいがたいものがあつた。

「分かっています、中尉。」

でも、こうつらくちゃ文句の一つも言いたくなるじゃないですか。ルックウはできない人の気持ちも分かつてよ」

エルミの愚痴に、周囲から一斉にブーイングがあがった。

エルミ自身、飛行術はルックウに次ぐ腕前と見られている。なにしろ猛訓練を潜り抜けてきた二航戦のベテランパイロットに混じって、何ら遜色のない技術を身に付けつつあった。

「エルミ、貴様にそれを言われちゃ、俺たちの立つ瀬がないだろ！」  
先輩パイロットたちや同期たちの悲鳴にも似た罵声に、エルミは笑いを凍り付かせていた。

二航戦が殉職者を出しかねないほどの訓練に明け暮れていた七月二三日、オリザニアのローザファシスカ大統領は、義勇空軍のメデイエータ配置を認可し、軍事援助を明らかにした。

メデイエータ共和国政府とソル公国政府は、昨年の一二月三日にソル・メデイエータ基本条約を締結していた。だが、これをよしとしない共和国政府の一部が袂を分かち、メデイエータ国民政府を樹立し、今ではメデイエータ国内は三つ巴の内戦に突入していた。この国民政府首相の妻がオリザニアに留学していた経歴があり、その縁でかねてからローザファシスカに対して対ソル参戦を何度も要請していた。

メデイエータに權益を確保したいオリザニアにとって、ソルを後ろ盾とした共和国政府が内戦を勝ち抜いては不都合だ。かといって共産主義国家がベロクロン大岩盤に二つも成立することは、自由と平等を標榜するオリザニアにとって容認できることではない。

国民政府を援助することは、オリザニアのベロクロン大岩盤における權益を守ることに直結していた。

しかし、ベロクロンとドラゴリーの量大岩盤で繰り広げられている戦争に参戦しないことを公約に三選を果たしたローザファシスカ

に、公然と軍を派遣することはできなかった。そのため、メデイエータにはソルの航空部隊を撃退できるだけの兵力を、義勇空軍という形で送り込むことで精一杯だった。だが、現役の軍人を送り込んでしまつては、参戦と何ら変わりはない。この辻褄を合わせるため、オリザニア騎兵軍と砂海軍から戦闘機パイロットを合計一〇〇名抽出し、一旦退役させた上で身分保障の密約を交わし、一般人としてメデイエータに送り込むことになった。

本来であれば地上兵力も送り込みたいが、退役に際しては退職金を払わねばならず、十分な地上兵力を組織するほどの退職金を議会に通せるはずはない。

そのように莫大な退職金が発生するなど、軍の崩壊を意味することであり、議会がその裏に隠された大統領の真意に気付かないはずはなかった。そうなつてはローザファシス力は破滅だ。納税者に嘘をついた大統領を、オリザニア国民は決して許さない。支持率は瞬時に下落し、早晚辞任に追い込まれるのがオチだ。

義勇空軍の派遣が、この時点でローザファシスカにできることの限界だった。

だが、メデイエータは巨大な市場であり、ここに進出が叶えばオリザニア経済は大きく発展できる。

世界恐慌の傷がまだ癒えていないオリザニアにとつて、未開のメデイエータ市場はなによりも必要なものだった。既にローザファシス力は、大統領府のスタッフに対しソルをメデイエータから排除する方策の研究を、秘密裏に命じていた。同時にドラゴリー大岩盤列強国の植民地を、そっくりオリザニアの経済圏に飲み込む方策についても研究させている。この時点で、ローザファシスカの頭の中には、ひとつのシナリオが完成していた。だが、それはスタッフたちが研究成果を積み上げ、導き出すべき回答だ。

もし、ローザファシスカが書き上げたシナリオを、スタッフの研究成果の積み上げを待たずに動かすよう命じてしまったら、自身が忌み嫌う独裁者になってしまふことを彼は本能で理解していた。

スタッフたちは、操られていることは半ば承知で動いている。

主が望む解答を、この日も上げていた。即ち、在オリザニアのソル資産の凍結だった。ローザファシスカは満足げに頷き、スタッフの作り上げた草案を議会に諮った。

義勇空軍の派遣発表から二日後の七月二五日、外貨獲得のためにオリザニアに渡り、地域に根ざして働いていたソルの人々の資産が凍結された。

追い討ちをかけるように、翌日にはサピエントが追隨し、国内のソル資産を凍結した。さらには、アレマニアに国土を蹂躪され、血みどろの死闘を繰り広げているティスチ王国の在植民地ソル資産が凍結される。

もちろん、ソル側も報復として国内のオリザニアやサピエントなどの資産を凍結しようという議案が提出されたが、完全に戦争に突入してしまうという配慮から、これは実現しなかった。しかし、この措置がオリザニアやサピエントに対するソルの国民感情を、悪化させていったことは確かだった。

そして、ティスチ王国からソル皇国の運命を左右する、もうひとつ決定的な通告があった。

ソル・ティスチ魔鉱石民間協定の停止だ。

これにより、ソルに入ってくる魔鉱石は、オリザニアが僅かに民間ベースで輸出許可を出していたものだけとなった。もともとソルは魔鉱石の輸入量のうち八割をオリザニアに頼っていた。それが三国同盟に対する牽制でほとんど入らなくなっていた状況では、ティ



スチ王国の植民地からの魔鉱石が命綱となっている。  
それを、止められた。

この措置を受けて、ソルは南方資源地帯の一部であるゴール植民地に進駐した。

ところがその行動がオリザニアの態度を硬化させた。八月一日、オリザニアは対ソル魔鉱石輸出完全禁止を決定した。

「しかし、災難だったな、チエル。

まさか親方が商売替えするとは」

八月一日にオリザニアから通告された、魔鉱石完全禁輸にソル中が混乱する中、ガルは夏休みで村に戻っていた。

「うん……

でも、しょうがないよ。

メディーエータに肩入れしたりしてらって思われたら、お店自体たたまなきやいけないもん」

無然とした表情でチエルが答える。

帝都での再会を約し、第二学年の第一学期のため先に帝都に出たガルだったが、夏休みに入ってもチエルが帝都に戻ることはなかった。

チエルの修行先は、メディーエータに対する風当たりの強さと、常につきまとう特高の目に堪えかね、大衆ソル料理店に鞍替えしてしまっていた。

店主としては断腸の思いだったが、材料自体手に入らなくなりつつあったこと、一部を除いて外国料理は愛国心が足りない証拠と陰口を叩かれることも、鞍替えの理由だった。さらには贅沢禁止令の影響も大きく、時間のない労働者が安い麺類を食べに来る程度しか

客が入らなくなっていた。

弟子を抱えておくことは無理だと判断した店主は、五月に入ってチエルたちに一時休職の魔導通報を送ったのだった。

「チエルまでいないと、帝都も寂しかったぜ。

レグルもエルミも休み無しで戻ってこないしな」

人並みに友達付き合いはあったため、帝都で孤独を感じることはなかったが、四人で会えないことはガルにとっては耐え難い寂しさだった。

「こんなご時世だもん、休むなんて言ってられないんですよ。

でも、ふたりとも、身体壊してなきゃいいんだけどね。

やだなあ、やっぱりオリザニアと戦争になっちゃうのかなあ」

ふたりを気遣いつつ、チエルは溜め息を漏らす。

「大丈夫だろ、あのふたりは。

体力だけは無駄にあるんだからさ、特にエルミ。

だけど、ゴール植民地に進駐したってだけで、完全禁輸なんてするかね、オリザニアは。

だいたい、その前にソルの資産凍結なんてするからだし、ティスチ植民地の自治政府が魔鉱石協定を破棄なんかしなきゃ、進駐なんてしなかったのにさ」

ふたりに対するチエルの心配を解すように言ってから、ガルはオリザニアの行動を非難するような物言いをする。

「でも、ドラゴリー大岩盤全部が戦争になっちゃってるでしょ。

三国同盟の一角だもん、ティスチがソルに態度を硬化させちゃうのはしょうがないよ」

チエルは暗い表情に変わっていく。

「大東砂海共栄圏は植民地解放の大儀もあるんだから、正義の行いだろ？」

なんでそれにオリザニアが文句を付けるのさ。

オリザニアの領土に攻め込んだわけでもないのに。

ゴールとはちゃんと取り決めもしてるんだしさ」

ガルは合点が行かないという顔で疑問を口にした。

実際には、ガルが考えたような、西部大東砂海共栄圏を一気に確立しようとは、この進駐計画では考えていなかった。

この時ソル軍は南方資源地帯のティスチ植民地からメデイエータに抜けるルートで国民政府に物資が運ばれるのを、なんとしても遮断したかった。そして、魔鉱石に限らず、南方資源地帯のゴムやスズといった戦略物資を、確保することも重要だった。ソルのゴール植民地への進駐は戦術的、経済的な意味合いが強い。

しかし、オリザニアはそう受け取らなかった。

自国民のガルですらそう考えるくらいのことだ。ソルの進駐は、西部大東砂海共栄圏の思想に基づく東南ベロクロンー帯を支配する第一歩だと捉えていた。そして、そのまま放置すればメデイエータの権益を独占されるだけでなく、事実上オリザニアの植民地となっているネグリットオアシス群が脅かされると解釈したのだった。ソル・オリザニア交渉の打切りと、ソル最大の弱点であった魔鉱石や屑鉄といった重要な戦略物資の輸出禁止は、ゴール植民地から撤退しろという警告だった。

「多分、ネグリットオアシス群をソルが欲しがってると思ってるのかな？」

チエルが答える。

南方資源地帯を抑えても、ソル本土までの輸送経路はネグリット

が友好的でなければ安全ではない。

ネグリットが事実上オリザニアの植民地である以上、ソルはオリザニアと協調路線でいなければ、例え南方資源地帯を確保できても物資は運べない。ベロクロン大岩盤とネグリットオアシス群の間しか、南方資源地帯とソルを結ぶ砂海航路はないからだ。ネグリットを迂回しては、コストばかりかかってしまい国家経営が成り立たない。

西部大東砂海共栄圏はそれを意識したものでもあり、ネグリットの参加は絶対条件でもあった。

資源を求めて南に下がっただけで、オリザニアがなぜこれほど激怒するのかソル政府には理解できなかった。

これは単純に、認識の相違だった。ゴール植民地に対するソルとオリザニアの認識が、完全にずれていた。ソルにしてみれば、アレマニアに降伏したゴール共和国の植民地に進駐しただけのことだ。サピエントに亡命したゴール臨時政府は進駐を認めないと声明を出したが、アレマニアに対し降伏したゴール現地政府との取り決めに従って正当に進駐しただけのことだ。

決して戦争でもなければ、侵略でもない。正当な進駐だというのが、ソル側の理解だった。そして、そこはオリザニアの領土でもなければ、植民地でもない。オリザニアがどうこう言える資格など、ないものだとソル側は考えていた。

「ソルは、ネグリットオアシス群に領土的野心なんかないだろ？」

ゴール植民地に軍を進駐したって、ネグリットの安全は保障するんだし。

隣のティスチ植民地には脅威かもしれないけどさ、そこはオリザニアの領土じゃないんだぜ。

ティスチ植民地自治政府が、平和にソルの経済的交渉に応じてくれさえすれば、ソルはこれに対する領土的野心を抱かないし。

ティスチ植民地自治政府との平和交渉を妨げているのは、ティスチ本国とオリザニアだ。

だったら、ハトーにオリザニア大東砂海艦隊が基地を持つてる方が、よっぽど皇国には脅威だろ。

大東砂海艦隊がハトーにいるからって、ソルはオリザニアに撤退を求めたり、戦争をふっかけたりしないからね。

だからゴール植民地帯進駐は、オリザニアが対ソル戦争をしかける理由にはならないよ」

ガルが言ったことは、奇しくも進駐を強く主張した、ソル騎兵軍の言い分と同じだった。

ソル国内でオリザニアの出方について警鐘を鳴らした者は少数で、威勢のいい者たちが戦争の危険など考えもしないで行動していた。

これまで不敗で来たのだから、対オリザニア戦も何とかなるといふ傲りが、騎兵砂海軍ともにあった。

戦艦『アーストロン』の長官公室で、連合艦隊司令長官ゴトム大將は渋面を作っていた。

正面には、作戦計画書を持った先任参謀が立っている。

「突っ返されました」

無表情のまま、先任参謀はゴトムの前にハトー奇襲計画案の綴りを置く。

「なんと言つて突っ返されたかね」

苦々しい表情を崩さず、ゴトムは問う。

「いきなりハトーを攻撃など……無茶だ！」

皇国からハトーがどれだけ離れているか知っているのか!?

博打だ！

そんな前例のない荒唐無稽な作戦、認めるわけにはいかん！

まずは 南方資源地帯を押さえるのが先だ！」

先任参謀は楽しそうに、対応に出てきた軍令部職員たちの口まねをした。

砂海軍の作戦計画を立案する軍令部では、ゴトムはこの計画には大反対だった。

計画案を持って行った先任参謀は、軍令部から猛反発を受ける。内容を検討する会議すら開いてもらえず、各課の事務室で門前払いに近い扱いを受けていた。

「あの莫迦どもに理解できるとは思わなかったが、誰一人として相手にしなかったか？」

リユーモ君やトウセイ君はなんと言っていた？」

ゴトムが連合艦隊司令長官に就任するに当たり、当時砂海軍大臣を務めていたヨシゴは人事権を行使し、ゴトムのシンパを軍令部に送り込んでいた。

当時の軍令部総長が皇族提督で対オリザニア強硬派の総帥であったため、次官には避戦派のトウセイ少将を就けていた。

そのあと、騎兵軍参謀長が交代したのと同じ理由で軍令部総長も交代したが、トウセイは相変わらず次官の地位に置かれている。

「会わせてももらえません。

もちろん、非公式には会っていますが。

ですが、総長が……」

先任参謀は、ここで初めて困ったという顔をする。

現在の総長であるノシユウ大將は、どちらかといえば避戦派ではあるが、軍人は政治に口出しすべきではないという姿勢を堅守していた。そのノシユウが、ハトー攻撃には懐疑的な立場を取っているらしい。

「戦争を避ける方法が他に無いとするのならば、機動部隊によるハ  
トー奇襲攻撃は、わたしの信念だ。」

もう一度、赤煉瓦に行け」

そう言つてゴトムは、先任参謀を送り出した。

政府は騎兵軍の進駐について、諸手を挙げて賛成していたわけ  
はない。

オリザニアの態度が硬化したことに狼狽し、八月一八日には新外  
相がソル・オリザニア首脳会談を要請している。

現内閣となり、外務大臣が交代し、ソル・オリザニア国交調整の  
打開策としてソルの首相とオリザニア大統領ローザファシスカの首  
脳会談が話題に上ったときに、再び和平へのチャンスが訪れた。

首相は、これに全面的な期待をかけた。

ローザファシスカも、会談場所はソルに近いオリザニア北部の都  
市にてと、返事を寄こしてきた。

ソル側は空母に改造予定であつた豪華客船のドック入りを急遽  
中止し、外務省と騎兵砂海軍の随員も決めた。

しかし、オリザニア国務省で大きな力を奮っていた政治顧問が、  
この首脳会談に猛然と異を唱えた。

九月三日、オリザニアは、正式に首脳会談を拒否してきた。

だが、ローザファシスカ自身、最初から会談など行つ気はなかつ  
た。既にローザファシスカはソルとの戦争を決意しており、いまさ  
らソルとの実質的な妥協など考えていない。国務省政治顧問による  
首脳会談反対は、オリザニア国民にローザファシスカの真意を悟ら  
せず、大統領はあくまでも平和を望んでいると見せるための演技だ  
つた。

しかし、ローザファシスカのリップサーピスを本音思いこんだソル政府首脳は、見事なまでにこれに騙されてしまった。

九月六日、御前会議にて『皇国国策遂行要領』が決定された。

これはオリザニアとサピエントに対する最低限の要求内容を定め、交渉期限を一〇月上旬に区切り、この時までには要求が受け入れられない場合、オリザニア、サピエント、ティスチに対する開戦するという方針が定められた。

その際、黙って会議の行方を見守るだけだった皇王アツキカーズが、二代前のアツキハール皇王の詠んだ歌を突然詠み上げた。

『四方の海 みなはらからと思ふ世に  など波風の立ち騒ぐらむ』  
アツキカーズはオリザニアとの開戦に反対であり、この決定を拒否しなかった。そもそも、メデイエータとの戦争自体にも反対だった。だが、皇王は『君臨すれども統治せず』が原則であり、これを自らに厳しく科していたアツキカーズは、あからさまに決定を覆すような振る舞いはできなかつた。皇王あくまで外交により解決を図るよう命じたかつたが、それを歌に託したのだった。

皇王は歌に『軍部も政府に協力して平和的な外交に努力せよ』という意味を込めたのだが、御前会議構成員からその意を汲んだ発言が出ることは、ついになかつた。

オリザニアとの交渉は暗礁に乗り上げたまま時は無為に流れ、気力体力をすべて削ぎ落とされた首相は辞職を申し出、一〇月一六日に内閣は総辞職した。

翌一〇月一七日、前内閣で騎兵軍相を務めたジョウエイ大将に組閣の待命が下る。このときアツキカーズ皇王からは、ジョウエイ内閣に組閣の条件として白紙還元の御諒が発せされ、九月六日の決定



を白紙に戻すように『希望』が出された。

戦線の拡大に積極的な騎兵軍の総帥を首相に推すことを、皇国の姿勢をオリザニアに誤解されるという危惧の声が、当然のように上がった。

だが、ジョウエイは消極的ではあるが騎兵軍の軍縮の必要性を認めている避戦派に理解を示す人物だった。そして皇王に対する忠誠心は誰にも負けないと、自他ともに認められた人物だ。必ずや皇王の意を汲んだ政策を進めるものと、周囲は期待したのだった。

さらに、会議や討論に際しては、徹底的に他者の発言をメモに取り、それを元的確な反論をするため、最後には自分の思うとおり、事を運んでしまう手腕にも、周囲からは大きな期待を寄せられていた。

一〇月一八日、ジョウエイが内閣総理大臣となり、ジョウエイ内閣が組閣された。

だが、ジョウエイは生来の生真面目ゆえ、皇王の眼前で自らも参加して決定した『皇国国策遂行要領』を覆す事は不忠にあたるとの信念を持っていた。そのため、実際には白紙化は行われず、再検討という名目で、そのまま方針が引き継がれることとなってしまったのだった。

翌一九日、ついにノシユウ軍令部総長がハトー攻撃作戦案を内諾した。

それを受けて連合艦隊は、作戦の準備を本格的に始める。ゴトム  
のハトー作戦については、その投機性の高さから軍令部内では反対する意見が根強くあった。当初、ノシユウ自身もオリザニアとの戦い  
については、南方資源地帯の確保と本土防衛を主軸とした漸減邀撃  
作戦を構想しており、大東砂海まで出てオリザニアと直接対決する  
想定しておらず、『あまりにも投機的にすぎる』と慎重な態度を取

っていた。しかし、本作戦が通らなければゴトムは連合艦隊司令長官を辞職すると、先任参謀が強く詰め寄ったため、最終的にノシユウが折れる形で決着した。

軍令部の職員たちはこうなることを恐れ、先任参謀からの面会申し入れをノシユウに取り次がずにいた。

業を煮やした先任参謀は正規の取り次ぎを諦め、突然ノシユウの自宅を急襲したのだった。

このとき、かつては自信を大秀才と公言してはばからず、誰に対しても自信に満ち溢れた態度を崩すことのなかったノシユウも老境に差し掛かっており、往年の覇気は陰を潜め始めていた。このときばかりは、老いがもたらす頑迷さと気弱さのうち、先任参謀の剣幕に気弱さが顔を覗かせてしまった。取り巻きに囲まれた軍令部であれば部下がなんとかしたのだろうが、自宅とあってはどうしようもなかった。

ゴトム以外にこの難局を任せられる者が見当たらなかったことも、ノシユウに首を縦に振らせた大きな要因になっていた。

十月月三〇日、第二艦隊に所属する第八戦隊の重巡洋艦『ドラコ』は、燃料となる魔鉱石や飲料水、食料、弾薬を積み込むため、そのスマートな艦体を南工廠泊地の艀装岸壁に係留していた。

「レグル少尉、本艦は第二艦隊を離れると聞きましたが、いったいどのような任務に就くのですか？」

作業の小休止の際に、レグルが属する第一分隊のランツ一等兵曹が聞いた。

「知らないんだ。」

近くユーメイ湾に移動して訓練を行うとは聞いているが、それ以上は知らされておらん」

ひと月前、少尉に任官し初めての部下を持ったレグルが答える。自分よりひと回り以上年上の者に対し、敬語を使わずに喋る違和感はまだついて回っている。

「そうですか。」

たかが訓練に出るだけというのに、弾薬を満載状態にするなんて今までにないことだったものですから」

納得いかないという表情のまま、ランツはタバコ盆に吸い殻を押し込むと立ち上がる。

「すまない。」

どうやら嚴重な箝口令でも敷かれているのか、誰も知らないんだ。艦長に聞きにいった奴もいるらしいんだが、艦長も行き先だけしか知らされてないらしい。

貴様の方が、その辺の事情には詳しいんじゃないか？」

意識して上官としての物言いに努めるが、内心は申し訳なさで一杯だった。

「確かに、我々の方が多少軍の内情に通じてはいますが……」

越えられない壁はありますので。」

作業に戻ります」

魔鉱石の搬入はあらかじめ片付いていたが、甲板にぶちまかれた魔鉱石の破片の片付けを、第八分隊は命じられている。

早くこれを終わらせないと、本来所管する砲弾の搬入が始められない。

「そうか。」

まずは目の前のことだな」

班の指揮は下士官であるランツの仕事であり、レグルはいくつかの班をまとめて監督する立場だ。

レグルは大きな声で、辺りにいる分隊の下士官兵たちに作業の再開を命じた。

深夜までかかって物資の積み込みを終えた『ドラコ』の士官次室で、レグルは机に向かって手紙を書いていた。

もちろん、出航の日取りや行き先といったことなど書けるはずもなく、魔鉱石搬入についての泣き言なども書けるはずもない。日々軍務に精進し、皇国の盾となる意気込みを綴るだけだが、それだけでもチエルに無事を知らせるためには充分だ。短い手紙を書き終え、便せんを丁寧に折り畳むと封筒に入れ、一応封をする。必ず検閲で開封されてしまうのだが、これで少なくとも艦内の者に盗み読みされる心配はない。従兵に手紙を預けたあと、レグルはもう一枚便せんを取り出しペンを走らせ始めた。

なんとなく、遺書を書いておこうと思ったのだった。

翌一〇月三十一日、艦装岸壁を離れて沖合のブイに係留された『ドラコ』の艦内に、艦長からの高声放送が鳴り響いた。

ユーメイ湾への到着予定日は、一月二日の安息日だ。この日は平日だったが、第八戦隊司令官の独断で半舷上陸が認められた。こしばらくの間、訓練に次ぐ訓練で乗組員たちはまともな休暇を取っていない。ユーメイ湾に移動してしまっただけ、家族を持つ者は妻子の顔すら見られなくなってしまう。

当分母港には帰れないだろうと判断した第八戦隊司令官は、変則的な上陸許可を出し、艦長がそれを乗組員に報せたのだった。

艦内に、大歓声が上がった。

「すまんが、先に行ってくる」  
レグルは部下のランツに言うと、内火艇へと階段を降り始めた。

「お気になさらず。」

私は入湯上陸組です。

それより少尉、艇長の大役しつかりお願いいたします！」

妻帯者であるランツは、敬礼でレグルを見送ったあと、その背中に声をかけた。

独身者は半舷上陸。

艦の居住区を右舷と左舷に分け、交代で上陸する制度だ。さすがに全員が一度に艦を離れることなどできないため、このような制度になっている。

妻帯者は、入湯上陸が許された。

艦内では水は貴重品なため、帰港時は交代で風呂にはいるための上陸が認められている。慌ただしく入浴を済ませて帰艦するのではなく翌朝戻ればよいための、妻帯者は家族と過ごす貴重な時間を得ることができていた。独身者たちは、共同で借りている下宿で上官の目を気にすることなく伸び伸びと自由を満喫したり、普段は許されない深酒をしたり、料亭に繰り出して馴染みの芸者と夜を過ごしたりすることが、ほとんど決まりのようになっていた。だが、ここしばらくは水の消費を覚悟の上で、入湯上陸は行われていなかったのだ。

馴染みの芸者がいる独身者から多少の不満は漏れていたが、家族持ち優先とほとんどの者が納得していた。

「任せておけ。」

貴様の教育の成果、見せてやる」

レグルは笑って手を振ると、内火艇に降り立った。

下士官の仕事は実際に兵に命令し、現場を動かす役割を担っている。

その他にも多岐に亘り、新米少尉の現場教育も、重要な仕事だった。指揮官として赴任してくる少尉は、階級は上だが年齢は若く経験も少ない。下士官ともなれば、軍には長く在籍し、裏も表も知り尽くした者ばかりだ。もちろんすべての者が人格者というわけではないが、それなりの人生経験もあり、部下の兵をとりまとめる器量も磨かれている。

年下の上官を立てつつ、軍務のなんたるかを叩き込むにはうつつけの者ばかりだった。

舷側から手を振り返すランツから視線を艇内に移し、乗り込んだ者の点呼を取ったのち、レグルは兵に出航を命じた。

内火艇は静かに滑り出し、南工廠の棧橋を目指す。砂海は砂嵐で荒れることもなく、穏やかな微風が吹いていた。初めての艇長という重責に、レグルは緊張の面持ちを隠せずにした。艇の航進が巻き起こす風に、レグルの顔に砂の微粒子を叩き付けるが、顔をしかめたのは砂のせいだけではなかった。部下の下士官兵や、他の艇を指揮する同期や先輩、上官に無様なところは見せられない。

その緊張が、レグルをガチガチにしていた。

「レグル、なんだおまえの艇は。」

「危なっかしくて見ていられないぞ」

「まあ、その辺にしておけ、アルデ。」

貴様だって初めての時は散々だったそうじゃないか。

他の艇にぶつけなかっただけ、貴様よりは随分とマシだ。

だがな、レグル。

部下に良いところを見せようと気負ってしまうと、ああなるんだ。帰艦時はしつかりやれよ」

レグルに厳しく言い募る同僚を制し、直属の上官でもあるザン大尉が注意を与える。

「申し訳ありません、アルデ大尉、ザン大尉。

帰艦時は十分に注意致します」

棧橋に横付けする際、停船の命令が遅れ、内火艇を止めきれなかったレグルは素直に頭を下げた。

操船に当たっていた兵はベテランのだが、レグルの危なっかしい指揮に気を取られ、逆進をかけるタイミングを逸してしまったのだった。

操船を誤ったのは兵だが、指揮をしていたのはレグルであり、兵を責めるのは筋違いだ。

厳密に言えば、もし、兵が機転を利かせてレグルの停船命令前に内火艇を止めてしまえば独断専行ということになり、処罰の対象になってしまう。指揮官とは、何かあった際にすべての責任を負うために、普段から尊敬とそれなりの俸給が与えられている。今回は顛末書にすらならないレベルのミスだが、それでも叱責を受けるのは指揮官たるレグルだった。

久々に動かない足元を満喫するはずの半舷上陸のほぼ半分は、指揮官の心構えを説教されるために費やされていた。

「では、行ってまいります」

第一分隊のランツは、レグルに拳手敬礼して内火艇へと降りていく。

「ゆっくり、母ちゃんの顔と子供の顔を拝んでこい」

レグルはランツを送り出すと、そのまま士官次室に戻る。

「どういたしましたか、ルカ中尉？」

士官次室には先客がいた。

レグルはそう言うと、ルカを抱え上げた。

艦の中は通風が悪く、鼠を始めとした害獣や害虫が繁殖しやすい。次々と補給される積荷に混入してくるため、完全に根絶するのは難しかった。どの艦でも鼠や虫をたくさん取ってきた水兵には、褒賞として入湯上陸を与え、衛生の保持に努めている。もちろん、人間がすべての鼠を追いきれはらずもなく、これを捕獲するため猫が飼われている艦も多かった。艦によっては備品扱いだったり、マスコットの存在だったり、普段の功績を讃えて士官扱いだったりもした。

ルカは、レグルより一年前に『ドラコ』にやってきた、推定二歳の雌のキジトラ猫だった。

「酒保開け。」

各分隊は酒を受け取れ」

『デットン』艦内に高声放送が響く。

レグルがルカと戯れている頃、エルミは既にできあがっていた。

レグルの乗艦である『ドラコ』が所属する第八戦隊と違い、『デットン』が所属する第二航空戦隊は、ユーメイ湾からさらに南にあるキンコー湾への移動を命じられていた。二航戦司令官オーキキ少将は、出航前日も通常の訓練を実施し、西工廠沖の砂海上に停泊したままだった。爆弾は二五〇キロのみ搭載し、対艦水平爆撃に用いる『アーストロン』型戦艦の主砲弾を改造した八〇〇キロ爆弾は搭載していない。



司令官の地位にあるオーキキは、今回の命令が意味するところを知っている。

乗組員に半舷上陸や入湯上陸の許可を出さない代わりに、無礼講の壮行会を実施することにしたのだった。

いつ出撃命令が下るか、現状では全く予断を許さない。

キンコー湾から次の目的地への移動の前に、余裕を持って上陸許可を出せる保証はない。僅かではあるが、憩いと息抜きの時間を作ろうという、司令官としての心遣いだった。

一升瓶を両手にぶら下げ、オーキキは各分隊を回っていた。

常日頃から部下将兵には気さくに声をかけ、乗組員の掌握に努めていた甲斐もあり、通路ですれ違ふ兵が固くなることはない。濃紺の第一種軍装に包まれた巨軀は威圧感を与えるが、その上に乗せられた満月のような顔と垂れ気味の目が見事に緩和している。戦闘艦橋にあつては、闘志を剥き出しにして近寄りがたい雰囲気纏うことが常だが、課業や訓練が終れば若い兵には慈父を思い起こさせる佇まいを持っていた。

士官には常に厳しい態度で臨むが、今は無礼講だ。そのような場では、士官に対しても厳しいことを言う気はかけらもなかった。

「大いにやっているようだな？」

私も混ぜてもらおうか」

ガンルームのテーブルに一升瓶をどんと置き、居並ぶ若い尉官たちに声をかける。

「司令官、望むところです。」

私たちが迎撃して、今夜はここで砂海に沈めて差し上げます。

日頃の敵討ちですからね」

日常では考えられない発言と態度で、ルックウがオーキキに一升瓶を突き出した。

日頃から訓練でしごかれているパイロットたちは、ここぞとばかりにオーキキに酒を注いでいく。

既に下士官兵のパイロットたちから手荒く飲まされているはずだが、オーキキは崩れることなく杯を干していく。やがて杯がぐい呑みになり、茶碗になってガンルームの尉官がひとまわり注ぎ終わったところで、オーキキは途中から抱いた違和感を口にした。

「そういえば、エルミ少尉の姿が見えんが、どうしたのかね？」

ガンルームに入ってきたときと変わらぬ口調で、辺りを見回しつつオーキキは聞いた。

「エルミは艦長に突撃して、見事に撃ち落とされましたあ」

呂律が怪しくなったルックウが答え、エンザの苦笑いが続いた。

一〇月一六日に、新任の艦長ホンリユウ大佐が赴任していた。

新艦長は強烈な精神主義者だが、同時に柔軟な考え方もできる合理主義者でもあり、妙にエルミと馬が合った。この日も艦攻隊士官のガンルームに艦長が訪れるや否や、エルミは酒瓶片手に艦長に突撃したのだった。そして艦長に飲み比べを挑み、あっさりと撃墜されていた。

艦長が艦爆隊のガンルームへと去り、ルックウたちがエルミを士官次室に放り込んで飲み直し始めたところに、オーキキがやってきたのだった。

「皆、大いに飲んで騒いぎ、鋭気を養ったことと思つ。」

明日はキンコー湾への移動だ。

明後日、一月二日からは、今まで以上に厳しい訓練が始まるつ。皆野双肩には皇国の未来がかかっている。

本職は、各員がその義務を果たすと確信する」  
高声放送からオーキキの声の流れ、無礼講の壮行会は終わりを告げた。

後片付けを済ませたルックウが自室である士官次室に戻ってくる  
と、中からはルームメイトであるエルミの声が聞こえてきた。

「はい、申し訳ございません。」

この件につきましては、いずれ改めてお話させて……

……はい、はい、仰る通りです。

ええ、十分にそれは……」

エルミは何やら必死に弁解しているようだった。

エルミが敬語で謝る相手といえば、上官しかいないはずだ。

しかし、初代の女性士官である以上、女性の上官などいるはずがない。となれば、男子禁制の女性士官次室に、男性が入っていることになる。風紀の乱れと取られては、どちらの経歴にも傷がつくだけではない。ここは大事になる前に何とか取り繕い、時間と場所を改めてもらわねばならない。

事態の打開のため扉を開けたルックウが見たものは、士官次室のベッドに向かって床に正座し、ぺこぺこ頭を下げるエルミだった。

「エルミ、何やってんの？」

不思議そうな顔でルックウが訊ねる。

「見て分かんない？」

説教されてるの！」

エルミは必死に頭を下げつつ、下から覗くような視線をルックウに向けて答えた。

「説教つて、レックスに？」

呆れ顔になったルックウの視線の先には、迷惑そうな顔で欠伸をするレックスという名の雄猫が座っていた。

## 第17話 交渉

「ガル、聞いたか？  
また発禁だつてよ」

レグルエルミがそれぞれユーメイ湾とキンコー湾へ移動している  
安息日前日の十一月一日、冶金技術専門学校の同級生であるフィズ  
が声をかけてきた。

「ありすぎて、どれのことだか判んないぜ。  
新聞に出てたのか？」

弁当を食べながらガルが答える。

「今朝の新聞見てないのか？」

「そうだよなあ、これだけじゃ判らんか。 今回のは凄いぜ。」

オリザニアとサピエント国籍の作家、全部だ」

頷いたガルの前に、呆れ顔のフィズが新聞を広げた。

この日ガルは宮城遙拝の後二度寝してしまい、朝刊に目を通す余  
裕がなかったので、まだこの日のニュースを見ていなかった。

ガルは広げられた紙面を見て、我が目を疑った。あまりにも莫迦  
しい報道に、思わず額に指を当て俯いてしまう。

紙面には、オリザニアとサピエント国籍を持つ作家の絵本が、発  
禁処分になったことが報道されていた。

情報局による統制が厳しくなり、皇国の国策に反するものは片っ  
端から発禁になっている。

これまでに共産主義やあからさまな反戦思想の小説や、論文を掲  
載した雑誌が発禁になってきた。オリザニアとサピエント国籍の著  
者による古典や児童文学も、思想や主義主張とは関係なしに、つい

先日発禁になっている。それが、今回はついに絵本までだ。

オリザニアとサピエント両国に関わることにすべてが、庶民の前から姿を消そうとしていた。

「やっぱり、この前の報道にあつたあれのせいか？」

ため息をつきながらガルは答えた。

村では本がそれほど手に入らず、帝都に来てからガルは読書に目覚めていた。レグルとエルミが帝都を去り、チエルが村に残り、贅沢禁止令のせいで街で遊ぶこともままならない状況で、ガルは片っ端から図書館の本を読み漁っている。技術の専門書はもちろんのこと、冶金以外の専門書、文学から哲学、思想書まで乱読に近いが、活字中毒といつても過言ではなかった。

当然国外の作家による文学や哲学、思想書もその対象だった。

一〇月一八日、オリザニアは全ての国家の領土保全と主権尊重、他国に対する内政不干涉、通商を含めた機会均等、平和的手段によらぬ限り大東砂海の現状不変更というかねてより主張していた四原則に加え、フェクタム帝国を除くベロクロン大岩盤からの撤兵をソル政府に要求してきた。

それに対し、オリザニアに譲歩すれば四年以上に亘るメディエータとの戦争で獲得した利権が消滅し、莫大な戦費がすべて無駄になり、散つていった十五万の英霊に申し訳が立たないと、主要な全国紙だけでなく地方紙までもが書き立てた。

もちろん情報局による統制であり、オリザニア、サピエント討つべしの論調でまとめられていた。

その日から当たり障りのない内容であっても、オリザニアとサピエント国籍の著者による思想書や哲学書が、次々に発禁されていた。

僅かの日数で、書店からはそれらの本が姿を消し、次は小説が片っ端から発禁の指定を受け始めた。外国文学の棚が空になると、次は童話や民話が姿を消した。

そして、ついには絵本までが書店から撤去されたのだった。

ガルは騎兵軍の将軍が政権を握ったことに、大きな危機感を抱いていた。

だが、それに異を唱えることは、『非国民』『売国奴』の誹りを受けかねない。公然と政策に疑義を申し立てた者が、憲兵や特高に引つ張られたまま姿を消すことが多くなっていた。偏った思想などないようなオリザニアやサピエントの作家の小説を発禁にした時点で、ガルはヒステリックな対応だと感じていたが、絵本まで発禁にする政府の意図が理解できなかった。

これでは皇国民の反オリザニア、反サピエントの気運を煽るだけで、政府は戦争を望んでいるのではないかと、ガルは内心薄ら寒いものを感じていた。

「さあ、どうだかな。

いいんじゃないか、あんなふざけた要求を出してくる国だぜ。

そののやつらの書いた本に価値があるとは、俺には思えないね」  
フィズの顔には、大きく嘘だと書かれていた。

もちろん、本心を言ってしまうえば、今夜にでも下宿の扉を誰かが叩きに来る。

フィズの言ったことは、新聞報道にあるような模範解答だった。

庶民の間に対オリザニア・サピエント強行論が吹き荒れる中、政府は必死に交渉妥結の道を探っていた。

報道されることはなかったが、先月一六日に全内閣が総辞職した際、ジョウエイは次期総理には現皇王の血筋である皇族を推してい

た。

騎兵軍内部では、中堅将校たちの間でオリザニアに対する不満が頂点に達している。とにかく開戦という空気が濃厚であり、これを抑えなければ対オリザニア交渉はおろか騎兵軍の勢いだけで戦争へと雪崩れ込みそうだった。

騎兵軍軍務局長から、砂海軍は和戦について総理一任と言っているが積極的に砂海軍は戦争を欲せずと公式に表明して欲しいと申し入れがあった。総理の裁断だけでは陸軍部内は抑えられない。砂海軍が態度を明らかにすれば、騎兵軍としては部内を抑えやすいということだった。

砂海を渡るには、砂海軍の護衛がなければ、騎兵軍はソル国内から一歩も外へは出られないからだ。

しかし、砂海軍としては首相の裁断に一任というのが精一杯という回答しか引き出せなかった。

伝統的に砂海軍には『軍人は政治に関与しない』という態度であり、今回もその態度を崩すことはなかったが、ジョウエイにはこれは責任逃れとしか見えなかった。対オリザニア戦は広大な大東砂海を舞台にするため、砂海軍主体の戦争となるのは当然だ。もし海軍が戦争をやる気がないと正式に言えば、これは出来ないということになる。そうであるにも拘らず、砂海軍は態度を表明しないのはどういうことか、この非常時に何をためらっているのかとジョウエイにはもどかしかった。いや、怒った。

このような閣内不一致の状態では何も出来ないので総辞職するしかないと近衛に勧めたのだった。

そしてジョウエイは後継首班について、騎兵軍大将の階級を有するリベラル思考の皇族を推薦した。

これは騎兵軍部内を抑えるためであり、さらに御前会議での政府と統帥部の決定を覆すためだった。政府が『皇国国策遂行要領』に



ついでに再考を統帥部に求めたとしても、拒否する可能性の方が高かった。

ジョウエイは皇族を首相にすることで、これを使い切るしかないと考えたのだった。

しかし、現実には皇族内閣は戦争を開始した内閣として国民の怨嗟の的となる恐れ有りとして見送られ、忠誠心と手腕を期待されてジョウエイに組閣の大命が降りていた。

大命とともに、『九月六日の御前会議決定に囚われることなく、内外の情勢をさらに広く深く検討し、慎重なる考研を加うることを要す』と皇王から伝えられていた。つまり『十月上旬頃に至も尚我要求を貫徹し得る用途なき場合に於ては、直ちに対オリザニア開戦を決意す』る『皇国国策遂行要領』の白紙還元を皇王は望んでいたのだった。

だが、ジョウエイは騎兵軍を抑えるという意図から、騎兵軍大臣を兼任していた。

相反する主張をする組織の長が、ひとりの中に並立することは困難だった。

首相としては『皇国国策遂行要領』を白紙化し、対オリザニア交渉に全精力を傾注したい。だが、騎兵軍としては、オリザニアの要求は到底飲めるものではない。一五万の英霊は重かった。

そして、彼の忠誠心は正式な御前会議で出された皇王の『決定』を、非公式な『希望』で覆ってよいものかというジレンマに苛まれていた。

皇国を戦争へ追い込むことはできないが、騎兵軍の立場を隅に追いやることもできない。

対オリザニア交渉に全力を挙げながらも、騎兵軍としての主張を下げることはしなかった。結局『皇国国策遂行要領』が白紙化されることはなく、検討課題として残されただけになっていた。

もちろん、これらのことが報道されることはなく、庶民はオリザニアの一方的な要求と皇国の窮状ばかりを知らされていた。

「姉ちゃん、大丈夫だった？」

心配そうに、弟のアレイが聞いた。

横にはレグルの妹であるリーンも、心配そうな顔で座っている。

「大丈夫だよ、ふたりとも。」

そんな心配しないでね」

明らかに疲れ果てた顔をしたチエルが答える。

朝から駐在所に呼ばれたチエルは、昼食を挟んで長い取調べを受け、陽が沈んでからようやく家に帰ってきた。

「いったい、なんだったの？」

駐在さんはなんて言ってたんだい？

駐在さん、なんか怖くなかった？」

物心付いたときから可愛がってくれた駐在が、突然鬼のような顔で姉を連れ去ったときの恐怖をアレイは忘れられない。

「なんでメデイエータ料理を志したのかとか、今でも作っているのかとか、どんな人が宿に来るかとか、ね。」

でも、駐在さんはあたしを連れて行っただけで、聞いてきたの知らない人だったよ」

当たり障りのない会話から始まった取調べは、村では見たことのない人物が行った。

駐在はチエルに何の容疑があるのかと連行には懐疑的だったが、特高が動き出したと知ってやむなく呼び出しにきたのだった。

帝都近くのオアシスにあるチエルの修行先が商売替えをしたのは、親方自身がいくどかこのような取調べを受けたことがあったことも大きな原因だ。

以前、夏に宿泊した砂海軍人が軍務に復帰した後の会話を漏れ聞いた特高の職員が、帝都から消えた共産主義者がどこに潜伏したかを調べるために取り調べにきたのだった。昼食時に一度宿に戻されたが、宿泊者名簿を持ち出すためだった。オリザニアやサピエントの小説から絵本までが規制されていても料理が排斥されることはなかったが、オリザニア料理を出す店だけが目の敵にされる理由がチエルには分からない。たしかにメディーエータ人が経営している店に反ソル思想を持つメディーエータ人やそのシンパが集まることはあった。

それが摘発されることは仕方がないと思っているが、料理を作っているだけでなぜ自分が取調べを受けなければならないか、チエルには理解できなかった。

「戦争が始まっちゃったら、どうなっちゃうんだろうね。」

「やっぱり、禁止されちゃうのかなあ。」

「やだね、戦争なんか」

「リーンが呟く。」

もちろん、政府が戦争へ皇国を引っ張っていたわけではない。

組閣直後から、ジョウエイは精力的に連日連絡会議を開催していた。

第一回会議ではノシュウ砂海軍軍令部総長より魔鉱石の消費量から事態は逼迫していること、サゲン騎兵軍参謀総長も同様に時間の空費は許されぬとして、開戦廟議の決断を迫った。

現実問題としてソルの魔鉱石備蓄量は減少の一途を辿っており、年間約五五〇トン消費している現状から計算すれば、あと二年で底を尽くと見られていた。

砂海軍艦艇は何もしていなくても停泊しているだけで艦内発電のために魔鉱石を消費する。電気なければ生活さえできないし、完全に活動を止めて乗組員を上陸させていては、再度動かす際にどれくらいの準備期間がかかるかわからない。全乗組員の将兵を一瞬で乗船できるはずもなく、それから魔鉱石で火を熾し、缶の圧を上げ、艦が動くまでには一日や二日では無理な話だ。これではいざというとき、ただの置物でしかない。

もちろん、中途半端な状態で途中で戦争になってしまった場合、作戦用の魔鉱石も満足に調達できず一方的な負け戦となることは明白で、開戦の時機は今でも遅いくらいと統帥部では考えていた。

ソル・オリザニア日米交渉におけるメディーエータよりの撤兵問題で、議論は紛糾した。

ジョウエイは、あらかじめシタロ砂海相に不戦を明言してくれるよう暗に示していたが、海軍は従来通り動かなかった。騎兵軍はメディーエータよりの期限付撤兵など、議論の対象ですらないと反対していた。

ジョウエイは騎兵軍の強硬態度と砂海軍のともすれば政策に対し無関心な態度に、内心の怒りを抑えつつ妥協の途を模索していった。ジョウエイのメディーエータやオリザニアに対する強硬姿勢からの方向転換について変節漢と罵る声も騎兵軍部内から出たが、これはひとえに皇王への忠誠心からの行動であり、ジョウエイに僅かな迷いもなかった。

「そうだね、そうしたらオリザニアとかサピエント風の料理も、ひよっとしたら今着ているような服だって禁止なのかな。」

全員が開国前の格好にしなきゃいけないのかなあ」  
タンスの奥にしまい込まれたサピエント風メイド服を思い浮かべ、チエルは新聞の記事に目を落す。

この日は朝の仕込みが終わって一息つく暇もなく、駐在所に呼ば

れてしまったのだった。

その十一月一日の記事には、オリザニアとサピエント国籍の者が書いた著作の発禁と、サピエント王国首相の演説が掲載されている。それは、サピエントはソル・オリザニア開戦となれば、サピエントもまた対ソル宣戦するという文字が踊っていた。

十一月二日、第八戦隊はユーメイ湾到着し、泊地への進入の順番をまっていた。

「あれは、第三戦隊の『アロン』と『ケムール』じゃないか？

『キュラソ』と『ギラドラス』が見えないが、二隻だけか？」  
艦底の方位盤室から出てきたレグルが、誰とはなしに呟く。

「二隻だけですな。」

後ろに控えているのは、第一砂雷戦隊のようですよ。」

第一分隊のランツ一等兵層が、双眼鏡を覗いて確認した。

第三戦隊は、本来『キュラソ』型戦艦四隻で編成されている。

だが、この砂海域には二、四番艦の『アロン』と『ケムール』の姿しか見えない。

『キュラソ』型戦艦は、一番艦の『キュラソ』が二八年前に、四番艦『ケムール』でも二五年前に就役した老齡艦だが、ソル砂海軍戦艦のなかでは速力三〇ノットと最速の艦だ。

南方資源地帯でよく見られる仏塔のような複雑なシルエットの艦橋は、サピエントやオリザニアの砂海軍からはパゴタマストと呼ばれていた。

丈高い艦橋の前に連装三六センチ主砲塔を背負い式に二基、小振りな後楼の後ろに一基、航空機運用甲板を挟んでさらに艦尾側に一基の合計四基八門を備えている。この三六センチ主砲は、火の魔銃石を装薬にして、八五〇キロの弾丸を二万八六〇〇メートルの彼方に投射し、二六〇ミリの鋼板を貫通する能力を有している。

竣工当時は、近接戦闘用に副砲一五・二センチ単装砲を片舷八門計十六門を敷き並べていた。だが、第二次改装でこれを半減させ、片舷四門計八門に減らし、一二・七センチ連装高角砲六基、二五ミリ三連装機銃一八基、同連装八基、同単装三〇挺を増設している。

速度増進の艦尾伸張と対砂雷防御のバルジ増設のため全長は二一四・六メートルから二一九・四メートルに、全幅は二八メートルから三一メートルに増大していた。

そのために基準排水量は二六三三〇トンから三一七二〇トンに増大したが、艦を走らせる主機を、蒸気タービン二基四軸六万四〇〇〇馬力から、蒸気タービン四基四軸十三万六〇〇〇馬力に換装し、最大速度は二七・五ノットから三〇・三ノットとなっている。航続距離も、一四ノット八〇〇〇浬から一八ノット九八〇〇浬と大きく伸ばしていた。

「また機銃を増やしたようですね。」

しかし、『ケムール』もそうですが、『アロン』すっかり形が変わってしまったね。

私には、三本マスト時代が一番馴染みがありますが」

感慨深げにランツが言った。

就役直後の『キュラソ』型は、艦橋が三本マストで構築されており、その後二度に亘る大改装を施されていた。

一番艦『キュラソ』は、まだ建艦技術が立ち後れていたソルに新

技術を導入するため、当時は友好国で最大の砂海軍国だったサピエント王国のウィック社に発注された。

二六〇一年一月一七日に起工し、翌二六一二年進砂、二六一三年に巡洋戦艦『キュラソ』として竣工、ソルに回航された。

就役から一五年後に第一次改装を実施し、水平及び水中防御を強化改善した結果、排水量が増え速度が低下したため、戦艦に艦種変更された。このとき艦橋は三本マストから七本マストへと改装され、艦容が一変する。

さらに七年後、第二次改装が実施され、ボイラーと主機を換装し、長距離砲戦能力を強化した。機関出力は2倍になり速度は建造時を上回る三〇ノットに達し、高速戦艦に生まれ変わった。七本マストの艦橋を、複雑化する戦術に対応させるために様々な機構を盛り込み、現在のパゴタマストへと変更した。

「俺は『アロン』の御召艦時代が一番覚えている。

よく新聞で見たからな」

レグルが舷側の落下防止チェーに身体をもたれさせながら答えた。

『キュラソ』型巡洋戦艦の二番艦として、二六一一年一月四日に『アロン』は帝都工廠で起工され、翌二六一二年一月二二日に進砂していた。

二六二九年一〇月に、西工廠で第一次改装に着手するが、砂海軍軍縮条約成立により工事は一旦中止されてしまう。条約により戦艦1隻が練習戦艦へ改装されることになり、『キュラソ』型で工場の一番遅れていた『アロン』が選ばれた。

練習戦艦への改装工事は、四番主砲と舷側装甲の撤去、航空兵装と戦術の変換に伴い不要となった砂雷兵装を全廃し、機関の変更が行われた。二六三二年の最後の日、十二月三一日に完了し、翌二六三三年一月一日に練習戦艦に類別変更された。

兵装の撤去により艦内に余裕のあること、また艦隊所属でないためスケジュールの組みやすいことから皇王の御召艦としても利用されるが多かった。この年の五月には展望台を設けるなど、御召艦用施設の設置工事を帝都工廠で行っている。『アロン』はこの年と二六三六年、そして戦艦に復帰した第二次改装直後の昨年二六四〇年の合計三回も観艦式での御召艦を務めていた。また皇王行幸の際にも御召艦として指名され、フェクタム皇帝の訪ソルの際にも御召艦となっていた。

その姿は度々新聞紙上を飾り、連合艦隊の旗艦を務める戦艦『アーストロン』、その姉妹艦の『ゴーストロン』と並んで、皇国国民に親しまれた戦艦といつてよい。

レグルたちが物心ついた頃には、『アロン』を除く『キュラソ』型戦艦の第一次改装はほぼ完了しており、七本マスト姿になっていた。しかし、多数の戦艦に入り混じった三隻より、その後何度か新聞で見た『アロン』の方が印象に残っていたのだった。

「そうですか。」

私の軍歴は『アロン』からでした。

まだ三本マストの。

だからですかね」

ランツは懐かしむような目になった。

砂海兵団を出て、最初に乗り組を命じられたのが『アロン』だった。

練習戦艦への改装で乗組員に余剰が出たため、いくつかの船を渡り歩いた後、二六三八年に竣工した新鋭重巡『ドラコ』へと横滑りしたのだった。

「『アロン』が戦艦に復帰したとき、戻りたかったんじゃないのか、



ランツ？」

『アロン』は、二六三六年一月末の条約切れを待って、翌三七年四月一日より西工廠で戦艦に復帰するための大改装が行われた。

この改装は他の『キュラソ』型戦艦が一次と二次の二回に亘って行われた改装を、一度に済ませる形となった。

第四砲塔と舷側装甲の復活、各種装甲の追加、砲戦距離の伸展、主缶や魔鉱石庫の増設、主機の換装を行い、艦尾の延長とバルジを装着した。

対空砲火増設と重量軽減のため副砲を二門降ろし、一二・七センチ高角砲の指揮装置を最新の型に変更し、二五ミリ連装機銃一〇基を追加装備した。艦橋の近接防御用に一三ミリ四連装機銃二基を装備したが、これは現在急ピッチで慣熟訓練を行っている最新鋭戦艦『アンギラス』と同じ装備だった。

『アロン』の大改装工事は、『アンギラス』型戦艦のテストとしての役割も担っていた。

艦橋構造物は他艦のパゴタマストではなく、比較的すっきりとしたデザインのパゴタマストを採用している。艦橋トップの方位盤も、『アンギラス』型で採用している八型射撃盤と四型方位照準装置を、『アンギラス』型と同様に縦に重ねて搭載していた。これにより姉妹艦とは、艦影がかなり異なる形となった。

主砲旋回用水圧ポンプは、『アンギラス』型への導入テストとしてターボポンプを導入していた。

艦齢こそ古いが、『アロン』はこの時点で最新式の装備を持つ、戦力化された戦艦だった。

レグルは、ランツがかつての乗艦を恋しがっているのではと、感じていたのだった。

「いえ、古い者の出戻りは歓迎されませんので。

第一線から退かされた劣等感と妬みは、その間戦闘を行える艦に転出した者とは共有できません。御召艦の荣誉という優越感は、他を見下すことでしか紛らわせない劣等感の裏返しでしかありません」

ランツは嫌な物を見たという表情で、嫌そうに答えた。

「そうか。

古巣が恋しくはないかと思っただけで他意はない。

貴様にはまだまだ教えてもらいたいことがたくさんあるんだ。

戻りたいと言っても、俺は手放さん」

ランツの言葉に、レグルは慌てたように言い返した。

ランツの態度は、かつての乗艦に対して素っ気ないというよりは、嫌悪しているようにも受け取れた。何か言いたくないこと、聞くには忍ばれることがあるのかも知れない。

レグルは『アロン』の話題を打ち切ることにした。

「後ろにきたのは、第一砂雷戦隊だな。

第一艦隊から分離したのか？」

レグルが双眼鏡で艦尾方向を眺める。

砂雷戦隊は、駆逐艦四隻からなる駆逐隊を二個、一隻の軽巡洋艦が旗艦として率いている。

軽巡『ユートム』を先頭に、八隻の駆逐艦が単縦陣を組んで、停泊地への進入順を待っていた。

「第一、第二艦隊の編制を変えるのか？」

レグルの言葉は語尾が疑問形になっていたが、ランツにそれを向けたわけではなかった。

「そうですね。」

もし、二砂戦が来ていたならば、足が速くて長い艦を集め、神出鬼没の遊撃戦部隊を作ろうってことになるのでしょうが……

それであれば、第二艦隊から分派すればいいだけです。

いくら『ケムール』型の足が速いとはいえ、わざわざ重巡を減らしてまで、戦艦を持ってくる意味が解りません。

確かに砲撃力はあの二隻で、第二艦隊の重巡全てを相手取れますが……

これでは雷撃力が余りに少なく、まともな夜戦はできません」  
ランツの回答も歯切れが悪い。

ランツが言った二砂戦、第二砂雷戦隊は第二艦隊に所属し、最新鋭の駆逐艦が優先配備されている。

砂上雷撃戦部隊として世界最強の破壊力を誇るソル砂海軍水雷戦隊の中でも最も練度、攻撃力の高い最強の砂雷戦隊だ。漸減邀撃作戦における前線部隊に位置付けられた第二艦隊に属し、最前線の攻撃部隊として活動するには、第二砂雷戦隊には強力な装備と長大な航続力が要求された。

そのためには、最新鋭かつ最強の駆逐艦でなければならなかった。

一方、現在この砂海域にきている第一砂雷戦隊は、最終防衛線で主力の戦艦の護衛が主任務であり、第二砂雷戦隊ほどの強力な武装を要求されなかった。

このため、第二砂雷戦隊に新型が導入されて、そこを押し出された型落ちの駆逐艦が回されていた。また、最前線での使用を考えられていなかった二等駆逐艦や、期待された性能に届かなかった駆逐艦が第一砂雷戦隊に配属されていた。

それでも世代が違うほど旧式化した老朽駆逐艦を、ようやくかき集めて編制した第三、第四砂雷戦隊などからみれば、充実した戦力

を保有していたといえる。

いくら高速とはいえ、最大戦速が三〇ノットの『アロン』や『ケムール』に随伴するには、一砂戦にとつて無理な話ではない。

だが、戦艦二隻、重巡二隻、軽巡一隻、駆逐艦八隻という戦力は、遊撃戦を行うにはあまりにも中途半端だ。砲撃力も雷撃力も足りなすぎる。何を企図して第三戦隊を分割し、第八戦隊と第一砂雷戦隊を組ませるのか、この時点では艦隊司令官以上の立場の者しか知らされていなかった。

一月二日の夜、エルミを乗せた『デットン』と僚艦『テレスドン』は、三隻の護衛駆逐艦とともにキンコー湾内に停泊していた。

エルミは飛行甲板に上がり、ルックウと並んで砂海を渡る風に当たっている。湯上がりで火照った体には、今吹いている微風が心地よかった。

この日は移動だけで、艦内では日常の課業が行われ、飛行訓練や対空射撃訓練は行われていない。整備兵とともに油にまみれた体には、風呂が何よりもありがたかった。とはいっても、女性が乗る予定のなかった『テレスドン』以前に竣工した空母には、風呂はおろかトイレすら専用の施設がなかった。

エルミたちが士官学校に入学した頃には、風呂に入らねばならぬような長期の航海実習は行われず、トイレは仮囲いを付けたただけだった。

エルミたちの配属に合わせ、各艦とも女性専用の風呂とトイレを急遽作っていた。ほとんどの艦では、余剰スペースがないことから、士官専用の風呂をいくつか女性用に割り振り、トイレの仮囲いをそれなりの物に変えることで精一杯だった。

日没後は他の艦を目視することは困難だが、それぞれの位置は灯火で判る。

エルミとルックウは、五キロほど離れたところに並んで停泊する新鋭空母『アパター』と『アルギュロス』の灯火を、羨望のまなざしで見つめていた。

「ずるいよね、『アパター』も『アルギュロス』も」  
「ええ、ずるいわ」

エルミの呟きに、ルックウが同意する。

女性飛行士官の採用を決める時点で、『アパター』型空母はまだ二隻とも建造前だった。

そのため、急遽設計図の一部を手直しし、女性専用の施設を新造時から備えている。エルミに限らず、一航戦、二航戦の空母女性飛行士官たちにとっては、それがうらやましくて仕方がない。基地航空隊であれば、兵舎の増床や改装などたいした手間ではないが、容積の決まっている艦内に新たな施設を作るとは、ほぼ不可能といえた。

『アパター』型空母は、『コツヴ』や『ブリッツ・ブロッツ』、『デットン』と『テレスドン』で得られた運用実績や建造実績を取り入れた、ソル砂海軍空母の決定版ともいえる艦に仕上がっている。軍縮条約失効を見越して計画され、失効後にその制約を受けることなく建造されていた。

基準排砂量二万五七五トン、全長二五七・五メートル、水線幅二六メートルの巨体に、長さ二四二・二メートル、幅二九メートルの飛行甲板を乗せている。

この飛行甲板は『デットン』や『テレスドン』より、一割増しの長さになっている。しかし、『アパター』型の飛行甲板は艦の長さ

より十五メートル以上短く、他の空母と比べて著しく短かった。『コッヴ』、『デットン』、『テレスドン』の飛行甲板は艦体より一〇メートルほど短く、逆に『ブリッツ・ブロッツ』の飛行甲板は艦体より約一メートル長い。これは機動部隊の性格上、充分予想される敵空母の反撃を想定したもので、敵航空隊に攻撃された場合に被害を局限するという、戦略的な考えから判断されたことだった。

間接的な防御ともいえるが、この点については完成直後の『アパテー』を訪れた第一航空艦隊司令部からは、大きな欠陥だと指摘されてもいた。

艦の大型化による格納庫の拡大と航空艤装の洗練により、零型艦上戦闘機一八機、九型艦上爆撃機二七機、七型艦上攻撃機二七機の常用七二機に補用一二機の合計八四機を搭載している。

これは、『デットン』や『テレスドン』の約三割増しであり、ソル砂海軍の保有する全空母の中でも、戦艦を改装した『ブリッツ・ブロッツ』に次いだ運用能力になっている。

八基搭載した『アンギラス』型戦艦と同じ形式の主缶を、さらに高温高圧化することで十六万馬力を絞り出し、四基四軸の主機が三四・二ノットの高速で砂海上を走らせる。

出力十六万馬力はソル砂海軍の艦艇の中では最大で、運用の安全を意識した出力設定にした『アンギラス』型戦艦の主缶十二基で十五万馬力を凌駕している。これにより、設計時に要求された三四ノットという高速を達成しただけではなく、航続距離が不足気味だった『デットン』や『テレスドン』より三割増の十八ノットで九七〇〇海里という航続距離も達成している。

自身を守るための兵装は一二・七センチ連装高角砲八基と、二五ミリ三連装機銃一二基を備え、防御力についても『デットン』や『テレスドン』より強化されている。

弾火薬庫部分は八〇〇キロ爆弾の水平爆撃および二〇センチ砲弾の直撃に、機関部などの重要区画は二五〇キロ爆弾の爆撃と駆逐艦の砲撃に耐えるよう考慮されていた。ただし、格納庫や飛行甲板には装甲は施されておらず、計画段階からこの点については危惧されていた。

当初、『アパテー』型空母の艦橋は、『コツヴ』や『テレスドン』と同様に左舷側中央部に設置する予定だったが、両艦の搭乗員たちからは不評で運用実績が悪かったため、途中で右舷側前寄りに変更された。このため、既に建造途中だった一番艦『アパテー』と、そうではなかった二番艦『アルギュロス』とでは、艦橋基部の形状や内部構造に若干の違いが出ていた。そして、『テレスドン』以前の空母の艦橋は飛行甲板の外側に張り出す形で設置されていたが、『アパテー』型では飛行甲板に食い込むかたちで艦橋が設置されたため、飛行甲板の幅が狭く艦上機の運用に不便、と第一航空艦隊司令部から指摘されていた。

「でも、ずるいよ」

「うん、圧倒的にずるいよね」

ふたりのぼやきは、決して艦の能力によるものではない。

『アパテー』型空母と違い、一航戦、二航戦の空母の風呂は、士官用の風呂に仕切りを切っただけであり、覗こうと思えば覗けてしまうのだった。

右舷左舷それぞれにある風呂のどちらかを、男性女性専用にしてしまえばそれなりに問題は解決できるのだが、圧倒的に男性が多い状況では決められた時間内に入浴を済ませることができなくなってしまう。仕方なく風呂を仕切っているのだが、あまり落ち着いて入っていないものではなかった。まさか、仕切りから女風呂を覗くような不埒な者はいないが、それでもわずか一枚の板を隔てた向こう

に男がいるということは、女性たちにとって心安らげることではない。ましてやり料亭で芸者と寝ただの、身体の話などされては余計だった。

戦闘を主任務とする艦で、自宅のようにゆったりと風呂に入ることまで望みはしないが、せめて疲れを癒すくらいのはしたかった。

一月三日、この日も飛行訓練は行われず、エルミたちは日課課業に従事していた。

昼食休憩後、『デットン』から内火艇が降ろされ、オーキキ二航戦司令官と幕僚がホンリユウ艦長と連れ立って離艦した。ナンクウ中將による召集がかかったのだった。

午後一時三〇分、機動部隊に配属される各戦隊司令官、幕僚、艦長たちが、旗艦を務める空母『コツヴ』に集合した。

ナンクウ中將はこのとき初めて、ハトー奇襲攻撃の概要を発表した。参集した司令官や幕僚は既に承知していたので、驚く者はいなかったが、各艦の艦長はまさに驚天動地だった。

攻撃計画案を説明した後、ナンクウ司令長官は訓示を行った。

「いうまでもなく、開戦と同時に行われるこの奇襲攻撃は、我が皇国の命運をも左右するものであるから、この機密保持には万全を期してもらいたい。

各航空部隊は、この際一層、練度の向上に努力すべきこと。

それから、これは非常に重要な事であるが」

そこまで言って、ナンクウは言葉を途切り、ひと息入れた。

ナンクウは、右隣に座っているオーキキ二航戦司令官を意識していた。



「このような重大な作戦を遂行するのに必要な事は、何よりも同志的結合である、と本長官は考える。

多様な艦種、科目が集まっているのであるから、緊密な同志的結合なくしては、順調な運営は不可能である。

その点をよく認識してもらいたい」

ナンクウはそう言葉を結び、オーキキを見た。

その視線を意識的に受け流したオーキキは、どこかふて腐れたような表情をしていた。

オリザニアは前首相にも内閣にも、まともな交渉ができる能力があるとは思っていなかった。

そして、ジョウエイ内閣の成立を知って、来るべきものが来たという受け止めかたをした。オリザニア政府は日本を事実上指導しているのは軍部であると分析しており、そのトップが首相になることは、戦争遂行内閣であると捉えたのだった。しかし、ジョウエイ首相は積極的かつ実効的な手腕を発揮するとの評価をしていたため、この内閣ソル・オリザニア交渉を継続するのか、もし戦争を望んでいるのであれば南方へ進むのか、北方へ進むのかなど、慎重な討議が行われていた。

国務省極東部では、首相としてのジョウエイは戦争より平和を望むであろうと冷静な分析をしていたのに対し、大統領を始めとした軍事会議の委員らは戦争遂行内閣であると断言していた。

そうは言っても、これからどの程度開戦を引き延ばせるかという点のみに関心があったのであり、和解の模索をしていたわけではなかった。

ソルもオリザニア、サピエントも、戦争をやる気である中で、ソ

ル外務省だけが異なる動きを示していた。

ソル外務省は開戦を回避すべく、かなり譲歩した条件を提示してもソル・オリザニア交渉を受結に持ち込みたい。皇王の意を汲んだジョウエイから至上命令だった。

一月五日、御前会議でその方針が決定された。

ついに九月六日の『皇国国策遂行要領』は、白紙に戻されることなく細部の見直しに終始しただけだった。交渉は継続するが、もしオリザニアの譲歩を引き出せないのであれば開戦やむなしと結論付けた。

その武力発動の時期を十二月初旬と定め、それまでに騎兵砂海軍ともに作戦準備を完了すること。これが第一の文になっている。

つまり、交渉は続けるが、戦争という結論ありきと読めるものだった。

対オリザニア交渉強硬な甲案と多くの譲歩を含む乙案を用意し、まずは甲案から提示して出方を見ると決定された。

そして、ソル単独でオリザニアとサピエントを相手取るのは、かなり厳しいものがある。従って、ドラゴリー大岩盤側から両国を牽制するため、アレマニアとウイトルスとの提携強化は絶対に必要だった。

さらに、武力発動の直前に、ベロクロン大岩盤内で唯一といってもよい親ソル国であるシラム王国との間に、緊密な軍事的関係を樹立する必要がある。大岩盤沿岸部の足掛かりは、何よりも増して重要なものだった。

そして、対オリザニア交渉が一月一日午前零時迄に成功したならば武力発動を中止するということも、同時に決定された。アツキカーズ皇王が何よりも望んだことを、ジョウエイはなんとしても決定事項としたかったのだった。

オリザニアに提示する甲案は、『ソル・メデイエータ間に和平が成立すれば、メデイエータに展開しているソル軍を二年以内に撤兵させる』、『メデイエータ事変が解決すれば、ゴール植民地から撤兵』、『通商無差別待遇が全世界に適用されるなら、大東砂海全域とメデイエータに対してもこれを認める』、『ソル・アレマニア・ウイトルス三国同盟への干渉は認めない』というものだった。

ここには、オリザニア国の要求に対して、理解を示しつつもソル政府の主張が明確に示されている。

交渉決裂に備えて用意された、多くの譲歩を含む乙案は、『ティスチ植民地での物資獲得が保障され、オリザニアが在オリザニアソル資産の凍結を解除し、魔鉱石の対ソル供給を約束すればゴール植民地から撤兵』、『更にメデイエータ事変が解決した暁にはメデイエータ共和国全土から撤兵』というものだった。

これは、戦争を回避するための暫定的な案であった。

経済封鎖が解かれ、物資が安定供給されるならば、ソルは南方に進出する必要性がなくなる。それが保障されるのであれば、ソルは南方からの全面撤退に応じるといえるものである。

上記事項が決するや否や、外務省は暗号で在オリザニア大使に甲乙両案を送り、甲案からデル国務長官に提示するように命じた。

一月七日、在オリザニア大使はデル国務長官に面会を求め、訓令通りに甲案を手交した。

三日後の一〇日、デルは対処国務省に呼び、全般的な問題について文書で回答しつつ、メデイエータ問題とこれまでのソル側の提案についての確認を行っただけだった。そして一五日には通商無差別原則と経済政策についてソル・オリザニア共同宣言を提案してきた。これは単なる時間稼ぎであり、オリザニアが提示してきた内容は

従来のもと同じものだった。

大使自身もまた、オリザニアはソルに譲歩する気などまったくなく、戦争を選ぶつもりだと察していた。

既にソル側の暗号はほとんど解読されており、デルは甲案はもちろん、その後に控えている乙案だけでなく、交渉のリミットを一月一日午前零時と設定したことも知っている。

多くの譲歩を含む案が用意されている以上、オリザニアにとって甲案などまったく興味はない。

ソルが初めてメイデータからの撤兵期限を明言したにも拘らず、撤兵の規模のことのみ大使に確認するだけで、オリザニアとしても最も重要視していた撤兵の時期については一言も触れなかった。

大使がソル政府との暗号通信で許可を取り、翌日に九割の撤兵と伝えたにも関わらず、このことも既に掴んでいたデルは取り合わなかった。

ソル側がどのような譲歩を提示しようと、オリザニアは最初から相手にするつもりなど欠片も持ち合わせていなかった。

騎兵軍、砂海軍ともに戦争の準備は静から進められ、外務省だけが絶望的な戦いを挑んでいた。

## 第18話 決意

一航艦の主要な幹部に、ハトー攻撃が発表された半月ほど前のことだった。

一〇月中旬に、軍令部はハトーを攻撃するならば、『コツヴ』とオーキキの二航戦が保有するすべての飛行機を、五航戦と『ブリッツ・ブロッツ』の三隻に移して作戦を行う案をナンクウに提示していた。

巡洋戦艦として計画された『コツヴ』と、二航戦の二空母は航続距離が短い。

補給の問題が、争点となっていたのだった。隠密行動が作戦の要諦であり、大規模な補給部隊を引き連れての移動は、艦隊が事前に発見される危険を伴ってしまう。

軍令部は『コツヴ』、『デットン』、『テレスドン』といった足の短い三空母を、作戦から外す案を提示してきたのだった。

その数日後に、戦艦『ゴーストロン』を会場として、ハトー攻撃の図上演習が行われた。

その席で連合艦隊の航空参謀が、軍令部の意向と前置きしてその提示案を説明した。

「南方作戦のために、航続距離の短い『コツヴ』、『デットン』、『テレスドン』はネグリット制圧作戦に使い、ハトーは足の長い『ブリッツ・ブロッツ』、『アパター』、『アルギュロス』でやっていただきたいのです。

そのかわりパイロットは、ハトーに行ってもらおう。

とにかく、あっちも足りない、こっちも足りないという状態です。それで戦争をしるというんだから、無茶な話です」

半ば笑いながら航空参謀は言った。  
呆れ果てたような、自身も納得できないという口調であり、表情  
だった。

「絶対にだめだ！

三隻では一度にとばせる飛行が少なすぎだ」

第一航空艦隊航空甲参謀に異動していたジツツ一中佐が即答する。  
あまりの暴論に公式の場での言葉遣いは、どこかに飛んでいって  
しまっている。

「何だと？

それは誰の考えだ！？

艦は南方に行け、可愛い搭乗員はハトーに行けだと！？

莫迦なことを言うな！

この俺に自決せよ、そう言うんだな？

ああ、いいだろう、望み通り死んでやろう。

だがな、死ぬならハトーを叩いてから死んでやる！

なにがあるうと、他では死んでやらん！

誰がなんと言おうと、他のところでは俺は死なん！

俺は、絶対に行くぞ！

たとえ、魔鉱石が尽き果て、帰路に漂流しようともだ！」

オーキキは激怒し、血相を変えて航空参謀に詰め寄った。

冷静に考えれば航空参謀は言われたことを伝えただけだったのだ  
が、頭に血が上っていたオーキキには配慮などする余裕はない。軍  
令部の言いなりになりやがって、といった視線で航空参謀を睨みつ  
けている。

ナンクウ司令長官は、砂海軍士官学校三六期でゴトム連合艦隊司  
令長官より四期下、オーキキより四期上だった。

この長官人事は、適材適所の前に年功序列によって決められてい

た。

しかしオーキキは長く航空部隊の司令官を勤め、航空戦の指揮には自信を持っていた。さらに、ドラゴリー諸国やオリザニアでの勤務も長く、他国の軍を間近に見ていたため近代戦の指揮にも精通している自負していた。だが、既に書き上げられた図上演習要項を、この場で一から書き直すことは不可能だ。

憤懣やるかたないという表情で、オーキキは図上演習の間中、無言で過ごしていた。

「二航戦の飛行機を五航戦に移すなど、俺は金輪際認めんぞ！」

戦艦『ゴーストロン』の長官公室に、オーキキの怒声が轟いた。

二航戦の二空母が航続距離に問題があることは、司令官のオーキキは充分すぎるほど承知していた。

しかし、それがもとでハトー作戦から外されるとなると話は別だ。熱血漢のオーキキは、逆上に近い状態になっていた。

オーキキは、いきなりナンクウの胸ぐらを量の掌で掴むなり言った。

「ナンクウ、貴様、この二航戦をおいてけぼりにしようというのか！？」

逆上したオーキキに、上官も部下もなかった。

「おい、何をするか!？」

何も、おいてゆくとは言っておらん。

話は最後まで聞け！」

武道の嗜みもあるナンクウは、オーキキの勢いに飲まれながらも、両の掌をしっかりと握りながら一呼吸した。

だが、オーキキの剣幕が治まる気配はない。ちょうどナンクウに

書類を提出するために長官室を訪れたジツツが、そのまま扉を閉めてしまったほどだ。

決してジツツが臆病なわけではない。砂海軍を見渡しても、彼に比肩し得る闘志を持つ佐官はそう多くない。そのジツツが逃げ出してしまった。

いかに参加したい熱情があるとはいえ、このオーキキの振る舞いは常識の範疇を超えていた。

少将が中將に対して無礼な口をきくだけでも懲罰の対象になるというのに、あるうことかその胸ぐらを掴んで決定を覆させようとしている。もし公になれば、軍法会議にかけられるべき事態だ。従兵を呼ぶだけで片は付くが、反りが合わないとはいえ、闘志溢れる提督を未曾有の国難を前に軍から放逐する気など、ナンクウにはなかった。

それは決して善意からだけではなく、航空の専門家であるオーキキに対して、自分は飛行機の素人だという引け目があったことも確かだった。

結局、常識の範疇をはるかに超えたオーキキの直談判は功を奏し、二航戦もハトー攻撃に参加する方法を検討することになった。

だが、燃料庫を増設することも、補給部隊の増員も不可能だ。軍令部では二航戦の参加方法検討と、オーキキの説得をどうするかを平行して考えていた。そこへオーキキの『帰路は漂流しても』という発言を聞きつけた連合艦隊先任参謀と、当のオーキキからほぼ同時に、全く同じ案が提示されてきた。

その案は間違いなく効果絶大ではあるが、反面大きな危険を伴うものだった。

しかし、オーキキを説得する方法もなく、もし作戦から外してオーキキに軍を飛び出されても困る軍令部は、渋々ではあるがその提案を受け入れることにした。



一月三日に見せたナンクウに対するオーキキのふてくされたような態度は、この一連の流れに起因していた。

士官次室の扉を通して、廊下の喧噪が聞こえ、エルミは作り付けのベッドから身を起こした。

夕食を済ませ士官次室に戻った後、入浴の順番待ちの間に眠ってしまったようだった。いつでも風呂に行けるように、ガウンのような厚手の浴衣に着替えていたエルミは、タオルや着替えなどの支度を始めた。

「エルミ、エルミー！」

士官次室の扉の向こうから、鳴り止まない喧噪に混じって、ルックウの声が響いてきた。

「なあに？」

入ってきて大丈夫よ、ルックウ」

基本的に男性の出入りが禁じられたエリアだ。

一緒に風呂に入っている女性士官たちに、扉の隙間から浴衣姿を垣間見られたところでどうと言うようなことはない。

「あのね、今いろいろあつて、男の人もここにいるのよ。」

大丈夫だったらエルミが開けて」

そう言うルックウの後ろからは、エルミたちに対して謝る下士官や兵の声が聞こえている。

何やら作業が行われているようで、ルックウがエルミを呼んだのもその関連のようだ。

エルミは、あまり待たせてはと思い、作業着に着替えることなく、

長い防砂コートを羽織っていくことにした。

「今開けるからね。」

ルツクウ、どうし きゃんっ！

「あ、開けるときは、いつもよりゆっ きゃあっ！」

ふたりの言葉が同時に食いちぎられる。

次いで短い悲鳴が同時に湧き、何か固いもの同士がぶつかる音に続いた破壊音に、ルツクウの悲鳴が重なった。

「エルミ！」

しっかりして！

誰か、誰かあつ！

来ちゃだめえっ！

慌てて部屋に飛び込んだルツクウは、大の字に伸びたエルミを見て、医務室に運ぶため人を呼ぼうとした。

だが、浴衣の上に防砂コートを羽織っただけのエルミは、太腿どころかパンツまで丸見えのあられもない姿で伸びている。さらに慌てたルツクウは、なにごとかと様子を窺おうとした若い兵を、なんとか押し留めていた。

「いったい、なんだったのよ。」

痛かったあ

五分も経たずにエルミは息を吹き返したが、しばらくの間は取り乱したルツクウから状況を聞き出すことは不可能だった。

「ごめんね、エルミ。」

扉の外に魔鉱石の梱包を積んだから、勢いよく扉を開けないようにしてって言おうとしたの。

そしたら、その前に……」

申し訳なさそうにルックウが言った。

普段であれば、一八〇度近くまで開く扉が、魔鉱石の梱包を通路に積み上げていたため、扉が八〇度程度しか開けられなくなっていた。

夕食後にエルミが士官次室に戻った後、魔鉱石搬入のため男性の下士官兵が女性士官のエリアに立ち入ると、ガンルームに通路があったのだった。ルックウが酒保から戻り、事情を把握してエルミに伝える前に、既に魔鉱石の梱包が所狭しと積まれていたのだった。

これがオーキキと連合艦隊主席参謀が出した、二航戦の二空母をハトー作戦に参加させるための苦肉の策だった。

燃料庫を魔鉱石で満たすことはもちろんだが、艦内の空所は僅かな隙間であつても梱包した魔鉱石を詰め込むことで航続距離を稼ぐ。この案が両者から提出されたとき、軍令部は猛反対した。

艦内全てを可燃物というよりは爆発物で満たすなど、正気の沙汰とは思えない。爆弾の一発どころか、当たりどころによっては機銃弾一発で大爆発を起こしかねない。そのようなことで貴重な空母を失うわけにはいかないとする軍令部の反対は、至極真実な意見だった。

だが、ここでもゴトムをだしにした先任参謀のこり押しに、軍令部は折れざるを得ず、二航戦と『コツヴ』のハトー作戦参加が強引に決められたのだった。

一一月四日未明、機動部隊特別訓練が開始された。

エルミが息を吹き返した後の三日夜半過ぎ発令され、四日払暁、日の出三〇分前に母艦群から第一陣の航空機が発進した。

飛び立った者たちは、飛行長が作った搭乗割りに従っているだけ

だと思つていたが、実際にはハトー攻撃作戦における第一次攻撃隊の搭乗割りになつてゐる。そして、時間も。

水平爆撃隊、降下爆撃隊、雷撃隊、制空隊の四隊に分かれてキンコー湾に飛び、それぞれが定められた訓練行動開始した。

第一陣がそれぞれの母艦を発艦した直後から、飛行甲板は途轍もない喧騒に包まれる。

号令、復唱、金属が擦れあう不協和音、機器の動作を告げる金属的な警告音、台車や滑車、航空機の車輪が甲板を噛む音で周囲が満たされ、第二陣が発艦準備を急速に整えていく。第一陣が飛び立つてから一時間一五分後、六隻の空母から第二陣の航空機が発艦を開始した。

こちらも第一陣同様にキンコー湾において訓練行動を行い、事故機を出すことなく母艦に帰投した。

暫時休息の後、同様の訓練が再開され、日没までに三度の飛行訓練が繰り返された。

エンジンや搭乗員の不調により発艦できなかつたり、途中で引き返す機が出たりもしたが、水平爆撃隊のルックウも雷撃隊のエルミも無事三度の飛行をこなしていた。

「砂海上を低空飛行するのはさすがに慣れたけど、まさか民家の上をあんな高度で飛ぶなんて。

まだ手が震えてるわよ。

いいよね、ルックウは水平爆撃の方で」

湯船でエルミはひたすら手を揉み解している。

僅かでも操縦を誤れば、即民家に突っ込んでしまう。

自身が事故で死ぬなら己の技量未熟を呪うだけで済む。同乗する偵察員と魔信兼機銃員には申し訳ないが、軍人として殉職する危険性は常に隣り合わせであり、その覚悟なしに訓練などしてはいない。

だが、民間人はそうではない。ましてや、何の予告もなく自宅に航空機が突っ込んでくるなど、性質の悪い冗談にもならない。

それでも一〇月の少尉任官以来続けてきた低空雷撃訓練の成果は確実に上がっており、民家の屋根を掠る事故すら一機も起こしていない。また、高度を取りすぎて訓練後に飛行隊長から油を絞られたものも、まだ今のところ出ていない。

「そうでもないのよ、エルミ。」

こっちはこっちで風に流されたりするのをどう修正するか、もう神経と魔力があっという間に磨り減るわ。

教典では知っていたけどさあ、急に変えられちゃったからとまどうよ。」

湯船で大きく伸びながらルックウはぼやいた。

もともと水平爆撃隊は雷撃隊に比べ小規模な編制だったが、キンコー湾での訓練からその機数が増やされていた。

この訓練に先立ち、連合艦隊は軍令部の許可を受ける前からハト一の攻撃法についての研究を行っていた。

ハト一の泊地には、岸壁と平行に艦が二列で係留されているという情報がある。

この場合、外側の艦に対しては雷撃は可能だが、内側の艦にはそれができない。しかし、急降下爆撃機である九型艦爆は二五〇キロ爆弾が最大の攻撃手段であり、これでは対艦攻撃の手段としてはせいぜい対空砲火を潰す程度の威力だけしかない。急降下爆撃隊には『急降下爆撃の神様』と呼ばれる『デットン』艦爆隊長コウモ少佐という優秀な指揮官がいるため命中率に不安はなが、それだけで戦艦を撃沈するのはどう考えても無理だった。ハト一の砂深が一〇〇メートルもあれば、外列の戦艦を撃沈した後に内列に雷撃を敢行することも可能だが、僅か一二メートル砂深ではかえって防雷壁にな

つてしまっただけだ。当初は命中率の低さから攻撃手段としては省みられていなかった水平爆撃が、ここにきて必要だと判明したのだ。た。

どうしても七型艦爆隊に八〇〇キロ爆弾を積んでの水平爆撃が必要だった。

このとき、ソル砂海軍には、オリザニアが導入していたような優秀な照準器がなかった。

ソルの技術力では、オリザニアが使用しているほどの高性能照準器を開発することは、この時点では無理だと判断されていた。

この問題を解決するため、一航戦旗艦『コツヴ』の飛行長として異動したミッツ中佐は、それまで第三航空戦隊の航空参謀を務めていた。しかし、親友でもある一航艦航空甲参謀ジッツのたつての願いで降格人事を快諾し、意気揚々と『コツヴ』に乗り込んできた。『コツヴ』にはコウモ同様にソル砂海軍の至宝とも呼ばれる『雷撃の神様』ジュージ少佐がいたが、既に困難な浅海面砂雷攻撃という重大な問題を抱えていたため、彼ひとりに水平爆撃の問題まで押し付けるわけにはいかなかったからだ。

ミッツは雷撃隊をジュージに預け、自身は徹底的に水平爆撃隊の練度を上げる訓練に没頭した。

水平爆撃の命中率は、訓練によって向上させるしかない。

猛訓練の行なわれたキンコー湾周辺の農家から、あまりに激しい毎日の爆音のせいで鶏が卵を生まなくなったという苦情が出るほどだった。

しかし、その甲斐あってかエルミたちが少尉ら任官する頃には、標的艦を走らせての動的目標に対しての爆撃でも命中率は五〇パーセントまで向上した。この動的目標での五〇パーセントという命中率は、ハトーのような静的目標に対してなら八十パーセントの命中率が得られると期待できる。そして、それまでの三機小隊三個小隊

九機編隊の代わりに、五機編隊で攻撃するという案が出された。ルックウは、その水平爆撃隊に引き抜かれていた。

「わざわざ陸地を飛んで訓練するなんて、どこを叩く気なんだろうねえ。

いよいよ戦争しなきゃいけないのかなあ。

まあ、キミたちが突っ込む前に、ボクたちが対空砲火なんて全部潰してあげるから」

艦爆隊のパイロットであるファルが、洗い場から湯船に振り向いた。

急降下爆撃はコウモ少佐の指揮の下、順調に命中率が向上していた。

急降下爆撃は四〇〇メートルから降下を開始し、六〇〇メートルで投弾するというのがソル砂海軍の教典に記された方法だった。

艦爆隊は、この投弾高度を四五〇メートルに下げ、さらに命中率を上げようとしていた。四五〇メートルで投弾ということは、もとはといえばジツツがカリユウ一航艦参謀長の許可なく『コツヴ』艦爆隊に勝手に命じたことだった。確かに命中率の向上は見込めるのだが、機首の引き起こしが間に合わず、そのまま砂面に艦爆が突っ込む事故が起きたときには大問題に発展しかけた。しかし、コウモはこの投弾高度が有効と考え、訓練によつて事故を減らそうと努力した結果、現在では事故も起こらず、命中率も動的目標に対し四〇パーセントという驚異的な数値を記録していた。

「お願いね、ファル。

私たちも、頑張るから」

エルミが湯船から出ながら言った。

急降下、水平の両爆撃法に対し、雷撃には問題が山積していた。砂深一二メートルしかないハトー泊地では、通常の雷撃では砂雷が砂底に突っ込んでしまい、艦まで疾走できない。

この浅海面魚雷攻撃を成功させるためには、二つの問題を解決する必要がある。

ひとつは雷撃機が砂雷投下する際の最適な高度、速度および機首角度を掴まなければならなかった。そしてもうひとつは航空砂雷そのものの構造改善だ。どちらが欠けても浅海面魚雷攻撃は不可能だった。

ゴトムのハトー攻撃とはまったく別の視点で、砂海軍航空本部の雷撃兵器担当の第四部は、二年ほど前から主要な軍港などの砂深を調べていた。

多くの軍港の砂深が水深一二メートルから二〇メートルまでと判明したことで、ハトーを含むこれらの軍港に対して使用できる浅海面魚雷の研究をはじめ、第四部はひとつの回答に辿り着いていた。

投雷の瞬間に発効させられる水平ジャイロを砂雷に取り付け、ジャイロによって砂雷の両側に取り付けられた木製の安定舵を効かせ、砂雷が安定した姿勢で海面に投下されるようにするものだった。この機構にしたところ横舵の効きが良く沈降深度は浅く安定し、砂雷の落下点から調定深度へ行くまでの定深距離も短くなり、砂雷の疾走が良好になった。

この改良型航空砂雷はジュージ率いる艦攻隊に送られ、そのテストが実施された。

改良された砂雷の性能は、それまで全世界で使用されていた砂雷すべてを、一夜にして旧式にしてしまうほどのものだった。それまでいかに低空低速で安定した空中姿勢で投雷するかに心を砕いていた苦勞は一体なんだったのかと、ジュージ自身が呆気に取られるほ



どだった。今までは一〇〇ノットという低速で投雷しなければならなかったが、改良型航空砂雷は一六〇ノットでの投雷を可能にしていた。低空飛行は対空砲火をかわす上で絶対必要な技術であり、今後もこの訓練は必要だったが、低速で安定姿勢を保つ訓練からは解放されたのだった。

それでも低空飛行訓練は、パイロットたちの神経と体力、そして魔力をすり減らすには充分に過酷なものだった。

「でもさあ、通路に積み上げられた魔鉱石って、あんなに燃料積み込んでどうするんだろ」

ルックウの何気ない問いの答えは、誰もがなんとなく思いつくこととはあった。

だが、それを口にしてしまうと、それが現実になってしまいそうで、誰も口に出すことはなかった。

十一月二三日、ハトー攻撃に関する連合艦隊司令部と機動部隊司令部の最後の打ち合わせの会議が、キンコー湾からほど近いオアシスの航空隊司令室で行われた。

ゴトム連合艦隊司令長官とナンクウ機動部隊司令長官の他、連合艦隊司令部と機動部隊司令部の幕僚たち、艦隊司令長官、基地航空艦隊司令長官といった、実戦部隊を率いる提督たちが顔をそろえた。会議の初めに、ゴトムが訓示を行うために立ち上がり、そのあと会議に移った。

会議はつつがなく終わり、ナンクウが立ち上がる。各艦隊の協力に謝意を示し、攻撃は迅速果敢、徹底的に行うとの決意を述べた。これで会議は終わりと思われたとき、ゴトムが立ち上がった。

「大切な事を一つ付け加えておく。それは攻撃中止についてだ。

機動部隊は間もなくタンカン湾に向けて発進するのであるが、まだ戦争は始つたわけではない」

ゴトムがナンクウを激励し、先勝を祈念して会議を締めくくると誰もが思っていた。

しかし、攻撃中止などと言い出したゴトムに、誰もが言葉を失つた。

「オリザニアの首都では、駐オリザニア大使とデル國務長官の間で、ソル・オリザニア交渉が続行されている。

これが成立した場合には、機動部隊は攻撃中止。

即時引き揚げの命令を打電するから、おとなしく内地に帰ってきてもらいたい」

そう言つとゴトムは会議の終了を宣言することなく、機動部隊司令部の反応を待った。

「長官、もし、母艦から攻撃機が発進後であったときは、どうしますか」

機動部隊参謀長カリユウ少将が質問した。

機動部隊は第一航空艦隊を基幹戦力としているため、司令部は兼任になつていた。

「同じだ。飛行機が母艦を離れて攻撃の途中であっても、交渉が成立次第、帰ってきてもらう」

平然とゴトムは言い放つ。

「長官、それは無理ですぞ。

長官が平和を願う気持ちは分かります。

ですが、一旦母艦を離れたら、搭乗員には攻撃するか死ぬかの二つしか、道は残されていない。

発艦した魚雷を海に捨てて、もう一回着艦しろとは、指揮官とし

ては口がさけても言えませんが。

そりゃあ、士気に関係しますからな」

ナンクウがたまらず言った。

「艦攻や艦爆は通信員が乗っているから、引き返しの魔導通信を受信できます。」

ですが、戦闘機は無理だと思いますな。

艦攻と同行しているときは戦闘機にも手信号で伝えられますが、問題は天候不良などの原因で分散した時です」

カリユウも同調する。

妥結したソル・オリザニア交渉をぶちこわしたいとは、ふたりとも考えてはいない。戦闘機には魔導通信機を積むことはできないため、発艦後には連絡を取る術がない。単純に無理だと言っているだけだ。

「しかけたしよんべんは、やめられませんぞ」

ナンクウが言った。

言い得て妙の喩えに、数人の提督がくすりと笑う。

同時に、謹厳実直という言葉を受肉化させたような、ナルミの顔が怒りに膨れた。

「いいか、ナンクウもカリユウ君もよく聞いておけ。」

『百年兵を養うは、一日の用に当てるためだ』という言葉を、君たちは知っているだろう。

肝心のご奉公の時に大切な命令が実行できないと思うようなら、出すわけにはいかん。

今すぐ辞表を出せ」

ゴトムは怒気に体を震わせつつ声を押し出した。

ナンクウはゴトムの気迫に押され、言葉を失っていた。

ユーメイ湾に集結していた第八戦隊は、連日艦隊行動の訓練に勤しんでいた。

今まで一度も行動をともしたことのない艦同士が、一糸乱れぬ艦隊行動を行うことは困難だ。スクリューの回転整合から、各戦速の調整、息を合わせなければできないことは山ほどある。単縦陣で突き進むだけが、艦隊行動ではないからだ。警戒序列や輪形陣といった様々な陣形を、短い時間で組み上げなければならない。

艦長だけではなく、航海科の人員は、寝る間を惜しんで各陣形における自艦と他の艦の位置関係、そして移動順序を頭に叩き込んでいた。

航海科が目の回るような忙しさの中、砲術科は半ば手持ち無沙汰だ。

艦隊行動訓練に時間を割いているため、まともな砲撃訓練も、雷撃訓練も行っていない。もっとも戦艦二隻で編制された第三戦隊はともかく、第八戦隊と一砂戦は統制の取れた艦隊行動ができなければ、砲撃も雷撃もあつたものではない。

単艦で戦闘行動を取るなど、あり得ないことだった。

ユーメイ湾に集結してから十日が過ぎ、ようやく統制の取れた艦隊行動ができるようになっていた。

一二日から第三戦隊と、第八戦隊、一砂戦に分かれ、襲撃訓練が始まった。第三戦隊は第八戦隊と一砂戦の雷撃から身を守り、第八戦隊と一砂戦は第三戦隊の撃沈に挑む。一通りの襲撃行動を終えると、組み合わせを変えて違う状況の襲撃訓練が行われた。

そして、ひと通りの訓練を消化したところで、戦隊司令官と艦長がキンコー湾基地に呼び出されたのだった。

「ランツ、輪形陣の配置だが、何を守るんだろうな。第三戦隊を中心に組むのかと思っただけだ」

レグルは輪形陣の中心に空いた、不自然な空間のことを考えていた。

「そうですね、輸送船か、空母か。そんなところでしようけど……」  
ランツが首を傾げつつ答えた。

「おいおい、わざわざ第三第八戦隊に一砂戦まで付けて、船団護衛だって？」

それは勘弁して欲しいな。

やっぱり艦隊決戦が砂海戦の華だからな。

せめて空母といきたいものだ」

空間の広さから、それほど大きな船団ではないとレグルは判断している。

船団護衛を軽視する気はないが、小規模な船団が行くようならば、それほど重要な地域とは思えない。それでは有力な敵艦隊と戦う機会は得られないと思っていた。

既に実戦に即した訓練を行っている以上、近く戦地へ行くことは確実に思われた。

ソル・オリザニア交渉が続けられている現状で、ハトーやネグリットに攻撃を仕掛けるとは考えられない。せいぜいメディーエータ派遣艦隊の補強か、ゴール植民地派遣艦隊として行動するかのどちらかだろうと、レグルは漠然と想像していた。

しかし、翌日戦隊司令官と艦長が帰着し、夕食前に行った訓示で各員はさらに混乱することになる。

「ザン大尉、何か詳細な情報はないんですか？」

夕食後の自由時間に、ガンルームにいたザンにレグルが聞いた。

「俺が聞きたいくらいだ、少尉。」

なんでまた、今度は北の果てか。

いったい、連合艦隊は何を考えてるんだ。

まさか、ロス共和国に宣戦するとか」

ザン自身、まるで予測がつかなかった。

「てつきり、ゴール植民地だと思っていたんだけどな、俺は」

酒保から買ってきたラムネを飲みながら、アルデが答える。

ソル砂海軍の艦艇は、火災消火のために炭酸ガス発生装置を備えており、これを使って艦内でラムネを製造していた。

「それはないと思うぞ、アルデ。」

今これだけの艦隊がゴール植民地に行ってみろ。

その瞬間にソル・オリザニア交渉がおしまいになっちまう。

そこまで莫迦じゃなかるうよ、ウチの総長も。

もつとも、首相に押し切られたのかもしれないがな」

ザンが窘めるように言い、そして危惧を口にした。

レグルは黙って上官のやりとりを聞いている。

聞きながら、解らないなりに今回の命令について考えた。

ゴール植民地へ行くかもしれないということとはレグルも考えていたが、ザンの言うとおり今の時点ではないだろう。もし行くならば、わざわざ最北のタンカン湾などに移動する必要はない。もし韜晦を意図しているのであれば、一度母港に戻れば良いだけのことだ。

ロスへの宣戦は、ザンが相手にもしなかったことから、まずないとみてよい。そもそも内陸国家のロスに対して、砂海軍ができるこ

とはせいぜい船団護衛だけであり、それであれば航路の安全が確保されているフェクタム帝国内のコー半島ルートで充分だ。

メデイエータへの派遣も、今以上に艦艇を増やしたところで、効果があるとは思えない。メデイエータも長大な砂海岸線を持っているが、ロス同様内陸国家だからだ。

考えれば考えるほど、レグルは不穏な予測が沸き上がってきた。

だが、理性と常識がその予測を、必死に打ち消そうとしている。

北へ行けば行くほど、砂嵐の頻度や規模は高く、大きくなる。タuncan湾から東進する航路は、危険度が高くほとんど通る船がない。たいていのオリザニア行き航路は、一度南下してから砂嵐の強い砂海域を避けてから北上し、ハトーを経由してからオリザニア本土へと向かう。東進航路なら、発見されることなく、ハトーに攻撃を仕掛けられるかもしれない。

そこまで考えて、レグルは危険な妄想を振り払った。

「どうした、少尉、急に黙り込んで？」

難しい顔をして黙り込んだレグルに、ザンが声をかけた。

「何でもありません、大尉。

自分なりにどんな目的があるか考えましたが、やはり解りません。ご心配をおかけして、申し訳ありませんでした」

レグルは曖昧に話を合わせた。

とてもじゃないが、口に出せることではなかった。

「疲れてるなら、明日も早いんだ、さっさと寝ちまえ。

だが、言っておくが、ルカ中尉を独り占めなんかしたらただじゃおかないからな。

冗談は冗談として、ルカ中尉の仕事を邪魔するなよ」

笑いながらアルデが言う。

「何言つてんだ、アルデ。」

素直にルカ中尉を抱きたいって言え。

もつとも、貴様は追い回しすぎで嫌われてるからな。

少し放つておくことを覚えた方がいいぞ。

レグル、くれぐれもルカの仕事は邪魔するなよ。

最近、貴様のところに入り浸りだそうじゃないか。

知らんぞ、許嫁から毎晩女を引っ張り込んでるって誤解されても」

「それで修羅場か。」

私の許嫁に手を出して、この薄汚い雌ネコって、中尉が言われるわけだ」

ザンの言葉にアルデが混ぜっ返し、ふたりは大笑いする。

「何ひとつ、間違っちゃいませんね。」

中尉のお仕事を邪魔する気など欠片もないのですが、いらっしやるものを無碍にもできませんし。

なるべく気を付けます。

それでは、下がります。

大尉からも意見してください。」

レグルは三〇度の敬礼をし、ふたりの答礼後ガンルームを出た。

レグルは、脳裏にこびりついた妄想を引き剥がそうとしたが、意識すればするほどハトー攻撃の現実味が増えていく。

士官次室に戻りドアを開けたとき目の前に飛び出してきた影に、その直後足下にまとわりつく獣の感触がなければ、叫び出してしまふいそうな衝動を抑えられなかったかもしれない。レグルは愛おしいような表情でルカを抱き上げると、その柔らかい腹の毛皮に顔を埋めた。ひとしきりルカの感触を楽しんで、レグルはドアを閉めるとルカをベッドに降ろす。



着替えたレグルがベッドに腰を下ろすまで、ル力は寝転んで待つていた。

ベッドに腰を下ろしたレグルの両足に飛び乗ったル力は、仰向けになって小さく鳴いた。

「中尉、みんなから怒られましたよ、独占するなって。

しかし、驚かさないでください。

思わず叫びそうになってしまったじゃないですか」

レグルの言葉をルカが理解するはずもなく、撫でられるままに喉を鳴らしている。レグルもネコ相手に相談事ができるとは思わずもなく、ただ無心にルカを撫でていた。

「あ……

やっぱり、妄想は妄想か」

ついレグルは言葉を持ちした。

どう頑張っても、ハトーまで魔鉱石の補給なしに行けるはずもない。

魔鉱石を満載した給石船を随伴させるにも、一回分では足りない。ソルが保有する大型給石船すべてを投入すれば二回の補給は可能だが、そうなると南方資源地帯からの輸送が滞る。もし洗いざらいつぎ込んだとしても、砂嵐が吹き荒れ、激しく荒れる砂海面での給石は、困難どころの騒ぎではない。下手をすればうねる砂海面に翻弄され、衝突事故を起こしかねない。いくら燃料用に加工され、砲の装薬より爆発性が低くなっているとはいえ、強い衝撃を与えれば魔鉱石は爆発しかねないものだった。

「無理だよ、無理。

やりつこない。

だいたい、皇国はオリザニアとの戦争は望んでない。

ハト―をやるなんて、あるはずないって」

レグルはそう言うと、足の上でだれきっているルカを抱え上げる。そのままルカを飛行機に擬すように振り回し、しばらく士官次室を練り歩いた。

「中尉、そろそろ巡検です。」

中尉はお仕事ではないのですか？」

されるがままのルカを床に降ろし、レグルはドアを開けた。

しかし、ルカは部屋を出ることなく、レグルのベッドに戻ってしまった。

「しょうがないですね、中尉は。」

一緒に巡検を受けますか？」

レグルは微笑むと、やがてくる巡検を待つために椅子に座り直した。

もちろん、ルカがレグルの言葉を理解できるはずもなく、ベッドの上で丸くなっているだけだった。

「ガル、お前の幼馴染みの、なんていったっけ、隣のオアシスで料理人の修行にきてた……？」

実験の合間にフィズが声を潜めて聞いてきた。

「チエルがどうかしたか？」

周囲は普通の声量で話している中、いきなり声を潜めてきたフィズにつられ、ガルも小声になる。

「いや、どうしてるかなあって思ったただけだ。」

あの店、たたんじまって修行先がなくなっちゃまってさ」

フィズの口から思いも寄らない言葉がこぼれた。

大衆向けのソル料理を出す店に鞍替えしたことは、ガルも知っていた。しかし、チエルがいない店に、それもわざわざ浮遊車に乗ってまで行く気はなかった。チエルに暇が出された後は、すっかり足が遠のいている。

「えっ？

確か、大衆ソル料理屋になってたんじゃないのか？

店閉めちゃったって？」

思わずガルは聞き返した。

「なんでもな、店主が引つ張られたらしい。

なんだかんだいって、あの店はメディーエータに縁があるそうじゃないか。

看板をかけ直した後も、在ソルメディーエータ人の、怪しげなやつらだの出入りしてたみたいだな」

何に引つ張られたかフィズは言わなかったが、間違いなく特高だろつ。

若い頃にメディーエータ各地で修行してきたという店主の顔を、ガルは思い出していた。

「あの親父さんが、反ソルの……？」

そんなことするとは……思えないんだが」

生粋のソル人であり、修行には厳しいが善人を絵に描いたような店主がいったい何をしたというのか、ガルには想像もつかなかった。

「俺も詳しくは分からないんだが。

知り合いがあつたの近くに住んでてな、昨日行ってきたんだけど、そのときに聞いたんだ。

あの辺りには砂海軍御用達の料亭があるだろ、それに絡んでるん

じゃないか」

フィズはこれで解るだろ、という顔で言った。

以前ガルたちが泊まった料亭とは別に、砂海軍の提督たちが利用する高級料亭が、あのオアシスには何件がある。

チエルが修行していた店は、その料亭とは違う通りにあるが、それほど離れているわけではない。その店の者にとって料亭の敷居は高かったが、芸者たちや料亭の従業員が昼食を取りによく出入りしていた。

料亭でどのような話がされたかを、芸者や従業員が口に出すことはない。だが、誰がよく来る、誰が来なくなつた、誰の壮行会が行われたといった程度のことは、顔見知り同士の会話に出ることがあった。

チエルが修行していた店のある辺りは、もともとメディーエータ人が寄り集まって暮らしていた場所でもある。

この時局で料亭の関係者がメディーエータ人にそのようなことを話すことはないが、どこから漏れ伝わるか予測がつかない。何気ない昼食時の会話を聞きつけた者から、人伝に話が広がれば、情報に関する知識を持つ者であればある程度砂海軍の動きを知ることができ

る。予てより情報局や特高は、メディーエータ人街と呼ばれた隣のオアシスを危険視していた。

特高の上層部からスパイの内偵と、情報を漏れさせてしまいそうなソル人が経営する店舗に対して注意を喚起するように命じられた現場の特高警官は、怪しげな人物を片っ端から連行し、厳しく取り調べていた。

上層部は、決して犯罪者を作ろうとしていたのではない。スパイの逮捕は当然しなければならぬが、悪意を持たずに情報を漏らし

てしまいそうな店舗の従業員や店主に対しては、注意を喚起するだけで充分と考えていた。

しかし、現場の特高警察官からしてみれば、見るものすべてが疑わしく見えてしまう。日常的に恐れられ、嫌われた者たちが街をうるついでいれば、それを不安に思う者たちは目を伏せ、つい怪しげな行動を取ってしまうのだった。そのような目を逸らしたり、行き会ったときに道を変えてしまったような人々を特高警察官たちはすべてスパイと決め付け、過酷な取調べを行っていた。

チエルの修行先の店主は、店に入ってきた特高警察官から僅かに目を逸らしただけで連行されたのだった。

スパイ容疑は晴れたが、過酷な取り調べは連日深夜まで及び、店主はすっかり体調を崩していた。

さらには拷問が加えられたために、利き腕に一生残る障害を受けてしまったのだった。かろうじて日常生活に支障をきたさない程度ではあったが、それでも人様に出す料理は無理だと考えた店主は、店をたたむ決心をしたのだった。

店主不在の間に店に居座るようになった特高警察官が、客だけでなく出入りの業者にまで恫喝するような事情徴収を行い、それを恐れて客足が途絶えたことも廃業を決心した大きな理由だった。

「それとチエルがどういう？」

「お前、鈍いな。」

下手すりゃ、そのチエルちゃんとやらが特高に引つ張られかねないぞ」

ガルを遮ったフィズの言葉は、ガルに脳天を打ち抜くような衝撃を与えていた。

「姉ちゃん、これってどういうこと？」

アレイが差し出した新聞のに、『反国家書籍を完全追放』という文字が踊っている。

二週間ほど前に、オリザニアとサピエント国人の著作が発禁になっていた。それ以前から共産主義の思想書や反戦を謳う書物が小説から雑誌までことごとく発禁になっている。

「持つてる本も捨てるってことだよ」 呆れたようにチエルが答えた。

近く、村の小学校の校庭で、そううつた蔵書を持ち寄り燃やそうと新聞は煽っている。 古代メディーエータであったという焚書の愚行が、現代に蘇ろうとしていた。

政府は反ソルの立場の書物を片っ端から発禁にしていたが、蔵書の廃棄まではまだ強制していなかった。

段階的に新聞や魔導放送を利用して自主的に捨てさせ、捨てにきた者を特高にマークさせ、反ソル勢力の炙り出しに利用しようと考えていた。 後になればなるほど、隠していようとした悪質な反ソル思想の持ち主という判断材料になる。

そして、熱しやすいソル気質は、右へ倣えの徹底した悪魔狩りに発展していった。

「これもダメ、なのかあ」

アレイが手にしていた本は、ここ数年で一気に人気が発した作家の著作で、少年向け空想戦記だった。

ストーリーや登場人物は、この時代にありきたりなもので、オリザニアの侵略に立ち向かう砂海軍パイロットの活躍が描かれたものだ。

貧しい農村に生まれた少年が、立身出世を目指して予科練に入る。厳しい訓練を経て一人前のパイロットとして成長していく姿と、オリザニアが世界征服を目指して着々と準備を進めていることが平行的に物語の中で進行していく。

突如としてソルの南方信託統治領にオリザニア大東砂海艦隊が進行し、不意を衝かれたソルは守勢一方になり、亡国の危機に追い込まれしもう。

連合艦隊は奮戦するが物量の前に押し切られ、『アーストロン』を始めとした一〇隻の戦艦は次々と大東砂海に沈められ、オリザニア大東砂海艦隊からソルを守る盾が全滅する。

皇国国民すべてが絶望の淵に叩き落とされたとき、巨大な爆撃機の編隊を主人公が引き連れて現れ、オリザニア艦隊に新型爆弾を雨霰と叩き付け、文字通り粉碎して皇国を救うという話だ。

この『空中戦艦』という少年向け読本は、緻密な取材と豊富な科学技術の知識に裏打ちされた、一般読者の目にも堪えられる小説だった。

作者は、オリザニアとソルの国力を冷静に比較し、普通に戦っては亡国しかないと結論づけていた。その結論をひっくり返すには、現代の技術ではまだ実現不可能な巨大爆撃機と、理論だけは確立されつつあった新型爆弾が登場させることで解決させていた。

クライマックスこそ荒唐無稽な戦闘場面が描かれていたが、そこに至る経過や実在の艦隊同士の戦いは、まるで見てきたかのようなリアリティに溢れていた。

少年たちの間で、どの本を捨てなければならぬか、この日の小学校はその話題で持ちきりになっていた。

ほとんどすべての少年向け読本や漫画は、ソルが絶対的な正義であり、一方的な勝利を収めている。そのような本は捨てる必要はな

いのだが、問題はこの『空中戦艦』だった。

最終決戦ではソルの一方的な勝利だが、その直前までは連戦連敗であり、連合艦隊は全滅させられている。これが問題だった。『無敵艦隊』と謳い上げ、皇国の誇りとまでいわれた『アーストロン』がなす術もなく撃沈され、連合艦隊司令長官が戦死するなど、あつてはならないことだ。教師はその点を考慮し、教え子たちに捨てた方が良いと言っていた。

国が狂気に染まり始めていた。



## 第19話 決裂

「いいかげん、正直に言ってしまったらどうかね、お嬢さん。

我々も好きでこんなことをしているのではないのだよ」

殺風景な部屋に簡素な机がひとつ、それを挟むように壊れかけたような音をきしませるイスがふたつ並べられていた。

机の上には安物の電灯が置かれ、それを挟むように若い女性と、中年の男性が座って対峙している。

若い女性は何度も繰り返される質問に、うんざりしたような表情を浮かべないように細心の注意を払いながら、静かにだが、きつぱりと否定の答えを返していた。

焦れたような表情を作っている男性は、朝からこれで何度目になるかも数えるのも嫌になるほど繰り返された質問を口に出している。

「お嬢さんがメデイエータに肩入れしているのは、もう解っているんだ。

帝都から離れた宿は格好の隠れ家になるからな。

お嬢さんの宿に集まる国民政府の間諜を、洗いざらい教えてくれないかね？

我々としても、若い女性に拷問など、できればしたくないのだよ」言葉とは裏腹に、数多くの拷問を手がけるうちに加虐的な性嗜好に染まりきっている男性は言った。

「何度も申し上げておりますように、あたしはメデイエータに肩入れなどしておりません。

たまたま好きな料理が彼の国のものであっただけです。

あたしの宿を隠れ家に行っているような人は、ひとりもいません」女性に拷問という言葉に恐怖を感じ、身を竦ませながら答えた。

「彼の国の料理がお好きなのは仕方のないことだ。愚かにも戦争を我が国に仕掛けさえしなければ、いま頃あなたがここにいるようなことにはならなかっただろうね。」

しかし、多くの料理屋が商売替えをしている中で、未だに彼の国の料理を作り続ける理由は何なのかね？

それが隠れ家であることを証明していると、私たちは確信しているのだよ。」

冷酷な笑いを浮かべ、特別高等警察の取調官が言い放つ。

「そのようなご判断をされるのですか？

どうすればあたしのことを信じていただけるのです？

……

では、第二艦隊第八戦隊『ドラコ』の砲術士官、レグル少尉にお問い合わせください。

少尉とは幼馴染みであり、許婚です。

砂海軍士官の許婚が、将来の夫を危険に晒すような真似をしようとお願いでしょうか？」

悩み抜いてチエルはレグルの名を出した。

レグルに迷惑を掛けてしまうことを恐れ、その名を出すことに躊躇いを感じているのだが、拷問が待っているというのであれば話は別だ。

自分が拷問に耐えられるほどの精神力と体力があるとは、チエルは思っていない。

間違いなく途中で心が折れ、特高警官の望む答えを口にしてしまっただろう。料理を通してでも、メディアータに対して多少なりとも好意を持っている以上、拷問の苦痛と恐怖がどのような『真実』を作り出すか正直なところ自信がない。その『真実』を自白することで、砂海軍士官の許婚が反ソル思想を持つ者だとされては、レグル

の未来まで刈り取ってしまうことになる。軍からの放逐ならまだいいが、レグルにまで特高の手が伸びることだけは、絶対に避けたかった。

レグルが少尉任官の時点で許婚の存在は砂海軍に知られているはずで、当然身元調査もされているはずだ。

それが身の潔白を証明してくれると、チエルは信じていた。

「お嬢さん、なぜ、それを今になって？  
解りました。

砂海軍に問い合わせてみましょう。

今日はお帰りいただいて結構です。

それで、ひとつお願いがあるのですが、これからも彼の国の料理を作っていたきたい。

間諜をおびき寄せる手伝いをしていただけますかな？」

大きく目を見開き、しばらく考え込んだ取調官は、尋問の終了を告げた。

「よろしいのですか？」

チエルを見送った部下が、取調官に訊ねた。

「結構なことじゃないか。

これで、堂々と砂海軍に手を入れられるぞ。

上手くいけば、避戦派や親オリザニア派を叩き潰せるかも知れん。あの娘も、これであの国の料理を作るのを止めでもしたら、今度こそ引っ張れる。

隠れ家の目印を下げたのは、間諜を守るためだっていうことだからな。

それを恐れて作り続けていれば、そのうち引っかかる者も出るだらう。」

狙った獲物は逃さないという意志を視線に込め、取調官は部下に言った。

当然のことながら、ここまでの内偵でチエルがレグルの許婚であることは判っている。

だが、だからといって、砂海軍士官、それも恩賜の短剣組を簡単に引っ張れるというものではなかった。

「しかし、砂海軍士官が許婚ということであれば、身元調査はしているでしょうし。」

あの娘は本当に関係ないのかもしれませんが。

万が一、誤認だったとしたら、砂海軍と事構えるのは得策とは思えません」

不安げな表情で部下が聞く。

「構うものか。」

手段のためには目的などどうでも良い。

いずれ拷問に掛けて吐かせてしまえば、事実など後からついてくるのだよ」

取調官は、チエルが苦痛に顔を歪める光景を想像していた。

いつの間にか目的と手段がすり代わることは多々あるが、意識して手段のためには目的を選ばないなどと言う者はまずいない。

この取調官は、長い特高勤務の中で、人としての常識を大きく歪めていた。

「あれほどの上玉を、こんな辺境の地で見つけられるとは思わなかった。」

帝都から左遷されるのも、それほど悪いことじゃないな」

取調官は行き過ぎた取調べで被疑者を死なせてしまったため、帝都勤務を解かれ田舎の村に飛ばされていた。

だが、それでもこの周辺オアシスの特高警官では最高位であり、

そのような者に逆らうような者はいない。  
彼は、全能感に酔い痴れていた。

一月十九日、ユーメイ湾の岸壁は喧騒に包まれていた。

ユーメイ湾の岸壁には、第一砂雷戦隊の一〇隻が接岸している。第三戦隊の戦艦二隻と第八戦隊の重巡洋艦二隻は、砂深の浅い岸壁に横付けすることはできず、沖合にその巨体を休めていた。岸壁の各艦艇には直接、第三、第八戦隊には多くの舳が往復し、訓練で消費した燃料の魔鉱石や、水源の魔鉱石、生鮮食料だけでなく、大量の保存食が積み込まれている。連合艦隊の補給担当が必死に集めた物資は、ユーメイ湾で訓練を続けていた将兵の知らぬうちに埠頭を埋め尽くしていた。

この日の朝、いつものように訓練が始まると思っていた将兵に、各艦の艦長からの高声放送で訓練の終了と物資の積み込みが命じられていた。

「なんだ、この乾パンだの乾燥米だのは？」  
ランツが膨大な梱包を見て啞然としている。

「どこへ行く気なんだ、いったい……」  
若い士官や下士官の間では、様々な憶測が飛んでいる。  
ネグリット制圧程度では、この量は必要ない。

ソルとはこの星の反対側にある、アレマニアの救援に向かうのではないか。

いや、オリザニアを直接衝く気だ。

ソルの真南にあるバラバ大岩盤を攻撃する気だ。  
そうではない、ハトーに艦砲射撃をかける気だ。

積み込んだ糧秣の量から、長期の征途になるであろうことが容易に予測されている。誰もが疑心暗鬼になり、長く家族や恋人に会えなくなることに不安を抱え始めていた。

しかし、いくつも拳がった予想の中で、オリザニアとハトーの直接侵攻は、与太話として片付けられていた。

オリザニアはバキシム大岩盤の国であり、ベロクロン大岩盤すら持て余しているソルが制圧するには手に余る。

なにより、近海での艦隊決戦を意識したソル連合艦隊に、バキシム大岩盤を衝くだけの渡洋能力はない。補給を行おうにも、ハトーやその手前にあるミルドウィオアシス群を確保していなければ、補給部隊が途中で叩かれて艦隊が立ち行かなくなるだけだ。同様にハトーへの攻撃も、ある程度の航続力を持つ第三戦隊であればともかく、一砂戦にそこまでの航続力はない。

タンカン湾への移動は韜晦航路だろうと、誰もがそのように理解をしていた。

ほぼ同時刻、キンコー湾は、不気味なほどの静寂に包まれている。連日響き渡った航空機の爆音が消え、人々は久々の落ち着いた朝のひと時を過ごしている。だが、埠頭には大量の物資が積み上げられ、多くの艇が沖合と岸壁を行き来し、航空機の訓練とはまた違った喧騒に包まれていた。

キンコー湾への移動以来、生鮮食料の補給はあったがそれほど量でもなかったため、エルミたち搭乗員が搬入を手伝うことはなかった。

だが、この日運ばれてきた物資の領は常軌を逸しており、さすがに主計科の兵だけでは手が足りず、砲術から航海、機関まで手を貸しているとなれば、搭乗員だけが指を啜えて見ているというわけに

は行かなかった。

「もうへとへとなんだけど……」

まだ、あるの？」

いい加減うんざりという顔でエルミがルックウに呟いた。

「こらあつ！」

誰だ、文句垂れてるやつはあつ！」

貴様らが食うものだろう！」

口動かす暇があつたら、身体を動かさせえつ！」

エンザが怒鳴りつけた。

一応、女性相手に鉄拳を振るうことは控えているものの、下手に口ごたえなどしようものなら砂海に叩き込まれそうな剣幕だ。

なにせ、自分たちが食うための物を運び込んでいるのだ。

普段は慣れない作業で怪我でもされたらと、飛行長に他科から手伝いの禁止が伝えられていたが、この日ばかりはそう言ってもいらなかった。膨大な物資が、広い空母の格納庫をみるみるうちに満たしていくが、埠頭に並べられた梱包が減ったという気配はまだない。少しでも早く搬入を片付けなければ、明日の出向に間に合わなくなってしまう。

戦闘が始まらなければ搭乗員たちにはすることはない。身体を万全に状態に整えておくことも仕事だといわれればそれまでだが、忙しく立ち働く下士官兵に申し訳ない気分になることも多々あった。もっとも、空母乗組員の中では消耗品という認識もされている搭乗員に対して、少しでもその気持をやらわらげようとする配慮から余計な仕事を押し付けられないという風潮がある。

それでも今回運び込まれた物資の量は異常だ。先日の燃料魔鉱石とあいまって、航空機の格納庫まで埋め尽くそうとしている物資に、

将兵はどこまで行く気なのかと首を傾げるばかりだった。

ソル政府は一月一七日に、三国同盟の実務を仕切った辣腕の職業外交官クリスを、オリザニアに派遣した。

ノム在オリザニア大使ひとりだけでは、対オリザニア交渉は困難だと判断したからだ。既に対オリザニア譲歩案の甲案は國務長官デルによつて、さんざんはぐらかされた後拒絶されていた。クリスをノム同格の大使として派遣し、彼の外交手腕にソル政府は期待していた。ノム大使は元砂海軍大将で、現役時代から国際法の研究に没頭し、退官する頃までにはその権威として知られていたが、豊富な知識をもつてしても国家間の交渉は難事だった。

却つて正論が邪魔をしまい、駆け引きというものに慣れていなかったノムが、百戦錬磨のデルを相手にすること自体無理だったとも言える。

ノム、クリスの両大使は二〇日に揃つてデルと会談し、『ティスチ植民地での物資獲得が保障され、オリザニアが在オリザニアソル資産の凍結を解除し、魔鉱石の対ソル供給を約束すればゴール植民地から撤兵』と、『更にメデイエータ事変が解決した暁にはメデイエータ共和国全土から撤兵』を骨子とする乙案を提示した。

だが、既に解読された暗号から、デルはその乙案を最後通牒と理解していた。来るべきものが来たという感慨をデルは内心に抱きつつ、平静を保つてその文書を受け取った。乙案はソルにとつて大幅な譲歩であり、メデイエータ事変以前の状態に戻してオリザニアのベロクロン市場への参入を認めるといふ、全面降伏に等しい趣旨だった。本来であればオリザニアにとつて、歓迎できる交渉条件であるはずだ。

なぜ、デルは乙案を最後通牒と理解していたのか。それは、暗号



の解説に単純な誤訳があったからだった。

クリスが着任する前の一月四日、ソル政府はノム大使に暗号魔報で甲乙両案を送付する際に、乙案は修正した『最後の譲歩』案にて左記の通り緩和せるものなり、という一文を付けていた。

この文面をオリザニアの暗号解読班は、修正せる『最後通牒』なり。左記の通り我が方の要求を緩和した、と訳してしまったのだった。

さらに翌日の訓令では、交渉に当たってはタイムリミットを付けるような真似や、最後通牒『的』態度を取るような印象は避け、友好的折衝を以てできる限り速やかに交渉成立を『期待するような』態度を持つようにしろ、と提出にあたり注意を促した。もちろん、この電文もやはり解読されていた。

言うまでもなく、オリザニアの神経を逆撫でするような真似をして、交渉をぶち壊しにするような事態を招くなどという意味で、最後通牒と悟られるなどという意味合いは欠片も含まれていない。しかし、『最後通牒』という誤訳に惑わされて、オリザニア側はこの訓令を時間稼ぎの引き伸ばしをするようにという意味に誤解した。

ソルの言い分など始めから聞く気のないオリザニアの態度がこの誤解を生み出し、ソルが心血注いで作成した甲乙の両案はともに検討すらされることはなくなっていた。

この日、キンコー湾とユーメイ湾に集結していた機動部隊は、補給を完了した艦艇からキンコー湾を離れていった。

ソルのオアシス群を左舷に眺めつつ北上する『ドラコ』の最上甲板で、レグルは足元のまわりつこうとするル力を捕まえようとしていた。

砂海上を航進している間に、万が一にでも艦から落ちればそれま

でだ。いくら中尉の待遇とはいえ、猫一匹に艦を止めて救助など行うはずもない。とりあえず走り回ったりしていないルカだが、捕まえようとしているレグルを遊び相手としか認識しておらず、まるで捕まる気配がない。周囲の将兵もハラハラしながら眺めているが、下手に手を出してルカが暴走したら元も子もない。結局、レグルが捕まえるのを待つしかなかった。

「航海長、いざというときは艦を止めよう。」

司令もそれでよろしいですね？」

『ドラコ』艦長が苦笑いしながら言った。

「もちろんです。」

ルカ中尉の救助は、何よりも優先ですからな」

「それを断ったら、俺は『ドラコ』から追い出されるじゃないか」  
ふたりともが大真面目に答え、艦橋に笑いが弾けた。

艦橋でハトー攻撃に付いて正確な情報を有する者は、第八戦隊司令部と艦長だけだ。

別行動を取っている僚艦『ケロニア』では、戦隊司令部要員はいないため艦長しか知らされていない。

艦橋要員たちにすらまだ知らされておらず、ハトー攻撃についてここでは話せない。いきおいくだらない話を紛らわせることになるのだが、タンカン湾を攻撃するまで一切情報を漏らすわけにはいかないのだった。ソル・オリザニア交渉が打ち切られたならともかく、まだ継続されている状態でオリザニアの領土を攻撃するなど噂のレベルであつても知られてはならないことだ。

まもなく出撃する長征の前に、乗組員たちに上陸を許さないというわけにもいかず、タンカン湾周辺で噂の元になられても困るのだった。

本来なら砂上補給の訓練をしておきたいところだが、機密保持の観点からユーメイ湾では実施していない。

もちろん、訓練砂海域は定期航路からは外しており、訓練砂海域の一般船舶や浮遊車の航行は禁じていた。しかし、近くを航行する定期航路を止めることも、そこから訓練を遠望することも不可能だった。正式に戦争状態に入っているわけでもないのに、オリザニアやサピエントの在ソル大使館職員が、その定期航路に乗ることを拒否することもできない。その状態で砂海上補給など行ってしまえば、近く長征があることを自ら暴露するようなものだ。

大使館職員に武官がいることはどこの国でも同じであり、スパイ活動を行っていることは公然の秘密だった。

第八戦隊とは別砂海域では、『デットン』が護衛の駆逐艦を引きつれ、僚艦『テレスドン』と別行動を取っていた。

それぞれはタンカン湾へ向かっているが、二航戦として行動するのではなく、一旦母港へ戻る航路を取り、然る後にタンカン湾で合流する手はずになっていた。もちろん、将兵にはタンカン湾へ行くことは告げられているが、なぜ母港をかすめるようにして航行するのかまでは説明されていない。

しかし、この航海が訓練や演習などではなく、明らかに実戦へと向かっていることは、母港を通過することで証明されていた。

「なんで、こんな面倒なことするんだろうね」

搭乗員待機所で、暇を持て余しながらルックウがエルミに言った。

「なんでって、私に聞いても解るはずないでしょうよ」

レックスを構うことに夢中になっているエルミがぶっきらぼうに答える。

「どこに行くんだらうなあ。

いよいよ、戦うんだよね」

レックスをエルミから取り上げるように抱え上げ、ルックウが再度訊ねる。

「戦うんだらうね、いよいよ。

なんか、不思議だよな。

まだ、戦争にいくつて実感がないわ、私は」

平和そのものの航海からは対オリザニア戦争こそまだ開戦していないが、ベロクロン大岩盤でメディーエータと血で血を洗う戦闘が行われている戦時であることを感じ取ることはできなかつた。

「これが親善航海に行くんだつたら、どんなによかつたかしら。

そんな世の中に、早くなって欲しいよね」

両前肢を以つて抱え上げたレックスの腹に、顔を擦り付けながらルックウが言う。

一声レックスの唸り声上がり、爪を隠したキックがルックウの顔を弾く。

情けないルックウの悲鳴に、搭乗員待機所に笑いが弾けた。

静寂が戻つたキンコー湾に、第一航空戦隊の空母『ブリッツ・プロッツ』がその巨体を休めていた。

乗組員たちは、訓練こそないが日課作業に精を出している。汚れきつた艦内を磨き上げ、整備班は航空機の整備に余念がない。埠頭には重量八四八キロ、全長五・二七メートル、直径四五センチの砂雷が一〇〇本並んでいた。

二二日の早朝から、艇が埠頭と『ブリッツ・プロッツ』を何度も往復し、埠頭に並んだ砂雷が運び込まれていく。

浅海面雷撃に必要な改良を施された一型砂雷改が、この日ようや

く必要数揃った。第一、第二、第五航空戦隊のキンコー湾出航に、航空砂雷の改造が間に合わなかったのだった。『ブリッツ・ブロッツ』は、この積み込みのため一日キンコー湾出航を延期している。もともと戦艦として設計され、途中から空母として建造された『ブリッツ・ブロッツ』には格納庫や砂雷庫に余裕があるため、ナンクウ機動部隊の空母五隻分の砂雷を輸送する任務を割り当てられていたのだった。

作業は順調に進み、この日の夕刻前に『ブリッツ・ブロッツ』は出航し、キンコー湾はようやくいつもの姿を取り戻した。

二〇日の会談で、デルの反応に危険な匂いを感じたクリスは、二日に単独でデル長官と会談し、三国同盟問題で重大な譲歩を示した。

オリザニアの対アレマニア参戦に際してのソルの参戦判断は自主的に行うことと、他の締結国の解釈に拘束されるものではないことを記した書面を提示し、これによりソル・オリザニア交渉が促進されるならば即座に署名してデル長官に手交すると申し出たのである。クリスは、当時の外相とともに三国同盟を調印した本人だ。クリスがそう書いたものをオリザニアが発表すれば、その瞬間に三国同盟は死文化し、そればかりではなくソル・アレマニア・ウイトルスの関係は、国交断絶を突きつけられても仕方がないほど冷え切るだろう。

だが、クリスはあえてそれを覚悟で、デルに譲歩を示したのだった。

しかし、デルはこの申し出を保留した。

デルは、大変魅力的な提案であり充分検討に値すると前置きした上で、大統領に伝えることを約束してクリスを極めて紳士的な態度

で追い返した。だが、最初からデルはクリスを交渉相手としては、信頼に値する者とは考えていなかった。そして、オリザニア政府も同様の見解を、クリスに対して持っていた。たとえ自らと敵対している国同士での話にせよ、こつも簡単に友誼を切り捨てようとする者は、オリザニア人の倫理観では許されざることだった。

唾を吐き捨て、クリスを罵倒したい衝動を必死に抑え、デルは執務室の扉を閉めた。

「大統領閣下、ソルから大幅な譲歩案が」

デルはどのようにローザファシスカが返答するか、判ってはいいたが報告した。

「國務長官、まさか拒絶するとは言わなかったらどうな？」

「まだ戦備は整っておらん。」

「そうだろう、参謀長、長官？」

ローザファシスカはデルには目もくれず、オリザニア騎兵軍と砂海軍の長に問いかけた。

「申し訳ございません、閣下。」

騎兵軍はネグリットへの展開がまだ未了です。

バラバへの兵員輸送も、大っぴらにはできませんので。

あと大東砂海全域に十分な配備を完了させるには、あと三ヶ月は必要かと」

騎兵軍参謀長が冷や汗を拭いつつ答える。

「砂海軍も、多少はマシとは言え、やはり今すぐは対応しきれません。」

大西砂海にいる空母や戦艦を、回航しなければなりませんので「冷やかな目で幕僚長を見ながら、砂海軍長官が答える。

「大西砂海から空母と戦艦を引き上げるだ！？」

正気か、長官！？

アレマニアの潜砂艦がうようよいる中を、将兵に渡れというのが！？」

騎兵軍参謀長が目を剥き、砂海軍長官に食ってかかる。

「騎兵軍参謀長、大統領閣下の前で何だ、その振る舞いは。

貴官の言つとおり、大西砂海にはアレマニアの潜砂艦が大量に行動している。

つまり、必要なのは優秀な対潜能力を持つ駆逐艦だ。

図体ばかりでかくて小回りの利かない戦艦は、これは宝の持ち腐れだろう。

空母も対潜哨戒機を積み込んだ護衛空母で充分だ。

アレマニア大海艦隊は、遠く自国のフィヨルドに引きこもっているじゃないか。

仮に出てきたとしても、サピエント本国艦隊で充分対処が可能だ」  
財務長官が騎兵軍参謀長を窘める。

「財務長官のおっしゃるとおりだ。

それに対して大東砂海には、ソルの強大な水上部隊がいる。

それに、ソルの潜砂艦隊は、通商破壊作戦を好まないとの報告も、な。

そのような砂海域にこそ戦艦や空母を集中すべきと砂海軍は結論付け、既に大統領閣下の承認をいただいているのだよ」

小莫迦にするような目つきで砂海軍長官が続けた。

蔑むような目が、騎兵軍参謀長に向けられたものなのか、潜砂艦の使い方を知らないソルの同業者に向けられたものなのかは、はっきりとしなかった。

騎兵軍参謀長がかるうじて平静を保ちつつ引き下がるのを見て、ローザファシスカは財務長官に頷きつつデルに向き直る。

「それで、我が国の返答はどうするのかね？」

回答は既にローザファシスカの頭の中にあるが、それは公式な会議の席でスタッフからの提案で積み上げられなければならない。

ローザファシスカはあくまでも平和を望む大統領であり、戦争の準備は和平への万策尽き果てた後に、スタッフからの進言の上で下す苦渋の決断でなければならなかった。

オリザニア政府は、ソルが提示してきた甲乙案など問題にしておらず、オリザニアの主張を通すことしか考えていない。

しかし、乙案を最後通牒と誤解してしまったことで、新たな問題も持ち上がっていた。ソルは戦争を避けようとしており、交渉の妥結点を探るべく必死なのだが、オリザニアはそれを欺瞞とみてしまった。もともとオリザニアは、ソルを戦争に引きずり出す気であった。従って乙案が最後通牒であっても、これについてはまったく問題はない。だが、もし、このまま開戦となれば、両軍の長が告白したとおり、オリザニアは未だ軍備は万全ではなかった。

そして、ソルとの交渉に臨んでオリザニアが終始取り続けてきた態度は、あまりにも不誠実であり、戦争を望んでいたと言われてもおかしくないものだった。

ローザファシスカは、ドラゴリーでの戦争には介入しないことを公約に掲げ、オリザニア大統領選挙史上初の三選を果たしていた。

不誠実と取られかねない交渉態度が原因となって現時点で開戦してしまつては、明らかなオリザニアの挑発の結果の開戦であり、それでは公約違反と理解されるだろう。それは有権者との契約違反であり、即辞任に繋がる一大事だ。そればかりか、戦備不足で緒戦に敗北を喫するようなことでもなれば、国益を損ねた大統領として



後世の歴史家からも糾弾されかねない。とにかく、ソルと何でもい  
いから暫定的な取り決めを行い、戦備が整うまでは交渉を引き延ば  
す必要があった。

だが、それでソルが納得してしまつては元も子もない。時間を稼  
ぎつつ、ソルが暴発するような内容でなくてはならず、両大使に手  
交した瞬間にふたりが席を立つほど強硬であつてはならない。

「それは、ただいまからご説明いたします。

お手元の文書をご覧ください」

僅かに苦いものを含んだ視線を財務長官に走らせたデルが、会議  
の開始に当たつて配布してあつた文書を手に取つた。

デルは、既に甲案を受け取つた時点で、いずれ出されてくる乙案  
を念頭に、オリザニアからの『最後通牒』案を考え始めていた。

デルからの指示で、最初に国務省極東部が独自の対ソル私案を作  
成していた。しかし、その内容が乙案の対案なのか、乙案を完全拒  
否した上での新たな交渉材料とする基礎案なのか分からぬ内容であ  
つたため、ソルへの回答としての採用は見送られた。相前後して、  
財務長官が国務省を通り越して、直接大統領へ対ソル私案を提出し  
ていた。この財務長官私案が大統領から国務省に戻され、それに基  
づいて国務省はソルに対して強硬な内容を多く含む一般案と、ある  
程度の妥協を示した暫定協定案に分けて作成した。

この席で配布された文書が、その二つの案だった。

暫定案は、かなり現実的な避戦の妥結点が含まれた内容だった。

国務省内の避戦派は、これならばソルも強固な態度を改め、ソル・  
オリザニア交渉は継続され、妥結への希望が持てるものと認識して  
いた。

二二日に作成した案は六項目に亘るもので、メデイエータ駐留軍

の大幅な規模縮小を求める代わりに、ゴール植民地への駐兵を制限付きながらも認めていた。これは、ソル軍のゴール植民地進駐に態度を硬化していたオリザニアが、初めて見せた妥協だった。さらにティスチ、ゴール両国植民地での、ソル資産凍結解除も約束している。

そして、二日後に国務省内で検討された改正案では、さらに通商問題にも詳しく言及していた。

民需用石油の輸出許可などを盛り込んだものであり、少なくともソルにとってこれは交渉打開の期待を抱かせるには十分な内容だった。デルもその内容には賛意を示し、暫定案をソル側に提示するつもりでいた。

「国務長官、ソルが暫定案を飲んでしまったら、いかがするおつもりか。

それをお聞かせ願いたい」

海軍長官が不安げな表情を見せた。

万が一にもソルが妥協し、ベロクロン市場にその状態でオリザニアが参入することは、ソルばかりではなく、ベロクロン大岩盤に權益を確保しているサピエントやティスチ、ゴールとの衝突を意味していた。

「三ヶ月後、貴軍と騎兵軍の戦備が整い次第、一般案を突きつければいいだけです。

彼の国は、政治家に少数の人物はおりますが、軍部、特に騎兵軍に戦略眼を持った者は皆無と言ってよいでしょう。

方面軍ごとの縄張り意識の強さもさることながら、功名心が高く、武功を競い合う傾向にあります。

メデイエータ戦役の拡大も、中央が臨んでいないにも関わらず、現地に展開する方面軍による独断専行が招いたものと、我々は結論

づけています。

従いまして、三ヶ月も待たず、彼の軍のいずれかが一般案提示のきっかけを作ると」

デルの言葉に騎兵軍参謀長が同意を示す首肯をした。

「その前に、メデイエータ国民政府を納得させられるか、ですか。

おそらく、国民政府首相はメデイエータ駐留軍の規模縮小だけでは納得しますまい。

ベロクロン全域からの撤退。

フェクタム帝国を取り戻す気でしような」

財務長官が言った。

「強固に申し入れるなら、援助の削減をちらつかせれば、彼は引っ込みます。

いずれ、フェクタム帝国はともかく、メデイエータ国内からの全面撤退を求めるのですから、三ヶ月ほど我慢できぬ道理はありますまい。

事細かに説明せずとも、暫定案などで我々が事を終わらすとは考えないでしょう。

そこまで莫迦ではないと、私は期待しています」

デルは国際政治の中にいれば解るであろうことを、わざわざ茶番を演じてまで説明する必要性を感じていない。

メデイエータ国民政府の立場や危惧は解らないでもないが、ソルに暴発されるくらいであれば三ヶ月の忍従がそれほど高額の経費ではないことくらい、政治を司るものなら解るはずだと信じていた。

「よろしい。

その線でいけば、ソルも態度を改めよう。

各国の大使公使に了解を取った上で、ソルに提示したまえ」

デルの説明に満足げに頷くと、ローザファシスカは退席した。

二四日、デルはソルに提示する前にサピエント、ティスチとゴールの両亡命政府、メデイエータ国民政府、バラバの各大使と公使を呼び、暫定案についての意見を求めた。

いくらなんでも、オリザニアの独断だけで進めていいことではない。各国の足並みを、ある程度は揃えておく必要がある。植民地とはいえ、他国軍の駐留が交渉の妥結点に含まれている以上、当事者の了解なしに話を進めるわけにはいかなかった。

それがたとえ本国を追われた、亡命政府であってしてもだ。

デルにしてみれば、暫定案はオリザニア軍が臨戦態勢を整えるまでの時間稼ぎであり、ソルがこの条件を呑んだとしても永続的にその状況を放置する気など、始めからなかった。

いずれ軍備が整えば、ソルに対してさらに強固な条件の一般案を突き付け、ソルの暴発を誘う気であった。だが、当然のことといえばそれまでだが、メデイエータ国民政府から暫定案に対し強固な抗議が上がった。メデイエータにしてみれば、短期間であろうとオリザニアによるソル軍駐留が認められてしまえば、支持基盤の危うい国民政府など共産政府とソルの傀儡である共和国政府に揉み潰されてしまう。

公使の発言は、デルの説明など耳に入っていないかのような、ヒステリックなものだった。

サピエントを始めとしたメデイエータ以外の国は、代表者らが本国から何ら訓令を受けて来ているわけではない。

あくまでもデルに呼び出され、突然大幅な譲歩を含んだ暫定案を見せられたに過ぎない。ヒステリックに喚き散らすメデイエータ国民政府公使を後目に、オリザニアにすべての責任があることや、暫

定案による妥結が見られた場合の損害について、大使には責任がないことを本国に証明するようデルに求めた。さらには、戦争になった時はオリザニアが軍事行動を準備し、全地域の防衛に指導的役割を担うことを暗に期待していることが、言葉の端々から滲み出ていた。

デルは、各国の他人任せとしか思えない不誠実な態度に、失望すると同時に呆れていた。

メデイエータ公使は、ベロクロン大岩盤にソル軍が残留することに絶対反対だった。

デルは、当初ゴール植民地へのソル軍駐量兵力を二万五〇〇〇まで認めるとしていた案を五〇〇〇に減らし、メデイエータ駐留軍も同様に五〇〇〇まで減らす案を提示した。いきなり全面撤退などさせてしまえば、メデイエータ在留ソル人の安全が確保できない。ソルに対して怨み骨髄に徹した国民政府支持者に、惨殺されかねなかった。もちろん、ソル軍の全面撤退を求める際には、在留ソル人の引き上げを同時に求めることになるが、今これをしてしまえばソルが交渉を諦めてしまう可能性が高い。

時間稼ぎのためといくら説明しても、メデイエータ公使は折れる気配を見せなかった。

会議が紛糾し、暫時休憩の後も、メデイエータ公使は執拗に抗議を続けた。

デルが、最長で三ヶ月間ソルを平和路線に縛り付けることは五ヶ国にとって利益であり、その間さらにソルへの対処を整える時間を稼げる利点があると主張したことで、参列した各国も納得したかに見えた。しかし、それでもメデイエータは執拗に暫定案に反対した。一時的にせよオリザニアがソルと暫定協定を締結しようとしたことを知った国民政府首相は、なりふり構わぬ抗議を行ったのだった。

さらに翌二五日には、デルのもとへ共和国政府首相の工作によって動かされたサピエント王国首相から、ローザファシスカへ宛てた魔報が届けられた。

魔報には、協定の締結がメデイエータ国民政府を不利に追い込むと、サピエント人らしい遠回しな書き方で暫定案への批判が綴られていた。国民政府首相は、オリザニアの支援なしでソルに対抗することは不可能と理解していたため、ベロクロン大岩盤の南東に巨大な植民地を持つサピエント王国の首相に泣きついたのだった。サピエントにしても、ソル軍がゴール植民地に残ることは、自らの植民地を脅かされることであり、可能な限り排除しておきたかった。

メデイエータを踊らせてオリザニアの暫定案を潰せるなら、それに越したことはないのだった。

ついに、デルは暫定案の提示を諦めざるを得なくなった。

そして、翌二六日の早朝、突然ローザファシスカから一般案の提示が指示された。

ローザファシスカも、デル本人も、ソルがこの一般案を飲むなど、最初から考えてもいなかった。交渉の引き延ばしを指示していたローザファシスカが、突然一般案の提示を認めた裏には、サピエント首相からの魔報もあったが、この日届けられた一通の報告があった。まだ執務開始には随分と時間のある朝食前に、騎兵軍参謀長から上げられた報告だった。

それは、ソル軍の船舶がネグリットオアシス群を目指して南下中というものだった。

その報告を聞いたローザファシスカは、即座にソルの背信行為と断定した。交渉を続けつつ、いつでも軍事行動を起こせる準備を進めていると、ローザファシスカは判断した。交渉はソルにとっての

時間稼ぎであり、兵力の配置が整い次第交渉を打ち切りネグリットに攻撃を仕掛けると断じたが、その時点でローザファシスカたちが取っている行動となんら変わりはない。

だが、ローザファシスカはソルの背信行為に激怒し、半ば開戦覚悟で一般案の提示を決意したのだった。

しかし、これはソルの輸送船団であり、ゴール植民地へ回送するだけのものだった。

この情報は、ソル軍の特別な移動を伝えるものではなかったが、それまでの過程でローザファシスカはソルへ不信を高めており、やや感情的に譲歩の姿勢を放棄した。三国同盟の立役者クリス大使の派遣が、思わぬ影響を与えていたのだった。

二六日の午後五時、ノム、クリスの両大使が国務省に呼び出された。

緊張の面持ちで応接セットに身を沈めたふたりの前に、無表情で封書を携えたデルが姿を現したとき、ノムは嫌な予感に捕らわれた。形どおりの挨拶を交わし、ふたりは腰を下ろそうとしたが、デルは着席を勧めない。テーブルを挟んで向き合ったままだ。

気まずい沈黙が流れ、クリスがそれを打開すべく口を開こうとしたとき、デルは手にしていた封書をノムに差し出した。

「大使、どうぞご着席を。」

立ったままで、文書を読むことはできませんからな」

そう言っただルはソファーに身を沈め、目を閉じた。

「国務長官、どういうことでしょうか？」

クリスが大使に対する態度ではないと抗議しようとしたが、デルの双眸は固く閉じられたままだ。

さらに言い募ろうとするクリスをノムが抑えて着席し、封書を開けて文書に目を通し始めた。

一枚目を読み終えたノムの表情が強張り、クリスにそれを渡してから二枚目に目を通す。

そこには、これまでの交渉をまったくの無にする、驚愕の内容が記されていた。

まず口述書では、ソルが提示した乙案を、法と正義に基づく平和確保に寄与せずと正式に拒絶していた。

そして、本体の部分は極秘・試案にして拘束力なしと書かれ、『オリザニア共和国及びソル皇国間協定の基礎概略』と題した二項から成る文書であった。

第一項は以前からオリザニアが主張していた四原則を繰り返したものであったが、第二項の内容が問題だった。

一、オリザニア共和国政府及びソル皇国政府はサピエント王国、ティスチ王国、メディエータ共和国、ロス共和国、シラム王国及びオリザニア共和国の間にと共に多边的不可侵条約を締結する。

二、両国政府はオリザニア、サピエント、メディエータ、ソル、ティスチ及びシラム政府間にゴール植民地の領土主権尊重に関する協定を締結する。

三、ソルはメディエータ及びゴール植民地より一切の兵力及び警察力を撤退させる。

四、ソル・オリザニア両国はメディエータ国民政府以外の如何なる政権をも軍事的、政治的、経済的に支援しない。

五、ソル・オリザニア両国は外国租界及び居留地内およびこれに関連せる諸権益をも含むメディエータにある一切の治外法権を放棄するものとする。



- 六、ソル・オリザニア両国は互恵的最恵国待遇及び通商障壁引き下げを基本とする新通商条約締結の交渉に入る。
- 七、ソル・オリザニア両国は相互に資産凍結令を廃止する。
- 八、両国通貨の為替安定につき協議する。
- 九、両国政府が第三国と結んだ如何なる協定も本協定の目的即ち大東砂海全地域の平和と矛盾するが如く解釈されてはならない。
- 十、両国政府は他の諸政府をして本協定に定められある基本的な政治的及び経済的諸原則を遵守し且つ之を實際に適用せしむる為其の影響力を行使するものとする。

ふたりの大使は身じろぎもせず文書を食い入るように見詰めている。

クリスが最後の文書に目を通した後、ふたりの表情は死人のそれと同じように見えた。

「長官、これはいったい？」

貴国は、我が国と国交を断絶、いえ、戦争を行おうということでしょうか？」

やっこの思いでノムが言葉を押し出した。

「大使、誤解されては困ります。

これは戦争を避けるための提案です。

お読みいただいたとおり、試案であり、法的拘束力は持ちませんが、我が国はいずれこの案に添った正式な提案をさせていただきますことになりました。

その前に貴国内でのご意見を調整していただくべく、本日はお越しいただきました」

デルの言葉はノムに対してなんら力のある反駁になっていない。文書の内容に対しての説明をすることもなく、ほとんど問答無用

という雰囲気であり、それは投げやりにも見える態度に表れていた。

デルとの会談を終えたふたりの大使は、とにもかくにも手渡された文書の内容を、ソル政府に魔報で伝えた。

今までの交渉を根底から覆す内容に、閣僚は激昂した。デル文書は、開国以来嘗々とベロクロン大岩盤に築き上げてきた権益や、それまでのソルの対外政策を全否定する内容だと受け止めたのだ。ソル政府がデル文書を受け取ったのは一月二七日になってからであり、交渉の期限切れは目の前に迫っていた。

その内容はあまりに苛烈であり、この時期にいきなり変節したことで、誰もがこれは最後通牒であると受け取ったのも無理もないことだった。

デル文書の中でも特に問題だったのが、第二項の三、四の要求だった。

何よりも、ゴール植民地はともかく、全メデイエータよりの完全撤兵は許容できることではない。在留ソル人保護に必要な警察力としての駐兵さえも認めておらず、それは全在留ソル人居留民の追放を意味している。そして『全メデイエータ』というのが、フェクタム帝国を含むかどうかが重要な問題だった。

これについて、デル自身はノム、クリス両大使との会談の際には明言していない。しかし、ソル政府はフェクタム帝国も含まれると解釈した。四の要求にある『メデイエータ国民政府以外の如何なる政権』が、フェクタム帝国政府も指していると考えるのが自然だからだ。

メデイエータ国民政府とオリザニアが繋がっている以上、フェクタム帝国をそのままにするはずはない。

だが、当初は一般案でも、フェクタム帝国からの撤兵が明確に除外されていた。

ソル政府のとるべき措置として、すべての兵力を『フェクタム帝国を除く』メデイエータ共和国及びゴール植民地より撤収することとあつたのだ。しかし、ソルに提示された一般案からは、『フェクタム帝国を除く』という部分がそっくり削られていた。少なくともフェクタム帝国が保障されていたならば、ソル政府はこれを最後通牒とは受け止めなかつたかもしれない。

しかし、現実にはこの一文は削除されている。

これは暫定案に対するメデイエータ国民政府に配慮したことも理由のひとつだが、この一文を削除することはデル文書をより強硬な性格に変えるためだ。そして誤解を招きやすい文書でありながら、デルは一切説明をしなかつた。

これは、ソルがデル文書を最後通牒と解釈させるために、わざとなんの説明もしなかつたのだつた。

さらに『メデイエータ国民政府以外の如何なる政権をも軍事的、政治的、経済的に支援しない』ということは、国民政府への謝罪に等しい。メデイエータ側の侮ソル姿勢から発生したメデイエータ事変であるにも拘わらず、なぜソルが折れなくてはならないのか。もちろん、メデイエータ事変のきつかけは駐メデイエータソル騎兵軍の謀略なのだが、公式に認めるなどできるはずもない。そして、もしソルが謝罪する形で国民政府のみを承認すれば、親ソル共和国政府を否定するだけでなく、謀略が暴かれることになる。そのような事態になつてしまつたら、ソルがメデイエータ市場に食い込む余地などは完全に吹き飛ぶ。

ソル政府は、デル文書を最後通牒と判断した。

ソル政府の混乱が、皇国国民に知られることは一切なかった。

情報局による情報統制が敷かれ、新聞は自由な記事を書くことができなくなっていたが、それ以前にテル文書については存在すら明かされていない。万が一、この文書の存在が国民に知られてしまつたら、ただでさえ過熱気味になっている反オリザニアの機運が一気に爆発し、開戦を望む声が燎原の炎のごとく広がることは容易に予想できたからだ。そのようなことになつてしまえば、熱しやすいソル人気質が、どのような事態を引き起こすか解つたものではない。

甲案提示以来、政府は対オリザニア交渉の情報を、一切秘匿していた。

ソル・オリザニア交渉の行く末に不安を感じた人々は、特別高等警察や憲兵隊の目を逃れるようにしてその現状に付いて予想を口にした。

これまでの報道や、日に日に苦しくなる暮らし向きから、ほとんどの人々は交渉の難航を悟っていた。中には交渉は既に決裂し、ソル軍は臨戦態勢に入っているという発言をする者もいる。特に第一、第二、第五航空戦隊が浅海面雷撃訓練を行つていたキンコー湾や、機動部隊の水上打撃部隊が艦隊行動訓練を行ったユーメイ湾周辺の人々にそのような発言が見られていた。超低空飛行で民家をかすめ、湾内で雷撃訓練を行うなど、いずれかの軍港を攻撃するためのものとして考えられない。そうでなくとも日常の補給以上の物資が埠頭に山積みされ、あつというに積み込んだかと思うと忽然と姿を消した多くの艦艇は、軍事行動を起こすことを容易に想像させた。

だが、そのような発言をした者は数日以内に姿を消し、さらに数日後再び姿を現したときには異様なまでに憔悴し、二度と開戦を匂わせるような発言をしなくなっていた。

特別高等警察は、人々の間に張り巡らせた情報網から、ソルにとって不都合な発言をした者を瞬時に見つけ出し、片っ端から連行していた。

普段から反ソル思想の持ち主や、共産主義者、親メディーエータやオリザニアの立場を取る者たちを狩り出すことを使命とし、ときには強引な捜査や言い掛かりに等しい罪状で一般人まで連行している特高は、多くの人々から恐れられ、蛇蝎のように嫌われていた。そのような特高に連行された不用意な発言をした者は、その発言の根拠となった情報源を執拗に問い詰められ、数日に亘る尋問の後、想像上の発言であることを厳しく叱責されて、ようやく解放されたのだった。

本来の摘発対象が巧妙に姿を隠し始め、検挙率が下がっていた特高警察官たちは、八つ当たりとストレス発散のために、不用意な発言をした者を狩り続けていた。

「俺、ちよつと村に帰るわ。」

二、三日で帰ってくる」

専門技術学校からの帰り道、ガルはフィズに言った。

「どうしたんだよ、急に。」

ああ、幼馴染みに会いたかったか？

でも、いいのか？

砂海軍さんの許婚なんだろ？

横恋慕がバレたら、砂海に沈められちまうぞ」

フィズがからかうように答える。

先日、チエルが疑われかねないと焚きつけた張本人だが、そのことなどすっかり忘れている。

「失礼なヤツだな、誰が横恋慕か。  
それに、お前だぞ、チエルが心配だつて言ったのは」  
なぜチエルに対する恋心がバレたのか、ガルは軽く挙動不審にな  
りながら言い返す。

「そうだったか。

忘れてた。

そう言えば、そんなことも言ったっけ。

サボりがバレたら、えらいことになるぜ」

あっけらかんとフィズが答える。

本気で忘れていたらしい。

「一回くらい病欠でも大丈夫だろ。

教授にはそう言っておいてくれよ」

そう言くとガルはフィズと分かれて下宿への道を歩き出した。

「おいおい、俺が言いに行くのかよ。

どうすんだ、様子見てこいって言われたら？」

違う下宿に帰るフィズが、ガルの背中に声を掛けた。

「死に掛けていますとでも言っておいてくれ。

任せませ。

恩に着るからさあ。

帰ってきたら、飯くらい奢らせてもらうよ」

振り返ってガルはそう言いながら手を振り、フィズに背を向けた。

下宿に戻ったガルは、女将に数日村に帰ることを告げ、急いで身  
支度を整えると帝都駅へと歩き出した。

今から帝都を浮遊車で出ても途中で足止めになるが、一刻も早く

村に戻りたいガルは途中の駅で夜明かしするつもりでいた。

どこか暗い表情で道を行く人々とすれ違い、追い越しながら、ガルは汗をかきながら帝都駅へと急いでいた。

## 第20話 前夜

オリザニア共和国国務長官デルが、ソル皇国の駐オリザニア大使ノムとクリスのふたりに事実上の最後通牒を突きつけたとき、ナンクウ機動部隊はタンカン湾を出航していた。

一月二三日に、浅海面航空砂雷を積み込んだ『ブリッツ・ブロット』が到着し、他の空母に分配された。その間も最後の物資積み込みが行われ、艦内の空所を満たしていく。未だ行く先を示す命令は下っていないが、間違いなく演習ではなく実戦に赴くことは明白だ。艦内の各所に積み上げられた魔鉱石の梱包や保存食の山は、与えられた使命を果たすまで皇国に戻らないという、強烈な意志を感じさせている。やがて、すべての準備が完了したとき、機動部隊の各艦乗組員は、もう後戻りができない征途につくことを覚悟した。

出港直後から嚴重な魔報封鎖が敷かれ、外部との連絡は魔道放送以外一切絶たれていた。

タンカン湾が遠ざかり、視界から消えた辺りで、各艦の艦長や戦隊司令、機動部隊司令長官の声が、高声放送に乗って艦内に流れる。乗組員たちは、この航海についての訓令を出航に際して聞いていなかったため、まだ自分たちがどこへ向かっているのかさえ知らない。今までにこのようなことは一度もなく、少なくとも次の寄港地くらいは知らされていた。倉庫や燃料庫、格納庫はおろか、通路にまで積み上げられた物資の存在とあいまって、何か途方もないことに向かっていることだけは、臆気ながら解ってはいる。

高声放送は、乗組員たちすべてが待ち望んでいるものだった。

「現在、遠くオリザニアでは、大使によるソル・オリザニア交渉が続けられている。」



オリザニアは強硬な態度で、我が皇国に大幅な譲歩を求めてきた。皇国は、平和を望む。

決して戦争を望むものではない。

しかし、不幸にして交渉が決裂すれば」

第二航空戦隊司令オーキキ少将の声が、二航戦旗艦空母『デットン』の艦内に響く。

一旦言葉を切り、全将兵に次の言葉を予想させる猶予を与えた。

「本艦隊は、ハトーに在泊するオリザニア大東砂海艦隊を討つ。

史上初の長征となる壮挙であり、航空機が戦艦に勝ることを証明するための快挙である。

諸子が実力の涵養に努めたのも、ひとえにこのためである。

緊禪一番、各員が多なる戦果を挙げると、司令官は確信する。

戦場においては混戦となり、信号も届かない場面もあるう。

その時は躊躇無く敵に向かって猛進撃すべし。

それが司令官の意図に沿うものである」

息つく間もなくオーキキは訓示を吐き出すと、高声放送のマイクを置いた。

一瞬の静寂の後、艦内を大歓声が支配する。

今や戦意は天を衝かんばかりに高揚した。厳しく苦しい、時には殉職者まで出した訓練は、ひとえにこの壮挙のためだ。艦隊は巨大な弓であり、航空機とパイロットたちは無数に撃ち出される火矢だ。理不尽にソルの行く手を阻むオリザニアを、その破壊を司る大槌になぞらえられる大東砂海艦隊を討ち沈め、大東砂海に平和をもたらす巨大な力だ。

誰もが征途の成功を、敵艦の撃滅を誓い合っていた。

「ついに、やるんだね」

搭乗員待機所で、艦内の熱狂から逃れてきたルックウが、エルミに話しかけた。

「うん。」

とつとつ、始まるんだ。

本当に始まつちゃうんだね」

僅かに肩を震わせながら、エルミが答える。

「あ、キミたちここにいたんだ。

部屋にいないからどこに行つたのかと思つたよ。

ガンルームにもいないし。

探しちゃつたじゃないか。

あれ、エルミ、震えてるの?」

待機所に飛び込んできたファルがエルミをからかう。

「武者震いつてやつよ、ファル。

ファルこそ大丈夫なの?

声が震えてるよ?」

自身の恐怖心を見抜かれたかと焦つたエルミは、何とか言い掛かりに等しい切り返して取り繕う。

「何言つてんだい、ボクがそんな……」

ファルは言い返そうとするが、思わず言葉を詰まらせた。

自分では武者震いだと思ひこんでいた震えが、恐怖から来るものと気付いてしまったのだった。

「みんな、怖いんだよ。

エンザ中尉みたいに、ベロクロンで戦ってきた人たちみたいに、誰もが鋼鉄の神経を持つてるんじゃないんだよ。

いいんじゃないかなあ、今は震えていても」

ルックウも僅かに語尾を震わせながら、ふたりに言った。

ソル・オリザニア交渉の結果次第で、機動部隊は帰投する可能性があるとはいえ、決裂を想定したからこそ出撃している。

遠くない未来に、誰かが命を落とすことは確実だった。それが自分なのか、苦楽を共にした誰かになるのか、それはまだ判らない。だが、その未来を見てしまった今、この長征が初陣となるエルミたちは、言い知れぬ恐怖に襲われていた。ルックウは気丈に振る舞おうとしているが、その目からは涙が溢れている。やがて、三人は声を殺して泣き始めた。

同じような光景が、機動部隊全艦の新任少尉の士官私室や搭乗員待機所で見られていた。

第八戦隊旗艦の重巡洋艦『ドラコ』でも、同様の熱狂が渦を巻いている。

レグルはタンカン湾に入港したときの驚きを、まるでついさっきのことのように思い出していた。

見慣れた二航戦だけでなく、一航戦、五航戦が勢揃いしていた。ソルが保有する制式空母のすべてが、タンカン湾に舳先を並べていた。ユーメイ湾で行った艦隊行動訓練の意味が、そのとき理解できたのだった。

エルミと同じ艦隊に所属できたことは心強いが、これから何が起きるのか、レグルはルカとじゃれ合っていたときの予想を思い出し、慄然とした。

熱狂から身を冷まそうと最上甲板に上がり、何の気なしに後甲板に歩いていたらレグルの耳に、啾り泣きが聞こえてきた。

『ドラコ』が搭載する砂上偵察機の搭乗員待機所から、その泣き

声は聞こえてきた。レグルは、聞かなかったことにして通り過ぎるか、様子を見に行くか僅かの間悩んだが、思い切って見に行くことにした。

「どうした？」

待機所には、砂偵パイロットのリンが、ひとりで泣いていた。

「あ、レグル。

怖い。

戦争が。

怖い。

私、偵察も着弾観測も怖い。

崩れ落ちそうな身体をなんとか支え、リンが言った。

「どうしたんだよ、リン？」

お前らしくな

「怖い！ 怖い！ 怖い！ 怖い！ 怖い！ 怖い！

怖い！」

レグルの言葉を遮り、リンが叫んだ。

「落ち着けよ、リン。

俺だって怖いさ」

レグルはなんとか宥めようとする。

「弾が飛んでくるんだよ？」

私を殺そうとして、弾が飛んでくるんだよ？

訓練じゃ絶対になかった、弾が、私を、殺しに、飛んで、くるの。

逃げて、敵の、飛行機は、追いかけて、くるんだよ。

怖いよ

リンが泣き崩れた。

妹に似た名前を持つ、このどこかあどけなさを残す女性に、レグルは何ともいえない親近感を抱いている。

だからというわけではないが、このまま放っておくことができない。

しかし、リンの恐怖をレグルは理解できない。レグルの配置は、艦底近くの分厚い装甲に包まれたヴァイタルパートの奥にある、主砲発令所だ。戦艦の主砲弾が直撃でもしない限り、いきなり死ぬようなことはない。もっとも、敵弾が弾薬庫を直撃し、『ドラコ』が轟沈でもすれば逃げる間もなく艦と運命を共にすることになるのだが。

それに対してリンは、速度の遅い砂上偵察機のパイロットだ。

偵察任務の途中で敵戦闘機に出会ってしまえば、とても逃げきれるものではない。一度撃ち出してしまえば途中で目標を追尾できない砲弾と違い、いつまでも執拗に追い続けることができる航空機が相手だ。

着弾観測も、敵艦隊の頭上に張り付いていなければならない。

制空権を味方が握ったとしても、明確な殺意を持って対空砲かが襲い続ける。着弾観測機の有無で、命中率に大きな変動がある以上、敵が着弾観測機を放置しておくはずがない。砲術に比べ、圧倒的に戦闘行動や死と隣り合わせる時間が長い。

撃ち落とされなくても、燃料が切れたらそれまでだ。『ドラコ』が戦闘行動中に、砂上に舞い降りた砂偵を収容している余裕など、あるはずもない。

レグルは、泣きじゃくるリンの髪を、優しく撫でることしかできなかった。

一月二七日以来、政府と軍部の首脳陣で構成された大本営連絡会議では、ソル文書について激論が交わされていた。

その結果、一月一日、デル文書はオリザニアからソルに対する『最後通告』であり、自存自衛のため開戦せざるを得ずとの結論を出すに至った。外交による解決に執念を燃やしていた外相も、ソル側が身を切る思いで提示した乙案が拒否され、デル文書突きつけられたことで、オリザニアに交渉の余地なしと悟ることになったのだった。

「総理、自分は目もくらむばかりの失望に撃たれました」

外相の落胆を隠せない言葉に、一貫して避戦の立場を取っていたジヨウエイも力なく頷くだけだ。

「この文書は、皇国に対して全面的屈服か戦争かを強要する以上の意義があります。

即ち、皇国に対する挑戦状を突きつけた、と見て差し支えないようです。

少なくともタイムリミットのない最後通牒と云うべきは当然のことと考えます」

外相は続けた。

大本営連絡会議の構成員たちは、寂として声もなかった

「オリザニアは従来の交渉経緯と一致点を全て無視し、最後通牒を突きつけてきたのです。

我々は、オリザニアは、明らかに平和解決への望みも意思も持っておりません。

デル文書は、平和の代価として皇国がオリザニアの立場に全面降伏することを要求するものであることは、我々に明らかです。

皇国は、今や長年の犠牲の結果を全て放棄するばかりか、極東の大国たる国際的地位を棄てることを求められたのです。

これは国家的自殺に等しく、この挑戦に対抗し、自らを護る唯一の残された途は戦争しかない、私は考えます」

戦争という単語を口にするとき、外相は血涙滴らんばかりに無念そうな表情になった。

このとき、外相はメデイエータ国民政府の暗号を解読することでオリザニア側でソルの乙案よりも緩やかな暫定協定案が検討されていることを知っていた。

もし、その案が提示されていたらと思うと、外相の失望はそうしたものも合わせたものだった。

デル文書の前段には『極秘、試案にして拘束力なし』との記述があり、デル文書は試案であることが明記されている。

しかし、外務省は『試案にして法的拘束力無し』の部分削除して枢密院に提出していた。もし、削除などせず、そのまま枢密院に提出されていたら、ここまで一気に開戦論に傾かなかったかもしれない。あくまで試案であり、交渉の叩き台でしかなかったはずだからだ。

だが、政府は交渉のタイムリミットを一二月一日と切っていた。

さらに、ハトー攻撃のための機動部隊は、既にタンカン湾を出撃し、一路ハトーへと進撃している。

これを呼び戻すことは、容易い。もちろん内地に戻った将兵には、厳重な箝口令を敷き、厳しい秘匿義務を課すが、万単位に及ぶ口の戸口に板は立てられない。かならず、スパイは感知するだろう。

交渉を進めつつ、背後に短剣を隠していたことが知れてしまえば、信賴関係を築くなど夢のまた夢だ。

『試案にして法的拘束力無し』だったデル文書が、公文書に変更されることは、子供にでも解る。

乙案以上の譲歩を示すなど、どう考えても無理だった。

もし、そのような真似をしようものなら、軍部、特に騎兵軍がクーデターを起こしかねない。そして、万が一にも庶民にそれが知れたら、間違いなく暴動が起きる。

フェクタムに注ぎ込んだ戦費が、すべて無駄になることを許容できないばかりでなく、一五万の英霊に申し訳が立たない。軍部の詭弁だけではなく、実際に家族を失った者たちの心の叫びだ。

愛する者を、父を、兄を、弟を、恋人を失った者たちの、心の叫びだ。父や、兄や、弟、恋人の死が無駄死にであるなど、誰が認められようか。

クーデターは、今度こそ支持されてしまう。

それが解っているから、外務省は『試案にして法的拘束力無し』の文言を削ってしまった。

オリザニア政府も、まさかこの案にソルが乗るまいと確信したからこそ、デルに一般案を叩き付けさせたのだった。フェクタムはソルの生命線であり、常に南下を狙うロスへの防壁だ。三六年前のソル・ロス戦争後にロスから譲渡されたフェクタム浮遊路線社は、浮遊路線事業以外にも多くの事業を展開しており、そこから上がる巨大な収益はソルにとって欠かせないものだった。そして、共産主義への防壁としても、フェクタムはなくてはならない存在だ。

これを手放せという要求は、ソルに滅びろということ同義だった。

一二月一日の大本営連絡会議に引き続き行われた御前会議でも、当然この問題は取り上げられた。

「メデイエータという字句の中にはフェクタム帝国も含む意味なのか？」

枢密院議長が質問した。



「もともと四月一六日のオリザニアからの提案のなかにフェクタム帝国を承認するということがありました。

ですので、メデイエータにはこれを含まぬわけです。

ですが、話が今度のように逆転して国民政権を唯一の政権と認めて、共和国政権を潰すというように進んできたのです。

ことから考えますと、前言を否認するかも知れぬと思います」

外相は、四月の幻となったソル・オリザニア了解案、もともとこれはオリザニアの正式な提案ではないのだが、これを例にとって答えた。

軍部もまた、メデイエータにフェクタムが含まれると解釈しており、最早戦争しかないと考えていた。

ソルとしては、フェクタム帝国の独立以来、メデイエータの領土ではないと主張してきた。

しかし、なぜ政府や軍部はメデイエータの字句の中に、フェクタムが含まれると解釈したのか。オリザニアは、最初からフェクタム帝国を承認していない。オリザニアの認識では、フェクタムはメデイエータ共和国の一地方でしかない。そういった立場を取り続けていたオリザニア側の要求にある『メデイエータ』の中には、当然フェクタムも含まれるのだという先入観がソル政府と軍部が考えても不思議ではない。

完全なソル側の誤解なのだが、オリザニアとしてはこの誤解を狙っていた部分もあったのかもしれない。

「この文書は、半年を超える交渉経緯を全然無視した不当なるものです。

オリザニアは、終始その伝統的理念と原則に固執し、東ベロクロンの現実を見もみません。

しかも、自らは容易に実行できない諸原則を、皇国に強要せんと

するものです。

わが国幾多の譲歩にもかかわらず、七カ月余りの全交渉を通して当初の主張を一步も譲ろうともしていません。

デル文書は到底容認し難きもので、オリザニア側がこれを撤回せぬ限り、交渉を継続しても我が主張を貫徹することはほとんど不可能という他ありません」

外相は、デル文書への所見をそうまとめた。

続いてジヨウエイ首相を始めとした政府と統帥部の各責任者より、所管事項の説明が皇王になされた。その際、ジヨウエイ首相より、ノシユウ砂海軍令部総長に対して避戦への最後の望みを託した質問があった。

皇王の御前で戦争に勝つ見通しがないと言えば、改めて交渉延長の希望を見いだせるかもしれないと考えてのことだった。

「戦わざれば亡国と政府は判断されたが、戦うもまた亡国につながるやもしれません。

しかし、戦わずして国亡びた場合は魂まで失った真の亡国であります。

しかして、最後の一兵まで戦うことよってのみ、死中に活路を見出つるでありますよ。

戦つてよしんば勝たずとも、護国に徹したソル精神さえ残れば、我等の子孫は再三再起するでありますよ。

そして、いったん戦争と決定せられた場合、我等軍人はただただ大命一下戦いに赴くのみであります」

負ける可能性を口にしたノシユウ砂海軍令部総長だが、ついに勝つことは不可能と言いつ切ることはしなかった。

この間、アツキカーズ皇王は黙って説明を聞いていた。その目は堅く閉ざされ、開戦の決定を拒むかのようだった。

「オリザニアの態度は、皇国の忍ぶべからざるものです。

この上、手を尽くしても無駄になるだけでしよう。

したがって、開戦も致し方ありません」

ついに枢密院議長からも、開戦を決意する意見が表明され、出席者全員の賛成で開戦が決定された。

アッキカーズ皇王がそれを了承し、ソル皇国は戦争へと大きく舵を切った。

オリザニア政府がソルに最後通牒とも取れるデル文書を突きつけた背景には、ドラゴリー大岩盤戦争に参戦したくてもオリザニアの世論、国民が戦争を望んでいないということがあった。

オリザニアはサピエントの移民が独立を果たした国家であり、サピエントは独立戦争を戦った相手とはいえ、父祖の地でもある。ドラゴリー大岩盤での戦争が勃発し、心情としてはサピエントを救いたいと、国民の多くは思っている。現在も血族が暮らしている者も少ない数でなく、積極的な介入を求める声も皆無というわけではない。しかし、サピエントが危機的状况に陥っているとはいえ、オリザニア本土に実質的な損害はない。ドラゴリー大岩盤の戦争は多くの人々にとって、広大な大西砂海を挟んだ遠い世界でのできごとでしかなかった。

それだけに現実味が乏しく、オリザニア国内ではアレマニアに対する敵意が、たいして芽生えなかったのだった。

二三年前に終結したドラゴリー大岩盤全域を巻き込んだ戦争に参戦し、多くの戦死傷者を出したわりには見返りの少なかつた教訓から、オリザニアの世論は今回の戦争への参戦には消極的だった。

しかし、ローザファシス力大統領は、国家の未来のため、この戦争への参戦は不可欠と考えている。

ベロクロン大岩盤諸国のほとんどは、オリザニア建国のはるか前にドラゴリー大岩盤の列強諸国の植民地となり、宗主国に大きな利

益をもたらしていた。いまさらオリザニアが食い込む余地など、ほとんど残されていなかった。だからといって、力で奪い取るわけにもいかない。オリザニアはサピエントだけでなく、ドラゴリー大岩盤からの移民も多数いる。かつての母国に対し戦争を仕掛けることに、反対する者は多かった。

だが、この戦争で国土を蹂躪された宗主国が、植民地を維持していけるはずもない。情けない姿をさらけ出した宗主国に対し、反乱や独立戦争を仕掛ける植民地が出ないとも限らなかつた。

植民地をネグリット以外に持てなかつたオリザニアにとって、この戦争は大きなチャンスだった。

対アレマニア・ウイトルス戦争で指導的役割を果たし、勝利への牽引車の立場を得ることができれば、没落した列強諸国から植民地を合理的に奪い取ることができる。メデイエータの市場化ももちろん重要だが、それ以外の地域もオリザニアの経済圏に収めるためには、ドラゴリーの列強諸国に対し優位な立場が必要だ。

この戦争は、オリザニアが世界に君臨するための千載一遇のチャンスだと、ローザファシスカは認識していた。

しかし、戦争を望まない世論や国民に、戦争への介入を納得はさせるには、アレマニアに先に手を出させることが必要だった。

もちろん、アレマニアもオリザニアまで敵に回す危険は、充分すぎるほど理解している。そのためサピエントに武器や救援物資を運ぶオリザニアの輸送船団には、一切攻撃を仕掛けることはなかつた。敵国に救いの手を差し伸べる者は、明確な敵であるにも拘わらず、アレマニア潜砂艦部隊は隠忍自重していた。

わざわざオリザニアに、参戦の大義名分をくれてやる必要などないからだ。

九月四日、大西砂海でオリザニア駆逐艦がアレマニア潜砂艦の雷

撃を受け、ローザファシスカ大統領は『アレマニアは意図的に攻撃してきた』と発表した。

だが、不振に感じた上院砂海軍委員会が調査したところ、先に攻撃をしかけたのはオリザニア駆逐艦だったことが判明した。

さらに一〇月一七日にも、オリザニアの艦艇がアレマニア潜砂艦の攻撃を受け、ローザファシスカは『オリザニアは攻撃された』と発表した。前回は輸送船団の護衛だったが、今回はまったくアレマニアに対して不利益な行動を取っていない。

これを以て国内に反アリマニア熱が広まれば参戦が叶うとの目論見だったが、この事件もまた先に手を出したのがオリザニアということが判明した。

国民はローザファシスカこそ戦争を欲していると非難する結果となり、まったくの逆効果になってしまったのだった。

この状況を打開するには、いかにソルを挑発して戦争を起こさせ、国民に反ソル感情を抱かせるかというのが重要問題となっていた。

ソルと開戦すれば、三国軍事同盟を結んでいるアレマニアから、自動的に宣戦布告をしてくれるからだ。それゆえ、クリスが提案した三国同盟の死文化を、デルは蹴ったのだった。

しかし、国民を納得させ、世論を纏めるには、当然オリザニアがやむを得ず戦争に巻き込まれたという状況を演出せねばならない。

ソルをして最初の発砲者たらしめることは危険ではあったが、誰が侵略者であるかオリザニア国民に理解させ、完全な支持を得るには必要なことだった。そのために、多くの命が失われようと。

オリザニア政府は世論操作のためにソルを挑発し、暴発を誘うために誤解しやすいデル文書を叩き付けたのだった。

デル文書の提示は騎兵、砂海軍の長官にも知らされていなかった。騎兵軍長官が今後の方針を決めるため、デルに電話で問い合わせ

たとき、『事柄全体を打ち切ってしまった。ソルとの交渉は今や貴下たち軍の手中にある』と言われた。

騎兵軍長官は、デル文書がノムとクリスの両大使に渡されたとき、ローザファシスカ大統領と会見していた。その席では『我々にあまり危険を及ぼさずに、いかにしてソルを先制攻撃する立場に操縦すべきか』と彼は言っている。

だが、騎兵軍長官はあまりの急展開に思考が追いつかず、多数の犠牲者を想像して思わず受話器を落としそうになった。

そして、デル文書はオリザニア議会に対しても、充分説明されていない。

もし、議会に諮れば戦争を誘発するとして、大反対を受けることは明白だったからだ。デル文書は、オリザニア共和国の意志ではなく、ローザファシスカの独走によるものだった。

ローザファシスカは、デル文書を基礎にしてソルと交渉ができるとは考えていなかった。

ソルの外交暗号を解読していたことで交渉期限が一月末までであることを知っている。そして、交渉がまとまらない場合、一二月初めにはソルが交渉を打ち切るであろうこと、先制攻撃があることを予想していた。

そのため、デル文書がソル側に提示された日に、開戦に備え無制限潜砂艦作戦の指令が各地の潜砂艦部隊に対して出されている。だが、当面差し迫った危険のない騎兵軍には、何の情報提供もなかった。騎兵軍長官の驚愕は、このことに起因していたのだった。

ソル・オリザニア交渉は、デル文書を以てして終了したのだった。

「どうだった？」

お前の親友の許嫁は、無事だったかい？」  
茶化すような笑いを含んだ声で、フィズが聞いた。

「うるせえ

お前はいつもひと言余計なんだ。

普通に、幼馴染みは、と聞けばいいだろう」

ひと言余計はガルの方だ。

素直に答えていれば、さらに茶化されることはないのだった。

「まあ、その顔を見れば大丈夫なんだろうさ。

特高に目を付けられたら、お天道様の下は歩けないからな」

弛緩したようなガルの顔を見て、フィズはまた笑った。

「いろいろと迷惑をかけた。

お詫びというか、手間のお返しに今夜は奢らせてもらおう。

といっても、外食もままならない世の中だ。

俺の部屋に来いよ。

親友の親父さんが持たせてくれたものがあるんだ。

あと、幼馴染みからもな」

そう言ってガルは大きな鞆を軽く叩いた。

一月三〇日の安息日、夕刻になって帝都に戻ったガルは、魔報で到着時刻を知らせてあったフィズと帝都駅で落ち合っていた。

一月二八日の夕刻に帝都を出たガルは、村への乗り換えがある大きなターミナルで夜を明かし、二九日の昼前に村へ到着した。そこでチエルの無事を確認し、一晩実家に泊まってから、この日一番の浮遊車で村を出て、いつものように乗り継いで帝都へ戻っていた。村を出る際に、レグルの父から何とか運べるだけの米と、チエルからはひとりでは食べ切れそうもないほどの折り詰めを持たされていた。どちらも心配して来てくれたガルへの心尽くしであり、それ

を促してくれたフィズへの感謝の気持ちだった。

「それは、俺がもらったら申し訳ないだろ。

お前が大事に食えよ。

お前の親友の許嫁が作った、例の料理はいただいてみたいもんだが」

あっけらかんと笑いながらフィズは言った。

「あれなんぞを持たせるもんか。

独特の香りだぞ。

そこら中に宣伝してるようなもんだろ、あれは。

まあ、そう言うな。

米はともかく、腐らせちまったらそれこそ申し訳がない」

苦笑いとともにガルは答える。

メイエータ料理にはいくつか独特の香料や調味料があり、匂いを嗅げばすぐに判ってしまう。密閉容器などない世界でそのような香りを振りまいてあるいては、メイエータのスパイだと看板を背負っているのと同じことだ。

途中のターミナルで特高に連行され、二度と表に出ることはなかっただろう。

「そうか。

そういうことなら、是非に及ばず。

ありがたく、ご馳走になるうじやないか」

最初から断る気など欠片もなかったフィズが、芝居がかった言い回しで承諾した。

「お前の親友の許嫁、良い腕をしてるな。

別にメイエータ料理に拘らなくても、充分開業できるだろ、こ



れ」

折り詰めをつつき、茶碗酒をあおりながらフィズが言った。

「お前もいい加減しつこいな。」

許嫁、許嫁つて、それがどうしたつてんだ」

フィズの意図は分かり切っているが、うまい切り返しが思いつかないガルは、フィズの思い通りの反応しかできない。

ガルの下宿に戻ったふたりは、女将に挨拶をして米を分けた後、部屋に戻るなり包みを開けて飲み始めていた。外で飲むことができなくなった今、誰かの部屋に集まってはこうして憂さを晴らすばかりだった。

「詳しいことは聞かないけど、特高が引つ張ったやつを何事もなく返すつていうのも信じられんな」

フィズが心底よかった、といった表情で言った。

悪名高い特高が、連行した者を無事帰すことなど、砂漠が水で満たされるよりあり得ないという顔だった。

「ああ、何度か事情徴収はあったらしいが、何をされたつてわけじゃないそうだ。」

ただ、毎回朝から晩までつていうのが、大変だったらしいけどな。疑いも晴れたらしいし、料理は誤解されないように気を付けろつてさ」

やはり、こちらも安心したような表情のガルが言う。

もちろん、チェルやその父親から聞いたことすべてを、フィズに言っているわけではない。

「そうか、それは何よりだ。」

済まなかったな、余計なことを言つて、学校をさぼらせるようなことにしちまつて」

他人事ながらほっとしたのか、フィズが気の抜けたような顔になった。

「それは気にするな。」

思わぬ里帰りってことで、浮遊車代以上のことにはなつたし。

米はお前も持って帰ってくれよ」

ガルは鞆から米の包みを出して、フィズに渡す。

少なくとも一人暮らしが、しばらく食べられるくらいの量は持たされた。

賄いがあるとはいえ、食べ盛りの男にはそれだけでは量が圧倒的に足りない。警沢禁止令がさらにエスカレートして、外食の米飯販売禁止通達まで出ていた。軍の糧秣として優先的に流通させるためだが、全体の流通量が減少し、農村には米が余るといふ皮肉な現象を引き起こしていた。

ガルが持たされた米は、そういった余剰の一部だった。

「どうだい、いつそ砂海軍に志願して、許嫁の艦で士官食堂のコックとして雇ってもらえて勧めてみては？」

酔いが回り始め、フィズは楽しそうに絡み続ける。

「そんなこと……とっくに勧めてるわ。」

それより、どうだ、旨いだろっ、それ」

開き直ったガルが、笑いながらフィズに酒を注ぐ。

「ああ、旨い。」

酒によく合うな。

お前の親友の許婚は、彼の国の料理だけじゃないんだな」

煮物を口に入れ、茶碗酒で流し込んだフィズは、心底感心している。

幼い頃から宿の手伝いをしているとはいえ、まともに料理をするようになつてから数年でこの腕だ。重巡洋艦の艦長付きコックどころか、連合艦隊旗艦で司令長官付きのコックすら勤まるのではと思つていた。

「ああ、さすがだよなあ。

チエルの親父さんは。ソルの料理はもちろん、彼の国の料理どころか、ゴールだのアレマニアだの、何でもこいだ。

思うに、チエルは無理に修行に出なくてもいい気がするよ、俺は大笑いしながらガルが言う。

確かに火の魔鉱石を操る能力はチエルのほうが上だが、父の経験と技術は火力不足を補つて余りあるものがあつた。そして、メデイエータ料理には欠かせない大火力は、ソルを始めとした他国の料理には多少強すぎる。

メデイエータ料理に拘らなければ、チエルの父は一流どころの料理人といえる腕を持つていた。

「じゃあ、お前の、親友の、許婚の、料理はどうなんだ？」

別にチエルの手料理に拘るわけではないが、一杯食わされた気分のフィズは苦笑いと怒りが無い交ぜになつた顔で、わざとひと言ずつ区切りながら言つた。

「ああ、別に担ごうつてわけじゃない。

これだ。

これだけで食えば充分旨いが、親父さんのと比べちまうと、まだ一味足りないな。

いや、料理つてのは、本当に奥が深いぜ」

笑いを噛み殺しながらガルは答えた。

そう言いながら、ガルはチエルや自身の父から聞いた話を反芻していた。

息急ききって飛び込んできたガルを、チエルは目を丸くして迎えた。

宿にはメディエータ料理特有の香料が、その存在を主張している。その中でいつもと変わらぬ様子で立ち働くチエルとその父は、少し困ったような、慌てたような表情を見せた。だが、それは一瞬のこととで、ふたりはすぐに、いつもの穏やかな顔に戻っている。

自分が村に戻ることで、何か困ったことでもあるのか、ガルはふとそんな考えが浮かんでいた。

「どうしたの、ガル、そんなに慌てて？」

チエルがガルの急な帰郷に思い当たる節はない。

特高による取り調べについては、口止めされていたこともあるが、特に伝えておく必要を感じていなかった。魔報や手紙で知らせるようなことをすれば、かえってスパイに警戒を促す措置と取られかねない。ガルに無用の疑惑が向けられるような事態を、わざわざ招きたいとは思わなかった。

もし、ガルに疑惑の目が向けられずとも、ガルが騒ぎ出したり、レグルやエルミに知らせたりでもしたら、事態は一層ややこしくなるだけだからだ。

「いや、たいしたことじゃないんだけどさ」

チエルの普段と何も変わらない態度の中に、ガルは何ともいえない違和感を抱いた。

「学校はどうしたんだ、ガル坊？」

懐かしい呼び方で、チエルの父が声を掛けた。

「そうだよ、冬休みにしては、まだ早いんじゃない？」  
チエルはからかうような表情になるが、ガルにはそれが痛々しいほどわざとらしく見えた。

「親方が、大怪我して店をたたんだんだ。

だから、チエルもひよつとしたらつて思つて。

でも、何も無いみたいで良かったよ」

大声で特高は来なかったのかと叫びたい衝動をかるうじて抑え、ガルはゆっくりと言った。

もちろん、どこに特高の目が光っているか判らない。親方の怪我が特高の取り調べによるものだと、ここで言うわけにはいかなかった。

「うん、大丈夫だよ。

大丈夫。

心配しないでいいよ。

多分、それでだと思っけど、話を聞きには来たよ。

それだけだから、ね」

ガルがなぜ突然来たかの理由を悟り、チエルは安心させるように答える。

詳しい経緯をチエルは知らないが、親方が店をたたんだことは特高の取調官から伝え聞いていた。

修行の中断を余儀なくされて以来、チエルは表立ってメディーエータ料理を作ることや、宿の食事として客に出すことはなかった。だが、以前ガルが帰郷していた際に、ほぼ身内と行って言い相手という気の緩みもあつたか客のいる時間帯であるにも拘らず、ガルにだけ修行の成果を見せようとメディーエータの料理を出したことがあつた。当然、食堂は独特の香りに満たされたが、村の者たちには別段気にかかることではなかった。

しかし、折悪しく帝都からの客がチェックインに訪れ、その香りに気付いてしまった。

僅かに眉根を顰めた客に気付いたチエルは、何事もなかったよう対応していた。

ふたりの客も食堂に充満する独特の香りをあげつらうことも、特に何かを聞きまわるような真似もせず、翌朝機嫌よく出立して行った。しかし、このふたりが帝都に戻って軍務に復帰した後には何気なく交わした言葉が、特高が軍に潜り込ませていた密告者の耳に入ってしまったのだ。密告者はメディーエータ料理のことを聞くようなことはせず、ふたりの旅程を言葉巧みに聞きだし、僅かな調べ物だけでチエルの宿を特定していた。

その結果が、先日まで行われた取調べなのだが、チエルがその原因に気付くことはなかった。

チエルは、親方の線から自分が浮かんだのであることは想像していたが、辺鄙な村にメディーエータ共和国政府の手のものが潜伏などできるはずもないと考えていた。

それぞれが子供の頃からの顔見知りであり、個々の家族という単位は村という大家族の中に含まれるようなものだった。その中にスパイが潜伏するなど、どう考えても無理だった。知らない顔があれば誰もが警戒し、怪しい行動があればすぐに村中に伝わってしまう。排他性といってしまうえばそれまでだが、村という大家族の結びつきはそれほど強固なものだった。

「ならいいんだ。

ちよつと気になったんでね」

安心したような表情のガルから、ようやく緊張が抜けた。

チエルが怪我を負うようなことや、身体だけでなく心に深い傷を負っている様子もない。もしそうであれば、チエルが厨房に立つこ

とを父が許すはずがない。

「それにね、疑いが晴れた後は、メデイエータ料理を作っただけでいいって言われたんだよ。

やっぱり、レグルの信用って大きいんだね。

砂海軍少尉の名前を聞いた途端に、取調官さんの態度が変わっちゃったもん」

ガルは、満面の笑みをたたえたチエルの言葉に、僅かだが胸の奥を抉られたような気がした。

翌朝一番の浮遊車で村を発つガルは、両手に抱えきれないほどの荷物を持たされていた。

途中で食べる弁当だけでなく日持ちが効くように作られた折り詰め、レグルの父が作った米や野菜、そして自らの父から付けられた横っ面の腫れを抱えて、浮遊車の揺れに身を委ねている。

家に帰るなり、学業を放り出したことを咎められ父に殴り飛ばされたが、そのことに対する怒りはない。当然のことであり、ガルにしても少なからず負い目があった。だが、父の怒りはそれで終息し、久々に戻った息子に対し頼もしげな視線を送っている。最優先で行わなければならぬことを多少誤ったとはいえ、他人を気遣い、すぐに行動を起こせる積極性や、他者を思いやる優しさは叱りつけるべき対象ではない。

ガルを家に入れた父は、早く嫁を見つけて来いとガルをからかいながら酒の準備を妻に頼んでいた。

父は、チエルが連行されたこと、無事戻ってきたが、それ以降おっぴらにメデイエータ料理を作り始めたことに、大きな疑義を抱いていた。

大きな声ではいえないが、と前置きしてから、父はチエルが特高

に抱きこまれた可能性があると自身の考えを口にした。帝都や他のオアシスで、メデイエータ料理の店が片っ端から閉鎖している現状で、この村だけがメデイエータ料理を黙認されているということは、特高警官の裁量だと考えるほど父は世間知らずではない。もしくは、チエルの性格からすると、スパイをおびき寄せる餌になっていることにすら気付いていないかもしれないとも考えられた。

父は、ガルにこのことはチエルにはもちろん、誰にも言うてはならないと厳しく命じていた。

「まあ、今夜は飲もうぜ、フィズ。  
早くオリザニアとの交渉が纏まって、メデイエータ戦争が片付いて欲しいよな。」

こんなこそこそした世の中が終わって、堂々と酒を飲みたいぜ」  
ガルは一升瓶を傾け、フィズの茶碗に酒を注いだ。

「ああ。」

はやく、こんな世なのかは終わって欲しい。

俺もそう思っぜ」

茶碗の酒を一気に空けると、フィズは立ち上がった。

「どうした？」

今夜は泊まっていけよ」

ガルが怪訝な顔でフィズを引き止める。

「いや、明日の朝米を担いで学校へ行ったら拙かろう？  
残念だが、今日は帰る。  
もしかしたら、明日にでもオリザニアとの交渉が纏まるかもしれない。  
ない。」

そうしたら、また、ゆっくりと飲もうじゃないか、ガル」



引き止めるガルに言葉を投げかけ、フィズは米の包みを担いで部屋を出て行った。

国家が戦争への巨大な歯車を回し始めたことは、一切国民に知らされていない。

それどころか、ソル・オリザニア交渉の進捗状況も、砂海軍の期待を一身に背負った最新鋭戦艦が間もなく産声をあげることも、なにもかもが知らされていないかった。ドラゴリー大岩盤での戦況は、ほぼ正確な情報が伝えられているが、オリザニアに関する情報が庶民に知らされることはほとんどない。

アレマニアとウイトルスの快進撃が連日報じられ、オリザニアに関しては敵愾心を煽るような社説やコラムが掲載されていた。

情報局がすべての情報を抑えている以上、国民が政治の裏で動いていることを知る術はなかった。

それでも一部の国民、造船や物流に関わる者たちは、甲案がオリザニアに拒否された一月初旬以来、急激に軍関連の仕事量が増えたことで言い知れぬきな臭さを感じていた。外地へ送る糧秣の増加に始まり、人員の大移動による納品量や場所の激変といった変化は、開戦を想像させるには充分なものだ。もちろん、理由を聞いたところで答えが返ってくるはずもなく、世間話にでもすれば特高が扉を叩きかねない。

社会の変動は、不気味にうごめき始めていた。

一二月二日、外務省は、御前会議の決定を受け、大急ぎで対オリザニア通牒覚書の作成に入った。

いきなり戦争を仕掛けるのではなく、まずは通商交渉の打ち切りから始めなければ、不意打ちの誹りを受けかねない。もちろん、通商交渉を打ち切るということは、宣戦布告と同義であることは子供

にでもわかる道理だ。

砂海軍のハトール攻撃部隊は、ハトール現地時間二月七日、安息日の午前七時に攻撃に移る手はずになっていた。

同時に騎兵軍はサピエント植民地のマレーヤへの進駐を計画している。サピエントに対する宣戦布告はもともと予定にないが、マレーヤへの上陸はオリザニアに対しての不意打ちと同じことだ。オリザニアへの通商交渉打ち切りの通告と通牒覚書の手交は、ハトール攻撃の一時間前となるオリザニア首都時間二月七日ー〇時三〇分、ハトール時間で午前六時に行うことと決定した。

そして、作戦開始命令暗号『水泳大会開催二二〇八』が、この日の午後八時三〇分に発令された。

## 第21話 開戦

「参謀長、君はどう思うかね？」

私はエライことを引き受けてしまったよな気がしているんだ。

私がおう少し気を強くして、機動艦隊の指揮を断ればよかったと思いが……

果たして、上手くいくのか……」

開戦の暗号を受信して以来、ナンクウ機動部隊旗艦空母『コツヴ』の艦橋で何度目になるか分からない溜め息を、司令長官ナンクウ中将は漏らしていた。

双眼鏡を目に当て、砂嵐の向こうからいつ姿を現すか判らない船舶を、気迫で押し留めようとしているかのようなカリユウ参謀長とは、対照的な佇まいだ。

ナンクウ自身、航空についてはずぶの素人を自認している。

砂雷戦隊を率いて砲弾をかい潜り、敵主力艦に必殺の砂雷を叩き込むことに、その砂海軍人生を捧げてきた男だ。臆病とは対局にある指揮官であり、砂雷戦隊を率いる姿は颯爽とした快活さに溢れていた。

だが、タンカン湾出航以来、その快活さは失われている。その胸中には、砂雷の専門家に不似合いな役を押し付けられた、との思いが渦巻いていた。

空母六隻の集中運用などという前代未聞の艦隊行動の指揮だけでなく、完全な奇襲攻撃の実施、分単位で組み上げられた作戦計画の遂行と難題が山積みになっている。ハトー到着までに一隻でも他国の船舶に行き合えば、それだけで奇襲計画は瓦解する。強力な艦隊と陸上要塞が待ち受ける中に、パイロットたちを突入させなければならなくなるといふ重圧が、ナンクウから快活さを奪っていた。

航空の専門家たちに囲まれ、ひとり畑違いであることもナンクウ

のいたたまれなさに追い打ちをかけている。

「長官、もうここまでできているのです。

今更そんな意気地のないことでどうしますか。

戦は私とジツツに任せて、ひとつ大きく構えていただきた  
い」

これも何度目になるか判らない気休めを口にして、カリユウはナ  
ンクウに振り返った。

僅かに舌打ちが聞こえたような気がして、ナンクウはカリユウか  
ら視線を逸らす。

確かに指揮官としては、あるまじき振る舞いだ。自分も同じ立場  
に立てばそうするだろうと、ナンクウは思った。だが、ナンクウの  
卑屈ともいえる態度は、作戦の正否や是非だけでなく、カリユウた  
ちの振る舞いにも起因すること大だった。

航空主兵論者のカリユウやジツツは、常日頃から砂海軍の主流  
を成す大艦巨砲主義者とのそりが合わなかった。

航空機こそ次世代の主力と信じ、その運用の研究に力を注ぐこと  
は構わない。だが、そう信じるあまり、他を否定し、見下すように  
なつては、砂海軍の中で爪弾きになりかねなかった。

しかし、連合艦隊司令長官であるゴトムが、それを後押ししてい  
た。

しかし、それだけであれば、ナンクウも卑屈にはならない。

連合艦隊司令長官の後ろ盾を得たカリユウたちは、水上打撃部隊  
を小莫迦にしていた。

戦艦などたかだか二万メートルしか攻撃範囲がない。砂雷戦隊が  
敵艦に肉薄する前に、空母艦載機がきれいさっぱり砂葬してやる。  
そう公言してはばからなかった。彼らの中で空母以外の艦艇は、敵

航空機による攻撃からの盾くらいにしか認識していない。参謀長、航空甲参謀がそのような考えに凝り固まっていれば、他の参謀たちがそれに引きずられることは自然な流れだ。

航空主兵論者の牙城にひとり乗り込んだ砂雷屋は、孤独な戦いを強いられていた。

「おい、見てくれ！」

ソル人共は二月七日に何かやらかすぜ！」

オリザニア首都にある砂海軍暗号解析班のオフィスに、ひとりの中尉が素っ頓狂な叫びを上げた。

ソル皇国が発信する電文を片っ端から傍受し、手当たり次第に解析していた男が、その中で見つけたものだった。

ごく短い文章に、単純な数字の羅列。

おそらく短い文章は、翻訳しても意味を成さない。まったく異なる言葉を符丁にして、仮に『いただきます』なら開戦、『ごちそうさま』なら避戦と決めてあるに違いない。そしてこれに続く数字が日付を表していることに、疑いを挟む余地はない。二二 八がソルの標準時刻を元にした日付であれば、それはオリザニア標準時刻の二月七日を指している。まちががなく、ソルが軍事行動を起こす日付を全軍に伝達したものと、暗号解析班のスタッフ全員が確信した。

避戦であれば、日時を指定する必要はないからだ。

「どうして、こう、ソルの暗号は解りやすいんだ？」

「言葉そのものに日時まで含めた符丁を決められていたら、仮に開戦と判明しても、なあ？」

「他人事ながら、アドバイスのひとつもしてやりたいところだぜ」  
オフィスに詰めていたスタッフたちは、口々にソル暗号に対する

感想を言った。

「まあそう言うな、数年前までは手も足も出なかつたんだ。かなり優秀な暗号だと思っぜ、ソル砂海軍の暗号は」

この短文を解析した中尉がたしなめる。今のレベルに到達するまでの、膨大な時間を中尉は思い出していた。

「ということは、もうひとつ傍受した短文も、そういうことか」

「おそらく、騎兵軍の暗号で開戦を指示するものと見て間違いない」

「だが、どちらもどこに対して攻撃を仕掛けるかまでは解らん」

「それ以前に、こちらの短文はまるで解析の手がかりが掴めん」「まったくだ。」

しかし、何でソルは砂海軍と騎兵軍で違う暗号を使うんだ？

いくらどこの国でも騎兵と砂海が仲悪いとは言っても、これじゃ情報の共有化などできやしない。

互いに知られたくないことばかりなのか？」

スタッフたちは、自国の軍にも共通する問題点を言い合う。

「雑談はそこまでだ。」

ここは暗号を解析するためのオフィスであって、ソル軍の内情を分析する場ではない。

そのための材料を探し出すためのオフィスだ。

俺はこの材料を分析屋たちに持って行く。

諸君は引き続き、暗号の解析をしてくれたまえ」

中尉はそう言うと、文章の綴りを手にオフィスを出た。

閉めたドアの向こうでは、自分が戻るまで雑談は続くだろうと、中尉は考えている。

本来なら攻撃目標の特定を、死ぬ気で行わなければならない。引き続き粘り強く魔報を傍受し、暗号を解析する必要がある。

だが、それをそのままの字句で、暗号化するとはいえ魔報に乗せるとは思えない。間違はなく攻撃目標に向かってソル軍は進撃中のはずだが、自ら位置を暴露するようなまねをする莫迦はいない。

これだけの大仕事をしたんだ。今しばらくは息抜きもいいだろう。中尉はオフィスに戻る際に、人数分のアイスクリームをポケットマネーで買うことにした。

オリザニアの首都にあるソル皇国大使館には、ノム大使の応援としてクリスが特派大使として着任した時点で、両大使を含めて二十八人が勤務していた。

両大使以外の幹部は、ヨウ公使、館務を統括するテイ参事官の他、政務を担当するカツツ、条約関係を掌握するコートウ、情報担当のエイセイ、クリスの補佐として赴任してきたローシら四人の一等書記官とセイメイ魔道通信官がいた。その他に首都市内で独立していた騎兵軍と砂海軍の武官事務所の武官と武官補佐の六名が、ソル・オリザニア交渉決裂の事態を予測して九月に事務所を閉鎖して大使館に移っていた。

そして、オリザニア人の雇員がタイプスト三人と、日常の細々した雑事を担当する者や公用車の運転手など計八人いた。

一〇月一六日には、外務省から大使館全員に『帰国準備を始めよ』の訓令が出されている。

一〇月三〇日には公邸のソル人料理人夫婦が帰国のため解雇され、それからというもの大使の食事はソル人職員が調理することになっていた。それからひと月も経たない一一月二〇日には、『国交断絶の危機が迫れば、在外ソル人向け魔道放送の気象情報の最後に『東の風、雨』を二回繰り返し返す。それを聞いたら緊急態勢に入れ』との訓令も出されている。

状況の緊迫化は、武官事務所転入に続くこれら幾つもの『非常措置』によって、大使館員にも感知されているはずだった。

デル文書が出された一二月二六日以後、ソル・オリザニア間の緊張は極に達し、一二月一日にはエイセイ書記官ら六人に、急な出発と後任の補充発令がない異例の転勤命令が出された。

翌二日には、大使館にある暗号機三台の内二台を破壊せよとの訓令が出され、暗号機は粉微塵に砕かれて深夜の大使館脇を流れる大河に投棄された。

そして、一二月三日、遂に『東の風、雨』の魔道放送が流れた。

一年の掉尾を飾る月になり、人々の暮らしは慌ただしさを増している。いくら統制下とはいえ、新年際を自粛するほどには追い詰められてはいなかった。

いや、追い詰められているのだが、情報局による情報管制により、その事実が庶民に知られることがないだけだ。しかし、オリザニアから材料を輸入し、それを加工してオリザニアに販売していた会社から、次々に倒産、破産するものが増えている。

確実にソルの喉元は、締め上げられていた。

ガルが第二学期の期末試験のため登校すると、校内掲示板に自分の呼び出しが張り出されていることを発見した。

呼び出した者は、物理学の教授だ。厄介な相手に呼び出されたとガルは暗澹たる思いに捕らわれた。この教授は出席にうるさく、休んだ者を次の授業の際に徹底的に糾弾することで、ほとんどの学生から嫌われている。また、強烈な精神主義者でもあり、ソル・ロス戦争の帰趨を決めたソル砂海海戦における完全勝利の立役者へイハ



元帥と、二〇三高地攻略のマレ大将の信奉者でもあった。残念なことに、ヘイ八元帥の精神論を見事なまでに曲解していたが。

ヘイ八元帥は、軍縮条約締結に際し、軍艦の保有量に制限はあっても、訓練の量に制限はないと、砂海軍実戦部隊に安息日を返上するほどの猛訓練を課した。

訓練によって砲撃の命中率を上げ、砲数の少なさを補おうとしていた。その甲斐あって、ソル砂海軍の命中率は、オリザニア砂海軍の約三割増まで上昇したとのデータがある。もちろん砲撃に際する測的技術の向上もあるが、発射遅延装置の開発によるところも大だった。

かくして元帥は、百発百中の砲一門は、百発一中の砲百門に勝るといふ名言を残している。

言うまでもなく、これは純粋な能力の話だ。

もし、両者が戦えば、百発一中が一発目に来る可能性はゼロではない。百門中一門が当たればよい。百発一中が百門あれば、一門は当たる勘定だ。

あるとき、講義中に話が脱線し、この名言を得意げに語った際に、百発百中一門は勝利できないのではないかと、質問した学生がいた。教授は平然と、断じて行えば、鬼神も退く。弾は勇者を避ける、と切り返した。

学生は、物理学という精神とは無関係な事象の泰斗が、物理法則すら精神力で変えられるに類する発言をしたことに呆気に取られ、失望した。

ガルは帰郷のために、この教授の最後の講義を休んでいたのだが、まさか期末考査期間に呼び出されるとは思ってもみなかった。

「どういつ了見で講義を休んだか、納得のいく説明をしまえ」  
見下ろすような視線をガルに向け、物理学の教授は言った。  
研究室の応接セットのソファに、ほぼ仰向けに寝ているかのよう  
に座りついているため、どうしてもそうついう目つきになる。

「はい、講義を休んでしまったことは、まことに申し訳ありません  
でした。

急な発熱で立っていることもできず、床に伏せついているしかあり  
ませんでした」

休んだ事実は変えられないので、その点についてはガルも叱責は  
受け入れる。

「そんなことを聞いているんじゃない。

なぜ、出てこなかったか、と聞いているんだ。

熱ごとき、精神力でどうとでもなるもんだ。

砂海軍さんは安息日を返上して訓練してる。

熱がでた程度で訓練を休む軟弱など、いやしないんだ。

敢闘精神が足りない証拠だ！

申し訳ないとは思わんのか！」

顔を真っ赤にして教授は怒鳴り散らした。

相手が何を言っても、『そんなことを聞いているのではない』、  
の一言だ。

言葉を継げば、『言い訳をするな』、で突き放す。『弁解をする  
な』、『誠意を見せる』とたたみかける。

学生が言葉を失い、手を突いて謝るまで、それは繰り返される。

実際のところ、砂海軍では少しでも体調に異変がある場合、他の  
者に移さぬよう直ちに隔離だ。

たとえ、扁桃腺が腫れた程度の熱であってもだ。居住区から離さ  
れ、医務室かその近くにハンモックを釣って、軍医の監視下に入ら

なければならぬ。もちろん、重篤な伝染病であれば、即砂海軍病院行きだ。

健康管理は不断に心がけなければならないが、一旦かかった病気を精神力で治すことは不可能だ。具合の悪い者が、閉鎖空間である艦内や、軍政の中枢である省内を歩き回るなど、周囲に病気をまき散らしている利敵行為に等しい。

喉元までせり上がっていた言葉の嵐を、ガルは何とか飲み込んだ。代わりに出てきた言葉は、素直な謝罪だった。やはりさぼったことへの後ろめたさが、教授への反論を控えさせていた。

床に手を突き、深々と頭を下げるガルを見下ろし、満足げに教授は頷いた。

「大丈夫か、ガル？」

下宿の部屋にフィズが訪ねてきた。

「あ、ああ。

さぼったのは事実だしな。

本当に病気だったら、レグルとエルミから聞いた話をしてやったところだけど。

今回は、俺の方から折れないとダメだろ。

下手に逆らって、単位認定に支障が出たらたまったもんじゃない」「意外なほどすつきりとした顔で、ガルは屈辱的な仕打ちなどどこ吹く風といった態度だ。

「これで試験の結果が散々だったら、とんだお笑い草だな」「安心したようにフィズがからかう。

「そつだよ。

だから帰れ。

明日は、その物理学の試験だぞ。

満点とは行かなくても、甲判定の点は取らなきゃ、落とされかねん」

そう言うなり、ガルは部屋の扉を開けた。

「その通りだな。

お前の顔見て安心したよ。

それほど引きずってないみたいだな」

フィズは追い出されたにも拘わらず、大笑いしながら自分の下宿へと帰って行った。

「少尉、何もそんな油塗れになることはないと思いますが」

ほぼ同世代の若い整備兵が、困惑したような顔でエルミに言った。

「お邪魔でしたら控えますけど……」

何もすることがないって、こんなにつらいとは思わなかったんですよ」

七型艦攻の下から這い出したエルミが、済まそうな表情を作った。

「いいじゃないか。

いざというとき、構造を理解しているかどうかで生還できる可能性は格段に増えるんだぞ。

エルミ少尉、お好きだけ、いえ、ご納得されるまでどうぞ」

胡麻塩頭の整備班長が、若い整備兵を窘めつつ言った。

「はあ、決して邪魔だとか、そういうことではなくて、士官ともあろう方が我々兵と同じようにすることはないと思っただけです。

こちらに嫌はありません。

それどころか、機体をよく知っていたことができると思っています。

少尉、これでも私は少尉よりはこの機体についてよく知っているつもりです。

座学では習わないようなことも。

何か疑問に思われることがありましたら、何なりとご質問ください」

整備班長が良いと言えば、下っ端の整備兵が異を唱えることなどできるはずもない。

「ありがとうございます、班長。

すいません、もう少しやらせてくださいね」

ふたりに頭を下げ、エルミはまた機体の下に潜り込んで行った。

士官が下士官兵に頭を下げるなど、ふたりにとって天地がひっくり返るようなできごとだ。

メデイエータ戦線でベテランの下士官パイロットと小隊を組んだ新米士官が、下士官たちに空戦技術の教えを請うときでさえ、階級差と年齢差を越えて頭を下げた例など数えるほどしかかった。だが、エルミにとってふたりは先達であり、技術を学ぶ上での先生だ。それなりの礼を以って接することは、当たり前だと認識している。もちろん、階級差は意識しているが、整備班長との年齢差はそれ以上に意識してしまう。父よりも年上の人間に対して横柄な口を利くことは、エルミの常識にないことだった。

呆気にとられてふたりが固まる光景は、それを眺めていたファルの笑い声で終わりを告げた。

「ファル少尉、笑ってないで来て下さい。

先日いただいたご命令のとおり、やってみたんですが」

別の若い整備兵が笑い転げるファルに声を掛ける。

「あ、ごめん、ごめん。」

ちよつとした思い付きだったんだけどさ。

一応飛行長からもご許可はいただいているからね。

みんなが後で叱られるようなことはないと思うよ。」

ファルが答え、整備兵と共に爆弾庫へと歩き出した。

「ファル、どこへ行くの？」

艦底奥深くにある爆弾庫へ行く途中、手持ち無沙汰のルックウが声を掛けた。

「ちよつとした悪戯をやってもらったんだ。

ルックウも見に行くかい？」

ボクの思いつきなんだけどさ、飛行長もご許可くださつたし。」

少年のような悪戯っぽい表情を浮かべ、ファルが言った。

「どうですか、時間の遣り繰りが大変だったんですから」  
若い整備兵が胸を張る。

「すごい、すごい！」

完璧だね！

「これなら士気が上がること間違いないよ！」

ボクの考えていたとおりだよ。

ありがとう」

ファルが大喜びで叫び、整備兵に抱きついた。

整備兵が顔を真っ赤にして礼を言うが、日常で若い女性に抱きつかれるなどまずないためか、思い切り声が上がっている。

「何をやってるの、ファル！」

……ちよつと、なんで二五番だけなのよ。

気が利かないわね、ファルは。

八〇番にもやっていいか、飛行長に聞いてくる！」

そう言うなり、ルツクウは飛行長の私室へと駆けて行く。

やっと落ち着きを取り戻したファルと整備兵の前には、『対オリザニア第一撃』と白いペンキで書き込まれた二五〇キロ爆弾が並んでいた。

「お父さん、相談があるの。

ちよつといいかな？」

どこか困ったような、だが何か決意したような顔でチエルが言った。

「なんだ、チエル？」

……家を出るのか？」

すべてお見通しという顔で父が答える。

「……うん。

『ドラコ』の厨房に」

「ダメだ」

皆まで言わせず父は言った。

「なんで？」

レグルと同じ船に乗っていれば」

「莫迦者。

夫婦者が同じ艦に勤務できるとでも思ったか？

そんな希望を出してみろ。

レグルがどんな目で見られると思う？

南工廠近くに行くというなら、お父さんは止めない。

もうお前も大人だからな」

いきり立つチエルに、父は諭すように言った。

確かに、女性士官が勤務し始めているとはいえ、艦内での恋愛などもつてのほかだ。

規律が崩れた艦が、まともな戦働きできるはずもない。士官や下士官兵同士の恋愛を禁止はしていないが、もしそうなった場合には転属が不文律になっている。これまでも何組かの恋人同士が、転属という形で引き裂かれていた。砂海軍が野暮なのではなく、戦争をする組織の中での規律を守るためだった。万が一、チエルが軍属として砂海軍に採用されても、間違いなく『ドラコ』の配属されることはない。士官学校に入校する際と少尉任官の際に、レグルの身辺調査は済んでいる。当然、チエルの存在は砂海軍に認識されており、黙っていてもふたりを同じ艦に勤務させることは絶対似ない。

それが判っていて軍属に志願することに、父は意義があると思えなかった。

「そう、かも、ね。」

いい考えだと思ったんだけどなあ。

修行はできない、レグルには会えない。

なんか、行き詰まりなんだよね」

自嘲するようにチエルはひとりごちた。

「まあ、腐るな、チエル。」

南工廠近くの料理屋で修行するのが無理でも、そこに努めるくらいはできるだろう。

料理人の修行も大事だけど、接客をやっておかないと将来苦労するぞ」



父はタバコを出して火をつける。

話を打ち切る、という父の意思表示だ。

頭を冷やせ。父はそう言っていた。チエルが家を出ることに異存はない。いつかは他人の嫁になって家を出るということは、女の子を授かった時点で覚悟していたことだ。それもどこの馬の骨とも知れない男ではなく、よく知ったレグルということもあり娘の将来に不安はない。

結局、話はそのまま立ち消えになった。チエルも頭から冷水をぶっかけられたような気がして、それ以上話をする気にならなかった。

一二月四日午前四時頃、機動部隊は西経一六五度、北緯四三度付近で一四五度に転針、南に向かつてハトーに針路を取った。

第八戦隊旗艦『ドラコ』は、機動部隊旗艦『コツヴ』のマストに上がった旗流信号に従い、やや遅れて面舵を切る。数分後、発光信号がリレーされ、旗艦『コツヴ』に全艦が進路を一四五度、ハトーに向けて南進する航路を取ったことが連絡された。

第八戦隊旗艦重巡『ドラコ』の主砲発令所で当直任務に当たっていたレグルは、遠心力で身体が左舷側に振られる僅かな感覚を覚えていた。

タンカン湾出航以来、これほど大きな転舵は、魔鉱石補給のために艦の位置を微調整したときと、空母『ブリッツ・ブロッツ』から兵が転落し、一時的に隊列が乱れたときだけだ。予定されていた大きな取り舵は、ハトーへ進路を取ったことをレグルに理解させていた。

やがて総員起こしのラッパの音と共にレグルの当直任務は終わりを告げ、交代で主砲発令所に入ってきたランツに事後を託して一度

露天甲板へと上がった。

相変わらず風が強く、甲板にも砂が舞い上がってくる。防砂ゴーグルで覆われた狭い視界の片隅に後甲板で動く人影が映り、レグルはそちらに視線を投げかけた。その視線の先では、レグルと同じように防砂ゴーグルをつけたリンが掌を組んで両手を頭上に上げて背伸びをしている。

「奇遇だな、リン。」

「お前も当直明けか？」

出航時のこともあり、その後の様子が気になってはいたが、部署が異なれば艦内であってもなかなか会う機会がない。

平時であれば食事や巡回後に多少共通の自由時間があるが、戦闘態勢をとっている今は当直で生活パターンがずれることが多い。

「あら、レグルもだったの？」

暇だったわ、夜戦をするわけじゃないんだから、砂偵搭乗員の当直なんてなくしちゃえばいいのに」

あくびを噛み殺しながらリンが答える。

あっけらかんとしたその態度に、まだ落ち込んでいるのではと心配していたレグルは気が抜けた。

「大丈夫そうだな、リン。」

その様子なら、ぐっすりと眠れそうだな。

夜明け前に取り舵切っただろ？」

これで、ハトーまで一直線ってことか。

幸先が悪い船旅だったけど、あれで厄落としになったのかな」

タンカン湾出航時に『コツヴ』のスクリューに砂中に埋まっていたワイヤーが絡み、出航が一時遅れたことをレグルは言っている。

ここまでの航海は順調だったが、昨日『フリッツ・ブロッツ』から兵が一名転落し、一時的に隊列が乱れるハプニングがあった。た

だでさえ人が歩くことは不可能な砂海上に、高い舷側から転落した兵が砂上に浮き上がるはずはなく、後ろ髪を引かれる思いで艦隊は搜索を短時間で打ち切っている。

さすがにこの兵の死を厄落としという気にはなれず、レグルもリンも話題に上げることがなかった。

「ごめんね、レグル。

随分と心配掛けちゃったみたいで。

もう大丈夫よ、私。

昨夜、当直交代のときに飛行長に言われたの。

ハトー奇襲前の敵情偵察に行けって」

柔らかく笑っていた顔が、一瞬で引き締まった。

攻撃こそしないが、ハトー一番乗りだ。事前の打ち合わせで『ドラコ』と『ケロニア』から砂偵一機ずつを出すことは決まっていたが、誰が飛ぶかはまだ決められていなかった。

「いいなあ、リンは。

一番乗りなんて、すごい名誉じゃないか。

俺なんか、敵襲がなければずっと艦底で燻ってるだけだったのに」  
若さから来る蛮勇が、リンに対しての嫉妬をレグルに覚えさせていた。

もちろん、出航直後に泣き崩れたリンが、この短期間に死の恐怖を克服したとは思えない。それでもこれ以上心配して見せるのは、リンに対する侮辱になると考えてレグルは敢えて茶化すように言った。

「そうよ、攻撃隊より先にハトーを見られるんだよ。

レグルの幼馴染みなんかよりね」

ちよつとしたライバル心から、リンはエルミのことを口にした。

飛行士官学校での成績で、学業についてはリンの方がはるかに上

だったが、飛行術や魔法の成績ではエルミが圧倒しており、総合成績ではエルミに大きく水を開けられていた。

卒業席次と本人の希望で配属が決められたが、飛行術内の成績だったリンは艦戦を希望していたにも拘らず艦偵のパイロットになっていたのだった。

「そんなに気負うなよ、リン。

あれはのほほんとしたところがあるから、そんなこと気にしないぞ」

苦笑いと共に、同僚と幼馴染みの板ばさみになったレグルは、リンの緊張をほぐすように言う。

「いいの。

私もいつかは空母に乗りたいんだから。

功績を上げることが大事なの。

レグルだって、砲術を専攻するんだったら戦艦に乗りたいでしょ？」

レグルの困り顔を見たくて、リンは追い討ちをかける。

「まあ、な。

でもそれを大きな声で言うなよ。

どの艦だって、乗ってりゃ愛着が湧くんだ。

俺は当分力中尉と離れたくないなあ」

おそらくレグルの士官次室に入り込んでいるであろう雌のキジトラを思い浮かべ、レグルは話をはぐらかす。

「解ってるわよ。

私も『ドラコ』が嫌いなわけじゃないもん。

レグルがいるから……」

最後のひと言は口に出さずに、リンは呟いた。

「じゃあ、そろそろ寝ておかないと。」

中尉がお待ちだろうからな」

リンのひと言に気付くはずもなく、レグルはそう言って踵を返した。

「あんまり部屋に女の子を引っ張り込んでばかりだと、お嫁さんに言っちゃうぞ、レグル」

泣き出しそうな顔になったリンが、レグルの背中に怒鳴った。

ちようど砂海軍体操のために後甲板に集まりつつあった乗組員たちの間に、爆笑が湧いた。

『東の風、雨』の魔道放送が流れてから三日が経過した、オリザニア時間で二月六日の安息日前日。

午前中早い時間に短い予告訓令九〇一号報が、ソル皇国のザイオリザニア大使館に届けられた。九〇一号報は、これから一月二六日にオリザニアから提示されたデル文書の回答を、長文になるため一四部に分け別伝九〇二号報で送るという予告だった。そして、全部届くのは明日になるであろうが、いつでも回答書をオリザニア側に提出できるようにと綴られていた。さらに別報九〇四号報で、九〇二号報の清書にはオリザニア人タイピストを使うなどの指示が届く。

そして、九〇二号報が続々と入り始め、一三部までが午後三時までに大使館へと配達された。

セイメー以下通信室担当者六名は、前日に破壊してしまったため一台になった暗号機を使って解読を進め、解読が済み次第手書きされた魔報文をその都度カツツ書記官と公邸の両大使に届けていた。

オリザニア人タイプピスト以外に、大使館にタイプが打てる者はカッツしかいなかった。

だが、幼い頃からタイプに慣れたオリザニア人と違い、カッツは一本指で一文字ずつしかタイプができない。そのような状態であれば、九〇二号報の清書は自分がやるべき仕事だと、カッツが理解できないはずはない。そして、いつでもオリザニア側に回答書を提示できるように、という訓令があったこともカッツは承知していた。セイメーたちが解読した手書きの回答書を、届けられる側からタイプ清書すればそれほどの仕事量ではなかっただろう。

だが、全文が届くのは明日までかかるだろうという予告から、カッツはタイプ清書をすぐに始めることはなかった。

それよりもカッツは、転勤の出発が遅れていたローシ書記官の送別会を、夕食を兼ねて行うことで頭が一杯だった。

同時にコートウもローシの送別会を企画していた。三人の一等書記官は互いに仲が悪く、そのなかでも特にカッツとコートウのふたりは強烈なライバル心から特にいがみ合っていた。もともとローシの送別会自体は正式に行われた後であり、このよるふたりが企図していたものは単に仲の良い者同士の夕食会といったところだった。だが、帰国後、省内での勢力争いのためローシを取り込んでおきたいそれぞれが、敢えて同じ日に夕食会をぶつけてきた。

ただの夕食会ならローシが片方だけ出たところで、先に声を掛けた方を優先しただけで済むが、送別会となれば話は別になる。同僚の心づくしを無碍にはできないが、あちらを立てればこちらが立たず、後々にどちらかの派閥であることを明言するようなものだった。ふたりの勢力争いは、ローシにとって甚だ迷惑な踏み絵と同じ情況を呈していた。

結局、ローシ書記官が気を使い、両方の夕食会に時間をずらせて出席した。

自分の勢力を誇示するため、カツツとコートウはそれぞれの派閥の面々を連れて行ったため、大使館事務所には幹部も通信室員も不在となり、カツツの机上には九〇二号報が未清書のまま山積みのもまだった。

夕食会を終わったふたつグループは、通信室関係以外の者は殆ど帰宅した。

通信室員は一〇時頃に大使館事務所に戻り、九〇二号報解読の続きを再開する。

テイ参事官もやや遅れて事務所に戻ったが、電信室に適当に切り上げるように声をかけて帰宅した。カツツは、ローシがコートウの企画した送別会に場を移動した直後に、自身が企画した送別会であるにも拘らず、ローシがいなければ無意味とばかりに退席していた。そして、オリザニア人知人の家に、大好きなトランプのブリッジをやりに行ってしまった。

通信室員たちは、日付も変わり七日午前三時までかかって、ようやく一三部目の解読を終え、一四部はまだ届いていなかった。ので、テイの言葉もありそこで帰宅した。

大使館事務所に残ったのは、当直者と若い館務補助員のふたりだけだった。

公使を始めとした大使館幹部に緊張感が欠けていたのは、かねてよりノム大使に非協力的態度を取ってきたからだだった。

ノムは予備役砂海軍大将であつて、外務省の人間ではない。セクト主義が蔓延しているソルの官僚たちは、部外者に対して異常なまでに冷淡だった。クリスが来たことで多少の緊張感が生まれたことも確かだが、あくまでクリスは補佐であり、対オリザニア交渉はノム主導だった。これもテイたち幹部が、いまひとつ仕事に対して真面目に取り組めない理由のひとつになっている。

何故外交を外務省の専門家に任せないのか。

門外漢の予備役大將がしゃしゃり出るのか。

ならばお手並み拝見、高みの見物と決め込もう、というのが、外務省の人間の偽らざる心境だった。

そして、大使館幹部たちは、オリザニアの世論と空気に見事なまでに騙されていた。

デルと熾烈な交渉を繰り広げたノムヤクリスは、オリザニアが戦争を望んでいることを肌で感じている。だが、直接交渉の場に出ることのない公使以下の職員たちは、ローザファシスカ大統領が三日目の公約に掲げたドラゴリー大岩盤戦争への不介入という言葉を鵜呑みにしていた。そして、この時期であっても、世論は相変わらず戦争への不介入が主流だ。ソルと戦争になれば、アレマニアとウィトルスがオリザニアに対しても宣戦布告する。

それが解っていてソルと戦争をするとは、公使以下の幹部には考えられないことだった。

その頃大東砂海上では、第二補給隊の三隻が砂上補給の任務を果たし、護衛の駆逐艦とともに針路を西にソルへの帰途についていた。『ご成功を祈る』の信号を受け取った機動部隊は『多大なる戦果を』と返信し、艦隊の隊列を第六警戒航行序列に組み替える。そして、『艦内第一哨戒配備、戦闘配食』が下命され、二四ノット即時待機二八ノット二〇分待機で針路を真南に取った。即時待機とは命令されたら即座にあるいは二〇分で所定の速度を出せるように機関を調整することだ。戦闘配食と即時待機の命令に、全乗組員は開戦間近であることを嫌が応にも思い知らされた。

「酒保開け。

各分隊は、酒を受け取れ」



日没後、各艦の高声放送が高らかに鳴り響く。ついに迎えた開戦前夜、誰が死の河を渡るか、まだ誰にも予測はつかない。

心残りが無いようにと、司令長官を始めとした指揮官たちは、ひとりの例外もなく壮行会を開くことにしていた。

ホンリユウがまたしてもエルミを返り討ちにした後に、艦攻隊のガンルームにオーキキ二航戦司令官が姿を現す。

オーキキは普段と変わらないエルミの行動に、苦笑いしながらも余計な緊張感を感じさせない艦攻隊搭乗員たちに深い安堵を覚えていた。賑やかに酒を酌み交わし、持ってきた一升瓶が空になると、オーキキは艦爆隊のガンルームへと移動していく。ここではファルがぐすね引いて待ち構えているが、前回エルミの後を追うように撃沈された苦い経験からこの日は少し大人しい。

「司令官、明日はボクたちに任せて、ひとつ大船に乗ったつもりでいてください」

無礼講の席ということもあり、普段であれば絶対に許されない一人称でファルがオーキキに絡む。

「ファル少尉、頼んだぞ。

全機突入の意気込みでやってくれ。

だがな、コウモ君も言っていると思うが、自爆をしるといつているわけじゃない。

そこは勘違いしてくれなよ。

七生報国という言葉があるが、これを七度死んでも七度生まれ変わってお国に尽くすと解釈する莫迦者が多くて困る。

これは、七度死の危険に遭遇しても、その都度生還しお国に尽くすという意味だと、私は理解している」

ファルの言動を咎め立てすることもなく、オーキキは新たに一升

瓶の封を切り、ファルの湯飲みに注いだ。

「そつだ、少尉。」

貴様らの腕は、自爆突っ込みなんぞしなくても、充分に敵を殲滅できるだけには鍛えてある。

『急降下爆撃の神様』が鍛えたんだ。

気軽に行つてこようぜ」

既に真つ赤になり、呂律が怪しいコウモ少佐がファルに酒を注ぐ。

「ひゃいつ！」

少佐、光栄でしゅ！」

ファルにとつてオーキキは父にも等しい存在だが、コウモはまさに神だった。

ガチガチに緊張して湯呑を頭上に差し上げてから、ファルは一気に酒をあおった。

「私とはえらい違いだね、ファル少佐。」

妬けるじゃないか、コウモ君」

オーキキの言葉に、ガンルームに笑いが弾けた。

長官公室に戻ったオーキキを、やはり艦内を一巡りしてきたホンリユウ『デットン』艦長が訪ねてきた。

「司令官、こちらでしたか。」

随分とお酒を召されたようですが、明日は大丈夫でしょうか？」

そう言いながら、ホンリユウは新しい一升瓶の封を切った。

「艦長こそ、大丈夫かね？」

明日の今頃にはここにいない者がいるかと思うと、全員の顔を目

に焼き付けておきたかったんだよ。

約一名、先に沈んだ者がおつたが、艦長のせいらしいな」

姿勢を崩すことなく、オーキキはホンリュウの酌を受け、悠々とした所作で湯呑を空ける。

「申し訳ございません。」

しかし、あの娘にも困ったものですな。

今日こそ私と司令官を沈めてやると息巻いておりましたが。

司令官のお手を煩わすまでもありませんでした」

軍務を離れてしまえば我が娘のようにエルミを認識しているホンリュウが、笑いながら頭を下げつつオーキキの酌を受ける。

「皆の顔を見ておきたいと思っていたのだが、私は少尉と縁がないようだな。」

いつも、私が行く前に艦長が撃沈してしまうから。

縁といえば、女性飛行士官たちも年頃だ。

良い話のひとつもあるのかね？」

オーキキは、女性の士官登用には賛成だが、最も死に近い飛行士官に女性を起用することに、諸手を挙げて賛成というわけではなかった。

確かに男性に比べ女性の方が、飛行に向いた魔力を持っている。

これを攻撃や敵機の迎撃に用いれば、航空戦力は格段に向上する。だが、それは男の仕事ではないかという疑問もまた、オーキキは持っていた。

せめて飛行士官として起用するのであれば、輸送機や教官といった後方支援任務のほうが良いのではないかと感じていた。なにも、死の危険と隣り合わせであることより、子を産み育む立場の者が大量の死を振り撒くことに、どうしても馴染めなかったのだ。後それゆえに、女性飛行士官たちに良縁があれば積極的に勧め、後

方勤務に移動できるように計らいたいとオーキキは考えていた。

「それであれば、どうやらエルミ少尉には想い人がいる様子です。たまたまそういった方向に話が向いた途端、真っ赤になっておりました。」

そのせいですか、今夜も早々に轟沈したのは」  
呵呵大笑してホンリユウは湯呑を空ける。

「そうか、それは良いことだ。」

他の者にもそういつた話があれば、このオーキキが仲人を買って出てもいいぞ。

話は変わるが艦長、ここへ来る前に機関室を覗いてきたが、若い兵たちが壮行会に出ることもなく黙々と任務をこなしていた。

決して機関長から強要されたわけではなく、自主的にだ。

若者たちが開戦を前に闊達に振る舞う姿も頼もしいが、そういつた縁の下の力持ちが自ら進んでその役を買って出ている姿も、また頼もしいものだ。

明日は、ソル海海戦以上の戦果が上がることを、私は信じているよ」

オーキキは、公室に戻る前に見てきた光景を、ホンリユウに話した。

熱気のコもる機関室に詰め、魔鉱石への魔力供給に汗を流す者、ボイラーの異常がないか、また戦友が脱水症状を起こさないか常に目を光らせる者、万が一にも故障などさせないように各所に油を差して回る者、多くの下士官兵が壮行会に背を向け、黙々と任務に励んでいた。

「お褒めいただき、全乗組員を代表して御礼申し上げます。」

我がことのように嬉しいものですな、部下が褒められるということは」

満面の笑みを湛え、ホンリユウが頭を下げ、そしてオーキキの湯呑に酒を注ぐ。

「内地に帰ったら、私と艦長で皆に奢るか。

年頃の者たちの嫁や婿の世話も考えんといかんかなあ」

畏まったホンリユウの態度に破顔一笑して、オーキキ湯呑をあおり、そして酒を注ぎ返す。

これから皇国の命運を掛けた乾坤一擲の戦が始まるとは、とても思えない雰囲気だった。

ハトー時間一二月七日の午前四時、ソル時間で一二月七日の深夜二時三〇分。

機動部隊航空甲参謀ジツツ中佐は、攻撃隊発艦時刻より二時間も早く目を覚ましていた。艦内は第一次攻撃隊発艦準備の喧騒に包まれていた。ジツツは艦橋に上がり、昨晚ここでナンクウと交わした会話を思い出す。

ジツツの意見具申で、当初はハトーから二一〇哩、約三八九キロの地点で第二次攻撃隊を発艦させる予定だったものを、一九〇哩まで近寄ることに変更していた。さらに、第二次攻撃隊発艦後直ちに変針反転し、退避しながら第二次攻撃隊を收容する予定を、さらにハトーに近付いて一五〇哩の地点に変更していた。これは、攻撃隊をより確実に收容するためでもあるが、ハトーの在泊艦艇を討ち漏らすようなことがあれば、直ちに反撃を受ける危険と隣りあわせだった。

しかし、奇襲が見込める第一次攻撃隊と違い、完全に強襲となる第二次攻撃隊は、間違いなく熾烈な対空砲火や迎撃戦闘機が待っている。機体の損傷や搭乗員が負傷する確率はあきらかに第一次攻撃隊より高く、途中で力尽きる者が増えてしまうことは確実だ。母艦

がハトーに近付けば近付くほど、未帰還機を減らせることになる。一騎当千の荒鷲たちをむざむざと砂海に散華させる気は、ジッツーには欠片もなかった。

多くの反対意見が出され、ジッツーの案は却下されるかに見えたが、それを救ったのは誰であろう、ナンクウ司令長官だった。

ナンクウにとっても搭乗員たちは我が子同然であり、資源の乏しいソル皇国にとっては宝石などより貴重な存在だ。この搭乗員たちの危険を減らすことは、司令長官として当然の義務とナンクウは認識している。たとえ、一パーセントに満たない確率の上昇であっても、ナンクウにその手段を躊躇わせる理由はなかった。

「私は、ここまで、攻撃地点まで艦隊を引っ張ってきた。

後は、君と飛行部隊の責任だ」

ジッツーの意見を取り入れ、予定変更を決定したナンクウは、そう言っただけでジッツーを正面から見据えた。

第一次攻撃隊総隊長のミッツ中佐は、ハトー時間の午前五時、攻撃隊発艦の一時間前に目を覚ましていた。

このとき砂嵐が吹き荒れ、『コツヴ』は前後左右に激しく揺れている。既に旗艦『コツヴ』以下六隻の空母の飛行甲板には、第一次攻撃隊の機体が敷き並べられ、発艦時刻を今や遅しと待っていた。ミッツはたの搭乗員たちがそうであるように、万が一負傷した際シヤツを血が汚しても気付かれないように真紅のシヤツを着込み、その上から真新しい飛行服を着込んだ。

そして朝食を摂りに士官食堂へと降りていくと、同じ格好をしたジュージ少佐が既に朝食を掻き込んでいる。

「おはようございます、大将。

ハトーは太平楽に眠ってますぜ」

ハトーの魔道放送が受信できるようになってから、敵信傍受班はハトーの魔道放送に変化がないか聞き耳をそばだてていた。

この日の朝も、いつもと変わらない音楽番組が放送され、機動部隊が接近していることを告げる臨時ニュースはどの局からも放送されていない。

そのことをミッツに告げたジュージは悪戯っぽく笑った。

そこへ、難しい顔をしたナンクウと、半ば怒りに顔を歪ませた参謀たちが入ってきた。

荒れる砂嵐の中で、身軽な零型艦戦や九型艦爆はともかく、重い八〇〇キロ爆弾や航空砂雷を抱えた七型艦攻の発艦が危ぶまれていた。航空乙参謀は事故を恐れ、艦攻の発艦を中止し、第一次攻撃隊は艦爆だけでハトーを叩くべきだと進言している。司令部内でも意見が分かれ、このままでは攻撃隊発艦時刻になっても結論が出ないのではと、ジッツーは焦りを感じていた。

しばらく押し問答が続いたが、ナンクウが実際に飛ぶ者たちの意見を聞こうと言い出し、参謀たちを引きずるようにして艦攻隊の搭乗員待機所に来たのだった。

「随分と砂海が荒れているが、お前たち、このローリングでも魚雷を抱えたまま、見事発艦できるか？」

何事かと訝しむ搭乗員たちに航空乙参謀が何かを言おうとするが、それを遮ったナンクウが口を開いた。

「長官、私たちを誰だと思っているんですか。」

この程度砂嵐など、荒れているうちには入りません。

見事、発艦してご覧に入れましょう」

ジュージが気負うことなく冷静に答え、他の艦攻乗りたちが口々に追隨した。

「よしっ！」

出そう！

参謀長、いいではないか、出してやろう」

ナンクウが力強く言い切った。

タンカン湾を出航して以来、初めて見せる颯爽たる指揮官ぶりだった。

午前五時三〇分、乾いた音を残して第八戦隊の『ドラコ』と『ケロニア』から、攻撃隊に先立って二機の砂偵がカタパルトから撃ち出された。

リンが操縦する『ドラコ』機はハイナ泊地に、『ケロニア』機はハトー泊地を目指して闇の中を真一文字に駆けていく。そして、この直後の午前六時、第一次攻撃隊一八三機が発艦を開始した。



## 第22話 奇襲

第一次攻撃隊が機動部隊の空母から発艦している頃、ハトー泊地の入り口を睨む十の瞳があった。

甲標的と呼称される特殊潜行艇五隻が、互いに連絡を取ることもなくハトー泊地の入り口付近の砂中に潜んでいる。

全長二三・九メートル、全幅一・八五メートル、排砂量四六トンの小さな船体を、潜砂艦としては破格の最高砂中速力一九ノットで走らせる蓄電池を搭載している。電池を使い切ってしまうえば自力での充電は不可能だが、この速力は平均的な潜砂艦の二倍以上の高速性能だった。乗員は二名で、操舵とトリム調整を艇付が、索敵と運指指揮を艇長が担当する。武装は、四五センチ砂雷発射管二基に、それぞれ一本ずつ計二本の砂雷をしていた。

安全潜航深度は一〇〇メートルで、ソルの潜砂艦の中でも優秀な潜航能力だ。

五隻の甲標的は、第六艦隊のイー六、一八、二〇、二二、二四番潜砂艦を母艦として、それぞれの後甲板に一隻ずつ搭載され、一七日間の航海を経てソル本土から運ばれてきた。

航空機による奇襲で混乱するハトー泊地に突入し、討ち漏らした敵主力艦に必殺の雷撃を敢行する計画だ。

機動部隊によるハトー攻撃案同様、甲標的の出撃にも紆余曲折があった。連合艦隊司令長官ゴトム大将の機動部隊の攻撃案には軍令部が反対したが、甲標的によるハトー攻撃案にはゴトムが大反対した。

ゴトムから見た甲標的は、欠陥兵器でしかないからだった。

小型の船体は敵から発見されないためだったが、それゆえ航続力

が決定的に短い。

魔鉱石を使った内燃機関を、置くスペースがないからだ。そして内燃機関は大きな騒音が発声するため、待ち伏せや泊地突入という静粛性が求められる作戦には不向きであり、最初から搭載する予定がなかった。砂中最高速力一九ノットは破格の高速だが、全力航行をしてみれば僅か数十分で電池は切れてしまう。通常の潜砂艦は内燃機関が充電器の役割を果たすが、甲標的にはそれが無い。活動時間が電池の消費を抑えても艦内の空気の限界もあり、いいところ四日間では、ハトーからの生還は望めない。

十死零生の作戦を採用しない伝統を持つ砂海軍実戦部隊の長が、甲標的によるハトー攻撃案に反対することは、当たり前のことだった。

だが、新兵器に情熱を燃やす大尉クラスを中心とした若手将校たちは、甲標的によるハトー攻撃を諦めなかった。

甲標的母艦となる潜砂艦が所属する第六艦隊司令部も、彼ら若手将校を後押しした。そこには主役となり得ない潜砂艦部隊に大きな戦功を挙げさせ、以後の発言力を強めたいという打算があったことは否定できない。しかし、それ以上に若手将校たちの至誠の忠心を無碍にしたくないという親心のような心境が強かった。

母艦潜砂艦がハトー周辺砂海域に四日間留まり、甲標的を回収すると確約することで、ようやくゴトムは首を縦に振ったのだった。

「ハトーのオリザニア砂海軍は、まるで気付いてないみたいだな。

太平洋楽に安息日を過ごすつもりらしいぞ」

潜望鏡を覗き、周囲を探っている艇長が、レンズ越しに遠望されるハトー市街の灯りを見て言った。

ハトーの人口や街の規模は、ソルの帝都には遙かに及ばず、せい

ぜい地方の中規模オアシスと同程度だ。だが、ハトーの夜を照らす人工照明はソルの帝都以上に明るく、そして一晩中途切れることもない。

国民全体にストイックな生活を強いる皇国とは、根本的に何かが違うて見えた。

「贅沢に慣れた、怠惰な国民性……か。

聞きしに勝る物量だな。

それをこんな本土から離れたオアシスまで……

皇国では考えられん……」

潜望鏡から目を離さないまま、艇長の口からは感嘆とも自嘲とも取れる言葉が漏れていた。

前夜、母艦であるイー六番潜砂艦から切り離される直前、潜砂艦長から受けた激励の言葉を艇長は反芻している。

母艦には九五名の人間が乗り組んでいる。

僅か二名の甲標的乗組員を救出するため、四日間はこの砂海域に留まるという。雷撃敢行後は、敵もこちらを沈めるために全力を挙げてくるだろう。自分たちふたりを含む一〇人のために、母艦乗組員合計三八〇人が命の危険に晒されるのだった。大の虫を生かすため、我々を捨てて帰還してくれと五人の艇長は申し出ていたが、五人の潜砂艦長でその言葉に首を縦に振った者はただのひとりもいなかった。

必ず還って来い。かならず母艦は指定海域で待つ。

その言葉を胸に、五隻の甲標的は砂海へと滑り出したのだった。

「艇長、ハトーの様子はいかがですか？

噂では、安息日を前にして皆眠りこけているとか、既に街に繰り出しているとか。

いずれにせよ、精強を以ってなる我がソル皇国軍とはえらい違い

だとか」

外界の様子がまったく判らない艇付が、出撃前に仕入れた噂を口にする。

「確かにハトーの街は既に賑わっている。

灯が消えることもなく、一晩過ぎているからな。

だが、それを以って彼らが贅沢に慣れた弱敵と決め付けるのは、早計だと思っぞ。

本土からこんなに離れた辺境のオアシスに、これほどの町や泊地を作り上げた實力は、とても弱敵とは思えない。

侮ってかかると、手荒くしっぺ返しを喰うことにな

艇長の言葉は、そこで唐突に途切れた。

甲標的の周囲に巨大な爆発が巻き起こり、小さな船体を激しく揺らした。

艇長が潜望鏡に額を打ち付け、反動を堪えきれずに狭い艇内をのたうち回る。艇付は不意の振動に弾き飛ばされ、操縦桿に身体を打ち付けられて、凶らずも甲標的を浮上させてしまった。甲標的が回避行動もままならず、砂海上にその姿を現したとき、多数の砲弾が殺到し、そのうちの一発が司令塔を直撃する。

これまでの生涯で感じたことのない激しい衝撃と痛みが艇長と艇付を襲い、視界が真っ赤に染まったと思った瞬間、ふたりの意識は暗転した。

ハトー泊地周辺の哨戒任務に付いていた旧式駆逐艦が、砂海から泊地を窺う潜望鏡を発見した。

デル文書がソルに提示されて以来、砂海軍省からそれぞれの部隊に警戒警報が発令されていた。ソル本土に近いネグリット植民地軍などはそれなりの厳戒態勢を強いていたが、はるかにソルから遠い

ハトー泊地に展開する大東境艦隊司令部は、旧式駆逐艦の何隻かに周辺砂海域に警戒を命じただけだった。そのうちの一隻が交代のため泊地に戻る際に、甲標的の潜望鏡を発見したのだった。

「艦長、不審な潜望鏡を発見しました」

見張りから報告を受けた甲板士官が、艦長に報告をリレーした。

「右砲戦準備」

測的完了後、適宜砲撃開始！」

「いいのですか、まずは警告の威嚇射撃を実施して、浮上を命じるべきでは？」

砲術長が艦長に対して疑義を呈する。

ソルと緊張状態にあることは理解しているが、こちらが最初に引き金を引いて良いものか、それを咎められることを恐れている様子だった。

「構わん。ハトー泊地に対して堂々と親善訪問をするならば、最初から浮上航行するはずだ。」

また、危機的状況に陥り、ハトーに救助を求めているならば、救難信号が発せられていなければならぬ。

該当の国籍不明潜砂艦から、そのような状況にあるという証拠は認められない。

従って、この時間にハトー泊地に対し、潜望鏡で偵察を行うことは明確な敵対行為だ。

射撃開始はこちらが先になるかもしれないが、敵対行動を起こしたのはあちらが先である以上、我々が非難を受ける要素はひとつもない」

艦長が明確に言い切る間にも、潜望鏡に対する測的は完了した。

既に測的完了後射撃開始の命令が下されているため、オリザニア砂海軍旧式駆逐艦の標準的な主砲が火を噴き、四インチ砲弾が甲標

的に殺到する。

「通信士に下命。」

泊地周辺に展開する哨戒部隊および司令部に緊急信。

『潜砂艦による襲撃あり。直ちに厳戒態勢を取れ 六四 』

「急げ！」

「通信士に下命。」

『潜砂艦による襲撃あり。直ちに厳戒態勢を取れ 六四 』  
哨戒部隊および司令部に緊急信送ります」

艦橋要員から魔道通信室に伝声管を通じて艦長の命令が伝えられ、直ちに哨戒部隊各艦が戦闘行動に入った。

「どうだ、砲術長、沈めたか？」

「無茶言わんでください。」

初弾命中なんぞ、どんな奇跡ですか」 砲術長は軽口を叩くが、それを果たせなかった悔しさが口調ににじみ出ている。

目標はハトー泊地の偵察に意識を集中させており、駆逐艦の接近には無警戒だった。さらに移動速度もそれほどではなく、初弾必中を期しての砲撃開始だった。

「目標、急速浮上！」

見張りからの報告に、艦長と砲術長に緊張が走る。

取り逃がしては、今後どのような災厄をハトー泊地にもたらすか判らない。

どうあっても、沈めなければならなかった

「砲術長、遊びは終わりだ。」

早く仕事を完遂しろ」

「了解です、艦長！」

逃げずに浮上するなんて、自殺する気が、あの潜砂艦は……」

数秒の後、甲標的の船体に閃光が走り、やや遅れて炎が吹き上がる。

ハトー泊地入り口を窺っていた甲標的は僅かな反撃すら行うことなく、司令塔に四インチ砲弾の直撃を受け、砂中に沈んでいった。

ソル・オリザニア戦争戦死者第一号は、ソル航空部隊の奇襲攻撃ではなく、不本意な奇襲を許してしまった奇襲兵器の乗組員だった。

「六四五、国籍不明の潜砂艦撃沈確認！」

「司令部に緊急信。」

六四五、我ハトー泊地口にて国籍不明潜砂艦と交戦。

我が砲撃に浮上することなく遁走を図ったため、明確なオリザニアに対する戦争行為と断定。

砲撃を続行し、これを撃沈。

通信士、急げ！」

この緊急信と相前後して、計四隻の駆逐艦から国籍不明潜砂艦撃沈の報告信が、ハトー泊地に置かれた大東砂海司令部に届けられた。しかし、これを受けた通信士官は、ちょうど仮眠中だった当直将校を起こさなかった。

そして、緊急事態として司令部首脳に直接報告することなく、当直将校の起床を待っていた。

甲標的が撃沈される約四五分前、機動部隊の六空母は喧騒の渦に包まれていた。

旗艦『コツヴ』の飛行甲板を零型艦戦が滑走し、軽い身のこなしでまだ明けやらぬ空に舞い上がる。

零型艦戦がすべて舞い上がると、次は胴体の下に二五〇キロ爆弾を抱えた九型艦爆が滑走を始める。一機、また一機と離艦した機体が高度を取り、機動部隊上空で梯団を組み始めた。

二航戦旗艦空母『デットン』艦上で、七型艦攻に乗り込んだエルミは発艦の順番を待っていた。

何度も訓練で繰り返し、身体に染み着いた動作がこのときばかりはぎこちない。気持ちを押さめようと努力はするが、やはり初陣の高揚を抑えられない。死に向かって突進する恐怖、死を振りまく恐怖と葛藤に、エルミの心は乱れたままだ。普段であれば心地良いエンジンの響きが、魔力を上手く伝えられないせいか魔鉱石の反応が悪く、時折咳込むような不協和音が混じっている。

焦れば焦るほど、エルミの機体はエンジンの出力が下がっていった。

正面を見つめ、操縦桿を握りしめて精神を統一しようとするが、迫り来る発艦の順番に焦りが生じ、どうしても心が乱れる。

エンジンのうなりが不規則になり、今にも止まりそうだ。後部座席に座る機長のエンザや、魔信と機銃員を勤める兵は、エルミを焦らせまいとして一切声をかけることはしない。その静寂がエルミを焦らせ、悪循環に陥っていた。

そのとき、エルミの脳裏に声が響いた。

「あ、通じた！」

エルミ、すっかりしなよ。

いつもどおりにやれば大丈夫。

ボクだって怖いけど、もうやるしかないんだよ」

第二次攻撃隊に参加するファルの声だった。

だが、それは耳に届く音声ではなく、頭の中に直接響いている。

「ファル？」



なんで？

「どうやって？」

「ついさっきまでの焦りを忘れ、エルミは声に出して叫んだ。

「怒鳴らなくても平気だよ、エルミ。」

「そんなに大きな声出したらエンザ中尉が驚くから。」

「エルミだけみたいだよ、通じたのは。」

「エルミ並みの魔力がないとダメなのかな。」

「指輪を見てごらん。」

「ファルに促され、エルミは右手を見る。」

魔力を行使する職業にある者は、政府の公認を受けた魔力増大の指輪の着用が認められている。

以前魔法の修練のためにつけていた指輪とは、魔力の増大幅の桁が違う。特に、兵士は火と風の指輪が必需だった。

火の指輪は、言うまでもなく火の魔鉱石と反応し、その魔力を取り出す上で欠かせないものだ。風の指輪には治癒魔法の能力が秘められており、戦場を駆け回る兵士にとってなくてはならないものだった。もちろん、風の魔法が使えるようになるため、空戦時の急激な起動を行う飛行士にとっても欠かせない。この他に飛行士は、脱水症状を防ぎ、万が一の被弾時に消化の助けとなるように水の指輪をつけている者が多い。

その風の指輪が鈍く光っている。

「風？」

「これを通して？」

「エルミが落ち着きを取り戻し、意識の中でファルに問いかける。」

「そつみたいなんだ。」

「魔道通信みたいに遠距離だと無理だけど、今ボクとエルミの距離

くらいなら聞こえるみたいだよ」

「ありがとう、ファル。」

ところで、ルックウとか、他の人には？」

自身の不甲斐なさをルックウに知られたのではと、エルミは赤面した。

「大丈夫だよ、エルミ。」

聞こえてるのは、間違いなくキミだけさ。

残念だけど、ね。

それより、ほら、順番が回ってくるよ。

ボクは後から行くから、敵は取っておいてね」

唐突にファルの声が途切れる。

現実を意識を引き戻されたエルミが、コクピットの前に視線を送ると、そこには機体は残されていなかった。

「中尉、行きます」

伝声管を通し、落ち着き払ったエルミの声がエンザの耳に届く。

「落ち着いたようだな、少尉。」

大丈夫だ、いつもどおりやればいい。

さっさと行かないと、後続機にケツを蹴り飛ばされるぞ」

およそ女性にかける言葉とは縁遠いセリフをエンザは返す。

「もう、そんなことばかり言ってるから、中尉はモテないんですっ

！」

行きます」

車輪止めが引かれ、機体がゆっくりと滑り出す。

エンザはもう何も言わず、エルミがいつも通り機体を操るのを後部座席から見守っていた。

エルミが駆る七型艦攻は、『デットン』の飛行甲板を一気に駆け抜けると、一度大きく沈んでからまだ明けやらぬ蒼穹へと駆け上がった。いつた。

この時点で帝都経由のハトーの情報は、飛び立ったすべての将兵の頭に叩き込まれている。

五日には戦艦『アルテア』と『ガデア』が入港し、入れ替わるように空母『プラボカ』と重巡五隻が出航していた。

七日早朝現在、ハトーに在泊の艦艇は、『アルテア』級戦艦の『アルテア』と『ガデア』の他に、『パルム』級戦艦『パルム』、『バフスク』、『ポフト』級戦艦『ポフト』、『サラマンド』、『デイス』、『ト』級戦艦『フィン』、『ミシディア』の計八隻。この他に重巡二隻と多数の補助艦艇だ。

艦攻隊の誰もが八隻の戦艦に必殺の雷撃を、『アーストロン』級戦艦の主砲弾を改造した八〇〇キロ爆弾を叩き付けてやると誓っていた。

第一次攻撃隊一八三機が飛び立つまでの所要時間は、僅かに一五分。

ハトー時間の午前六時一五分、ソル時間で深夜一時四五分、がちりと梯団を組んだ編隊は、一路ハトーを目指して機動部隊の上空を離れていった。

北緯二六度一分、西経一五七度一分、ハトーオアシス北方二三〇

哩。

気温は二二度。

日の出の二六分前。

月齢一九日。

下弦の月。

東北東一三メートルの風が吹いていた。

残された六隻の空母では攻撃隊発艦の余韻に浸る余裕もなく、工  
レベーターが鐘の音を鳴らしながら上下し、第二次攻撃隊の機体が  
飛行甲板に曳き出されはじめていた。

第一次攻撃隊が機動部隊上空から去って三〇分後の午前七時一五  
分、機動部隊は南進し、ハトー北方二〇〇哩の地点で第二次攻撃隊  
を発進させた。

ハトー時間の七時三〇分、『ケロニア』機が『ハトー在泊艦艇を、  
戦艦一〇、重巡一、軽巡一〇、ハトー上空、雲高一七〇〇メートル、  
雲量七』と魔通で報せてきた。

その五分後リンが駆る『ドラコ』機が『ハイナ泊地に敵艦隊を見  
ず』と魔報を送ってくる。

「情報と食い違いがありますな。」

事前情報では戦艦八、重巡二でしたが「  
ジツツ」が誰とはなしに呟いた。

航空機に搭載された魔道通信機は、音声による会話は無理だが、  
長短の魔通を利用して意味のある文章を送ることはできた。

「航空甲参謀、航空機による偵察に誤差は付き物だ。」

高空からの目視で、すべてを正確に確認することが難しいことく  
らい、君も充分知っているだろう」

カリユウ参謀長が窘めるといっわけでもなく答えた。

「はい、おそらく、ですが。」

重巡や輸鉱石船あたりを誤認しているものと考えられます。

そうしますと、戦艦と重巡の数が合いますな」

航空乙参謀が補足するように口を挟んだ。

「戦艦が十隻いるというなら好都合です。」

きれいさっぱり砂葬にしてやりましょう。

しかし、空母が一隻もないというのはどういうことだ……

たしか、五日までは『プラボカ』がいたはずだ。

どこへ行きやがった？」

ジッツーは、再度呟き、腕組みをした。

だが、機動部隊は嚴重な魔通封止下にあり、偵察機に詳報を送るよ用に命じることはできなかった。

機動部隊司令部は、現時点で送られてきた情報のみを基に、作戦を進めていかなければならない。

八トー時間午前七時四五分。

第一次攻撃隊総隊長ミッツ中佐は、眼下に広がる八トー泊地の心を躍らせていた。

一機の迎撃機も、一発の対空砲火も上がってこない。完全に奇襲は成功したと判断してよい。

キャノピーを開け、右腕を蒼穹に伸ばして信号弾を一発打ち上げた。

攻撃に移る前にミッツの判断で、奇襲か強襲かが決定されることになっていた。

信号弾が一発であれば奇襲。二発上がれば強襲だ。

奇襲、つまり敵の攻撃がないときは、雷撃隊が高度一〇メートルまで降下し、砂雷攻撃をしかける。

強襲、運悪く発見され、敵と交戦に入ったときは、降下爆撃隊が先陣を切って対空砲火を制圧し、残りの隊が行動に入る。ただし、強襲の場合は、爆煙が他の攻撃を阻害する危険がある。

ジュージ率いる雷撃隊は高度を下げ、雷撃態勢に入る。

同時に降下爆撃隊は上昇し、急降下の態勢に入った。

ミッツは、信号弾を撃った後、制空隊の零型艦戦がまったく行動を起こさないことに気付いた。

制空隊は、ミッツの信号弾を見落としていた。

零型艦戦の速度は艦爆や艦攻よりはるかに速く、編隊速度一二五ノットで飛ぶのが苦しいので、機位を調整するため左右に流れたり、前後に回り込んだりしていた。そのため、たまたまこの時高度五〇〇メートル、水平距離で数千メートル離れてしまっていたのだったが、今すぐ信号弾を撃ち直してしまうと、他の機体が強襲と勘違いしかねない。とろ火で炙られるような焦りの中、ミッツはかろうじて二分の間を取り信号弾を再度撃ち上げた。

今度ははっきりと信号弾を確認した制空隊が、所定の隊形に展開を開始する。

ところが、急降下爆撃隊の指揮官は信号弾二発と判断してしまった。降爆隊指揮官は強襲命令と思い込み、所定の高度四〇〇〇メートルに達する前に急降下態勢に入ってしまう。この行動を見た雷撃隊を率いるジュージ少佐は、降爆隊の爆撃による爆煙で目標の視認が困難になる前にと、急いで魚雷攻撃を仕掛けにいった。

ミッツはやむなく予定より五分早く、攻撃命令を下した。

「ト連送！」

全軍突撃せよを意味する魔通がミッツ機から発せられ、すべての機体がハトー泊地に殺到する。

「大丈夫だ。」

まだ敵は迎撃態勢を取れてない。

よし！

我奇襲に成功せり、トラ連送！」

ミッツ機から再度魔通が発せられ、それを受信した機動部隊機関『コッヴ』の艦橋は、歓喜の嵐に包まれた。

七時五五分、高爆撃隊が第一飛行場に投じた二五〇キロ爆弾で、奇襲攻撃は開始された。

次々に投げ落とされる二五〇キロ爆弾が、滑走路や兵舎、駐機中の機体を爆破する。追いかけるように滑り込んできた艦戦は、爆弾が討ち漏らした機体に機銃掃射をかけていく。かろうじて破壊を免れていた機体が、ジュラルミン製の胴体を袈裟懸けに撃ち抜かれ、着陸脚をへし折られその場にへたり込むように墜座する。魔鉱石タングを射抜かれた機体が大音響と共に爆発し、辺りに破片を撒き散らし、パイロットや整備兵をなぎ倒した。一矢を報いるために機体にすぎり付こうとするパイロットを艦戦の機銃が打ち倒し、退避途中の整備兵を艦爆が叩き付けた二五〇キロ爆弾がなぎ倒す。元は人だった肉の破片と航空機だった金属の破片が、土砂と共に盛大に空へ舞い上がった。

第二、第三飛行場でも同じような光景が展開され、それらの飛行場から飛び立つ機体は一機もなく、ハトー上空の制空権はソル軍が握りつつあった。

その頃、ハトー泊地を一望できる高台に設置されたオリザニア大東砂海艦隊司令部は、まさに混乱の極致にあった。

小型潜砂艦撃沈の報告文は、午前七時三〇分頃になってようやく当直将校の目に触れた。

事務机の上に無造作に放り出された魔通分の綴りは、通信士官が当直将校の起床を待つて報告しようとしていたものだった。

「なんだ、これは？」

内容の緊急性をひと目で見抜いた当直将校が、まったく緊張感のない通信士官を叱りつける。

大至急大東砂海艦隊司令部に送られた敵潜砂艦撃沈破の報告文は、

ここでも余計な気を利かせた司令部スタッフの下でしばらく留まることになる。既に撃沈され脅威とならない潜砂艦など、あとで知らせればよいことだ。

ようやく、報告文が司令長官メルイイ大将の元に届いたとき、大空から巨大な破壊が降ってきた。

第一飛行場の格納庫に最初の二五〇キロ爆弾が命中し、不運な整備班の新兵ごと周囲の機体や工具、治具や鋼材を吹き飛ばしたとき、騎兵軍八トー派遣航空隊参謀長は、宿舎で髭を剃っていた。

突然の大音響に、参謀長は正に飛び上がり、頬を深く傷付けてしまったが、聞こえてきた音が意味することはひとつしかない。瞬時に何が起きたか参謀長は宿舎を飛び出すと、格納庫がもうもうと爆煙を噴き上げている。このとき、参謀長は何らかの事故が発生し、格納庫内で航空機が爆発したと思った。

だが、上空からは、次々とソル砂海軍機が機体を翻し、降爆を敢行している。

「たった今、第一飛行場が爆撃された！

ソルだ！

やつらが来たんだ！」

参謀長は宿舎のオフィスに飛び込んで、騎兵軍八トー管区司令部に魔通を繋ぎ、大声で怒鳴る。

「何を言ってるんだ、航空参謀長。

さては、安息日ってことで朝から飲んでるのかい？

司令部魔通を使つての悪ふざけは、感心できることじゃないぞ。

出たのが俺だから良いような」

「莫迦野郎！

悪ふざけなんぞで、こんな魔通をするか！

これを聞いてみやがれ、このあんぼんたん！」



当初、突然の魔通に出た管区参謀長は、安息日の朝に航空参謀長が酔っ払って悪ふざけをしていると思い、緊急信を信じようとはしなかった。

だが、その態度に業を煮やした航空参謀は、魔通の受話器を窓の外に突き出し、連続して炸裂する爆発音を実況した。

「どうだ！」

これでもまだ信じないか!？」

航空参謀は、受話器に怒鳴り込み、そのまま魔通機に叩き付けた。そして、対策を講じるためにオフィスを飛び出すが、彼自身どこに行つてどうすれば良いか、まるで解つていなかった。

ハトー泊地から東へ約一〇キロ離れた砂海軍魔報局では、第三飛行場基地が暗号に組み替えることなく平文で発した、長短二音のトンツー魔報を傍受した。

『我爆撃ト掃射ヲ受ケツツアリ、敵襲と判断ス』

魔報の内容に衝撃を受けた魔報局の通信士は、第三飛行場の通信士が錯乱したと考えた。

『血迷ウナ』と送り返した魔通に、第三飛行場からは『演習デハナイ、実戦ナリ』と何度も返信されてくる。あまりにも切迫した返信に、通信士はその魔通を文字に落とした紙片を上官のところへ持っていった。

だが、通信士がオフィスのドアを開けたとき、上官たちは窓の下に広がるハトー泊地を食い入るように見詰めていた。

航空機の降爆音が響いたとき、オフィスの誰もが騎兵軍機の演習だと信じ込んでいた。

砂海軍のスケジュールに、この日の演習は予定されていなかった

からだ。

だが、対空砲火の白煙が上がり始め、やや遅れて砲の発射音がオフィスに届く。その直後、格納庫から爆炎が噴き上がり、遅れて轟音がオフィスの窓を叩いたとき、そこにいる誰もが顔を蒼白に染めていた。

「首都に緊急信だ！

平文で構わん！

大至急、打て！

メルイイ司令長官に、大至急報告！」

通信士から魔報文を受け取った上官は、顔を蒼白にしたまま叫んだ。

ハトー時間午前七時五八分、ソル時間午前三時二八分、オリザニア時間午後一時二八分に、ハトー砂海軍魔報局から打たれた魔道通報は、全世界を震撼させた。

『ハトー泊地空襲ヲ受ケル。コレハ演習ニアラズ』

「中尉、行きます！」

爆炎がたちこめる中、エルミは超低空に舞い降りていた。

まだ敵艦は対空砲火を撃ってこない。奇襲は完全に成功していた。艦上をこけつまろびつ駆け回り、一刻も早く対空機銃に取り付こうとする兵や、おそらくは喉を嚔らして指示を送っている士官の姿が、コクピットの風防ガラスをとおしてエルミの目に飛び込んだ。初めて敵と向き合ったエルミに、初陣にありがちな躊躇いは一切

ない。

皇国にあだなす敵を討ち倒し、大東砂海に平和をもたらす。この一心で七型艦攻を超低空で飛ばせていた。いや、躊躇いを感じる余裕すらなかったのかもしれない。僅かでも操縦桿の動きを間違えば、機体は砂海に突っ込み、敵艦に叩き込むはずだった砂雷の誘爆で、エルミの身体は跡形も残らないだろう。

人として人を殺すことに躊躇いを感じる余裕など、欠片もなかった。

エルミの機体は砂を巻き上げ、一本の矢のように敵艦に突進して行った。

エルミたちの正面に、『アルテア』級戦艦の二番艦『ガデア』の巨体が迫っていた。

全長一七七・七メートル、基準排砂量二万九〇〇〇トンの巨体が、姉妹艦『アルテア』と並んで係留されている。

『アルテア』からは対空砲火が少ないながらも撃ち出されているが、『ガデア』は沈黙を守ったままだ。僅かな初動態勢の差が、この二艦の運命を分けた。対空砲火を避けるように、『ガデア』に七型艦攻がしたい寄る。砂海上を高速で走る戦艦に砂雷を叩き込むために、殉職者を出すほどの訓練を重ねてきたソル砂海軍雷撃隊にとつて、静止目標など目を瞑っていても命中させられる置物でしかない。

「用意……」

撃てっ！」

裂帛の気合を込めてエルミは砂雷の投下索を力一杯引いた。

砂煙を巻き上げて、九型航空魚雷改が『ガデア』の艦腹めがけて突進する。

エルミは急に軽くなった機体が必要以上に浮き上がらないように、操縦桿を前に押し込んだ。対空砲火に捉えられないための、艦攻乗

り必須の飛行技術だ。そのまま『ガデア』の第一主砲塔の真上を飛び越え、その奥に停泊する『ポフト』級戦艦の艦橋をかすめて急上昇した。行きがけの駄賃とばかりに通信士が後部旋回機銃で『ポフト』級戦艦の艦橋に掃射をかける。

エルミが高度を取ったとき、背後から大音響が連続して響く。

「命中！」

砂柱、五本！

『アルテア』級戦艦に、砂雷命中五を確認！」

見張り員を兼ねる通信士から、歓喜の叫びがこだました。

『アルテア』級戦艦二番艦『ガデア』は、艦齡三〇年に達しようという老嬢だった。

一発目の砂雷は左舷艦首を抉り、ここの大量の侵砂を発生させた。二発目の砂雷が艦尾を襲い、スクリューと舵をまとめて吹き飛ばす。艦尾からも大量の侵砂が発生し、あっという間に舵機室を砂が満たしていく。これで人力操舵すら不可能になった『ガデア』は、自力で動くことがまったくできなくなってしまった。

続いて三発目の砂雷が土手っ腹を抉り、バルジに巨大な破口を穿つ。左舷に集中して被雷した『ガデア』は、ゆっくりとその傾斜を大きくしていった。

ダメコンチームが副長の命令に従い被雷箇所走るが、爆発するような勢いで流れ込む砂圧に対し、人力はあまりにも無力だった。隔壁を閉ざそうとする前に大量の砂が奔流となって雪崩込み、ダメコンチームを飲み込んでいく。

『ガデア』の災厄はこれで終わらなかった。

四発目と五発目の砂雷が相次いで左舷中央部に命中する。

かろうじてバイタルパートは撃ち抜かれることには耐えたが、大

量の砂を左舷に飲み込んだ艦隊は傾斜を深め、大音響と共に転覆した。

既に退艦命令は出されていたが、半数近い将兵は艦内に閉じ込められたままだった。

攻撃開始から僅か五分後の午前八時、戦艦『ガデア』は主砲弾庫の誘爆を起こすこともなく、砂深の浅いハトー泊地にその艦腹を晒していた。

ほぼ同時刻、老朽化が進み戦艦から標的艦へと艦種変更していた『セミテ』は、水兵たちが艦尾に軍艦旗を掲揚し始めた直後、艦の前方に砂雷二本の直撃を受け左舷に傾き始めた。

決戦距離から自艦と同じ主砲で撃たれてもそれを受け止めるはずだった装甲も、三二年の長い月日に劣化が進んでいる。息つく暇もなく、続けざまに三本の砂雷が命中し、『セミテ』の艦腹を引き裂いた。それぞれが弾頭に持つ二五〇キロ近い魔鉱石炸薬の爆発力は舷側装甲を容易く引き裂き、瞬く間にこの旧式艦を転覆させていた。戦艦『サラマンド』は左舷第二砲塔直下に砂雷一発を受け、弾薬庫を誘爆させ、大量の侵砂が発生してハトー泊地に大破着底していた。

だが、艦の心臓部である缶室や主機に被害はほとんどなく、迫り来る急降下爆撃機や雷撃機に対し盛んに対空砲火を打ち上げている。不意を衝かれたオリザニア軍だが、現場の迅速な判断で急速に迎撃態勢を整えつつあった。

ジュージは他の雷撃隊が突進した『ガデア』には目もくれず、ハトーに在泊する中で最も新しい戦艦『ミシディア』に雷撃を敢行した。

『ミシディア』はまだ係留ブイから離れることは適わないが、苛烈な対空砲火を撃ち出す。不意打ちにも拘らず、オリザニア軍の立

ち直りはソル軍の想像以上のものだった。

機銃の一撃が、『ブリッツ・ブロッツ』雷撃隊の七型艦攻を、正面から撃ち抜いた。

一瞬にして猛火に包まれた艦攻が、原型をとどめぬほどに破壊され、砂の上に破片をばら撒く。直後もう一機の艦攻がパイロットを射殺され、こちらは火に包まれることも機体を破壊されることもなく砂に突っ込んだ。

「『ブリッツ・ブロッツ』第二小隊長機被弾！

続いて、『ブリッツ・ブロッツ』第三小隊二番機被弾！」

後部座席から見張りを兼ねる航法士の絶叫が、コクピットに響いた。

『コツヴ』第三小隊二番機の航法士が、覚悟を決めた表情で自分に敬礼する姿が見えてしまった。

背中合わせに座っているため状況を把握できない通信士の表情が、絶望の色に染め上げられ、口が絶叫の形に開かれているのも見てしまった。

正面から迫り来る橙色の火箭は、すべて自分を狙っているように見えてくる。

航法士は、自分も一秒後にはあの後を追うのではという恐怖に捕らわれるが、その瞬間まで決して目を閉じまいと心に決め、ジュージの操縦にすべてを託し正面を見詰めた。

超低空飛行を続けるジュージの機体に命中する砲弾や機銃弾はなく、すべてが頭上を通り過ぎていく。

「了解！」

ジュージは視線を『ミシディア』から逸らすことなく、操縦桿を握り締めている。

列機を失ったことは痛い、今はそれに心を痛めている場合ではない。僅かでも高度を上げてしまえば、自分もその後を追うことに

なる。

部下の死を悼む気持ちを振り払い、ジュージは『ミシディア』への射点に急いだ。

訓練では決して飛んでくることのない熾烈な対空砲火は、雷撃隊のパイロットすべてに目標への距離を大きく引き離れたような錯覚を抱かせた。

だが、そのような錯覚も一瞬で過ぎ去り、数秒で射点に辿り着いた雷撃隊は、次々に腹に抱えた砂雷を投下し機体を翻す。しかし、この一瞬の間にさらに二機の機体がハトー泊地の砂に沈んでいた。恐怖のあまり操縦を誤り、一機は自ら砂海に突っ込み、一機は不用意に高度を上げてしまい機銃弾に捉えられた。

「さらに二機、撃墜！」

「了解！」

航法士の報告を妙に醒めた頭で聞いたジュージは、射点に取り付いたことを確認した。

「用意……」

撃てっ！」

四機の無念を乗せた裂帛の気合とともに、ジュージは砂雷の投下索を力一杯引いた。

ここまで来れば、もう外しようがない。

そんな思いとともにジュージは操縦桿を一旦前に押し込み、次いで『ミシディア』の巨体を避けてから力一杯引き付けた。

後から追い続ける対空機銃の火箭を振りほどき、上空へと機体を駆けさせる。

大きな爆発音に、航法士と通信士の歓喜と驚愕の絶叫が重なる。

「砂雷命中！」

「『ブリッツ・ブロッツ』第一小队三番機被弾！」

ジュージの放った砂雷は『ミシディア』左舷中央部を深く抉り、大火災を発生させた。

砂雷投下後、退避行動中に不運な一撃を背後から喰らった機体が、瞬きするまもなく爆発し、破片を砂上に撒き散らす。

永遠とも感じられる数秒の後、ジュージは遥かな高みからハトー泊地を見下ろしていた。

そこには盛大に火災炎を噴き上げ、幾つもの巨艦が苦痛にのたうつ姿を晒す地獄が展開されている。

ジュージは周囲に集まってくる配下の艦攻隊の数を数え、『ミシディア』を狙った部隊以外の彼我がないことを確認した。しばらくハトー上空を旋回し、戦果をカメラに収めるとジュージは機体を翻し、残存機体を纏めて母艦への帰投を開始した。

『ガデア』が轟音と共に転覆し、『サラマンド』がハトー泊地に着底すると同時に、戦艦『ポフト』が爆弾二発の直撃を受け、盛大に炎を噴き上げた。

ジュージの雷撃を受けた『ミシディア』が大火災を起こす横で、航行中の戦艦『アルテア』に砂雷と爆弾が一発ずつ命中する。

ほぼ同時に、『ミシディア』に連続して八〇〇キロ爆弾が命中し、この戦艦を見る間にスクラップへと変えていく。僅かな時間の間に『ミシディア』の被害は、被雷七、被弾二を数えた。八〇〇キロ爆弾の一発が不発弾だったことなど、全体の被害から見ればどうでもいいことではない。この場で最も新しいとはいえ既に進砂から二〇年を経過していた老嬢に、この打撃に耐える力はなかった。

大量の砂を腹に飲まされた『ミシディア』は、砂深の浅さが幸いし転覆こそ免れたが、その場に着底し動かなくなってしまうた。



手順が狂ったミッツは焦っていた。

このままでは爆煙がハトーを満たし、ただでさえ高いとはいえない水平爆撃の精度を大きく低下かさせてしまう。雷撃隊から無理を言って転向させた部下たちに、無駄に爆弾を捨てさせるようなことは、何があってもしたくなかった。

整然と隊列を組み、ハトー上空を進撃するミッツの目に、ドックにいる戦艦『パルム』とまだ動く気配のない戦艦『バフスク』が飛び込んできた。

瞬時に状況を把握し、ミッツは自身が率いる『コツヴ』、『ブリッツ・ブロット』、『デットン』の水平爆撃隊に目標を指さし、『バフスク』に爆弾を投下する進路を取る。

ドッグにいる『パルム』は、第二次攻撃隊に任せばよい。それよりも、いつ動き出すか分からない『バフスク』を沈める方が先だ。

攻撃開始から一〇分が経過したハトー時間の午前八時、戦艦に誤認された標的艦『セミテ』が転覆したとき、戦艦『バフスク』の周囲にいくつもの砂柱が林立した。

ほとんどは外れ弾となつて砂柱を上げるだけに留まったが、『ブリッツ・ブロット』艦攻隊が投下した八〇〇キロ爆弾が四番砲塔側面に当たり小火災が発生した。

その直後、『ブリッツ・ブロット』水平爆撃隊と行動を共にしていた『デットン』水平爆撃隊も八〇〇キロ爆弾の投下を開始する。

ルックウ機が投下した八〇〇キロ徹甲爆弾が、『バフスク』の一番砲塔と二番砲塔間の右舷にめり込んだ。一瞬の間を置いて『バフスク』の全身がぶれて見えたとすると、破口から巨大な火柱が冲天高く噴き上げられる。

ルックウが投下した爆弾は、七六ミリしかない『バフスク』の薄い水平装甲を易々と突き破り、弾薬庫に突入したところで信管を作動させ炸裂した。火と鉄の暴風が、第二砲塔の弾薬庫にあった主砲弾と装薬のすべてを誘爆させた。

艦の中でも最強の防御力を誇る主砲塔に命中したなら、『バフスク』には何の痛痒もなかったかもしれない。だが、ルックウの投下した爆弾は、もともと四〇センチ砲搭載戦艦の三〇〇ミリ装甲板を貫くためのものだった。七六ミリしかない『バフスク』の装甲板が、この一撃に耐えられる道理がなかった。

弾薬庫が誘爆し、一発でも戦艦に大きな被害をもたらす主砲弾百発分の破壊が巻き起こり、『バフスク』の艦体前部はひとたまりもなく引きちぎられた。

その爆発の破壊力は、艦の残骸を泊地对岸の小オアシスに大量に振りまく。既にこの艦が、どんな優秀なダメコンチームを以てしても救えないことは、誰の目にも明らかだった。

土手っ腹に砂雷を受け、着底していた戦艦『サラマンド』が、突然五インチ砲を急降下爆撃機に発砲した。

だが、着底したまま対空放火を打ち上げる戦艦『サラマンド』は、苛烈な訓練を潜り抜けてきた艦攻隊にとってはその静止目標ではない。傾斜により正確な照準など望むべくもない『サラマンド』に砂雷がしたい寄り、左舷艦腹に命中する。轟音とともに爆炎が噴き上がり、艦腹を大きく抉り取るが、『サラマンド』は砂雷命中にへこたれることなく対空砲火を撃ち続け、ついに爆撃機を一機撃墜した。

だが、それは既に投弾を終え、退避行動に移った機体であり、オリザニア大東砂海艦隊の被害を食い止める意味を持たなかった。

ほぼ同時に、猛炎に包まれた戦艦『バフスク』に砂雷が命中し、

これが苦痛にのたうつ戦艦にとっての介錯となった。

第一撃で妹『ガデア』を失い、自らも被雷被弾し泊地をのた打ち回っていた『アルテア』に、追い討ちをかけるように八〇〇キロ爆弾が命中する。

この一撃を以て第一攻撃隊の戦闘行動は終了した。

ハトー泊地で生き残ったオリザニア将兵たちは、怒りに満ちた目で飛び去っていくソルの国旗を両翼に染め抜いた機体を見送っている。

もし視線が熱を持つのなら、すべての機体が炎に包まれるのではないかと思うほど、将兵たちの目からは怒りが溢れ出していた。

## 第23話 強襲

第一次攻撃隊が飛び去ってから一〇分も経たない八時四九分、第二次攻撃隊がハトー上空に姿を現した。

僅か一〇分の間に、ハトーのオリザニア軍は急速に迎撃体勢を整えている。完全な奇襲となった第一次攻撃隊ですら、艦攻五機、艦爆二機、艦戦二機を対空砲火に撃ち落とされていた。高い練度を誇るオリザニア軍が手ぐすね引く中に、第二次攻撃隊は飛び込んでいかなければならない。

だが、怯えたような素振りを見せる機体は、ただの一機も存在しなかった。

その頃、機動部隊旗艦空母『コツヴ』の艦橋では、司令部参謀たちが第三次攻撃の是非について激論を戦わせていた。

その決定権を有するただひとりの存在であるナンクウ中將は、参謀たちの議論を目を閉じ、腕を組んだまじつと聞いている。航空の素人である自分の意見より、カリユウ参謀長やジツツー航空甲参謀の出す結論の方が正しいと、ナンクウは達観していた。だが、内地を出撃する前に連合艦隊司令長官ゴトム大將から内々に命じられたひと言が、ナンクウの意志を撤回へと傾かせている。

虎の子の空母六隻は、極力無傷で持ち帰れ。

「第一次、第二次の攻撃では、ハトーに貯蔵してある魔鉱石タンクまでは破壊できません。

これを破壊しなければ、オリザニアの工業力は泊地内で沈めた戦艦など、何事もなかったかのように復旧させてしまうでしょう。

ですが、魔鉱石タンクを破壊しておけば、向こう半年、いや一年以上大東砂海でのオリザニア艦隊の行動を抑えることができます。

パイロットたちにはご苦労なことはありませんが、ここは是が非

でも第三次攻撃は実施すべきです！」

ジッツーがカリユウの胸座を掴まんばかりの勢いでまくし立てる。

「そうは言うが、ジッツー君。

戻ってきてみないと分からんが、完全な奇襲に成功した第一次攻撃隊にも損害が出ている。

撃墜されていなくても、傷つき、再度飛び立つことが適わない機体もあるだろう。

パイロットたちや他の搭乗員にも傷ついた者もいるはずだ。

まもなくハトーに取り付くであろう第二次攻撃隊に至っては、どれほどの機体に戻ってこられるのか、まだ全く分からんのだ。

数字だけ見ているは、あたらしい有望な若者たちを、徒に死地に追いやるだけになりかねん」

いきり立つジッツーをいなすように、カリユウが落ち着いた声で答える。

「ハトーへの第三次攻撃も重要ですが、泊地に不在の敵空母への備えはいかがしますか？

私としては、動かないオアシス泊地より、二次元機動が可能な敵空母の方が遙かに脅威と認識します」

第三次攻撃の是非に、司令部すべての目が向いていることに危惧を抱いた航空乙参謀が口を開く。

「確か、ハトーに在泊していた空母は二隻だったな。

出てくるものなら出てきてみる。

その程度の戦力であれば、我が艦隊にとっては鎧袖一触だ。

飛んで火にいる夏の虫、といったところだろう」

傲然と胸を反らせたジッツーが言い放つ。

「確かに艦載機の収容や発艦中、兵装作業の真っ最中であれば、爆

弾一発で火の海だ。

下手をすれば機銃弾一発でも、燃料や航空砂雷、徹甲爆弾が誘爆でもすればそれまでだな」

以前より指摘されてきた空母の脆弱性に、カリユウが腕を組みうなり声を上げた。

「そのために第三戦隊と第八戦隊の砂偵を偵察に出してあります。今のところ敵空母発見の報告はありません。

大方、我々に恐れをなして、戦力保全のために退避しているに違いありません。

ここは敵空母がないという前提で、第三次攻撃隊の編制を行うべきでしょう。

もし、のこのこと出てくるようであれば、それから兵装転換を行い、爆弾を砂雷に取り替えて飛ばせばよろしい」

ジツツーはあくまでも強気である。

「兵装転換には二時間はかかります！

敵空母発見から準備など、正気の沙汰とは思えません！

万が一、我が艦隊も同時に発見され、兵装転換の真っ最中に空襲を受けたら大惨事です！

少なくとも、第三次攻撃隊の目標は決めておくべきです！」  
航空乙参謀が、悲鳴を上げるかのように叫んだ。

「手練の一撃を加えれば、残心することなく退くべしだ、ジツツー君。

ここで欲をかいて、せっかくの戦果を帳消しにするような真似は、敵に慎むべきだろう。

戦はまだ始まったばかりだ。

今日この一戦で、宝石よりも貴重な搭乗員たちをすり減らしては、この先の見通しが立たなくなる。

取り逃がした空母とも、いずれ雌雄を決するときがくるだろう。  
第二次攻撃隊を収容後、速やかに帰投すべきだ。

よろしいですね、長官？」

カリユウがナンクウに念を押すように言ったとき、第二航空戦隊  
旗艦空母『デットン』からの発光信号を読み取った通信士官が、内  
容を読み上げる。

「発、オーキキ二航戦司令官！

宛、ナンクウ司令長官！

第三次攻撃隊の目標を知らされたし！

発、オーキキ二航戦司令官！

宛、ナンクウ司令長官！

第三次攻撃隊の目標を知らされたし！」

見敵必殺の鬪将とつたわれるオーキキらしい意見の具申だ。

第三次攻撃の是非など、問うまでもない。目標を早く知らせる。  
何を迷っているんだ。

僅かな通信の中に、苛烈な意志が込められていた。

「発、ゲンチュウ五航戦司令官！

宛、ナンクウ司令長官！

第三次攻撃隊は有りや無しや！

発、ゲンチュウ五航戦司令官！

宛、ナンクウ司令長官！

第三次攻撃隊は有りや無しや！」

五航戦司令官ゲンチュウ少将からは、慎重な性格を表すような問  
い合わせがくる。

オーキキに比べ多少おつとりしたゲンチュウが、二航戦に後れを  
とってなるものかとする参謀たちに突き上げられ、渋々送った問い  
合わせであることは考えるまでもないことだった。

五航戦は、一、二航戦に比べ設立から時間も経っていないため、経験不足から技量が未熟と荷物扱いされることが多い。それだけに参謀や搭乗員たちの、一、二航戦に対するライバル心はかなりのものだ。オーキキの発光信号を見た参謀たちが、後れを取るなどゲンチユウにせつつく光景が容易に想像でき、ナンクウは小さく笑った。ジツツーに笑みを見咎められる前に真顔に戻ったナンクウは、通信士官に信号了解と返信するように命じ、また瞑想するように目を閉じ、口をつぐんだ。

ナンクウの中では、既に帰投の意志が固まりつつある。

あとはいきり立つ悍馬のようなジツツーを、いかに宥めるかだ。司令長官の権限を以て、問答無用で従わせることは可能だが、それは最後の手段にしたかった。参謀たちが納得するまで議論させ、その結論に責任を持つことが航空の素人長官にできるせめてものことだとナンクウは考えている。帰還してきた搭乗員たちが、もう一度行きたいというならば、行かせてやりたい親心もある。しかし、ゴトムから敵命された空母を無傷で持ち帰るためには、これ以上敵の哨戒砂海域に留まることは危険すぎた。

ゴトムの権威を利用することは、己が無能をさらけ出し、かつ責任転嫁するようではばかられていた。

「あの小心者！

ぐずぐずしては、いつ反撃を許すか判らんということが、なぜ理解できんだ！

こうしている間にも、所在不明の空母二隻が忍び寄っているかもしれないのに！

ナンクウが態度を決めかねているそのとき、『デットン』の艦橋ではオーキキが荒れ狂っていた。



「司令官、独断で攻撃隊を出してはいかがですか？

二航戦は一蓮托生です」

先任参謀の言葉に、オーキキの熱が一気に下がった。

「済まなんだ、先任参謀。

俺としても攻撃隊は出したい。

だが、解っているんだ。

飛行場を壊滅させたハトーに出すならともかく、空母相手に二隻分の予備兵力を今出しても効果はない。

一次、二次攻撃隊が戻ってこなければ、三次攻撃隊は編制できないからな。

だが、そのためにしておける準備はいくらでもあるというのに、あの……」

腰抜けの臆病者という、武人に対する最大の侮蔑の言葉を、オーキキはやつとの思いで飲み込んでいた。

機動部隊司令部が態度を決めかねているとき、第二次攻撃隊の各機は目標めがけて翼を翻し始めていた。

第二次攻撃隊に参加した水平爆撃隊は、二五〇キロ陸用爆弾二発と六〇キロ通常爆弾二発を積み込んだ五航戦旗艦『アパター』艦攻隊と、二五〇キロ陸用爆弾一発と六〇キロ通常爆弾六発を積んだ同じく五航戦の『アルギュロス』艦攻隊の計五四機が飛行場と港湾施設を狙った。

ファルが所属する『デットン』と『テレスドン』、そして『コツヴ』と『ブリッツ・ブロッツ』の艦爆隊のうち、エンジン不調で飛べなかった機体や、途中で引き返した機体を除く計七八機が、二五〇キロ爆弾を抱えて第一次攻撃隊が討ち漏らした艦艇に殺到する。

「いいかい、行くよっ！」

「いつでも！」

少尉、声が震えてますぜ！」

威勢の良いファルの掛け声に、任官以来お守り役を務めてくれて  
いる歴戦の偵察員のゼツカー一等航空兵曹が答える。

「ボクは脅えてなんかっ！」

武者震いだよ！」

それが本当なのか、強がりなのか、急降下を開始したファルには  
もう判らなかつた。

アイスクャンディのような対空砲火の弾丸が、天地逆向きのシャ  
ワーのように向かってくる。

周囲に砲弾の破裂に伴う黒煙が湧き上がり、第一次攻撃隊によつ  
て爆煙に埋め尽くされたハトー泊地の天地を一緒くたに繋ごうとし  
ていた。

既に目標の目視は困難で、対空砲火を目印に突進する艦爆が多い。  
第一次攻撃隊の八〇〇キロ爆弾と砂雷を受け、身動きの適わなく  
なっていた戦艦『サラマンド』に、コウモ少佐率いる『デットン』  
艦爆隊第一中隊が降爆を開始する。

満身創痍となりながら、なおも抵抗を諦めない『サラマンド』か  
ら、無数の火箭が艦爆隊に向かって撃ち上げられる。急降下を開始  
していくつも数えないうちに、被弾する機体が相次いだ。中には機  
体の損傷をもとめせず『サラマンド』に急降下を続ける機体もあ  
ったが、第一小隊三番機と第二小隊二番機が致命的な一撃を受け、  
機体のコントローラを失った。

だが、両機のパイロットはまだ息があり、目標とした戦艦にダメ  
ージを与えることが適わなくとも、せめて一太刀とばかりに機体を  
滑らせる。機体の限界が訪れる前に、二機の艦爆は港湾施設に突入  
した。

残った機体は仲間の死に躊躇いなど欠片も見せず、撃ち上げられる対空砲火を掻い潜り七機の機体が投弾に成功する。

『サラマンド』の周辺に次々と砂柱がそそり立ち、命中弾こそなかったが四発が至近弾となった。

近くの軽巡が退避行動に移った機体に機銃弾を浴びせかけるが、爆煙に妨げられて正確な照準ができず、第一中隊の被害は二機に留まった。

ファルは、コウモ隊長率いる第一中隊に続き、一呼吸遅れて降爆を開始していた。

第一中隊が投下した二五〇キロ爆弾は、高度四五〇メートルで機体から解き放たれる。エンジンの不調で途中から引き返した一機を除く第二中隊八機から投げつけられた二五〇キロ爆弾は、一層激しさを増した反撃のため第一中隊より散布界が広がってしまった。それでも七発は無効弾となったが、『サラマンド』に一発が命中する。

「敵艦に爆弾一発命中！」

ゼツカの叫びにファルは何かを返答した気がしたが、自分がどんな言葉を発したか、それどころではなかった。

背後から追い縋る機銃弾や、行く先を塞ごうとする高角砲弾を避けることで手一杯だった。もちろん、目で捕らえることのできない機銃弾や砲弾を、操縦技術でかわすなど無理なことだ。機体を左右に振ることなく、エンジンスロットルを全開にしたまま操縦桿を力一杯引き付ける。

急上昇に伴うGが身体全体を締め上げ、ともすればか細く、消え失せそうになる意識を何とか奮い起こし、ファルは戦場からの離脱にかかっていた。

『デットン』および『テレस्टン』艦爆隊が、『サラマンド』に

とどめの一撃を叩き付けていたとき、一航戦の『コツヴ』および『ブリッツ・ブロッツ』艦爆隊は、ドックに入渠していた戦艦『パルム』に襲いかかっていた。

だが『パルム』はまったく身動きができない状況にも拘らず、全艦が活火山のように見えるほど対空砲火を撃ち上げる。

自身のみならず、ドックの奥に收容されている駆逐艦二隻も守るため、空から降ってくるソル機めがけて無数の火箭が伸びていく。鉄の固まり同士を叩き付け合う不協和音が一定のリズムで鳴り響き、小賢しいソル機を絡め取るべく、火の魔鉱石と鉄の蜘蛛の巣を三隻の上空に張り巡らせようとしていた。

もちろん、ソル機も果敢に爆撃を敢行する。

自らに向かつて伸びてくるようなオレンジ色のシャワーに突入し、爆撃の照準器から艦影がはみ出るほどに急降下していく。これ以上高度を落としては二度と天を仰げないという限界で、腹に抱えてきた二五〇キロ爆弾を切り離す。天と地が入れ替わり、巨大なGが身体を締め付けるが、パイロットは渾身の力を振り絞って操縦桿を手に引き寄せた。

零型戦闘機も対空砲火の制圧に加わり、爆撃を終えた爆撃機と共に無数の火箭を『パルム』と二隻の駆逐艦に叩き込む。

『パルム』自身が装備する三十五・六センチ主砲弾を決戦距離から打ち込まれてもこれに耐え得る装甲に対し、航空機の装備する二〇ミリや七・七ミリ機銃弾では効果はない。

だが、薄い鉄板に囲われた機銃座や、戦闘服に身を包んだ兵士にとって、航空機の機銃弾であつても致命傷だ。

血飛沫が舞い上がり、悲鳴と怒号が交錯する中、必死の形相で機銃の旋回ハンドルを回し、発射ペダルを踏み込む兵士を、嘲笑うかのように九型艦爆と零型戦闘機が機体を翻す。

ソルの機体を迎撃する闘志は充分だが、初動の遅れが致命的な立ち遅れとなっていた。統制射撃の態勢を整える暇が与えられなかつ

たため、どうしても砲塔や機銃座ごとに目に入った機体を狙うことになり、照準が遅れてしまうことから機体を追いかけるように弾が飛んでいく。

不運な機体が偶然他の機を追いかける機銃弾の槍衾に飛び込み、両翼をもぎ取られ安定を失ったまま砂海に墜落する。

パイロットを射殺された機体は、原形を留めたまま進路をずらしながら高度を下げ、そのまま砂海へと突入した。

正面から複数の機銃弾にプロペラを吹き飛ばされ、エンジンを打ち抜かれた機体は、自らを爆弾に擬し敵艦に突入しようとする。しかし、最後に命中した機銃弾が燃料の魔鉱石を一気に爆発させ、腹に抱いた二五〇キロ爆弾ごと天空に盛大な爆炎を出現させた。

「けっ。」

何が皇国初の女性搭乗員だ。

ふざけやがって。

あんなど素人を登用するなら、メデイエータ戦線からの俺たちを下士官にしろってんだ！」

『ブリッツ・ブロッツ』艦爆隊第二小隊の三番機を駆るダンク一等航空兵曹が、僚機の最期を尻目に雄叫びとも罵声ともつかぬ大声を上げながら急降下を開始する。

下士官の中にはエルミたち女性飛行士官に対して良い感情を抱いていない者も少なからずいる。

皇国の生存圏拡大のため、血の汗を流してメデイエータ戦線を生き抜いてきたベテランパイロットの頭を飛び越え、いきなり士官として任官したことに對する不公平感は、どうやってもゼロにすることは不可能だった。

上官に対する暴力や面と向かったサボタージュなどは、兵から叩

き上げてきた過程で身に付いた軍人精神がかるうじて踏み止まらせていた。だが、その溜まっていった鬱憤の捌け口は、同隊に所属する新兵へと向けられていた。

女性飛行士官の任官以来、どの空母においても一部の下士官による新兵虐めが陰湿化している。もちろん、どの艦であつても多かれ少なかれ新兵虐めはあつたのだが、特に空母でのそれは酷くなつていた。しかし、士官まで新兵たちの悲鳴が届くことはなく、また届いたとしても見慣れた光景でもあることからその場限りの注意で終わってしまった、新兵たちが救われることはなかった。

ダנקの駆る機は一直線に『パルム』に向かつて急降下していく。後部座席に座る偵察員兼旋回機銃手のタツク四等飛行兵は、自身を機械と化したかのように言葉に抑揚をつけることなく高度を読み上げていた。戦場の高揚感とはまるで無縁の冷静な声の裏で、タツクはこの場にそぐわないことを考えている。

皇国の盾とならんとして飛行士を目指したが、『ブリッツ・ブロツツ』に配属となり、ダנקと組まされてから彼の人生は大きく狂い始めていた。

最初は声が小さいといつて殴られ、読み上げが遅いと蹴り飛ばされた。

訓練の後は決まって陰湿な制裁が待つており、それでも軍人としての矜持が自身の技術を上げさせていったが、それと正比例するようにダנקへの怨みもまた大きくなつていった。

みるみる下がっていく高度はやがて七〇〇メートルに達し、まもなく投弾高度である四五〇メートルに達しようとしていた。

ダנקはタツクの高度読み上げを信頼しているが、この日はそのタツクの声に違和感を抱いている。時計のように正確な読み上げと、自身の降下速度は身体が覚えている。だが、このときは降下速度から自身が掴んでいる高度と、タツクの読み上げる高度が一致しない。七百という読み上げの際、ダנקの感覚では既に六百を切っている

はずだった。

「おい、あの機体は自殺する気か！

真っ直ぐ俺たちに突っ込んできやがる！」

『パルム』の機銃座指揮官が顔を蒼ざめさせて叫んだ。

どう見ても九型艦爆のうち一機は、引き起こしが間に合わない高度になっても爆弾を投下していない。

列機が機体を翻した後も、真っ直ぐに『パルム』の機銃座めがけて突っ込んでくる。

「打ち落とせ！

死にたくないやつは、あの狂った機体を打ち砕け！」

必死の形相で叫ぶ指揮官の声に、応答する声はなかった。

誰もが指揮官同様、必死の形相で突っ込んでくる九型艦爆に照準を合わせ、銃身が焼け爛れることも厭わず機銃弾を打ち出し続けている。

「タック!?」

高度が!?!」

ダックの悲鳴ともつかぬ叫びが伝声管を伝ってタックの耳に届いた。

「もう間に合わない。

ざまあみる！」

甲高い笑い声と共に、タックの叫びが返される。

新兵虐めに耐えかね自殺する者すらいた。

特にダックに目を付けられていたタックは、怨み重なるこの下士官を道連れに自殺する道を選んだのだった。

「貴様!？」

「一体、どういう」

「ただ死んでやるもんか!

俺だつて皇国の兵士だ!

てめえを道連れに!」

ダルクの叫びとそれを掻き消すように思いのたけをぶちまけた夕ツクの言葉は、機体の腹に抱えた二五〇キロ爆弾を機銃弾が直撃した瞬間に途切れた。

ダルク機の天空を揺るがす大爆発と相前後して、二五〇キロ爆弾が『パルム』が入渠するドックの周辺に着弾し始める。

大音響が鳴り響き、砂深二メートルの砂底に激突した二五〇キロ爆弾が、火と鉄が入り混じった盛大な砂柱を巻き起こす。しかし、その外れ弾は『パルム』にかすり傷一つ負わせることはなかった。

だが、十五発まで砂底からの爆発による振動を感じたとき、ついに一発が『パルム』のボードデッキを突き破り、一二・七センチ両用砲の第九砲塔を直撃し、これを破壊した。ほぼ同時に『パルム』よりドックの奥に収容されていた駆逐艦二隻も被弾し、盛大な爆発音と共に金属の構造物が大音響を立てて倒壊する。爆風と破片が周囲の建物を薙ぎ払うように駆け抜けた後、二隻の駆逐艦は黒煙を噴き上げながら傾斜を深めていく。『パルム』の全身が一二・七センチ砲弾の誘爆で激しく痙攣し、連続した爆発音が響く中、乾ドックに轟音を立てて砂海の砂が雪崩れ込んだ。十五発に及ぶ至近弾の爆圧が、強固な乾ドックのゲートを徐々に歪め、ついに砂圧に突き破られた瞬間だった。

『パルム』の被害は第九砲塔以外には機銃弾のささくれ程度に留まったが、戦艦ほど分厚い防弾装甲を持たない二隻の駆逐艦の被害



は甚大だった。

一隻は艦尾が完全に砂に埋まり、もう一隻は船体を右舷に四十五度傾かせて全体のほぼ三分の二を砂に埋められている。中途半端な角度で傾斜が止まっているのは、決して乗組員たちの努力によるものではなく、隣の駆逐艦にもたれかかることで強制的に動きを止められたからだった。ドックの砂深が浅いというだけで沈没は免れていたが、二五〇キロ爆弾の炸裂に船体を引き裂かれ、上部構造物を打ち砕かれたその姿は、この二隻が二度と砂海上に浮かぶことはないことを確信させるに充分だった。

『コツヴ』艦爆隊の数機が、被雷し八〇〇キロ爆弾の直撃まで受けて既に氣息奄々となっていた戦艦『アルテア』に急降下爆撃を敢行する。

遅れて『アルテア』上空に辿り着いた『テレスドン』艦爆隊も、一航戦に負けまいと突入した。二五〇キロ爆弾が戦艦を沈められるとは思わないが、少しでも損害を増やしておこうという悪意が『アルテア』に襲い掛かり、追い討ちをかけるように六発の二五〇キロ爆弾が命中する。

水平装甲を打ち抜くことはできないが、それでも爆風と構造部の破片が爆弾自身の破片と共に鉄の刃と化して周囲を切り裂く。人間の身体など研ぎ澄まされたソルの刀に切り裂かれる藁屑のように切断され、どれが誰の身体の一部だったか判らないほどの破片に変えられていく。

「航海長、なんとかホスピタルポイントまで艦を運べ。

ここで沈んでは、本艦は他艦の障害になってしまう。

ホスピタルポイントまで行って座礁させれば、後で浮揚修理も可能だ。

なんとか、あと数マイルでいいから耐えてくれ」

『アルテア』艦長は艦の放棄を決断するが、それでもまだ退避という戦闘行動まで放棄する気はなかった。

航海長に向かって発せられた言葉のうち、最後の一文は『アルテア』に向かつての祈りに他ならない。このまま沈んでしまつては『アルテア』の巨体が泊地の出入り口を塞ぎ、他艦の戦闘行動に重大な障害となる。泊地からの脱出が不可能になれば、第三次、第四次と攻撃が繰り返されたとき、ハトーはオリザニア大東砂海艦隊の墓場と化してしまう。

その祈りに答えるように、『アルテア』は頑強に沈没を拒み続けた。

大量の砂を飲み込んで重くなった巨体を、這いずるような速度ではあるが移動させている。オリザニア国民の多くが信仰する神の加護でもあるかのように、驚異的な命中率を誇るソル艦爆隊の爆撃は、すんでのところまで『アルテア』の巨体を避けていく。それでも至近弾の爆圧は艦底からの侵砂を増大させ、『アルテア』の行き足は徐々に止まりつつあった。

やっとの思いでホスピタルポイントまで退避した『アルテア』は、安堵するかのようにそこで力尽き、浅い砂底に着底すると動かなくなった。

九時二十一分になってようやく全部隊に宛て、敵機は胴体の底部分に赤い丸、つまりソルの識別マークを描いてあるとの連絡が入った。

爆撃を受け、ソルの機体を見送るしかなかった地上基地要員たちの喉から、ソルに対する罵声が絞り出される。艦上で炎と鉄片と戦う乗組員たちからも、ソルに対する怨嗟の声が沸きあがるが、対応の遅い司令部に対する罵声も乱れ飛んでいた。現在進行形で火災や倒壊した建造物の中から戦友を救うために奮闘を続ける兵士たちからも、なす術もなくソル機の侵入を許した哨戒部隊や防空部隊に対

する怒りの声が上がっていたが、ソルに対する罵声も止むことはなかった。

その声を知ってか知らずか、このときになってやっと全艦艇に至急出航するように命令が下った。

命令などなくとも戦闘行動に移った艦が多い中、係留位置の関係からまだ動き出すことができなかった艦も退避を始める。

だが、その数分後、戦艦『サラマンド』は搭載機が燃料火災を起こし、係留ポイントから引き離す作業中に侵砂に耐え切れず着底する。

上部構造物は砂上にその姿を留めていたが、爆炎になでられ、倒壊し、四隻目の沈没と判定するしかないほどの被害を受けていた。

オリザニア共和国砂海軍艦隊兼大東砂海艦隊司令長官メルイイ大將は、混乱の巷と化したハトー泊地司令部にあって、この事態を収拾すべくあらゆる手を打とうとしていた。

ともすれば司令部の防空壕を飛び出し、対空機銃をソル機に向かって撃ち出したい誘惑に駆られたが、すんでのところだと思いとどまっている。もちろん卑怯や臆病がなせることではなく、司令長官が視野狭窄を起こすような振る舞いをすべきではないという大局的な判断に則ったことだ。

被害状況が刻々と報告され、ハトーの惨状が明らかになるにつれ、メルイイは自身の出世の階が一段ずつ削り取られていくのを感じていた。未来を失ったからといって、すべてを投げ出すような真似が許されるはずはなく、今まさに死に瀕した将兵を救う努力は司令長官に課せられた義務だ。

メルイイ自身、いつそ敵の爆弾が司令部を直撃し、何かを考える間もなく戦死してしまえばこんな苦勞は背負い込まなくて済むもの

をとという意識があることは否定しない。だが、彼は正しくオリザニア砂海軍の提督であり、与えられた権利以上の義務を自覚していた。遅ればせながら爆撃を受けた飛行場に迎撃機の発進を指示し、停泊中の艦艇に緊急出港を命じる。

だが、ほとんどの飛行場は爆撃で滑走路を使用不能に陥れられ、駐機していた機体のほとんどすべてを爆砕か機銃弾で破壊されていた。

停泊中の艦艇も同様で、多くの艦艇がもやい綱を解く前にソル機の攻撃を受けていた。その場で着底するもの、転覆するもの、かろうじて出港はできても泊地内で撃沈されるものが続出していた。

それでも兵士たちの戦意は旺盛で、一方的に叩かれるだけではなく、敵機を撃墜したという報告も上げられていた。

メルイイは痺れたような頭で、僅か二時間の間に起こったことを思い返していた。

第一次攻撃隊がハトー泊地に襲いかかろうとしていたとき、メルイイは朝食を取っていた。

それは平穏な毎日の光景であり、神の恵みに感謝しつつ、日常の疲れを癒す一日の始まりになるはずだった。

ソル軍がすぐそこまで迫っているなど夢想だにしないメルイイは、安息日ということもあり気が緩んでいたことは否めない。今では自覚している。だが、このときのメルイイは、ソルとの戦争が近いことをあらゆる情報や伝達から理解しており、いまのうちに遊べることは遊んでおこうと考えていた。

この日は、騎兵軍のタン中将とゴルフの予定だった。軍務では使うことのない筋肉にたまには仕事をさせ、ほぐしておくことも重要だとメルイイはオートミールをスプーンでかき込みながら考えていた。

そこへ、当番兵が駆け込んできた。

「あっ、申し訳ございません。」

御食事中でしたか」

司令長官がスプーンを持ち上げたところに飛び込んだ当番兵は、しまったという顔で背筋を伸ばす。

「いや、いま終わったところだ。」

それより何かね？」

当番兵の顔色にただならぬ気配を感じたメルイイは、食事を中断させたことに何か含むことを残さないかと心配する当番兵を気遣い、そつとスプーンを置きながら問いかける。

「はっ、はい、第一四砂海軍区司令部から小型の潜砂艇を撃沈したとの報告がありました」

直立不動のまま、当番兵は答える。

その答えに、メルイイの顔色が一変した。

「なんだとっ、何時だ？」

気色ばんだメルイイは、つい今しがたまでの気遣いなど吹き飛び、当番兵の首を掴まんばかりの勢いで言葉を投げつけた。

「一四区司令部に報告があつたのは午前六時五一分だそうです」

「なぜ、もっと早く報告をよこさなかった！」

すぐに司令部に向かう。

全軍に警戒命令を出せ！」

純白の第二種軍装を引つ掴むなり、普段の紳士的な態度をかなぐり捨てたメルイイは官舎を飛び出した。

メルイイは貴重な安息日を潰してくれたソルに内心で毒づきなが

ら、司令部へ急行する差し回しの専用車の中でシートに身を沈めていた。

この時点で彼は、まだ巨大な災厄は予感していない。せいぜいソルの潜砂艦が偵察に来て、うっかり哨戒に引つかかった程度の認識だった。開戦はいつになるかという状態でもあり、ソルの艦艇が領砂海を侵犯した事実は戦闘行為と受け取ってもよい重大事件だ。

もちろん、この事案を軽々しく考えているわけではなく、対処のために司令部には行く。だが、まずは即時報告を怠った担当士官を叱り飛ばし、始末書のひとつも書かせ、その上で対処指示を出せばかたが付くといった程度にしか考えていない。それでも本土との連絡や煩雑な命令を考えると、タンとのゴルフは諦めざるを得ないだろう。

その埋め合わせをどうするか、メルイイの思考はそれに占められていた。

だが、すでにソルの攻撃隊はハトー泊地に進入していた。

司令部の眼下で進行する惨劇に、メルイイは愕然となった。

なす術もなく打ち砕かれる戦艦や、敵の攻撃から必死に逃げまどう兵士たち、そして飛行場の方向から立ち上るいくつもの黒煙。このときのメルイイは、これが悪い夢であると思ひ込むことで精神の均衡を保とうとしていた。だが、自分がこの場の最高責任者であり、唯一事態を收拾する権限を有する立場が、彼を現実に取り戻した。

敵機は少しずつ翼を翻し、ハトー上空から立ち去りつつあるが、第二波が来ることは確実とメルイイは考えていた。

不埒なソルは、第一波の奇襲成功に警戒心を緩め、碌な防衛も考えずに突っ込んでくるだろう。その慢心を打ち砕いてやる。

メルイイは対空陣地の整備と全艦の泊地外への脱出、そして航空機輸送任務で現在この砂海域に戻りつつある空母部隊に、周辺砂海域の索敵を行い、速やかにソルの攻撃機部隊を殲滅するように命じ

た。

大東砂海艦隊の損害が、どれほどになるのか、どの程度に食い止められるかは、まだ想像もつかない。

だが、ただ一つ確実なことがある。それは自分のキャリアがこれで終わりだということだ。むざむざと敵の奇襲を許し、一日で大東砂海艦隊を壊滅させられた提督を許すほどオリザニア砂海軍は甘い組織ではない。

『あの時、ミニッツと同じように辞退しておけば……』

メルイイは、ほとんど時間を空けずに襲ってきた第二次攻撃隊を睨みつけながら、大東砂海艦隊の司令長官に任命されたときのことを思い出していた。

前任者のリーソン大将がローザファシスカ大統領の逆鱗に触れ解任されたとき、彼の後任に推挙されていたのはメルイイの親友でもあるミニッツ少将だった。しかし、ミニッツ少将は、この内示を峻拒した。五〇人以上の上官を飛び越して司令長官の地位に就いてしまえばいらぬ恨みや妬みを買うことは間違いない。そのような状態で、まともな組織に運営できると思うほど、ミニッツはうぬぼれてはいなかったと同時に自身が可愛かった。

メルイイは、その代役だった。

司令長官という立場に目が眩んだと言われれば、それまでだろう。それを否定する気はメルイイにはないが、困難な状態に置かれた砂海軍を見捨てる気もなかった。誰かがやらねばならないことであり、その誰かがたまたま自分だったのだと考えていた。

だが、それもこれで終わりだ。

もし、ソルの爆弾や、機銃弾が自分を打ち倒さなければ、だが。

やがて、すべてのソル機が翼を翻し、北西の空へと消えていった。一機の七型艦攻が、ハトー上空を何度も旋回し、己が戦果を噛み締めるようにして、全機の後を追う。

「ふざけやがって、何だあの機体は！」

俺たちを嘲笑うために、あんなことをやってやがる！

正々堂々と戦うこともできず、卑怯な不意打ちで上げた戦果がそんなに誇らしいか！」

一機だけ残るエンジンの爆音に上空を仰ぎ見たひとりの兵士が、血涙滴らんばかりに叫んだ。

ハトー泊地攻撃隊総指揮官ミッツ中佐は、その義務感から第一次、第二次攻撃の全てを上空から見届けたに過ぎない。だが、まだ消火活動や倒壊した建物の下から戦友を救い出すという戦闘を続けている将兵にとつて、ミッツ機が取った行動はただの嫌味でしかなく、更なる怒りを増幅させる効果をもたらしていた。

メルイイは、その機体を見送った直後、まだまだ事は終わっていないことを自覚した。

倒壊した建物や着底した艦艇に取り残された将兵の救助を、真っ先に行わなければならない。火災を起こした建物や艦艇の消火活動も食い止めなければ、さらに人的被害が拡大してしまう。建物や艦艇、飛行機といったものは壊されたらまた作ればよいが、経験を積んだ将兵は金を出せばすぐにできるといえるものではない。特にこのように戦闘を経験し、ソル軍の実力を肌で知った将兵は、宝石よりも遙かに貴重な存在だ。巨大な爆弾孔を開けられた滑走路の修復、傷ついた艦艇の修理などは後任の司令長官に任せればよいが、彼らを救うことが自分にできる最後の仕事だと、メルイイは自覚していた。

メルイイは打ちひしがれて悄然としている司令部要員を、敗軍の将とは思えないような大声で奮い立たせ、矢継ぎ早に命令を発して



いった。

第一次攻撃隊は、第二次攻撃隊がすべての攻撃を終えた頃に、母艦へと帰り着いた。

「帰って来たね……」

ルックウが誰にも聞こえないほどの小声で呟いた。

「少尉、気をつけてください。」

最後の着艦で失敗したら、全軍の笑いものですよ。」

偵察員席から茶化すような声が、伝声管を伝わって聞こえてくる。

「解ってます。」

「ここでへマなんてしません！」

着艦は最も難しい技術を要する。

ルックウは気持ちを落ち着け、『デットン』からの着艦許可を待っていた。

「頼もしい限りです、少尉。」

華麗にお願いしますよ。」

伝声管を通じて最後尾で背中合わせに座っている魔信兼機銃員からも声が届いた。

編隊を組んで高高度からの攻撃を終えたそれぞれの水平爆撃隊は、その後も編隊を崩すことなくこのままハトー泊地を後にしていた。

往路の先頭は総隊長のミッツ機が勤めていたが、復路はそれぞれの小隊長機がその任に当たっている。このため小隊長機の偵察員には、航路計算に長けた航法のベテランたちが配されている。その点では水平爆撃隊が往路で行方不明になる確率は、ほとんどないと言

ってよい。迎撃機を制空隊の零型艦戦がすべて叩いていたため、水平爆撃隊を襲う敵機がなかったことや、対空砲火も急降下爆撃隊と制空隊を相手取ることでも手一杯だったこともあり、水平爆撃隊に被撃機はない。

出撃時から、戦果確認のためハトー上空に留まったままのミッツ機を引いた機数が機動部隊上空に姿を現したとき、攻撃隊の安否を気遣っていた全将兵から歓喜の声が爆発した。

「雷撃隊と艦爆隊、制空隊が戻る前に、水平爆撃隊を收容しろ。」

もし、途中で雷撃隊か艦爆隊、制空隊が戻れば、そちらを優先するんだ。

高高度から爆撃した水平爆撃隊より、敵艦や飛行場に肉薄した雷撃隊と艦爆隊、制空隊の方が被害は大きいはずだ。

被弾して傷ついた機体や、負傷したパイロット、搭乗員がいる機体は、一刻も早く着艦させるんだ」

ホンリユウが『デットン』の艦橋で飛行長に命令する。

「艦長、第三次攻撃に備え、被害の大きな機は砂海投棄でよろしいですね？」

飛行長はオーキキ二航戦司令官をちらりと見ながら問い返す。

「もちろんだ。」

被害の大きな機はその場で投棄してくれ。

一機でも迅速に收容するためにもな。

修理の当てがない機のために、昇降機を塞ぐ時間が勿体無い」

オーキキは艦の運用に口を挟むつもりはない。

ホンリユウの返答を聞き、大きく頷くことで責任の所在は我にありとだけ告げていた。

九時五六分より、水平爆撃隊の着艦が開始された。

水平爆撃隊が機動部隊上空を旋回し、着艦の順番を待っているところに、三々五々他の三隊が生還し始める。

風が強く、損害のまったくない水平爆撃隊ですら着艦に困難を来たしている状態で、機体に多数の弾痕を刻まれた雷撃隊や艦爆隊、制空隊が安全に着艦できるか、誰もが危惧を抱いていた。着艦の衝撃で車輪脚がへし折れないか。車輪脚だけでなく機体自体が着艦の衝撃に耐えられないのではないか。水平爆撃隊に比べ急劇な機動が多かった機体の燃料が、着艦を待つ間に切れるのではないか。それ以前に負傷した搭乗員たちの命が、着艦を待つ間に消えてしまわないか。

各母艦の艦橋で双眼鏡握り締め、甲板で担架や消火器を抱え、着艦を見守る全将兵の思いはそこにあつた。

「九型艦爆、七型艦攻、帰還します！」

続いて零型艦戦、艦隊上空に進入します！」

見張り員が、歓喜の声を上げる。

出撃したときに比べ、僅かに数を減らしているように見えるが、水平爆撃隊のような編隊を組んでの帰還ではないため、実際にどれほどの被害があつたかは全機を収容してみないと判らない。

機動部隊上空で旋回し、着艦の指示を待つ機体の総数は、誰にも判別できなかった。

「帰ってきましたよ、エンザ中尉」

極度の緊張から、エルミの声は震えていた。

投弾までは必死であり、対空砲火を恐れる余裕すらなかった。

だが、何発か機銃弾の破片が命中したものの、墜落に直結するような被害を受けることなく戦場を離脱していた。だがそれ以来、生への執着が蘇つたエルミは、無事母艦へ戻ることができるかどうか、急に不安になっていた。

極度の喉の渇きを感じ、普段であれば節約に努める水をついがぶ飲みしていた。

気付いたときには母艦に戻るまでの必要量ぎりぎりしか残っておらず、万が一にも追撃を受けてしまえば、例え逃げ切れたにせよ母艦までに脱水症状に陥りかねなかった。それだけでなく、燃料となる魔鉱石からの魔力の反応が徐々に薄れ始め、こちらも母艦に戻るぎりぎりしか残されていないようだった。

「少尉、たとえ着艦に失敗して機体を傷付けても良い。

焦らず、落ち着くんのだ。

大丈夫、貴様ならできる。

ここまで来れば水も燃料も心配ない。

危ないと思ったら、やり直しゃあいいんだ。

気楽に行け、エルミ」

努めて明るくエンザが声を掛けた。

ここまで着て母艦の飛行甲板を傷付けるような真似は許されない。後続機が着艦できなくなってしまうからだ。

「はい、大丈夫です。

見事、着艦して見せますよ」

エルミは信号灯の明滅で自身の着艦の順番が後回しにされたことを確認しながら、違うことを考えていた。

往路とは違い、編隊を組まずに小隊単位か単機で復路を飛んだ艦爆隊の何機がここまで辿り着けたのか。

少なくとも艦爆隊の三機が撃墜されるのをエルミは見た。

誰が戻ってこないのか。どの艦の機体なのかまでは、エルミは見ている余裕がなかった。エンザも余裕がなかったのか、それとも同期の死を知らせまいとしているのか、被撃墜機に関しては何も言っていない。今は戦闘直後の高揚感に身体が満たされているが、戦友

の死をどう処理してよいか、初陣のエルミには想像ができない。帰還した機体が減っていることを、感情が認めまいとしていた。

やがて、エルミ機に向かって信号が送られ、エルミは機体を着艦コースに乗せる。

強風が、機体と艦体をあおり続けている中、エルミの機体は『デットン』に舞い降りた。

第一次攻撃隊は一〇時三〇分頃までにミッツ機を除く全機が帰艦したが、各母艦の飛行甲板上だけでなく艦内すべてが喧騒に包まれていた。

修理不能と判断された機体が、惜しげもなく砂海に投棄され、一瞬のうちに沈んでいく。

「貴様、何をしゃがる!？」

降りたばかりの乗機を投棄されようとした搭乗員が、苦痛に顔を歪ませて機体を押し整備員に食って掛かる。

まだこの機体は飛べる、もう一度ハトーに飛ぶと信じて必死に機体を持ち帰ってきた搭乗員にとって、整備員が取った行動は到底許せることではなかった。

「やかましい!

一秒でも早く甲板を空けなきゃ、後から帰ってくる傷ついた機体が砂海に落ちるんだ!

俺たちだって……俺たちだって!」

我が子同然に慈しむようにして整備した機体を砂海に投棄することとは、整備員にとっても身を切られるような痛みを伴っている。

甲板に降り立った搭乗員に投棄の妨害をされた整備員が、血涙を流さんばかりの表情で搭乗員を振り払い、それでも立ち向ってくる者を殴り飛ばす。

同じような光景がどの母艦でも繰り広げられ、甲板に投げ出された救護班搭乗員たちが救護班に諭されていた。もちろん搭乗員にしても、戦友を砂海に叩き込みたいというわけではない。状況を把握するなり、頬を押さえながらも機体の投棄に手を貸し始めた。

「済まなかった。」

そういうことなら手を貸すぜ」

「こちらこそ申し訳なかった。」

決して貴様が憎いというわけじゃないんだ。

それは解ってくれ」

あちこちで互いに謝り合う搭乗員と整備員の姿が見られ、飛行甲板には急速に空間が広がっていった。

「『デットン』だ！

さすが、ゼツカ！

無事還れたよ！」

九型艦爆のコクピットに、ファルの声が響いた。

第二次攻撃隊は、第一次攻撃隊に遅れること約一時間の一一時三〇分より母艦に帰投し始めていた。

「そんなでかい声、出さなくても聞こえますよ、少尉。

突入のときより元気なんだから」

少しだけ呆れたような、明るいゼツカの声が伝声管を通じて返される。

今のところファルが落ち込んだ様子は見られない。

だが、ゼツカはこの後のファルが心配だった。

第二次攻撃に参加した『デットン』艦爆隊のうち、少なくとも一機が爆砕される光景を見ていた。帰艦後に集計してみなければわからないが、どれほどの戦友がハト―上空に散華したかわからない。

厳しい訓練を通して培われた絆は、友人という域を遥かに越えていた。中には馬の合わないものもいるが、それでも失ってしまえばどのような激情が襲ってくるか、自身がメデイエータ戦線で味わった経験がファルを襲うことは間違いない。

だからといって戦意を失うことがあつては、将兵としては失格だ。ファルやこれが初陣となつた他の女性飛行士官たちが、どのように自身の心に折り合いを付けるかベテラン搭乗員のゼツカは心配になつていた。

「あれ、ファルじゃない？

無事だつたんだ！」

「ファルの機だよ！」

歸つて来たんだ！」

第二次攻撃隊帰艦の報を聞き、搭乗員待機所から出てきていたルツクウとエルミが手を取り合つて喜ぶ。

ほぼ完全な奇襲となつた第一次攻撃隊と違い、第二次攻撃隊は敵が殺意と憎しみに溢れた迎撃態勢を整える中に突入しなければならなかつたのだ。

まだ正確な数字を搭乗員たちは知らされていないが、第一次攻撃隊ですら九機の被撃墜機が出ている。第二次攻撃隊がどれほどの被害を受けたのか、ふたりはそれが何よりも心配だつた。

できることなら第一次攻撃隊がすべての対空火器を潰しておきたいとは思つたが、ただか一八三機の航空攻撃力では不可能なことは解つていた。

「ここでヘマはしないでよ、ファル」

「せつかく歸つてきたのに、これで失敗したら元も子もないんだか

ら

ふたりがハラハラしながら見守る中、ファルの機体は安定した機動で『デットン』の飛行甲板に着艦する。

整備員たちが機体に取り付き、救護班が担架を抱えて待機する中、満面の笑みを湛えたファルと、やれやれといった表情のゼツカがコクピットから降り立った。

ふたりが走り寄り、ファルを搭乗員待機所に引きずっていく。

呆気に採られるゼツカが三人を追いかけるが、その後ろでは整備員たちがファルの機体を砂海に投棄し始めていた。

第一次攻撃隊の収容時にも見られた光景だが、ファルが痙攣を起こして火の魔法を発動させないとも限らないと判断したルツクウとエルミは、ものも言わずにファルを連れ去ろうとしていた。

「ちよつ!？」

何!？

何が起きたつて言うんだい!？

ボクは大丈夫だつてば!」

「少尉たち、いつたい!？」

お手伝いします!」

ファルが慌てふためくが、ルツクウとエルミの視線の先を見たとツカは振り向いて状況を把握するなり、駆け寄ってファルの腰を抱え上げた。

整備員たちは、元気一杯の女性飛行士官を説得する手間が省けたと胸を撫で下ろしながら、掛け声を合わせてファルが必死に運んできた機体を飛行甲板の縁まで運んでいた。

「ちよつと待てえ!

ボクの機体があ!

捨てるなあ!



放せえ！

エルミ、ルックウ、ゼツカ！

覚えてろお！」

状況に気付いたファルが暴れながら叫ぶが、ルックウとエルミはともかく、戦場で鍛え抜いたゼツカを振りほどくには至らず、そのまま搭乗員待機所へと連れ去られていった。

大きな混乱もなく、第二次攻撃隊は一三時頃に收容を完了した。

ハトー作戦は、第一次攻撃隊、第二次攻撃隊の二波三五機がハトー泊地に殺到し、戦艦四隻、標的艦一隻、敷設艦一隻を撃沈した。それ以外にも戦艦一隻、軽巡二隻、駆逐艦三隻を大破、戦艦三隻、軽巡一隻を中破、その他の補助艦艇二隻を大中破し、二三一機の航空機を撃墜破という戦果をあげた。

六隻の空母が想像以上の戦果に湧きかえる頃、第八戦隊の重巡『ドラコ』と『ケロニア』では、砂偵の無事を祈りつつ空母護衛の任に付いていた。

機動部隊周辺砂海域の哨戒任務に就いていた第八戦隊と第三戦隊から飛び立った四機の砂偵は、既に收容されていたが、リンたちが乗るハトーを先行偵察した二機の砂偵がまだ帰還していなかった。

やがて、砂平線の彼方にゴマ粒のような影がふたつ見え、急速に複葉機のシルエットを形成していく。

殊勲の機体の無事が、高声放送を通じて全艦に知らされると、歓喜の声が爆発した。

二機の活躍がなければ、ハトーの詳細を機動部隊が知る術はなく、見当違いの場所に殺到するという失態を演じかねなかった。

『ケロニア』機がハトーに敵艦隊が在泊していることを知らせ、リンが操縦する『ドラコ』機がハイナ泊地には敵影がないことを確

認している。どちらも重要な情報であり、敵が二泊地に分散して停泊している可能性も否定はできなかった。そうなれば、それぞれの攻撃隊を二分することになり、航空打撃力は極端に低下する。もし、片方の泊地だけを叩くという選択であれば、敵の残存兵力による迎撃や反撃は熾烈なものになる。そうなったときの損害がどれほどのものになるか、果たして艦隊自体が無事でいられたのか、想像もできないことだった。

程なくして、リンの機体が『ドラコ』の上空を旋回し、揚収の夕イミングを待つ。

『ドラコ』が大きく取り舵を切り、次いで面舵に切る。こうすることで艦の後方に凹凸のない静砂面が形成され、砂偵の着砂が可能になる。機敏な機動でリンが砂偵を着砂させ、『ドラコ』がゆっくりと後進を開始した。砂偵の揚収時には艦を停止させなければならず、このとき艦は無防備な状態になり、敵潜砂艦からの雷撃でもあれば回避することはできない。

だが、殊勲機の収容に当って、誰一人として艦の危険を省みる者はいなかった。

見張り員たちが目を皿のようにして周辺の砂面を凝視し、聴音員は僅かな不審音も聞き逃すまいと耳に神経を集中させる。

ある機銃座は銃身に仰角をかけ、別の機銃座は目一杯俯角をかける。万が一敵機や敵艦の襲来があれば一歩たりとも近づかせまいと、射手は引き金のペダルに足をかけ、旋回仰角手はハンドルに掛けた手に力を込めていた。

護衛の駆逐艦が周囲を駆け回り、一二センチ主砲と機銃をいつでも発砲できる態勢を整えている。もちろん、潜砂艦の襲来があれば、いつでも爆雷を投射できる態勢も整っていた。

緊張が続く中、後部座席から這い出た偵察魔信員が、『ドラコ』から下ろされたデリックのフックを砂偵に固定する。

強風で艦の動揺が大きくなり、吊り上げられた砂偵が振り回される。危険を察知した甲板員が救命浮環を投げ、カッターを下ろす準備を整えた。

砂偵が大きくよるめき、主翼が砂中に突っ込んで拉げる。

リンと偵察魔信員は躊躇うことなく、砂偵に備え付けの救命浮環を手にする。砂面に身を躍らせた。そして、少しでも浮力を確保するため、投げ込まれていた救命浮環に向かって砂を掻いていく。

甲板員たちによってカッターが下ろされ、一糸乱れぬオール捌きで二人に向かって突き進む。

破損した砂偵をデリックが吊り上げ、航空甲板に下ろすと同時に救命浮環に辿り着いたふたりをカッターが救助したとき、『ドラコ』の艦上は歓喜の声に溢れていた。

「リン、お帰り。」

『ドラコ』の最高殊勲じゃないか！

リンの偵察がなきゃ、この攻撃もどうなっていたか判らんし、見づからなかったから奇襲も成功したんだぜ！」

レグルが偵察魔信員とも強く抱擁を交わし、互いの無事を喜び合っただけからリンの手を握った。

いくらなんでも許婚ではない女性に、それも戦闘行動中の艦上で抱きつくわけにもいかず、固い握手をするに留まっていた。

「ありがとう、レグル。」

帰ってきたよ。

ちゃんと制空隊の零型艦戦がついていてくれたから、怖くなかったんだ。

ソルに帰ったら、『コッヴ』に行っておなきゃ」  
レグルの手を握り返しながら、リンが上気したような顔で言った。

「早くシャワーでも浴びてこいよ。  
殊勲の英雄がいつまでも砂まみれじゃ様にならんぜ」  
元気そうなリンの表情に安心した飛行長が声を掛ける。

「はい、そうさせていただきます。

飛行長、最後の最後に大事な砂偵を壊してしまつて、申し訳ございません」

リンが頭を下げるが、飛行長は鷹揚に手を横に振る。

「少尉の責任じゃありませんぜ、気にしないでください、リン少尉。あの揺れじゃどうしようもない。

甲板員たちだつて、あれ以上どうすることもできやしませんつて。こんなときのために俺たちがいるんですぜ。

あと、責任を取るための飛行長つてもんです。始末書でも何でも書いていただきますようや。

ね、飛行長」

笑いながら胡麻塩頭の整備班長が大声で言い、一瞬でしかめっ面になつた飛行長が軽く頷く。

「その通りだ、リン少尉。

そんなこと気にする必要はない。

今はゆつくり休みたまえ。

早く、その砂まみれの飛行服を脱いでこい」

飛行長はリンを安心させるように笑顔を作つてから言う。

なんなら、ここで脱いでもいいぞという野次に笑顔を返し、リンは風呂場に向かうドアを開けた。

「艦隊進路、二五度。

その後は規定に従って随時変針だ

艦長、ソルに帰ろう。」

「おもかあじ、進路、二五度！」

ナンクウの命令を艦長が航海長に伝え、舵輪を握る兵に航海長が命令する。

情性で直進を続けていた『コツヴ』の巨体が右舷へ舵を切り、旗流信号と発行信号で変針の命令を受領した各艦が後続する。

艦内に凱歌がこだまし、極一部に戦友を失った悲しみにくれる者が声を殺して涙を堪える中、機動部隊はソルへと航路を取った。

ハトーを巨大な破壊が蹂躪する四時間半前、一月七日の安息日オリザニア首都時間で午前九時、ハトーは午前三時半。ソル砂海軍機動部隊の六隻の空母では、整備班が出撃する機体の最終調整に余念がない頃、海軍武官補佐官シヨウミ中佐は大使館に出勤した。

大使館玄関のドアの前は配達された新聞の山が築かれ、郵便受けには魔報が溢れんばかりに突っ込まれている。シヨウミは気付いていないが、その魔報の中に九〇二号報の一四部と、そしてオリザニア側に回答書手交時間を指定した訓令九〇七号報が入っていた。だが、魔報がソル本国からの重要な伝達であることは、考えるまでもなく解っていた。

しかし、当直の者は早朝から教会に行ってしまった、事務所は蛻の殻だった。

シヨウミに遅れてカツツ書記官が出勤してくるが、時間は既に九時を回っていた。

それでもカツツは、大使館員の行動に呆れかえり苛立つシヨウミ

を後目に、コーヒーをゆつくり飲み始めた。カッツはコーヒーを二杯飲み終えて、ようやく机中から九〇二号電を取り出し、一本指でのタイプ打ちで下書きを始めた。

昨夜、カッツは安息日一日をかけて一三部の下書きと清書をしていれば、そのうちに一四部と手交時期指定の別電が来るだろうと予想していた。カッツはこの緊迫時にあつて、『何時でもオリザニア側に提示できるよう』にしておけという本省からの命令、つまり届いた文書は直ちに清書まで完了すべしとの責務を果たす気はなかった。

午前九時過ぎから一〇時までに出勤した電信室員達が、『大至急』指定のある九〇七号電を解読すると、それは回答書の手交時間指定の訓令だった。

『七日午後一時を期しオリザニア側に、なるべく國務長官に、貴大使より直接手交ありたし』

時に一〇時一〇分。

血相を変えたセイメー通信官が、カッツに十四部を届ける。

事務所内は、一転して緊迫した空気に包まれた。

それまでのんびりと九〇二号電一三部までの途中をタイプしていたカッツが懸命にタイプするが、緊張のせいか度々打ち間違え、そのページを最初から打ち直す羽目になりさらに清書が遅くなる。

一時には九〇二号電の一四部が解読されたが、まだ全体の半分までしか清書されていない。

一四部は短い文章で、明確な宣戦布告の言葉はなく、ただ交渉打ち切りを告げていた。だが安息日に、しかも午後一時と限定して、さらにデル國務長官に直接渡せというのは、もはや意味するところは明らかだ。

九〇二号電一四部と『午後一時手交』訓令を傍受し、既に解読し

たオリザニア政府首脳と国務省は、ソルが何らかの軍事行動を起すことを確信していた。

だがソル大使館では、今なお国交断絶が即戦争に直結するとは、欠片も考えていなかった。

正午を過ぎた。

既に、午後一時に間に合わせるなど、どうやっても無理な時間だ。ノム大使の秘書が国務省に魔道通話で連絡を取り、デルとの面会を午後一時四五分に延期してもらった。

カツツは必死にタイプするが、一本指で一文字ずつ確認しながらのタイピングは遅々として進まず、それにも間に合わせることは不可能になる。

ようやく清書が終わった覚書を持ち、両大使の車が大使館を出たのは、午後一時五〇分。ハトー攻撃開始から二五分が経過した後だった。

ハトー攻撃を知らされていない両大使が、デル長官に面会したのは二時二〇分。

「長きに渡る私の外交官人生の中で、これほど恥知らずで、これほど無意味な文書に出会ったことは、いままで一度もない」

ノムから交渉打ち切りの回答書を手交されたデルは、既に内容を把握していたにも拘らず、長い時間をかけて読む振りをした。

そして、固唾を呑んで見守るノムとクリスに冷たい視線を投げかけ、オリザニアの品位を汚さぬように注意深く侮蔑の言葉を選んで口にした。

「長官、いったいどうされたのです？」

「皇国は礼を尽くして文書を作成し」

「現在、ハトーは貴国の攻撃隊に襲撃を受けています。」

従つて、このような欺瞞に満ちた文書など、今更無用。

貴官たちとの長い友情があればこそ、こうして面会することになりましたが、私にはこの面会はまったく以つて無意味なものと思えません」

デルはノムの言葉を遮り、顎をしゃくつてドアを示した。

これ以上はない屈辱だったが、祖国の取つた恥知らずな行動に打ちのめされたノムとクリスの両大使は、デルに反論する気力すら失つていた。

ノムとクリスがデルに手交した『皇国政府ノ対オリザニア通牒覚書』は七項からなる長文で、これまでのソルの立場を改めて述べ、交渉の打ち切りを通告する文書だった。

だが、簡単に言えば『もう交渉は止めます。もし戦争になつても、それは仕方がないと思つて下さい。仮に、この瞬間に戦争状態に突入しても、ソル皇国としては仕方がないことだと考えています』という程度の内容でしかなく、どこをどう探しても開戦を決意したという文章は見当たらない。

『宣戦布告』の文書としては、まるで通用しないものだった。

既に解読していた暗号から、今日この文書が手渡されることも、ソル軍が何らかの行動を起こすこともデルは承知していた。

だが、宣戦布告とはおよそかけ離れた内容から、せいぜい南方資源地帯への新たな進駐程度であろうと、大統領を始めとしたオリザニア政府は考えていた。しかし、ソル皇国はこのような文書の裏でオリザニア大東砂海軍最大の要衝であるハトーに、大規模な機動部隊を密かに送り込んでいた。新たな進駐程度であれば、大使を国外退去にする必要もなく、非公式に交渉は継続できる。オリザニア軍の体制を整える余裕は、充分すぎるほどあるはずだった。

それを欺瞞に満ちた文書が、粉々に打ち砕いてしまったのだ。



これ以上はない屈辱だった。

自分たちが欺瞞に満ちた時間稼ぎをしようとしていたことは棚に上げ、デルはノムとクリスの両大使を応接室から追い出した。

「外交官ともあるう者が、祖国の意志を把握できないとは。」

結果的に、我々同様、彼らもソル皇国に裏切られたということか。デルは、悄然として部屋を出て行ったノムが閉めたドアに向かって、小さく呟いた。

もし、交渉打ち切りの文書がハトー攻撃の前に手交されていたとしても、宣戦布告文書でない以上、ハトー攻撃は不意打ちの卑怯な振る舞いであることに変わりはない。

しかし、交渉が打ち切られたということは、いつ戦争へと発展してもおかしくない状態だ。その状態にあつて不意打ちを喰らうなど、軍の怠慢以外の何物でもない。そうなつては国民の怒りはソルと軍部、そして政府へと分散してしまう。国民と議會をひとつにまとめ、ソルとの開戦を認めさせ、次いでドラゴリーでの戦争に介入するには、どこかでソルによる卑怯な振る舞いが必要だった。

在オリザニア外交官たちの鈍感としか言いようのない情報への感覚が、オリザニアに正義の御旗を与え、同時にソル人に『騙し討ち』の汚名を着せることになった。

## 第24話 喜怒

「何だつて!？」

大統領官邸の書齋に、オリザニア協和国大統領ローザファシスカの声が響いた。

ちょうど昼時であり、側近と昼食を摂っている最中にかかってきた、大統領直通魔道通話の受話器に向かって、ローザファシスカは信じられないという表情になっていた。

「本当です。

報告を読み上げます」

受話器の向こう側から砂海軍長官の震えたような声が届く。

砂海軍長官自身、未だにハトーから上げられてきた報告を信じられなかった。いや、信じたくなかったのだった。

『ハトー泊地空襲さる。これは演習ではない』

このひと言が意味することはただひとつ。

ソルがオリザニアに向かって戦端を開いたのだ。

砂海軍長官は、作戦本部長から届けられた報告に、弾薬庫が誘爆した戦艦『バフスク』の首脳陣同様の衝撃を受けていた。もっとも、誘爆の衝撃で戦闘指揮所の天井まで跳ね上げられ、分厚い鉄板に頭蓋骨を打ち砕かれて即死した『バフスク』の艦長よりは、生きているというだけでも遥かにマシな衝撃ではあったが。

「何かの間違いではないのか？」

もしかして、ネグリットの間違いじゃないのか？」

砂海軍長官は、まだ信じられないという表情で作戦本部長に問い返した。

「私も間違いだと思いたいのですが、間違いなく攻撃されたのはハトー泊地です」

作戦本部長の声を最後まで聞かず、砂海軍長官は大統領直通の魔通受話器を取り上げていた。

砂海軍長官からの報告を受けたローザファシスカと側近は、しばらくの間顔を見合わせていた。

「何かの間違いでしょう。」

ソルがハトーを攻撃などできるはずがありません。

「そんな莫迦なことが……」

側近が顔を蒼ざめさせて言った。

だが、ローザファシスカはこの報告を事実と認めざるを得なかった。

砂海軍長官ともあるう者が、大統領に一杯食わせようとふざけた魔通をよこすなど、どう考えても正気の沙汰ではない。砂海軍長官の震える声が、真実であることを物語っていた。

「この報告は、多分本当だろう。」

正式な宣戦布告もなくメディアエータと開戦したソルがやりそうな思いもよらないことだ。

彼らは、大東砂海の平和について論じ合っているまさにそのとき、平和を叩き壊すこんな大作戦を練っていたことになる」

そう言いながら、ローザファシスカは沸々と怒りが湧きあがってきていた。

ハトーから西に二〇〇海里の砂海上の第八任務部隊旗艦を務める空母『リユカーン』の長官公室で、司令長官ハージイ中將はハトー

空襲の報告に怒り狂っていた。

コーセキオアシスへの航空機輸送任務からの帰り道、ハトー空襲の報告を受ける八時間ほど前に、ハージイは前方哨戒を兼ねて十八機の急降下爆撃機をハトーへ先行させていた。

その機体を見送った後、ハージイはシャワーを浴び、丁寧に髭を剃り、雑多な報告を受けたあと、副官と一緒に朝食を摂った。そして、食後の二杯目となるコーヒーに口をつけようとしたまさにそのとき、司令長官公室の魔通が鳴り、副官は受話器を取った。

「長官、ハトーが空襲を受けたとの無線魔通を、当直将校が受信しました」

受話器を置くなり、副官は震えて途切れそうな声を何とか絞り出した。

「畜生、ハトーの薄らボケども！

味方撃ちをやりやがったな！」

コーヒーカップを叩き付けるように置き、ハージイは副官が飛び上がるほどの大声で怒鳴った。

送り出した十八機を敵機と間違え、ハトーの防空砲台が発砲したのだと彼は咄嗟に思っていた。ハトーが他国から空襲を受けるなど、彼はこのとき想像すらしていなかったのだった。

「メルイイの大莫迦野郎！

それは味方の艦爆だ！

俺の大事な部下たちだと、メルイイの莫迦野郎に言ってやれ！」

ハージイがさらに怒鳴ったとき、通信参謀が長官公室のドアを蹴破らんかの勢いで入室し、ハージイに魔通の綴りを渡した。

『ハトー空襲さる。これは演習ではない』

さっと目を通したハージイは、文字通り怒髪天を衝いた。

「全艦第一戦闘配置！」

畜生！

この辺りに敵の空母がいるはずだ！

探し出して護衛を含めて一隻残らず砂葬にしてやれ！

畜生！

汚い奴らめ！

和平の交渉をしていながら、薄ら汚い謀略を！

正々堂々たる宣戦布告もせず、戦争を吹っ掛ける卑怯者め！

畜生！

敵は、ソルだ！」

ハージイは参謀たちに怒鳴りつけるや否や、艦橋へと走り出す。

ついさっきまでソルの艦船を見たら、宣戦布告など関係なく沈めてしまえと命令していたことは棚に上げ、ハージイは怒り狂っていた。

このとき、怒りを燃え上がらせたハージイとローザファシスカは、オリザニアでも特異な存在だった。

多くの人々は、大統領府が『ハトー空襲』発表したか、まともに取り上げるマスメディアはほとんどなかった。

大統領ばかりでなく、政府首脳や軍の首脳であっても、ソルがハトー歩空襲することはおろか、空母でハトーまでやってくることすら不可能だと信じ込んでいた。政府や軍の首脳ですらそのような認識であったのだ。マスコミを含む一般の国民にしてみれば、ソルと戦争するなど想像の埒外だった。

大統領府が発表した時間から、新聞が間に合わないのはともかく、魔道放送の全国放送でこの大ニュースを伝えた放送局は、たったの一局しかなかった。大手の放送局は、相も変わらず安息日のプロگرامに従って、人気DJの音楽番組を流し続けていた。

「魔通受信！」

ト連装です！」

全軍突撃命令です！」

西工廠沖に停泊するソル連合艦隊旗艦を努める戦艦『アーストロンの』の作戦室に、ハトー攻撃の第一報が飛び込んできたのは午前四時に近かった。

普段であれば礼儀正しく入室し、発現の許可を求めてから電文を読み上げるはずの司令部付通信士の若い中尉が、興奮に上ずった声で叫びながらドアを蹴り破るように勢いで飛び込んできた。

司令部の参謀が受信紙を奪い取るようにひったくり、目を通すなりゴトムに向き直る。

「お聞きの通りです、長官。

発信時刻、三二五（まるさんふたご：午前三時二五分）！」

連合艦隊司令長官ゴトム大將は、長官専用のイスに腰を下ろし、作戦発動の時刻から固く目を閉じ、一言も発してなかった。参謀の言葉に初めて目を開き、無言のまま大きく頷いた。

「今の報告は、飛行機の魔通を直接受信したものか？」

ガツキ参謀長が、まだ作戦室入り口で立ち尽くす通信士に声をかけた。

報告にあつた三二五はソル時間であり、ハトー時間と言えば午前七時五五分。

当初予定されていた空襲開始五分钟前だ。

それまで他の魔通が受信されていないことから、作戦は順調に行っていると判断できた。

「はい、直接受信です！」

直立不動の姿勢を崩すことなく、通信士は答えた。

「直接受信とは、鮮やかなものだ」  
ガツキは喜色を満面に浮かべて言った。

タンカン湾出航以来、魔通封鎖をしていたとはいえ、何の報せもなかった機動部隊だ。

便りがないのは無事の証とは言うものの、報告を待つ身としては常に一抹の不安に苛まれていた。

だが、この第一報は、司令部全員の不安を見事に吹き飛ばしていた。

前触れもなく伝えられた全軍突撃命令は、そこまで何一つ妨害行動がなかったことを物語っている。つまり、最も困難と思われていた奇襲攻撃の成功を告げていた。

そして、数分後に受信されたトラ連送『我奇襲二成功セリ』の魔通は、それを確信させていた。

間を置かずにオリザニア軍の悲鳴とも取れる救助を求める魔通や、慌てふためいたような命令文、混乱の極にある被害報告が飛び込んでくる。

「戦艦一、撃沈確定」

「戦艦に砂雷命中の砂柱二本確認」

「重巡に爆弾命中確認」

次々に入る戦果報告やオリザニア軍の被害報告に、先ほどまで重苦しい雰囲気にも包まれていた作戦室は、一転して喜色満面の参謀たちが頷き合っている。

ともすれば大歓声が上がってもおかしくない作戦室の空気を引き締めていたのは、大戦果を聞きつつも表情を一切変えることなく再び目を閉ざしたゴトムの佇まいだった。

「長官、やりました！」

機動部隊はハトー奇襲に成功し、オリザニア大東砂海艦隊を壊滅に陥れたんです！」

ガツキが尊敬の眼差しとともにゴトムに祝辞を述べる。

「ハトーに空母はいなかった。」

空母を撃ち漏らしたのでは、ハトー攻撃の意味がない」

怒りの色を顔に浮かべ、押し出すように言ったゴトムの鬼気迫る言葉に、ガツキは色を失った。

「確かに十一月最後の報告では、二隻の空母がハトーに在泊していました。」

ですが、十二月に入って最初の報告には、空母二隻出港とあるだけで、その行方までは報じられておりません。

しかしながら、ハトーの戦艦部隊が壊滅し、ハトーそのものが基地機能を失った今、空母二隻程度がうるついでいようと何ら脅威とはならないと判断してよろしいかと」

航空参謀が楽観的な推測を口にする。

「君たちは、今何が起きているのか理解しているのか!？」

ハトーの戦艦群は、何によって沈められたのか、君たちは理解しておらんのか!？」

業を煮やしたゴトムの大喝が作戦室を震わせた。

ソル軍の機体が飛び去ったハトー泊地では、オリザニア軍将兵の戦いがまだ続けられていた。

瓦礫と化した建物や艦艇から、必死の形相で負傷者を救出する者たち。



誘爆の危険と背中合わせに燃え続ける炎と、眦を決し戦い続ける者たち。無残な遺体と化した同僚たちを、悲痛な表情で運び出す者たち。命令と復唱が飛び交う中を行き来する者たちの表情は様々だが、すべての瞳は理不尽なソルの暴力に対する怒りが浮かんでいる。

いずれもソルの軍隊と相対しているわけではないが、紛れもなくその作業に従事するものたちにとっては戦いだった。

戦いを続ける者たちの耳に、基地の外れから甲砲の発射音が聞こえてきた。

銃を上空に向かって放つ兵士の後ろには、悲痛な表情で将兵の一団が立ち並ぶ。その前には巨大な穴が掘られ、その中にはオリザニア国旗を掛けられた多数の棺が並んでいた。

ソルによる卑怯な騙し討ちの犠牲となった将兵のうち、これまでに遺体が収容された者から順に葬儀が営まれている。

丁寧に死化粧を施し、棺に納められた犠牲者たちは、オリザニア軍の英雄として扱われていた。

卑怯な騙し討ちの犠牲者二二〇〇名に、オリザニアという国家は最大限の敬意を払う。卑怯な騙し討ちに立ち向かい、武運拙く命を失った者は、決して単純に敗北を喫したわけではない。からである。勇気を持って敵に立ち向ったのだ。後ろから撃たれていようと、それは逃亡しようとしたからではない。正々堂々たる戦いであれば、後ろから撃たれることも、正義を掲げて立ち向うオリザニア将兵が負けるはずがない。

オリザニア将兵は、平和の握手を差し伸べるソルを信じた。

だが、オリザニアが手を握り返そうとしていたとき、ソルは騙し討ちという卑怯な暴挙に出たのだった。

日没が過ぎても将兵たちは照明を焚き、僅かでも可能性があれば生存者を求めて瓦礫を掻き分け、たとえ絶望的であろうと戦友の遺

体を回収するため瓦礫の山と格闘を続けていた。

そのような状況下で司令部は、誤報や情報の行き違いとも戦わなければならなかった。

ソル兵がパラシュート降下を行い、ハトーの町に進撃しつつあるという報告は、司令部の全員に冷水をぶっかけていた。

だが、座礁した特殊潜航艇や、不時着した機体から脱出したソル兵がいただけであり、それに尾ひれがたっただけのことだった。

もともとソル軍は、ハトーを占領する意思など持つてはいなかった。

ソル本土からあまりにも遠すぎ、仮に占領できたとしても補給が追いつかない。騎兵軍の伝統である『糧は敵に求めよ』といっても、ハトーの備蓄を食い尽くせばそれまでだ。大規模な輸送船団が、ハトー以外にも多数あるオリザニアの哨戒網を掻い潜り、ハトーまで無事に辿り着けるとは誰も思わない。

ソルが保有する艦船で、ハトーまで無補給で往復できるものはほとんどない。輸送船団に補給部隊をつけるという、まったく意味のないものになってしまうからだった。

だが、卑怯な騙し討ちに打ちのめされ、混乱の極にあるオリザニア將兵たちに、冷静な思考力を維持している者はそれほど多くない。ソル軍パラシュート降下の噂は、燎原の炎のごとく、オリザニア軍だけでなく市街に住む人々の間に広がっていった。

ハトーの兵士たちが憎しみを込めた視線でソルの機体を見送っていたとき、オリザニアの首都にある大統領官邸に数人の男たちが集まっていた。

官邸の主であるローザファシス力を始めとした、オリザニア軍の

騎兵砂海両長官、参謀長、作戦本部長といったトップたちだった。しかし、その場の雰囲気は、まるで親しい友人たちを招いた茶会か何かのような、和やかなものだ。

既に参集から二〇分以上にわたり、ローザファシスカは隣のオアシスにある広大な塩湖に生息するエビの捕り方を得々と語っている。ハトーでは将兵が爆炎の中をのたうち回っているというのに、明らかに場違いな話題であり、表情だった。

ハトー空襲の第一報を受けたときの怒りに満ちた表情は、すっかりと抜け落ちていく。

困惑の表情で軍のトップたちは大統領の話に相槌を打つが、誰ひとりとして話題を変えようとはしなかった。

「ソルは、私の望みを知っていたのかね？」

ハトー攻撃の立案者は誰だね？」

私は、共和国名誉勲章でも送りたい気分だよ」  
緒戦に大打撃を受けた軍の最高指揮官としては、あり得ない発言だ。

ハトー攻撃は、オリザニア共和国の国力の象徴ともいえる戦艦を、ハトーに在泊していた八隻中四隻も撃沈破し、残る四隻にも少なからず被害を与えていた。小型艦艇や陸上施設、航空機の損害を加えたら、回復にどれほどの時間と経費が掛かるか、両軍の長官は今から頭が痛いほどだ。

だが、居並ぶ諸官は、大統領の望みを知り抜いていた。

ドラゴリーとベロクロン両大岩盤で行われている戦争への、世論の後押しを受けての参戦。

ローザファシスカにとって、真の敵は大東砂海を挟んで対峙するソルではなかった。ドラゴリー大岩盤を席卷しつつある、アレマニアこそ、彼が真の敵と目する相手だった。

自由と公平、そして正義を標榜するオリザニアにとって、アレマ

ニアやウイトルスの掲げる国家社会主義や全体主義といった個人を抑圧し独裁者に国民を奉仕させるような国家は、不倶戴天の敵と言つてよい。ドラゴリーからの移民を祖先に持つ多くのオリザニア国民にとって、彼の地で行われている戦争は、父祖の地を踏み荒らす蛮行に写っていた。

だが、先の大戦で犠牲に見合う利益を上げられなかったことが、大岩盤の両側を砂海に守られたオリザニアを孤立主義に走らせた。他の大岩盤やオアシス群に資源を求めずとも、バキシム大岩盤が生み出す資源で充分に一国の経済はまかなえたことも、オリザニアをして不干涉主義を取らせることになっていた。

しかし、一一年前にオリザニアを発端として全世界を巻き込んだ大恐慌の収束に全精力を傾注したローザファシスカは、一国孤立不干涉主義の限界を、誰よりもはつきりと認識していた。

ドラゴリーとベロクロンに跨る覇権。これなくしてオリザニアの発展は望めず、発展がなければバックボーンがバラバラの移民国家は容易に分裂する。しかし、両大岩盤に跨る覇権を築くため、オリザニア自らが侵略行為を行つては、自らが掲げる自由と平等、何よりも正義に反することになる。そのような政府を、国民は許さない。そして、大岩盤の戦争に介入しないことを公約に掲げ、オリザニア史上初の三選を果たした大統領が、自らの望みのために参戦することも、国民は許さない。

ソルのハトー攻撃は、ローザファシスカの望みを叶えるために神が与え賜た恵みのようなものだった。

しかし、多くの将兵がソルの攻撃に倒れ、多数の艦艇や航空機、軍事施設に被害を受けたことは、甘受できることではない。

性能面から既に時代遅れとなりつつあった戦艦群も、戦術上は使道がなくとも艦砲外交という戦略面や国威掲揚といった面ではまだまだ使い道のあるものだ。なによりも、経験を積んだ将兵は、工

場に増産を命じれば作ることでできる兵器や施設と違い、一朝一夕にできるものではなく、多大な時間と経費が必要だ。さらに遺族の怒りは敵国だけでなく、死を防げなかった指導者にも叩き付けられてくる。

鋼鉄の神経の持ち主あっても重圧と国民の悲嘆や非難に押し潰されかねない。

騎兵砂海軍の長官であっても、ハトー攻撃の衝撃は大きい。

ローザファシスカの意図は解つているとはいえ、国民からの非難を受けることは間違いない。だが、自ら非難から逃げることはできなくとも、罷免や更迭といった形で表舞台から去ることができれば、大統領などとは比べものにならないほど楽な立場だ。国民すべてから指弾され、非難され、怨嗟の声を叩き付けられ、過去の栄光のすべてを剥ぎ取られ、後世の歴史家から無能と書き連ねられるよりは、遙かにマシだ。

このような状況下で、平然としているローザファシスカは、国の発展を第一に考えている指導者であり、まさに超人といえた。

会議の最中にもハトーからの被害状況は、刻々届けられていた。

会議室に魔通がかかる度、ローザファシスカは自ら受話器を取り、報告を受けている。ハトーの被害は報告の度に酷くなっていったが、首脳陣がそれなりに落ち着いていられたのは、国民が開戦を支持することが確実になったという楽観もあるが、大統領の態度が大きく作用していた。

そして、その楽観は、ハトー空襲の続報を聞き、怒りに満ちた国民がソル大使館に押し寄せたという報告を受けたことで、確信に変化していった。

「ローザファシスカ大統領は、ソル軍がハトーオアシスのオリザニア軍基地を空から攻撃したと、ただいま発表しました」

サピエント王国の首都から北に七〇キロほど離れた首相別荘で、サピエント王国首相はふたりのオリザニア人と夕食のテーブルを囲んでいた。

魔道放送受信機の魔鉱石真空管が暖まる間、雑音混じりに伝えられたニュースの内容は判然としないものがあつたが、間違いなくソルがハトーで何かやらかしたことだけは間違いなかった。

軍事援助のためサピエントを訪れていたオリザニア財界人と、駐サピエント大使のふたりは顔を見合わせ、そして首相に視線を向ける。

年齢の割に愛嬌のある丸顔の首相は、きよとんとした顔を一瞬見せたが、すぐに引き締まった政治家の顔に戻っていた。

「首相閣下、まずは事実確認をなされた方がよろしくありませんか？」

大使がぼつりと首相に進言すると、首相はゆっくりと立ち上がり、食堂を出て執務室に向かった。

執務室に待機していた秘書官に対し、首相はローザファシスカに魔道通信を繋ぐように命令する。後からついてきていた大使は、首相が自国の政府に確認することなくいきなりローザファシスカに魔通をかけたことで、首相が何の疑いもなくこの重大なニュースを受け入れていたことに驚いていた。

大使は、嬉しそうな顔で魔通の回路が繋がるのを待つ首相を、不思議そうな顔で眺めるしかなかった。

「大統領閣下、ソルが本当にハトーを攻撃したのでしょうか？」

「本当です、首相閣下。」

ソルは、ハトーで我々を攻撃しました。

……これで、我々は皆、同じ船に乗りました」

「よかった。」

事態はこれですべてにおいて単純になります。  
あなたのために、神のご加護を祈ります」

夕食会を打ち切った首相は、葉巻とブランデーのひと時を楽しむと、その太った身体をベッドに横たえる。

首相はベッドの中で、三〇年ほど前に駆け出しの政治家だった自分に当時の外相が『オリザニアは巨大なボイラーのようなものだ。一旦火が焚かれてしまえば、無限の力が作り出される』と言っていたことを思い返し、満ち足りた表情で夢の世界へと旅立って行った。

「臨時ニュースを申し上げます。」

臨時ニュースを申し上げます。

大本営騎兵砂海軍部―二月八日午前六時発表。

皇国騎兵砂海軍は、本八日未明、西大東砂海においてオリザニア、サピエント軍と戦闘状態に入れり」

ソル時間―二月八日午前七時。

ハト―時間午前〇時。

漆黒の闇が世界を包んでいるが、そこで照明が焚かれ、将兵の戦いが続けられていた頃。

ソルでは日の出と共に行われる宮城遥拝後の慌しいひと時に、その魔道放送は突如として流れた。

人々は、緊急放送を告げるチャイムに続いて淡々と流れた、僅か二五秒に満たない短い言葉の意味を、一瞬の間理解することができなかった。

再びチャイムが鳴り放送の終了が告げられると、歓喜の爆発が巻き起こった。

長くソルを苦しめたオリザニアとサピエントに、ついに鉄槌が下されるときがきたのだ。

万歳の声が巻き起こる。

家々の扉が荒々しく開け放たれ、夥しい人々が道に溢れかえった。誰彼となく肩を抱き合い、口々に打倒オリザニア、サピエントを叫ぶ。

長いくびきが外され、ソルが自由へと羽ばたく第一歩と、多くの人々は認識していた。

だが、中には彼我の国力を冷静に見極め、皇国の破滅を予感し戦慄した者も僅かではあるが存在した。

しかし、そのようなことを口にすれば、たちどころに非国民呼ばわりされ、社会的に抹殺されかねない。いや、それで済めばまだいいともいえる。激昂した民衆に袋叩きにされ、その場で惨殺されかねない。

詳細を報道されなくとも、ソル経済を締め上げ、日々の暮らしに不自由をきたす原因はメイータータとの戦争ばかりではないことを、人々は肌で感じていた。その主犯たるオリザニアとサピエント両国に天誅を下し、植民地支配に苦しむ西部大東砂海域の諸国を開放し、ここに西部大東境共栄圏を築き上げ世界の盟主たらしめる皇国の未来に、誰もが夢を抱いた。

長く続く閉塞感を、この臨時ニュースは吹き飛ばした。

「おい、ガル！」

ついにやったぞ！

これで皇国は世界の盟主だ！

アレマニアもウィトルスもドラゴリー大岩盤で破竹の勢いだぜ。

このままいけば、来年早々に三国が世界を制覇しちまうんじゃないか！」



フィズが興奮覚めやらぬという表情で、登校するなりガルの肩を揺さぶった。

「あ、ああ、そうだな。

おい、そんなに揺するな、舌嚙むって！

やめんか、莫迦たれ！」

突然の暴風に、怒ったわけではないがガルが、フィズの腕を荒々しく振り払う。

いきなり後ろから掴みかかれて慌てたガルだが、フィズの目に悪意はなかった。

「済まん、済まん。

まあ、許せ。

しょうがないだろ、こんな壮拳に巡り合わせられるなんて、一生に一度あるかないかだぜ！

俺も、学校辞めて軍に応集しちまおうかな。

今なら士官待遇になるんだろ？」

ガルが怒っていないことを感じ取り、今度は荒々しくガルの肩を叩きながらフィズが言う。

「おう、そうとも。

どうだ、これから教授に、クラス全員の士官学校転入を掛け合ってみようぜ」

冷静に考えて、絶対に賛成などされない提案をガルは口にした。

「もちろんだ、ガル。

勉強なんざ、後でできる。

今は、ひとりでも前線に出るべきだ。

ソル男子の本懐、ここにありってんだ！」

フィズが拳を突き上げる。

教授は朝からどれくらいか、学生を諭し、叱り飛ばし、怒鳴りつけたかもう判らなくなっていた。

臨時ニュースに言いよのない高揚感を抱いたが、いざ専門技術学校に出勤してみると夥しい学生たちが興奮に包まれていた。ほとんどの者たちは、手に新聞の号外を握り締めている。学校に登校するまでに、近所の辻々で配られていたものだ。

『今暁西部大東砂海において皇軍、オリザニア・サピエント軍と戦闘開始』

『大本営騎兵砂海軍部発表』（二月八日午前六時）

皇国騎兵砂海軍は、今八日未明西大東砂海においてオリザニア・サピエント軍と戦闘状態に入れり』

そつげなくそれだけ記された新聞の号外には、一切の解説や社説の記載されていない。

ただ、戦争が始まったことだけを、大本営の発表に基づいた事実のみを報道していた。

しかし、この片面印刷の僅かな文章量しか載っていない紙片は、皇国を興奮の坩堝へと叩き込んでいた。

「なんだ、君たちもかね？」

「いったい、朝から何人同じことを言いに来るんだね？」

「うんざりしたような顔で教授はガルとフィズに言った。」

「いつもであれば柔和な顔でイスを勧める紳士的な教授が、心底いやそうな顔をしている。」

「他の者たちが何を申し上げたかは知りません。」

「私たちを、是非士官学校へ！」

「私たちは、今朝の報道に接し、一大決心」

「この、大莫迦者！」

全員が戦争に行つてしまつて、誰がお国を支えるというのか！？  
そもそも、死と隣り合わせの厳しい訓練を毎日積んだ軍であればこそ、あのような赫々たる戦果を挙げることができるんだ！

お前たちのような素人に何ができる！？

いきなり戦場に行つて犬死など、どれほど皇国に迷惑だと考える！

一人前の兵になる前に、この戦争は終わつてるわ！

お前たちは、ただただ学問に突き進めばよい！

お前たちは国を富ませ、軍に新しく精強な兵器を提供する義務がある！

寝言は寝て言え！」

教授の剣幕に、ふたりは部屋を転がり出た。

「臆病者！」

死が怖くてお国のお役に立てるか！

七生報国！

七度死んでも七度生まれ変わり、お国のお役に立つ意気がなくて、何が皇国国民だ！

見損なつたぞ、ガル！」

顔色を変えてフィズが怒鳴つた。

午後の魔道放送でそっけなく伝えられたニュースは、アナウンサーの語調とは裏腹にハトー攻撃の赫々たる戦果だった。

皇国男子として、このニュースに心を躍らされない者などいるはずもない。

「ちよつと待てよ、フィズ。

何で俺が見損なわれなきゃならないんだ？

逃げたのはお前も一緒だろうが」

日が暮れた下宿の一室で、ようやく手に入れた酒を酌み交わしな

がらふたりは荒れていた。

緒戦の大戦果に、普段の贅沢禁止令などこの日に限っては吹き飛ばしている。

町には明るい表情の人々が溢れ、行き会う軍装姿に向かって万歳が繰り返されている。安息日明けというのに、町の明かりは煌々と照らされ消える気配は見られない。通常であれば節約といって消されている街灯まで灯され、帝都は明るくさんざめいていた。

「いや、すまん。

言葉の入れ違いという奴だ。

俺は教授を見損なっただぞ、そうだろう、ガル。

そう言いたかったんだ」

激昂のあまり頭で考えていることに言葉が追いつかず、まるで喧嘩を売るような失言にフェイスが赤くなっただ。

頭をかきながらガルに向かって丁寧な手を突いた。

土下座の姿勢だが、畳の上でありそれほど不自然な光景ではない。

「ああ、まったくだ。

今俺たちが銃を取らずにどうするってんだ。

……でも、銃の撃ち方ひとつ知らないんだよな。

レグルやエルミたちだって、あんな厳しい訓練積んでようやく、だもんな。

あながち、教授の言うことも間違っちゃいないのかもしれない」

それほど腹立ちを感じているわけではないので、ガルはフェイスの芝居がかった仕種に笑みを浮かべた。

そして、幼馴染みたちから聞かされた訓練の過酷さや、精神を鋼のように鍛え上げる厳しさを、ガルはふと思いついて小さく呟いた。

「そんなもの、ソル魂があればなんとでもなる！

……ガル、まさかお前怖気づいたんじゃないだろうな？」

それを聞き咎めたフィズの顔色がさつと変わり、声が地鳴りのように低くなる。

「ふざけんな、フィズ。」

誰が怖気づくものか。

ただ、今日軍に志願して、明日戦場に立てるもんじゃないってことだ」

湯飲みの酒を一気におおり、ガルは取り繕うように言った。

当たり前のことだが、緒戦の大戦果に惑わされ、誰もその現実が見えなくなっていた。

銃の扱いひとつを取っても、今すぐ渡されて発砲できるものではない。ましてやこの時代の科学技術の最先端でもあり、とんでもなく複雑な精密機械でもある航空機や戦闘艦艇に乗ったその日からベテラン将兵のように扱えるはずもない。

「まあ、確かにそう言われちまえばそのとおりだが……」

だがな、ガル、俺たちだってお国のお役に立てるはずだ。

学問なんぞにうつつを抜かす暇があるなら、軍事教練の時間を増やすなり何なり方法はあるはずだ。

それを、あの腰抜け揃いが」

あまり怒りを露にしないガルの表情が一変したことに不穏な空気を感じたフィズは、取り繕うように怒りの矛先を教授陣に振り向けた。

「そつなんだがな、フィズ。」

軍から派遣されている技術将校の教授たちが、何も言ってないはずはないと思うぞ。

やはり、俺たちは役に立たないと判断されているのかな」

ガルは思案顔で言った。

もちろん、技術将校の教授たちは、学生を戦場に駆り立てような

どという考えは欠片も持っていない。決して優遇しようということではなく、兵器の扱いも知らぬ者に足を引つ張られたくないからだ。だが、ガルたちは軍人が学生を甘やかすはずなどないと考え、教授陣が学生たちの報国の思いを握りつぶしているものと信じていた。緒戦の大勝に惑わされた若者たちは、冷静な判断力を失っていた。いや、緒戦の大勝は、ソル皇国民のほとんどから、冷静な判断力を奪い去っていた。

レグルとエルミの実家は、多くの人でごった返していた。

入れ替わり立ち代り人々が訪れ、両親に祝辞を述べては去って行く者、居間に上がりこんでそれぞれの父に祝い酒を注ぐ者、甲斐甲斐しく立ち働く母やレグルの妹に激励の言葉をかける者と様々だ。

去って行く者も、どちらかの家とより昵懇ということ、父と祝杯を挙げるためだった。

特に兄妹で軍に奉職しているエルミの家は、中学校までの同級生たちが多数訪れ、いったいどれくらいの人数が家の中に入り込んでいるのか、誰も把握できない状況だった。

もちろん、誰もエルミ兄妹がどこで戦っているかなど知る由もなく、ただ軍の壮挙と軍人たちの光輝溢れる未来に祝杯を挙げにきているのだった。

「おめでとугоざいます」

普段であれば立場が上のはずの村長まで、エルミの父の前に端座し、丁寧に頭を下げてから側の銚子を取る。

「村長、恐縮です。」

それに、私が何をしたということではありません。

家の次兄は近衛ですし、娘もハトーに行ったのかどうかすら判り

ません。

皆様にここまでしていただくなど、分不相応というものです」

エルミの父も普段であればもう少し横柄な物言いだが、誰もが必要以上に丁寧な態度になっているからか、畏まった口振りになっていた。

昨夜はいつもと同じ平穏な夜を過ごしていたが、一夜明ければ村を挙げての祝宴がふたつの家で始まっている。

幼馴染みまでがバカ丁寧に頭を下げてくる中、エルミの父は人々にどう対応して良いか解からず、引きつった笑みを顔に張り付かせていた。

「いやいや、あなたの薫陶の賜物でしょう。

ふたりも軍に奉職させ、この大戦果。

まるでマレ將軍の再来のようですな」

村長は、この時代の親に対する最大の賛辞を口にする。

マレ將軍はソル・ロス戦争の天王山といわれた、ロスの一角にある二〇三高地の攻略戦の指揮官だった。

重厚な陣地を築いたロスの拠点の攻略の際、配下の軍に志願していた二人の息子が戦死したが、それでも闘志は僅かに衰えることなく、苦闘の末この陣地を攻略したことで、戦局は一気にソルに傾いた。

息子を目の前で失っても、些かの闘志も衰えさせなかったことでソル軍人の鏡と讃えられ、死を恐れず国に尽くした息子をふたりも育てたことから、親の鏡とも讃えられた人物だった。そして、二代前のアツキハール皇王崩御に殉じたことでさらに神格化され、小学校の道徳の教科書にも載せられていた。

そのような人物に例えられるなど、この時代で人の親としては最大級の賛辞だったが、エルミの両親にとっては息子や娘の将来を暗示するようで不吉としか言いようのない言葉でもあった。だが、そ

れを拒絶するなど時代が許さず、曖昧な笑みと共に受け流すのが、ふたりにとってできる精一杯の抵抗だった。

同様の光景がレグルの家でも繰り広げられ、そちらの両親も不安を胸に秘めたまま訪れる人々の対応に気を紛らわせるしかなかった。

「参謀長、やっと夜が明けたぞ。

第八任務部隊の反撃を待とうじゃないか。

それから、各艦の被害状況は、できる限り克明に報告してくれ。

私にとって、今何よりも必要な情報は、敵の殲滅でもなければ死者の数でもない。

各艦がどんな状況で、どのような兵器によって、どういった被害を受けたのか、だ。

もちろん、それを活かすのは私ではなく、彼になるだろうが」

混乱の一夜が開け、ほとんど睡眠を取ることなく先頭に立って指揮に当たった大東砂海艦隊司令長官メルイイ大将の相貌には、深い疲労が刻まれていた。

だが、深い疲労を浮かべた顔色とは裏腹に、奇襲を受けた直後とは打って変わった、大東砂海艦隊を率いる司令長官に相応しい堂々たる佇まいだ。

奇襲直後のメルイイは、あまりの事態の急転について我を忘れ、怒鳴り散らすことで自分を保っていた。

怒りと狼狽、焦燥と悔恨がメルイイを苛み、士官学校で礼儀作法の見本に最適といわれる洗練された振る舞いなど、どこかへ吹き飛んでいた。

怒りの矛先は自身に仕える幕僚たちに叩き付けられたが、幕僚たちは怒鳴り返したい感情をなんとか押さえ込んでいた。幕僚たち自身もメルイイ同様の精神状態であり、怒鳴られたことで逆上し、掴



み合いの喧嘩が起こってもおかしくない状況ではあったが、上官には絶対服従と繰り返し叩き込まれた軍人精神が、かろうじて自制心を繋ぎとめている。もちろん、メルイイ自身も幕僚たちへの怒りが理不尽であることは理解しており、幕僚たちは幕僚たちでこの状況下で司令官のみに冷静さを要求できないことも理解している。

それに、幕僚たち自身も部下に同様の態度で接することを自制できなかつたため、メルイイに対する反感は自身への嫌悪感となっていた。

結果として、幕僚たちの献身的な態度に自らを省みたメルイイが落ち着きを取り戻し、それにつられるように幕僚たちも冷静になっていき、大東砂海艦隊司令部は奇襲前の姿に立ち返っていった。

幕僚たちがしきりに休息を勧めるが、メルイイはこれが最後の勤めだと言って、頑として首を縦には振らない。おそらく、数日中に本国への召還の通達が来るだろう。待っているものは、査問委員会という名の吊るし上げの後予備役編入だ。たとえ、誰一人としてソルによるハトー襲撃を予測できていなかったとしても、誰かがその責任を取らなければならぬ。最終的な責任は国軍の最高司令官である大統領にあるとしても、メルイイがその役を負わされることは間違いない。

最後の一言は、自分に先立って大東砂海艦隊司令長官への就任を打診され、それを峻拒した男と、今頃第八任務部隊旗艦空母『リユカーン』の艦橋で火の玉のようにいきり立つ男の、二人の親友を念頭に置いたものだった。

戦艦群の被害報告が司令部に上げられるにつれ、ひとつの疑念がメルイイの胸中に膨れ上がっていた。

一月二七日に、突如としてハトーに在泊していた空母を中核戦力とする第八任務部隊に、コーセキオアシスへの航空機輸送任務が

命じられていた。

確かにハトーとソル本土の中間に位置するコーセキは、ソル砂海軍の動向を探るための重要な哨戒基地であり、戦略的価値は極めて高い。ソルとの緊張が高まっている現状で、コーセキの航空兵力増強は、決して間違った命令ではなかった。名うての大鑑巨砲主義者であるメルイイにしても、航空機の重要性は充分理解している。

メルイイの親友であり、良き部下でもある第八任務部隊司令長官ハージイ中將は根っからの航空主兵論者であり、オリザニア砂海軍きつての闘將といわれている。

突然の命令に対し、『俺の部隊を輸送なんぞに使うとは、砂海軍省はどういう見だ』と吼えまくっていた。もちろん、命令には忠実に従わなければならないことなど百も承知だが、ソルとの開戦が噂されるこの時期に悠長に輸送任務などに就いていたくはなかった。ソル艦隊を捜し求め、先手を打ってすべて沈めてやれば良い。ハージイはそう考えていた。

メルイイ自身、この時期にコーセキ島の重要性は理解していたが、ハトーから戦力を抽出するのではなく、本国から輸送空母を使用して航空機の輸送をすべきだと考え、海軍省に意見具申はしていた。

だが、海軍省からはハトーの戦力をコーセキに移し、然る後にハトーには新たな部隊を贈るといって一点張りであり、これ以上の論争は時間と気力の無駄と判断したメルイイが折れた経緯がある。

最前線に近い要衝の戦力を一時的にはいえ減少させるなど、常識的に考えてありえないことだ。

だが、命令に忠実なるべしと叩き込まれた軍人精神が、メルイイとハージイに第八任務部隊の派遣を納得させていた。

出航に先立ち司令部を訪れたハージイは、不貞腐れたような表情のメルイイに、万が一ソルの船舶と行き会った際にはどうすべきか訊ねている。

言うまでもなくハージイは沈めてしまうつもりだったが、オリザニアが先に引き金を引くことを司令部が甘受するかどうかを確かめたかったのだ。もし、やり過ぎすように命令されたとしても、ハージイは攻撃機の発艦を見送るとは考えてはいなかったが。

苛立ったようにメルイイは『俺が責任を取るから常識的に判断しろ』と言って、ハージイを送り出していた。

ハトー襲撃からかくも逃れることになった第八任務部隊への命令は、まるでソルの動きを知っていたかのようなタイミングだった。メルイイの疑念は、確信へと変わっていった。

ソル全土を興奮の坩堝に叩き込んだ一日が過ぎ、一月九日の朝がいつもどおり訪れ、庶民は日常へと戻り始めた頃、オリザニア首都時間一月八日の夕刻、オリザニア共和国大統領ローザファシス力は、議会で演説を行った。

「副大統領閣下、国民の代表である上院ならびに下院議員の皆様。昨日、二六四一年一月七日、この日は不名誉な日として記録され続けるでしょう、オリザニア共和国は突如、ソル皇国の砂海、空軍による意図的な攻撃を受けました。」

オリザニアは、ソルと平和な関係にあり、なおかつソルの要望はまだ大東砂海における平和の維持に向けたソル政府ならびに皇王との対話を望むというものでした。

さらに、ソルの航空部隊がオリザニア領のハトーオアシスに爆撃を開始した一時間後に、ソルの駐オリザニア大使とその同行者はオリザニアの長官に、直近のオリザニアからの書面に対する公式の回答を提出しました。

その書面に記載されていた内容は、既存の外交交渉は無用のもの

であると指摘しているのみで、その文書には戦争や武力攻撃を暗示したり脅迫したりするような内容は含まれていませんでした」

ローザファシスカは一旦言葉を切り、演台に置かれたグラスの水を口に含む。

「このことは記録されるでしょうが、ソルからハトーまでの距離から、明らかにこの攻撃は何日も前から、おそらく数週間まえから意図的に計画されていたものです。

この期間中、ソル政府は真相を隠し、平和の継続への期待を表明して、オリザニア共和国を欺き続けていたのです。

昨日のハトーオアシスに対する攻撃によって、オリザニア騎兵砂海軍は深刻な被害を被りました。

遺憾ながら、私は多くのオリザニア人の命が失われたことを、皆様にお伝えしなければなりません。

さらに、オリザニアの船が、大岩盤西岸オアシスとハトーの間の公海上で攻撃を受けたとも、報告されています」

ローザファシスカは、悲嘆にくれるとはまさにこのことといわんばかりの表情を作る。

「昨日、ソル政府はサピエント植民地がある半島に対する攻撃も開始しました。

昨夜、ソル軍はベロクロン大岩盤のサピエント租借地を攻撃しました。

昨夜、ソル軍は南方のオアシスを攻撃しました。

昨夜、ソル軍はネグリットオアシス群を攻撃しました。

昨夜、ソルはコーセキオアシスを攻撃しました。

そして今朝、ソルはミルドウィオアシスを攻撃しました」

並み居る議員たちにことの重大性をさらにアピールするかのよう  
に、一際高いトーンでローザファシスカは一気に言った。

「ソルは、大東砂海全体にわたって奇襲攻撃をおこなったのです。昨日および今日に起きた事実は何を語っているかは、それ自体が示しています。」

オリザニア国民は既に意志を固め、生命と我が国の安全とは何かという暗示をよく理解しています。

オリザニア騎兵砂海軍の最高指揮官でもある私は、我々の防衛のための手段を全て実行するよう指示しました。

我が国全体が我々に対する攻撃とはどういう性質のものであるかを忘れずにいるということを常に示し続けるでしょう。

この計画的な侵略行為を我々が克服するためにどれだけの時間を要するかは重要ではありません。

正義の中にあるオリザニア国民は絶対的勝利を得続けるでしょう」  
ローザファシスカは正義を掲げ、対ソル開戦を議員たちに迫る。

「敵対行為は現実のものとなりました。」

我々の国民、我々の領土、そして我々の権利が危機に瀕しているということは、見ぬふりをするわけにはいかない事実なのです。

我がオリザニア軍による安全の保証と、我が国の国民の無限の決意とによって、我々は必然的な勝利を得ることでしょう。

神よ、我らを救いたまえ。

私が問いたいことは、一九四一年一月七日の安息日のソルによる、不当で卑怯な攻撃があつて以来、オリザニア共和国とソル皇国との間で戦争状態に入っていることを、議会が宣言するかどうかということですよ」

議員たちのも熱狂的な拍手の中、自身の希望をひと言も言うことなく、ローザファシスカは自身の最も望む回答を議会から引き出していた。

## 第25話 哀樂

議会での演説を終え、疲れ切った身体で大統領官邸の執務室に戻ったオリザニア共和国大統領ローザファシスカは、めまぐるしく過ぎた二日間を思い返していた。

前日の夕刻、ローザファシスカは、これまでの対ソル関係全体を回顧し、オリザニア国民の敵愾心を鼓舞するような堂々たる演説にすべきというデル國務長官の提案を退けた。

まず、何よりも簡明な教書を出す。それはハトー襲撃に絞った内容で。そしてその後、国民を鼓舞する強力な教書を出す。

そう言ったローザファシスカは、國務次官に簡明な教書を口述し始めたのだった。

ソル機動部隊がハトーから引き上げ始めた頃に、ローザファシスカの書齋は臨時の作戦本部と化していた。

そこに集う騎兵砂海軍両長官に、ローザファシスカは次々と指示を出し、国有兵器廠ばかりでなく、民間の軍需品製造工場に兵を送り、厳重な監視下に置くように命じている。

言うまでもなく、オリザニア本土に起居するソルの移民や、どこに潜り込んでいるか判らないスパイに対する備えだ。肌の色が異なるソル人ばかりでなく、彼の三国同盟を結んだ枢軸国の二国はオリザニア人と外見に大きな差異はない。アレマニアが属する北部ドラゴリーの人種と、ウイトルスが属する南部ドラゴリーの人種にははつきりした差異があるが、オリザニア共和国国民の多くがドラゴリーからの移民で成り立っていることが問題をややこしくさせていた。もちろん、オリザニア国籍を有する納税者であっても、主義主張の違いや、経済的な事情からソルに加担する者がいないとも限らない。ハトーの艦隊に大打撃を受けた上、バックアップ体制まで破壊されては目も当てられない。

「橋という橋も、すべて厳戒態勢下に置くべきです」

「おっしゃるとおりです、長官。」

そして、ここ大統領官邸も同じように」

騎兵軍長官の提案に参謀総長が同調し、その上で新しい提案を大統領に向かつて言う。

「橋を厳戒態勢下に置くことも、ここをそうすることも、ありがたいとは思いますが私は拒絶する。」

そのようなことをして、いたずらに国民を不安にさせるわけにはいかないよ、参謀総長。

兵器廠と民間の軍需工場に監視兵を置くだけで充分だ」

ローザファシスカは参謀総長に感謝の視線を送りながら言った。

日が沈んだ後も、大統領官邸北にある玄関に明かりが灯されることはなかった。

オリザニア史上初めて、闇の帳に沈んだ大統領官邸の内部は、侍女たちが大童で灯火管制用のカーテンを抱えて走り回っている。部屋数が多いため、全員総出でもまだ足りない状況だ。

さらに、テロを事前に防ぐため、大統領執務室に近い通りは一切の通行が遮断されている。

万が一、首都が空襲を受けた際に大統領が避難するためのトンネルも、急ピッチで点検整備が進められていた。

トンネルは、首都の中で最も安全な退避壕である財務省地下の金庫に繋がっているが、首都で最も安全ということは、オリザニア国内で最も安全であることを意味している。

「何かあれば、そちらに行くので準備をよろしく。」

その前に閣議は八時半からだ。

一度こちらに来ていただく。

閣議の最中に皆でトンネルを走るようなことにはなりたくはないがね」

教書の口述を済ませたローザファシスカは、財務長官に魔道通話をかけていた。

「はい、承りましてございます、閣下。

ご指示は、すべて片付いております」

受話器の向こうから財務長官の声が返ってきた。

多忙な中、大統領からの直通通話といえど、あまり時間を割いていたくないはずなのだが、その声は落ち着き払っていた。

「いいぞ、長官」

満足気に頷くローザファシスカの耳に、財務長官の声が続けて届く。

「それと、ソルの在オリザニア資産はすべて凍結します。

ソル人が我が国から離れたり、外と連絡を取ったりすることもできないように致します。

国境の検問は、我々が責任を持ちます」

敵国に自国の資産を持ち出されては敵わない。

国内の情報も、同様に敵国に渡すわけにはいかない。

「そうか。

了解した。

それでよろしい。

ただし、紳士的な方法で行うことを忘れないでくれたまえ。

正式な指示は私から出すことにしよう」

財務長官の報告を僅かでも修正することなく、ローザファシスカは承認した。



「今夜、ソルの銀行と会社すべてに人を入れ、ソル人がそこに入れないように致します」

財務長官からの最後の報告に、ローザファシスカはひとよろしいと答え、魔道通話の受話器を置いた。

ローザファシスカは、財務長官に全幅の信頼を置いていた。

ソルの在オリザニア資産凍結は財務長官の仕事だが、国境の検問は財務省の仕事の範疇を遥かに越えている。

だが、デル文書の原案といい、今回の仕事の速さといい、財務長官の能力は突出していた。大統領官邸の警備兵を倍に増やすことや、執務室近くの通りの封鎖、トンネルの点検整備だけでなく、騎兵軍省と砂海軍省、そして国務省が入居している建物の屋上に、高射砲を設置するよう命じたのも財務長官だった。

もちろん、筋違いの命令に現場は反発したが、その正しさを理解したそれぞれの主人たちから改めて命令が下ることで、財務長官の命令は速やかに実行されていた。

あらゆる様相が一変した首都では、政府の高官であっても慌てふためく者が続出していた。

つい昨日までは、どうやってソルを追い詰め、先に戦争の引き金を引かせるか、暗い愉悦の中で謀を巡らせていた者が、いざ思惑どおりに先制攻撃を受けてしまったら狼狽するという性質の悪い冗談のような光景がそこで展開している。なにせ、既定の方針や周到に準備された構想、それらに沿って敷かれていたレール全てが吹き飛んだのだ。覚悟が固まった状態で、歯を食い縛った状態で喰らう横っ面への拳とは違い、思いもしない方向、後ろから鈍器で頭を一撃されてしまえば、だれでも昏倒するなり、呆然としてしまうの

は当たり前のことだ。

ハトーの被害状況が明らかになるにつれ、その狼狽と混乱は広がっていく一方だった。

その中であって、ひとりローザファシスカ大統領のみが、泰然とした態度を保っている。

あらゆる省庁が慌てふためく中、その総元締めである大統領府が落ち着いていられたのは、ひとえにローザファシスカの振る舞いによるところが大きかった。もちろん予想外の奇襲攻撃や、刻一刻とその数を増やしていくハトーの犠牲者の数にローザファシスカ自身が衝撃を受けていないはずはないのだが、それでも彼はその泰然とした態度を崩そうとはしなかった。

オリザニア首都時間で八時半きっかりに、ローザファシスカが召集した閣議は始められた。

「この閣議は、かつて我が共和国が南北に分かれて争った戦争勃発に際し、その前夜に当時の大統領が開いた会議に匹敵する。

未曾有の国難を克服するため、私は諸君の忌憚のない意見を期待する」

開会を宣したローザファシスカは、続けてハトーの被害をありのままに伝えた。

「この犠牲者があまりにも多いこと。

これを報告しなければならぬことは、極めて遺憾だ。

そして、不意を衝かれたことを、認めなければならぬ」

いかにも苦しげな表情でローザファシスカは続けた。

そして、翌日の議会で発表する教書を、居並ぶ閣僚たちに読み聞かせた。

「大統領、この際、対ソルのみならず、アレマニアに対しても宣戦布告を行うべきと、小職は考えます。」

アレマニアがソルを戦争に引きずり込んだことは、明らかです。そもそも、我々がいたしましても、終局的にはアレマニア打倒が目的でありますれば」

騎兵軍長官が、即座に意見を述べた。

「長官、いずれアレマニアに対して宣戦布告はするにせよ、今はそのときではない。」

貴官の旺盛な闘志は充分すぎるほど評価に値するが、しばしの忍従は必要だと私は考えている。

なぜなら、もし、この場でアレマニアに対しても宣戦布告をしてしまえば、我々がそのためにソルとの戦争を仕組んだという非難が巻き起こるだろう。

仮にも私はドラゴリーでの戦争には介入しないことを公約にして、大統領選を勝ち抜いたのだ。

その姿勢は最後まで、アリマニアによって苦渋の決断を迫られるまで、崩すわけにはいかないのだよ」

ローザファシスカは、あくまでも冷静に、計算高くことの成り行きを見据えていた。

大統領の意見を容れ、アレマニアへの宣戦布告は見送られた。

だが、ローザファシスカや財務長官といった面々は、いずれ遠くない日に、アレマニアからの宣戦布告があるだろうという予測は、充分にできている。わざわざ先に拳を振り上げて、自らの立場を悪くする必要などないと言うのが、ローザファシスカの立場だった。

「大統領、やはりその教書では、どう考えても生ぬるいと思慮いたします。」

このような危機に直面しているときに、それは不適切だというのが小職の意見です。

もつと強い言葉で言わなければなりません。

我々が用意した文書を探っていたதாக、お願いいたします」  
デル国務長官が先程同様に強い態度で迫った。

「議会に対する教書は、これでいい。

控え目な言葉でいいのであつて、爆発的に過ぎることが少しもないのが、却つていいのだよ」

ローザファシスカはデルの申し出を再度峻拒し、差し出された文書に目を通すこともしなかった。

しかし、他の態度は終始穏やかなものであり、声を荒げたり、強い調子で言い返すことはまったくなかった。

激論を戦わせて閣僚の意見をねじ伏せるより、閣僚たちの意見は聞きつつも、辛抱強く丁寧な言葉を返し、彼らが納得して従うことを待ち続けていた。

ローザファシスカは、ハトー壊滅という事実に対して衝撃を受けていたことを億尾にも出さないばかりか、直ちに反撃に移ることを考えていた。

ソルが進駐しつつある南方資源地帯のさらに南側にある、バラバ大岩盤への派兵が決定されたのもこの日のうちだった。ソルの資源調達を脅かすと同時に、ハトーを失った代わりにソル侵攻の足がかりとするためだ。

だが、ローザファシスカは、大方針は自身で決定していたが、軍の行動に細々と口を出すことはしなかった。

両軍の長官に指示を出すに留め、細部に付いては完全に軍人に任せようとしている。やはり餅屋は餅屋であつて、いかに強大な指揮権を有していようと、素人が軍事作戦に口を出すべきではないことを、ローザファシスカは自覚していた。

「ソルがやった攻撃に対する回答は、ソルに対する絞め殺しだ。

彼らは、何も持っていない。

我々は、ソルの飢餓と消耗によって、最終的な勝利を収めるだろう」

閣議はローザファシスカのこの言葉で終了した。

「閣下、戦争の勝敗は冷徹な戦略によって勝ち取るものだとということとは理解しております。

ですが、名誉と栄光という要素もまた、必要なものだとは私は考えております。

ソルに対する戦略が絞め殺しであることに異を唱えるつもりはございませんが、それでは軍が不要のものといわれてしまうのではないのでしょうか」

閣僚たちがそれぞれの省庁に戻り、執務室にひとり残ったローザファシスカに、側近が訊ねた。

「そのとおりだ。

だが、現代の戦争はかつて騎士同士が名乗りを上げて一騎打ちを行って勝敗を決したような、牧歌的な時代とはまったく様相を変えているのだよ。

名誉と栄光のために、共和国の若者の血を必要以上に流すわけにはいかない。

たとえ、勝利を収めたとしても、国民が許容できる流血の限界を超えてしまつては、私はここを追い出されてしまうのさ。

それに、肥大化する軍備はどこかで削減しなければならぬ。

大軍を以つてしなくても、戦争に勝つ道筋はつけておくべきだ。

私は、軍人ではないからね」

落ち着いた声でローザファシスカは側近に諭すように言ったが、その語尾は僅かに震えを含んでいた。

突然、執務机に置かれた魔道通話の受信機が鳴る。

三九歳のときに小児麻痺に罹り、足が不自由になって以来愛用している車椅子を自分で転がし、ローザファシスカは自ら受話器を取り上げる。

直後、受話器からの報告を聞いた、ローザファシスカの顔色が一気に蒼ざめた。

ネグリット植民地の航空兵力が、ソルの奇襲を受けて壊滅したという凶報だった。

それでもローザファシスカの返答は力強く、相手に不安を抱かせるまいという配慮がなされている。

やがて、受話器を置いたローザファシスカは車椅子に身を深々と沈め、両手で顔を覆ってしまった。

「すまないが、私をひとりにしてくれないか」

目を閉じたまま、天を仰いだローザファシスカの車椅子から手を離し、側近は短い挨拶の後に執務室を退出していった。

「我々の飛行機のほとんどが地上で撃破だと！

地上でだ！

まるでハトーの再現じゃないか！」

ドアの向こう側から響く大統領の声と、机を激しく拳で叩くを聞き、側近は海兵隊に所属している大統領の長男に、すぐ官邸に来るように連絡を入れた。

「お父さん、大丈夫ですか？」

連絡を受けた長男が執務室に入ったとき、ローザファシスカは執務室の隅に蹲るようにして、愛蔵の切手コレクションのページをめくっていた。

しかし、その目は何も捉えておらず、好事家が喉から手が出るほど欲しがるような貴重なコレクションに対する感動も何もあつたものではない状態だ。

「あ、ああ、お前か。」

酷い、ずいぶん酷いことに、なった」

顔を上げることなく、ローザファシスカは長男に言葉を投げると、そのまま押し黙ってしまった。

明日までに心を立て直さなければならぬことは、誰よりも自身が理解している。

未曾有の国難に立ち向う大統領が、この程度でへこたれるなどもうひとりの自分が叱咤している。閣僚や国民の前では決して許されない弱気な姿も、家族の前でなら許される。そして、その姿は伝聞となつて、戦争を望んでいなくなつたという一面を強調できるだろう。困難を乗り越えていくリーダーこそ、この難局には相応しく、オリザニア国民が望むリーダー像だ。

ネグリットの惨状に打ちひしがれた自分と、それをどうすれば有効に活用できるかを冷徹に計算する自分がいることを、ローザファシスカは自覚している。

息子の前で、ローザファシスカはひとときの休息を取ることに決めていた。

ハトー奇襲成功の魔道通報はソル本土ばかりでなく、ネグリットや南方資源地帯に攻め込んだソル騎兵軍や砂海軍の各司令部でも傍受していた。

通信士官から報告が上がると同時に、各地の司令部には万歳の声が響き渡り、次々に伝達された報告で末端の兵まで戦意は果てしなく高揚した。

「なんだ、大東砂海最大の要衝なんていっても、わが砂海軍にかかれば赤子の手を捻るようなものじゃないか」

「飛行場から飛び立った敵機は、零戦が一機残らず叩き落したそう  
だ。」

あの機体に勝てるものなど、この世にはないだろう。

南方資源地帯の制圧も、あつという間だろう」

「砂海軍の次の目標はオリザニア本土か？」

俺たちはこのまま反対回りにドラゴリーまで攻め込んで、アレマニアやワイトルスと合流できるんじゃないか。

そうなれば世界制覇だな」

ナンクウ機動部隊の苦労などどこ吹く風といったように、各級指揮官や末端の兵が口々に楽観的なことを言い合う。

もちろん、開戦に当って極秘行動を取っていたことの苦労は並大抵のことではなかったが、ナンクウ機動部隊の成功がそれぞれの成功を約束しているかのように見えていた。

「零戦の攻撃力は、世界最強だな。」

まもなく連合艦隊に編入される『アンギラス』と『ギエロン』、そして零戦があれば世界制覇も夢じゃない」

「まったくだ。」

『アンギラス』と『ギエロン』は、オリザニアやサピエント、いや世界中の砂海軍のどこも持っていかない、四六センチ主砲戦艦だからな。

敵戦艦の射程外から、一方的に痛打できるんだ。

零戦の性能も、世界一だ。

敵の手の届かないところから、自在に攻撃ができる。

オリザニアもサピエントも、恐るるに足らず」

連合艦隊司令部でも、ゴトムの思惑を他所に怪気炎が上げられて



いた。

メデイエータ戦線でも証明された零型艦上戦闘機は、ハトー奇襲でもめざましい戦果を挙げている。

そして、まもなく戦線に加わることになる世界最大の排砂量と主砲を持つ『アンギラス』型戦艦の一番艦『アンギラス』は、慣熟訓練を終えて西工廠沖にその巨体を休めていた。

南工廠で建造中の二番艦『ギエロン』も、翌年夏の戦力化を目指して急ピッチで儀装の仕上げが進められていた。

司令長官公室でドア越しに聞こえてくる参謀や将兵の甘い見通しに、連合艦隊司令長官ゴトム大將は哀しい気持ちに締め付けられていた。

この一撃に始まり、次々とオリザニア、サピエントの砂海兵力を撃破し、一時的にでも大東砂海からオリザニア、サピエント艦隊を駆逐する。その結果を以って、オリザニアの戦意を地獄の底に着くほど喪失に追い込み、国内世論を厭戦に傾かせた上で講和に持ち込まなければ、いずれ巨大なオリザニアの工業力にソルなど簡単に飲み込まれてしまう。

そのためのハトー奇襲であり、それまでを持ちこたえるための南方資源地帯制圧だ。

ゴトムは、正式な最後通告の前にハトー奇襲が開始されていないか、それだけが心配だった。

もし、文書の手交より前にハトーを奇襲するようなことがあれば、正義と公平を国是とするオリザニア国民の怒りが爆発する。そうなるってしまえば、オリザニアはソルを焦土と化すまでその戦いの手を緩めることはないだろう。

楽観的に参謀たちを他所に、ゴトムの心が晴れることはなかった。

「長官、ナンクウに第二次攻撃のご命令を。」

傍受した魔通によれば、まだ敵空母も港湾施設のほとんども、魔鉱石タンクも手付かずの様子。

これを打ち漏らしては、ハトー奇襲の意味がありません！」

先任参謀がゴトムに向かって口を開いた。

ナンクウ機動部隊の撤収を援護するため砂海上を疾走する旗艦『アーストロン』の作戦室で、この後どうすべきかの作戦会議が開かれていた。

日没後の砂海を渡る風は、日中とは打って変わって冷え込んでいるが、作戦室の熱気を僅かも冷やすことはなかった。

「機動部隊は、既にハトーからだいぶ離れている。」

一杯一杯のところで作戦を終えて離脱しようとしている者を、もう一度立ち上がらせるにはこれを起こらせるより他はない。

統帥の根源は人格だ。

そんな非人間的な命令は、金輪際できるものではない」

参謀長が強固に反対する。

己が才能を信じるあまり、他を見下す癖のある倣岸不遜な態度を隠そうともしない。

もっとも、司令長官の寵愛を一身に受ける先任参謀に対する嫉妬が含まれていることは、そこにいる誰もが知っていることだった。

「我々は武人です！」

「この戦機を逸するなど、できようはずありません！」

「この次は無謀な強襲だ。」

戦機とは、そういうものではない」

「強襲となろうが、ここはもう一度突っ込むべきです！」

「敵飛行機の損害程度が不明だ。」

そんなところに突っ込ませて、万が一にも無傷だった空母を沈められたら取り返しがつかん」

「しかし、参謀長、オリザニア大東砂海艦隊が行動不能に陥ったかどうか、今後の作戦上の不安を取り除くためにも再攻撃を加えるべきです」

「空母が残ってるんだぞ、空母が！」

「その空母を撃滅するためにも！」

堂々巡りになりつつある参謀たちと参謀長の論争を、ゴトムは目を閉じたまま無言で聞いている。

「やはり、再攻撃は見送るより他はないと思いますが」

参謀長が最後の決を求めるようにゴトムに声をかける。

「もちろん、再撃に次ぐ再撃をやれば満点だ。

自分もそれを希望するが、機動部隊の被害状況が少しも判らんから、ここは現場の機動部隊長官の判断に任せておこう。

それに、今となつては、もう遅すぎる」

不満な表情で、ゴトムは論争に終止符を打った。

そして、誰にも聞こえないような小さな声で呟く。

「そんなことを言わなくとも、やれる者にはやれる。

遠くからどんなに突っついてても、やれぬ者にはやれぬ」

この呟きを、航空参謀は聞き逃さなかった。

既に北方に退避を始めた機動部隊旗空母『コツヴ』では、九時間近く前に下達されたナンクウの命令を消化しきれないし要平の不満が渦巻いている。

ソル時間で午前九時、八トー時間では午後二時半頃、第三次攻撃があるとはかり思い込んでいたミッツ中佐は、搭乗員待機所に用意された牡丹餅をほお張ったところで、艦内に響く高声放送に魂を抜

かれるような衝撃を受けていた。

『戦闘機を残し、他の飛行機を格納庫に収容せよ』  
同時に艦が北を向く。

「冗談じゃない！」

まだ飛行場も、魔鉱石タンクも、空母も討っていない！  
ミッツの悲痛な声が、搭乗員待機所を満たした。

「通信士、『コツヴ』に信号。」

『我第三次攻撃準備完了』」

第二航空戦隊司令官オーキキ少将は一斉回頭の命令が出されても  
尚、ハトーへの第三撃を諦め切れなかった。

いや、本心ではもう攻撃命令が出ないであろうことは理解している。  
る。

だが、ここで討ち漏らした敵が明日は味方の命を奪うという直感が、  
しつこいまでの意見具申に走らせていた。

「司令官、もう一度、もっと強く、意見具申するべきです」

『信号了解』の発光信号の後、沈黙を保ち続ける『コツヴ』を忌々し  
そうに睨みつけた二航戦航空参謀がオーキキに向かって言った。

「いや、ナンクウさんは、やらないよ」

だが、この沈黙の間に自身の感情を整理したオーキキは、誰にと  
もなく呟いた。

「お父さん、ついに始まってしまったんですね。」

あの子が……

あの子が、とうとう……

あの子まで、人を……！」

臨時ニュースに顔を蒼白にしたエルミの母が、興奮で上気した面持ちの夫に言った。

もちろん、この時点でエルミがどこの配属で、どのような作戦に従事しているか、夫婦は知らされていない。

第二航空戦隊に配属されたまでは知っているが、開戦に当って編制換えがあつたかもしれない。ここしばらくの間に届いたエルミからの手紙には、過酷な訓練の様子こそ書かれていたが、どこにいてどこに行くのかという軍機に関わる情報は当然ながら記されていないかつた。

訓練に明け暮れる毎日でも、僅かな油断が他人を巻き込んだの死亡事故に繋がっている。しかし、それでも殺意を持って他者を滅すということとは、決していない。あくまでも訓練は訓練であり、人を殺す技量を磨くことではあつても、人を殺しているわけではない。

だが、開戦となれば話は別だ。

今現在、仮に後方に配属であつても、いずれは前線に出るときが来ることは火を見るより明らかだ。

戦士を後方で遊ばせておくほど、軍という組織は甘いものではない。

エルミの母は、娘の活躍を望むと同時に、激戦区への配属は避けて欲しいと心の中で思っている。娘が死の危険と隣りあわせでいることに耐えられないと同時に、戦争であつても娘にまで人殺しの罪を背負わせたくないのだった。

「あ、ああ。

だけどな、エルミも皇国民だ。

一朝事あれば銃を取ることに躊躇いは許されんのだ。

もちろん、我々も。

もつとも、俺やお前が銃を取らなきゃならんとなったら、皇国はおしまいだがな」

娘の死や、娘が人を殺めるのを望まないことは父も同様だが、この時代に生きる者としては至極当然の考え方だ。

あからさまに妻を叱り付けるようなことはしないが、それでも娘の軍務を忌避するような物言いは慎まなければ、どこで誰が聞いているか判ったものではない。下手に特高の耳にでも入れば、娘の栄達はもちろん、自身の命まで危うくなる。

妻にそのような危ない橋を渡らせたくない一心で、父は宥めるように言葉を紡いでいた。

「レグルはどうしてますかねえ、お父さん。

お国のためにお役に立てたんでしょうか」

レグルの母は、最も心配な部分を隠し、夫に訊ねた。

もちろん、夫が正確な答えを用意できるとは思っていない。

「そうだな、開戦前からどこにいるのか、どこへ行くのか、何も知らせてこなかったからな。

作戦が漏れないようにとのことだろう。

どんな些細なことであっても、どの艦がどこへ行くという情報が出てしまえば、それから大きな動きが知れてしまいかも知れないからな」

たとえ、レグルの乗艦が『ドラコ』から掃砂海艇のような小艦艇に移り、その配属が公になれば、その行動から作戦全体が見透かされてしまうかもしれない。掃砂海艇一艘の情報だけで全てが発覚するとは思えないが、いくつもの情報を取りまとめ、取捨選択しなければ、ソル砂海軍全体の動向は自ずと見えてきてしまう。

重要な作戦に従事していようとしていまいと、将兵たちの手紙が

ら所在地や作戦の影が見え隠れする文言は、すべて削られていると見て間違いない。

「とにかく、私はあの子が無事に帰ってくれば、それだけでいい。戦功なんか挙げなくてもいいんです。

ただ、ただ、無事でいてくれれば、それで」

レグルの父から見たそのときの妻の顔は、まぎれもなく幼子の行く末を案じる母の顔だった。

日の出と共に行われる宮城遙拝の前に身支度が済むように、妻が水垢離をしてくることを夫は知っていた。ただでさえ貴重な水を飲食や洗濯、日常の洗い物意外に使うことは決して褒められたことではない。

だが、砂漠が周囲を囲むこの世界では、夜の冷え込みは大岩盤とは比べ物にならないほど厳しいときがある。そのような冷気の中で氷のように冷たい水を浴びる母を、村の誰もが責めることはなかった。

明け方、かすかに聞こえる水音を、村の誰もが聞こえない振りをしていた。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

朝の臨時ニュースの衝撃に、つい包丁で指を深く切ってしまったチエルの指を見つめて、アレイが聞いた。

最近ではすっかり調理場に立つ姿が板についたアレイは、自分よりベテランのチエルが包丁で怪我をするなどこ久しく見た記憶がなかった。

「チエル、心配は解かる。

今日は、多分夜が忙しくなるだろう。

それまでは大丈夫だから、しばらく横になつてこい」

父はこれ以上チエルに怪我をさせまいと、しばらくの休憩を強引に命じた。

昼時を前に食堂は賑わいを見せていたが、アレイが十分な戦力となった今、チエルがひと時の休憩を取ったとしても何とかなる。

「ありがとう、アレイ、お父さん。

ごめんなさい、まだ、いえ、ずっと胸が苦しくて。

ちよつと横にならせてもらうわ」

チエルは自分自身がコントロールできなくなっていることを自覚していた。

許婚の仕事は理解しているつもりだったが、いざ死を賭した戦場に赴くことが現実とわかつた今、とても冷静ではいられない。

臨時ニュースでは赫々たる戦果が流れたが、ソル軍の被害は一切報じられていない。

戦争になれば相手がいることでもあり、こちらの被害がゼロというわけにはいかないことくらい、チエルも理解している。

いつレグルが死の河を渡るのか、運と偶然がすべてを決する戦場に保証などない。

チエルは、臨時ニュースを聞いて以来、レグルのことしか考えられなくなっていた。

「チエル、おいで」

襖の向こうから母の声が響く。

か細く、弱々しい声だが、チエルの心を暖かく包んでくれる声だ。

「お母さん……」

布団の上に正座したに母の前で、チエルが崩れ落ちる。

母は、無言で膝を叩き、小さく頷いた。

チエルは、そのまま母の膝に顔を埋め、声を出さずに泣き始めた。



一二月八日の午後になると、ハトーやネグリットの戦果、南方資源地帯のティスチ植民地やゴール植民地の制圧といった情報が溢れ始めていた。

日も沈んだ午後七時半、街頭に設置された魔道放送機の前には、黒山の人だかりができていた。

やがて、情報局次長の声がスピーカーから流れ出す。

「我等は戦って、戦って、戦い抜くのであります！」

勝って、勝って、勝ち進むのであります！」

錦の御旗は、南に、東に、北に、西に躍進して、西部大東砂海の歴史を創るのであります！」

西部大東砂海をドラゴリー人やバキシム人の手から、西部大東砂海の人々の手に奪い返すのであります！」

西部大東砂海人の、西部大東砂海を作り上げるのであります！」

絶叫調の放送を、互いに誰とも知れぬ人々が聞いている。

誰もが微動だにせず、ひと言も聞き漏らすまいとして、言葉を発することなく聞いている。

「ソル皇国民にとって、これ以上の生き甲斐は絶対無いのであります！」

宣戦の詔勅を奉戴した我等皇国民の決心は、『今日よりは 顧みなくて大君の 醜の御楯と 立つ我は』と同じ心なのであります！」  
遙かな昔、防人と呼ばれた戦士が詠んだ歌を引き合いにして、情報局次長のアジテーションは続けられた。

歓声とも咆哮ともつかぬ声が、人々の間に奔り始める。

放送が始められたときの静寂は、もうない。朝の臨時ニュースから続いていた熱狂が、再び渦巻き始めていた。

「我に世界無敵の騎兵軍あり！」

我に世界無敵の砂海軍あり！

サピエント、オリザニア、何ぞ惧るるに（おそるるに）足らんや！

常に御稜威みいつのもとにあるのであります！」

既に絶叫と化したアナウンスが終了する。

「皇王陛下、万歳！」

聴衆の中の一人が絶叫した。

それに和する集団があちこちに派生し、群集の絶叫が悲壮感をまとわりつかせて広がっていった。

「いやあ、予想以上だったね、首相。

これでローザファシス大統領は失脚だな」

砂海軍大臣が銚子を取り上げた。

首相官邸には、ジョウエイ首相の他に砂海軍大臣、砂海騎兵両軍省幹部が集まっていた。

戦況が明らかになるにつれ、重苦しかった空気が和らぎ、今では勝利の祝宴が始まっていた。

普段は犬猿の中といてもおかしくない両軍の幹部が、この日はかりは互いの肩を抱き合っている。威厳に溢れた振る舞いを取るように気遣っているジョウエイすら、普段とはまったく違う顔を見せていた。

「メルイイもな」

思い出したように砂海軍大臣は続ける。

砂海軍大臣は、既に過去の人と敵将を認識していた。

「まずは、めでたい。」

戦況は早速陛下に申し上げてこよう」

上機嫌でジヨウエイが答える。

「おい、アレマニアとウィトルスにも伝えておけ」

秘書官にジヨウエイは大声で命じ、酔いが回る前に報告をと言って部屋を出て行った。

連合艦隊旗艦戦艦『アーストロン』は、夜の闇を切り裂いて砂海上を走っている。

もつとも、機動部隊を護衛すると言う名目での出航ではあるが、主力部隊が西工廠泊地に居座ったままでは格好がつかないという理由の方が大きかった。

大勝利の後でもあり、それほど緊急性のある航海でもない。

巡航速度より一段階遅い速力で進む艦上には、緩い空気が漂っていた。艦の航進が巻き起こす向かい風も、そよ風のように感じられる程度だった。

燃料消費の問題から、緊急の作戦であっても常時全力航行をするわけでもないのだが。

魔道放送を通じて湧き上がらされた国内の喧騒をよそに、司令部の空気は冷静そのものだった。

ゴトムの表情など、まるで朝の大勝利を忘れてしまったかのようにも見える。

ナンクウ機動部隊は一度だけ戦果報告を行っただけで、また魔通封鎖を実施している。その後の情報はまったく入ってこないが、早朝から敵が発した平文の魔通を傍受するだけで充分に状況把握はできていた。

こちらに艦艇に一隻の喪失がないことも、おそらくは間違いない。万が一にも喪失艦があれば、緊急魔通が発せられるはずだ。攻撃を受けているということは位置が暴露しているということであり、魔通封鎖などまったく意味を成さないからだ。

一方的に敵を叩き、航空機の被撃墜があつたとはいえ、艦艇の喪失がただの一隻もないなど世界史にも例のない大勝利だ。まさに字義通り、完勝といつていい。

だが、作戦室に詰める参謀たちの顔は冷静で、まだ作戦が行われなくてもいいのではないかといった雰囲気だつた。

「さあ、これからどうするか。

考えておけ」

夕食後、ゴトムは参謀たちにそう言つて公室に消えていた。

参謀たちはゴトムの言葉に従い、これからのことに思いを巡らせている。

信じられないことだが、思いもしなかつた大勝利の後の作戦構想など、誰ひとりとして考えていなかったのだつた。

メルイイの親友でもあるオリザニア砂海軍航海局長ミニッツ少将は、深夜になつてようやく遅い夕食を摂つていた。

予期しなかつた開戦と、未だに信じたくない敗戦により、航海局は混乱の巷と化していた。その長であるミニッツに、ゆっくりと食事を摂る余裕など、あるはずがなかつた。

妻が事務所に届けたポットは二本あり、湯気を立てるコーヒーとスープがそれぞれに満たされている。

籐で編まれたバケットの中からも、ハンバーガーが湯気を立ち上

らせ、殺伐とした事務所に食欲を掻き立てる肉の香りを撒き散らしていた。

簡単だが、仕事を中断せずに食べられるメニューに、妻の心遣いを感じられ、ミニッツは心を奮い立たせることができた。

昼に届けられたハトー奇襲の緊急信以来続く航海局の混乱は、ようやく一段落したかのように見える。

だが、この先やらなければならぬ仕事は、食事の合間に思いつくだけでも気が遠くなるほどだ。

戦時体制に移行した砂海軍の兵員の遣り繰りはもちろんだが、ハトーの惨状はその計画を完全に吹っ飛ばしている。撃沈破された艦艇の引き上げや修理の手配。

その間、穴の開いたハトー哨戒網を埋めるための艦艇の再配置。

戦死傷した将兵の補充。

それに伴い不足することが確実な他戦線への兵の補充。

ハトーで戦死した将兵の遺族への通知。

遺体の本国への移送。

そして、乗艦の被害で身の回りの品をすべて失ったであろう将兵の面倒までが、航海局に降りかかってきている。

あらゆる部局との折衝の合間に、一般市民や退役軍人からの激励や砂海軍入隊希望の魔道通信も、ありがたいことではあるが混乱に拍車をかけていた。

オリザニア全土が怒りに包まれていた。  
騙し討ち。

ソルは平和を望む振りをして握手の手を差し出していたが、背後に隠した手には剣を握っていたのだ。

ソルの差し出した手を握り締めたオリザニアは、致命傷とはならなかったが、その胸に大きな傷を負った。

オリザニア首都にあるソル大使館には、この時間になっても群衆が押し寄せ、口々に罵りの叫びを叩き付けている。

そればかりでなく、大使館の魔道通話機も鳴りつ放しであり、そのすべてが罵声で占められていた。

ソルの新聞各社の特派員たちは、この状況を取材しようにもできない状況ではない。

ハトー奇襲さるの報道以来、道ですれ違う人々の視線がきつくなり、知己であっても朝までの親しげな視線を向ける者は皆無だった。下手に出歩けばリンチにでもかけられるのではないかという恐怖が、オリザニア在住ソル皇国民の心を掴み占めている。

オリザニアを講演で回っていた女性がある都市に到着したのは、現地時間の午後四時過ぎで、ハトー奇襲の報道がなされてからしばらくしてのことだった。

浮遊車の駅には多くの人々が詰めかけ、その女性の到着を待っていたが、明らかに歓迎の群衆ではなかった。

怒声のシュプレヒコールが鳴り響く中、駅の片隅で縮こまっていた主催者は、女性の警護のため軍の出動を要請している。いくら敵国人だとしても、無防備な女性を殺害したなど報道されては、オリザニアの威信に関わる自体だ。

敵国人保護に乗り気ではない軍も、国の名誉のためと言われて渋々駅を取り巻く群衆の排除を開始した。

もちろん、拡声器を用いて群集に冷静さを保つことを呼びかけ、女性に危害を加えるなど国の名誉に泥を塗る行為だと繰り返し、女性の保護を宣言するに留まったが。

その後、軍の施設に女性は保護されたが、それを取り巻く群集は夜になってもシュプレヒコールを続けていた。

「通信参謀、オリザニアの魔道放送は何と言っているかね？」

深夜、公室に呼び出した通信参謀に、ゴトムは気がかりな点を訊ねた。

作戦の立案時から、外務省にはうるさいほど言い続けていた注文が実行されていたかどうか、ゴトムはそれが最も気がかりだった。

奇襲直前の最後通告。

もし、万が一にも、この手順が狂ってしまえば、ハトー奇襲の作戦構想が崩壊する。

騙し討ちを許容するほど、オリザニア国民は軟弱の徒ではない。

正々堂々たる振る舞いと、公平と正義を謳う国民をして戦意を疎漏させるには、ハトー奇襲前の最後通告は必須だった。

「当初は、ハトーについてのほとんど報道はなかったのですが、本日のあるところから増えております。

どの報道も、我々が発表した戦果よりかなり低めの被害と報告されており、相当真実は隠されているかと。

それと、『騙し討ち』という言葉が、ほとんどの報道で確認されました」

## 第26話 索敵

二六四一年二月一〇日。

長く砂海軍関係者の間で論争の基となっていた問題に、ひとつの決着が着こうとしていた。

砂海上を全力航行している作戦行動中の戦艦を、航空攻撃のみで撃沈できるか。

砲術専門家のほとんどは不可能だと考えており、ほとんどの航空関係者は可能だと見ている。

過去において、航空攻撃で撃沈された戦艦は何例かあったが、いずれも軍港等で停泊中か、投降中という戦闘行動を取っているとはいえない状態だった。今回のハトー奇襲でもオリザニアの戦艦が撃沈されているが、停泊中に起こった不意打ちであり、戦闘行動を取っていたとはいえない。

ソル機が投じた八〇〇キロ爆弾の威力は戦艦の装甲板を貫けると証明されたが、対空砲火を打ち上げ、全力で回避運動を行う戦艦に、水平爆撃が命中する確率は限りなく低い。

世界中の砂海軍が持つ急降下爆撃機では八〇〇キロ爆弾の運用は不可能であるとされており、二五〇キロ爆弾では致命傷を与えることが不可能である以上、爆撃で戦艦を撃沈はできないと結論付けられている。

では、砂雷ではどうか。

炸薬量は二〇〇キロ程度ではあるが、喫砂線下に大穴を開けることは可能であり、一発では撃沈まで至らなくとも数発の命中で戦艦といえども撃沈できると、これは誰もが認めている。

水平装甲板に穴が開こうが、それが即侵砂にはつながらないが、喫砂線下に破口が開いてはいずれは侵砂量に耐えかねて沈没す



ることは明らかだ。

だが、航空砂雷自体の重量が重く、それを運用する攻撃機の機動は極端に低下する。

さらに、戦艦単艦で戦闘行動を行うなど考えられず、多数のイスコート艦艇が付き従う中、熾烈な対空砲火を掻い潜り、全力で回避運動を行う戦艦に対し雷撃を成功させる確率は、これも限りなく低いと見られていた。

ハトー奇襲に全世界が震撼した一二月八日の夕刻、マレーヤ軍港からバラバの駆逐艦一隻を含む、六隻のサピエント艦隊が出撃していた。

ハトー攻撃開始に先立つこと七〇分、ソル騎兵軍はシアム王国国境近くのマレーヤ半島のサピエント植民地に上陸した。この部隊は、一気にマレーヤ半島を南下し、半島の先端にあるサピエントの西部大東砂海域における最大の根拠地であるマレーヤ軍港を攻略する予定でいる。サピエント大東砂海艦隊司令官マスファイ大將は、このソル軍マレーヤ上陸部隊に対する輸送船団を攻撃するため、艦隊から一部を抽出し、自らも最新鋭戦艦『ラバナスタ』に座乗して出撃していた。

輸送船団攻撃部隊の旗艦を勤める戦艦『ラバナスタ』は、この年の一月一九日に就役したばかりだった。

基準排砂量三万六七二七トン、全長二二七・一メートル、全幅三四・三メートルの巨体を、蒸気タービン四基四軸一二万五〇〇馬力の機関が最大速二八ノットで砂海上を疾走させる。航続距離は二〇ノットで六三〇〇海里におよび、かつては全世界の海を支配したと言われるサピエントの戦艦に相応しい性能を有している。

艦の前部にある第一砲塔と、後部の第三砲塔は三五・六センチ四

連装砲塔だが、背負い式に配置された第二砲塔は連装砲塔の計十門という変則的な兵装が特徴だ。

近接戦闘用に一三・三センチ連装両用砲八基と、対空砲火として四〇ミリ八連装ポムポム砲を備え、一五二一名の乗組員がこれらを支えている。

艦齡が若く乗組員の錬度に多少の不安はあったものの、艦の性能とベテラン艦長の指揮で充分にカバーできるものとマスフィは考えている。

さらに、新米戦艦一隻が戦場に出るわけではなく、付き従う護衛艦艇や陣形を組む僚艦には、艦齡こそ古いがその代わりよく使い込まれた剣を思わせる歴戦の艦が舳先を揃えている。

特に巡洋戦艦『ビュエルヴァ』は、艦齡二五年を数える古参艦だが、搭載する主砲は連装三基六門とはいえ『ラバナスタ』より大口径の三八・一センチ砲だ。

基準排砂量二万七五〇トン、全長二四二メートル、全幅三一・三メートルの数值は、巡洋戦艦であるがゆえ、排砂量と全幅は『ラバナスタ』におよばないものの、全長では十五メートル近く凌駕する巨体だ。

重量感溢れる『ラバナスタ』が巨大な戦斧だとすれば、スマートなシルエットを持つ『ビュエルヴァ』は鎧の隙間を刺し貫く鋭利な剣に例えられていた。

二基二軸、一一万二〇〇〇馬力の機関は、この巨体を最大速二八三ノットの高速で砂海上を走らせ、一五ノットで九四〇〇海里の長大な航続距離を有し、一〇〇〇名の乗組員がこれを支えている。

「長官、ソルの戦艦は出てくるでしょうか。」

『ラバナスタ』と『ビュエルヴァ』の戦闘力に不安はないのですが、あくまでもそれはカタログ上のことです。

本官の乗組員は、東南ベロクロン派遣が初陣の新兵が多く、正直

なところ、未だ慣熟訓練が完了したとはいえない状況です。

このような状況でソルの戦艦と撃ち合えば、負けないまでも大きな被害を受けかねません。

さらに、空母もない状況で、敵航空部隊の襲撃を受けては、沈まないまでも艦隊決戦時に大きな不利を負う可能性も否定できません」

動き始めた『ラバナスタ』の艦橋で、艦長リッチ大佐が不安を隠せずにマスファイに話しかけた。

サピエントの航空機は航続距離が短く、陸上基地からの援護はあまり期待できない。

艦隊上空の滞空時間が数分のレベルであつては、いてもいなくても同じことだ。艦隊上空の制空権確保のための空母『ナルビナ』は、現在座礁事故の修理中であり、呼び寄せようにも間に合いそうにない。

「艦長、貴官の不安はよく解かる。

だが、それも言っていられないのが現状だ。

ハトーのオリザニア大東砂海艦隊が壊滅した今、我々しかおらんのだよ。

それに、当艦の乗組員はまだ未熟かもしれないが、貴官の乗組員であるという名誉と自覚がそれを補ってくれるものと、私は信じている。

この砂海域にいるソル艦隊の戦艦は、情報によればソル最古参の『キュラソ』級の二隻だ。

我々が撃ち負けるとは思えない。

いずれにせよ、我々は義務を果たすだけだ」

小柄な体躯に闘志を漲らせ、マスファイは力強く言った。

この時期、南方資源地帯に配置されたソルの戦艦は、艦齢も古く主砲も三五・六センチ連装砲塔四基八門の『キュラソ』型戦艦一番艦『キュラソ』と三番艦『ギラドラス』しかない。戦艦同士の決

戦となれば、サピエント艦隊の火力が優っている。

速力では『キュラソ』型戦艦には一步及ばず、補助艦艇もソル艦隊が優勢だが、名うての大艦巨砲主義者でもあるマスフィは、自身の勝利を疑ってはいなかった。

この他にマーレイヤ軍港には軽巡洋艦や駆逐艦が存在したが、いずれも修理中であつたり、低速などの理由で部隊への参加を見送られていた。

この時点で、既にハトーでオリザニア大東砂海艦隊が受けた損害の詳細は、同盟国であるサピエントには伝えられており、そちらからの増援は望めなかった。マスフィは、自分の部隊が単独でソル艦隊に対抗するには力不足であり、かつ空軍の航空支援も期待できないことを知っていた。だが、マーレイヤ半島が侵攻されるという危機を座して見過ごすわけにはいかなかった。

ゴール植民地にあるソル軍基地からの距離やソルの制式空母に関する情報から、空襲による危険は少ないとマスフィは判断していた。もっとも、空襲を受けたところで、戦艦や巡洋戦艦が被害を受けるなど、マスフィは考えもしていない。

これまで作戦行動中の戦艦が、ただの一隻も航空機によつて沈められたことはないという事実と自身の研究から、マスフィは合理的に結論付けていた。

当然、ソル砂海軍はサピエント艦隊の動向には、神経を尖らせている。

輸送部隊の進路とマーレイヤ軍港の間には潜砂艦部隊を展開させ、サピエント艦隊の襲来に備えていた。もちろん、砂海軍航空隊も、開戦以降入念な偵察を行っている。

万が一にも『ラバナスタ』と『ビュエルヴァ』が哨戒網を潜り抜け、輸送船団を襲うような事態になれば、南方資源地帯の制圧は瓦

解する。この砂海域に展開するノープ中将率いる第二艦隊は重巡洋艦主体であり、戦艦は一時的に編入された三五・六センチ主砲八門を搭載した『キュラソ』と『ギラドラス』の二隻しかない。真正面から撃ち合いになった場合、元は巡洋戦艦で装甲の薄い『キュラソ』と『ギラドラス』の二隻では、分厚い装甲を持つ『ラバナスタ』や、三八センチ主砲を搭載する『ビュエルヴァ』に撃ち勝つことは難しいと判断されていた。

輸送船団の護衛に就くハルミ中将率いる南遣艦隊には、重巡洋艦『チャンドラー』を旗艦とし、第七戦隊の重巡四隻、第三砂雷戦隊の軽巡一隻と駆逐艦銃一〇隻を基幹戦力としていた。この他に第四、第五、第九の三個潜砂戦隊、第一二、第二二の二個基地航空戦隊を配下に収めている。だが、サピエントの戦艦と撃ち合うには砲力の不足は明らかであり、ある程度の犠牲は覚悟の上で、砂雷戦に持ち込むという悲壮な覚悟を固めている。

もっとも、航空主兵論者のハルミ中将は、基地航空隊にサピエント艦隊撃滅の大きな期待を寄せていた。

ソル砂海軍は、マーレイヤ軍港付近に潜入させたスパイからの情報で、サピエント艦隊が出撃準備を始めたことまでは掴んでいた。

だが、八日の午後から軍港の警備が厳しくなり、出撃を察知することができず、『特に敵情に変化はなし』と判断していた。哨戒任務に就いていた『キュラソ』、『ギラドラス』以下の艦隊は、いつ発生するか判らない砂海戦に備え、燃料補給のためシアム王国に近いゴール植民地の基地へ戻ることになった。同じく輸送船団護衛の任にあったハルミ中将指揮の南遣艦隊も、輸送船団の護衛を終えてゴール植民地の基地へと引き返しつつあった。

日没後に航空機による哨戒は不可能であり、サピエント艦隊の動向が不明のまま、開戦一日目の夜は不安に過ぎていった。

翌一二月九日、僅かな補助艦艇を残して蛻の殻となったマーレイヤ軍港の光景に、決死の思いで潜入したスパイは飛び上がらんばかりに驚き、狼狽した。

緊急信が飛び、第二艦隊、南遣艦隊の司令部は一気に緊迫した空気に包まれる。

複数の偵察機が飛び立つが、サピエント艦隊の行方は杳として判らなかつた。

当然、砂上打撃部隊も出撃するのだが、どこで網を張るかについて作戦会議は紛糾する。当てずっぽうに出撃したところで、広い砂海上で敵艦隊を捕捉するには相当な幸運が必要だ。万が一、すり抜けられでもしたら目も当てられないことになり、ノーブとハルミが腹を切るくらいでは済まない事態になってしまう。

結局、上陸部隊の近くに艦隊を展開させるより他はなく、サピエント艦隊の発見は航空偵察と潜砂艦に任せる以外方法はなかつた。

誰もがとろ火で炙られるような焦燥感に包まれていた現地時間の一五時一五分、潜砂艦イ六五がサピエント艦隊を発見し、緊急信を送ってきた。

『敵『ビュエルヴァ』型戦艦二隻見ユ

地点『コチサ』、針路三四〇度、速力十四ノット、一五一五』  
カウチヤウ

イ六五は打電後も接触を続よとするが、速力の違いから一七時二〇分には見失ってしまった。

敵に発見される危険を冒して砂上航行を続け、一八時二二分頃に再度発見したものの、やはり振り切られてしまう。

「正体不明の魔通を傍受しました。

内容はおそらく暗号であり、現在のところ不明です」

通信士官が艦橋に上がり報告する。

「現在この砂海域に我が国や同盟国の部隊が展開しているという情報はない。」

「正体不明ではなく、敵と判断すべきだ」  
通信参謀が窘めるように言い、マスフィに向き直る。

「発見されたと考えてよいだろう。」

一度、韜晦すべきと考えるが、諸官の意見はどうかね？」  
通信参謀より先にマスフィは口を開いた。

ハルミ中将はこの報告を受け、船団は一時避退するよう命じた。そして、基地航空部隊にはサピエント艦隊の搜索と攻撃を、そして艦隊にはただちに集結の上、南下するよう命令する。だが、砂嵐に巻き込まれ、サピエント艦隊の捕捉は困難な状況になっていた。

「これではサピエント艦隊を発見するのは難しいでしょう」  
窓から艦首すら見えない砂嵐の中、『チャンドラー』の艦橋で南遣艦隊参謀長が、ハルミ中将に話しかける。

日没にはまだかなり早い時間ではあったが、砂嵐のせいで艦の周辺は闇のような暗さになっていた。

「仕方あるまい。」

これでは発見したときは衝突だ。  
前世紀の砂海戦になってしまいそうだな。  
あちらさんもそれは望むまい。

おそらくは、一旦マーレイヤ軍港に戻ろうとしているはずだ。  
逆に考えれば、輸送船団が襲われる危険はない」

鬼瓦と称される厳つい顔を参謀長に向け、ハルミは答える。

若い頃に駆逐艦に乗り組んでいた際に事故遭い、顔面を酷く負傷した後遺症で表情が変えられなくなってしまったことで付けられたあだ名だった。

しかし実際には、サピエント艦隊と南遣艦隊は、晴天の下であれば互いを目視できる距離に近付いていたが、視界不良で両軍とも相手の存在に気付かなかった。

艦の航行には大量に火の魔鉱石が必要であり、火の魔鉱石からエネルギーを取り出すには大量に魔力を行使する人間が必要だ。

それに伴って必ず発生する魔力を探知し、その反応から距離や方向を測定する魔探知は、各国でその開発が進められている。

だが、サピエントやオリザニア、アレマニアといった技術先進国であつても未だ発展途上の技術であり、それほど精度を期待できない魔探知機は、砂嵐のせいでディスプレイを真っ白に染めていた。ソルに至っては、魔探知の使い道など犯罪防止程度にしか見ておらず、大きく場所を喰う魔探知機を積むくらいなら攻撃兵器を積めという注文が用兵者から出されており、どの艦にも魔探知機は積んでいない。

「砂嵐さえなければ、南遣艦隊を率いてサピエントの戦艦に突撃したいと、長官はお考えなのではありませんか？」

参謀長のからかいに、ハルミは変わらない表情で頷き、同意を示す。

今でこそ航空主兵論者として知られているハルミだが、根っこの部分は砂雷を専攻した砂海上の武人だ。夜戦、それも寡兵を以て優勢な敵を討つ砂雷戦を前にして、その血が滾らないはずがない。

「まあ、そう煽ってくれるな、参謀長。」

夜戦となればこれを避ける気などないが、もし、この瞬間に砂嵐



が晴れ、敵艦隊が目の前にでも現れてみる。

あちらが三六センチに三八センチ主砲を持つ戦艦二隻に対し、こちらは二〇センチ砲の重巡五隻に豆鉄砲しか持たない駆逐艦だ。

確かに砂雷は当たり所によっては一発で戦艦を沈めることもできるだろうが、射点に着く前に、各個撃破されるのが落ちだ。

魔探知の開発が進めば、こんな状態でも砂雷戦に持ち込めるんだろっかな」

ハルミは頷きはしたが、戦争や戦闘は個人の趣味で行うわけにはいかない。

無表情のまま参謀長にそう答えると、気を紛らわせるように話題を変えた。

「あのようなもの、精度が低く、まるで当てになりません。

光学側的に優る技術はないと、小官は確信します。

ましてや夜戦ともなれば、我が見張り員の暗視能力は世界随一です。

我々がオリザニアやサピエントに遅れを取るとは思えません」

参謀長はそう言っ胸を反らす。

幾度となく繰り返された会話だ。

航空機の有効性にいち早く気付いたハルミは、将来優秀な魔探知機を装備する方が砂海戦の主導権を握るようになると見込んでいた。

ソル砂海軍は、長い間列強との保有艦艇比率を低く抑えられていたため、その不利を技量で埋めるべく将兵に過酷な訓練を課してきた。

訓練の量に制限はないという理屈だ。そして、夜間見張り員に、日中は艦内の暗い部屋に待機し、常時目を暗闇に馴らしていることを求めた。

その結果、ソルの見張り員は月のない真闇の夜であっても、二万メートルの彼方にある敵艦を発見することができるようになってい

た。

「参謀長の考え方は相変わらずだな。

だが、技術は必ず発展する。

今は見張りの暗視能力が優っているが、いずれ魔探知機がそれを凌駕する日が来るかも知れんぞ」

苦笑いを声に含ませつつ、ハルミが返す。

「そのときには、さらに猛訓練を重ね、見張りの能力も伸びているはずです。

あのような不安定極まりない装置を開発するくらいなら、より強力な砲や砲弾、砂雷、爆弾を開発するべきと私は考えます。

いずれにせよ、魔探知機など、魔力の違法行使者を捕らえるための物ではありません。

それが砲戦や砂雷戦に役立つ日が来るなど、私にはどうしても思えないのです」

参謀長の意見は、この時代においてもっともなことでもあった。

本来、その位置を変えることなく魔力を探知するための機械が、常に動揺する艦上で正常に作動できるとは思えなかった。

静置した状態であっても、せいぜい帝都にある主要警察署の管轄一区画をカバーする程度の探知能力では、数万メートルの範囲で行われる砲戦や砂雷戦の役に立つとは思えない。その上、魔探知機の整備は、その複雑な機構もあって、専門の熟練技術者が必要だった。一年や二年の研修で、予備機材が潤沢に供給できない砂海上にある艦艇に搭載された魔探知機を、常時完璧な状態に維持できる技師を育てられるとも思えなかった。さらに、魔探知機の能力がどれほど発達しても、砂平線の範囲までしか行使された魔力は感知できない。火の魔法を上空にでも撃ち上げない限り、艦の航行のため行使される魔力は艦に閉じ込められている。理論上、魔探知機と見張り員の

索的範囲の限界は、同距離と考えられていた。

それであれば、更なる猛訓練で見張り能力の向上を図る方が、未開の技術である魔探知機の開発に時間を割くよりは大きな説得力を持っている。

「そうは言うがな、参謀長。」

哨戒任務にはかなり役立つと私は考える。

例えば、搭載能力の大きな一型陸攻あたりに魔探知機を積んで、基地周辺や艦隊前方の哨戒に使えば、正確性は欠けようともかなり有効とは思えないかね？」

ハルミは、自分の意見に従わない参謀長が嫌いではなかった。

喧嘩をしているのではなく、技術の可能性について意見を戦わせることを、この先見性に富む中将は好んでいた。

そのために自身の意見に異を唱える者を遠ざけるなど、論戦ができなくなるだけで、自身の楽しみを奪うだけと考えていた。

「そのような日が来るとき、私たちは生きているのでしょうか？」

私には、少年向けの空想小説にしか思えません。

貴重な機体をそのように物に使うより、一発でも一キロでも多くの爆弾や砂雷を積むべきだと考えます」

終わりの見えない論争が『チャンドラー』の艦橋で繰り広げられているとき、南遣艦隊とサピエント艦隊は約三万メートルの至近距離ですれ違っていた。

一方、砂海軍第二二航空戦隊は攻撃準備を整えていた。

砂嵐が吹き荒れるあいにく悪天候であったものの、司令官は一七時三〇分に陸上攻撃機部隊を発進させる決断を下した。

「長官の御意志は、航空機による戦艦の撃沈である。未だ、どこ国もなしえていない快挙を、諸子が実現することを、司令官は確信している」

魔鉱石障壁に囲まれたオアシスにある航空隊基地中庭で、整列した搭乗員たちに司令官は万感の思いを込めて激励の言葉を贈った。

正面には、世界初となる快挙を自分たちの手で掴み取ろうと決意した、引き締まった男たちの顔が並んでいる。

それに混じって数人の若い女性が、眦を決して直立不動の姿勢を保っていた。

エルミヤルツクウ、ファルの同期生で、陸上航空隊に配属された者たちだ。

彼女たちは、この作戦で功績を挙げ、母艦航空隊に配置転換されることを望んでいた。

空母への発着艦は、特殊技能といわれるほど難易度が高く、上位者を除いてほとんどの女性飛行士官たちは母艦航空隊に配属するには技量未熟と判定されていた。

彼女たちには、それが悔しい。

軍艦には女性士官を配属しないという方針でもあればまだ納得もできたのだろうが、配属を技量で決められたとあつては理屈では判つていても感情が納得しない。ある程度であれば建て増しや新築して基地機能を増強できる陸上基地と違い、建て増しすらできない艦艇に女性用の施設を作ること、それなりの困難と軋轢が生まれる。それを避けるため、当初は女性飛行士官の艦隊勤務が見送られる可能性もあったのだった。

だが、ひとりでも多くの優秀なパイロットが欲しい母艦航空隊からの切なる要望で、多くの不便と軋轢を抱えたまま女性飛行士官の艦隊勤務が強行されていた。

もちろん、陸上航空隊でも優秀なパイロットが欲しいことは同じ

だ。

女性飛行士官すべてを母艦航空隊に持っていかれては、弾き出された男性パイロットの士気はがた落ちになる上、基地航空隊はそういった者たちの吹き溜まりとなってしまう。十分な技量を持っていても、士気が低いとあつてはそれは戦力になり得ない。母艦勤務を嫌つて基地航空隊勤務を望んだ者たちまで、それに引きずられて士気を下げた。ましては陸上基地機能まで奪われてしまわれかねなかつた。

激しい駆け引きが展開され、母艦航空隊への配属は、技量判『甲』判定を受けた者に限ると決められたのだった。

それでももとの素質から、ほとんどの女性飛行士官の技量は『甲』をつけざるを得ない。

やむなく、女性飛行士官の技量判定は厳しくなり、男性パイロットであれば充分『甲』判定を受けられる者が『乙』判定に留められ、陸上勤務となつていた。その結果、基地航空隊には『甲』判定を受けた男性パイロットより、飛行技術に長けた『乙』判定の女性パイロットが配属されるという、歪な状態になつている。

基地に配属された女性飛行士官たちには、これが気に入らなかつた。

もちろん、飛行技術の優劣が、即空戦技術の優劣に繋がるわけではない。

長い経験に研ぎ澄まされた危険を察知する能力は、一朝一夕に身に付けられるものではなかつた。

それを理解できている女性飛行士官たちは、豊富な経験を積んだ男性パイロットたちに対して、飛行技能判定を盾に横柄な態度を取るようなことはしなかつた。

ソル国民にとって当たり前の礼儀である幼長の序を弁えるといっ

たことも、歳若い女性飛行士官たちの振る舞いを常識あるものに抑制している。経験と年齢に対して敬意を持って接してくる若い娘たちを、多くの男性パイロットたちは娘や姉、妹に対する態度で返していた。

だが、中には予科練出身の同世代や、メデイエータで熾烈な戦場を潜り抜けてきた者の中には、女性士官に対する嫌悪感を隠さない者たちもいる。

その者たちにとって決定的だったのは、基地航空隊に配属された女性飛行士官たちが基地航空隊を母艦航空隊の下に見ていることだった。女性飛行士官たちが口には出さないものの、功績を挙げて母艦航空隊に配置転換を望んでいることを見透かしていた。

嫉妬ややつかみがあることは否定しないが、誇りを持って基地航空隊に所属している自分を否定される気がしてしまったのだった。

「ここまで上がっていけば、砂嵐の影響はありませんね。

とは言っても、日没まで時間もないし。

この辺りにいること、充分予測できるんだけど……」

六型陸上攻撃機九機で構成された第二二航空戦隊第一航空隊第二中隊の第二小隊三番機を操縦するアズファが、操縦桿を握り締めたまま言った。

「アズファ少尉、あまり気負わないほうがいいですよ。

この辺りにいるのは判っていますし、この機の航続距離ならまだまだ探せます。

気持ちは解かりますが、ね」

副操縦士を務めるシューニー一等航空兵曹が嗜めるように答える。

「確かに、そうですね……」

砂嵐の影響がないとはいっても、下は何も見えませんし。

日が沈んで砂嵐が止んでも、サピエント艦隊を見つけるのは難しいんじゃないですか。

「こんなんじゃ……」

階級が下とはいえ、一回り以上歳の離れたベテランパイロットに対して、アズファは丁寧な口調で言うが焦りは隠せない。

眼下では相変わらず砂嵐は吹き荒れ、たとえそこにサピエント艦隊がいたとしても攻撃は無理だ。

解つてはいるが、アズファは戦功が欲しかった。

同期で多少莫迦にしていたエルミが『デットン』航空隊に配属されたことで、自身のプライドを粉々打ち砕かれていた。確かに飛行術では一歩先を行くエルミだったが、筆記試験ではアズファの方が上位だった。当然、母艦航空隊に配属されると思っていたが、下された技能判定は『乙』。

多少の裏事情は理解していたアズファは、ならば戦功で認めさせてやろうと焦っていたのだった。

「司令、やはり砂嵐が酷すぎます。

ここは、残念ではありますが、一旦兵を退きましよう」

第二二航空戦隊参謀長が、司令に進言した。

魔鉱石障壁の外側では砂嵐が治まる気配を見せていない。

その報告を受けた参謀は、夜間攻撃の効果の少なさを懸念し、攻撃隊の撤退を進言したのだった。

「いや、日が沈めば砂嵐も治まる。

それに、六型陸攻は三座の七型艦攻と違って偵察員の数も多い。

夜間攻撃となっても効果は挙げられよう。

敵も夜間攻撃を受けるとは予想もしまい」

司令は窓の外を見つめたまま、参謀の進言を却下した。

「だが、二二〇〇（ふたふたまるまる）までに発見できなければ、今夜は諦めよう」

航続距離がいくら長かろうと、五時間以上の緊張に耐えることは困難だ。

今夜一晩で全てが決するといっているのであれば、搭乗員たちにくらでも無理をさせなければならぬが、戦争はまだ始まったばかりだ。司令は断を下した。

「アズファ少尉、右前方、艦影！」

コクピットに、偵察員の叫びが響いた。

日没後、砂嵐はようやく治まってきたが、砂海上は巻き上げられた細かい砂の粒子が漂い、視界は決してよくはなかった。

だが、月明かりの中、おぼろげに見えた艦影を、偵察員は見逃さなかった。

「進路は!？」

アズファは大声で問い返す。

頭の中では、サピエント艦隊と南遣艦隊の位置関係を描いている。

「北へ向かっています！」

偵察員の声に焦燥が含まれた。

輸送船団は現在北にいる。

南遣艦隊は北上してくるサピエント艦隊撃滅のため、南下しているはずだ。

「基地、中隊長機に魔通！」

『我、航行中ノ艦ヲ発見セリ』



平文で構わないわ！」

アズファは魔通員に叫び、両翼をバンクさせて降下を始める。

北上を続ける艦影はこちらに気付いた様子もなく、攻撃を避けるため変針することもない。

アズファは撃沈を確信した。

日が沈み、吹き荒れていた砂嵐はやっと治まる気配を見せている。それでも砂海上には細かい砂が吹き上げられ、視界はそれほど回復していない。全てがかすんで見えるような中、一旦北方に退避させた輸送船団と合流するため、南遣艦隊は北上を続けていた。それでも全身砂まみれになることを厭わず、見張り員たちは敵艦を見逃すまいと持ち場に付いていた。

砂平線に視線を向け、すべての神経を集中している見張り員の耳に、航空機のエンジン音が飛び込んできた。

「味方の護衛か？」

『チャンドラー』の防空指揮所で双眼鏡から目を離すことなく、隣にいる戦友に声をかけた見張り員の予想を、上空からのエンジン音は完全に裏切った。

「ありがたいじゃないか。」

手を振っても見えないだろうけど、せめて」

上空を仰ぎ見て、六型陸攻の編隊を確認した見張り員は、感謝の意を込めて帽子を手に持ち力一杯振り回した。

突如、吊光弾が炸裂し、辺りをおぼろな光が照らす。

一機が編隊から離れ、『チャンドラー』を跨ぐように飛び越える。編隊に『チャンドラー』の姿が浮き上がるように落とされた吊光弾には、明確な攻撃意図が見えていた。

「莫迦野郎！」

偵察員は素人か！」

「上空の六型陸攻に発光信号！」

我『チャンドラー』！」

あの莫迦が気付くまで繰り返せ！」

艦橋に詰めていた司令部の参謀から罵声上がり、『チャンドラー』艦長からの命令が飛ぶ。

だが、薄く舞い上がる砂の微粒子が光を遮ったのか、編隊が攻撃態勢を解除することはなかった。

「探照灯用意！」

敵に先に見つけられるかも知れんが仕方ない！」

「第一航空隊の司令部を呼び出せ！」

まずいぞ、奴ら、やる気だ！」こちらの進路を塞ぐように低空に舞い降り始めた編隊を見て、ハルミと艦長の叫びが重なった。

探照灯を点ければその光芒を敵に発見される可能性が高い。

お互いを捜し求めているサピエント艦隊だけでなく、どこ潜んでいるか解らない敵潜砂艦に格好の雷撃目標を与えることにもなってしまう。

だが、『チャンドラー』艦長は、迷うことなく探照灯によるトンツー通信に切り替えることにした。

発光信号用の小型探照灯ではなく、一一〇センチ探照灯が舞い降りてきた六型陸攻の編隊に向けられる。

我『チャンドラー』繰り返す 我『チャンドラー』なり』

太く触れることすらできそうな光が闇を切り裂くが、編隊が攻撃態勢を崩す気配はない。

「あいつら、私たちを見くびってるの？」

避けようとししないで……

それとも何か重篤な故障でもしてるのかな？

吊光弾落とされて気付いてないわけない！」

雷撃コースに機体に乗せながら、アズファが怒りを含んだ声で叫ぶ。

「少尉、そんなことはどうでもいいです！

避けようとしなければ好都合！

それより発光信号を繰り返してます！

戦艦が来る前に沈めちまいますよ！」

シューン一等航空兵曹が呼応する。

メデイエータ戦線を潜り抜けてきたベテランパイロットも、世界初という快拳を前に冷静な判断力を失っていた。

このとき、第二中隊の全機が、『チャンドラー』を『ビュエルヴァ』と誤認していた。

太陽光ほどでなくとも、月明かりに照らされているならば砲の配置から見分けが付くが、今は月がでているとはいえ、全体を覆ませるような薄い砂塵が舞い上がっている。乱反射する光源が、艦影の識別をことさら困難なものにしてしまっていた。

『チャンドラー』内部は、艦橋だけに留まらずパニックに陥りかけている。

戦場に身を投じた以上、死を恐れるものではない。

だが、敵艦との決戦で死ぬことは許容できるが、味方の攻撃で死ぬなどどう考えても受け入れられるはずもない。だからといって、友軍と判っていて、撃墜することもできない相談だ。なんとか六型陸攻に友軍であることを知らせなければ、開戦初頭に味方撃ちで沈められるた不名誉な艦という汚名を被ることになる。

南遣艦隊司令部や『チャンドラー』首脳陣が迎撃すべきかどうか

判断に迷っている間に、編隊はついに攻撃コースへと入ってしまった。

「艦長、変針！

進路、度！

それから第二二航空戦隊司令部に緊急信だ！」

『チャンドラー』の夜戦艦橋に、ハルミの切迫した叫びが響いた。

二二時三〇分、第二二航空戦隊司令部は、いきなり飛び込んできた魔通に仰天した。

南遣艦隊司令部、つまり彼らの所属する司令長官名で発信された魔通は、二通。

『中攻三機上空二有り』

『吊光弾下ニアルハ『チャンドラー』ナリ』

どう考えても、味方撃ちだ。

それも自身が所属する方面艦隊の司令部に対する。

万が一のことがあれば、軍法会議で死刑どころの騒ぎではない。

魔通を傍受した第一航空部隊司令部は、文字通り飛び上がった。大慌てで『第二中隊八味方上空二有り、索敵ヲ中止シ引キ返セ』と魔通を発信した。

暗号魔通など組んでいる暇はない。平文の慌てふためいた魔通が、夜の闇に飛んでいった。

「行くわよ！」

射点を確保したアズファ機は、機体を直進に固定する。もし対空砲火が殺到し、砲弾が命中しても、墜落しないことにアズファは決めた。

眦を決し、息を止め、砂雷投下のタイミングを計る。

「用意……」

それに続く『撃て』の形に口が開いた瞬間、普段は雑音ばかりで役に立った試しのない魔通受信機が鳴り響く。

『攻撃待てっ！』

目標は友軍艦！

繰り返す攻撃中止！』

「っ！？」

声にならない叫びを発し、アズファは操縦桿を力一杯引き寄せた。強烈なGが身体を締め付け、腕は鉛のように重くなる。

正面に見えていた艦影が一瞬で眼下に流れ、視界に月が飛び込んできた。

「何？」

何が……あつた……の？」

「あれは『チャンドラー』です！」

呆然とするアズファの眩きに、偵察員から報告が重なった。

肝を冷やした『チャンドラー』乗組員たちの頭上を、六型陸攻の編隊が通過して行く。

リムの耳には、『チャンドラー』乗組員の罵声が聞こえた気がした。

「莫迦野郎！」

「次は撃ち落とすぞ！」

「後で覚えとけ！」

「戻ってこい、この莫迦野郎！  
撃ち落としてやる！」

リムの気のせいではなかった。

『チャンドラー』艦上に、ありとあらゆる罵声が飛び交う。

そればかりではなく、手近にあった工具や補修材を空に投げつける者もいる。

陸攻隊の間抜けさ加減には呆れかえるばかりだが、問題はそれだけではない。

吊光弾の光や、緊急とはいえ発してしまった探照灯の光と魔通は、敵潜砂艦を呼び寄せかねない。

ハルミは索敵を諦め、船団護衛を優先するため、このまま北上する決断を下さなければならなかった。

「今の光は!？」

『ラバナスタ』の夜戦艦橋に緊張が走った。

「発見されたのでしょうか」

司令部参謀の不安げな問いは、そこにいる全員の思いを代弁している。

「案ずるな。」

我々が発見されたわけではない。

大方、自軍の艦艇か輸送船団を、我々と誤認したんだろう

あの光は、おそらく吊光弾だ。

つまり「

「敵艦隊、もしくは輸送船団は近くにいます。」

そういうことですか？」

落ち着き払ったマスフィの言葉に、リツチ艦長が言葉を被せた。

「敵魔通を傍受しました！」

『我、航行中ノ艦ヲ発見セリ』！

平文です！」

通信士が艦橋に飛び込んでくる。

通常であれば艦長なりの発言許可を取ってから報告を上げるが、今は戦闘行動中だ。

必要な情報は、一刻も早く上げなければ、という通信士の焦りが見て取れた。

「あの方向に我が軍の艦艇は存在しない。

間違いなく、あの光はソルの艦艇を我々と誤認したものと断じてよいだろう」

薄笑いを浮かべ、マスフィは言った。

その薄笑いには、発見されたのが自分たちではないと言う安堵と、味方艦艇を識別できなかったソル砂海軍の未熟さに対する嘲りが含まれている。

「そのまま同士討ちでもしてくれれば、我々の仕事も楽になりますな」

「いくらなんでも、そこまで間抜けではありませんまい」

参謀たちが会話を始めたところに、別の通信士が飛び込んでくる。

「敵魔通を傍受しました！」

『中攻三機上空二有リ』

『吊光弾下ニアルハ『チャンドラー』ナリ』

続いて『第二中隊八味方上空二有リ、索敵ヲ中止シ引き返セ』すべて平文です！」

サピエント艦隊司令部に、嘲りの空気が流れる。

「そうか、ハルミ提督の旗艦か。」

惜しいところだったな。

『チャンドラー』の位置は判るか?」

マスファイは、ここでソル砂海軍切つての智将と言われるハルミを、討ち取ることが可能かどうかを検討することにした。

「正確な位置は少々お待ちください。」

ですが、追撃するには少しばかり離れすぎていると思われる。「航海参謀が答えた。」

「下手をするとこちらが見つかる可能性もあります。」

『チャンドラー』につつかけた一群以外にも、このあたりを搜索している中攻隊がいると見て間違いありません。

既に夕刻より、幾度か敵砂偵の触接はありました。

先程の吊光弾は、敵中攻に夜間攻撃能力有りを示すものだと考えます。

ここは一旦マーレイヤ軍港へ引き返し、態勢を整えるべきでしょう。」

リッチ艦長が意見を述べる。

「そうだな。」

敵機は夜間攻撃も可能と見ていいだろう。

間違いなく、輸送船団は北にいたのだろうが、闇の中を当てずっぽうに探し回っても魔鉱石の無駄だ。

一旦、マーレイヤへ戻ろう。」

マスファイは断を下し、艦隊に変針を命じた。

航空機による攻撃で『ラバナスタ』や『ビュエルヴァ』が沈められるとは、マスファイは考えていない。

ただでさえ高速で砂海上を疾走する戦艦に爆撃や雷撃を成功させ



る確率は、限りなく低いとこの時点では考えられている。だが、まぐれ当たりということもあるし、軽巡や駆逐艦に取って航空機が脅威であることには変わりはない。いざ敵輸送船団を襲撃のときになつて、『ラバナスタ』や『ビュエルヴァ』が傷ついたり、艦艇の損耗があつては十全な戦果は挙げられない。

マスフィは、僅かの間にもそれを考え断を下していた。

サピエント艦隊が南に転進し、一五分が経過した二二時ちょうど、マーレイヤ軍港基地から、シラム王国国境とマーレイヤ軍港との中間地点にある商業港に、ソル騎兵軍が大挙して上陸を開始したとの緊急信が『ラバナスタ』に飛び込んだ。

「駆逐艦一隻を偵察に向かわせよう。

我々は、その情報次第でマーレイヤに戻るか、上陸兵力を叩くか決定する」

マスフィの命令が、発光信号をリレーして一隻の駆逐艦に伝えられる。

やがて、マストにはためく信号旗を翻し、一隻の駆逐艦が目的地へと進路を変えていった。

基地へと戻る飛行中、アズファは落ち込んでいた。

味方の艦艇をを攻撃という最悪の事態こそ免れたものの、味方を敵と誤認するなど軍人としてあるまじき行いだ。

この失敗で母艦航空隊への道は、閉ざされたと見て間違いない。それ以前に、今後飛行士官としてやっていけるか、それすら危うい状況だ。自分が上官なら、間違いなく飛行機から引き摺り下ろす。敵味方の区別もつかないパイロットなど、危なっかしくて攻撃機に載せてなど置けるはずがない。

今回の失態は、それほど重大なものだった。

やがて、基地の滑走路が見えてくる。

通常、滑走路に待機する誘導員や整備員以外の人影が、滑走路を照らす照明に長い影を落としていた。

おそらく、司令か参謀が叱責のために待ち構えているに違いない。軍法会議という言葉が脳裏をよぎり、アズファは操縦桿を思い切り押し倒したい衝動に駆られてしまった。だが、いくらなんでも自身の失態のために、副操縦士や偵察員、魔信員や整備搭乗員の合わせて七人を道連れにするわけにはいかない。

暗澹たる面持ちで、アズファは乗機を着陸コースに乗せていった。

## 第27話 襲撃

一二月一〇日未明、ソル砂海軍潜砂艦イ五八は、シラム王国国境とマーレイヤ軍港の中間地点に進出していた。

言うまでもなく、輸送船団を狙うサピエント艦隊の動向を探り、機会があればこれを攻撃するためだ。砂嵐が去った砂海面に浮上し、艦橋に見張り員を配置して周囲を警戒している。当然艦長も艦橋に上り、双眼鏡をのぞき込んでいる。

細かい砂塵は辺りに漂っているが、狭苦しい艦内よりは遙かにマシだ。

敵に発見されないようにタバコを吸えないことが、この場において唯一の不満だった。

「艦長、せっかく浮上したのに禁煙とは、やり切れませんね」  
周囲に対する警戒を解くことなく、ベテランの下士官がぼやく。

「仕方ねえよ。」

一服点けた途端に弾が飛んでくるんじや割に合わねえだろ」

同世代といってもいいが、軍歴では後輩ともいえる艦長は気安く答える。

規律が厳格な戦艦に比べ、少人数で艦を運用しなければならぬ潜砂艦や駆逐艦は、艦長と下士官の距離が近い。階級も戦艦や制式空母の艦長が大佐であるのに対し、潜砂艦や駆逐艦では大尉が普通だった。年齢も近いこともあり、艦内は比較的生温かい雰囲気にも包まれている。弾一発で轟沈しかねない小型艦艇は、乗組員全員が一蓮托生という意識が強く、細かいことをとやかく言うことは少ない。

締めるところさえ締めていれば、それで充分という考え方の指揮官が多かった。

「そりゃあそうですねえ。」

「やっぱり浮上したときくらい、気兼ねなく一服点けたいってもん  
ですぜ」

もう一人の下士官も軽口を叩く。

だが、その眼光は鋭く右舷を窺っている。

「じゃあ、貴様は転属願いでも出してみるか？」

「なんなら『アーストロン』に、推薦状でも書いてやるるか」

艦長も負けじと答えるが、その目は艦の前方をしっかりと見据えていた。

「冗談じゃありません。」

誰があんな蛇の『アーストロン』なんぞに「

下士官は大仰に身を震わせて答える。

とかく規律に厳しい戦艦では、新兵に対するしごきが酷く、鬼の『キュラソ』地獄の『アロン』音に聞こえた蛇の『アーストロン』  
と言われている。

もちろんベテランの下士官に対して、今さらしごきも何もあつた  
ものではないが、それでも新入りに対する陰惨な虐めは当然ある。

肉体的な暴力はなくとも、サボタージュや村八分、パワーハラス  
メントといった精神的な嫌がらせは、相手をノイローゼに追い込む  
まで手を緩めない。それが判っていて、居心地のよい潜砂艦から出  
たいという者は、下士官に限っては皆無に等しかった。

もちろん、いきなり潜砂艦に配属になって、どうしても馴染めな  
い新兵や、人間関係が上手くいかない場合は別だったが。

「貴様ならどの艦でも」

「右二〇度六〇〇メートル、駆逐艦！」

艦長が混ぜっ返そうとした言葉を食いちぎり、下士官の叫びが上がった。

「急速潜航！」

深度一五！

急げ！」

問い返すことも、確認のため右舷に双眼鏡を向けることもせず、艦長は伝声管に怒鳴り込む。

艦橋にいる見張り員全員がハッチに飛び込んだ後、右舷を一瞥してから自らもラッタルを駆け降りる。艦の潜航に伴い、頭上から降り注ぐ砂を浴びながら、艦長はハッチを渾身の力で閉め切る。

そのときには既に艦は前のめりに潜航を始め、艦長が司令塔に降り立ったときには砂深一五メートルに懸吊し、水平を保っていた。

「潜望鏡深度！」

相変わらず速いな、おい。

ハッチを閉め切るまで待ってくれよ」

艦長が潜行の指揮を執った航海長に文句を言う。

「艦長こそ、もっと早く閉めてください。

待ってる間に弾が飛んで来ちまいます。

砂の掃除する者の身にもなってください。

一番訓練が必要なのは、艦長なんじゃないですか」

航海長が言い返すが、そのときには艦長は潜望鏡に取り付いていた。

「どつやらこちらには気付いてないようだ

……でかいのがあるな。

ふたつ、か

やり過ぎしてから魔通。

敵主力反転、針路一八〇度！」  
潜望鏡から目を離さず、艦長は下命した。

「通報だけですか？」

不満げな声が砂雷長から上がる。

「まずは触接を保つことだ。  
慌てるな。」

機会があれば、ぶっ放させてやる。

航海長、しばらくしたら浮上して追跡。

その後は「

「先回りして待ち伏せですね」

三人は満面の笑みで頷き合った。

イ五八がサピエント艦隊に触接を続けている頃、ゴール植民地に進駐している第二二航空戦隊第一航空部隊基地では、女性飛行士官のアズファ少尉が眠れぬ夜を過ごしている。

僅か数時間前の悪夢はアズファの心を掴み締め、睡眠すら仕事の内といわれるパイロットから貴重な時間を奪い去っていた。

滑走路に降り立ったアズファを待っていたものは、司令の厳しい叱責に、あからさまな怒りとあざけりを乗せた下士官パイロットたちの視線だった。もちろん、弁明の余地もないことは、アズファを始めた第二中隊第二小隊三機の搭乗員全員が理解している。それに反抗する気も、当然ない。

特に敵艦隊発見の第一報を送ったアズファ機の偵察員は、首を括るのではないかと思わせるほどの憔悴を見せていた。

司令の叱責は厳しかったが、それでも鉄拳が飛んでくることも、必要以上に睡眠を削るような罰直を与えることもなかった。

膨大な時間と経費をかけて育てたパイロットや偵察員を、一度や二度の失敗で陸上勤務に放逐できるほど、ソル砂海軍に余裕はないはらわたが煮えくり返るような失態だが、明日以降の働き如何でいくらかでも汚名返上の機会はある。

明日に備えて寝ろ、と吐き捨てるようにはあったが、司令は焦燥を滲ませてアズファたちを解放していた。

南遣艦隊司令長官から直接叱責を受けるのは当の司令であり、今さら殴られたりはしないだろうが、この後の出世はないものと考えるのが自然だ。

敵味方を間違えただけではなく、直属の長官に対して雷撃をかますなど、決して許される失態ではない。

アズファはそれが申し訳ない。

同様に、こうして自分はベッドに身を横たえていることができるが、明日の出撃に備えて、夜を徹して機体の整備に当たっている整備班にも申し訳が立たない。

小莫迦にしていたはずのエルミだけでなく、自分の一步も二歩も先を行くルックウやファルを始めとした同期たちにも申し訳が立たない。

腹を切るなり、首を括るなりといったこの時代にありがちな責任の取り方もあったが、それを今することは逃げとしか思えなかった。汚名返上してからでなくては。自分ではなく、女性飛行士官の汚名を雪がなくては、死んでも死にきれない。

アズファの精神は、平衡を失いつつあった。

一月一日に日付が変わり、時計の針が一時三五分を指した頃、眠れぬ夜に苦しむアズファとはまったく別の眠れぬ夜を、心の底から楽しむ一団が砂海の砂面下で息を潜めている。

「艦長、『敵主力反転、針路一八〇度。〇一二二（まるひとふたふた：午前一時二二分）』、送信しました」  
通信長が報告を上げてきた。

「よし、魔通発信の間も気付かれていない。  
あちらさん、当然傍受はしているんだろうが、まるで針路を変える気配がないぜ。」

「じゃあ、一丁やっつたらうじゃねえか」

艦長の言葉に司令塔は歓喜に包まれた。

もちろん、静粛性を最重要視する潜砂艦内で、大歓声を上げるほど彼らは素人ではない。

「当艦は今より一〇分後、敵主力艦に雷撃を敢行する。  
落ち着いてそれぞれの責務を果たせば、必ず全弾必中と艦長は確信する。」

「かかれ！」

ぼそぼそ声の命令と乗組員の士気を鼓舞する訓示が、伝声管から全艦に知らされた。

「ここでも歓声を上げるような不屈者はひとりもおらず、全員が黙って、速やかに所定の部署に就き、艦長からの雷撃命令を待つ。  
僅かに艦内がざわめき、やがてそれが一斉に静まる。」

各所から雷撃戦準備良しの報告が上がった後、一切の人為的な物音が途絶え、ストップウォッチを睨んでいた先任将校が笑顔を艦長に向けた。



「先任のしごきが実を結んだな」  
潜望鏡から目を離さず、艦長は笑いを含んだ声で背後の先任将校に声をかけた。

「ご冗談を。」

しごいていたのは艦長だけです。

私はその後始末にどれほど苦労させられたことか。

包丁を持った兵がうろろうろしてるときなんぞ、ドアを開けちまおうかと思いましたよ」

戦闘直前の緊迫感など微塵も感じさせず、先任将校は答える。

「本当です。」

一度ならず、私は先任を羽交い絞めにしたとこともありますよ」  
水雷長が尻馬に乗り、艦長をからかった。

「用意……」

艦長の号令がかかった瞬間、司令塔の空気が一変した。

先任はストップウォッチを握り直し、水雷長は伝声管に手を掛ける。

「つて！」

短く簡潔な命令が下され、圧搾空気が放出される音を残し、砂雷が砂中へ撃ち出される。

燃料の酸化剤に圧搾空気ではなく純酸素を用い、直径五五・三センチ、全長七一五センチ、重量一・六六トンの本体を、砂中疾走速度四五ノットなら一万二〇〇メートル、四九ノットでも九〇〇〇メートルを走らせるソル砂海軍の秘密兵器五型一式酸素砂雷は、弾頭炸薬重量四〇〇キロを誇る。

余分な窒素を排出しない分、砂面上に航跡を残さず、極めて発見

が難しい。酸化剤の容量自体が少なくて済む分、長射程、高速である上、炸薬量を増やすことが可能だった。

当然この利点に目を付けたソルを始めとした列強砂海軍は酸素砂雷の開発に努めたが、爆発事故が頻発し、実用化にこぎ着けたのはソルのみだった。

このとき扇状に放たれた砂中の長槍は、前部発射管から計五本。信管調整の不手際から一本は発射を見送られ、艦長の命令から僅かにタイミングをずらしてしまっていた。

「用意……」

「じかーん！」

設定された速力から、敵艦への到達時刻を割り出し、ストップウオッチでそれを計測していた先任将校がそのときを告げる。

爆発音で鼓膜を破られないように、聴測員は聴音機のヘッドフォンを耳から外す。

司令塔だけではなく、機関室に至るまで誰もが砂を通して伝わってくる爆発の音と振動を待っている。

だが、イ五八の誰もが待ち望む音も、振動も伝わってくることはなかった。

「残念だが外れた。」

遠すぎたのかもしれない。もうしばらくしたら、浮上して送り狼だ。

「どうやらあちらの車曳きは居眠りしてるみたいだぜ」

誰よりも空振りを残念に思っている艦長だが、指揮官があからさまに落ち込んでいる暇などない。

敵がこちらの存在に気付いていないなら、ひたすら食いついて行き先を突き止め、それを南遣艦隊司令部に知らせるまでだ。砂雷を

撃ち尽くしてしまった状態で、イ五八にできることはそれしかない。敵艦、特に駆逐艦の動きに注意していた艦長は、やがて浮上航行の命令を下した。

イ五八は、その後サピエント艦隊を追いながら、逐次一と進路を南遣艦隊司令部と第二艦隊司令部に送信する。

魔通は受信機さえあれば、どこでも傍受することが可能だ。第二航空戦隊や、いづどこから敵が現れるか、常に怯えている輸送船団にも情報提供が可能だった。もちろんどの艦艇にも敵信傍受班があり、あらゆる魔通を逃すまいと耳を澄ませている。

イ五八の発した魔通は、サピエント艦隊でも把握しているはずだ。

魔通を受信すれば、その魔力の強度や感度から、おおよその発信位置を特定できる。

つまり、夜間に目視できる距離で魔通が発信されたなら、その位置の特定は容易いということだ。駆逐艦が全力航行すれば、砂中の最大速度がたかだか六ノットでしかない潜砂艦など、二〇分程度で捕捉されてしまう。

イ五八の行動は、それほどまでに危険を伴うものだった。

「敵の魔通は何度傍受したかね？」

既に黎明を過ぎた早朝、僅かな仮眠から戻ってきたサピエント大東砂海艦隊司令長官マスファイ大將は、長官席に腰を下ろすなり参謀たちに訪ねる。

「はい、これまでに至近距離から発せられた魔通は二回です。

一回目が午前一時三〇分頃。

「二回目が今から三十分ほど前の、三時五〇分です」  
解読された暗号文の綴りをめくり、通信参謀が答える。

「我々がマーレイヤ軍港に戻ろうとしていることは、もう知られて  
いるとみてよいな。」

このまま進めば待ち伏せを受けかねん。

一旦韜晦し、場合によっては『ラバナスタ』と『ビュエルヴァ』  
はマーレイヤには入らず、駆逐艦だけを先行させ、敵潜砂艦を狩る。  
艦長、艦隊針路二四〇度。

もちろん、急接近する気配があれば撃沈したまえ」  
マスフィの落ち着いた声が艦橋に流れた。

「さすがに気付いたか。」

送り狼もここら辺りが限界か」

イ五八の司令塔で、潜望鏡を覗きながら艦長が呟く。

夜が明ける前に砂上航行で距離をできる限り詰め、日が昇ってか  
らは引き離されることを覚悟の上で潜航している。

サピエント艦隊は、進路を変えた。

「魔通深度まで浮上。」

いや、砂上航行だ。

あちらさんが反転したら逃げるが、できる限り食いついていこう」  
艦長の命令でイ五八は浮上し、つかず離れずの位置を保ってサピ  
エント艦隊を追い続けた。

『我』『ビュエルヴァ』 二対シ砂雷ヲ発射セシモ命中セズ。 敵針路一  
八〇度。 敵速二二ノット。 ○三四一』

『敵八黒煙ヲ吐キツツ二四〇度方向ニ逃走ス。我之ニ触接中。〇四二五』

『我触接ヲ失ス。〇六一五』

六時一五分にイ五八から送信された魔通を最後に、サピエント艦隊の動向は全くつかめなくなつた。

この三通の魔通からは、サピエント艦隊がマーレイヤ軍港を目標にしていることが窺える。

「どう見る、参謀長」

通信文の綴りを前にして、ハルミは腕を組んでいる。

「遠すぎます。」

最大戦速で追つても、追いつく前にマーレイヤに逃げ込まれますし、敵の哨戒域に入ります。

そうなれば、第二艦隊の『キュラソ』と『ギラドラス』はともかく、重巡以下の艦艇にとって航空機は脅威です。

航空攻撃がなくとも、潜砂艦の待ち伏せもありますし」

参謀長が悔しさを滲ませつつ、それでも冷静に、用意していた答えを返す。

「長官の持論が証明できるのではないですか？

ここは二二航戦に任せてはいかがでしょう。」

護衛の戦闘機に不安はありますが、マーレイヤに配備されているサピエントの戦闘機は一世代前の旧式機と聞いております。

圧倒的多数に押し包まれてしまえばそれまでですが、倍くらいの戦力差であれば零戦の戦闘力を以つてすれば容易に撃退できるものと考えます。

爆撃機や攻撃機の護衛は、何も敵戦闘機を撃墜する必要はありません。

爆撃機や攻撃機に対する攻撃を妨害できればそれで充分です」

航空参謀が発言した。

「確かに、私は航空機による攻撃で戦艦を撃沈できると結論付けているがな。

だが、これではまるでそのためにサピエント艦隊を見逃したかのように見えてしまうな」

ハルミの声には笑いが含まれている。

「まさか、そのようなことを長官がされるとは思いたくありませんし、思いません。

残念ですが、敵戦艦への雷撃は次の機会に譲りましょう。

どう考えても、ここからでは追いつきません。

時間や物理法則は、精神力でどこまでできるものではありませんし」

水雷参謀が悔しさを露にした表情で言う。

「よし、じゃあ、決定だ。

一二航戦の司令であれば、余計なことはいわなくても大丈夫だろう。

また敵と間違えられてはかなわんが、戦争に絶対はない。

討ち漏らしたことも想定し、我々もサピエント艦隊を追う。

艦長、艦隊針路このまま」

南遣艦隊司令長官ハルミ中将は、砂上打撃部隊と潜砂部隊による追跡を諦め、九日に続いて陸攻部隊にサピエント艦隊への攻撃を託すことを決意した。

ほぼ同時刻、やや北方の砂海域に展開している第二艦隊司令長官ノープ中将も同様の結論に達し、艦隊針路を百八〇度に取り替えた。

一二月一〇日六時二五分。

第二二航空戦隊第一航空部隊基地から、索敵機九機が放たれた。イ五八のが触接を失った位置情報から、四時間程度でサピエント艦隊は発見できると予想されていた。

索敵機の発進後、攻撃隊も各基地から出撃する。

敵の正確な位置は未だ不明だが、既にマーレイヤ軍港に近いと考えられていた。索敵機からの報告を待つて出撃したのでは、間に合わない司令部では判断している。このため、攻撃隊もおおよその位置に向けて飛行し、索敵機からの報告を受け次第、各航空部隊は現場に急行すると決められていた。

まず七時五五分に第二航空部隊基地から雷装一七機、爆装九機の六型陸攻が飛び立った。

続いて八時一四分、第三航空部隊基地からは全機雷装の一型陸攻二六機が出撃する。

直後の八時二〇分に第一航空部隊基地からは雷装八機、爆装二五機の六型陸攻が出撃した。

サピエント艦隊を追うすべての機体が離陸したのは、九時三〇分のことだった。

「今日こそ……」

第一航空部隊第二小隊三番機の操縦桿を握るアズファの口から、小さな啖きが零れた。

「気負わないことです、少尉。

肩の力を抜いて。

いざつて時に操縦を誤りますよ。

戦死を恐れるもんじゃありませんが、事故死つてのはぞっとしませんや」

シューーンー飛曹が気配を悟り声をかける。

「え？」

「あ、はい」

エンジンの爆音に掻き消され、呟きなど聞こえるはずはないと思っていたアズファは、シユーンの言葉に心臓が止まりそうだった。

「聞こえなくたって解りますって。」

少尉、適度な緊張感は大事ですが、ガチガチになっちゃダメですぜ。

「こつ、柔らかく、男」

「解りますけど、解りません！」

間違いない続くだろう下ネタを予期し、アズファは怒鳴り返す。背後の偵察員たちから笑いの気配が伝わるが、声は相変わらずエンジンの爆音に掻き消されている。

魔力の行使に伴い奪われる水分量が急増したような気がして、アズファは喉を鳴らして水を飲んだ。

「少尉、水は大事にしてくださいよ。」

どうせ投雷の辺りで大量に使うんだから。

「帰れなくなっちゃ困りますからね」

偵察員から伝声管を通して、笑いを噛み殺したような冷やかしの声が届く。

誰もが昨夜の失態を取り返そうと、気負いこんでいた。

ベテランパイロットのシユーンですら、飛び立つ前は目つきが悪くなっていたことを自覚している。搭乗員の闘志が空回りしていることを察知したシユーンは、敵戦艦発見までになんとかそれを解消したかった。開戦初頭の重要な作戦とはいえ、敵戦艦一隻と引き換えに自爆で死ぬなど、シユーンは真つ平ごめんだった。

死んでしまえば、それまでだ。



血の滲むような思いで身につけた技術も、経験も、夢も希望も全てが消え失せる。そのあとは戦功を上げるどころか、国許に残してきた妻子を守ることすらできない。解つてはいるが、昨夜の失態を取り返すためには大きな戦果を挙げてやると、心が望んでしまっている。旺盛な闘志と激情に駆られた蛮勇は別物だ。それが今は一緒くたになり、危険な状態に陥っているとシューンは自覚している。どうやって搭乗員全員に平常心を取り戻させるか、シューンは頭を悩ませていたが、結果的にアズファの呟きは、それを見事に解消することになっていた。

一路マーレイヤ軍港を目指していたサピエント艦隊だが、ソル軍が上陸をしたといわれた商港に針路を変更していた。

七時一八分、商港の偵察を密にするため、『ラバナスタ』から偵察機を一機発艦させ、昨夜分派した駆逐艦一隻を追わせた。だが、どこを探してもソル軍の部隊どころか、ひとりのソル人すら発見できなかつた。

偵察機と駆逐艦からの魔通を受け、サピエント艦隊本隊は再び南へと針路を取った。

一方、ソル軍もサピエント艦隊を未だ発見できていない。

とりあえず、サピエント艦隊は南を指していた。だが、それが韜晦航路で所在を眩ませ、輸送船団に襲い掛かる危険性はまだ残っている。万が一、哨戒網をすり抜けられ輸送船団に襲いかかるようなことがあれば、ソルの南方資源地帯制圧の目論見は脆くも瓦解してしまう。

何よりも、この砂海域にサピエント艦隊がいるというだけで、今後の作戦方針が大きく変わる。常に敵の脅威を感じながら南進するのと、ある程度の安全が確保されているのでは大違いだ。ソル本土からベロクロン大岩盤に物資を送り込むにも、南方資源地帯からソ

ル本土へ輸送するにも、砂海を輸送船団で運ばなければならない。  
サピエント艦隊を無力化は、南遣艦隊、第二艦隊に課せられた使  
命だった。

索敵の空振りを誰もが覚悟し始めた一〇時五二分、基地に引き返  
す途中の四番索敵機がマーレイヤ軍港へ帰還中の駆逐艦を発見した。  
近距離にいた五〇〇キロ爆弾を装備する爆装陸攻隊が急行するが、  
この駆逐艦を戦艦と見誤って攻撃してしまった上、命中弾は得られ  
ず、貴重な時間と少数とはいえ爆弾を無駄にってしまった。

敵主力撃沈を一瞬でも期待した司令部の落胆は大きく、駆逐艦す  
ら撃沈できなかった事実には、航空優位を証明できなくなるのではと  
いう恐怖感が司令部を被い始めていた。

「どう、見えない?」

第二航空部隊に所属する六型陸攻のコクピットで、機長を務める  
ケッティ少尉が偵察員に声をかける。

今のところ副操縦士のジャクロー飛曹に操縦桿を預けているため、  
ケッティ自身も海面を凝視しながらの言葉だった。午前六時二五分  
に基地を出撃して以来、単調な飛行が続いている。

「ダメですね、少尉。」

「この線は外れです」

偵察員からは口々に同じような答えが返ってくる。

「あまり南に行くと、敵の哨戒圏に入ります。」

いくら旧式とはいえ戦闘機が出てきちゃったら、この機じゃと  
しんどいですが、少尉。

そろそろ戻りましょう」

ジャクローの声は悔しさも気負いも感じさせない落ち着いたものだ

った。

「うん、解ってるわ。」

こんな所で戦闘機に食われちゃたまらないものね。

あと一〇分飛んで、何も見えなかつたら帰りましょう」

ケツティの声にはどこかほっとしたような雰囲気がある。

アズファ同様、空母航空隊に憧れ訓練に励んでいたが、配属は基地航空隊。

ケツティに中攻操縦の才能があつて是非にというのではなく、空母航空隊に配属するには技量未熟というのが理由なのは、アズファと同じだ。

腐るなという方が無理だった。それでも表面上は不満を表すこともなく、ケツティは黙々と軍務をこなしていた。たまに近くの町でアズファと顔を合わせることがあれば、ふたりで愚痴の言い合いになるのが常だった。

昨夜のアズファが気負いのあまり味方撃ちをやりかけたことは、魔通の傍受記録から第二航空部隊でも掴んでいる。第二航空部隊司令はケツティたちの出撃に当って、二の舞を演じないよう厳命していたのだった。

同期をどうやって慰めようか頭を悩ませながらも、心のどこかでライバルが消えたことを喜ぶ自分がいた。

自分ならそんなへマはやらない。

そう考えていたが、受けた命令は偵察だった。

嫌を言えるはずもない。

必死の努力で落胆の表情を表に出さずに、ケツティは

三番偵察線を引き返しながら、ケツティはこれで攻撃に参加できる可能性が出てきたことを喜んでいた。

急いで引き返せば、爆弾を積んで午後には出撃できる。

午前中にサピエント艦隊が発見されたとしても、そうそう簡単に撃沈できるとは思えない。第二次第三次の攻撃隊が編制されることを、ケツティは信じていた。

ふと、視界の片隅に黒い影と煙が見えた。気がした。

「攻撃隊への参加は、なしね」

小さく呟くと、ケツティは魔通員に基地へ報告するように命じる。サピエント艦隊発見の武功を上げたことを喜ぶ自分と、これで敵主力艦撃沈の栄誉は逃げていってしまったことを悔やんでいる自分がいた。

「仕方ないですね。」

「ここはひとつ、裏方に徹しましょう。」

「まだ敵の空母が後方に残ってるらしいじゃないですか。」

「そいつをいただくことにして、ここは我慢ですぜ、少尉」

ジャクロがケツティに声をかける。

ケツティがジャクロの顔を覗くと、嬉しさを垣間見せながらも悔しさに顔を歪ませ、自身の感情をねじ伏せようと必死になっている。

「そうね、ここはひとつ、私たちのおかげでサピエント艦隊を殲滅できたって言わせるようにしてやりましょうか。」

「攻撃隊が傍受できるかもしれないから、続報は長めの文で送るわ。」

「高度三〇〇〇で触接を維持！」

「魔通員に命じ、サピエント艦隊の針路、天候、航行序列を送信する。」

「単座、二座、三座の艦戦や艦爆、艦攻と違い、中攻には機内には多少ではあるがスペースの余裕がある。魔通の送信受信とも、艦上機とは格段に性能がよいものが搭載されていた。」

「ケツティ機の魔通は、攻撃隊も傍受するだろう。そうなれば、基

地からの指示を受けるより早く、この砂海域に友軍機が飛来する。そのときの目印になれるように、ケツティは攻撃隊の標準飛行高度で接触を保つことにした。

ケツティは機内を振り向き、偵察員たちの顔を見回す。

直接攻撃に参加することはないが、間違いなく戦闘行動に入っている男たちの顔が並んでいた。誰もが口を真一文字に引き結び、サピエント艦隊の挙動をひとつも見逃すまいと砂海面を凝視している。だが、どの顔にも喜びと悔しさが同居していた。

ジャクロの顔を思い出してケツティは吹き出しそうになり、操縦を自分に切り替えて力一杯操縦桿を引き付けた。

私だけじゃないんだ。

取り逃がしてしまうのではないか、誰もがとろ火で炙られるような焦燥感の中で、待ちに待った魔通だった。

『敵主力見ユ、北緯四度、東経一〇三度五五分、針路六〇度、一一四五』

一一時四五分、ケツティ機から待望のサピエント艦隊主力発見の魔通が飛び込んできた。

続けて続報の魔通が、二通飛び込んでくる。

『敵主力八三〇度二変針ス、同砂海域ノ天候八快晴ナリ、一一五〇』

『敵主力八駆逐艦三隻ヨリナル直衛ヲ配ス、航行序列、『ラバナスタ』型、『ビュエルヴァ』、一二〇五』

司令部はすぐさま各攻撃隊に魔通を転送し、各攻撃隊はサピエント艦隊主力めがけて翼を翻した。

「ケツティ、やったあ！

いくよっ！」

アズファが歓喜の咆哮を上げ、操縦桿を大きく倒す。

中攻とは思えない機敏な機動で、六型陸攻は左旋回を開始した。

「俺たちが行くまで獲物は取っておいてくれよ。」

ここまで来て、着いたときにはきれいさっぱりなんて、ご勘弁願いたいってもんですぜ」

シューーンー飛曹が大声で同意を表した。

「艦長、あれはソルの中攻だな」

『ラバナスタ』の将官艦橋で、マスフィは、『ラバナスタ』艦長リッチ大佐に言った。マスフィが見上げた約三〇〇〇メートル上空を、ケッテイの六型陸攻が旋回している。

「対空戦闘用意！」

頷いたリッチは間髪を入れず命令を下す。

艦内の各所で命令と復唱、ラツタルを駆け上がり、駆け下りる靴音、水密ドアを開け、締め切る音が響き渡り、ほどなく潮が引くように静まっていく。

「長官のおかげで、乗組員たちもかなり素早く動けるようになりました。まだ、満足はしませんが」

おそらく、より手早く対空戦闘の準備を完了したであろう僚艦『ビュエルヴァ』を眺めつつ、リッチがマスフィに声をかける。

「私は、何もしていないよ、艦長。」

すべては艦長の指導の賜物だ」

微笑の形に頬を緩ませ、マスフィは返答する。

「いえ、私も厳しく指導していますが、長官の旗艦であるというところが乗組員たちの自覚を増しています。」

サピエント本国を出たときにはどうなることかと思いましたが、これであれば充分すぎるほど戦闘に耐えることができるでしょう。同様に微笑みながらリッチは言った。

「そうか。」

艦長の見立てではどうかね。

ノーブの艦隊が出てきたときに撃ち勝てるか？」

マスフィは、ハルミが率いる重巡を基幹戦力とした南遣艦隊を脅威と看做していない。

重巡以下が装備する豆鉄砲など、『ラバナスタ』の装甲にとって蚊が刺したほどの痛痒も与えられないとマスフィは信じている。

巨大な破壊力を持つソルの酸素砂雷も、命中しなければどうということはない。砂雷の射点につく前に、重巡以下の小型艦艇などは『ラバナスタ』の主砲が撃ち砕いてしまっただろうとマスフィは考えていた。

万が一撃沈できずとも、砂雷の照準を定めさせず、雷撃を諦めさせるだけでも充分だ。

「はい、現在ノーブ提督の下には『キュラソ』と『ギラドラス』が配備されていますが、我が『ビュエルヴァ』より遥かに前世代の艦です。」

主砲も一四インチ（三五・六センチ）と『ビュエルヴァ』より小口径です。

『ラバナスタ』とは同口径ですが、射撃速度はこちらが上。

乗組員たちの錬度も上がってきた今、撃ち負ける要素はひとつも見られません。」

リッチはそう言って胸を張る。

決して驕り高ぶった振る舞いではなく、静かな内に決意と自信を秘めた態度だった。

「そうか。」

それを聞いて安心したよ、艦長。

まずは我々が『リンドブルム』を沈めた戦訓に倣うだろう。

砲戦の前に航空機などに手傷を負わされるようなことがないよう  
にしてくれたまえ」

頼もしげな視線を送りつつ、マスフィは言った。

アレマニア砂海軍最大最強の戦艦『リンドブルム』は、ソルとの開戦に先立つこと五ヶ月前の今年の五月、北部大西砂海で生起した砂海戦で撃沈されている。

『リンドブルム』出撃の報に接したサピエント艦隊は、当時世界最強の巡洋戦艦と謳われた『ファルガバード』と最新鋭戦艦『ラバナスタ』を中心とした艦隊で迎え撃った。

前大戦後に竣工した『ファルガバード』は、三八センチ連装主砲塔四基八門の強力な武装と、全長二六二・三メートル基準排砂量四万二七五〇トンの巨体を二九・五ノットの高速で疾走させる世界随一の性能を有していた。

艦齢二〇年を越える老齢艦であったが、乗組員たちはよく訓練されており、使い込まれたサーベルを思わせた。

だが、防御力より速力を重視した巡洋戦艦である『ファルガバード』は、大角度で落下してくる砲弾に対する水平防御に不安を抱えていた。前大戦後期に生起した史上最大規模の砂海戦の戦訓から、『ファルガバード』も水平装甲を強化する計画が立てられていたが、アレマニアによる第二次世界大戦勃発により棚上げのままにされてしまっていた。

その状態で遠距離砲戦に臨んだ『ファルガバード』に、『リンド



ブルム』の第五斉射が直撃した。

大角度で落下した砲弾は、薄い水平装甲を紙のように突き破り、高角砲用の四インチ砲弾薬庫に突入して信管を作動させた。轟音と共に巨大な炎と衝撃が破孔を通して上部構造物を舐めたが、同時に一五インチ主砲弾薬庫との隔壁を吹き飛ばす。弾薬庫内に整然と並べられた砲弾が、衝撃波に吹き飛ばされた瞬間、信管が作動した。『ファルガバード』は大きな火柱を冲天高く吹き上げ、艦橋と第二主砲塔との間で艦体をふたつに分断されて轟沈した。

生存者は乗員一四一九名中、僅か三名。  
戦闘開始から僅か六分後のことだった。

『ラバナスタ』はまだ就役してから四ヶ月と慣熟訓練が未了であった上、主砲塔に機械的な問題を抱え、造船所の技師を乗せたままの出撃だった。

しかし、轟沈した『ファルガバード』の怨みが乗り移ったかのように『ラバナスタ』は善戦し、『リンドブルム』に直撃弾を与えることに成功していた。だが、『リンドブルム』からの激烈な反撃を受けて司令塔を破壊され、艦橋要員をリッチ艦長の他僅か一名を残して抹殺され、戦闘の継続を不可能にされてしまった。

撃沈こそ免れたが、這々の体で退却した『ラバナスタ』は、『ファルガバード』の復讐戦を指をくわえてみているしかできなかったのだった。

復讐の意気に燃えるサピエント砂海軍空母『ソーヘン』から飛び立った艦攻が、『リンドブルム』砂雷を二本命中させる。

撃沈には至らなかつたものの、そのうち一本の砂雷は右舷後部に命中し、三軸あるスクリューのうち中央の一本を衝撃で捻じ曲げた。艦底に食い込んだスクリューが操舵装置を破損させ、『リンドブルム』の舵は左舷一二度に固定されてしまった。

運良く生き残った左右の推進機交互運転によって操舵することになった『リンドブルム』は僅か七ノットしか出せなくなり、航行に致命的な障害を抱えることになってしまった。

『リンドブルム』はアレマニアに撤退することも不可能になり、占領していたゴールへの退避を余儀なくされた。

だが、追撃してきたサピエントの砂雷部隊、続いて戦艦部隊に捕捉され、戦艦同士の壮絶な砲撃戦の末、撃沈されていた。

この砂海戦の結果、航空機が戦艦に手傷を負わせることが可能であると、一定の有用性は認められた。

だが、戦闘行動中の戦艦を航空攻撃で撃沈することは、たとえ対空火器が減少していようと不可能という結論も、同時に世界中の砂海軍関係者、主に大艦巨砲主義者たちにもたらしていた。

「間違いなく、その通りでしょう。」

まずは航空攻撃で我々の脚を止め、その後、ナルミとノーブの艦隊が追いかけてくるはずです。

行動が阻害され、傾斜によって測的が困難となれば、砂雷戦隊のような小艦艇でも戦艦にとって脅威となり得ます。

我々を範としたソルであれば、そうするでしょう。

ですが、彼の砂海戦の戦訓は、彼らだけのものではありません。

我々がアレマニアとは違うことを、たっぷりと教育してやりましょう。

かつて、我が先人たちがソルに対してそうであったように「

リッチは当時の屈辱を思い出し、しばし瞑目してから力強く返答した。

リッチにしても、今は亡き怨敵同様の途を『ラバナスタ』に辿らせる気など、さらさらない。

今のところ『リンドブルム』のように、航空攻撃の前に損害を受けているわけではない。ソルが倣った砂海戦とは、既に前提条件が

異なっている。

動きが鈍重な中攻如きに、この『ラバナスタ』の脚を止められるものか。

近寄るそばから叩き落してやる。

思惑通りに運ばせるものか。

リッチは眦を決して、上空の機体を睨みつけていた。

「敵を莫迦にすることは危険だが、必要以上に恐れることもまた危険だ。

さつきはあのように言ったが、貴官の操艦術を以てすれば、ソル機の空襲など恐れる必要はないと思うがね。

彼らにできることは、せいぜい不意打ちで安穩としている泊地の艦に爆弾を叩き付ける程度のものだ。

ついこの前までカタナを振り回す近接戦闘に明け暮れていた後進……いや、ソルが、航空攻撃で作戦行動中の戦艦に手傷を負わせるなどできまいよ」

リッチの操艦に全幅の信頼を置くマスフィは言った。

「はい。

私は、ハトーの惨劇は大きな人的要因があると考えます。

いくら不意打ちとはいえ、魔探知を備えたハトーが一〇〇機以上のソル機接近を見過ごすとは思えません。

何らかの連絡ミスや思い違いがあつたものと思われませぬ。

そうでなくては、あれほどの被害は考えられません。

一〇〇機以上の大編隊が来るのであれば、事前連絡があるはずであり、それ以外であれば敵と判断するはずです。

魔探知がソル機の編隊を捉える距離を考えれば、充分に迎撃機を上げることは可能だったでしょう。

ハトー空襲は、ソルにとっては幸運、オリザニアにとっては不運の結果だと私は考えます。

そして、今戦闘態勢を整えた我々に、僅かな不運も、ソルの幸運もあり得ません」

リッチは気負うことなく答える。

砲戦の結果対空火器をある程度削られていた『リンドブルム』と違い、『ラバナスタ』も『ビュエルヴァ』も、機銃一丁たりとも失っていない。

濃密な弾幕は、近寄るソル機を片端から叩き落とすだろう。空を埋め尽くすほどのソル機であっても、何ほどの驚異ではない。ましてや、技術先進国といわれている母国サピエントの機体ですら、戦艦を撃沈できなかったのだ。ちょうど三〇年前の二六一一年に、ようやく航空機の国産化に成功したソルが、短期間で戦艦と渡り合える攻撃機を生産できるはずがない。

戦艦とともに軍歴を重ねてきたリッチは、そう信じている。

「確かにソルの建艦能力は、高い。

それは認めよう。

ソルの『ガイロス』級重巡三番艦『ペガッサ』が我が国王の戴冠式に派遣されてきた際、我が砂海軍の『ギーザ』艦長が同じ重巡同士ということで代表してスピーチし、『初めて軍艦に乗った』と評したことがあったな」

マスファイが四年前の出来事を口にした。

二六三七年に行われたサピエント国王戴冠記念観艦式に、ソルは重巡『ペガッサ』を招待艦として派遣した。

『ガイロス』級重巡洋艦は、基準排砂量一万トンの艦体に二〇・三センチ連装主砲塔を前部に三基六門、後部に二基四門の計十門、六一センチ砂雷発射管四基一六門を備えている。全長二〇三・七六メートル、全幅二〇・七三メートルのスマートな艦体を巨体を三三ノットの高速で走らせる重武装高速の重巡洋艦だ。

ソルに古来から伝わる独特の刀剣を彷彿とさせる鋭い艦影と重武

装から、サピエント国民は『ペガツサ』を『飢狼』というニツクネームで呼んでいた。

サピエント砂海軍重巡の艦長が言った『初めて軍艦に乗った』という言葉とともに、ソル砂海軍関係者は最大の讃辞と受けとった。

「あれは、彼一流のユーモアに溢れた皮肉と、私は理解していますか？」

マスファイまであの発言を額面通りに受け取ったのかと、リッチは怪訝な顔をする。

サピエントの人々は狼に対してよい感情を抱いておらず、『餓狼』というニツクネームは攻撃一辺倒に傾いたソル人特有の極端に走る性質を揶揄したものだだった。

重巡艦長の言葉も、居住性を無視した艦内構造や優雅さ、ゆとりをまったく感じさせないことへの皮肉だ。

「考えて見たまえ、リッチ艦長。

本国から遠く離れた植民地に行かなければならない我々の艦と、近砂海で一度の決戦に備えるソルの艦では、自ずと建艦思想は異なってくる。

我々は、ろくに武器も持たない現地人を威圧できれば充分だ。

しかし、彼らは大東砂海を押し渡ってくるオリザニア艦隊を、撃滅するという使命がある。

攻撃一辺倒の艦を造りたくなるというものじゃないか。

彼は皮肉を言ったのだろうが、図らずもそれはソルにとっては最大の讃辞だったのだよ」

マスファイ自身は、ソルの造船能力に一定の評価を与えていた。

「確かに、おっしゃるとおりです。

我々は、仮にオリザニア艦隊と雌雄を決することになっても、充分な戦力を保持しています。」

ですが、ソルは我々やオリザニアに対して戦艦で約六割、補助艦艇で約七割の保有トン数です。

それでは攻撃一辺倒になろうというものですか」

多少の哀れみを含んだ笑みでリッチが答える。

哀れみには、同時に嘲りも含まれていた。

「我が国から『キュラソ』を購入し、建造の際には多くの技官や技師が我が国の造船所に訪れ、素晴らしい勤勉さで学んで行った彼らが、一流の造船技術を身に付けたことは、至極当たり前だ。

我が国を手本としたのだからな。

だが、基礎工業力が低く、資源に恵まれないソルが、高性能の航空機を作り出せるとは私には思えない。

機体は何かなるうが、エンジンの小型化は絶対に我々やアレマニアの水準までは達しないだろう。

長く軍令部に身を置いていた私だが、決して他国戦力の情報収集や研究を怠ってきたわけではない。

いや、逆にそれこそが重要な仕事だったと言ってもいいだろう。

ソルの機体は、カタログデータでは優秀かもしれないが、それを活かせるだけの技術力はないと、私は判断している」

マスフィはそこで言葉を途切り、上空を見上げた。

「長官が警戒されているのは、ノーブ、ナルミ両提督が率いる砂上打撃部隊であり、今上空に集まってきた航空機は驚異と見なしておられない。

ということですね」

リッチも上空に視線を向け、刻々とその数を増やしつつあるソルの中攻を見ながら答える。

「その通り。

見たところ艦攻はいないようだ。

鈍重な中攻など、貴官の操艦術と乗組員諸君の射撃技術を以てすれば、ただの一機も近寄らせることもないと、私は信じている」

頼もしい視線をリッチに向けると、マスフィは踵を返し、長官席に腰を下ろした。

「対空管制室に上がります。

ここでは敵機の動きが見えませんが」

リッチはマスフィに見事な姿勢で敬礼し、将官艦橋を出て行った。

南遣艦隊司令長官ナルミ中將は、第一航空戦隊司令官時代に『リンドブルム』撃沈の戦闘経過を駐在武官を通して入手し、詳細な検討をしていた。

そして、戦艦は航空攻撃で撃沈できると、結論付けている。

現在『ラバナスタ』に迫りつつある六型陸攻は、サピエント艦隊の脚を止めるために征くのではない。

息の根を止めるため。

それ以外の意思は持っていない。

ケッティがサピエント艦隊の位置を知らせてから、約一時間が経過している。

比較的近距离にいた第一航空部隊の爆装隊の一部六型陸攻八機と、第二航空部隊の雷装六型陸攻一七機が、先を争うようにサピエント艦隊に殺到した。

「射撃開始！」

「突撃！」

我に続け！」

それぞれの指揮官から、ほぼ同時に戦闘開始の命令が下される。

『ラバナスタ』と『ビュエルヴァ』、そしてエスコートの駆逐艦から、無数の火箭が六型陸攻に向かって撃ち上げられた。

天地を逆にした赤い豪雨を突き抜けて、第一航空部隊第一中隊八機が、高度四〇〇メートルからレパルスを爆撃したのは、一二時四五分のことだった。

『ビュエルヴァ』の艦上に閃光が走り、大音響とともに爆煙が奔走する。

ほぼ同時に、砂面に突っ込むのではと思えるほど低空に舞い降りた六型陸攻が、対空射撃をかい潜り砂雷を投下する。

『ラバナスタ』の艦腹に、丈高い艦橋と高さを競い合うように砂柱がそそり立った。

二本目の砂柱をかわして飛び去ろうとした第二航空部隊第一中隊三番機を、『ラバナスタ』の対空砲火が絡め取る。

それぞれの主義主張を押し通すため、そしてそれとは別に、生き残るための戦いが始まった。



## 第28話 決着

二六四一年一月二日二時四〇分。

サピエント艦隊上空には、ソル砂海軍第二二航空戦隊第一航空部隊第一中隊爆装六型陸攻十四機、第二航空部隊第一中隊雷装六型陸攻九機、第二中隊雷装六型陸攻八機が突入のタイミングを計っている。

最新式の一型陸攻が配備された第三航空部隊は、まだこの空域には到達していない。

一型陸攻は、半年ほど前に正式採用され、各部隊への配備が始まっている。

五年前から運用されている六型陸攻に比べ、時速六〇キロ優速で、防御火器が増強され、主翼内を魔鋇石庫と飲料水庫にしたことで、一・五倍以上の航続距離を達成した機体だ。六型陸攻では機体下部に爆弾や砂雷を吊り下げることで空気抵抗の増大を招いていたが、爆弾砂雷庫を機体内に設けられたことで、大幅な空気抵抗の減少に成功し、六型陸攻からさらに洗練された機体形状から、その大きさからは想像もできない軽快な機動を可能にしていた。

一型陸攻の生産が進めば順次六型陸攻は後方に下げられ、輸送等の裏方に回っていくことになるだろう。

第一、第二航空部隊とも、慣れ親しんだ六型陸攻の花道を飾るため、第三航空部隊の一型陸攻到着以前に蹴りを付ける気でした。

サピエント大東砂海艦隊の巡洋戦艦『ビュエルヴァ』の艦上は、戦闘直前とは思えない雰囲気に含まれていた。

これまでソル砂海軍との交戦経験のないサピエント兵たちは、口々にソルを小莫迦にしている。技術先進国という自信と、技術大国の勇であるアレマニアに一步も退かず戦っているという自信がそう

させていた。極東の未開国であり、かつてはサピエント砂海軍に教えを乞うた後進国という嘲りがそうさせていた。

「あれは中攻だろ？」

ソルには偵察機つてもものはないのか」

「あれが飛んでいること自体信じられん。

どうせ水平爆撃が関の山だろう。」

動きの鈍い陸攻が、戦闘行動中の戦艦に急降下爆撃も雷撃もできないはずはないさ」

「そうだな、やつらにできることは、不意打ちくらいだ。

実際、ハトーをやった艦攻は複葉機つて噂だぜ」

「そりゃそうだ。

精密な機動を要求される艦攻は我が軍だつて複葉機なんだぜ。

ソルに単翼の艦攻が開発できるはずなんかないって」

「二、三発脅かしてやれば、すぐに逃げてくんじゃないか」

いつ射撃開始の命令が下されても対応できるように、十全の準備の元だが緊張感にかける会話が続いている。

やがて、サピエント艦隊全艦の艦上に射撃開始の命令が下ると同時に、上空に集まってきたソルの機体が身を翻す。

丸型艦爆のような急降下こそできないものの、優美な奇跡を描いて緩降下を開始した六型陸攻の腹に吊られていた二五〇キロ爆弾が、『ビュエルヴァ』めがけて投げ出される。

別の砂海面ではベテランパイロットに操られた六型陸攻が、高度五メートルまで降下して『ラバナスタ』に突っ込んでいく。

「なんだ、あいつらは!？」

こんなところで曲芸飛行なんて!」

『ビュエルヴァ』艦上で、六型陸攻の機動に度肝を抜かれ、素早

さに対応できない将兵が罵声を放つ。

射撃開始の直後に、六型陸攻が投下した二五〇キロ爆弾が『ビュエルヴァ』の艦上に炸裂した。

大音響とともに盛大な火炎が奔走し、引きちぎられた鋼材の破片が吹き飛ばされる。即艦の運用に支障が生じるほどの被害はないが、鋼材に混じって元は人間だった肉片も吹き飛ばされていた。辺り一面に硝煙と血の匂いが充満するが、艦の進行に伴う強風があつというまに流し去っていく。

直前までソルを侮り、小莫迦にしていた将兵たちの顔つきが一瞬で凍り付き、次いで憤怒の色に染め上げられた。

『ラバナスタ』の対空管制室ではリッチ艦長が、将官艦橋からはマスファイ司令長官が、二手に分かれ両舷から超低空をしたい寄るソルの中攻を信じられないものを見るような表情で睨みつけている。

高度五メートルを飛翔する中攻に対して、『ラバナスタ』は舷側を真っ赤に染め上げて対空射撃を続けている。どの砲も俯角を一杯にかけ、恐ろしいほどの速度で急接近する中攻に砲弾を叩き付けようとしていた。だが、中攻の高度が低すぎるからか、すべての弾はその頭を飛び越して後方の砂面に虚しく砂柱を上げるだけだ。

「中攻で雷撃だと!？」

対空管制室からリッチの、将官艦橋では航空参謀の叫びが上がる。

「良く訓練されている。

我が軍にあれほどの低空を、あの速度で飛ぶ勇気を持つ者がどれほどいるか」

航空参謀の狼狽とは裏腹に、感嘆の面持ちでマスファイは、隣に立

つ首席参謀に落ち着いた声をかけた。

「残念ながら。」

我々は爆撃機を用いた戦艦への雷撃は想定しておりません。

あの高度、速度とも訓練はしてはおりませんでした。

ですが、訓練さえ積みめば、困難ではないでしょう」

ソルにできて自分たちにできぬはずはない。

些か誇りを傷つけられたという内心を隠しながら、首席参謀は強気の表情を崩さず言った。

「その通りだ。」

しかし、いくら訓練を積んであのような素晴らしい技術を身に付けようと、航空機に戦艦は沈めることは不可能だ。

それよりももっと必要な訓練に時間を割くべきであり、我が軍には不必要なものだな」

爆撃機には爆撃機のやるべきことがある。

鈍重な機体に戦艦への雷撃をさせるなど、対空砲火の贅に供するだけであり、時間と経費と人命の無駄遣いでしかない。マスフィの認識ではそうだった。

「敵機、両舷に分かれます！」

速い！」

対空砲火が追いついていません！」

対空管制室に、見張りの叫び声が響いた。

「畜生！」

なんだ、あの速さは！」

誰だ、ソルの飛行機なんぞ飛ぶのがやっとなんて戯言を抜かしたのはい！」

「情報部の奴らぶざげやがって！」

まともな情報も送れないなら、便所掃除でもしてやがれ！」

対空機銃にかじり付く兵たちから罵声が上がリ、本来であればそれを宥めるべき立場の指揮官からも同様の叫びが飛び交う。

サピエント砂海軍では、雷撃機に対する対空射撃訓練を、自軍が保有する機体を基準に行っていた。

だが、六型陸攻は、サピエント攻撃機の最高速度二二二キロを遙かに上回る最大速度三五〇キロの性能を有している。身体に染み着いた訓練の成果は、予想もしなかった事態に即応できるはずもなかった。

「敵機、投雷！」

両舷の見張りから、同時に悲鳴のような絶叫が走る。

「面かあじ！」

対空管制室からリッチの大音声が響く。

投下された砂雷に対して艦を正対させ、被雷の可能性を極限まで減らす。

砂雷戦隊と対戦するときと同じ対処だ。

右舷に五機と左舷に四機と分かれた中攻を見て取り、より危険性の高い右舷からの砂雷を優先して回避すると、リッチは即断した。左舷から迫る砂雷は、万が一命中すれば艦尾を抉り、『ラバナスタ』から行動の自由を奪う可能性があるが、それでも数が多いほうを回避するべきだった。

「面舵、一杯！」

操舵室から復唱が返され、操舵手が力の限り舵輪を回す。

基準排砂量三万六七二七トン、全長二二七・一メートル、全幅三四・三メートルの巨体は、すぐに舵が効かない。面舵の命令から四〇秒が経過するが、『ラバナスタ』が針路を変える気配はまだ感じられなかった。

一分が経過し、やっと『ラバナスタ』は右へと艦首を振り始める。だが、遅すぎた。

「左舷の砂雷、接近します！」

「右舷の砂雷、艦尾に接近！」

見張りの絶叫が響き、直後に艦腹と艦尾に大音響と共に巨大な砂柱が立ち登る。

全艦を刺し貫くような衝撃に、対空管制室ではリッチたち艦首脳が、将官艦橋ではマスフィを始めとした司令部要員が、床に投げ出され、壁に叩き付けられた。

丈高い艦橋を遙かに越えた砂柱をすり抜けるように飛び去ろうとした六型陸攻を、追いかけるように撃ち出された機銃弾が捉える。

魔鉱石を詰め込んだ燃料タンクを撃ち抜かれた六型陸攻が、引火した魔鉱石の盛大な爆炎と共に空中で四散した。

「被害状況報告せ！」

頭を振りながら立ち上がったリッチが伝声管に怒鳴り込む。

「長官、大丈夫ですか!？」

マスフィの身体を受け止めるように壁に叩き付けられた首席参謀が、呻き声を上げるマスフィに声をかける。

「大丈夫だ、首席参謀。」

「どこをやられたんだ？」

一瞬痛みに顔をしかめるが、威儀を正してマスフィが問い返す。

「ここからでは前部の被雷しか確認できません。」

間もなくリッチ艦長から報告があるはずです」

首席参謀は判る範囲で回答した。

戦闘が始まってしまえば司令部にできることはそれほど多くない。艦隊決戦であれば、どの敵艦にどの艦を割り当て、どれくらいの速力で砲戦を行い、有利に運ぶための針路を決定する。

戦闘行動自体は、艦長の専管事項だ。

この状況では、マスフィたち司令部は、戦闘の成り行きを見守る以外にできることはない。

戦いに敗れたとき、いつ撤退するかを決定を除いて。

「二本くらい命中したところで、『ラバナスタ』は沈まんよ。

それより、『ビュエルヴァ』嬢の方はどうかね？

さすがに巡洋戦艦では、砂雷を喰らっては辛かるう」

ソルの機体ごときに砂雷を命中させられた衝撃から、マスフィはすぐに立ち直っていた。

「『ビュエルヴァ』からは『全砂雷回避スレド爆弾一発命中。損害八軽微ナリ』との報告です。

いかに水平防御が薄いといっても、中攻レベルで運用できる二五〇キロ爆弾や五〇〇キロ爆弾程度で、巡戦の装甲を撃ち抜けるとは思えません」

通信参謀がマスフィに答える。

「そうだろうな」

さもありません、といった表情でマスフィは答えた。

だが、このとき『ラバナスタ』は即沈没には結びつかないが、致命的な被害を被っていた。

副長からの被害報告を聞いたリッチは、一瞬で顔を蒼ざめさせた。二本命中した砂雷のうち、艦尾の一本は『ラバナスタ』に重大な損傷を与えていた。

砂雷命中による損傷だけでなく、衝撃で湾曲した推進軸は高速で回転したまま周囲を殴打し、破壊していた。

推進軸が貫通する区画は長さが七〇メートル以上あり、その幅も大の大人が数人並んで歩けるほど巨大な空間だ。

そこに大量の砂が一気に流れ込んだ。

トンネル区画の根元にある左舷前部機械室、隣接する一三・三センチ砲弾薬庫、左舷発電機室、左舷戦闘動力室、左舷前部缶室に砂は雪崩れ込んでいく。右舷に注砂してバランスを取ったとしても、艦の駆動部が侵砂しては行動の自由すらままならない。

既に出しうる速度は、二〇ノットを切っている。わずか一発の砂雷にしては、被害が大き過ぎた。

たった一本の砂雷で、『ラバナスタ』は左舷に一度傾いた。

左舷二軸の運転が不可能になり、戦闘動力室と予備発電機室にあった八基ある発電機のうち五基が停止した。発電機が止まってしまったことで排砂ポンプを動かすことも、被害状況を知らせるための艦内電話も、通風も照明も止まってしまった。

それだけではない。

一三・三センチ高角砲の動力が絶たれ、後部両舷四基が使用不能となった。その上、舵機の電力を絶たれ、事実上操舵不能の状態に陥ってしまった。

さらに艦の傾斜により、前部の一三・三センチ砲も正確な照準など望むべくもない。

近接対空射撃の要となるポムポム砲も、弾丸の薬莖分離による故障が頻発し、防空力が壊滅状態になってしまった。

次々に伝令が上げられてくる被害状況に、リッチは『ラバナスタ』はすでに致命傷を負ったことを思い知らされていた。



「敵機去つていきます！」

見張りが報告を上げてきた。

もちろん、対空管制室に詰めているリッチも、敵機の動きは目で追っている。

「長官、本艦の被害は深刻です。

旗艦の変更もご考慮ください」

見張りを敵に命じ、リッチは将官艦橋に降りてマスフィに進言した。

「艦長、それほど悲観するものでもあるまい。

確かに推進軸に被害を受けたが、もう一本の砂雷はたいしたことはないようだ。

航空機による雷撃も、砂上打撃部隊による雷撃も、狙いは基本的に同じ艦腹だろう。

バルジを撃ち抜いたとしても、炸薬量の少ない航空砂雷で分厚い装甲板を撃ち抜くことは不可能なようだ。

何本か艦腹に被雷したとしても、敵の物量には限りがある。

バルジの内側にどれほど砂を飲んでも、バイタルパートを撃ち抜かれなければこの艦が沈むことはあるまい。

幸い、『ビュエルヴァ』は本艦より舵の効きがよく、敵の砂雷はすべてかわしているようだ。

最悪本艦が航行不能に陥ったとしても、『ビュエルヴァ』に曳航させればマレーヤまで帰ることは充分可能と私は見ている」

旗艦変更の要なしの意を込めて、マスフィはリッチを真っ直ぐに見つめて言った。

「ですが、長官。

本艦は舵機室が使用不能であり、事実上舵を切ることができません。

航空機に沈められるようなことはないと考えますが、万が一艦橋に爆弾が命中しないと限りません。

その上、対空火器の照準も正確さを欠いています。

敵攻撃機が我が国の攻撃機より優速であり、ただでさえ撃墜が困難な状況下にあつては、長官をお守りするとお約束することは難しいと」

血を吐くような思いでリッチは答える。

自身の無能をさらけ出すようで、身を切るような苦痛が伴っているはずだ。

「艦長、私はそれでも旗艦変更の要なしと考えているよ。」

私が降りることで乗組員たちの士気が下がり、救える艦も救えなくなつてしまつては本末転倒だ。

私は、サピエント大東砂海艦隊を預かる者として、本艦の沈没が確実となるまでは、この艦橋に残らなければならないのだよ」

リッチを気遣うような素振りは見せず、あくまで職責を果たすためという態度でマスフィは言い切つた。

ここでリッチを気遣うように振る舞うことは、リッチのプライドをずたずたに傷付けるだけだ。

「解りました。」

長官がそうおっしゃるのであれば、私は艦をマーレイヤに帰すよう、最大限の努力を払い、義務を果たしましょう」

見事な姿勢で敬礼し、リッチは将官艦橋を出ると、また対空管制室へとあがつていった。

「彼らは、来るでしょうか？」

首席参謀が誰にというわけではなく口にする。

「彼らは来ます。」

我々サピエント砂海軍の精神を学び、ヘイ八提督の後継者を自認するのであれば、彼らは来ます。

何よりも、航空機が戦艦に優越することを証明するために、彼らは来ます」

一切の迷いを見せず、航空参謀が答える。

「航空参謀、随分と楽しそうじゃないか？」

そういえば、君も航空主兵論者だったな。

君の持論が証明されることを望んでいるようだね」

穏やかな笑みを浮かべ、マスフィが航空参謀をからかうように言った。

「はい。」

私の持論が証明されるかどうかの瀬戸際です。

ですが、今だけは、私が間違っていることを望みますよ」

不敵な笑いを浮かべ、航空参謀が答え、将官艦橋に笑いが弾けた。

「第二波空襲！」

敵編隊、針路一八〇度！」

艦橋トップの見張り所から、見張り員の絶叫が響いてきた。

一三時二〇分、第一波の空襲に参加できなかった第一航空部隊の雷装六型陸攻全機が、サピエント艦隊上空に殺到した。

第一航空部隊第四中隊八機は、一直線に並んで『ビューエルヴァ』の左舷に突き進んでいく。

苛烈な対空砲火が盛大に振る舞われ、第四中隊の各機は機体を左右に振って狙いを外そうとするが、『ビューエルヴァ』も大きく左に

転舵し、六型陸攻の射点を外すべく砂海上に優美な航跡を刻んでいく。空襲第一波のときと同じく、左舷から襲い来るであろう砂雷に艦首を正対させ、被雷面積を少なくしようとする。防御力を犠牲にして機動性と速力を優先させた巡洋戦艦は、戦艦とは比べ物にならないほどの俊敏さで六型陸攻に艦首を向けていく。

第四中隊の右端を飛んでいた第三小隊三番機が完全に射点を外され、『ビュエルヴァ』の右舷へと回りこんだ。

双発の中型機とは思えない軽快な機動で針路を修正した第四中隊の八機は、不完全ではあるが左右両舷同時雷撃の態勢に入った。

息を詰めるような緊迫感の中、各機のコクピットに機長の号令が響く。

間髪を入れず胴体に吊るされていた砂雷が投下され、砂煙を巻き上げて『ビュエルヴァ』に突進する。

第三小隊三番機は投雷後、『ビュエルヴァ』の艦尾を右舷から左舷へと掠めるように飛び去ろうとしたが、対空砲火に絡め取られ一瞬で爆砕される。

ひと塊の炎が空中に湧き出し、魔鉱石の誘爆を引き起こした機体が、ばらばらになりながら砂面に向かって落ちていく。

「  
！」

サピエント艦隊の上空に辿り着いたアズファが、戦友の最期を目の当たりにして声にならない叫びを上げた。

第四中隊の突撃に遅れて到着したため、ここからでは誰の機が撃墜されたかまではわからないが、間違いなく戦友が散った瞬間だった。

「仇……は……討って……」

「少尉、操縦もらいます！」

地鳴りのような低い声がアズファの喉から漏れるが、それを掻き消すようにシューンが叫ぶ。

操縦桿を握る手が震えているようでは、超低空での投雷など夢のまた夢だ。

僅かな操縦の狂いで機体は砂面に叩き付けられる。そうなのは仇を討つどころか敵に利するだけでしかない。

初陣で戦友の死を目の当たりにして、心の平衡を保てないアズファに操縦させておくわけにはいかない。

シューンは咄嗟に操縦システムをアズファから奪い取っていた。

「シューンさん、何を！」

命令です！

私に

「ダメだ、少尉！」

今のあんたでは砂海に突っ込むのがオチだ！

見本を見せてやるから、今は黙って見てろ！」

シューンがアズファの言葉を食いちぎり、見事に機動で機体を超低空へと導いていく。

眼下に砂面が急速に迫り、アズファは思わず目を閉じる。

悔しいが、戦友が撃墜されたことで冷静さを欠いていることを、アズファは気付かされた。

操縦をシューンに奪われているにもかかわらず、咄嗟に操縦桿をカ一杯引いてしまった。手はまだ震え続けている。視界が狭くなり、息が苦しい。激情と緊張が一気にアズファを襲い、冷静さを奪い去っていた。

操縦桿から手を離すこともできず、アズファはコクピットの先を疾走する『ビュエルヴァ』を見つめていた。

「多分、四中隊のは全部外れだ！

その分、俺たちの方に来てくれる。

いくら巡戦が素早いって、転舵しながら逆には逃げられめえよ！」

シューンが上げた雄叫びの先では、『ビュエルヴァ』が迫り来る砂雷をかわすべく、大きく左舷へと舵を切り続けている。

第四中隊が放った左舷から七本、右舷から一本の砂雷は、昨夜の汚名返上に燃える第三中隊の前に『ビュエルヴァ』を追い込みつつあった。

「舵そのまま！

大丈夫だ！

あんな遠くでぶつ放した砂雷が当たるもんか！

かわしたら、今度は面舵一杯だ！

見張り、砂雷の速度と針路報せ！」

『ビュエルヴァ』艦長ディナン大佐の大声が将官艦橋に響く。

「左舷の砂雷、艦尾に抜けます！

雷速、四〇ノット！」

「右舷の砂雷、平行してきます！

雷速、四〇ノット！」

見張りが快活な声で報告する。

このまま取り舵を切り続ければ、左舷からの砂雷はすべて艦尾を抜けていく。

右舷の砂雷とは平行しているが、砂雷の方が圧倒的に速いため、間もなく『ビュエルヴァ』を抜き去るはずだ。

いかに戦艦より舵の効きが良いとは言っても、基準排砂量二万七

六五〇トンの巨体が即針路を変更できるはずはない。ましてや全力で転舵している状況で逆舵を当てれば、下手をすれば舵自体が破損する。

情性である程度滑ることを考慮して、転舵の命令を下さなければならなかった。

「右舷見張り、砂雷が並んだら報告しろ！」

艦尾に追いついたときと、艦橋に並んだときだ！」

デインンは伝声管に怒鳴り込む。

「砂雷、艦尾に追いつきました！」

併走しますす！」

「舵戻せ！」

中央！」

左推進器、全力前進！」

右推進器、全力後進！」

見張りの絶叫を受け、デインンは航海長に変針を命令する。

全力で回転していた右舷推進軸への動力が一旦切られ、逆向きの回転が加えられる。

デインンは左舷の砂雷をすり抜けさせ、右舷の砂雷が『ビュエルヴァ』を追い抜いた直後を狙って、右舷から迫り来る六型陸攻八機に艦首を正対させるつもりだった。

新鋭戦艦の艦長ポストは魅力的だが、デインンは長く乗り慣れた『ビュエルヴァ』を愛していた。

厳しい訓練の結果、デインンは『ビュエルヴァ』の癖を完全に掴み、自身の手足のように動かせるようになっていた。

部下将兵を鍛えるだけでなく、自身にも厳しい操艦訓練を課していた。

「右舷の砂雷、艦橋に並びます！」

「面舵一杯！」

両舷、全速前進！

右舷対空戦闘！

すべて叩き落してやれ！」

推進器を逆回転させ、軽く面舵を切りつつ、砂雷が艦橋と並ぶタイミングで面舵を一杯に切れば、舵が効き始める頃には砂雷は『ビユエルヴァ』を追い抜いている。

そして、その頃には左舷の砂雷も、艦尾をすり抜けているはずだった。

「左舷後部の砂雷、接近します！」

見張りの絶叫に絶望の響きが加わった。

全てが読みどおりいくとは限らない。

それは覚悟の上だ。

砂雷の回避は、賭けでもある。

賭けに敗れたならば、艦尾を砂雷に挟まれ、すぐ近くの砂海面をのた打ち回る『ラバナスタ』と同じ状況になるだけだ。

「対衝撃防御！」

それだけを命じると、ディナンは右舷の六型陸攻を睨み据えた。

当たったときはそれまでだ。

だが、今は当らないことを前提に、右舷から迫り来る編隊への対処をしなければならぬ。

しかし、仮にすべての砂雷を回避しきったとしても、右舷の編隊はもうすぐそこまで来ていた。

間に合わないか。

ディナンが口の中で小さく呟いたとき。

「左舷の砂雷、すべて艦尾を抜けました！」



「右舷の砂雷、本艦を抜きました！」  
歡喜の報告が左右両舷から上がり、将官艦橋に歡声が上がる。

デイナンがマイクを取り、高声放送で砂雷回避を全艦に伝えようとした瞬間、右舷から見張りの絶望的な絶叫が湧き上がった。

「右舷の敵編隊、砂雷投下！」

「発『ビュエルヴァ』、宛関連友軍全艦艇。我敵機の雷撃を受けつつあり、至急空軍の援助を乞う、位置一四三NYTW二二X〇九！  
急げ！」

デイナンが伝声管に怒鳴り込む。

ここまで艦隊の位置を知られまいと魔通を封鎖していたが、戦闘突入後もマスファイから解除の命令が下されることはなく、すべての艦が律儀にそれを守っていた。

だが、これ以上敵機が増えては『ラバナスタ』や『ビュエルヴァ』が撃沈されることはないにせよ、甚大な被害を受けかねない。今のところ敵機は補助艦艇に目もくれず、主力二艦に突撃してきているが、もし矛先を変えられたら防御装甲の薄い駆逐艦など砂雷一発で轟沈してしまう。

主力二艦が重大な被害を受け、補助艦艇を沈められてはマーレイヤの防衛など夢のまた夢だ。

デイナンは独断で魔通封鎖を破ったのだった。

「逃げる！」

少尉、後は任せませずせ！

練習だ！」

投雷後、『ビュエルヴァ』の艦橋直上をフライパスしながら、シューンは操縦をアズファに戻した。

「砂雷は!？」

操縦桿を力一杯引きながら、アズファは首を捻り自分の機が放った砂雷の行方を見ようとす。

強烈なGが身体を締め付け、腕は鉛のように重くなるが、アズファは砂雷が気になって仕方がない。

「余計なことを考えるな!

今は逃げることだけ考えろ!

砂雷なんざ、見張りに任せとけ!」

シューンがアズファを怒鳴りつける。

下士官が新米とはいえ少尉を怒鳴りつけるなど、決して許される振る舞いではない。

だが、このときふたりは師弟の関係に戻っていた。

「砂雷命中!

砂柱を二本確認!」

見張りの声が響き、一瞬機内に歓喜の輪が広がった。

「喜んでるんじゃないねえ!

喜ぶのは基地に帰ってからだ!」

シューンの怒鳴り声に喜色は一気に打ち消され、眦を決してアズファは蒼穹を見据えなおす。

高度四〇〇〇メートルまで一気に駆け上がり、アズファは『ビュエルヴァ』を見下ろした。

眼下には、右舷の二ヶ所から黒煙を上げながら、砂上をのたうつ巨艦の姿が見える。

「二本じゃ撃沈までは無理か。

残念だけど、あとは第三航空部隊に任せましょう。

「一型陸攻の晴れ舞台だ」

シューンがいつもの調子に戻りアズファに声をかけるが、アズファに答える余裕はない。

対空砲火から逃げ切り、あとは基地に戻るだけとなった今、改めて恐怖が湧き上がっている。

「少尉、しっかりしてください。

まだ、これから何度もやらなきゃいけないんです。

ほら、帰りますよ」

歯を鳴らして震えながら涙を止められないアズファに、シューンが少しだけ易しい口調で言う。

焦点の定まらない目で頷いたアズファが、機首を北へ向けた。

今は戦場特有の高揚感に包まれているが、いずれ戦友の死を思い返し激情が襲ってくるはずだ。戦争である以上、どこで戦死するかわからない。すでに覚悟を決めていたはずだが、訓練と実戦は違うことを思い知らされた。僅かでもタイミングが狂っていれば、撃墜されたのはアズファ機だったかもしれないし、アズファが操縦していたら砂海に突っ込んで無駄死になっただけかもしれない。

撃墜された機体は、一機だけ『ビュエルヴァ』の艦尾を右舷から抜けようとしていた。

あの位置は、第四中隊第三小隊の三番機だったように見えた。

機体番号から見るに、おそらく若いパイロットだったのだろう。

アズファや若い見張りたちと、同期かそれほど年が離れていないものである可能性はかなり高い。

誰が撃墜されたかは基地に戻れば判明するが、それを聞いたときに正気を保っていられるか、シューンにはそれが心配だった。

「右舷中央の砂雷当ります！」

見張りの悲鳴が響き、直後大音響と共に『ビュエルヴァ』の巨体が痙攣するように震え、メインマストを遙かに越える砂柱が右舷中央部と後部に相次いでそそり立つ。

『ビュエルヴァ』は一瞬砂面から飛び上がったように見えるほどの衝撃を受け、面舵を切ったまま行き足が急激に鈍り始める。

命中個所に近い機銃座の兵たちが、崩れ落ちてきた砂柱に巻き込まれ、一瞬で何人も艦上から姿を消した。砂雷の命中角度が浅く、バルジを突き破っただけで分厚いバイタルパートを撃ち抜くには至らなかったが、大量の砂は『ビュエルヴァ』の艦内を確実に侵していった。

「左舷に注砂！」

傾斜を食い止める。

航海長、とにかく走れ！

転舵しながらだ！

副長、被害状況報せ！

大至急だ！

魔通班、どこかから返答はないか！？

もし、長官が文句を言ってきたとしても無視しろ！」

砂雷命中の衝撃から立ち直ったディナン艦長が、伝声管に怒鳴り込み、艦内通話の受話器を取り叫んでいる。

幸い弾薬庫の誘爆のような致命的な被害は生じていないが、『ビュエルヴァ』が深手を負ったことは間違いない。戦艦に比べ巡洋戦艦の装甲は薄く艦も細長いため、バルジにそれほど余裕があるわけではない。これ以上砂雷を叩き込まれたら侵砂量に耐えきれず、さすがに沈没しかねない。

ダメージコントロールチームが補修材を抱え、必死の形相で被雷個所に駆けつける。

だが、雪崩れ込んでくる砂の勢いは隔壁の扉を打ち破り、ダメコンチームを飲み込んでいく。至近弾の炸裂と、転舵を繰り返す艦の機動は砂圧の増大を招き、ダメコンチームの奮闘を嘲笑うかのよう  
に侵砂量は増える一方だった。

侵砂に埋め尽くされた隔壁の扉を太い角材で補強していた班長が、扉を通して響きいてくる戦友の断末魔に混じって不気味な軋みを聞いた。

重い衝撃音が艦底から伝わった瞬間、扉のビスが弾け飛び、砂が隙間から吹き出してきた。

「ダメだ！」

全員退避！

早く逃げる！」

扉が砂圧にぶち抜かれる前に班員を逃がさなければ危険と判断し、班長は工具を放り出して背後の扉に飛び込んだ。

後から班員が着いてくることを確認する余裕もなく、いくつかの隔壁を駆け抜ける。

背後から扉がぶち破られる破壊音と大量の砂が雪崩れ込む轟音が響き、逃げ遅れた班員の悲鳴が食いちぎられる。

扉の向こうにまだ数人が残っているにもかかわらず、班長は必死の形相で扉を閉めた。

心の中で取り残された班員に十字を切り、溢れる涙を堪えようと  
もせず渾身の力で扉をロックする。

「溶接しろ！」

補強材を持って来い！

ここをぶち抜かれたら沈むぞ！」

鬼の形相で班長は叫ぶが、仲間を見捨てきれない班員は動くことが  
できずにいた。

「班長、何を!?」

「まだ扉の向こうに」

「速くしろ!」

俺だって……俺だって、こんなことはしたくないんだ!

だけどこの艦を沈めるわけにはいかねえ!

速く!

速く!

速くしろっ!」

班長は血の涙を流しながら、縋り付いて来た班員を殴り飛ばし、自らが締め切った扉に拳を渾身の力で叩き付ける。

許してくれ。

艦を救うにはこうするしかなかったんだ。

でも、誤ろうにもお前たちは天国、俺は地獄だ。

俺が地獄で責められる様を、お前たちは天国から嘲笑っていてくれ。

班長が心の中で呟いたとき、砂圧に耐えかねた扉が弾け飛んだ。

もう一度逃げるの形に口を開けたままの班長を飲み込んだ砂は、

驚愕と恐怖に表情を染め上げた班員たちをなぎ倒し、隔壁内を埋め尽くしていった。

「第三波、接近します!」

絶望的な見張りの報告が届いた。

「諦めるな、まだ俺たちは負けたわけじゃない!

両舷、対空戦闘!

一機たりとも生かして返すな!

射撃開始!」

サピエント大東砂海艦隊のすべての艦上に同じ命令が響く。

攻撃隊から見過ごされた形になった駆逐艦の艦上では、兵たちが憤怒の表情で機銃を撃ち続けている。

これ以上、一発たりとも投弾投雷させるものか。

俺たちの誇りをこれ以上傷付けさせてたまるものか。

視線が熱を持つならば、ソルの機体は一機残さず炎に包まれるのではないか。そう思わせる気迫だった。

もちろん、深手を負ったからといって、『ラバナスタ』も『ビュエルヴァ』も戦闘を放棄してなどいない。

舷側を朱に染め上げ、射撃可能な砲すべてを振りかざし、突入してくるソルの機体に射弾の雨を降らせている。

だが、艦の傾斜は刻々と増大し、正確な照準ばかりでなく、射撃能力そのものを奪い去っていく。

一三時四六分、バラバ空軍が展開するマーレイヤ第五飛行場は大混乱に陥っていた。

ソルの空襲を受けたわけでも、空襲が迫っているわけでもない。

だが、滑走路に戦闘機が敷き並べられ、エンジンの暖機運転が続けられている。

飛行場の隅に建てられた掘っ立て小屋のような司令部では、二人のパイロットたちが緊張を隠せない顔で整列している。

二日前に勇躍マーレイヤ軍港を出航していったサピエント大東砂海艦隊は、今頃はソルの輸送船団と護衛艦隊を蹴散らしていると思っていた。ここにいる全員が、例外なくそう信じていた。それにしても勝利を高らかに謳い上げる魔通が来ないと訝しむ者が出始めたとき、飛び込んできたのがディナン『ビュエルヴァ』艦長からの救援依頼だ。その後には被害状況を継げる魔通が、悲鳴のような勢い

で何通も飛び込んでくる。

一〇分後、バラバ空軍マーレイヤ派遣戦闘機隊第四五三中隊の一機は、後ろから蹴り飛ばされるような勢いで蒼穹へと駆け上がった。いった。

「畜生、間に合ってくれ。」

今出せる戦闘機はこれしかないんだ。

あっちが戦闘機を出してないならこれでも充分なはずだ。

間に合ってくれ。」

司令部の窓から戦闘機隊を見送りながら司令官が、戦闘機隊の先頭を飛行しながら第四五三中隊の中隊長が、ほぼ同時に同じことを呟いていた。

一三時五〇分、第三航空部隊第一中隊雷装一型陸攻四機、第二中隊三機が『ラバナスタ』に突入してきた。

既に行動の自由と射撃能力の大半を奪われた『ラバナスタ』に、単艦で敵機を排除するだけの力は残されていない。護衛の駆逐艦が身を挺して一型陸攻と『ラバナスタ』の間に割り込むが、一型陸攻は軽快な機動で駆逐艦の側をすり抜けていく。

駆逐艦もただで通すつもりはなく、追い続けるように射撃を続行するが、一型陸攻の動きを追尾できない。その上、いつまでも射撃を続けていては、『ラバナスタ』に射弾が命中しかねなかった。

歯軋りをして悔しがる駆逐艦長を尻目に、七機の一型陸攻は『ラバナスタ』に雷撃を敢行した。

投雷を終えた一型陸攻が『ラバナスタ』を飛び越えざまに機銃掃射を加えていく。

『ラバナスタ』の艦上に火花が飛び散り、鋼材が引きちぎられ、



遮蔽物のない機銃座の将兵がなぎ倒される。七機が一気に加える機銃掃射は、『ラバナスタ』の艦上構造物をひとしなみに飲み込んだ。

「長官！」

将官艦橋の前を飛び抜けた一型陸攻の旋回機銃が、自身に向かって火を噴く瞬間をマスフィは見た気がした。

咄嗟に航空参謀がマスフィに覆い被さり、その身で機銃弾を受け止める。短い呻きを残し、航空参謀の身体に機銃弾が食い込み、周辺機器を破壊した。

「航空参謀！」

マスフィが崩れ落ちる航空参謀の身体を支え、将官艦橋の床に横たえた。

「長官、ご無事でしたか？」

苦しそうな意識の中、航空参謀が問いかける。

「なんて真似をするんだ。

こんな無能者の身代わりになるなど……

君たちには、この戦訓を持ち帰り、今後に活かすという重要な使命があるというのに。

時代の趨勢を読み違え、古い考えに固執する無能者こそ、新しい兵器に打ち倒されるべきだったのだ」

マスフィがそこまで言ったとき、ほぼ同時に右舷の艦腹に砂雷が四本命中した。

『ラバナスタ』の全身を衝撃が貫き、砂雷の炸裂音と金属的な破壊音が同時に轟いた。

情性で直進を続けていた『ラバナスタ』の行き足が、砂雷命中の直後からみるみる衰える。

やがて、黒煙を吹き上げながら『ラバナスタ』は完全に停止し、左舷への傾斜を深めていった。

『ラバナスタ』から西に五キロ離れた砂海面では、『ビュエルヴァ』が完全に沈黙していた。

対空機銃や高角砲、ポムポム銃は天を睨みすえているが、それが火を噴く気配はまったくない。

数分前に、三航空部隊第一中隊五機、第二中隊六機、第三中隊九機が、動きが鈍くなった『ビュエルヴァ』に襲い掛かり、左右舷に計五本砂雷を命中させていた。

既に二本の砂雷を受け、大量の侵砂を艦内に飲み込んでいた『ビュエルヴァ』は、一型陸攻が放った砂雷を解することはできなかつた。機械室や発電機室の大半を使用不能に陥れられ、ダメコンチームの大半が戦死した状況では、侵砂を食い止めることも艦の傾斜を回復させることも不可能だ。

轟音と共に艦内を侵す砂に、取り残された機関兵や身動きの出来ない負傷者が飲み込まれ、艦内区画をひとつ、またひとつと砂が埋めていく。

既に退艦命令が下されたのか、砂雷によってこじ開けられた破口から離れた位置にカッターの残骸や甲板の破片といった木材が放り投げられている。救命胴衣を膨らませた将兵が舷側から身を躍らせ、少しでも浮力のある物に取り縋ろうと必死の形相で砂を掻く。

上空にはまだ一型陸攻や、戦況を確認するためにこの空域に残ったケッティの六型陸攻が飛行を続けている。

そればかりではなく、爆装した一型陸攻も突入の機会を窺っている状況だ。

だが、沈み行く『ビュエルヴァ』にそれ以上の攻撃を加える機体は一機もなく、救助を求める将兵に機銃掃射をかける機体もなかつ

た。これ以上攻撃することは爆弾や機銃弾の無駄と考えているのか、それとも敢闘した勇者を必要以上に殺すことは忍びないと考えているのか、砂面をのたうつサピエント将兵に解るはずもない。今はとにかく『ビュエルヴァ』から少しでも離れ、沈没の際に発生する渦の巻き込まれないようにすることが先決だ。

駆逐艦が救助に向かっていているが、『ビュエルヴァ』の転覆に伴う主砲弾の誘爆に巻き込まれることを恐れてか、一定の距離以上には近付いてこない。

砂面上の将兵は、自力で駆逐艦まで辿り着かなければならなかった。

その状態で、敵機が攻撃を仕掛けてこないならそれに越したことはない。

敵の心情など、嘆息する余裕は『ビュエルヴァ』の乗組員には欠片もなかった。

だが、次の瞬間、一機の一型陸攻が駆逐艦に五〇〇キロ爆弾を投下する。

駆逐艦は事前に投弾を予期していたのか、舵を切り、一型陸攻の下に潜るように針路を変えた。甲高い落下音を響かせ、五〇〇キロ爆弾が駆逐艦に向かって落下していく。砂面上の将兵が固唾を呑んで見守る中、五〇〇キロ爆弾は砂面を抉り、盛大な砂柱を上げた。

砂を通して重い衝撃が将兵に伝わるが、それで死傷者が出ることもなく、駆逐艦が被害を受けることもなかった。

将兵たちは、声の限り上空の一型陸攻に罵声を浴びせ続けている。そこへ、悲痛な叫びが上がった。

「沈む！

『ビュエルヴァ』が！

俺たちの『ビュエルヴァ』が沈んじまうー！」

ほとんどすべての将兵が『ビュエルヴァ』の方に向き直り、それ

それができる最大限の努力を払って沈み行く艦に敬礼した。

沈没に際して発生する渦が将兵を飲み込み、砂海底への道連れにするが、ほぼ水平を保ったまま『ビュエルヴァ』は艦尾から沈んでいく。転覆し、弾薬庫の主砲弾を誘爆させて将兵の巻き添えが増えることを防ぐような、無機物の塊であるはずの艦に意志があるかのような最後だった。

一四時三分、世界で最も優美な艦影を持つと賞賛されたサピエント砂海軍巡洋戦艦『ビュエルヴァ』は、本国から遠く離れた西部大東砂海で長い艦歴の終焉を迎えた。

「『ビュエルヴァ』沈没！」

生存者の救助に向かった駆逐艦から、『ラバナスタ』に報告が届く。

『ラバナスタ』は、『ビュエルヴァ』が沈んだ後も、頑強に沈没することを拒んでいた。

「おのれ、我が半身をよくも……」

呪詛にも似た低い地鳴りのような声がマスフィの口から漏れる。

戦いに敗れたことは自覚しているが、それでも感情は納得などしていない。

上空を乱舞する一型陸攻と六型陸攻をマスフィが睨みすえたとき、第一航空部隊の爆装六型陸攻八機が『ラバナスタ』に五〇〇キロ爆弾を投下した。

既に行き足を止められた『ラバナスタ』に、これを回避する力はない。艦の周囲に砂柱がそそり立ち、六本まで数えたときに艦尾の方から大きな衝撃が立て続けに二度伝わってきた。

将官艦橋からは見えないが、艦の後部に爆弾が直撃したようだ。

今更何を壊されたからといって、艦の修理を気にするような状況ではないが、マスファイには命中箇所周辺に配置された将兵の安否が気になっていた。

高度三〇〇〇から投下された五〇〇キロ爆弾は、艦尾に一弾命中し、そこを無秩序な鋼材の堆積場に作り変えた。

もう一発の五〇〇キロ爆弾は、船体中央部の飛行機甲板のすぐ脇に落下した。最上甲板を貫通し内部で炸裂したため、飛行甲板は全体が盛り上がるほどの損傷を受けてしまった。爆風が艦内を駆け抜け、即席の救護室に設えられていた通称『シネマデッキ』に収容されていた負傷兵を飲み込み、瀕死の重傷を負っていた将兵にとどめを刺していく。

通常であれば慰安会の際には映画を上映や、慰問の芸人や歌手のステージに使われていた『シネマデッキ』は、本来の使い道とはまったく別の凄惨な空間に変貌してしまった。

「艦長、ここへ降りてきてくれんかね？」

「マスファイが伝声管を通してリッチを呼ぶ。」

「いかなさいました？」

待つほどもなく、リッチが対空管制室から降りてきた。

「この戦いは、我々の負けだ。」

こうなったらひとりでも多くの将兵を救うべく努力を払おうじゃないか。

「駆逐艦を呼んでくれ。」

「乗組員を移乗させるんだ。」

「落ち着いた声でマスファイは命じた。」

通信参謀が伝令に駆逐艦を呼ぶように命じ、リッチが総員上甲板

を命じる。

どの顔も、敗残者の表情ではない。これからまだ生き延びるとい  
う、困難な戦いが待っている。敵との交戦に敗れたからといって、  
指揮官が落ち込んでいてイは助かる将兵も助けられなくなってしまう。  
う。

「諸君は、ここまでこの頭の固い年寄りを善く補佐してくれた。

人生の終焉に当って、悔いのない戦いができたことを、わたしは  
砂海軍軍人として誇りに思う。

諸君のような優秀な幕僚を得ることができたことも、私の誇りだ。  
これが最後の命令だ。

何があっても諸君は生き延び、この戦訓を首相閣下にお伝えしろ」  
決然とした表情でマスファイは言った。

「長官、長官はどうされるのですか!？」

我々と一緒にご退艦ください!

長官は、まだサピエント砂海軍に必要な人材です!」

「『ラバナスタ』は、小官が責任を持ってお預かりいたします!  
ですから、長官は司令部の方々と共に、ご退艦ください!」

参謀たちやリッチがマスファイの真意を悟り、必死に翻意を促すが、  
マスファイは穏やかに首を横に振るだけだ。

駆逐艦の一隻が『ラバナスタ』の右舷に接舷し、乗組員の移乗が  
始まった。

『ラバナスタ』の傾斜は刻々と増大し、沈没までもう間がないこ  
とを知らせている。

だが、将兵たちは我先にと争う素振りはいま一つ見せず、負傷者  
から順番に駆逐艦への移乗を続けていた。

上空にはソルの機体がまだ残っているが、『ビュエルヴァ』沈没  
の際と同じように『ラバナスタ』に攻撃を加えることなく、状況を

見守っているかのようだった。

やがて、将兵の移乗が完了し、あとは司令部を残すのみとなった。

「長官、どうか、どうか我々をご同行ください。

長官を残して、どうして我々だけ退艦できませんようか。

一度くらい戦いに敗れたからといって、復仇の機会がなくなるわけではありません。

ソルやメデイエータには、『臥薪嘗胆』という言葉があると聞き及びます。

いまこそ、その言葉通りなのではありませんか？」

「長官はこの戦訓を活かす義務があると私は考えます。

女王陛下に顔向けができないなど、どれほどのことでしょう。

今一度、長官には大東砂海艦隊を率いていただき、私の仇を討っていただきたいのです」

血を吐くように参謀たちとリッチがマスフィを説得し続けている。

「諸君の心遣いは、何よりもありがたい。

だが、あえて言わせてもらおう。

ノー、サンキュー、と」

一切の迷いを見せず、マスフィは言い切って口を閉ざす。

「では、我々もお供いたします。

長官を見捨てて帰ったなど、それこそ誰にも顔向けができません

！」  
首席参謀がそう言ったとき、マスフィの大喝が将官艦橋に響き渡った。

「許さん！

貴官は何を思い違いをしているんだ！

私は命令したはずだ！

諸君は何があっても生き延びろ！

早くしないと、『ラバナスタ』の沈没に駆逐艦が巻き込まれる。せつかく助けた命を無駄にしないでくれたまえ。

諸官が今回の戦訓を活かし、ソルを叩きのめしてくれることを、私は何よりも望む。

以上だ。

行け」

マスフィの剣幕に首席参謀が仰け反った。

マスフィはすぐに口調をいつもの穏やかなものに直し、諭すように言つと席を立ち、見事な姿勢で敬礼した。

「長官……っ！」

首席参謀が涙ながらに敬礼し、それにすべての参謀が続く。

後ろ髪を引かれながらもすべての参謀たちが艦橋を降りたことを確認したマスフィとリツチは、将官艦橋から『ラバナスタ』の全部主砲塔を眺めながら佇んでいた。

「長官、本当によろしかったのですか？

私としては、まだご退艦いただきたく思っておりますが」

リツチは主砲塔から視線を外さず言った。

「この砲に活躍させてやりたかったな、艦長」

マスフィも主砲塔から視線を外すことなく答えた。

「まだこんなことを考えているんだよ、私は。

これじゃあ、生きて帰っても皆の足を引っ張るだけだ。

艦長には、付き合せてしまつて悪かったね」

真意を測りかねていたリツチにそう言つと、マスフィはリツチに向き直り、右手を差し出した。



「こちらこそ。」

未熟な操艦で『ラバナスタ』を沈めることになってしまい、申し訳なさで一杯です。

こんな下手くそが生き延びても、また艦を沈めるだけでしょう」  
リッチはマスフィの右手を握り締めた。

「では、私は少し休憩するよ。」

昨夜からまともに休息を取っていないのでね。

艦長と午後のお茶でもと思ったが、それもままならないほど疲れってしまった。

済まないが、しばらく私をひとりにしておいてくれたまえ」

マスフィはその姿を満足気にリッチの手を握り返す。

そして、将官艦橋を出て長官休憩室に入り、内側から鍵を閉めた。

「どうぞ、ごゆっくり。」

お茶はいずれ、またの機会にお願いいたします」

見事な姿勢でマスフィの背中を見送ったリッチは、同様に艦長休憩室に入ると拳銃を取り出した。

一四時五〇分、『ラバナスタ』左へ転覆し艦尾から沈没した。

その直後から駆逐艦の生存者救助という戦いが繰り広げられ、『ラバナスタ』の乗員一六二名中、一二八五名が救助された。

『ラバナスタ』が沈んでから間もなく、バラバ第四五三飛行隊の戦闘機が戦場に到着した。

一二機が出撃していたが、エンジンの不調から一機が引き返し、

一二機の戦闘機が生き残った駆逐艦の上空直掩を開始した。

「今頃着やがって、何のつもりだ！」

「さつさとソルの攻撃機を落としてこい！」

「ここにいたって、もうソルのサルどもは逃げちまったんだ！」

この役立たず！」

あらん限りの罵声がバラバの戦闘機隊に叩き付けられるが、もちろんそれがパイロットに届くはずもない。

駆逐艦上で拳を振り上げて振り回し、何かを叫んでいる様は、まるで待ち望んでいた救援を歓迎しているかのようにも見えていた。

やがて、『ビュエルヴア』の乗組員を救助し終えた駆逐艦が、『ラバナスタ』の乗組員を乗せた駆逐艦と合流し、マーレイヤへと針路を変える。

一一機の戦闘機は、ソルの機体を一機たりとも近づけさせまいと、尖った空気を辺りに振り撒きながら駆逐艦に追隨し始めた。

日没も近い一九時二〇分。

第二航空部隊の滑走路は煌々とした照明が焚かれ、将兵たちの喧騒に包まれている。

やがて、南の空に小さな影が見え、それがみるみるうちに大きくなり、六型陸攻の姿を現していく。

司令以下幕僚たちや将兵の歓声が上がリ、サピエント大東砂海艦隊発見の殊勲を挙げたケツティ機の帰還を歓迎した。

ケツティは、サピエント艦隊発見から『ラバナスタ』『ビュエルヴア』撃沈までその空域に留まり続け、二艦の沈没とサピエント艦隊の撤退を見届けて帰路に着いたのだった。

少しだけよろめくような機動でケツティ機が着陸した瞬間、基地はまた完成の渦に包まれた。

一度滑走路に停止し、駐機場に機体を移動させようと地上を走り

始めた数秒後、ケツティの機体は燃料が切れ、その場に停止した。

担架を抱えた救護兵だけでなく、手隙の将兵全員がケツティ機に向かつて走り出す。燃料を限界まで使うほどの飛行は、パイロットの体力と魔力を極限まで追い詰め、脱水症状を熾していてもおかしくない状況だ。一刻も早く機体から引きずり出し、水分を補給させなければ命に関わる。

救護兵が機体に取り付いたとき、扉が内側から開かれ、誇らしげな表情のケツティが顔を覗かせた。

二月一三日、一〇時三〇分。

一機の六型陸攻が、『ラバナスタ』と『ビュエルヴァ』が沈没した砂海域を目指して飛行を続けている。

三日前の砂海戦は、世界に衝撃を与えていた。

長らく論争の種であった『戦闘行動中の戦艦を航空攻撃で沈めることは可能か否か』に答えが出たのだ。それも戦艦一隻と巡洋戦艦一隻が沈没したのに対し、攻撃側は陸上攻撃機の未帰還三、その他帰投時に不時着大破した陸攻一というごく僅かな被害でしかない完全勝利だ。

一方的な戦いといってもよい結果だが、サピエント艦隊の戦意が乏しかったというわけではないことは、その場にいた両軍の将兵すべてが知っていた。

ひとつ間違えれば、戦場に散ったのは自分だったということも、誰もが理解している。

「もうすぐですよ、少尉」

順調に飛行を続ける六型陸攻の操縦席で、シューンがアズファに怒鳴った。

エンジンの爆音が機内を満たしているため、すぐ横であっても怒

鳴らなければ声は聞こえないからだ。

「はい。」

では、操縦をお願いします」

そう言うとアズファは操縦システムをシューンに切り替え、席を立つて機体の後部へと移動する。

「了解！」

落っこちたりしないでくださいよ。

見張り員、命綱をしっかりとっておけ！」

シューンは機体を安定した機動で超低空に導き、後ろを振り向くことなく見張りに命じる。

快活な復唱が返され、機体の扉が開けられる。

風が渦を巻いて機内に吹き込むが、シューンは僅かにぶれさせることもなく機体を操っていた。

「この辺りよね。」

じゃあ、それをちょうだい」

魔通員が両手一杯の花束を抱え、アズファの後ろに立った。

それを受け取ったアズファは、『ラバナスタ』の沈没した砂海面に花束を投げた。

風が花束を吹き散らし、砂海上に色とりどりの花が撒かれる。

扉を閉めたアズファは操縦席に戻るとしばし瞑目し、艦と運命を共にした将兵の魂に敬意を表する。

機体上昇し、水平飛行に移りアズファが目を開けると、操縦桿を握ったまま、シューンはまだ黙禱を捧げていた。

## 第29話 転戦

ハトーからソル本土へ凱旋する途中の二月一日、ナンクウ機動部隊は新たな命令を受けた。

連合艦隊司令部は、ハトーへの第三次攻撃下令を強行しなかった代わりとばかりに、帰路にあるミルドウィを空爆するように指令してきた。

「決死の大作戦を終わって、やっと帰途についたのに、こんな小さな島をついでにやって来いとは何たる言い草だ。

機動部隊を小僧の使い走り使いのように考えてもらっては困る」この命令を受け取ったとき、機動部隊旗艦空母『コッヴ』では、ナンクウ長官よりもカリユウ参謀長が憤慨していた。

「奇襲のけたぐりで、やっと横綱を倒したんだ。

そしたら、帰りに大根やねぎを買ってこいと言うのかね」

苦笑いの表情でナンクウが言った。

ナンクウ自身、連合艦隊司令部のやり方に対し大いに不満を抱いているが、カリユウの剣幕を見て逆に冷静さを取り戻している。

「ここで欲をかって空母を傷付けでもしたら、帰った後に何を言われるか解りません。

万が一、この魔通を敵が傍受して、何らかの攻撃があるのではと迎撃態勢でも敷かれたら、飛んで火にいる夏の虫です。

奇襲がそうそう何度も上手く行くわけがありません。

この指令は無視したほうがよいかと、私は考えます」

憤懣やるかたないといった勢いで、ジッソーが意見を言った。

「まあ、君の気持ちも解るが、あからさまに命令違反もできまい。

とはいってもこちらは魔通封鎖状態だ。

帰り道に追いつかれても困るからな」

ナンクウは航路をミルドウイに偏らせる事実を残すことで、攻撃の意志があつたことの証拠にするよう命じる。

その後、機動部隊は天候不良を理由として、ミルドウイ攻撃を見送った。

「つまり、ナルミ君は失敗した、ということだな？」

ミルドウイ攻撃を見送ってから三日後、悲報ともいつていい魔通を受けたにもかかわらず、往路とは打って変わって落ち着いた表情で、機動部隊司令長官ナンクウ中將が言った。

「はい。」

第四艦隊がコーセキオアシス攻略の任に当たっていましたが、未だ達成されておりません。

友軍の失敗を喜ぶわけではありませんが、現時点では失敗と判断して良いかと考えます」

ナンクウとナルミの過去にあつた経緯を知るカリユウ参謀長は、言葉を選びながら答えた。

コーセキオアシスは、オリザニア本土とネグリットやガルムといった植民地を結ぶ重要な中継地点だ。

僅か六・五平方キロメートルのちっばけなオアシスだが、オリザニア軍の中部大東砂海における重要な拠点のひとつとなっている。そして、その位置はソル側から見れば、ソル本土とソルが持つ南方信託統治領を結ぶ作戦線上に睨みを利かせているやっかいな存在だった。

ちっばけなオアシスには似合わない戦略上の重要性を認識してい

るオリザニア軍は、コーセキに砂海兵隊一個大隊を投入しているだけではなく、砲台を設置し要塞化を進めて防備を強化していた。二六四一年夏には滑走路も整備し、哨戒機能の強化に努めている。

ソル・オリザニア関係が決定的に破綻しつつあった一二月四日には、第八任務部隊司令官ハージイ中将率いる空母『リユカーン』が第二一砂海兵戦闘飛行隊の四F戦闘機一二機を輸送していた。

この輸送任務はハージイを腐らせることになってはいたが、結果的にハトー空襲から空母部隊を救うこととなっていた。

ソルとオリザニアが開戦した頃には、守備隊の将兵五二二名の他にも、バックアップを担当する民間人一二三六名がコーセキに配備されている。主要な砲台はコーセキに南西端の岬とオアシス西部、北部岬合計四箇所、そばにある小さなふたつのオアシスにはそれぞれ二箇所配され、機銃座も数箇所据えつけられていた。

「いいではないですか。」

ナルミさんの主張が実証されたんですから」

『コツヴ』艦長が楽しそうに言った。

「よくはないだろう、艦長。」

友軍に被害が出ているんだ。

いくら気に入らないからといって、その言い草は感心できんぞ」  
しかめっ面になったカリユウが言う。

もし、ここが酒場であれば、たちどころに殴り合いの喧嘩に発展しかねない発言だ。

「いやいや、私はナルミさんは好きですよ。」

含むところもないですし。

ですが、ああも簡単に斬り捨てられちゃったら、嫌味のひとつも

言いたくなるってもんです」

頭を掻きつつ、『コッヴ』艦長は言った。

艦長が言いたいことは、ナルミが提唱していた『空母不要論』だった。

ナルミが航空本部長の職にあつた二六四一年一月二二日、当時の砂海軍大臣キューセン大将に提出された『新軍備計画論』は、航空主兵論者たちにとっては概ね歓迎できる内容のものだった。

戦艦同士による砂海上艦隊決戦など決して生起しないと切つて捨て、砂海上のオアシス争奪戦が主流になると明確に言い切つたものだ。そのためには金のかかる『アンギラス』級戦艦の建造など即刻取りやめ、浮いた資材と『アンギラス』級を解体した資材でより多くの航空機と潜砂艦を建造すべきと建言していた。

だが、ナルミはオアシス防衛のための主兵力は、一発の爆弾命中で運用できなくなるような脆弱性を持つ空母は頼むに能わずと、これもまた明確に切つて捨てていた。その上で基地航空部隊を増強し、来るべきオリザニアとの戦争に備えるべしというのがナルミの主張だった。

そして今回のコーセキ攻略戦において、皮肉にもナルミが送り込んだ攻略部隊はオリザニア基地航空隊に翻弄されている。

「まあ、私もだがな。」

魔通参謀、より詳細な状況を知りたい。

我々にどうしろと言っているのか、その辺りも含めてな」

しかめっ面から苦笑いに表情を変え、カリユウが魔通参謀に向き直る。

「はい。」

現在までに判っている情報を説明いたします」

魔通参謀がこれまでに入手した情報を、時系列順に説明を始める。



「ご存知のとおり、連合艦隊司令部としてはコーセキの重要性を認識してはおりました。

ですが、実際に攻略の計画を立案したのは、開戦が確実と軍部が判断した今年に入ってからです。

兵員の輸送が困難な騎兵軍は参加せず、砂海軍単独での作戦とされ、主に第四艦隊の艦艇や兵力が割り当てられました。

上陸作戦を実施するのも、砂海軍の陸戦隊です」

上級士官であれば周知の事実だが、情報の整理のために敢えてそこから話を始めた。

「そうだな。

第一艦隊はソル本土からそうそう離れるわけにもいかんし、第二艦隊は南方作戦で手一杯だ。

それなりに使える戦隊も、我々が連れてきてしまっているしな。

その点ではナルミさんには過大な戦域を押し付けてしまって、申し訳ないとは思っている」

腕を組んでカリユウが答える。

「はい。

第四艦隊には強力な艦艇は配備されておりません。

その割には広大な戦域を担当することになっていますので、ナルミ長官は当面コーセキとガラム植民地の攻略に全力を挙げる方針を取っています」

カリユウに対し頷き、魔通参謀は続けた。

ガラム植民地はオリザニアが持つ数少ない植民地のひとつで、ネグリットからハトーを繋ぐ重要拠点だ。

ソルが持つ南方信託統治領と本土を扼することができる絶好の位置であり、逆にネグリットとオリザニアの連絡を分断するためには、コーセキと合わせて絶対に落としておきたいオアシスだった。

「コーセキは我々とほぼ同時に攻撃を行っていたんだらう？  
ある程度奇襲は成功していたと思われるが」  
航空甲参謀のジツツーが口を挟んだ。

「はい。」

一二月八日の開戦と同時に攻撃を開始しています。

この間に傍受した魔通から整理した情報では、まず二一（ソ  
ル時間午前二時一〇分）、現地時間五時一〇分、第二四航空戦隊の  
六型陸攻三四機がコーセキを空襲しています。

この攻撃は飛行場と砲台に損害を与え、戦闘機七機破壊を確認し、  
一機を事故で喪失させること成功しました。

昼過ぎには攻略部隊がクワジオアシスを出航しています。

第二四航空戦隊は、翌二月九日に六型陸攻二七機で二度目の攻  
撃を実施しています。

さらに翌一〇日にも六型陸攻二六機で三度目の攻撃を実施してい  
ますが、激しい対空砲火と敵戦闘機の迎撃に遭い、一機が撃墜され  
ています」

結論はまだ先です、という意志を視線に込めてジツツーを見返し  
た後、魔通参謀は話を続けた。

「ナルミさんの戦下手は、ここでもそのままか」  
かねてよりナルミの戦術面での指導力に疑問を持っていたカリユ  
ウが呟く。

「攻略部隊は一〇日夜、コーセキ沖に到着しています。」

上陸隊形を整えたのですが、その日は砂嵐が激しく、攻略部隊の  
各艦は各々適当の地点から上陸用舟艇を発進させざるを得ませんで  
した。

そのなかでも、輸送船二隻が大発（大発動艇）を下ろすのに難航

し、下ろしたものの砂のうねりや突風による大発の破損や転覆が相次いでしまい、上陸は一旦見送られています。

この間〇〇二五（ソル時間午前零時二五分）、現地時間の午前三時二五分より、第六砂雷戦隊が艦砲射撃を実施しています」

カリユウの呟きに大きく頷いた魔通参謀は、表情を引き締めなおして説明を再開した。

大発動艇は、全長一四・八メートル、全幅三・三メートル、重量九・五トンの船体に、完全武装兵員であれば七〇名、物資であれば一トンの積載能力と、満載時八ノットで走る機動力を持つソル軍の標準的な上陸用舟艇だ。それが外砂海の荒々しい環境の中で、思わぬ脆さを露呈していた。

「〇一〇〇（ソル時間午前一時）、現地時間の午前四時、不用意に陸上砲台に近付いた駆逐艦に対して反撃を受けました。

そして、四機の爆撃機による空襲も受けています。

この空襲か砲撃で第六砂雷戦隊は、駆逐艦沈没一隻の損害を受けました」

魔通参謀の表情が僅かに歪む。

冷静に状況を報告しなければとの思いが、同期生の死を今この場では単なる事実として捉えさせている。

コーセキに到着までの攻略部隊は、幸先良い戦果報告のみを重視して油断しきっていた。

だが、オリザニア側は残存の戦闘機を爆弾が懸吊できるよう改装し、即席の戦闘爆撃機に仕立てるまでして攻略部隊を待ち受けていた。

もちろん、この事実をソルがこの時点で掴んでいるはずはない。

小オアシス沖で砲撃を行っていた駆逐艦の轟沈は、陸上砲台によるものと考えられていた。

いくら駆逐艦の防備が脆弱であろうと、戦闘機の『銃撃』くらいで沈むとは考え難いからだ。艦尾から艦全体に黒煙が広がり、二〇〇メートルに達する砂柱が吹き上がり、それが収まったときには駆逐艦の姿は砂海上から消えていた。その周辺には一旦降ろした大発が大量にうねりに翻弄され、艦が密集し身動きが取り辛いところに砲台からの砲弾が次々と着弾し、戦闘爆撃機は銃撃を繰り返した。

無視できない被害が積み重なり、攻略部隊はついに避退を決定した。

「撤退を開始しましたが、〇二四二（ソル時間午前二時四二分）、現地時間午前五時四二分、空襲により駆逐艦一隻が爆沈しています。信じられないことですが、航空攻撃は戦闘機の銃撃だけでなく、爆撃機も存在していたようです」

「なんだと、そんな情報は聞いてない！」

あのオアシスには、戦闘機と哨戒機、それに輸送機しかないはずじゃなかったのか！

努めて冷静を装う魔通参謀の声を、ジツツーの音が遮った。

改装戦闘爆撃機による戦果だが、最初からその存在を夢にも思わない第六砂雷戦隊からは、爆撃を受けての轟沈としてしか報告が上っていない。

改装戦闘爆撃機から投下された一発の一〇〇ポンド（約四五〇キロ）爆弾は、駆逐艦に命中した。

艦橋と一番煙突の半分、マストをひとまとめに吹き飛ばした一〇〇ポンド爆弾は、一瞬にして艦長以下艦橋に詰めていた首脳部を抹殺してしまう。だが、この駆逐艦を襲った災厄は、それで終わりではなかった。第二煙突後方の二番砂雷発射管を爆風が包み込んだ瞬間、正視に耐えない閃光が奔り、続いておどろおどろしい爆発音が辺りに響き渡った。

敵艦に叩き付けられるはずだった、三連装砂雷発射管に装填されていた六一センチ砂雷が、三本同時に誘爆を起こした瞬間だった。酸素砂雷に破壊力が多少劣るとはいえ、戦艦すら一発で行動不能に陥れることが可能な爆発力を、同時に三発、それも同個所に受けて旧式駆逐艦が耐えられるはずもない。

爆発の黒煙が収まったとき、駆逐艦の姿は砂上から消え失せていた。

「事実として認めるより他ありません。

情報は確実に期してはいますが、絶対はありません。

その後、輸送船一隻が戦闘機による機銃掃射を受け、搭載していた魔鉱石燃料を炎上させられています。

砂海上の状況も依然として悪く、時刻を改めての奇襲上陸の見込みも事実上不可能と判断した攻略部隊は、上陸作戦の中止を決定しました。

攻略部隊各艦は退却し、一月二三日、クワジオアシスに帰投しています」

そこまで言って魔通参謀は、一旦言葉を切る。

「それで、連合艦隊司令部は、我々にどうしろと言ってきてるのかね」

聞くまでもないという表情で、ナンクウは魔通参謀に発言を促した。

「はい。

連合艦隊司令部は、コーセキに対する航空攻撃を要請しています」  
魔通参謀は、ご想像の通りですという表情で答えた。その後、要請とはいえ事実上の命令ですがね、と小さく口の中で呟いた。

「長官、我々がそこまですることはありません。

ナルミ長官の持論の通り、コーセキは第四艦隊の基地航空兵力で叩くべきです」

強い意志を込めてカリユウが具申した。

カリユウは決してナルミの『空母不要論』だけに反発していたのではない。

それも多少はあるが、ナンクウがナルミに対して抱えているであろう過去の経緯を思い計つてのことだった。

機動部隊司令長官ともあろう者が、過去の経緯に拘って事実上の命令を無視するなど、決して許される振る舞いではない。

カリユウは、悪者になる決心を固めていた。

ナンクウは、カリユウの言葉を聞きながら、その原因となった昔を思い出していた。

ナルミは砂海軍省軍務局第一課長時代に、軍令部による『軍令部令及び省部互渉規定改正案』に激しく反対していた。統帥を一手に握りたいと企む艦隊派は、ナルミを最大の障害と認識した。当然のように『改正案』に決済印を押すように、陰に日向に露骨な圧力をかけていた。

その交渉相手が、当時軍令部に配属されていたナンクウだった。

「ナルミ、貴様いつたいどういふつもりで判を押さないんだ！」

血気盛んだったナンクウは、士官学校で一期下のナルミに対し、高圧的な態度で望んでいた。

「ナンクウさん、何度来てもダメなものはダメです。

これを通したら、オリザニアと戦争になる。

私はそんなものに判を押すわけにはいきません」

言葉こそ丁寧だが、書類の束を投げ返したときの態度は先輩後輩の間柄で許される範疇を越えていた。

「いつまでもそのままだと、殺すぞ、貴様」  
ついに堪忍袋の尾を切らしたナンクウが、地鳴りのような声を絞り出した。

「さあ、やるならやれ。」

そんな脅しで屈するようでこの職が務まるか！」

ナルミの大喝が部屋に響き、引き出しから遺書を出してナンクウに突きつけた。

「俺を殺しても、俺の精神は枉げられないぞ！」

たじろぐナンクウにナルミは追い打ちをかけ、その気迫に押されたナンクウは黙って部屋を出るしかなかった。

結局『軍令部令及び省部互渉規定改正案』は、皇族である当時の軍令部長の威光に屈し、ナルミを更迭する形で砂海軍省側が折れたが、ナンクウはナルミに対して良いところなくこの一見は幕を引いてしまったのだった。

「長官……？」

「長官！」

「あ、ああ、済まない。」

少し、昔を思い返していた」

瞑目したままのナンクウを訝しんだカリユウが声をかける。

「やはり、この命令も無視すべきかと……」

「いや、ナルミ君も困っているだろう。」

こちらはうまくいったが、向こうはコーセキひとつ取れなくては、ゴトムさんに合わせる顔もあるまい」

呆気に取られるカリユウやジツツを尻目に、ナンクウは断を下した。

ひとの好き嫌いに捕らわれて戦ができんようじゃ、『陸式』どもとなんら変わらないではないか。

第一次コーセキオアシス攻略戦は、ソル側の惨敗だった。

もちろん、これでコーセキ攻略事態が、中止になることなどあり得ない。攻略部隊の帰還を待つて、早速研究会が開かれ第一次攻略戦の反省とその対策について議論が重ねられた。

その中でも駆逐艦沈没の原因は、攻略部隊の帰還を待たずに検討が始められている。真つ先に搭載している砂雷、もしくは対潜用の爆雷に対する被弾または誘爆が疑われていた。それを受けた現地の攻略部隊は、突貫工事で残存駆逐艦や軽巡の砂雷と爆雷に断片除けを施した。

また、攻略部隊がたつた四機の戦闘機に翻弄されたことは、部隊の防空戦力の脆弱さが招いたと結論づけられた。だが、より強力な航空兵力が必要と判つても、空母を持たない第四艦隊が黎明期の作戦に護衛戦闘機をつけることは無理だ。

結局、事前の爆撃を入念に行うか、各艦が緊密に連携を取り、対空弾幕を濃密にするしか対処はないと判断された。

そして、攻略作戦が頓挫した主因として、上陸準備に手間取ったことが上げられた。

これを改善するため、大発を素早く降ろすための措置を講じた他、魔通機器の向上も図られた。それでも万全とは思えない攻略部隊指揮官は、大発が下ろせない状況は充分あり得ると考えていた。その場合には、砂海軍陸戦隊を乗せた哨戒艇を擱坐させ、揚陸させることを決心していた。

ろくな武装を持たない輸送船では、砂海岸からある程度距離を保つ必要があった。だが、砂海岸に敷かれた防御陣をある程度破壊す



るための武装を持ち、大発を搭載していない哨戒艇であれば、砂海岸にまで突入も可能だと考えてのことだ。

もちろん擱坐させた哨戒艇が、自力で還ることは不可能だ。敵兵力の制圧に失敗すれば、上陸させた陸戦隊もまた還ることはできない。

文字通り、決死の作戦だった。

これと平行して、第四艦隊参謀長ノシカ大佐は、空襲の危険性を排除するため、コーセキの残存機撃滅を連合艦隊司令部に依頼している。六型陸攻は急降下爆撃ができず、水平爆撃では精密な攻撃は不可能だ。滑走路を一時的に使用不能にはできても、戦闘機のすべてを地上撃破することは無理だった。急降下爆撃か、戦闘機の機銃掃射による攻撃がどうしても必要になってくる。

これを受けた連合艦隊司令部により、ハトー攻撃からの帰途にあるナンクウ機動部隊に対し、コーセキ攻撃に向かうよう命令が下ったのだった。

「第四艦隊司令部と直に打ち合わせてからやろう。

航海参謀、チュルツクへの航路を算定してくれ。

魔通参謀、ここまで来れば、傍受されて位置を特定されても大丈夫だろう。

ナルミ君宛と連合艦隊司令部宛に、我々は一旦チュルツクに向かうと知らせてくれ」

コーセキ攻略への協力は即断したナンクウだが、事前の打ち合わせは慎重に、且つ充分にするべきと考えていた。

一旦第四艦隊が司令部を置くチュルツクに入港し、各艦の整備を行い、死線を潜った搭乗員を始めとした機動部隊の将官に短くてもいいから休息を取らせたい。その上で関係将官と綿密な打ち合わせを行ってから、コーセキ攻撃に向かうつもりだった。

戦略上重要な作戦であることは充分すぎるほど理解しているが、

主任務以外で大切な搭乗員をただのひとりも失いたくない。ナンクウはそう考えていた。

魔通参謀にチュルツク寄港の旨を通告させたのは、そのためだ。

「ナンクウさんが来てから打ち合わせでは、コーセキ攻略はいつになるかわかりません。」

細かい打ち合わせは入りません。

とにかく、コーセキの航空兵力を潰していただきたい」

連合艦隊旗艦を勤める戦艦「アーストロン」の作戦室で、第四艦隊から派遣された作戦参謀が噛みつかんばかりの勢いで言った。

ナンクウ機動部隊からチュルツクで打ち合わせを行った上でコーセキ攻略に向かうという連絡を受け、一月一六日からの予定を急遽一日前倒ししてきたのだった。

これ以上コーセキ攻略が遅れては、快進撃を続ける砂海軍の中にあつて、第四艦隊の立場がますます悪くなるばかりだった。

「そういきり立つな、作戦参謀。」

君の立場も、君たちの気持ちも、我々は充分理解している。

ガラム攻略戦を終えた第六戦隊や、駆逐艦二隻、特設艦船、特別陸戦隊一個中隊を追加することにした。

ナンクウさんたちも、ハトーから休み無しというわけにもいかなかったらう？」

連合艦隊参謀長ガツキ中将が宥めるように言った。

普段の尊大な態度は影を潜め、とにかく事を荒立てまいと努めているようだった。

「ナンクウさんの機動部隊全艦が来る必要はありません。」

空母二杯もあれば充分です。

無理にチユルツクまで来ていたただかなくても、本土への帰り道の途中で分派していただければ結構です」

ナルミとナンクウの間にある過去の経緯を知る作戦参謀が、内心の焦りを隠しつつ言った。

ナルミとナンクウが顔を合わせれば、その後どんなとぼつちりを受けるか判ったものではない。あからさまな八つ当たりがあるとは思わないが、第四艦隊司令部の空気が悪くなることだけは確かだ。開戦以来、ソル軍は破竹の進撃を続けている。その快進撃の中にあつて、コーセキ攻略だけが躓きを見せていた。

心情的に艦隊派のナンクウに対して好感を持つ作戦参謀としては、司令長官の不機嫌に振り回されたくはなかった。

三日にわたる作戦会議の結果、一月一七日に第四艦隊より再度のコーセキ攻略命令が出される。

これに合わせて、ナンクウ機動部隊に『二〇日頃にコーセキを攻撃してもらいたい』との要望が出された。

「ゴトムさんは、かなり焦れているようですね」

連合艦隊司令部からの『要望』を受け、カリユウが呟く。

「まあ、仕方ないと思いますよ。」

他が破竹の快進撃。

コーセキ攻略だけが躓いているとあつては。

もともとナルミさんの戦下手は有名ですからな。

ここで汚名返上しておかなければ、将来がなくなってしまうからな

憐れんだような目を南の空に向け、ジッソーが応じた。

「ガラムに比べ、コーセキはハトーに近い。」

その分、戦力の増強もしやすかろう。ソルとハトーの中間に位置する要衝である以上、それなりの防備を固めているのだろう。

いくら奇襲でいくとはいえ、少々戦備が甘かったのだろうな」

ナンクウはせめて空母の一隻でも付けるべきだったと、第一次コーセキ攻略の敗因を推察している。

ソルが保有する制式空母六隻はすべてナンクウの手元に集められていたが、第一艦隊には軽空母『リッガー』と高速魔鉱石補給艦からの改造空母『ザンボラー』が残っていた。戦前には練習空母となっていた『キーラ』は、ネグリット方面の攻略部隊に編入されている。

第一艦隊が抱え込んでいる空母のどちらか一隻を、コーセキ攻略のために第四艦隊に編入しておくべきだったと、ナンクウは今更ながら考えていたのだった。

「しかし、帰路の燃料補給を考えますと、全艦隊でコーセキに行くのは、ちよいとばかり難しいのではないですか？」

カリユウが、大事なことを忘れては困りますとばかりに、注意を促す。

「確かに、行きは天候に恵まれましたが、今は砂嵐のまっただ中。

魔鉱石の補給も、これではままなりません。

それに、いくら戦力を増強した可能性があろうと、コーセキの基地規模はハトーとは比べ物にならないほど小さなものです。

二航戦だけ分派すれば、充分こと足りるのではないでしょうか」

ジツツーは彼我の戦力をざっと計算し、ナンクウに意見を具申した。

「そうだな。

私が行ったのでは、ナルミ君もいろいろやり辛かろう。

全艦で行けとも言っていない。

「ご苦労だが、二航戦に行ってもらおうとしよう。

『デットン』でも連合艦隊司令部からの『要望』は傍受しているはずだ。

細かいことは、オーキ君に任せておけば間違いあるまい」

ナンクウはジツツの意見を容れ、二航戦の分派を決定し、残りは一足先にソルへ帰投すると命令を下した。

攻略部隊は二二日朝四時三〇分、再度出撃した。

同じ頃、機動部隊から分派された第二航空戦隊は、コーセキ西方三〇〇海里の地点に到達していた。

「今回はボクが先だね」

『デットン』の飛行甲板に敷き並べられた九型艦上爆撃機の暖機運転を眺めながら、ファルが言った。

「あんまり気負っちゃダメだよ、ファル」

今にも飛び出しそうなファルにルックウが声をかける。

「私の分も頑張ってきてね。」

今回は雷装の出撃はないから、私はお休みだからね」

言葉とは裏腹にけしかけるような視線でエルミが言った。

「大丈夫だよ。」

明日はルックウが行く予定だろうけどさ。

今日のボクたちの攻撃で、きれいさっぱり片付いちゃうかもしれ  
ないよ」

悪戯っぽくファルは笑い、搭乗員待機所を出て行った。

「大丈夫かなあ。」

ファルの背中を見送ったエルミが、不安げに呟いた。男なんかに負けるもんかと、常日頃から大戦果を挙げることを夢見ている戦友をエルミは心配していた。

「何心配してんのよ。」

水平爆撃隊の任務は滑走路の破壊でしょ。

ファルたち急降下爆撃隊は、対空機銃座と残存鑑定の撃滅。攻撃目標は被ってないから」

呆れ顔のルツクウがエルミに言う。

もちろん、表情はわざと作ったものであり、視線には笑いが含まれていた。

「何言ってるの。」

私はファルが無茶しなきゃいいって」

そこまで言って噴き出したエルミの声に、飛行長の高声放送が重なった。

「攻撃隊が発進する。」

配置において、適宜見送れ。

手空き要員は、飛行甲板にて帽振れ」

二度繰り返された放送に、エルミとルツクウは搭乗員待機所を出て行った。

ふたりが飛行甲板に上がったとき、盛大な帽振れに送られて最後の零型艦上戦闘機が『デットン』から発艦した。

続いて二五〇キ口爆弾を抱えた九型艦爆が、ゆるやかに滑走を始める。

ふたりは腕が千切れんばかりに作業帽を頭上で振り、戦場に身を投じて行く戦友たちを、その機影が見えなくなるまで見送っていた。

「命令！」

速やかに爆撃を受けた滑走路を修復し、明日の敵襲来に必要な準備を整えよ！」

コーセキの基地に快活な命令と復唱が飛び交い、作業服に身を包んだ男たちが走り出した。

何台もの重機がうなりを上げ、二五〇キロ爆弾に抉られた滑走路の穴を塞ぎ、地均しが終わるそばから無数の穴を穿たれた鉄板を地面に敷いていく。

掩壕からは無傷で空襲をやり過ごした二機の戦闘機が引き出され、整備兵が入念なチェックと最後の調整を始めている。

「よくしのいでくれたな。

明日は飛ばせてやるから、いい子にしてくれよ」

二機の戦闘機に取り付いた整備兵が、機体を撫でながら声をかける。

「部品のストックも心許ないからなあ。

万全にしてやれなきゃ飛ばせてやるわけにやあいかなのだよ。

まあ、いずれにせよ、今日の整備が間に合わなかったのは、勘弁してくれ」

整備班長が機体とパイロットに謝った。

「大丈夫だ、整備班長。

万全の状態ですら、あのソルの戦闘機に勝つのは難しいらしいじゃないか。

焦って飛んで、一機も落せず撃ち落されたんじゃ、それこそこいつに申し訳ない。

明日、どうせやつらはまた来る。

今日は対空砲火を叩き、明日滑走路を叩くつもりだろう。

油断して来たやつらに一泡吹かせてやるうじやないか」

パイロットは不敵な笑みを浮かべて、整備班長の肩を叩いた。

たった二機で迎撃に飛び立って、ソルの恐るべき戦闘機相手に帰ってこられるとは、どんなオプチミスであっても考えてはいない。だが、ふたりのパイロットは、怯む様子も脅えた様子も欠片も見せていなかった。

「単発機だけの空襲もあったな、今日は」

コーセキの守備隊指揮官が、ソルの機体を見送りながら言った。

二航戦による第一次空襲は、零型艦上戦闘機一八機、九型艦上爆撃機二九機、七型艦上攻撃機二機による猛攻だった。

これに呼応して、クワジオアシス航空隊の六型陸上攻撃機二七機もコーセキを空襲している。

「はい。」

いくらソルの航空機の足が長いといっても、ここまで飛んで来られる単発機は存在しません。

これは技術の限界を超えています。

間違いなく、艦上機です」

副官が同じように空を睨みながら答える。

「ハトーの仇敵がそこまで来ている。

奴らはまた来る。

そのときには、オリザニアに対して卑怯な振る舞いをした者がどのような末路を辿るか、たっぷりと教育してやるうじやないか。

ハトーからの増援もあと数日で到着するはずだ」

不敵な笑みを浮かべた指揮官は、手持ちの戦力を擦り減らし、今にも陥落しそうなオアシスに取り残されたという顔ではなかった。



「はい。」

おそらく、いえ、間違いなく奴らは油断してくるでしょう。

そのときには」

副官も同様に闘志に溢れた凄惨ともいえる笑みを浮かべている。

「ここさえしのげば、ハトーから増援が到着する！

状況は厳しいが、もう一踏ん張り頑張ってくれ！」

各級指揮官が同じような言葉を部下に送り、袋叩きにされている守備隊の士気を鼓舞していた。

事実、ハトーからは奇襲を逃れた空母が、艦載機を満載にしてコーセキを目指している。

苦しい戦いを強いられている戦友を救うため。そして卑怯な騙し討ちをしたソル機動部隊に対する復讐の機会を得るために。

「じゃあ、行ってくるね、エルミ、ファル。

滑走路を完全に潰して、攻略部隊の露払いをきっちり勤めてくるよ。」

そういえば、昨日は迎撃機が上がってこなかったんだって？」

いつもと変わらぬ落ち着いた笑顔で、ルックウは七型艦攻が暖機運転完了を待っている。

しかし、笑顔の裏にはまだまだ緊張が残っていることを、エルミもファルも気付いている。

ハトー攻撃で戦果を挙げたとはいえ、僅か一度の攻撃に参加しただけでベテラン同様の落ち着きを得られるはずはない。

「いつてらっしゃい。」

昨日、ボクたちが滑走路までは叩いてないのに迎撃機は上がって

こなかったから、もう残ってないのかもしれないね」  
言葉とは裏腹に、視線には油断するなという警告を込めて、ファ  
ルは答えた。

「もし残ってたとしても、護衛に六機も就くんだから大丈夫でしょ。  
第一次攻略のときも四機しかいなかったって話よ。

あの後、戦力の補充があつたって情報もないし。

ルックウの腕だったら、目を瞑っても当てられるでしょ。

気楽に行つてきなよ」

自身が出撃できない寂しさを抱えつつ、エルミはルックウの緊張  
をほぐすように言った。

「二月二日午前八時頃、空母『デットン』と『テレスドン』か  
ら飛び立った六機の零型戦闘機と爆装七型艦上攻撃機三三機は、順  
調に飛行を続けコーセキ上空へと侵入しつつあった。

迎撃が一機も上がってこなかったという、昨日攻撃に参加した  
将兵からの伝達情報もあり、多少の油断があつたことは否めない。

六機の零型戦闘機は七型艦攻の周囲をつかず離れずの距離を保つて  
いるが、その機動に緊張感はあまり見られなかった。

「今日の任務は昼寝しながらでも片付きそうですぞ、少尉」

最後部座席で魔信員兼機銃手を勤めるラーン一飛曹が、陽気な声  
を伝声管越しに響かせた。

「そういうことというと、絶対にそうならない気がするんですが。

ソル・ロス戦争でも、そんな話がごろごろしてるそうですぞ、ラ  
ーン一飛曹」

中央の偵察員席から、ラーンとは背中合わせに座っているダイト  
二飛曹が、伝声管に声を送り込む。

「そうですよ、ラーンさん。」

昼寝しながらできるような任務なんて、そんなことあるはずないじゃないですか」

真面目一辺倒のルックウが、頭を抱えつつ伝声管に言い返す。

だが、対空砲火の有効射程外から一方的に打撃を与えられる優位は明らかで、今回の任務にそれほどの困難さは感じられない。

ハトー攻撃は、相手が動かないとはいえ、全長二〇〇メートル、全幅三〇メートル内外の標的に命中させなければならなかった。それが今回は、滑走路と基地施設のどこにでも爆弾をばらまけば良い。それほどの精密さは必要なく、オアシスのどこであっても有効弾になるとなれば、確かに楽な任務と言っても良かった。

「まあ、迎撃機もないそうですし、もしいても、こちらは六機も護衛がいるわけで。」

それにダイト、ソル・ロス戦争でって言うけど、全員が全員戦死した訳じゃないだろ」

もちろん、ラーンが手を抜いているはずもなく、進行方向に背を向けながら抜かりなく周囲に視線を走らせ、不穏な影があればいつでも射撃ができるように、旋回機銃の引き金に指を置いている。

畜生、太陽が眩しくてまっすぐ見てられねえや。

「そりゃそうですけどね、一飛曹。」

昼寝とか、不謹慎ってもんですぜ。

仮にも俺たちじゃあ爆弾を落とそうってんですからな」

ルックウの影響か、非番時ですらだらしのない生活とはすっかり縁を切ったダイトが怒鳴るような声を上げた。

「そうですよ、ラーンさん。」

好むと好まざるに拘わらず、人が死ぬんですから。

せめて最善は尽くしましょう。

それが礼儀つてもんじゃありません？」

優等生振るつもりはないが、普段から飄々としたラーンに混ぜ返してみたくなくなったルックウが伝声管に向かって大声を出す。

もちろん、普段からいろいろと教えられることの多い年長の下士官に対し喧嘩腰になるわけはなく、エンジン音のせいで普通に喋っていては声が届かないからだ。

「へいへい。」

お二人は真面目でござんすからね」

わざと呆れたような怒鳴り声を返しながらも、ラーンは周囲の警戒を怠ることはなかった。

それにしても眩しくて上が見えねえや。

ルックウは二列に並んだ水平爆撃隊の右列四番機の位置にいた。

事前の打ち合わせ通り、先頭を飛ぶ誘導機の投弾を待つばかりだ。操縦桿を中央に固定し、誘導機に視線を合わせ、その動きを僅かでも見逃すまいと意識を集中させている。

ふと、視界の上方をごく小さな黒い影が過ぎった。気がした。

次の瞬間、誘導機のコクピットの内側から、真っ赤な飛沫がぶち撒かれた。

パイロットを射殺された誘導機は、爆発することなく原形を保ったまま機首を下げ、そのまま砂海へと墜ちていく。

現状を受け入れられないルックウのすぐ前を、風を巻いて敵戦闘機が急降下で離脱していった。

護衛の任務を全うできなかった零型艦戦全機が、怒りにまかせて追跡する。

ようやくルックウが現実を受け入れた瞬間、これまで経験したことのない衝撃が機体を襲い、敵戦闘機が風を巻いて降下していった。同時にルックウは左腕とわき腹を、焼け火箸で貫かれたような激痛を感じた。後部座席から絶叫が沸き上がり、コクピットの内側が血と硝煙の臭いに満たされる。キャノピーは搭乗員の血飛沫で塗り潰され、外界の様子は見ることはできなくなっていた。

ふと、激痛を感じた左腕を見る。

その激痛の先にあるはずの左腕は、肘の上からきれいさっぱり消し飛んでいた。

それだけではない。

上腕から噴き出す血飛沫だけでなく、自身の左脇腹からは腸がこぼれ出し、飛行服を血塗れにしている。

絶叫の形に口が開き、喉の奥から声が上がってきたはずだが、既にルックウには声を発する力は残されていなかった。

目の前の計器盤を染め上げていく血飛沫が自分のものなのか、後部座席に座るふたりのものなのか、ルックウにはもう判らなかつた。仮に判つたとしても、それは既にどうでもいいことだった。

そして、永遠のように感じられていた出来事が、瞬きをする間のことだと理解したルックウの視界が真っ赤に染まった。銃撃を受けたときの衝撃など、比べることすら莫迦莫迦しいほどの激震がルックウの身体を襲う。

撃ち抜かれた燃料タンクに半分以上残っていた魔鉱石燃料に引火した爆炎が、腹に抱えた五〇〇キロ爆弾を誘爆させ、ルックウの意識は異界の彼方へと吹き飛ばされていった。

二航戦旗艦を務める空母『デットン』は、ハトー奇襲成功の喜びをすっかり忘れてしまったかのような、重苦しい雰囲気飲み込ま

れていた。女性飛行士官居住区域にある士官次室の扉が二枚、固く閉ざされている。

片方の内側からは、辺りをはばかりることのない泣き声が途切れることなく漏れ続けていた。そして、主が戻ることがなくなると、同室者の専有面積が多少広くなったもう片方からは、小さな話し声と微かな猫の鳴き声だけが聞こえている。

「もうルックウは帰ってこないんですよ、中尉。

最後まで、一緒に戦おうっていったのに。

約束破られちゃったんです。

だから、もう探し回るのは諦めてくださいね」

エルミは雄猫のレックスを抱え、消え入りそうな小さな声で、ずっと話しかけていた。

不安げに辺りを探り回るレックスを捕まえ、ルックウが使っていたベッドに腰掛けて、エルミは頭を撫で続けている。

ルックウ機の未帰還が確実となった時点で、ファルは衝撃のあまり倒れ、運び込まれた自室で意識を取り戻して以来泣き続けている。同室の女性飛行士官も、最初はファルを慰め、次いで叱咤したが、ついには自身も泣き崩れていた。

エルミ自身もファルと一緒に泣きたいはずなのに、レックスを抱えたままここを動く気にはなれなかった。七型艦攻の航続距離からもう帰ってこないことは解り切っている。僚機からの報告もあり、ルックウが撃墜されたことは間違いない。

だが、エルミはまだ現実を受け入れられず、ここで泣いてしまつたらルックウの戦死を認めてしまうことになる、心が精神の均衡を保とうとしていたのだった。

敵戦闘機は、高度五〇〇〇メートルを飛ぶ水平爆撃隊から、さらに上空の高度九〇〇〇メートル、で待機していた。そして太陽を背

に水平爆撃隊に突入し、多少の油断を衝いたとはいえ、一撃で二機の七型艦攻を撃墜したのだった。

もちろん、怒りに駆られた零型艦戦に追われた敵戦闘機が、無事で済むはずがなかった。六機の零型艦戦に僅かの間に追いつめられ、二機に対して大人気ないほどの機銃弾が叩き込まれていた。

この空中戦を以て、コーセキの航空へ威力は、完全に消滅した。

水平爆撃隊は僅かに隊列を崩されたが、左列一番機が冷静に誘導機の任務を引き継ぎ、コーセキへの爆撃任務を完遂している。

攻略部隊も多少の齟齬はあったものの、二航戦の第二次攻撃の翌日にはコーセキを占領していた。

だが、第四艦隊司令部からの救援に対する感謝の魔通を受け取っても、二航戦司令部の重苦しい空気は払拭されなかった。

「艦長、ここにいたか。」

「ちょっと、邪魔するよ。」

巡検も終わり、最低限の人員を除いて僅かな自由時間が許された頃、二航戦司令官オーキキは、『デットン』艦長ホンリユウの私室を訪ねた。

「お休みにならなくてよろしいのですか？」

ソファを勧めながら、ホンリユウは戸棚からサピエント産の蒸留酒と小振りなグラスを二つ取り出した。

「ああ。」

「まだ、しばらくは、な。」

沈痛な面持ちのまま、オーキキは勧められたソファに腰を下ろし、目の前に置かれたグラスを琥珀色の液体が満たしていく様を見つめている。

「あとは、お好きなだけ。」

私もそうさせていただきます」

琥珀色に染まったグラスを取り上げ、一息に飲み干したホンリユウは、再度グラスを満たしていく。

「こんなことになるのなら、あの娘を飛ばせなければよかったよ」

オーキキはグラスを干すことなく、大きな掌で碎かんばかりに握り締めている。

「慚愧の念に耐えません。」

決して、誰ならば死んでよいなどということはありませんが、あの娘は死なせたことはありませんでした。

彼女はこれからのソル母艦航空隊を背負って立つ逸材だと、私は考えておりました。

責任は、挙げて本職にあります」

ホンリユウはソルに帰還後、戦死した搭乗員ひとりひとりの遺族に会いに行く決めていた。

戦死の公報はもう少し後になるだろうが、遺品を直接家族に手渡し、死なせてしまったことを詫びなければならぬ。

憎んでくれてもいい。

いや、怨み、憎んで欲しい。

いくら皇国のために捧げた身とはいえ、遺族にとってはかけがえない息子であり、兄弟であり、父であり、夫であり、そして娘だ。現実に殺した相手は交戦国のオリザニア共和国であり、戦闘機のパイロットだが、国家はいずれ講和しなければならぬ対象であり、当のパイロットは既に撃墜され、同じ彼岸へと旅立っている。

愛する者を失った遺族には、直接憎しみをぶつけることのできる、生きた人間が必要だった。

ホンリユウは、それこそが艦長のつとめだと考えていた。



「君だけの責任ではないよ、艦長。」

最終的には攻撃隊の編制、搭乗割に許可を出した私の責任だ。

君が考えている役割は、私がやるべきだよ」

琥珀色の液体をひと口飲み込み、オーキキは力強く言った。

司令官の立場ともなれば、戦死者は統計であり、数字の羅列でしかなく、個々の死を悼んでいる余裕などない。

もし、一海戦ごとに戦死者の遺族の元を訪れていたら、司令官としての仕事をする時間がなくなってしまう。薄情に見えるかもしれないが、司令官とはそういう立場なのだ。そうでもしなければ、場合によっては一〇〇〇を超える戦死者の怨念に、心を食い尽くされかねない。

だが、オーキキは、それをやろうとしていた。

一度の休暇で回りきることは不可能でも、生ある限り足を運び続ける。

そう決心していた。

「『デットン』の艦攻が三機やられたみたい」

二航戦と共にコーセキ攻略の増援として分派された、第八戦隊の旗艦を務める重巡『ドラコ』のガンルームで、リンが悲痛な面持ちで言った。

砂偵乗りと艦攻乗りという違いはあるが、同じ飛行士官が還らなかつたことは、リンにとってはショックだった。

ハトー奇襲の大戦果も、やはり未帰還機が二九機もあり、手放しで喜ぶ気分にはなれなかつた。

「誰が還ってこなかつたんだ？」

コーセキ攻略の成功に湧くガンルームの中で、同期であり幼馴染みが『デットン』の艦攻に乗っているレグルにしても、リンのひと

言は他人事ではない

詳しいことは判らないが、確かエルミは雷撃隊に所属し、今回の攻撃には出番はないはずだ。

だが、それほど難易度の高い作戦ではないため、経験を積ませるために編制の変更がないともいえない。

ハトー奇襲でも未帰還機はあった。

それ以来、レグルは眠れぬ夜を過ごしている。

「そこまでは判らないよ、レグル。

たまたま戦闘配置のまま、『デットン』が攻撃隊を収容するのを全部見ていただけだから。

機体番号までは見えないもん。

さすがに現場からこちらの被害を、敵にまで判るようなマネはしないでしょうから、敵信傍受班に聞いても判らないだろうし」

焦燥を隠せないレグルに、リンが答える。

どの空母の誰の機が撃墜されたのかは、その艦の者にしか判らない。各司令部や艦の首脳部であれば、残存機数は当然把握しているが、誰が未帰還かまでの情報を悠長に伝達し合うほど戦場は暇なところではない。

同じ艦隊とはいえ、一旦出航してしまえば別の艦の者と顔を合わせることは、帰港するまでない。

出航前に行われる恒例のクラス会が、永の別れとなってしまう者が出て、決して不思議ではないのだった。

レグルもリンも、勇壮な軍の裏側にある多数の悲劇を、緒戦にして思い知らされていた。

「皇国軍は無敵だな、おい。

このままでいけば、世界に君臨できちまうんじゃないか」

年の瀬の慌ただしさの中、帝都は連戦連勝の報道に浮かれていた。専門技術学校も冬休みとなり、明日はほとんどの者が帰省する日だ。しばしの別れを前に、フィズはガルの下宿に酒瓶を抱えてやってきていた。

「あ、ああ、そうだな」

新聞紙上には赫々たる戦果が報道され、魔導放送から興奮気味にうわずりがちなアナウンサーの声が途切れることはない。

しかし、ガルの返答はどこか上の空だった。

報道の片隅に見つけた『我が方の損害は軽微』の一文が、喉に刺さった小骨のようにいつまでも気になっている。

ハトー奇襲で、砂上艦艇に対する反撃があつたとは聞いていない。特殊潜行艇の喪失は、それと引き替えにした戦果と合わせ大々に報道されている。わざわざ別に損害は軽微というのであれば、撃墜された機体があるということだ。

ガルは、エルミがハトーに行ったと確信していた。

もちろんそう知らされたわけではないが、艦攻に乗っていると聞いたことを思い出し、そう確信していた。

それ以来、ガルの表情にはどこかしら翳りがまといつき、いくら明るく振る舞っても消えることはなかった。

「嫌だなあ、戦争は」

ぼそりと呟いたガルの一言に、フィズの表情が変わった。

「怖じ気付いたか、ガル？」

嬉しくないのか？

連戦連勝だぞ？」 酔いが回ったフィズが、ガルに絡み始めた。

「違うんだ、フィズ

人が死んでるんだぞ。

あいつが……

あいつらが、無事に帰ってくるかどうか……

俺は何もできないんだ」

ガルは数日前の新聞を広げ、その部分を指さした。

情報局は開戦と同時に新聞社や通信社に対し、戦況報道の禁止示達を出していた。

大本営の許可したものを以外は、一切掲載禁止ということだった。つまり『大本営発表』として、後世の歴史家から嘘の代名詞とまで言われることになるものだ。

そして、陸軍省令に基づく新聞掲載禁止事項基準示達も出している。これはソル軍に不利なる事項は一般に掲載を禁じるが、戦場の実相を認識させ、敵愾心を掻き立てる内容であれば、掲載を許可するというものだ。

そして二月一三日には、新聞統制を一層強化するため、国家総動員法第一六条を根拠に新聞事業令を公布した。その上、新聞各社で作っていた自治的統制機構、新聞連盟を解散させている。これは、近い将来に政府による統制機関を、設立するための布石だった。

一九日には、言論出版集会等臨時取締法が公布されていた。時局に関し造言飛語、人心を惑乱すべき事項を流布したる者は懲役に処すという内容だ。これで政府にとって都合の悪い情報は、完全に封殺された。

記者は発表されたものだけを記事にした。もし、真実を追求し独自の判断で書いた記事が、禁止通達や言論出版集会等臨時取締法に抵触すれば、逮捕拘禁されてしまう。こうなっては自由な記事など書けるはずもなく、軍の発表に従った提灯記事を書くしかない。

新聞をはじめとした報道各社は、そこに身を置く人々の意に拘わらず、急速に軍の広報機関へと作り替えられていった。

一二月一六日、一隻の巨艦が就役し、第一戦隊に編入された。

平時であれば大々的に報道され、各国の大使や駐在武官を招いて華やかな御披露目が行われるはずだった。だが、この戦争を見越して建造が始められた巨艦は、起工式も、進水式も、就役も報道されることは一切なかった。

世界で唯一、四六センチ主砲を搭載する戦艦『アンギラス』は、皇国民の祝福を受けることなく砂海へと乗り出していった。

敵が持たない新兵器を報道することは、軍が許さなかった。

「皇国軍人として名誉の戦死を遂げたなら、それは友として誇らしいことじゃないか、ガル。」

おまえのその軟弱な考えは、友を貶めることになるぞ。

そんな軟弱なことじゃ、戦争を戦い抜けないぞ。

飲んで気持ち切り替える」 近しい身内に軍人がいないフィズにとって、戦場での死とはそういった認識でしかない。

それでも落ち込みそうなガルを励まそうと、フィズは湯呑みに酒を継ぎ足そうとした。

「解ってるんだ、フィズ。」

解ってるんだけど……」

言われるままに湯呑みをあおり、酒と共に沈鬱な気持ちを飲み下そうとしたが、ガルの不安はますます募るばかりだった。

「今年は四人揃わないかもね……」

ガルが酔い潰れている頃、新年祭を彩る料理の下拵えをひと段落させ、チエルは呟いた。

例年であればとっくに帰ってきているはずのガルは、冬休みにな

つても軍事教練と勤勞奉仕に駆り出されていた。それも今日で終わっているはずで、事前に連絡があった明日、一月二十九日の夕方にはガルが帰ってくる。

だが、レグルもエルミも、未だ何の連絡もない。

軍人である以上、戦争が始まれば新年祭も慰霊祭もないことは仕方がない。

外地に出ている将兵すべてに、故郷で新年祭を迎えさせるなど狂気の沙汰だ。

レグルとエルミがどこにいるのか、それは判らないが、今の時点で連絡もないのであれば、作戦行動中と考えるしかない。たとえ新年祭に合わせた休暇が与えられたとしても、外地からこの村に帰ってくることは不可能だ。

寂しい新年祭になると、チエルは覚悟を決めた。

「便りがないのは元気な知らせと昔から言っじゃないか。

ここで思い煩っても仕方がない。

今は待つしかないぞ、チエル」

包丁の手入れを済ませた父が、タバコをくわえながら裏庭に出ていく途中で声をかける。

「今夜の火の番は俺だからさ、姉貴はさっさと寝てくれよ。

同じことばかり答えさせるのは勘弁してくれ、それも一〇分おきに」

すっかり大人びた顔をしたアレイが横から口を出す。

さすがに父にまではしていないが、年下相手の甘えからかチエルはアレイといるときにはレグルの心配ばかりを口にしていた。

アレイが言う一〇分おきは、決して誇張ではない。

「あたしが何言ったってどういうのよ？」

最近とみに生意気になった弟に、チエルは食ってかかる。

父はまた始まったという顔で、裏庭に出て行ってしまった。

「口を開けば、レグルはどこにいるんだろう、手紙来てない？ い

つ帰ってくるんだろう、こればっか」

チエルの口調を真似てアレイが応じた。

姉の心配は理解できるが、いい加減付き合いきれない。

アレイはガルの帰郷を、チエルとは違った意味で待ち望んでいた。

### 第30話 雌伏

砂海軍省に呼び出されたミニッツは、今回も大東砂海艦隊司令長官の内示は断るつもりだった。

砂海軍に奉職した誰もが目指す椅子だったが、この難局を自分に乗り切る力があると考えるほど、ミニッツは自信家でも楽天家でもなかった。

以前同様、砂海軍長官と作戦本部長に呼び出され、二人の前でミニッツは用意してあった辞退の言葉を口にした。

「この難局に私にこの仕事が勤まるとは思えません。

何よりも将兵を鼓舞し、ソルに立ち向う勇気を取り戻させるには、ハージイのような猛将が適任です。

私は、かつて潜砂艦に乗り組んではいましたが、この六年間ほどちらかといえは航海局の仕事が多く、現場で先頭に立てる器であるとは思えません」

控え目に言ったミニッツに対し、難しそうな顔で考え込む砂海軍長官を尻目に作戦本部長が静かに口を開く。

既に決定したことを優しく説明する気などないという表情で、作戦本部長はミニッツを見つめた。

あまりにも有能すぎ、齒に衣を着せぬ発言を繰り返してきたこの男は、砂海軍内に味方などただのひとりもないことを自覚している。彼を作戦本部長に抜擢した大統領ですら、彼の能力を買っているが、人間性は毛嫌いしていた。もちろん、仕事を遂行する上で必要なものは能力だけと割り切っていればいいだけで、あり、作戦本部長自身も仕事する上で友人など不必要と考えていた。

この場は大統領の希望という名目の命令を伝える場であり、ミニッツを説得する場ではない。



作戦本部長はドライアイスのような、冷厳とした目つきでミニッツを見据えている。

「もともとメルイイの後任には、君と大西砂海艦隊司令長官の二人が候補に上がっていた。

潜砂艦戦のエキスパートでもある君を、アレマニアの潜砂艦がうようよしている大西砂海艦隊司令長官にして、彼を大東砂海に回すことも考えた。

だが、この人事は大統領閣下のご希望でもある」

そう言つて、作戦本部長は面倒くさい説得の役を、上司でもある砂海軍長官に押し付けた。

「ミニッツ君、謙遜は不要だ。

君は航海局長の職に長くあり、人物を見る目は確かだと私たちは考えている。

今、大東砂海艦隊に必要な指揮官は、ハージイのような闘将ではなく、君のような落ち着いた人物だ。

怒りに我を忘れた将兵や、卑怯な騙し討ちの結果とはいえ、無残に敗れて落ち込む将兵を落ち着かせ、元通り統率の取れた軍に再編するには、君のようなバランス感覚に優れた人物がどうしても必要なのだ」

既にミニッツは、大統領の希望というひと言で辞退を諦めていた。確かにハージイはオリザニア砂海軍で並ぶ者のない闘将だが、この状況で彼を司令長官に据えることは危険だった。怒りに我を忘れ、勝ち目のない敵に先頭を切つて突っ込んでいきかねない。有力な艦を失った状態で、世界第三位の砂海軍に勝負を挑むことは勇気ではなく蛮勇だ。ハージイの高い戦意は必要だが、首に縄をつけておかなければ、どんな落とし穴にはまるか分かったものではない。ミニッツも、それは痛いほど解っている。

これ以上断り続ければ、大統領自らが説得に出てくるだろう。

それは既に説得ではなく、命令だ。  
いや、今回の内示自体が、命令と言っていていいだろう。  
ミニッツは、運命を受け入れることにした。

その頃、ソルによるハトー攻撃の調査委員会に召喚されたメルイイはハトーを離れていた。

大東砂海艦隊司令長官を解任された上に大将から少将に降格され、副官を伴うこともなく、同じく少将に降格された騎兵軍のタンとともに、本土への飛空艇に乗り込んだ。後任のミニッツとは、簡単な引継ぎだけで事務処理を済ませ、後を振り返ることなくメルイイはハトーを去っていった。

メルイイがハトーを去り、次期司令長官が着任するまでは、メルイイの次席指揮官だったアム八中將が敗残の兵を率いることになっていた。

突然押し付けられた至高の地位に、彼は戦慄した。

メルイイですら勤まらなかった仕事を、自分が完遂できるとは思えない。自暴自棄になりがちな兵をまとめ、再度襲い来るであろうソルの恐るべき機動部隊に 対する備えをしなければならぬ。さらには襲撃を受けたコーセキは大東砂海上の要衝であり、これを放置するわけにもいかず動かせる兵力を急遽派遣していた。

そこへあらゆることに戦々恐々とした哨戒部隊から、敵潜砂艦や偵察機を発見したという報告が五月雨のように続いて入る。

凶暴な肉食獣に脅える草食獣のような心理状態に置かれたアム八は、場当たりの命令を出しては、舌の根も乾かないうちに撤回することを繰り返していた。

二六四一年一月一七日にオリザニア砂海軍大東砂海艦隊司令長官に就任したミニッツが副官をたった一人だけ伴いハトーに着任したのは、オリザニア砂海軍にとって最悪の年が終わる一月三十一日だった。

年が改まった翌日から、新年の休暇をとることなくミニッツは精力的にハトーの基地内を視察した。

数日の視察で彼は、ほぼ正確にハトーにいる将兵の心理状態を把握していた。

友や尊敬する者を失った彼らは、『何としてもこの借りは返したい』と思う気持ちがある反面、無残な敗北に打ちひしがれて将校クラブで憂さ晴らしの酒を飲んだくれていた。

メルイイがハトーを去る前に彼を通して伝えられた砂海軍省からの命令は、もしソルが責めてきたら迎撃、それ以外で攻勢に出ることは禁ずる、というものだった。これがただでさえ沈みがちな将兵の気持ちをさらに沈め、やるせなさや悔しさ、戦友の仇を討てない無力感から必要以上のアルコールを消費させている。

幾度か将校クラブに顔を出したミニッツに、将兵は力なく形だけ敬礼し、碌に目を合わせようとせずグラスを煽り続けていた。

このままでは早晚ハトーの将兵全てが使い物にならなくなってしまふ感じたミニッツは、ある晩に純白の第二種軍装に身を包み将校クラブのドアを潜った。

「諸君、私が新しい司令長官だ。

ところで、私は何で海軍に入ったかと言えば、私は内陸の片田舎生まれだ。

子供の頃、初めてエビという生物を本で見たとき、私はこの生物に大変興味を持ったものだった。

その本には、エビが砂海に点在するオアシス湖の王者だと書かれ

ていた。

そして、いつだったか、私の誕生日に両親が奮発して、ディナーのメインディッシュに選んでくれた。

それ以来、私はエビが好物になり、よし、それでは砂海軍に入ってオアシスの王者というヤツをつかまえて、たらふく食ってやるうと思っただんだ」

訓辞というには余りにも異様だ。

だが、将校クラブという酒の席でもあり、ミニッツは生まれ故郷の田舎訛り丸出しで話していた。将校たちはミニッツが親睦のために馬鹿話を始めたと思いきみ、爆笑と拍手が巻き起こる。中には指を口に当て、指笛を鳴らしてはやし立てる者すらいる。決して司令長官に対して取るべき態度でも、司令長官としての振る舞いでもなかった。

だが、こつした将校たちの反応に、ミニッツも微かに笑みを浮かべて辺りを見回している。

しかし、次の瞬間、ミニッツは一瞬にして厳しい目つきに変貌し、威儀を正し、語調を変えて話を続けた。

「エビは体の甲羅が生え変わるときは、岩の間に入ってじっとしているものらしい。

諸君、我々の情勢は悪い、それは理解している。

だが、それはエビが古い甲羅を脱ぎ捨てるため、ひと時岩陰に潜むことと同じだ。

今は、甲羅が生え変わるのを待たねばならない時だ。

そして、硬く新しい甲羅には、できるだけ早く生え変わらねばならない。

戦争には時というものがある。

その時が来るまでは、じっと潜んで耐えなければならぬ時がある。

時至れば、我々は古い甲羅を脱ぎ捨て、新しい大東砂海艦隊とし

て生まれ変わろうじやないか。

そのときが、そのときこそ、オリザニア共和国に勝利をもたらす  
第一歩となるだろう」

次の瞬間、すべての将兵がイスを蹴り飛ばして立ち上がる音と、  
軍靴のかかとを打ち合わせる音、威儀を正してミニッツに敬礼する  
軍服の衣擦れの音が部屋を満たした。

もう、誰も笑う者はいなかった。

機動部隊の旗艦空母『コツヴ』は、コーセキ攻略戦真っ最中の一  
二月二三日午後六時半に西工廠泊地に投錨していた。

当然ナンクウを始めとした司令部は、ゴトム連合艦隊司令長官御  
自らの出迎えとねぎらいがあると信じていた。連合艦隊旗艦戦艦『  
アーストロン』が停泊して いることから、ゴトムがそこにいるこ  
とは間違いない。帝都に出張することもあるだろうが、世紀の大作  
戦を成功させた英雄たちの帰還を、無視するなど考えられないこと  
だった。

だが、『アーストロン』を離れたランチから『コツヴ』に乗り込  
んできたのは、ガツキ連合艦隊参謀長だけだった。

ゴトムは『コツヴ』の入港を聞くやガツキを呼び、怒ったような  
口調で出迎えとねぎらいのために『コツヴ』に行くように命じた。  
いつもの悠揚迫らずといった、ゴトムらしからぬ態度にガツキは思  
い当たる節がある。

ハトー奇襲作戦を実行する間に、連合艦隊司令部と機動部隊司令  
部の間に起きた感情的な対立だ。

ハトーに向けて出撃するまで、両者にそのような気配はなかった。  
だが、機動部隊が一応の成功を収めた瞬間から、両者の間には埋  
め難い溝が掘られ始める。

機動部隊にしてみれば、実際に砲火を潜り抜けて戦果を上げたのは自分たちだという自負がある。それに対して連合艦隊司令部は、機動部隊が戦果を上げることができたのは連合艦隊司令部の指導があつてこそだという自負がある。

作戦を構想し、練り上げた世界に誇る壮挙を達成した立役者は機動部隊だけではない。

上位機関の立場を蔑ろにするような真似は、何があつても許さないということだった。

そして、第三次攻撃の中止と、早々にハトーから離脱してしまった腰が引けたとしか思えない機動部隊の行動が、感情的な対立を決定的にしていた。

西工廠泊地に投錨した『コツヴ』にガツキ参謀長が乗り込んできたが、そのような経緯がある以上、歓迎する雰囲気はほとんどなかった。

「長官、この度の壮挙、真に以てお見事と申し上げますよりございません。」

おめでとうございます。

心よりお祝い申し上げます」

ガツキ参謀長は『コツヴ』の長官公室に入り、ナンクウ長官に祝いの言葉を述べた。

「参謀長、ありがとうございます。」

全將兵を代表して、未だコーセキで戦っている二航戦もだが、御礼を申し上げます」

硬い表情のまま答えたナンクウに、ガツキは深々と頭を下げた。

そして、傍らに控えるカリユウ参謀長に手を差し伸べる。

「カリユウ、おめでとう。」

よくやってくれた」

ガツキの言葉に、カリユウはしばらく黙り込み、なかなかその手を握ることはしなかった。

このとき、ナンクウとカリユウの胸中には、期せずして同じ思いが去来している。

なぜ、ゴトム長官は出向いてこないのか。

出撃の時には、『コツヴ』の飛行甲板に立って悲壮な激励の辞を贈ってくれた長官は、なぜ参謀長だけを寄越すだけで自らは出向かないのか。

史上稀に見る成功を収めて凱旋した今、ゴトム長官には『コツヴ』に出向いてねぎらって欲しかった。機動部隊司令部は割り切ること可能だが、現場で戦った将兵が蔑ろにされたと思いかねない。たつたひと言でもよかった。連合艦隊司令長官のねぎらいがあるだけで、将兵の苦勞がどれほど報われ、志気が上がったか。

ふたりの将官は、そう思いながらガツキと対峙していた。

「ガツキ参謀長、長官はこられなのですか？」

やはり我慢できなくなったカリユウが、ついにそのことを口にする。

「長官はな……」

今夜はもう遅いので、明日来られる。

その前に、ナンクウ長官には『アーストロン』に御足労いただくなければならぬが。

まあ、とにかくおめでとう」

ガツキは思わず言葉を濁す。

だが、射るようなカリユウの視線から目を逸らすことなく言葉を続けた。

「いや、天佑神助の賜物ですよ」

ふざけるな、という言葉が喉元までせり上がってきたが、士官学校で一期上、上級司令部の参謀長に対して許される振る舞いではない。

あらん限りの自制心を振り払い、カリユウは必死に言葉を飲み下し、平静を装って謙遜する。

「ですが、ありや何です？」

帰りにミルドウイを攻撃しろというのは。

ももとの作戦命令にないことを、いきなり付け加えられちゃ困りますなあ」

せめてこれくらいはとカリユウは言った。

「いや、命令作第一号に出ていたはずだぞ」

いかにも心外という表情を浮かべ、ガツキが言い返す。

普段から傲岸不遜な表情を崩すことなく、黄金仮面と揶揄される男が珍しく弱気な表情を見せた。

「あれは、敵の攻撃に対して大なる考慮を要せざる場合、という条件だったでしょう。」

こちらは魔通封止中ですからね。

もつと現地の状況を考えてもらわなければ困りますよ」

腹の虫が治まらないカリユウが、さらに噛み付く。

ナンクウはこの成り行きを、ガツキ同様困ったような表情で眺めている。

言いたいことは山ほどあるが、開戦初頭でそうそうに司令部同士の溝を広げるのは得策ではない。

カリユウをたしなめ、場を納めるタイミングを計っていた。

「いや、すまんことをした」



ナンクウの心中を察したかのように、ガツキは滅多に下げたことのない頭を下げる。

普段の挨拶ですら、下級将校からの敬礼にすらそりかえり、頭を下げていたことにしてしまふほどだった。と言って頭を後ろにそらせるのであった。

そのナンクウの前とはいえ、一期下のカリユウに対してガツキが頭を下げたことでこの話はうやむやになり、機動部隊司令部に対する連合艦隊司令部の慰労訪問は終わりを告げた。

『偉勲を立てて帰ってきたので、意気当たるべからず。』

だが、空母の二隻もなくして帰ったら、ああもゆくまい』

ガツキは余程癪に障ったのか、『アーストロン』に戻った後、その日の日記にそう書き記した。

翌二四日、ゴトム司令長官は、帝都から来たノシユウ軍司令部総長とともに、空母『コツヴ』を訪れた。

ゴトムは『コツヴ』の舷梯を登り、艦内に一歩踏み入れたとき、将兵たちの間に士気よりも驕りが蔓延していることを感じ取る。

ゴトムは、赤城の長官公室に参集した各級指揮官の顔を、答礼しつつ端から眺めていく。

機動部隊司令部の一部には、わずかな怒りと不信感が浮かべている顔が見られた。だが、多くは壮拳を成し遂げた充実感ではなく、過度の礼賛を求める期待に満ちた驕りを隠そうとしても隠し切れない顔が並んでいる。

それは当たり前だ。

過去に例を見ない片道三五〇〇海里の長征を、たった一艦の損失も出さず成功させてきた。

挙げた戦果は敵戦艦八隻の撃沈破に対し、我が方の損害は未帰還機二九機、戦死者五五名に過ぎない。

誰に対しても、誇って良い快挙だ。

おそらく、いや、間違いなく、世界最強の機動部隊と言っても過言ではない。

それ故に、ゴトムは手放しで褒めることを止めた。

「緒戦には幸いに一勝できたが、戦争は長期戦であり、これからが真の戦いである。」

幸運の一勝に驕ってはいかん。

勝って兜の緒を締めよ、という言葉忘れてはいけない。

勝利を得て凱旋したなどと考えるはいかん。

次の戦闘準備のため、一時帰投したのである。

一層戒心して事に当たるよう希望する」

誉めることも、労苦をねぎらうこともない。

叱咤激励ではなく、叱咤でしかない。

浮かれ気分が蔓延していた『コツヴ』の長官公室に、冷たい風が吹き抜けた。

「話が違つじやないですか、リユーモさん！」

軍令部第一部長室にカリウウの怒声が轟いた。

その部屋の主は、カリウウの剣幕にタジタジになっている。

本来であれば、士官学校の一期下にそのような口を利かせる謂われなどない。だが、今は自分の言葉は嘘だったことが証明され、それを責められている。

正に、自業自得の舌禍といったところだった。

「リユーモさん、あなたは確かに言いましたよね！」

「ハトー攻撃が成功したら、全員二階級特進させるから、必ず成功させてくれ」って！

それが今更嘘でしたなんて、どの面下げて搭乗員たちに言やあいんですか！」

カリユウは、部下に対して空約束をすることになってしまったと、自分の面子に拘ったわけではない。

もちろん、作戦が成功したからといって、本当に二階級特進が実現するとも思ってもいなかった。

当然、実際にハトーで敵弾を潜り抜けてきた将兵たちもだ。

軍人である以上、戦うことは職業であり、戦果に対しては俸給と手当で報われている。

作戦のひとつやふたつ成功させたからといって、その度に二階級特進を乱発しては、軍という組織が崩壊する

だが、今回カリユウの怒りに火を点けたのは、リユーモの言葉がその場限りの口約束でしかなく、上奏さえされていないなかったことだった。

カリユウはリユーモがどう落とし所を見つけるか、困った顔でも見てやるうと思つてわざと聞いてみたのだった。

せいぜい、常識と規則を盾にして却下された、くらいの答えを期待していた。

だが、返ってきた答えは、上に話もしていないという、予想すらしていないものだった。

「カリユウ君、今回のことは済まんと思つてる。

少しでも士気の高揚になればと、考えてのことだったんだ。

ここは、ひとつ勘弁してくれ」

リユーモはいかにも申し訳ないといった表情で、カリユウに懇願する。

これ以上言い募ったところでリユーモが本当の意味で反省すると

は思えないカリユウは、見事な姿勢で敬礼すると、何も言わずに部屋を出ていった。となったのである。

ハトー攻撃とサピエント戦艦撃沈の大成功に、ソル内地では軍人も国民も一緒くたに熱狂歓喜の渦に巻き込まれていた。

もちろん手放して喜んではいけないと警鐘を鳴らし、航空機の威力を目の当たりにして敵空母を打ち漏らしたことに危惧を抱くゴトムや航空関係者もいる。

そして航空機に対して過剰な期待を抱く者、逆に異常なまでの対抗意識を抱く者もいた。

戦艦主体の連合艦隊司令部と機動部隊司令部の間に、埋めがたい溝が掘られることは、自然な成り行きだったのかもしれない。

エルミを乗せた第二航空戦隊旗艦を務める空母『デットン』が、母港の南工廠泊地に投錨したのは、そのような空気が砂海軍に広がり始めた一二月二九日のことだった。

「ファルは、お家に帰るの？」

上陸を前に、艦に残ることになったファルに、エルミは残念そうに言った。

通常であれば新年祭の休暇は三日間だが、ひと月以上に及ぶ航海と、作戦成功へのねぎらいを込めて、全将兵には六日間ずつの休暇が認められていた。

もちろん全員が同時にではなく、半分ずつに分けて休暇を取ることになっている。

「うん、ボクは帰るよ。」

やっぱり元気な顔を見せてこなきゃ。

エルミも帰るんでしょ？

「この機会に結婚を申し込んできなよ」  
後発組のファルがからかいながら答える。

「ちよつと、なんで、それをここで!？」

「そう言うファルこそ、どうなのよ!？」

顔を真っ赤にしたエルミの慌て振りに、周囲から冷やかしと応援を含んだ笑いが弾けた。

「ボクは皇国にこの身を捧げたんだよ。

君みたいに想い人も、レグルみたいに許婚もないし、結婚はないね」

どこからか、歓声と悲鳴が重なり合って聞こえた。気がした。

ルックウの戦死に打ちひしがれていたふたりだが、七日間の航海のうちになんとか心の整理をつけていた。

ルックウを失った悲しみはもちろんだが、いつ自分たちも撃墜されるか判らないという恐怖は今でも拭いきれていない。だが、上官や階級は下でも先輩に当たる搭乗員たちの話を聞き、これが戦争なんだとある程度は割り切って考えるようしていた。

「じゃあ、ちよつと羽伸ばしてくる。

お土産は期待しないでよ」

そう言ってエルミは『デットン』をあとにした。

ほぼ丸一日夜行浮遊車に揺られて帝都まで戻ったエルミは、いつものホームでレグルの姿を見つけた。

レグルは眠たげな目を擦りながら、ひとりで浮遊車の入線を待っている。

ちよつとした悪戯心を掻き立てられたエルミは、気配を殺してレグルの後ろに立つ。

迎撃機や対空砲火を掻い潜ってきたエルミに比べ、艦底で主砲指揮所に詰めているレグルは殺気を感じする能力が磨かれていない。エルミが後ろに立つてから五分が経過しても、ただ誰かが後ろに立つただけだと想っているようだった。手元の新聞に目を落とし、文字を追うことに集中しているのも、エルミの気配を感じ 知できない理由のひとつだった。

いきなり、エルミは自分の膝頭を、レグルの膝の裏に軽く押し付けた。

「何をする、貴様」

軍人としてあるまじき慌て振りを見せてしまったレグルが、何とか態勢を立て直し振り返る。

「いいじゃない、誰も見てなかったし。」

それに、五分も私に気付かないなんて、飛行士官だったら真っ先に撃墜されちゃうよ」

少しだけ頬を膨らませ、それでも目は笑っているエルミが返す。

「やかましい。」

俺は砲術だ。

それに男は一辺にふたつのことに集中できないんだよ。

新聞くらい、集中して読ませる。

さっさと声かけりゃいいじゃねえか」

頬を引き攣らせながらレグルは答えるが、目は笑っていた。

「ところで、村には知らせたの？」

走り出した浮遊車の席に納まり、エルミは聞いた。

「ああ、昨日工廠を出てすぐ、魔報で知らせてある。その言い方だと、お前は知らせてないのか？」  
新聞を脇に置いたレグルは、何を当たり前のことをといた口振りです。

「なんでそんなことしちゃうのよおっ！」

せつかくガルを驚かせてやろうかと思ってたのに！」

エルミは頬を膨らませて言う。

「お前なあ、いくらなんでも、そりゃあ迷惑つてもんだろ。」

それに俺とお前が一緒に帰るって知らせたわけでもなかるうに。

それより、親父さんたちに恥かかす気か？」

呆れ顔でレグルが返す。

「どうしてよ？」

普通に帰るだけでしょ？」

エルミは自分の立場がよく解っていない。

「あのなら、自分で言うのもあれだけだな。」

俺たちの立場つてもんがあるだろ。」

「だいたい、お前の兄さんが帰ってきた時だって、村を挙げての歓迎じゃないか。」

下士官ですらそうなんだ。」

士官である俺たちが帰ったとき、何の準備もしてませんでしたなんてことがまかり通るわけないだろ。」

この時代、少尉などという下級士官であっても、それを輩出したなど村の誉れといってもいい。」

帝都やそれに連なる都市部であっても、一定の尊敬を集める立場だ。地方であれば、その地の名士の一人に数えられてもおかしくない。」

そういう立場の者が誰にも知らせず村に帰るなど、親の立場や面目といったものを失わせるに等しいことだった。

「レグルのほうでやってくれるんだから、私はそれに便乗でいいよ。だいたい、このご時世で私のためなんかにお金使って欲しくないもん」

当たり前すぎる指摘を受け、慌てたようにエルミは取り繕った。

「そういうわけにいくか、莫迦。」

お前はそれでいいかもしれないけどなあ、お前の家は親子仲が悪いつて後々後ろ指差されるのは、親父さんたちだぞ。

乗り換えのとき知らせてこい」

浮かれて忘れてました言っとけよ、とレグルは続けた。

「ちえつ。」

ガルのこと、思いつきり驚かせてやろうって思ってたのに」

親に迷惑は掛けられないと、エルミは乗り換えのターミナルで時間待ちの間に魔報を実家に送った。

「もうね、莫迦かと。」

エルミは今年幾つになっただんだけ？」

村の駅で出迎えたガルが、開口一番エルミに言う。

「煩いわねえ。」

ちよつと忘れてただけじゃないの。

ようやく家に帰れるんだよ。

少しくらい浮かれて発っていいじゃないの」

悪企みを打ち砕かれたエルミが口を尖らせる。



「それより、早くみんなに挨拶なさいよ。  
レグルも」

久し振りに心の底から笑えたチエルが二人に言った。

「皇国砂海軍少尉、エルミ、ただいま、ハトー遠征から戻りました」  
「同じく、皇国砂海軍少尉、レグル、ハトー作戦より帰還いたしました」

駅舎に割れんばかりの拍手と歓声が沸き、いつしか万歳の唱和へと代わっていった。

村中を巻き込んだ嵐のような、歓迎会と祝勝会が一緒くたになつたような宴が終わり、新年を迎えた村はいつものような表情を取り戻していた。

新年際の二日目、チエルの宿に幼馴染みの四人が集まった。

通常であれば新年際の二日目三日目は、一年を息災なく過ごせるように家族と祈りつつ静か過ごすのが普通であったが、今年に限っては誰もが四人の行動を大目に見ている。この四人が揃って顔を合わせる次の保証がないことは、戦争が始まった今では誰もが認識しているからだった。

宿泊客の心配をする必要のない厨房に、チエルとアレイが入っている。

そこから程近い六人がけのテーブルには、エルミとガルが向き合つて座り、ガルの横にはレグルが陣取り、その横にちゃっかりついてきたリーンが大人びた顔ですましている。

エルミの横には誰も座らず、いずれ料理が揃えば来るであろうチエルの席と、アレイの席が開けられていた。

「今日はね、遠慮なくやつちゃって。」

今まで磨いてきたあたしの腕を見せてやるんだから」  
メデイエータ北部で一般的な、片手のフライパンに似た鍋を振り上げ、チエルが厨房から四人に声をかける。

「俺だつてがんばつてきたんだ。」

どっちが旨いって言ってもらえるか、勝負しようぜ、姉ちゃん」  
チエルが持つ鍋より一回り大きな鍋を振り回し、アレイがチエルに言う。

「審判は引き受けてやるよ。」

俺とエルミと、あとリーンな」  
ガルが楽しそうに答えた。

「なぜ、俺を外す？」

どうせ答えはわかっているという顔で、それでも一応レグルは文句をつけた。

「だって、偶数じゃ票が割れるし。」

それに、レグルはアレイがどんな美味しいの作ったって」  
ここまで言つてエルミは嘔き出した。

「どうせそういわれると思つていたよ。」

ああ、俺はどんなもの出されようと、チエルの料理が一番旨いと思つてるぜ」

僅かも照れることなく、レグルは惚気て見せる。

「ちよつと、どういうことよ、レグル。」

どんなもの出されたつて、あたしが碌でもないもの出すように聞こえるじゃない」

冷たい笑みを浮かべたチエルが、メデイエータ包丁を片手に厨房

から出てくる。

「いや、お前、何、そんな物持って……」

だから、アレイがどんな旨いもの出したってって意味だよ。

だから、その物騒な物は厨房に置いてこい」

半ば本気で顔を引き攣らせつつ、レグルはチエルを宥める。

「兄ちゃん、その言葉訂正するなら今だからな。

兄ちゃんが村を出た頃のおれじゃないんだ。

姉ちゃんがいなくなつて、客足が落ちたなんて言われたくないからな」

大衆活劇に出てくるような悪役顔をわざと作り、芝居がかった口調でアレイがまぜっかえす。

「はいはい、莫迦な真似はこのくらいにして。

ちやつちやと作っちゃいましょ。

始めるよ、アレイ」

包丁の峰で軽くレグルの頭を小突いてから、チエルは厨房に戻り、下拵えを始めた。

チエルとアレイがニラとキャベツを微塵切りにし、よく叩いた豚肉のミンチに軽く酒と塩を振り、半分に分けそれぞれ粘りが出るまで混ぜ合わせ餡を作る。

小麦粉を練り、直系八センチほどに伸ばした皮に餡を取り、片側にひだを付けるようにして包み上げ、そのうちチエルの分は焼き上げ、アレイの分は蒸し上げる。

アレイがボウルに割った卵四個に酒、塩、コショウしてよく混ぜ、溶き卵を用意し、オアシスで採れるカニを下茹でする。その間に、チエルは長ネギ、エノキ、タケノコ、ニンジンを手切りにして軽

く油通しした。下茹でした蟹の身をアレイがほぐし、チエルが刻んだ野菜と一緒に溶き卵に絡めておく。

同様にチエルもあんかけの準備をするが、こちらは酢を入れず帝都近くの修行先で教わった牡蛎油を混ぜ込んだ。

二人は油をなじませた鍋に溶き卵と野菜、蟹を入れ、強火で一気に入炒め始めた。

周りから固まってくる溶き卵を、お玉で中の方に折り返しながら丸く形を整える。頃合い良しと見た二人はほぼ同時に鍋を大きく振り、空中で蟹玉をひっくり返し、見事に鍋で受け止めた。そのままコンロの火を中火に落として三〇秒待ち、全体が固まったところで皿に移した。

鍋を火に戻し、それぞれ通いしたあんかけの素を入れお玉で手早くかき混ぜ、水溶き片栗粉を満遍なく混ぜ合わせ、皿の蟹玉の上にかけて芙蓉蟹を完成させる。

「まずは、これで乾杯しましょう。」

熱いうちに食べてね」

とりあえず、といった表情でチエルとアレイが皿を持って席に着く。

「おう、いつもながら旨そうだな。」

前に教えてもらって家で作ってみたけど、やっぱり火力が違うからだよなあ、こつも旨くは作れなかったぜ」

この日のために多めに仕入れていたビールの栓を抜き、正面に座ったエルミのグラスに注ぎながらガルが言う。

「そりゃあそうだけどさ、ガル。」

そんな旨く作られちゃったら、あたしは商売あがったりよ」  
悪戯っぽく笑ったチエルは、レグルのグラスにビールを注ぎ返していた。

「まあね、素人がそうそう職人の真似はできねえや」  
チエルの手元を微笑ましげに眺め、ガルは何かを吹っ切ったような顔で答えた。

「じゃあ、いい？」

そういえば、アレイとリーンと飲むのって始めてかも。

乾杯の音頭は……

次期料理長の前途を祝し、乾杯！」

酒を前にして面倒臭くなったエルミが、強引に乾杯の音頭を取る。

「乾杯！」

五人が唱和して、グラスが荒々しくぶつけられる。

冬の気分にほどよく冷やされたビールが、各自の喉元を駆け抜けていった。

再度ビールがグラスに満たされるなり、ガルが立ち上がる。

「よし、もう一回乾杯しようぜ。

今度は、ふたりの前途を祝し、乾杯！」

ガルはそう言ってグラスを高々と上げ、レグルとエルミのグラスを合わせると、晴れやかな表情でチエルとグラスを合わせた。

「乾杯！」

五人が唱和し、グラスをあおる。

「ぶへえっ！」

「ぶっ！」

「ごうえっ！」

盛大にむせ返ったガルが、料理を台無しにしては大変とばかりにテーブルに背を向けた。

「どうしたのよ、ガル。」

何慌てて飲んでるの！

汚いなあ……」

笑いながらガルを叱り飛ばしたエルミが、まだむせ返り続けるガスを介抱する。

「ごめん、ごめん。」

いや、歓迎会ではゆっくりできなかつたじゃないか。

改めて皇国のために戦場に立つふたりの前途を祝したかったんだ

よ

もちろん、その伴侶になるチエルの前途も、とこれは口に出さずに呟いた。

ガルなりにチエルに抱いていた恋心との決別の儀式でもあった。

危うく涙が流れそうになり、わざとむせ返って止められなかった涙を誤魔化したのだった。

「まだまだいっぱい作るからね。」

普段のことは忘れて、今日はいっぱい食べちゃいませよ」

ガルが落ち着きを取り戻したところでチエルとアレイは厨房に入り、次の料理に取り掛かった。

まったく打ち合わせなどしていないのだが、どちらかが先に材料に手を伸ばすと片方は何も言わずにその料理に合った下拵えを手際よく分担している。

チエルがピーマンを千切りにすれば、アレイはタケノコを千切り

にする。それを受けてチエルが豚肉を千切りにし始めると、アレイは別の料理の準備を始めた。

エビの背腸を取り、片栗粉をまぶしてから酒で洗い、長ネギを微塵切りと削ぎ切りにしていく。

ふたりが同時に鍋を火にかけ、チエルが青椒肉絲、アレイが干焼蝦仁を作り始めた。

チエルは豚肉を炒め、順次タケノコとピーマンを鍋に投入する。

あらかた火が通ったところで、味醂、酒を振り、ガラスープを足してとろみを伸ばし、牡蛎油と塩、コシヨウで味を調えた。

アレイは鷹の爪と長ネギの微塵切りを半量炒め、充分に辛味を引き出したところへエビを投入する。

エビの色が変わったところで削ぎ切りにした長ネギを鍋に入れ、酒とガラスープを加えて軽く煮込む。エビが固くなる前に牡蛎油とケチャップで味を決め、そら豆と唐辛子を醗酵させた豆板醬で辛みを補う。

仕上げに水溶き片栗粉でとろみをつけ、残った長ネギの微塵切りを散らした。

鍋を洗ったチエルは、豚バラの塊を一センチのサイコロ状に切り、ジャガイモも皮を剥いて同じ大きさに切って水に晒す。

アレイは塩コシヨウとした溶き卵に、切り落とした豚バラのスライスを漬け込み、揉むようにして全体を絡めていく。

チエルは弱火に落としたコンロに鍋を乗せると、油を引かずに豚バラを投入し、油が出るまでじっくりと焦がさないように炒め始めた。

やや強火のコンロに鍋を乗せたアレイは、多めの油で溶き卵を絡めた豚バラを焼いていく。

チエルの鍋では、豚バラが自身の油で揚げられている状態になっていた。そこへジャガイモが投入され、強めの塩と大量のコシヨウ

が振る舞われる。ジャガイモが油を吸いきったところで、シラムで親しまれているスイートバジルの微塵切りを散らして仕上げとした。アレイは豚バラの両面にこんがり焼き色を付け、油を落とすために広げた新聞紙に一旦肉を置く。

はせるような油が落ち、焼き目がしつとりと質感を見せたそばから皿に盛り、大量のポークピカタを作り上げた。

「ふたりとも、何本気で張り合ってたんだよ。

そこら辺で一段落して、こっち来て飲め。

アレイだって、もう飲めるんだし」

いつまでも料理を止めようとしないうたりに、ガルが声をかけた。

「そうね、そろそろ判定してもらいましょうか、アレイ」

久し振りにやりたい料理を作りきった充実感を漂わせ、漬け物の皿を持ったチエルが厨房を出る。

「判定も何も、共同で作ったようなもんじゃん。

どうせ聞くまでもないだろうし」

酒が満たされた湯飲みを片手に、呆れたような表情のアレイが厨房から出てきた。

「いいなあ、レグルは。

この先、お家に帰ればこんな料理が待ってるなんて」

片端から料理を胃に収めながら、エルミはガルを見ながらやっかみを言った。

「本当だぜ。

うらやましい限りだよ。

ところで、お前ら、いつ祝言あげるんだ？」



エルミの気持ちに気付くことなく、吹っ切れたような顔でガルが答える。

盛大に落ち込むエルミの仕種を見て邪気なく嘖き出したガルに、四人の殺意を込めた視線が突き立てられた。

さっさとエルミとくっつけ、この朴念仁！

「まあ、料理人は家でまで料理をしないって話もあるし」

エルミの気持ちがガルに知られないようにと、雰囲気を変えるためレグルが厨房に入った。

「俺も少しは覚えてきたんだ。

ちよつと厨房を借りるぜ」

レグルは薄切りの牛肉とジャガイモ、ニンジンとタマネギを探し出す。

「ひよつとして、あれ？」

砂海軍発祥の料理を推測したエルミが、確信を込めてレグルに聞いた。

「こんな話がある。

彼のヘイ八提督が若かりし頃、サピエントに留学していたときのことだ」

ジャガイモとニンジンの皮を剥きながら、レグルは話し始めた。

ジャガイモは六等分に、ニンジンは乱切りにして、タマネギはざっくりと切っていく。

「彼の国で提督はビーフシチューなる料理を召し上がられた。

そして、提督はそのビーフシチューがたいそうお気に召したそうだ」

牛肉とタマネギをさっくり炒め、干魚から取った出汁と味醂、砂

糖を鍋に入れ煮込み始める。

「帰国された後も提督はビーフシチューが忘れられず、夢にまで見たらしい。

だが、当時ソルにはビーフシチューの作り方なんか伝わってなかった。

当然、誰も作れないし、どこの店の品書きにも乗ってなかったわけだ」

厨房にあった料理用の酒を湯呑みに注ぎ、ひと口飲んでレグルは続ける。

沸騰した鍋の火を弱火に落とし、醤油を注ぐ。

「ある日、我慢できなくなった提督は、艦の烹炊兵にビーフシチューを作れって命令したんだ。

困ったのは烹炊兵だ。

食ったことはおろか、見たことも聞いたことさえない料理だぜ」  
シラタキさえあれば完璧なんだがな、とレグルは呟き味見をしながら酒を飲む。

「まあ、なんにせよ、できませんなんて言えないわけだ。

ただ、材料とどんな味だったかくらいはきかなきゃ、どうしようもねえわな。

どやされることを覚悟で、烹炊兵は提督にその辺りを聞いたんだよ」

味が決まったところでしばらく煮込むため、鍋の火加減を調節してレグルは湯のみを片手に厨房を出た。

「そしたら提督はなんて答えたと思う？」

砂海軍では有名なエピソードだ。

楽しそうにエルミが話を受け取った。

「そりゃあ、あれだけのお方だし。きちんとして説明なさって、烹炊兵がそれを再現してめでたしめでたし、じゃないの?」

最近になって酒の味を覚えたリーンが、ほろ酔い加減で答える。

「牛肉とジャガイモ、ニンジンとタマネギを何かで味付けしたやつ。提督は、こうお答えになったそうよ」

エルミが腹を抱えながら言った。

エルミの答えに、呆れ顔が四つ並んだ。

「とんでもねえ話だろ?」

烹炊兵は完全に頭を抱えちまつたらしい。

俺は同情しちゃうね。

人偏に無茶と書いて上官って読ませるくらいだからな、軍つてところには。

とにかくできませんとは言えないし、当時の艦にビーフシチューの材料なんざあるわけねえ。

悩みに悩んだあげく、できあがったのがこれさ。

言われた材料を煮物にするしかないもんなあ」

レグルは酒をあおると厨房に戻り、鍋から肉じゃがを器に移してテーブルに運んできた。

ソルでは一般的な総菜が、このような経緯で生まれたことに、ガールたちはどう反応していいか解らなかった。

「ちょっと、レグル。

これは何?」

運ばれてきた肉じゃがを見て、エルミが目を剥いた。

「何って、まごう事なき肉じゃがだか?」

エルミが何をいきり立っているのか、全く解らないという顔でレグルが答える。

「シラタキが入ってないのは妥協するわ。

でも、これは牛肉じゃないの！

肉じゃがは豚肉！

それ以外は認めないわ！」

自らの全てを否定されたような怒りを、エルミは叩きつけた。

北陸鎮守府発祥の肉じゃがは、人々の異動に伴いあっという間にソル砂海軍全体に広まっていた。

当然その間に改良や、土地柄による材料の制約もあり、工廠や鎮守府ごとに独自色が生まれていた。

特に豚肉の産地に近い南工廠では、いつの間にか肉じゃがといえは角切りにした豚のバラ肉を使うものとなっていた。

当然南工廠を母港とする『デットン』の肉じゃがは豚肉であり、エルミにしてみればこれは絶対に譲れないことだった。

「なんだと？」

古来、肉じゃがは牛肉と決まってるんだ！

さては、貴様、悪しき改変主義者か！？」

レグルの乗艦『ドラコ』が母港とする西工廠では、肉じゃがは牛肉のスライスであり、やはりレグルにとってこれは譲れない。

「何が古来よ！

たかだか四〇年前じゃない、肉じゃがができたのは！

伝統を蔑ろにしちゃダメだけど、常に前に向かうべきよ！

しがみつかれたら伝統にいい迷惑よっ！」

「やかましい！

開発は大事だ、それは認める。

だけど変えちゃいけないモノがある！

ましてや、代替えなんぞ、改悪だ！」  
砂海軍に蔓延る醜い対立を前にして、ガルたちは頭を抱えていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6027o/>

---

砂塵の道 ～ソル皇国の興亡～

2011年10月6日12時50分発行